# 山岳



H. Shibata

LXI

# Caravan

## 総理大臣賞
## 受賞



## 発売品目

**(製造元) 藤倉ゴム工業(株)**

**キャラバンシュー**

| | |
|---|---|
| デラックス | ¥ 2,400 |
| スーパー | ¥ 2,300 |
| スタンダート | ¥ 2,200 |
| ハイピック(ビニール射出成型品) | ¥ 1,600 |
| ヤング(綿デニム射出成型品) | ¥ 1,300 |
| トリップシュー(牛革) | ¥ 3,200 |

**ホスチリングシュー**

| | |
|---|---|
| スタンダード | ¥ 900 |
| デラックス(牛革スエード) | ¥ 1,500 |

スノーキャラバン

ラバースキーブーツ

ビニールスキーブーツ

キャラバンマット

大 ¥2,300・中 ¥1,500・小 ¥1,200

| | |
|---|---|
| ナイロンマット | ¥ 1,450 |
| キャラバンレジャーボート | ¥ 6,500 |
| キャラバンサーフライダー 大 | ¥ 2,500 |
| 小 | ¥ 2,200 |
| キャラバンエアーポンプ (アダプターバルブ付き) | ¥ 430 |

**(製造元) 鐘淵化学工業(株)**

**カネカロンシュラフ**

| | |
|---|---|
| ドリーム(夏用) | ¥ 2,900 |
| スリーパー(キャンプ用) | ¥ 3,900 |
| ツアー(スリーシーズン用) | ¥ 4,600 |
| キャンパー(レジャー旅行用) | ¥ 4,900 |
| アルプ(オールシーズン用) | ¥ 5,900 |
| アタック(〃 デラックス) | ¥ 6,700 |
| ポーラー(冬山用) | ¥ 8,200 |
| ポーラーデラックス(極寒用) | ¥ 9,000 |
| シュラフカバー | ¥ 1,700 |

**(製造元) 東洋羽毛工業(株)**

| | |
|---|---|
| 羽毛シュラフダウンパック | ¥15,800 |

**その他**

| | |
|---|---|
| ナイロンポンチョ 大 | ¥ 1,800 |
| 〃 中 | ¥ 1,400 |
| キャラバンアイゼン | ¥ 650 |


**株式会社 山晴社**

本社 東京都千代田区神田駿河台2の11 TEL(291)6905・2722

大阪営業所 大阪市西区京町堀1の68 五月ビル内 TEL(441)4431・5204

# 山岳

第六十一年

# 山岳第六十一年目次（一九六六年度）


登山界と登山者……松方三郎…一
山岳会創立前後……武田久吉…五
六十年を振返って……槙有恒…一五
登山の文化史……桑原武夫…二三
ゴジュンバ・カン登頂（一九六五年）……高橋進…三一
ローツェ・シャール（一九六五年）……吉川尚郎…四七
キンヤン・キッシュ（一九六五年）……鹿野勝彦…六三
ペルー・アンデス（一九六五年）……井田英彦…七八
困那山の話……藤島敏男…九〇
ダウラギリⅡ峯（一九六五年）……杉田博…一〇八
西部カラコルム・ディラン峰……塚本珪一…一一七
コー・イ・モンディ（一九六五年）……矢野真…一二五
ミール・サミール紀行（一九六五年）……佐藤之敏…一三六

グリーンランド・スイスの踏査とフォーレル峰の試登（一九六五年）……宮　原　巍…一四三
コルディエラ・ノルテ（一九六五年）……細　野　淳　美…一五三
ローガン峰北面インディペンデンス・リッジ（一九六五年）……川　上　隆…一五九
マッキンレー南壁東稜（一九六五年）……塚　崎　義　人…一六七
マッターホルン（一九六五年）……芳　野　満　彦…一七五
ドリュの北壁（一九六五年）……吉　尾　弘…一八三
ドリュの西壁（一九六五年）……星　川　政　範…一八七
アイガー北壁登攀報告会の記録……日本山岳会東海支部…一九一
狩場山雑記……望　月　達　夫…二〇三
連嶺一千キロ……日本山岳会信濃支部…二一六
創立六十周年記念行事……二三四
追悼
山川默氏（武田久吉）、北沢基幸氏（編者）、柴山乙彦氏（編者）、曾原喜久蔵氏（藤島敏男）、森本次男氏（阿部恒夫）、橋本三八氏（月原俊二）、福田庸雄氏（冠松次郎・行方沼東・村木潤次郎）、竹中要氏（木原均）、斎藤清太郎氏（高橋定昌）、君島久登氏（三井松男）、山川勇一郎氏（深田久弥・石井鶴三）……二四一
図書紹介　（アンデスからヒマラヤへ・あるガイドの手記・心に山ありて・義一・エベレスト登頂記・Le mie montagne・EVEREST The West Ridge・The Mountain World 1964/65）……二六三
会務報告（一九六五年七月―一九六六年六月）……二七四
日本山岳会定款、支部設立並びに運営等に関する規定……二八七
英文梗概……巻末　一
海外登山年表＝一九六五年＝……松　田　雄　一編…巻末　三〇

## 写　真

ゴジュンバ・カンに関するもの四枚
ローツェ・シャールに関するもの七枚
キンヤン・キッシュに関するもの六枚
コルディエラ・ブランカおよびコルディエラ・ワイワッシュに関するもの八枚
「困那山の話」に関するもの六枚
ダウラギリⅡに関するもの四枚
ディランに関するもの一枚（折込）
コー・イ・モンディに関するもの四枚
ミール・サミールに関するもの三枚
グリーンランドに関するもの七枚（内折込一枚）
コルディエラ・ノルテに関するもの二枚
ローガンに関するもの二枚
マッキンレー南壁東稜に関するもの二枚
山川黙氏、北沢基幸氏、曾原喜久蔵氏、森本次男氏、橋本三八氏、君島久登氏、山川勇一郎氏

## 地　図

ゴジュンバ氷河地域概念図
ローツェ・シャール概念図、ローツェ・シャール登攀ルート図
キンヤン・キッシュ登攀ルート図、キンヤン・キッシュ南稜スケッチ
オクシャパルカ峰およびランラパルカ峰付近概念図、オクシャパルカ峰登頂ルート図、イェルパハ峰付近概念図
ダウラ・ヒマール周辺概念図（折込）、ダウラギリⅡ峰登攀ルート図
ミナピン氷河地域概念図
中央ヒンズークシ地域概念図、コー・イ・モンディおよびカウイル氷河概念図
ミール・サミール峰概念図
シュバイツァーランド山域概念図（折込）
コルディエラ・ノルテ概念図
ローガン峰概念図
マッキンレー南壁東稜登頂ルート図

**表紙カット**

佐藤久一朗

# 登山界と登山者

松方三郎

「登山界と登山者」という題になっております。これだけ題が大きければ何を喋ってもいいということかと思うのでありますが、あとで武田さんが日本の山登りの歴史というような題でお話しをして下さるので、実はその方に早く席を譲りたいと思っております。そこで武田さんの御紹介を兼ねて一言述べますが、この間も、武田さんに電話で山岳会が六十年だという話をしましたら、自分は山登りしてから七十年だよということでした。なるほど勘定してみると、尾瀬ヶ原を初めて発見されてから六十年だということでありますから、そういうことから考えると、山岳会六十年などというのは大したものではないといってもいいのかと思います。問題はむしろ百年、あと四十年ということでしょう。さてその日本山岳会創立百年の年、一体われわれのここにいる連中が何人位生きていることでしょう。大いに興味があることです。英国山岳会が創立五十年のお祭りをしたのが一九〇七年でありますが、それからまた五十年経って一九五七年に百年の記念晩餐会をしたのであります。ところが、その五十年の晩餐会と、百年の晩餐会の両方に出たという、もの凄い人が五人もいたのです。山岳会に入ったということでありますから、はたち過ぎかと思うのでありますが、それから二つの晩餐会に出たというつわものなのです。それが五人いたというのをきいて、私は実に驚いたのでありますが、わが会もあと四十年経つと百年でありますから、どうかその百年の時に今日おられる諸君が多

数集まられることを、私は祈っておるわけであります。

私のあとで立たれる武田さんなどは、さきほど、司会者が天狗と言われましたが、天狗といっても、俗界の天狗というのではなくて、羽の生えている天狗であります。武田さんのお供をしていると、とても追いつけないので、あれは天狗の申し児じゃないか、うっかり一緒に行くとひどいめにあうぞということになっておるのでありますが、私共の如きはそういう天狗族とはまるで違って、もっぱらゆっくり行く方であります。ただ、山登りをしたお蔭で未だに山の中に入っておるということであります。結局、歩いていれば頂上へ行けるということはありがたいことであるし、山は別に逃げてしまうものでもないので、天気さえよければ、ゆっくりでも行けば、いつかは頂上に行けるということです。こんなありがたい楽しみは、他に比べるものはないと私は日頃思っているのであります。おそらく足腰の立つ間は山を登るであろう、これだけは間違いなかろうと思っておるのであります。そういう楽しみを得た、与えられたということは、正に山登りの社会に入ったお蔭だと思うのであります。あと二、三年のうちに私も、日本山岳会へ入ってから五十年になるのでありますが、私は自分をその当時山岳会に入れてくれた先輩に、今でも感謝しております。自分の一生のうちから山をぬいてしまったら何が残るだろう。時々そんなことも考えるのです。

私は新聞屋ですからいろいろな経験もしています。方々馳けずりまわったりもしたのですが、そういうものがみんな自分の身についているかどうか、これは甚だあやしいと思うのです。確実に自分がやって、そうして何ものか自分のものとしたと言えるのは、よく考えてみると山だけではあるまいかと思うのであります。しかし山だけでも私は十二分に有難かったと思っています。ほかの何になるよりも、よほどよかったと思っています。そういう意味で、山に対して、いつもありがたいと思っておるのでありますが、どうかみなさんも山岳会百年のお祝をする時まで、ひとつ山登りを続けていくのだと、いよいよ元気で山へ登っていただきたいと思います。

山岳会ができました時分には、このように山登りが日本で盛んになろうとは、おそらく誰も考えていなかったので

す。山岳会を作っても一体会員になってくれる人がいるだろうかというようなことが当時は問題であったのですが、それから六十年経った今日、日本山岳会だけでなくて、日本中にこれだけ沢山の人が山の中にいって、山を楽しんでいるということは、驚くべきことだと言っていいと思うのです。もちろん人間が沢山山へ行くということは、それ自体よいことですけれども、その結果としていろいろな問題が出てきております。したがってわれわれの先輩が、考えもしなかったような問題を、今日のわれわれは持っているわけであります。例えば自然保護という言葉が、この頃大いに叫ばれておりますけれども、その時分はそんなことを考える必要もなかった。多少、上高地の木を切ったといって辻村さんが昔、大いに嘆かれたこともありますけれども、とにかく日本の自然は今ほど荒らされてはいなかった。谷にはきれいな水が流れておった、そうして森林はどこへ行っても美しかったという時代なんであります。ウェストンは、日本の山の美しさは森林の美しさと渓流の美しさだと言っておりますが、今やその二つともがどうやらあやしいというのが実情だと思うのです。山岳会ができて六十年経った今日、われわれはそういう問題ととっ組まなければならないのであります。

昔だって山で遭難した人がないわけではない。――古い『山岳』を繰ってみると、明治四十年頃でありますか、小牧さんが乗鞍で亡くなったとか、秩父の甲武信の遭難があったとかということが出ているのでありますけれども、今日ほど遭難が方々で起こるということはなかった。つまり数がまるで違うのであります。登山人口がふえると、そういう問題が自ら、黙っていても、出てくる。その上に、山登りの仕方そのものも、昔と違って、相当勢いこんだ山登りが盛んになるということになると、やはり遭難は多くならざるを得ないのであります。こういう問題は昔の人も多少は頭の中にあり、心配されたのでありましょうが、今日ほどそういう問題が大きかったとは思わないのであります。

海外遠征の問題を取り上げてみましても、昔の先輩はいずれ、いつかはということは考えられていたと思うのですが、今日では年中行事になってしまいました。われわれ自身が学生時代に考えた山登りの世界というものは、やっと

ヨーロッパのアルプスが一番上の所にあって、ヒマラヤへ行くなんていうことはとてもお話にならない雲の上のことと考えておったのであります。それが僅かに四、五十年前の話であります。こんなことを考えると今日の山登りはまるで違うところにいるという感じを持つのであります。そんなことも六十年の間の大きな変化でありましょう。

しかしそういう大きな変転をくぐりながら、山登りの社会はやはり健全に育ってきたということも事実でありましょう。ただし、その一面、いくつかの心配すべき問題もあるということなのでしょう。そういう時勢の中で、われわれの日本山岳会、あるいは、日本の登山界全体は、慎重に正しい登山の気風、そういうものを育てていくことが必要であろうと思うのであります。

昔、志賀重昂さんはあの『日本風景論』を書かれた時、登山の気風を大いに起こせという一章を書いておられるのですが、今や、当時志賀さんがいわれた意味での登山の気風興作の必要はなくなっているのです。しかし、こう一般的になり、大きくなった日本の登山人口を、どういうふうにもっていくかということは、山登りをしておる人々全体の、共同の大きい関心事でなければならないと思うのであります。山登りは個人個人の問題でありますから、何も人のために山登りをすることもないのでありますけれども、お互いに、同じ山で同じような山登りをしているからには、こういう面でお互いに助けあうことも大いに必要であろうと思うのであります。

そんなところから、おのずから、広く日本で山登りをしている社会を、どういうふうに組織だてて育て行くかというようなことも問題として取上げなければならないわけであります。

六十年経って、日本の山登りはいかにも発展し、大きくなったことは事実でありますけれども、問題は今日も、また将来も大いにあるのであります。そして、お互いに大いにこうしたことも考えていかなければならないのだということを、一言、この機会に述べる次第であります。

（付記）本稿は、昭和四十年十月十五日久保講堂で行なわれた日本山岳会創立六十周年記念講演会での講演の内容をまとめたものである。（編者）

# 山岳会創立前後

武田久吉

本夕は、ひどく古い話をしろというようなご命令がきましたので、何とか思い出そうとしましても、何分、半世紀以上も前の事で、あまり詳しいことはお話できないだろうと怪ぶみます。

山岳会を私達が結成した頃と、その直後の話をというわけでありますが、その時代の日本の状態というもの、その頃の状勢、あるいは空気といいますか、そういうものをお話するということになりますと、本当は維新後十年か十五年位から始めないとおもしろくない。けれどもそういうことをやっていると大変なことになりますから、まず私達が小学校から中学校へ入る時分のお話から始めましょう。

その頃は世の中が今と違って非常に安定していまして、殊に国内では、維新後は、農村などが非常に気持ちのよい、楽な生活、楽しい生活ができたろうと思うわけなんです。というのは、維新前、七公三民といって収穫の七割、つまり七〇パーセントは年貢として上納し、ただ三〇パーセントだけが働いた農家の手取りになる。それが維新後なくなったのですから、農村などは維新の動乱後十年、二十年と経ちますと、割合にのんびりした生活ができたことと思うのです。

山岳会ができたその頃には、日露戦争というのがありまして、日本と大国のロシアと戦いを交えた。そして日本が大勝利を得た。それがちょうど、山岳会を私達が結成した年に終ったわけです。日清戦争も日露戦争も幸いに勝った。それで国内の景気はますますよくなる。よくなると今度はいろいろ謀叛を起こす者が出てくる。尾瀬ヶ原の水を堰き止めて貯水池にしようなんて……。そういう悪だくみをしたのが明治三十八年頃です。六十年経っても、未だにこれはできはしない。やるのは本当に大変なんですから。ただ権利を売買するだけの話だった。そんなことはどうでもいいが、私達の時代には東京という所はもっともっときれいな、空気も水もきれいだし、それからまるで田園都市のようだった。いたる所に樹木が繁り、草も生えておった。例えば外濠の土手へ行きますと、春になればつくしんぼが沢山生えたものです。つくしはどうでもいいが、もっときれいな花の咲く草ぼけ、ぼけのようなきれいな花の咲く草ぼけ、あれがいっぱい花をつける。夏になると草の間に松虫なんかがチンチロリンとやっておった。今はそんなものどころではない。どこへ行ってもくだらない雑草ばかり生えて、エンマコオロギのようなものさえ、いなくなった。

学校へ行きましても、第一、小学校が八年間ある。尋常科四年、それを卒業すると高等科がまた四年、合わせて八年。それを卒業すると今度は尋常中学校が五年、それを卒業すると高等中学校が三年、それから大学へ入って三年も四年もやるのだから、えらい緩慢な、鈍行列車みたいなものだけれども、やっぱりその間の時間というものは無駄にならなかった。促成栽培で悪賢くなるのとは違う。

学校で習って、うちへ帰って来て、復習をして、翌日の下読みをしてまだ時間が余る。だからそれぞれ自分の好きな勉学に使う。今は学業以外の事に忙しいでしょう。暇があるかないか知らんが、ボーリングだ、そらジャズだ、そうかと思うと小さな子供がユニフォームを着てベースボールのマネをしたり、昔はあんなようなことをする必要がなかった。銘々自分の好きな学問の道に時間をささげた。

そのうちでも、その頃の中学校というのが築地の東劇といいますか、歌舞伎座の先の三原橋を渡って右角に映画館があります。あそこに私達の行った中学校があったのです。公立の中学校というのは東京府立尋常中学校、あとは私立の中学が二つ程ありましたが、陸軍関係では成城学校、海軍関係の海城学校なんていう学校もあった。ここではやっぱりのんびり先生が教え、また、一流の先生がおったし、そして生徒も一生懸命に勉強した。その頃は東京府立尋常中学校には良い先生ばかりおりまして、殊に博物の先生は帰山先生といって大変熱心な先生でした。

その頃では、教科書は国文に漢文、それから地理、それから英語の教科書、上級へいって幾何と代数の教科書があるだけで、あとは口授といって、先生の喋るのを筆記したものです。その帰山先生は一時間のうち三十分を実験に費した。その頃実験室も何もない頃だのに、幸いなことに、三菱の原っぱにいろいろな草がいっぱいあって、花がいくらでも採れる。小使いさんにそれを採集させて銘々に配り、生徒はそれを解剖して虫眼鏡で見て要点をスケッチした。三十分経つと先生が号令をかけて「鉛筆を下に置いて、こちらを向いて」……。黒板の上に図をかいて今度はいろいろな説明をされた。その先生があまり熱心なものだから、先生の熱意に動かされたのでしょう、将来ほかの学問に入るような人でも、学生時代には動物、植物、昆虫、そういう方の学問に熱中した連中がおった。今有名な英文学者の市河三喜（いちかわさんき）という人はその方の総大将だった。それでそういう連中、友達を集めてお互いの知識を交換するために回覧雑誌を出したのです。これは毛筆で全部書くのです。それを読んでは次に廻したのでした。やがて会員がふえるというと、回覧では時間がかかって大変だというので、活版刷りにしたのが明治三十四年だから一九〇一年、会の名を日本博物学同志会と称して、それで活版刷りのケチな雑誌だったけれども年に六回ぐらい発行してみんなで分けた。その頃はほかの地方の学校の生徒でも、そういうことに熱心な人がいたので、会員が大分ふえたし、一両年も経ってくるうちに、どうも東京付近だけの研究資料ではおもしろくないからというので、だんだん山の方へも採集にでかけるということになると、雑誌の記事がどうも高い山へ登る採集記事、採集紀行というのがふえてきた。それで、登山記事の

特別号でも発行しなくてはという話さえ出たくらい。ちょうど六十年前、一九〇五年には『博物之友』が奇数の月だけ年六回発行されました。明治三十八年、これはちょうど山岳会の結成された年ですが、その十一月に発行の号を見ると、ページ数三五四、図版が六枚。これはその頃ですから中学校を卒業した連中、あるいは中学校の上級生、高等学校程度の学校にいる、そういう人の手でこれだけのものが発行されたのです。みんなできるだけ自分の専門をもとにして書いた、今読んでみても参考になるものが沢山載っているのです。

その頃、博文館で出していた『太陽』という総合雑誌の第十巻、これは明治三十七年に出たのです。その第一巻第一号には、利根川の水源探検記が載っていた。ところが明治三十七年の二月一日に出た『太陽』第十巻第三号を見ますと、これに「甲斐の白峯」という長い文章が載っていた。筆者は小島烏水という人なんです。ところがこの人は一体どういう人なんだか見当がつかないのです。いろいろ地理の事を書いて、白峯はどういう所にあるとか、どの山の標高は、自分の概測によるとなどということを言ってその卓見を披露している。それから文学的なことも沢山引用してあるのです。それでまた甲斐の白峯なんていうのはめったに人の行かない所だとか、知らない人の多い山だとかいうようなことを述べて、それからこういうことを言っているのです。とにかく自分がこの山へ登ったのは明治三十三年の八月で、「ともかくも絶巓まできわめて来た」と……。私は三十一年に日光の男体、女貌、大真子、小真子へ登ったし、三十六年八月には甲斐駒に登って、白峯をまのあたり見て来たその山です。それをこの人は明治三十三年の八月に登ったとこういうことが書いてある。その時分は、汽車は甲府まで開通していなかったので、笹子峠は荷物をかつぎながら汗を拭き拭き歩いて越えた。また、のちの登山者のために登山用具を書き加えておくといって、「油紙」をあげている。その頃は防寒具とか防水の雨具というのは、今のような高級なものはなかった。油紙は大体雨具ですね、だから、のちの登山者のための登山用具は、「油紙」、それからその次には大変なものを持って行った。「経緯儀」、セオドライト、測量の機械です。それから「少量のブランデー入りのビン、磁石、時計、寒暖計、参謀本部

の二〇万分の一地図、折り提灯、ローソク、石鹸、歯みがき、マッチ」これはまあ、あたり前の話ですね。それから「ナイフに鉛筆、手帳と洋書一冊、服装は洋服、脚絆、わらじ、こうもり傘の代りに金剛杖」それを持って行った。とにかく自分はこの山の頂上を極めたのだというので、こういうものを持って行ったと書いてある。これは最近いろいろ研究してみると、小島氏自身が登ったのではなくて、ウェストンが登った記事を換骨奪胎して、こしらえた。これはこの間数々の証拠をあげて、『山岳展望』という雑誌に詳しく書いておきましたが、その当時には私達はそんなことは夢にも知らないので、これは大変な人がいたもんだ。甲斐国の白峯へ行くのに経緯儀を持って行った。ただ者じゃあない。天狗さまどころではない、もっと偉い。一体どういう人だろう？　またその頃こういう会があったのです。それは華族さんなどが中心で、山草会といいまして、高山植物は勿論だが、低い所の山のものでも、珍しい植物を植えて楽しむ会があったのです。そういう人の間でも、小島烏水というのは何者だろうと問題が起ったのです。われわれは勿論知らないし、そんな偉い人ならば、せめて顔でも見たいと言っておったら、山草会のうちの誰かが横浜にいる人だよと、どっかから聞いて来た。それからまた、博物学同志会が横浜に支部がありました。支部を牛耳っていたのが昨年亡くなった高野鷹蔵君であります。早速高野君の所へ手紙をやりまして、小島烏水というのが甲斐の白峯へ登ったそうだ。三十三年だが、経緯儀まで持って行って、山の高さが地図に出ているのと違うとか何とか、さかんに批判している。これは測量部の人か、それにしては文学書や何か引用しているから、一体どういう人だろうというので、高野君に頼んでかくかくの人が横浜にいるそうだが、ひとつ探してくれないかと……。高野君も弱っている内に、友人の山崎小三という人に会った。

「実は小島烏水という人を探すのだが、君は知らないか。」「あれは俺の友達だ。」というので、これは渡りに舟だと、早速その人の紹介状を貰って、明治三十八年、六十年前の一月だったか二月だったか、はっきり覚えないが、高野君と二人で訪問した。訪問したところが、あいにく風邪をひいて寝ていたが、軽症だから、そんな子供にしては感

心な奴だから会ってやろうというので、二階へ通されて山の話が始まった。一体この人の職業は何だかわからないが、とにかくこの間も富士へ行って来た、「クモ」の研究に行ったと言う。こっちは博物学同志会の連中ですから、昆虫、植物、そんなものばかりやるものだから、きっと動物の蜘蛛を研究に行ったと思ってだんだん聞いたら、クモにも白いのあり黒いのもあるという。どうも変だなと思ったら、なに、空にあるあの雲だと言う。(笑声)雲を掴むような話ですね。(笑声)それからだんだん山の話になったところが、私がちょうど明治三十六年の七月に八ケ岳へ登って、八ヶ岳から甲斐の駒ヶ岳を見て、是非行ってみようというので翌月行ったのですが、その記事を専門の植物学雑誌へ書いたのです。烏水氏はこんな専門雑誌をちゃんと買って読んでいる。こういう専門家のものまで沢山文献を集めているのは驚くべきことです。小島氏は山へ登るのは紀行文を書くためだ。それでお小遣いができるとまた山へ行くのでしょう。お前達一体何のために山へ登るのだと……、実はわれわれ、こういうわけで、博物学同志会というのをやって、研究材料を得るために海岸へも行くし山へも行くと……。俺もひとつ仲間へ入ろうじゃないかというので早速小島氏が博物学同志会の会員になってくれた。いろいろ話をしていると、越後に高頭仁兵衛という篤志家があって、いろいろな古書を渉猟して、山に関する文献を集めて抜萃した原稿を沢山持って来ているのだ、実は私もそれを増補したりしているのだ。こういう人は非常におもしろい、いろいろ篤志家があるもんだなんて言っているうちに、小島氏が明治三十五年に槍ヶ岳へ初めて登って、その翌年あたりからウェストン師と心安くしているので、ウェストン師に私達の話をしたらしいのです。その年の五月かにちょうどイギリスへ帰るまぎわに小島氏とそれから小島君の親友の岡野さんという人と高野君と私と四人を、横浜のオリエンタル・パレスホテルというのへ招んで昼めしを御馳走してくれたのです。その時に、英国にはアルパイン・クラブというのがあって山登りの好きな連中が集まっている。日本には御岳講とか何とか、いろいろな講中はあるけれども、信仰のために山へ登るのだ。君達ひとつ、こういう会をこしらえたらどうかと言ったところが、ウェストン師に非常に心酔していた小島氏が、乗り気になりまし

て、それじゃ何とかしようというので、高頭氏に話をして、同君を私達の会へひっぱり込みまして会員にしました。それから今の山草会の仲間に城数馬という弁護士がいた。これは私が明治三十四年以来懇意にしていたし、度々会うものですから、そういう人をも発起人になって貰うように慫慂しろという。そしてそういう連中を集めて山岳会というのを始めようということになったのです。

それで、始めるのもいいが、やっぱり会員が一体何人あるだろうか。日本中集めたって山へ登る人は百人とはいないのじゃないかと、こういう心配があったわけなんです。そうしますと、会をこしらえれば機関雑誌を出さなければならない。毎号千部刷って年三回出す。それが毎号九百部も残る。大変ですよ置場がね。へたな所へ置くと根太が抜けちまいますからね。それで、どうしよう、こうしようというのでやったのだけれども、高頭君が経済面の方をみてくれるというので、それで結局、博物学同志会の人が四人と、それから、それへ集まって来たのが高頭、小島の両氏。これは会員と言えば会員だが、大分派の違う会員。ところが小島君が言うのに、小島君は私よりも十年位年上だったが、われわれは、こういう会をこしらえてもいいが、もう少し年をとった名前の売れた人を一人発起人に加えないと、世間がつまらない会だと思うと困る。誰かないかと……、幸い私は城数馬という人を知っている。これはちょうどいい、城さんをかつぎ出せ。それから私が行って、実はこういう話があるが、どうだ城さん発起人になってくれないかと言ったところが、それもよかろうというので、城氏も乗気になったが、職業が弁護士でしたから慎重な態度だった。高頭君の身許調査に、出かけて行ってから、安堵したと見えて、それじゃというので同意してくれた。博物学同志会はその頃、毎月のように小集会をやった。ちょうど明治三十八年十月十四日、第十三回の小集会をやったので、城氏も会員だからその会に出た。それが済んでから、甲武鉄道の飯田町の停車場に近い飯田河岸という所に三階建ての料亭がありまして、そこから富士山がよく見えるのです。そこで富士見楼という名でした。その楼上へ七人集って最後の相談をして、それじゃというのでいよいよ山岳会が結成されたのです。しかし会員数の問題もある

し、存続の見込みが立つかどうかという問題もあったので、差当り日本博物学同志会の支会という形式を取ったのでした。ところが一番困るのは、会をこしらえても会の事務所を置く所がないのです。それで城さんに、どうでしょう、あなたの所の法律事務所を貸してもらえませんかと交渉した。しょうがないからうちの書生にでもやらせよう、そのかわり君達も折々、事務を見に来なければいけない。私達小僧っ子ですから「ハイ、ハイ」というので、大先輩の氏の言うことだから、折々お宅の事務所へ行きましょう。そんなようなことで、どうやら、その頃「日本」がなくてただ「山岳会」という名で始めたのです。それはイギリスのアルパイン・クラブというのは、やっぱり国の名前がない、ただアルパイン・クラブ、山岳会としてある。それにウェストン師がロンドンへ帰りまして、アルパイン・クラブの人達に、日本にも山岳会結成の機運のあることを話したので、クラブからその規則だとか、いろいろなものを送って来て、遠方から声援を与えてくれたわけです。

ところが、とにかく七人で始めましても中心は博物学同志会の連中です。梅沢君は理論物理が専門の高等学校の学生でしたと思います。中々上手な理窟を言う。高野君は蝶ちょばかり集めている。私は植物ばかり。それからもう一人山川という人も大体、私よりも二、三年下の同じ中学出でしたが、これも植物だった。山へ行くのは、そういうことの研究に行くのだとばかり思っていた。小島氏は原稿を書くために山へ行く。それだから話が旨く合わないですよ（笑声）。

それから私達は三十九年四月に『山岳』の第一年第一号を出すので、その時は私一人で本所にあった印刷所へ行きまして、そこで膝づめで校正をやった。だから誤植もありましたが、またその頃の校正刷りの紙は、片艶と俗に言った片面艶のあるハトロン紙の薄いやつです。それに印刷してあるし、インクも乾いていないから、なかなか字が見えないんだ。それだから誤植があったりなんかしましたが、どうやら私一人でやってしまったのでした。そしてその翌年から札幌へ赴任してしまったから、あとのことは梅沢君や山川君なんていう理窟やに任せた。

そうすると小島君の方は、書いたものがおもしろく読まれればいいのだから、いろいろと潤色する。それで大分嘘

が入っている。小島君は山へ行ったなんていっても、山の記事を書けばデタラメを書いている。どうも文章家の頭はデコボコの鏡みたいなもんだ。ものごとが平らに映らない、なんてやるものだから、小島君憤慨しちゃって、なんだ、小わっぱめ。そういう失礼なことを言う。なんだか議論ばかり、ずいぶんやったらしいですよ。結局小島君のは山へ行って来ると記事をおもしろおかしく書いて、原稿料を貰えばよかった。ところが今の幹部四人は大変なんですよ。山へ行った以上は粉骨砕身して、いろいろ研究して来る。それに帰山先生の薫陶を受けているから、すべてものごとは厳格に、正確でなければならんというのが、頭の中にこびりついている。少しでも変なことを書いてあれば、悪く言えば、あげ足をとる。「小島君、これはどういうわけだ」なんて糺明する。そうこうしているうちに、第一小島君が白峯へ経緯儀を持って行ったというが、何のために持って行って、どんなことをしたか聞いてみようじゃないかというので、聞いたところが、さすがに小島君、弱った。「あれは小説だよ」……僅かに身をかわした。（笑声）

その頃正確な地図がないでしょう。二〇万分の一といっても、あなた方見たことないだろうが、いわゆるケバケバ地図、伊能忠敬がこしらえた日本の輪郭の中へいろいろなものを押し込んだもの。山のある所へ川が書いてあったり、川がある所へ山が書いてあったり、凄い地図、それを相手にウェストン師の記事を焼き直すのは大変だ。彼は実地を歩いているのだから地図なんぞ見なくたってかまわない。自分がどこからどう行ったということを書けばよい。それを不正確な地図にあてはめようたって、あてはまりませんよ。それをあてはめようとしたから小島君はひどく骨が折れたろう。白峯は蘆安から右手の方にあるのに左手の奈良田の方に行けなんて書いてあるでしょう。そうして、のちの登山者のために持って行くものとして経緯儀が挙げてあるのでしょう。経緯儀なんてそうざらにあるもんじゃないから、持って行けって言われても持って行けるもんじゃない。持って行っても使い途はわからないのだから。（笑声）また上高地で雨にあったら、人夫が白樺の皮をはいで着せてくれた。その白樺に蘭が着生していたなんて、嘘にしても程のあるようなことも、どこかに書いてあった。

そんなようなわけで長い間、あげ足をとりっこしていましたよ。しかしそれでも文章家ですから、書いたものがみんなおもしろいのです。われわれが読んでも、嘘とは知りながらおもしろい。例えば初めて常念へ登る時、案内者を雇って熊人原（くまんどばら）を通ったと書いてある。その名もおそろしき熊人原なんて書いてある。これはお熊野様のお堂があるからの名です。それを熊が人を食うようなことが書いてある。そんなことでも、今から考えてみればおもしろい話です。

ところがそのうち、城さんが朝鮮の覆審法院の院長になって行ってしまった。さあ事務所に困りました。一時城さんのお父さんのいた牛込新小川町のお宅へ寄生しておったが、どうも息子が始めても、お父さんの方はこんなうるさいことを引き受けろと言われても困るというんだ。そこへ義侠心の強い高野君が、たしか会が五年か六年経った頃、自分の所に事務所を置いて、それで大正八年かに私の所へ事務所が来るまで長い間、高野君が献身的にやったのです。もし高野君がそういうことをやってくれなかったら、山岳会なんて消滅したかも知れない。六十年どころじゃない。五年か六年でおしまいだったろう。高野君の功績たるや、実に今考えてみると、どの位感謝していいかわからない。ところが残念ながら昨年、お医者さんの不親切から急に亡くなってしまった。今頃は針の山へでも登っているんじゃないでしょうかね。（笑声）

（付記）本稿は、昭和四十年十月十五日久保講堂で行なわれた日本山岳会創立六十周年記念講演会での講演の内容をまとめたものである。（編者）

# 六十年を振返って

槙　有恒

「六十年を振返って」こういう題でございますが、この長い年月の間に蓄積された内容を尽してお話する時間もなく、大掴みを申し上げるに止まると思います。

先ほども会長のお話に、山へ登ることは生涯にとって大変幸せだった、こういうお話がありましたが、全く私もその幸せを感じておる一人でございます。おそらく自分達の会が紆余曲折した道を経て六十年もよく育ってきておるということにつきましては、みなさんもお喜びだろうと思いますし、又それぞれに思い出のことも多かろうと思います。

先ほども司会者のお話にありましたように、変化の激しい時世の中を、会員のみなさんが会を守って、育てて、わが国の登山界に寄与してきたという足跡を思いますと、あるいはわれわれ会員が少し思い過しておる、うぬぼれておるのではないかという謗を受けるかもしれませんけれども、ともかく積極的に大きな業績を残してきたものであるということができるのではないかと思うのであります。それだけに、今日の機会を年齢の層や経験の相違もございましょうが、それぞれにいろいろと、思い出が多いものと思います。私も先輩方の驥尾に付して、初めの頃の会に、末席

を汚しておったのでありますが、先輩方の印象の二、三を申しますと、武田さんにお供をして行けば、花を撮るために、セルロイドの小さな屏風を持って歩かれたのでありますが、風で花のゆれるのをかこって待っておられる。未熟な私はいかにも退屈で、私はそれだけでこりて、それからは武田さんのお供をしなかったのであります。（笑声）

又、小島烏水さんは、私が一九一七年アメリカに渡りましたが、その頃、横浜正金銀行のロスアンゼルスの支店長をしておられました。私は四、五日御厄介になって、滞在しておったのでありますが、お昼の銀行の休みの時に、二人で古本屋へ行くのであります。ゴタゴタした、ゴミっぽい、相当の大きな古本屋でありますが、小島さんはその親爺さんと懇意でありまして、註文に応じてヨーロッパから取り寄せた書物を、それも主にラスキンのものだと思いますが、集めておられました。そうして気にいった本を手になさると、それを持って帰りながら、本というものは自分の気にいったものが手に入ると、まだ読まないでも、手にしているだけでワクワクするものだと、こんなふうに言っておられました。又、横浜におられた時も、戸部に住んでおられたのですが、庭の松の木に登って富士山を眺めるというようなことを言っておられました。一方は勝れた科学者であり、一方は情操の豊かな文学者という印象がございます。

私達が過去を思って懐しむのは当然でありますが、しかし一種のロマンチシズム、そういうことだけに留まっていられないような気もするのであります。つまり現在という時におきまして、過去のことをもう一度考え、できるならば将来と申しますか、これから先のことへ希望とか信念を持ってみたいということが、その過去を懐しむと同時に必要なことではなかろうかと、こう思うのであります。

会の過去を省みまして、行なってきました多くの事業がありますが、又この年月の間におきまして会員相互の間の接触の関係、そういうものをみます時に、その基になっているものは言うまでもない山を愛する気持だと思うのであります。こういうことは、もう自明のことでございますが、と同時に日本山岳会によって山岳愛好の精神が日本に生

まれたわけでもございません。それは国民が昔から山を大変好んだ志向があるとか、あるいは又、殊に宗教的な伝統のあったことなどは、みなさんがご承知のとうりであります。しかしそれは多くの場合、限られた人々の間であるとか、あるいは小派であるとか、あるいは地域的に、あるいは又、ある意味で閉鎖的な範囲を出なかったと思われるのであります。それが明治三十八年の十月に、七人の発起人の御提唱によりまして、全国的な集団の日本山岳会が発足したということは、見ようによっては大変視野の広い、画期的なことではないかと、思われるのであります。

そうしてこの創立にあたっては、先ほどからお話のありましたように志賀重昂先生、あるいは又ウェストンさんの影響とか御助言、御協力というものを忘れることはできないと思うのであります。その頃の会則の第一条に謳ってありますのには、「山岳に関する科学、文学、芸術その他一切を研究し、以って健全なる登山の気風の振興を期し、且つ会員相互の連絡、親睦を図るを目的とする」と、こういっておnます。この中には、もはや地域的であるとか、極く狭い範囲の閉鎖的な片寄りというものは何もなくて、大変自由に、広範な山岳愛好の人達に呼びかけており、且つその精神が根幹となったもののように私は思うのであります。したがいまして会員の構成の内容も、主張とか年齢とか性別でありますとか、職業とか、そういうものの多種多様性をそのままみんな包容いたしておりまして、決して片寄っておりません。それぞれみんな御専門の方々が一つの会の屋根の下に集っておるのであります。

初期の事業といたしましては、明治三十九年に『山岳』を創刊いたしました。先ほども武田さんのお話にありましたように、その頃は年三回発行しまして、又年に一回会員大会を開催いたしまして、会務報告をしたり、展示会、懇親会を行ないました。昔はちょうど今のアメリカ大使館の前の所に三会堂という木造二階建の講堂がありました。今も三会堂という名前があるかと思いますが、篤志家によって寄付された農、林、水産関係の会堂でありまして、借用することができたのであります。そこで山岳会の年次大会をいたしました。その他よく集りましたのは清水谷公園内の貸席で小集会のようなことをやったのであります。又山岳の写真集として『高山深谷』というものを大正六年の第八

集まで出しております。この写真集は先ほどお話にありました高野鷹蔵さんが自分から焼付けて、一つ一つ貼った写真集でございまして、当時山岳に関する写真では他の追随を許さぬ傑出したもので高く評価、珍重されたものでございます。例えば徳本峠から眺めた穂高の写真などは高野さんによって始めて世に知らされたものであります。

この時代の会は会費が年一円であります。のちに三円になったり五円になったりいたしましたけれども、会員数も少のうございまして、経済的の運営については、経理担当の方々は尋常でない苦労をされたのであります。殊に高頭さんの会の経理上の御助力を忘れることができません。この方は越後の長岡在の方でありまして、『日本山岳志』をお出しになり特にたいへんな蔵書家でありました。先ほど創立の時に城さんが高頭という越後の人間を、どんな人間かわからんから調べに行ったというお話がございましたが、あの調べに行ったのは武田さんであります。(笑声)武田さんが行ってみて、帰って来てあれは大丈夫だと太鼓判を押されたのだそうであります。どうも御本人からおっしゃらなかったので、あるいは聞き違いかも知れませんが、小島さんのことを大分拾いあげておられましたから(笑声)、私の記憶のままに申し上げておきます。(笑声)このように会の初めの頃は会員の選択に相当厳しい資格を求める規制があったのであります。

この高頭さん高野さん鳥山さん、こういう方々が会の経理を担当されて、大変苦労されたと思います。クラブでありますけれども、先ほどの武田さんのお話にありましたように、クラブの会員の集まる場所というのは、長く、昭和の時代までなかったのであります。事務所は初め城さんのうちから高野さん武田さん鳥山さんとみなさんのお宅に移ってまいりました。みなさんが、ずい分面倒な仕事を始終そこで執っておられました。虎の門に富士屋というビルディングがありますが、ここに独立した山岳会の図書室と事務所を持つようになりましたのが、先ほど会長に伺いますと昭和四年だったというお話でありますが、初めて日本山岳会が自分達が何時も自由に出入りのできるクラブハウスといっても、十二分とはまいりませんけれども、そのような体裁のものができたのであります。これが昭和二十年の

五月に戦災にあいまして蔵書もみな焼失してしまいました。当時私も役員をしておりまして蔵書を箱詰めにしておりましたけれども、運び出すことができずに焼いてしまいましたことは、まことに申訳のない残念なことであります。

しかし戦後会員各位の御好意によって、一通りのものは集まり、只今のルームにあるのは幸せでございます。

昭和二十四年に日本体育協会の敷地内に、初めて独立の日本山岳会の家屋を持ったのであります。これは主として藤島敏男さんの御尽力によるものでございまして、初めてこの時に自分達の自由に出入りし、夜もおそくまで集会もできるようになりました。その頃は室の片隅の二階に泊れるようになっておりましたが、会員の親睦のためにあるいは事務運営に大変都合のいいものができたのであります。理想から申しますならば、会というものは当然そういうものを持たなければならないのでありますが、みんな山に行くのが忙しくて、山の方面の人は経済界には、あまり有力な人はそうおりませんので、結局は貧乏でも山へ登った方が幸せだったと思うような人ばかりですから、どうも、会の専用するクラブハウスというものが建つということは、なかなかうまくいきません。しかしながら今申し上げたように藤島さんの御尽力によって、こういうものができたということは、どれほど会員相互の親睦の上に役に立ったかということは数えきれないと思うのであります。又、『山岳』と『会報』を発行しておりますが、『山岳』は五九年号まで一一八冊を出しております。又その他に『山日記』を編集しておりますが、これは登山者に大変利用されて、役に立っておると聞いております。

その他会の監修によりまして、それぞれの専門的な知識経験のある方々が、その担当者になって登山全書を発行いたしましたり、そのほかに会員のみなさんによって、執筆出版されました数多くの著書は創立時代から今日に至るまで科学、文学、芸術、技術、翻訳など広汎な範囲に及び、わが国登山界に於きましての貴重な文献と申して過言ではないと思います。と同時に、これによって登山界の内容を向上させるに大変大きな貢献をしておるものと言うことができると思います。

つまり、御承知のとおり、山岳というのは単なる技術だけのものではございませんので、各分野にわたって広い内容と申しますか、そういうものを持っておるだけに、会員各位による著書というものは広いものであります。単に山岳愛好者のみならず、そうでない人にも愛読されておるというほどのものであります。会の創立当時の会則にありますように、会員は登山の指導と奨励とを、ずいぶんいたしました。発起人の方々は、みなさんが志賀重昂先生の著書によっての影響も相当にあったように伺っておりますが、殊に小島さんは志賀先生の影響によって感奮したのだと、こう話されたことがございますが、世代から世代へと同じように、啓蒙、指導、奨励、そういうものを受け継がれて来たのであります。

昭和に入ってから、もうそろそろ昔のような啓蒙、指導の必要もなかろうじゃないかと、当初に会長のお話にもありましたように、今日ではそういうことの必要もないような時になってきておりますが、明治から大正の初期までは、いわば日本の山での探検的登山の時代でありました。この時代は国内に一般には未知の山も残り、殊に未知の渓谷が残されておりました。従って渓谷の源流などについていろいろと議論もあったりして、賑やかな時代があったのであります。又その時に案内をしたものは猟師でありまして、日本アルプスの登山の中心は上高地、大町、中房、芦峡なんかであります。この猟師の人達が優れた山案内人として輩出した時であります。そうして大正の十年代頃になりましてから、山小屋の設置ということが、盛んになりました。例えば大正十二、三年頃だと思いますが、どうしても山岳会で山小屋がほしいと、集ると夢物語りをしたのでしたが、『スキーの驚異』という、オーストリアのシュナイダーというスキーの名人が主役のフィルムが日本に来ました。これで一儲けして小屋を建てようじゃないか、今の会長も一生懸命、興奮してやった一人でありますが、どうも儲からなかったのであります。（笑声）

そんなふうで、会にはヨーロッパの山小屋の設計などの資料も集まり、今日全国に設置されております山小屋の形式とか、必要条件などの決定指導に山岳会が寄与した業績は大きいのであります。スイスのアルプスの山小屋の写真、

設計図、そういうものですとか、あるいはフランスのアルプスの小屋であるとか、部屋どりでありますとか、使い方、そういうものが山岳会の知識を通しまして世の中に広まってまいりました。今日ではもう山小屋の形式というものは、管理と扱いの悪いことは別といたしましても、形式というものは、ほとんど、どういうものがいいということはわかったようなことになりますが、これもその頃のことなんであります。

そうして前にも申しあげましたように、雪のない時にばかり山に登っておりましたが、その頃から積雪期の山にも登るようになりました。それは装備でありますとか、登山の技術でありますとか、あるいは雪崩とかそういうものの研究を必然的に進めたのであります。今日のように気象知識の発達と研究はなかった時代ですが、藤原咲平先生の所によく伺ったり、岡田武松先生に、いろいろ教えていただいたりしたのであります。今の気象の観察のようにまだ進んでおりませんが、しかしそれにしてもそういうことの科学的な知識を基礎にした新しい登山の季節と申しますか、分野がここに開けたのであります。これも日本山岳会の会員達のされたことであります。

わが国積雪期の雪や氷の山に登りますと同時に当然雪線を越える高い山、つまりアルプスであるとか、ヒマラヤであるとか、ロッキーだとか、そういう所へ行こうじゃないかという気運になりまして、大正十四年に会からカナディアン・ロッキーのマウント・アルバータへ、昭和十一年になってナンダコットの登山隊を派遣いたしました。

戦後はヒマラヤでありますとか、あるいは南米であるとか、そういう方面に遠征隊を出しておりますことは、ご承知のとうりであります。

なお戦後は毎年日本体育協会主催の国民体育大会の登山部門を担当しておりましたが、今日では日本山岳協会の一員として、国内及び海外登山について活動しておるのであります。

又、戦前からは東京と関西に支部がございましたが、戦後は各地に設けられまして、現在では十七支部があるような次第であります。そうして各地の支部は、やはりその方面、地方の登山の中心的な指導者となり、あるいは又良き

協力者となって活動しておられるのであります。

日本山岳会というものは、六十年の歴史と内容とによって国際的にも重要な位置をもつ会でございまして、海外の山岳会との友好的な関係とか交誼を持っております、その友好関係はアメリカ、イギリス、カナダ、南アフリカ、インド、アルゼンチン、チリ、ニュージーランド、ボリビア、ペルー、イタリー、フランス、スイス、東西ドイツ、オーストリア、オランダ、スペイン、韓国、中華民国、ネパール、ソビエト等各国山岳会にわたっておるのであります。以上の各国名は、まだ落ちているのもあるかもしれませんが、思いついたままに拾ってみたのであります。そうして会員数は今や二千五百人を越えて、国内的にも国際的にも活躍しておられます。

このようにして六十年間に育てられました会の豊かな性格と、それから会員の親睦によりまして全国的な連繋と申しますか、繋りとは、さらに将来に向って光彩を加えると信じて疑わないのであります。その後改正されました会則には、「本会は山岳登山の研究、知識の普及、及び健全な登山の指導奨励をし、あわせて会員相互の連絡懇親を図るとともに登山を通じてあまねく体育、文化並びに自然愛護の精神の高揚を図ることを目的とする」なかなか大きな目的でございまして、戦後盛んになっております今日の、わが国の登山界に対して豊富な経験と知識と内容を持っておりますだけに、登山界に対してと同時に、自然と山岳の保護等につきましても、新たな今日の使命があるものと思います。会の使命は過去の歴史の上に立って次から次と新しい時世に長く寄与して行くことと思われますが、そのように培われた会に属していることは幸せと思うものであります。大掴みのお話で大変に失礼いたしました。

（付記）本稿は、昭和四十年十月十五日久保講堂で行なわれた日本山岳会創立六十周年記念講演会での講演の内容をまとめたものである。（編者）

# 登山の文化史

桑原武夫

山登りというのは、言うまでもなく文化的な行動であります。本当に手から口へという生活をしている所では登山というものはございません。山を越える、峠を越えるということはありますけれども、それは必要上行なうことであって、山登りをするということは文化的な行動である。そうしますと、一定の国とかあるいは地域の文化のあり方と、山登りの仕方とは当然関係があるわけであります。

それで山というものについての関心、あるいはインタレストということは東洋が一番古いことは申すまでもないのであります。中国には昔から山水という言葉があります。山水に該当する言葉は英語で言うとランドスケープ、フランス語ではペイザージュです。ランドスケープという言葉は一六〇三年に初めて使われております、ペイザージュの方は一五五一年に初めて使われた言葉です。つまりそれまでは景色という言葉はイギリスにもフランスにもなかった。しかもペイザージュとかランドスケープとかいう言葉は平地という意味であります。中国では山水という。それが唐宋の時代からある。唐は少ないのですけれども、王維という詩人が山水画を描いております。宋になりますと山の画はたくさんあって、それには世界的な名作が少なくない。ヨーロッパで山の画が出てくるのはダ・ヴィンチの

『モナ・リザ』の肖像画の背景に山が描いてありますけれども、それがよほど早い方であって、ちゃんとした山岳画が出るのは十九世紀であります。それに比べますと中国は七世紀、八世紀から山岳画があるというのは、なかなかおもしろいことだと思います。

それでは中国ではその山をどう考えたかというと、山というものは土の塊り、あるいは岩の塊りなんですけれども、単にそうは考えないので、山も生きていると考えた。白い雲、黒い雲というあの雲は、山が呼吸する、その息だというようなことを言う。山だけでなく、川も生きものでありまして、川があんまり氾濫いたしますと、けしからん、処罰せよという。例えば狩野川が氾濫して人が沢山死んだというようなことが起りますと、自衛隊が出動して機関銃を水の中へ乱射するわけであります。川の方は「勘忍してくれ、来年から洪水にはいたしません」と言わざるをえないのです。これは日本でも柿の木にちっとも実がならないと――これは越後の方などで特に盛んですけれども――「来年なるか。ならなければチョン切るぞ」と言うと、柿の木になりかわった人間が来年からよくなると誓います。ああいう考え、つまりあらゆるものに魂があるというアニミズムであります。

山を人間扱いいたしますから、中国にあまり高くはないが大へん有名な山で泰山という山があります。その泰山にはそれぞれの王朝が称号を贈っております。その称号も初めは王様の位で天斉王、その次には天斉仁聖帝と皇帝の位になりました。そういうふうにしだいに位が昇進しているわけです。日本でもそれを真似して、山に位を贈ったことがある。こういうことがあるということは、つまり自然と人間とのあいだが比較的仲がいい。相互にわかりあう。そこで自然と人間とは別々に切れたものではない。断絶がない、対立がない。そういうふうに考える。そうしますと、自然に馴れ親しむ、自然を愛するということで、それはよいことでありますけれども、一方では、自然を厳密に調べてみようとか、あるいは自然を征服しようというような考えが起こりにくいのであります。

西洋の近代登山は近代科学、サイエンスの発達と結びついて生まれてくるものでありますけれども、東洋ではそう

いうことに立ち至らなかった。日本では役の行者がありますけれども、また徳川時代に槍ヶ岳に登るとか、そういういろいろなことがありますけれども、それは宗教的なものであって、真の近代登山というものには立ち至らなかった。中国は芸術、文学、哲学など、文化のあらゆる領域で大変な業績をあげておりますけれども、登山においては最近まで、最近はないことはございませんけれども、一流の人物も大きな業績もなかったということは注目すべきところだと思います。それでは、どうしてそうなったかということは、大変な問題ですけれども、市民社会の成立ということと、恐らく関係があると思うのであります。

西洋の方は、古代からやっているとキリがないので飛ばしますけれども、中世になると山は悪魔が住んでいる所、ドラゴン、あるいは龍（氷河が龍のように見えたらしいのですけれども）、そういう恐ろしいものの住んでいる所だと思い込んでいる。したがってこれに近寄ろうとはしなかった。しかしそのことは逆にいうと、悪魔や龍が住んでいるが、その悪魔や龍を排除すると、残ったものは岩や土からなる物体であります。つまり我々と心の通うものではないわけですからして、その物体としての山は科学の対象になり、また征服の対象となる。そういう関係でヨーロッパに登山というものが次第に起ってくる。

つまり近代登山の発生のためには、一方に、龍とか悪魔とかを除いて物体を調べたいという、ルネッサンス以後の――ダ・ヴィンチはその始りでありますけれども――ものごとを明らかにしたいという精神がある。それからもう一方にはジャン・ジャック・ルソーに代表される自然にかえれという思想がある。自然は美しいということは、東洋では当り前の思想で、常識になっていたわけですが、ヨーロッパではそういう考え方はなかったのです。山岳美という考え方を出したのはルソー個人の力だけではなくて、それまでにジョシアス・ジムラーとか、ゲスネルとか、いろいろな人があるわけでありますけれども、山を美しいという背景には都会が汚らわしいという考え方がある。都会には悪徳があり、酒を飲み不品行をし、そしてそこでは貧乏人と金持ちの争いがある。そういう汚れた都会から逃れて山

に登りたいというロマン主義があったのです。そこでイギリスの有名な登山家で、文学者でもあったレズリー・スティーブンの、夏目漱石のタネ本になっていたあのスティーブンの言った言葉に、「山では百万の肺臓をくぐったようなものとは違う空気を呼吸することができる」というのがあります。マッターホルンの頂上に登れば、そこには百万人は登っていませんから空気も美しい、そういう意味です。これはつまるところロマン主義です。

その甘いロマン主義と片方に厳密な科学主義、この二つの結びつきが市民社会をふまえてはじめて可能になる。なぜ市民社会というかといいますと、我々の日常生活に大変危険があって、うっかりしていると殺される、ちょっと外へ出ているとその間に家が焼かれているかもしれないというのですと、無事な時はゆっくり寝ましょうかという気分になって、穂高へ登ってみようとか、アイガーへ登ってみようというような危険をおかす気持は生じないわけであります。つまり都会での日常の市民生活が、完全に安全とはいえなくても、一応は安全という状況になってヨーロッパで登山が流行するのであります。

日本の徳川時代に比較的山登りがあったということは、中国とかビルマとかというところに比べて、鎖国の中でそれなりに平和で、浮世絵もでき、小説もさかんに読まれるという市民社会が生まれていたということの証拠だとも言えましょう。そこへ明治になって、さきほどからの武田さんのお話や、槙さんのお話にあったような形で、新しい登山が始った。武田さんなどが作られた山岳会はまだ比較的徳川時代とつながる面をもっていた。そこへ槙さんがアイガーの東尾根をお登りになって、西洋近代登山というものを自覚的に導入されたのであります。京都へもお見えになって、スライドを使ってアイガー征服の講演をされ、私どもは興奮してききにいったのですが、今、壇の上へ上って行かれるお姿を見ていると、歩き方が全く同じで、四十年前を思い浮べて大変懐しい感じがしたのであります。

そういうことで日本に入って来た近代登山が大変盛んになった。どこの国でも盛んになっているじゃないかとおっしゃればそのとおりでありますが、おそらく世界で一番登山人口の多い国は日本であります。スキー人口も一番多い

のは日本だろうと思うのであります。比率ではありません。ノルウェーとか、そういう所は、国民百人につきスキーをやる人が何人という比率は日本より高い。しかし、向うは国民全部合わせても八百万、東京の足下にも及ばない。こちらは一億ですから問題にならない。登山人口、スキー人口の一番多い国は日本である。

したがって、リュックサックが世界で一番安い国はもちろん日本であります。私共はバルトロ氷河でアメリカのヒドン・ピーク登山隊に会いましたが、我々の履いている靴とか、そういう装備があんまり安いのでびっくりしておりました。それは日本の業者が大変ガンバっているからですけれども、基本的には登山が盛んでよく売れるからであります。これは登山用具だけのことではありませんので、例えば世界で美術全集というようなものはどこが一番安いかというと、いうまでもなく日本です。例えばミロのヴィナス、あるいはゴヤの絵、あるいは中国の陶磁器、そういう名作の原色の複製写真が一番安く手に入るのはもちろん日本であります。つまり日本は高級な大衆社会であって、登山という文化行動もまた、今や大衆社会となった日本に存在するところの文化的な営みであるということになります。大衆社会はつまらんとか、けしからんとかいってみましても、明治にもどすわけにはまいりません。そこで、もし山の遭難の対策を考えるというのなら、まず日本が大衆社会になっているということを認めた上で、それをふまえた上での対策でなければ意味をなしません。

テレビは一億総白痴化のもとだから、全部止めてしまえ、などといってみても、これは無理な話なんであります。ただ世界でチャンネルが十二もある国はない。アメリカは別ですが、イギリスでも、フランスでも一本。フランスはやっと昨年から二本になりました。両方とも国営です。その点わが国は世界で最も自由な国でありまして、チャンネルが十二もある。そういうことと登山の流行とは結びついているのです。

文学でも同じことでありまして、日本は本の出版ではソ連についで世界第二位で、その大部分が文学の本であります。そして文学は森鴎外でなければダメなどといってみても、今の大学生で森鴎外を読んでいる者は百人に一人もい

ない。それでは何を読んでいるかというと、松本清張、井上靖と答える。これはつまらんかというと、なかなか立派なものです。松本さんや井上靖さんを大衆文学作家という人達もありますが、仮にそう呼ぶことにしても、それは大変高級な大衆文学である。これは日本の独特な文学の状況であると思うのであります。そういう状況と登山の状況は決して無関係ではありません。ですから登山文化のことだけを考えてみても仕方がない。大衆社会における登山現象として見なければならないのです。

登山にはもちろん実用の面もあるのであります。戦争中は登山は行軍力をつよめるためであるとおっしゃった方もありますし、げんにインドとかフランスとか、外国では山岳兵というのがあります。しかし大部分の人は無償の行為として登山をするのであって、谷川岳へ登ったからそのうち勲章を貰えるだろう、そんなことを考える登山家はない。谷川岳で落ちて死んだから靖国神社に祭られる（笑声）、そういうことはないですね。そうするとそれは無償の行為だ。無償というのは直接利益をめざさないことですが、儲からないことをなぜするのか。登山の場合は、何かを完遂したという気持を持ちたいからであります。これはとくに大衆社会のようなところで、強い気持だと思います。総理大臣とか、会社の社長になっておれば、自分の決裁でことが動く。したがって、何かをやりとげたという感じはもてますけれども、会社に使われ、政府に使われ、学校の校長に使われている人間にとっては、これをやりとげたということは、そうないのです。（笑声）そこで、例えば富士山に登る。富士山なら誰でもやり遂げられる。夏ならですね。それで今度は二月に富士山へ登ってみる。それからアイガーの北壁を登ってみる。これは成功したら、完遂という気がするだろう。それを求めるのです。

登山がほかのスポーツと違うのは観衆をもたないことです。ほかのスポーツは、泳いでも走っても、いつでもお客に見られていますね。ところが登山は本来単独の行為なんです。単独といっても一人きりにかぎらぬので、グループで行くこともありますけれども、基本的には自分たちだけで観客がないものです。アイガーの北壁などに登ると、グリン

デルヴァルトのホテルからみんなが望遠鏡で見ている。これはしかし例外なので、ショー化するのは本来の登山ではありません。自分がどういう登り方をするか、それは自分以外、すくなくとも仲間以外には誰も知らぬ、というところにも魅力があるわけなんです。そういう観客のない演技、つまり無償の行為、そういうことをやりたいという気持が大衆社会になればなるほど出てくる。それは社会からの逃避という意味ももっている。社会から逃げたい。それは不健全だ、けしからんとおっしゃるかもしれないけれども、それは文学の方でも同じようなことがあって、例えばカフカの文学がそうですが、この現実から脱却したいという文学がある。そういう文学はよろしくないとおっしゃる方もあるでしょうが、そういう文学が愛好されておりますし、また愛好される理由もあるわけです。そこまで言えば、すぐ出てくることですけれども、今日の登山にはどこか実存主義的な面があります。実存という考え方に近いものがある。実存の元祖の一人はニイチェですが、槇さんも初期の『山行』という本にニイチェのことをお書きになった。私などもそれではニイチェを読まねばなるまいと思って、がんばって読んだのですけれども、よくわからなかったという記憶をもっております。西洋の登山家でもウインクラーとかマンマリーとか、そういう過激といってよいほど強烈な行動をした人、最近でいえば、私共がチョゴリザでそのテントを発見したヘルマン・ブールという人、そういう人の行動は正統派的に見るとどうもおかしい。仲間とわかれて一人でナンガ・パルバットへ登頂したり、ロープを結んでいなかったり、ブールのやり方は決して英国山岳会などが賛成しないようなところがありますが、彼にしてみれば、英国山岳会のゼントルマンが何だ、俺は俺のしたいことをやる、俺は実存的に生きるという気持があったのかもわからないと思うのです。

そういうものが片方にある。そして片方には大衆社会がある。そういう中での今日の登山を考えねばならない。ただ注意しておきたいと思いますのは、西洋で実存主義をとなえ、あるいはニヒリズムをとなえる人は、その書いたものを見ると、学問を軽蔑したような顔をしながら、もの凄い学者だということがわかります。学問がなく、何も知ら

ないで、「学問が何だ」などと言っているのは、アホウです。（笑声）学問をうんとやって、その上で「学問が何だ」と言うのが本当のニヒリズムであって、初めから本は読まぬ、学校は行かん、勉強はしないというのではつまりません。このごろ遭難が多いので、経験のある先輩たちが登山の講習会を開いたりしますと、そんなものは出ることはない。俺は俺の好きなように登る、などという若い人に時々お目にかかる。しかし、危い所はザイルをつなぐんだというと、「ザイルなんて卑怯なものはつなぐか」とか、ザイルをつなぐんだったら、つなぎ方など習わなくともいい、丸結びか何かいい加減にやっておけばいいさってなことをいう。（笑声）それではやっぱり本当の実存主義になっていない。個人的な独特の登り方をされるのはいいけれども、それにはやはり本当の実存者がそうであるように、まず個我の錬成ということをする段階がないといけないのではないかと思うのです。おれはイギリスの詩を独特の読み方で味わう、といってみても、まず英語の初歩の文法を知っていなくては困るのであります。

現代日本の登山文化は、日本の伝統を受けつぎ、また西洋の流儀も教わってきたのですけれども、それがいま日本の大衆社会というものの上にのっかって、戦後のいろいろの混乱を経て、今こういう形になっているわけであります。このままでいいとは思いませんけれども、それをよくする方法を考えていくのには、今いったような日本の文学とか政治とかと同じように、日本現代社会のいろいろの関係を考えねばいけないので、ただ登山だけがメチャメチャになっているというような批評は困るのではないかと感じておるのであります。

（付記）本稿は、昭和四十年十月十五日久保講堂で行なわれた日本山岳会創立六十周年記念講演会での講演の内容をまとめたものである。（編者）

# ゴジュンバ・カン登頂（一九六五年）

高橋進

## ベースキャンプへ

ナムチェ・バザールをあとにキャラバンを再編成した隊が、二日目には目指すゴジュンバ・カンを望見した。双眼鏡が隊員の手から手へ、長野岳連隊からもらった写真と山を見較べる私達のかたわらで、サーダーがマッチ箱の中箱の裏に、器用にスケッチを書き出したかと思うと、「皆さんはどこの山に登るつもりなのだ」と言い出す。「勿論ゴジュンバだ、これだよ」と写真の山を指す。「いや、それはゴジュンバではない。サーブたちがゴジュンバという山は、チョー・オユウのすぐ右隣の山で、われわれも名前を知らない。ゴジュンバという山は、その山の次の山のことをいうのだ」と。あわてて、シェルパ達を交えて調べてみたところ、ゴジュンバとは三つの頭という意味だそうで、ネパール外務省の地図にもその名前が載っておらず、地元民の使うローカル・ネームであったわけだった。

日本で知った限りでは、ゴジュンバという意味は、頂上が広く平らな山ということだったし、私達の隊のリエゾン・オフィサーのライ氏は、ポカリ（湖）が沢山ある山という意味で、その証拠にはゴジュンバ氷河には、大小無数の

ポカリがあるではないかといって、シェルパ達の意見を一向にきき入れようともしなかった。いずれにしても山の位置が東方へ、即ちチョー・オユウからギャチュン・カンへ向って、一つずれていることがはっきりわかったし、一九六一年英国の王立地学協会から発行された、エベレスト地区十万分の一の地図によれば、私達の目指す山、ゴジュンバ・カンは、標高七八三九メートルを基準にすれば、約七八〇〇メートル或いはそれ以下に変更されねばならないだろう。(註)

(註) 当初明大が目指したピークは、前記王立地学協会の地図に七八三九メートルと記入されたものであり、日本では一般にこれがゴジュンバ・カンと目されていた。「山岳」第六〇年所収のギャチュン・カン隊の写真でも示されているように、比較的平らたい、真白なピークである。しかるに、サーダーの言で、ゴジュンバと呼ばれるピークは、そのもう一つ東側のピークであることを知り、明大隊はそれに登頂したのだが、そのピークについては、王立地学協会の地図には何ら記入がない。頂上に立った隊員の観察によって、七八三九メートル峰より若干低いというところから、ゴジュンバ・カンの標高を約七八〇〇メートル或いはそれより低いとしている。将来精確な測定が行われるまで、約七八〇〇メートルとしておく以外になかろう。

ところが、最近ドイツのネパール研究協会から発行された Khumbu Himal という五万分の一の詳細な地図によると、前記七八三九メートル峰に七八〇六メートルの数字があてられ、明大隊のいうゴジュンバ・カンに相当するピークには、同様に名称の記入はないが、七六四六メートルの数字が記入されている。これはいささか低きに失するようだが、ここで論ずる余裕はないので将来の研究に残しておく。

なおゴジュンバ・カンは最近の西欧の書で、屢々ゴジュンバ・リ(Ri)と記されているが、明大隊の意見では、敢てそのように変更する必要はないということである。

近着の *Mountain World* 1964~65 の一九七ページの表によると、Ngojumbu Ri I, II, III の三峰を示し、それぞれ 7806m (25611ft), 7646m (25084ft), 7610m (24968ft) の標高を与えている。これは明らかに前記クーンブ・ヒマールの地図に基くものである。またこの地図は山岳地図作成では権威者であるエルヴィン・シュナイダーの測量の結果とあるから、明大隊の登頂したゴジュンバ・カン(即ちシュナイダーのいうゴジュンバ・リ第二峰)の標高は、七六四六メートルとするのが正しいかも知れぬ。(編者)

こうして、山そのものが間違っていたらしいという予想外の出来事のほかに、ナムチェ・バザールを発つ前後から、ヒマラヤ一年生の神経をいらだたせるような、幾つかの小さな出来事が生れはじめていた。

先ずコックのダワ・テンバだが、彼はカトマンズ滞在中から、すでに隊の食糧係やマネージャーをなめ切ってい

て、自分が参加した日本隊のことを持ち出しては、現地食の購入を実際の必要量の二倍位に水増ししており、それが聞き入れられなくなってからは、キャラバン中を通じてすべてに反抗的、投げやり的な仕事しかせず、ナムチェ以後は益々増長する傾向があった。

サーダーのアン・ダワIも、自分の出身地のタミからつれて来た十人のローカル・ポーターの待遇改善を要求し出して、次第に横柄な態度をとりはじめて来たからだった。

もっともこれは、私達が初めてのヒマラヤ隊として、甘く見られてはならないという自戒のための、取越苦労もないわけではなかったが、シェルパ達も同じ人間であってみれば、年毎にサーブ達にもまれて、ずるくもなるだろうが、私達のイメージには、マナスル当時や時には戦前の時代の、彼等の素朴な面ばかりを求めて、彼等を評価する癖から抜け出せないでいることも、その原因の一つだったようだ。

ナムチェ・バザールからベースキャンプまでは、ポーター達もすべてシェルパ族でなければ働けないのに、早稲田、インドのエベレスト隊と、大きな二つの隊が通り過ぎたあとでは、百人余りのポーターを揃えるのに、殆んどが、女・小供か、老人という有様だった。毎朝の出発は、キャンプ地に陽が当りはじめて、暖かくならないと朝の炊事の仕度も始めないため、遅発ちの遅着き、の毎日にイライラさせられるだけだった。

ローカル・ポーター達は、寝袋を始め個人装備は原則として自前ということで、各人承知しているわけだったが、ベースキャンプから上で働くには、寝袋がなくては駄目だと言い出しはじめていた。しかも去年の長野岳連隊のローカル・ポーターとして参加した連中が、シェルパと同じ様な装備の支給を受けていて、それを他のポーター達に得々として見せびらかすため、再びナムチェに隊員、シェルパを戻して、早稲田とインド隊が買い漁ったあとの部落を戸別訪問して、法外な値段で売りつけられる始末だった。

しかし最も大きな誤算は、ベースキャンプ到着二日前に、思いがけぬ大雪に降り込められてしまったことである。

一夜のうちに三十センチを越える積雪は、タクナの谷の合流点の牧舎の点在する、のどかな早春のただずまいを、たちまち厳しい雪の山に変えてしまった。標高四八〇〇メートルのゴジュンバ氷河の中であってみれば、考えられぬことでもなかったかもしれないが、ポーターの大部分は早々にナムチェに帰ってしまった。やっと引きとめた総数二十九名のポーターには、食糧を給し、靴・沓下、手袋、サングラスなど、隊員の装備の中から少しずつとり上げては、御機嫌をとりながら、それから十日後にやっとベースキャンプに辿りついた。

## アイスフォール

ベースキャンプから第三キャンプまでは、去年のギャチュン・カン隊と殆んど同じルートをトレースするということは、はじめからゴジュンバ組し易しの安易感を私達に抱かせていた。彼等が通れたところが、何で吾々に不可能なことがあろうか。私達の目的は単にゴジュンバの登頂だけでなく、最高キャンプを頂上直下、出来れば頂上に上げて、チョー・オユウへの稜線を歩いてみたい。この思い上った夢は、数日のうちに全く情なく崩れ去ってしまった。

ギャチュン・カン隊のシェルパとして参加したドルジェと、ローカル・ポーターであったペンバを、ルート開拓の道案内としたのだが、彼等は去年の経験からみても、登路はアイスフォールの右岸と、そこから境を接してチョー・オユウにむかって突き上げている岩壁との間にしかないと言う。去年は三乃至四隊の偵察隊を毎日繰り出して、一週間がかりでこの第一のアイスフォールを開いたのだから、シェルパ達の意見を採用しないわけにはゆかないし、ベースキャンプから眺めただけでも、崩落のはげしいこのアイスフォールで比較的落着いているのは、この右岸と左岸しか見当らなかった。この左側のアイスフォールを辿って、一九六二年アメリカのセイヤー氏等が、チベット側にもぐり込んでエベレストを試登したのだが、チベットとの境界線のヌプ・ラへ出たのでは、上部に二、三十メートル幅のクレバスが口を開けていて、行きづまりになってしまうことは、すでに明らかにされていた。

三月二四日、ベースキャンプへの全員集結を待ちきれず、第一キャンプへの偵察をはじめる。物凄いアイスフォールの氷雪崩の地響きは、思わず私達をハッとさせる程の身近に感じる。手強さは予想を大分裏切って私達を圧倒する。高橋、藤田、入沢、ドルジェ、ペンバの五名が二隊に分れて、アイスフォールの蒼氷に第一歩をつける。たちまち氷の迷路に行きづまる。蒼氷の堅さは、かつて経験したこともない程、一本のピトンの打ち込みに、何と二十分を空費し、やっと打ち込んだピトンが、氷の壁を大きくひき剝がしてしまう。

三月二六日、三日目にようやく第一キャンプ地（標高五七〇〇メートル）に達する。

三月二七日、隊員三名、サーダー、ローカル・ポーター達がベースキャンプに到着、全員ベースキャンプに集結する。第一キャンプ建設までは、好天を利用して荷上げを強行し、その後でベースキャンプで休養をとるように、計画を変更したいとサーダーを通して、シェルパ、ローカル・ポーター達に伝えたところ、再びローカル・ポーターの装備の貧弱さについて、サーダーから要求が出される。

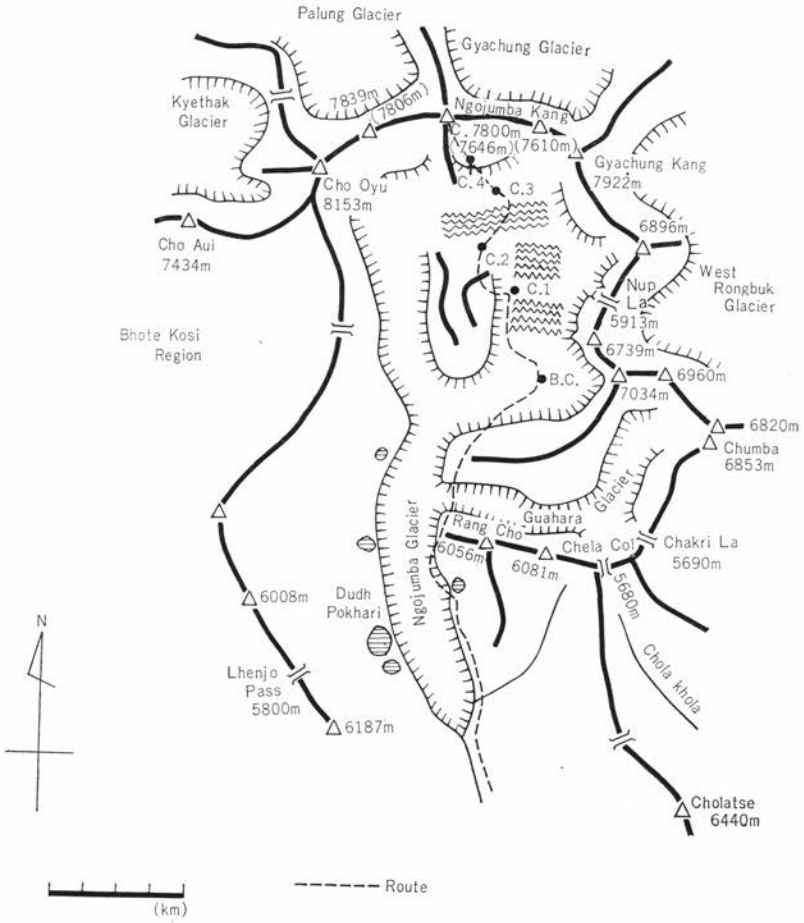
「キャラバンシューズではベースキャンプから上は勿論、普通の道でも、もう一歩も歩けない。中共製の運動靴の方が遥かに丈夫だ。」リエゾン・オフィサーを交えて二時間の激論、僅か一週間程の雪の中の生活で、すべてのキャラバンシューズの底が剝がれてしまったのを見せられては、サーブの完敗だった。

とっておきの大切な高所靴の何足かを出しても、なお且つ不足する靴やピッケルを補充するために、サーダーが自分でタミまで往復して、装備を揃えて来たいという。他のシェルパでどうかと妥協案を出しても、自分でなければ荷物は揃わないの一点張りで、ついにタミ行きを許可する。

サーダーはナムチェ・バザールから二人の女房の中の一人を同行して来て、ベースキャンプまで、二人でテントに泊る生活を続けてきていたため、その頃から彼に対する隊員達の評価は、ガタ落ちになってしまっていた。

女房をタミまで送ってゆきたいのが、目的の半分であることはわかり切っていたが、カッカとしている若い仲間達

# Sketch Map of the Ngojumba Glacier Region



をなだめ、タミへの往復は最低一週間はかかるはずであるから、それまでに第一キャンプへの荷上げを終らせてしまい、少ない装備で働けるだけのローカル・ポーターの五、六名を確保出来れば、第二キャンプから上は充分間に合うから、ローカル・ポーターを本当に必要とするのは、第一キャンプまでの間であり、サーダー不在の間に荷上げをしてしまおうという苦肉の策だった。

## 入沢の負傷

三月二八日、サーダーは、女房を連れてベースキャンプをあとにナムチェにむかう。今はシェルパ達もサーダー不信の表情をかくそうとしなかった。

暖かい西陽をあびて、第一キャンプへのルート工作班が、疲れきった足どりでキャンプに戻って来た。アイスフォールの中の氷塔が、今日も何回か不気味な音をたてたという。見えない内側からの音だけに薄気味が悪い。

「シェルパは案外憶病ですね、ドスーンと氷の崩れる音がすると、俺達をおっぽり出していち早く逃げ出すし、小さなクレバスなんかでも、絶対に跳んだりしないで、必ず自分でまたげる歩幅の場所を捜して渡りますね。」

若い隊員たちにとっては、待望の第一キャンプへの道つけがやっと完成した安堵感。そして、今日からサーダー代理となったコックのダワ・テンバが、一日がかりで「モモチャ」を喰い放題作っておいてくれたのを、久し振りに腹一杯パクつける満足感が、やっと遅ればせながら、ベースキャンプらしい落ついた環境をつくり出していた。

三月二九日、隊の全力をあげて、第一キャンプへの荷上げがはじまった。固定ロープにぶら下がる、ポーター達の表情は苦痛にゆがむ。四本爪のクランポンでは、蒼氷の上では殆んど役に立たない。午前一一時、アイスフォールの途中でベースキャンプと定時交信をする入沢を追い越して、最後の氷壁にかけられた縄梯子の難関に向う。

荷物に振り回わされ、縄梯子の下でポーター達がつまっていた。間もなく最後尾にいた筈の小林が追いつく。「入

沢はどうした」「少しおくれて来ますが、今日は大分調子が悪そうですよ。」折から陽はかげり、小雪がちらつき出し、冷たい風までが加わって、蒸し暑かったアイスフォールの中を、一ぺんにきびしい寒さに変えてしまっていた。

縄梯子の登りは相変らずはかどらない。突然、私と小林の足もとの下の方から、ドドーンと物凄い地響きが立ったかと思うと、手にしていた固定ロープがピーンと張って、足をさらわれる。思わず、細く延びきってしまったロープに、しがみつく。梯子にしがみついてたポーターが、小林の頭上に墜落していった。

「ああもう駄目だ。」あの九年前の、杓子岳の二重遭難の雪崩に巻き込まれた時と全く同じ絶望感。小林とポーターは、一メートル下の氷の棚にひっかかって無事だった。しばらくは氷の砕け落ちる、妙に金属的なカン高い音と地響きが、私達の自由を奪っていた。

「高橋さーん、助けて下さい。小林さーん」弱々しいが、入沢の声がはっきりときこえてくる。巨大な氷の壁が一瞬にして、直径一メートルから五十センチ位の氷塊状に変って、まるでドライアイスのように水蒸気が立ち昇っていた。

入沢は氷にはねとばされて、怪我はひどいようだが、氷塊の下敷きにならなかったのが、せめてもの救いだった。左手、左足が全くきかぬと言いながら、立っていたいと言う。坐っていると意識が失われそうだと言う。入沢が持っていたトランシーバーは、氷に押しつぶされてしまっていた。植村をベースキャンプに、一刻も早くドクターに見せなければ、私達では全く手のほどこしようもない。

午後三時、やっとアイスフォールの取付点近くまで降った時に、ベースキャンプからの救援隊と会う。ドクターは入沢の頭を一目見ただけで、「これはいけない、脳内出血だ」と言いながらも、すばやく傷の手当をはじめる。口から何も吐かなかったので、未だいくらか救いの手だてもあるらしい。今はただドクターの手腕に頼るだけであった。

午後からの雪は本格的な風と寒さを加えてきた。アイスフォール下に中継キャンプを造り、ドクター、藤田、尾高

を残してベースキャンプに降った。午後七時、ラジオ交信で頭の傷の縫合せ完了、経過良好の連絡を受ける。続いて午後九時、左手が少し動くようになる。一先ず安心である。不安と後悔にさいなまれた寝られぬ一夜をすごす。

翌朝は皮肉にも無風快晴、ベースキャンプからのゴジュンバ・カンを中心に、ギャチュン・カン、チヨー・オユウと連らなる、まばゆい雪と氷の殿堂は、一夜にして、私達を恐怖のどん底に陥し入れてしまっていた。

一晩無事にすぎれば、先ず大丈夫とうけ合ってくれたドクターから、入沢の容子が今朝から急におかしくなってきて、頭が割れるように痛むと訴えているとの連絡あり。もう一日は中継キャンプに安静にしたあと、ベースキャンプに収容し、最低一週間の容態をみなければ、怪我に対する見通しがたたないらしい。脳内出血は後遺症がもっとも恐ろしいという。左足が全く利かなくなってしまうこと位は、予め覚悟をしておく必要があろうとドクターに宣告され、すべてを投げ出して、今はただ入沢を無事に日本へ連れて帰りたい。ヒマラヤの奥まで、遥かな山なみを越えて、これからという時に引き起してしまった重大な過失に、ただ呆然と自悔の涙に溺れるだけだった。

入沢の眠るテントの外で二十四時間前に起った、この非情な蒼氷の滝を仰ぎながら、今後の隊の行動について協議する。

①一週間後の容態が思わしくなく、彼の左足が不具になると考えられる場合は、いさぎよく登山を全面的に諦らめて、可及的速かに帰国する。他の隊員はガウリサンカール方面を経てカトマンズへ戻る。

②怪我が完全に良くなるようなら、もう一度ゴジュンバへの登路を研究する。

③第一のアイスフォールが危険で、登路を見出せぬ時は、ナムチェ・バザールのチェックポストを通じてネパール外務省に申請し、ヒマラヤを広く歩きまわってカトマンズへ戻る。

四月一日、一日がかりで入沢をベースキャンプに降ろし、幾らか心の落着きを得る。ドクターは入沢の怪我を次のように診断した。

①左頭部裂傷、長さ四、五センチ、深さ頭蓋骨に達する。②右頭部挫傷、外傷はないが、この傷が最も危険で、左足が全く動かないのはこれが原因、後遺症をもっともおそれる。③左肋骨、八、九番、二本骨折。④左前額部挫傷。⑤左上腕挫傷。⑥十一胸椎挫傷、或いは骨折。

このアクシデントに恐れをなしたローカル・ポーターのうち、三名がシェルパの説得を振り切って、辞めていってしまった。その中にリンジーがいたのが、意外でもあり淋しかった。陽気で敬虔なラマ教の僧でもある彼は、日本語を習得するのにも最も熱心だった。「来年の日本のエベレスト隊には是非また参加して、サウス・コルまで登るのだ」と、張りきっていただけに。しかも彼はハントのエベレスト隊にも、ローカル・ポーターとしてサウス・コルまで荷上げした、立派な経歴までもっていたのに。

## アクシデントの原因

岩壁にひっかかった氷河の滝の内部は、意外に中空状態のところが多く、巨大な氷のかたまりが、滝の流れの中で微妙なバランスによって支えられていたものが、主として氷河運動と外力によって、崩れ落ちたものにちがいない。

私達十数名の者が、平均して二十キロ以上の荷物を背負って、一度にドカドカと歩けば、アイスフォールに与える力は、何トンという大きなものになるだろう。しかも荷上げが行われる前には、かなり大きな氷塔もピッケルで削りとられ、その氷塊がアイスフォールのクレバスの中に落ち込んで、アイスフォールそのものの崩壊を誘発するような、不気味な音を何度も耳にして来ていたのが、この前ぶれなしの氷雪崩を引きおこしたらしい。

氷河に対する経験不足や、判断力の貧弱さは認めないわけにはゆかないが、去年のギャチュン・カン隊は、ここを手ぎわ良く通過して、氷の崩落には全く遭っていないのだ。私達の不運を歎かずにはいられない。

## 再びアイスフォールへ

四月三日、コックのダワ・テンバは、サーダー不在中の代理として、もう一度第一キャンプまでの安全なルートを捜す仕事を、自分に与えてくれと言う。彼のシェルパとしての過去の経歴は、コックとしてが主で、山登りの経験はあまりないが、熱心にせがむので、二名の隊員と若干のポーターをつけて、アイスフォールの偵察に出すが、結局第一キャンプへは同じルート以外に道はないことを確認しただけだった。

そして再び第一キャンプ建設が始まる。

翌四日、第一キャンプを建てる。

## ドルヂェ・シェルパの負傷

第一キャンプの上には、同じ位の規模の第二のアイスフォールが、五百メートルに近い氷の障壁を造って立ち塞っていた。その中央には烏帽子状の岩が、アイスフォールに喰い込んでいて、ギャチュン・カン隊は、この烏帽子岩の左側のアイスフォールを経て、岩の裏側に第二キャンプを造った。そこはすでに、チベットに通じるヌプ・ラとは、指呼の間にあって、その奥にはエベレストが見える筈である。

この第二のアイスフォールの状態が、またもや極めて不安定で、第二の事故を引きおこしてしまった。

四月七日、藤田、ペンバ、ミンマのパーティーが、第二のアイスフォールの直登を諦らめて右岸の岩壁伝いに、かなりな廻り道ではあるが、安全な登路を見つけ出した連絡を受けながら、第一キャンプに移動するために、十日前の氷雪崩のため全く様相を変えてしまった第一のアイスフォールを恐怖におののきながら登っていた私の上に、第一キャンプに在って藤田の隊と分れ、ドルジェ、ダキヤと共に烏帽子岩の脇のルートを求めて出かけていた筈の平野が、

勿然と姿を現わし私達をおどろかす。「すみません、又やってしまいました。ドルジェが怪我をしました。」ベースキャンプからのボッカ隊は、たちまち救援隊に変わり、第二のアイスフォールへドルジェ救出にむかう。

ドルヂェは右目、右手を氷の破片でやられ、出血も多く、右鎖骨が折れて、骨の先端が皮膚を突破って出ていた。顔面は二十ヵ所の裂傷のため、外見はドス黒い血にまみれて悲惨だが、両足が健在なのは不幸中の幸だった。気丈な彼は、ロープにしばられ仲間の肩に支えられながらも、ベースキャンプまで四時間以上を費して帰りついた。

私達は入沢の怪我という、余りにも大きすぎるショックを経たあとだけに、言い合せたように、彼のことを口に出すのを恐れた。再び登攀を中止するか否かの意見が、若し誰かから一言でもはかれたら、今度こそは山から降りなければならぬことは、明らかだったからだ。

## 故障者続出、登頂

アイスフォールの恐ろしさと、そのルート探索のむずかしさは、第二のアイスフォールで終ったわけではなかった。第二キャンプの目前に立ちはだかる、第三のアイスフォールも亦私達の非力をあざ笑うように、氷雪崩の恐怖と、クレバスの陥し穴の迷路で行手をはばんでいた。

四月一〇日、第二キャンプ（標高六〇〇〇メートル）建設から、四月一八日、第三キャンプ（標高六五〇〇メートル）建設の間にかけて、ベースキャンプへ下っての休養のない生活は、ついに元気な隊員、シェルパの健康をも害して来ていた。

入沢とドクターで二人の隊員が欠けた上に、サーダーは再びベースキャンプに戻って来てからは、第三キャンプへのルート開拓に働いたかと思ったのも僅か三、四日。コックのダワ・テンバが原因不明の発熱のために、ベースキャンプで寝たきりの状態になってしまった。シェルパは僅かに三人、隊員八人ではこの山は大きすぎる。しかもベース

キャンプへ降りて、休養をして出直すだけの余力はすでになかった。せめてもの頼りはローカル・ポーター達だったが、シェルパに準ずる位の装備を与えられた彼等の中には、マナスル隊に参加したカミ・ツェリン、アジワなどが健在で、特にカミ・ツェリンをローカル・ポーターの頭にして、荷上げに頑張ってもらった。

四月二一日、第四キャンプ（標高六九〇〇メートル）建設、平野、小林、ミンマが登頂隊として第四キャンプに入る。夕方、サーダーがシカメッ面をして第三キャンプから下って来る。半身が痛んで耐えられないから、ベースキャンプに降りてドクターに診てもらいたいと言う。明日は頂上へ向うというのに……。

四月二二日、サーダーはポーター二人をお供に、申訳なさそうな様子もなく、さっさとベースキャンプへ。午前五時、アタック隊は第四キャンプを出る。午前九時、頂上直下までつながる氷壁を、横に大きく走るクレバスで時間を空費する。やっと通り扱けたクレバスの上の壁で、再び行きづまってしまった三人は、午後四時、力尽きて第四キャンプへの道を、戻りはじめてしまった。

ミンマが昨夜から腹痛を起し、食事を摂っていないため、氷壁の下で疲れ果ててしまったのだ。おまけにピッケルまで折れてしまって。日本製のピッケルの柄の何とよく折れることだろう、これで四本目だ。

尾高の調子も悪い。第三キャンプで寝たきりで、食事もとれないらしい。藤田も連日の活躍で、すでに頂上へゆくのには疲れすぎていた。登頂の望みは全く悲観的になって来た。

四月二三日、午前四時、植村、ペンバが第四キャンプから昨日の踏跡を辿る。途中に残してくれたアタック隊の固定ロープのおかげで、引返し点までは調子良く進んだが、一見ノッペリしたように見える氷壁は、意外にも氷塊の積重なりで、氷壁というよりむしろ第四のアイスフォールと呼ぶのにふさわしい。ルートの判断がむずかしい。

私は第二キャンプから双眼鏡とトランシーバーを使って、植村にルートを教えるが、彼等には下から見ている程、容易にルートの判断がつかないらしい。右に左に蒼氷の壁を避けて、さまよい歩く二人のテンポを見ていては、登頂

のチャンスが失われつつあることを、認めないわけにはゆかない。午後四時の交信で、彼等はなお頂上への道を引返そうとしなかった。頂上に立てたとしても、ビバークを承知の上で、なお彼等を頂上へ行かせるべきか。酸素なしの七五〇〇メートルでのビバークは一寸した天候の変化でも、二人を死に追いやるにちがいない。

午後五時四分、うわずった植村の声が、トランシーバーから絶え絶えに入って来た。「こちらアタック隊、こちらアタック隊、はじめは手前のピークを頂上と間違えましたが、今度は本当の頂上です」「今つきました、おそくなってすみません、皆さん頂上です」この瞬間を、ベースキャンプ、第二、第三キャンプの全員が、トランシーバーを前にしてまっていたのだ。「よかったな、おめでとう。写真を撮ったらすぐ下ってくれ、明るいうちに途中のクレバスまで降りてビバークしてくれ、明朝下からサポート隊を出すから。」二人は夕闇をついてアイスフォールを再び降りはじめた。七時三十分、クレバスの中に身を寄せ合って一夜を明かす。

四月二四日、サポート隊に迎えられて第四キャンプに戻る。二人は疲れきって、第四キャンプで終日休養する。苦しみ悲しみが、大きく深かっただけに、この非力な隊がかち得た頂はうれしい。若さとチームワークが最後に私達にほほえみかけたのだ。

四月二六日、全員ベースキャンプに集結、入沢は散歩に歩ける位に回復していた。コックの原因不明の発熱はどうやら肺結核らしい、すでにクムジュンに養生のため降りていた、ドルジェも鎖骨接合の手術のため、カトマンズに帰したあとで、この二人の病状にはなお不安が残されていたが、ベースキャンプでの短かい休養の後、四月二九日、ベースキャンプをあとに再びキャラバンを組んで、ヒマラヤの小旅行に出発した。

## あとがき

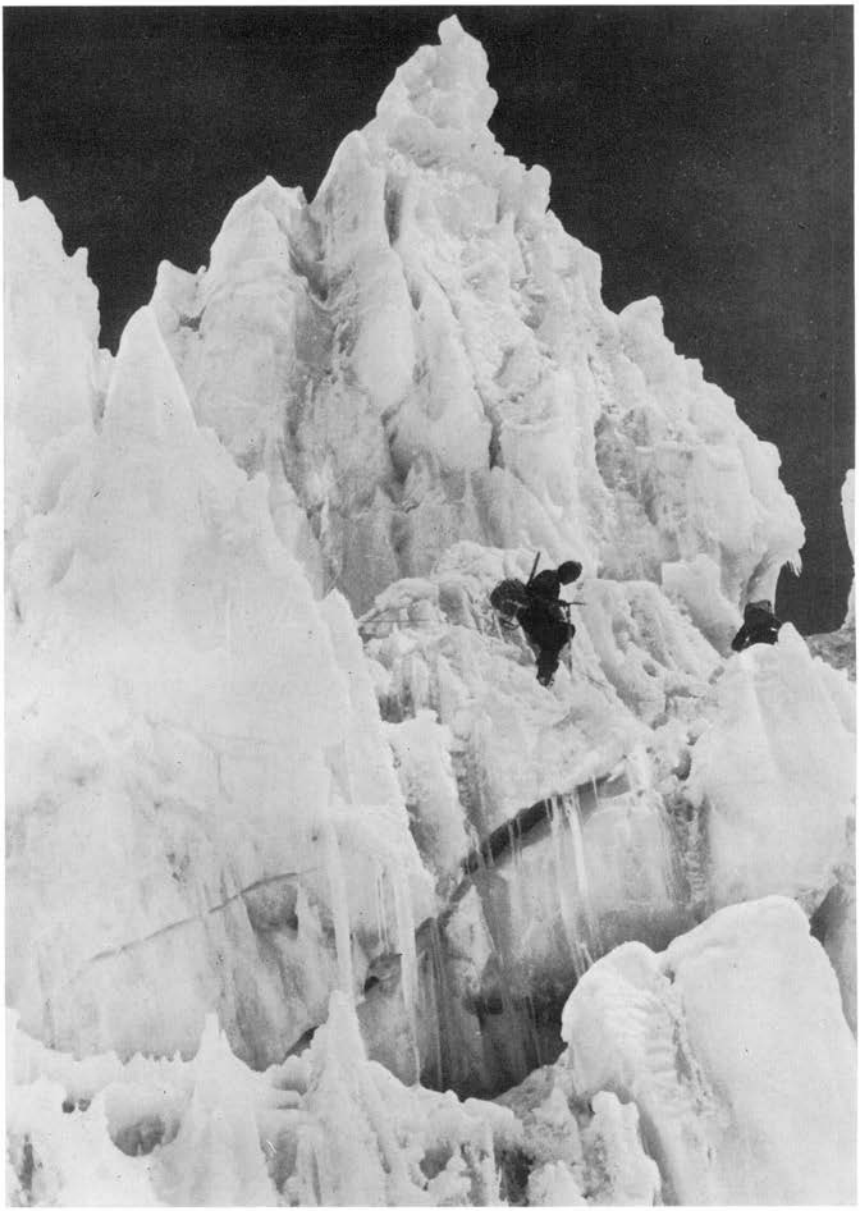
私達のヒマラヤの旅の楽しい生活は、このあとにはじまった。往路には、思わぬ大雪に見舞われたタクナは、すで



第1キャンプと第2キャンプの中間からゴジュンバ・カンを望む
Ngojumba Kang seen from midway between Camps 1 and 2. ( N.K.I-7806m, N.K.II-7646m, N.K. III－7610m)



ベースキャンプから望んだゴジュンバ・カン
Ngojumba Kang II (7646m) seen from the Base-camp.
(By S. Takahashi)



ゴジュンバ氷河のアイスフォールの中で
Among the ice-fall of the Ngojumba Glacier. (By S. Takahashi)




ゴジュンバ・カン（II峰7646m）の登頂ルートを示す
Showing the climbing route to Ngojumba Kang II (7646m) in 1965.

に十頭余りのヤクが草を喰む、のどかな草地に変貌していた。

ここから私達は余分の荷物をサーダーにまかせて、苦労を分ちあったシェルパとローカル・ポーター達と共に、身軽になってクーンブの谷に向って道を採った。

五月四日、往きのキャラバンで、ドゥド・コシの濁流をナムチェまで同行した、インドのエベレスト隊のベースキャンプを訪問する。登頂前の休養のために、全員がベースキャンプに降りていた。六十人近いシェルパ達、そしてサウス・コルからベースキャンプに降りて、全員で日なたボッコをたのしむ隊の大きさの違いと、その余裕。エベレストにはそれだけの力が必要なことを、私は八千メートルにみたぬゴジュンバ・カンで、はっきりと思い知ったのだった。エベレストは何と言われようと、豊富な物量と人海作戦以外に、安全にして確実な登頂のプログラムは組めないと。

ゴジュンバ登頂を祝って、パーティーを開いてくれたインド隊と別れをおしみ、一路クーンブの谷を下る。イムジャ・コーラを遡行して、早稲田のローツェ・シャール隊のベースキャンプを訪問し、五月九日、タンボチェを経て再びクムジュンに帰った。そこでヒラリー卿と偶然に会えたことも、私達の山旅の中に喜びと想い出の一頁をつけ加えてくれた。

帰途のキャラバンの記述は割愛しなければならないが、山を登り終えたあとのヒマラヤのキャラバンの愉しさは、やった人でなければわからないことだけ記しておこう。

最近のドルジェの手紙で、鎖骨の骨折は完治して、ダキヤと共にユーゴースラヴィヤの登山隊に参加したことを知った。そしてダキヤはカトマンズに戻ってから、病気（不明）で亡くなったとのこと、心から山仲間の冥福を祈る。コックのダワ・テンバの消息は明らかではないが、当時の病状ではダージリンはおろか、カトマンズまでも帰ることはむずかしい。ドクターの診断では、クムジュンで倒れたまま、永からぬ命を終るのではないかと言う。彼の全快を

心から願ってやまない。

ペンバ・テンジンは、私達の乏しい財布をはたいて日本見物に同行し、二週間の滞日生活に疲れきって、シェルパの故郷クムジュンへ帰っていった。

終りに私達の隊員とシェルパを紹介しておく。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 団　長 | 渡辺　操 | (53歳) | 明治大学教授、山岳部々長。 |
| 隊　長 | 高橋　進 | (34歳) | |
| 副隊長 | 藤田佳宏 | (31歳) | 会計。 |
| 隊　員 | 平野真市 | (26歳) | 装備、輸送。 |
| 〃 | 尾高剛夫 | (24歳) | 食糧。 |
| 〃 | 小林正尚 | (23歳) | 庶務、気象。 |
| 〃 | 植村直己 | (23歳) | 輸送。 |
| 〃 | 入沢　勝 | (22歳) | 記録。 |
| 〃 | 長尾悌夫 | (35歳) | 医師。 |
| サーダー | アン・ダワI | (35歳) | |
| コック | ダワ・テンバ | (31歳) | |
| シェルパ | ミンマ・ツェリン | (30歳) | |
| 〃 | ドルヂェ・シェルバ | (28歳) | |
| 〃 | ペンバ・テンジン | (30歳) | |
| 〃 | ダキヤ・シェルバ | (23歳) | |

隊員中、長尾ドクターは慈恵医科大学山岳部OB、日本山岳会々員で、特に日本山岳会を通じてお願いして参加していただいた。他は明治大学山岳部のOBと学生である。植村はシャモニーから現地参加の後、再びカトマンズからシャモニーへ武者修業に戻っていった。

**(著者註)**

ゴジュンバ・カンは、ゴ(トップ、頭)ジュン(正しくはズン、三つの意)バ(在る、即ち山を意味する)、ということで三つの頭をもった山の意味を示し、私達がチョー・オユウII峰と呼んでいた、無名峰とギャチュン・カンにはさまれた山塊を呼ぶ名であり、ゴジュンバのバですでに山の意味をあらわしているから、ギャチュン・カンのように、カンという「山」の意味をつけなくてもよいのだと云う。

これはその場に居たシェルパやポーター達の一致した意見だった。

従って長野岳連のギャチュン・カン隊が私達に教示されたように、チョー・オユウから向って右側へ二つ目のピークがゴジュンバであるという説が正しかったのだが、当時チョウ・オユーのすぐ右隣のピーク即ちチョー・オユウII峰と呼んでいた無名峰(これは地元民の話では名称はないと云う。なおチョー・オユウに第何峰と云う名を強いてつけるならばそれは主峰から西側のナンバ・ラへ向ってつけるべきであると云うのが地元民たちの意見でもあった。)をゴジュンバと呼んだために、その後のギャチュン・カン隊の記録も又、明大隊の記録に改め直してしまったようである。混乱と御迷惑をおかけしたことをここで深くお詫びする。

従って望月氏が会報二五三号に、この山の位置、高さと、名称について懇切な御意見をよせられているが、私達の検討の結果、標高は現在のところ七六四六メートルをとるのが妥当であるが、山名についてはやはり従来のゴジュンバ・カンがよいと思う。大体この周辺においては山名に「リ」をつける習慣は全く見られない。

そのような記述をしているマウンテンワールドの記事は必ずしも正しくないと思うのである。私は山の位置の正確を期するため、その後インド隊に参加していたシェルパ達やクムジュン、ナムチエの住民たちからも充分な言質を得たつもりであるから、むしろ長野岳連隊、明大隊と、二年続けてこのゴジュンバの氷河の奥に入って、当地の多勢の地元民の説によって裏づけられた、山の名とその位置こそ、ソロクンブ地方のシェルパのローカルネームとしての正しさを証明する以外の何物でもないと確信する。

# ローツェ・シャール　一九六五年

吉川尚郎

ヒマラヤのジャイアンツに登山隊を送ることは、早稲田大学山岳部の宿願であった。日本人の八〇〇〇メートル登頂記録は、マナスル（八一二五メートル、一九五六年）のみであるが、ヒマルチュリ（七八六四メートル、一九六〇年）、ギャチュン・カン（七九二二メートル、一九六四年）の成功が、ジャイアンツへの道をますます身近なものと感じさせた。しかし、山岳部自体は一九五八年、六一年と遭難があいつぎ、一時は休部という暗い年月を経験しなければならなかった。この暗さを拭い去るため、一方では地道な研究と反省が、他方ではヒマラヤへの土台作りが、若いOBを中心として進められた。

一九六二年のペルー・アンデス、コルディエラ・ブランカ登山は、それ自体独立した意義を持つ登山であったが、ヒマラヤン・ジャイアンツへのワン・ステップという意味も含んでいた（「山岳」第五八年参照）。ペルー・アンデス登山隊はOB五人とカメラマン一人で、ネバド・アルパマヨ（六一二〇メートル）を始め、四つの五～六〇〇〇メートル峰に登頂した。氷雪技術、氷河の経験は、ヒマラヤにつながる貴重な収穫であった。

ヒマラヤで、私たちが最初に目標としたのはカンチェンジュンガ（八五八五メートル）であった。バウアーの選んだ東

北稜から登ることにし、紙上計画をほぼ完全なまでに進めた。しかし、シッキムへの入国問題が、折りしも悪化した中印国境紛争で行き詰まり、暫くは好転する見込みがないため、計画は放棄せざるを得なくなった。

これに代わる目標として選んだのが、ローツェ・シャール（八三八三メートル）である。ローツェ・シャールはローツェ（八五〇一メートル）の東に、峰つづきに位置する未踏峰である。高さでは世界第九位、未踏峰ではカンチェンジュンガ西峰などに次いで、第四位にランクされている。イムジャ氷河、つまり南からのルートが注目され、最近この近くを訪れた登山隊の記録に、二、三、登頂の可能性が論じられている。一九六〇年、ニュージーランドのノーマン・ハーディーらが初めて試登し、東南稜を六六〇〇メートル付近まで登ったが、雪崩の危険が大きく途中から引き返した。「難しいが非常に魅力ある山」と紹介してくれた。

一九六四年春から本格的な準備を開始し、酸素ボンベなどを発注しているところに、日本山岳会東海支部との入山競願問題が起った。手続きや連絡の手違いで、同じ時期のローツェ・シャールに日本の二つのパーティーが登山を申請していた——。詳しい事情は省くが、私たちにネパールの登山許可がおりたのは十月初旬で、出発の予定日までわずか数ヵ月しかなかった。資金集めや荷物の発送には随分と苦労した。

隊員は、昭和二十九年以降に卒業した、いわゆる若手ＯＢを対象に希望者を募り、この中から九人。これに現役の学生二人を加えて次のように決まった。隊長は、一部にもっと年長の人をという意見もあったが、登頂能力のある若い者の方がいいとの観点から、ペルー・アンデス隊に続いて吉川が指名された。医師は日本大学医学部山岳部のＯＢである。

隊長　吉川尚郎（30歳）　アサヒ・テレビニュース社。
副隊長　松浦輝夫（30歳）　松浦材木店。
隊員　井口昌彦（28歳）　渉外、竹中工務店。

〃　浜野吉生（26歳）渉外、大学院学生。
〃　鏑木昇（27歳）会計、日産自動車販売。
〃　成川隆顕（27歳）輸送、記録、無職。
〃　村井葵（27歳）器具、高島。
〃　佐藤辰雄（25歳）食糧、八王子自動車教習所。
〃　山本聖二（25歳）器具、理工学部学生。
〃　白鳥健二（25歳）燃料、理工学部学生。
医師　宮本周三（42歳）那智勝浦、宮本医院。

（吉川、井口、浜野、鏑木、村井はペルー・アンデス隊に参加した。）

## ベース・キャンプへ

一月二十七日、先発の成川、二月八日、吉川、井口、山本、同十五日に本隊が各々空路カルカッタへ出発、十七日、カトマンズに全員集合した。シェルパは十四人、うちダージリン・シェルパは六人である（※印）。他にキッチン・ボーイ二人、メール・ランナー四人を雇った。

※パサン・プタールⅢ（30歳）＝サーダー、※ラクパ・ツェリン（39歳）＝コック、アヌルー（45歳）、ラクパ・ゲルブ（27歳）、ニマ・テンジン（28歳）、ダワ・トンデュー（37歳）、ダワ・ノルブ（25歳）、ハクパ・テンジン（25歳）、アン・ドルジェ（33歳）、※カルマ・タカブー（29歳）、※ナワン・ピンジュー（24歳）、※ニマ・トンデュー（42歳）、ラクパ・ノルブ（25歳）、※アン・テンバ（16歳）。最後の三人はローカル・シェルパ。アヌルーの代わりに長男のカッツェリン（26歳）が途中から参加した。リエゾン・オフィサーはH・バクタ・チャベグ氏（34歳）。キッチン・ボーイ、

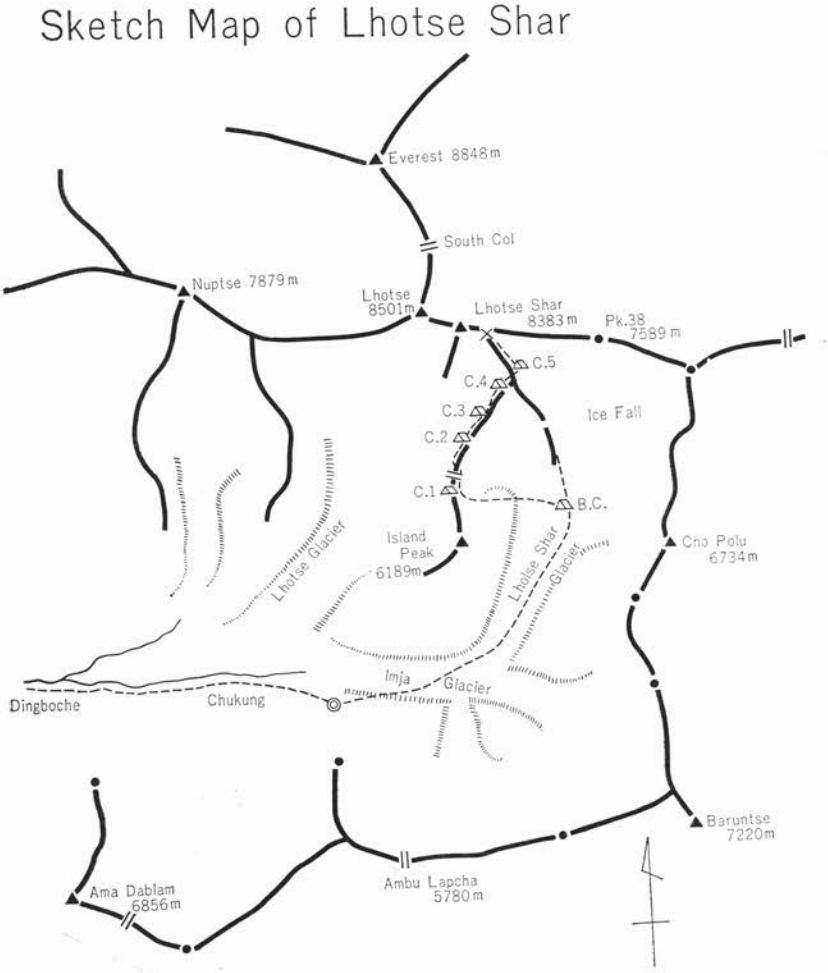
メール・ランナーのうちタルキヤ（21歳）、ニマ・テンジン（25歳）、ニマ・ノルブ（17歳）、アン・ツェリン（26歳）は低所キャンプでも働いた。シェルパの平均年齢は三〇歳である。

二月二十日、カトマンズ発、トラック三台とジープ二台でバネパまで行く。ポーター二四〇人はバネパ集合。ポーター集めはヒマラヤン・ソサィエティーが請け負ったが初日五〇人が不足。五〇人は建設中のコダリー道路（カトマンズ、コダリー間）をトラックで乗り入れ、二日目に追いついた。

キャラバンは連日の晴天に恵まれ順調に進んだ。一人平均三〇キロ、食糧、器具、燃料、酸素ボンベ、個人装備を合わせ総重量で約八トンである。ドラルガート（二十二日）～リシンゴ（二十四日）～ジュンベシ（三月三日）～カリコーラ（五日）とキャンプを重ね、ナムチェ・バザール（三八〇〇メートル）に三月八日到着した。インドのエベレスト隊が千人のポーターを連れて、ジャイナガールから同じナムチェに、一週間遅れでキャラバンしていたため、ポーターの入れ替えが難しく、現地食糧も値段が上がっていた。ナムチェで一日休養。ここでポーターを高地に慣れているシェルパ族に組替えし九日出発。チャンボチェ（十日）～ディンボチェ（十一日）～チュクン（十二日）～標高五一〇〇メートル（十三日）に各々キャンプして、十四日、ローツェ・シャール氷河（イースト・ローツェ氷河）の五三五〇メートル付近にベース・キャンプを設営した。

## 偵察・登攀開始

三月十五日から十七日までは、休養を兼ねてベース・キャンプの整理。十八日から偵察を始めた。ハーディーの意見やギャチュン・カン隊の話を総合すると、まず考えられるルートは、ローツェ・シャールの頂上から東南へ延びている尾根ということであった。が、ここはアイスフォールの状態がかなり悪く、雪崩の危険も多いため、最初からルートと決めてかかるわけにいかない。そこで高度馴化をしながら、次の三つのルートを探ってみることにした。Ⓐ前


Sketch Map of Lhotse Shar
Everest 8848m
South Col
Nuptse 7879m
Lhotse 8501m
Lhotse Shar 8383m
Pk.38 7589m
C.5
C.4
C.3
C.2
C.1
B.C.
Ice Fall
Island Peak 6189m
Lhotse Glacier
Lhotse Shar Glacier
Cho Polu 6734m
Imja Glacier
Dingboche
Chukung
Baruntse 7220m
Ama Dablam 6856m
Ambu Lapcha 5780m

述の東南尾根、Ⓑ東南稜の向って左のスノー・エプロンから、七〇〇〇メートル付近で東南稜に抜け出るルート、Ⓒ七二五〇メートル付近から西南のアイランド・ピーク方向に落ちている尾根。

十八日の偵察の結果、Ⓑは傾斜が急すぎるうえ、新雪雪崩が頻発するので不可能とわかる。そこで二十一日、二十二日は隊員がⒶⒸの取り付きを交互にトレース、あるいは対岸から観察して比較検討した。東南稜ルートは五八〇〇メートル付近まではやさしいが、以後七〇〇〇メートルまでのアイス・フォール地帯が技術的にも難しく、加えて雪崩の危険も大きい。一方西南稜は、尾根の平均傾斜が四十五度に近く、痩せていて技術的にはやさしくないが、ルートは一本であり雪崩から比較的に安全である。距離からいっても頂上への最短コースである。などの点で有利と判断、キャンプを一つ出して、さらに可能性を追ってみることにした。

二十三日、井口、成川、山本、ピンジューの四人が五八〇〇メートルに設けたキャンプにはいった。二十四、五の両日、天狗岩と名づけたコブを乗っ越してルートを拓き、可能性を確認して、正式に西南稜を登攀ルートと決定した。

二十六日、第一キャンプを天狗岩の上、五八五〇メートルに建設。鏑木ら四人がはいって翌日から第二キャンプへのルート工作。他の隊員、シェルパは荷揚げを開始した。隊員は、キャラバン中ポーターが持ちこんだインフルエンザで三、四人が調子を崩し、三月中はコンディションの調整に苦しんだ。シェルパも同様。

西南稜は、ベース・キャンプのあるローツェ・シャール氷河と、ローツェ氷河とを分ける尾根である。アイランド・ピークとは尾根続きで、天狗岩から五〇メートルほど下ったところが最低コル。東にチョー・ポル、マカルー、西にヌプツェの長い頂稜を見ながらの登攀である。最低コルから少し上ったところにセラック地帯があるが、ほとんどリッジ通しで、ルートはローツェ氷河側を巻き気味につけていった。風がいつも強く、雪庇はローツェ・シャール氷河側に張り出ている。西南稜の出口、東南稜と合する地点は七二五〇メートル。最低コルからの標高差はおよそ一四

五〇メートルで、直線距離は二・三キロぐらいである。この間に三つのキャンプを作り、東南稜に出てからさらに二つが必要だろう――これが当初の計算であった。

二十九日、鏑木らに代わって吉川、松浦、村井とシェルパ二人が第一キャンプにはいり、ルート工作を続けた。天狗岩の下り、西南稜への取り付きともフィックスド・ロープのべた張りである。第二キャンプ以上に二トン余りの荷揚げをしなければならないので、どんな状態でも往復できるようルート作りを入念に、確実に行なった。鏑木隊、吉川隊によってザイルの固定工作は、わずかずつ進んでいったが、強風と午後になると必ず降ってくる雪のため、二時以降は作業を中断しなければならなかった。四月一日、第二キャンプを予定の六三五〇メートルまで上げるため、六二〇〇メートルに仮の第二キャンプを作って足がかりとし、浜野、村井、シェルパ一人がはいった。

四月三日、予定の高度に第二キャンプを建設した。第一キャンプから七七〇メートルのロープが、手すりのようにつながっている。四日から七日まで、第三キャンプへのルート工作が休みなく続けられた。テント地の上の小さなクレバスを巻き、いくぶん広くなっている雪面に出、スレート状の岩が露出しているリッジを登り、六〇〇メートルのロープを固定して、第三キャンプへの道を拓いた。一日から一週間の天候は「晴のち雪」の日が六日。午前十時ごろまでは晴れているが、やがて曇り、二時ごろに雪となる。雪は八時過ぎまで降って一〇～三〇センチ積もる。風のない翌日はステップが消えて、カッティングのやり直しだった。

第三キャンプ建設は四月八日である。標高六六五〇メートル。急な雪稜をノコギリで切り取り、この日、松浦、井口、ピンジュー、十一日には鏑木がはいった。十五日には吉川、成川、シェルパ三人が松浦ら三人と交代して第四キャンプへのルート作り。第三、第四キャンプ間はローツェ・シャール氷河側に雪庇が張り出しており、最初の四〇〇メートルほどは五〇度を越す急斜面のトラバースである。六八五〇メートル付近まで登ると、大きな雪の斜面が現われる。直登して、またトラバースし、ローツェ氷河最上部のクーロアールに突き当たる手前で岩場を急直登、さらに

急峻な雪稜をトラバースして、コル状の個所に達した。東南稜の側壁が目の前に迫っている。氷の瘠せたリッジを削って第四キャンプ設営。七〇五〇メートルである。インゼルの最上部にテントがまたがっているような格好だ。両側ともスパッと切れ落ちて、右にローツェ氷河、左にベース・キャンプを見下ろす。下からも上からも風が襲う渦巻の中心のような場所であった。第三キャンプからの固定ロープは八〇〇メートル。ロープを固定するため、長さ約六〇センチのスノー・バーを六〇本準備したが、早くも絶対量が不足してきた。（アイス・ハーケン、ロック・ハーケンは各々四〇本で足りた。）

第四キャンプ建設は四月十七日、偵察を開始してからちょうど一ヵ月である。五〇〇〇メートルにおける第一段階の高度馴化は、一週間程度で一応仕上がったが、隊員、シェルパともインフルエンザの影響が尾をひいて、調子がよいとはいえなかった。アヌルーとダワ・ノルブはインフルエンザで家族が死んだため、ベース・キャンプを去っていた。この間、疲労を蓄積させないよう、天候に関係なく最低一週間に一日は休みをとり、疲れがみえたので十三日には全員が休養した。

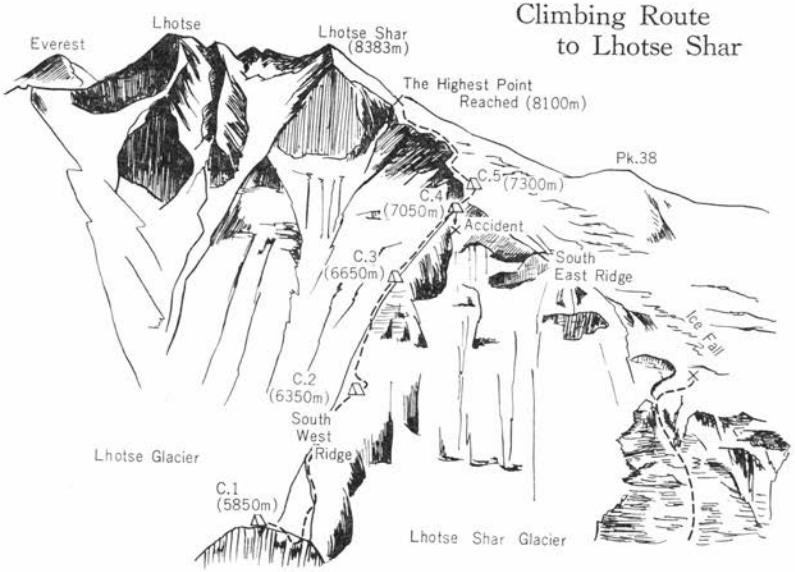
当初私は、第四キャンプが出来たら全員ベース・キャンプに下って休養し、第五、第六キャンプ建設の第二段階に備えようと考えていた。第四キャンプまでは、計画どおり標高差四〇〇メートルごとにキャンプをのばしてきた。七四〇〇メートルに第五キャンプを作ることが出来れば、七八〇〇メートル付近に第六キャンプを上げて、アタックできそうである。が、東南稜に出てからのルートはどうか。地形はほぼ推察がつくが、この目で確かめて先の見通しを得たかった。ベース・キャンプへ戻らず、このまま東南稜に抜け出てみよう。隊長である私が最前進キャンプへ出てきたのは、一日も早く、これらに総合判断を下せる位置にいたかったからでもあった。酸素ボンベの荷揚げがうまくいけば、引き続きアタックに持ち込む可能性も生まれるかもしれない。

## 遭難・救出

十八日、第四キャンプの吉川、成川は風の静まるのを待ち、午前十一時、ルート工作に出発した。晴れ、気温零下十五度。テントから三〇メートルほど登ったところで足もとから小さな雪崩が起きた。傾斜三〇度くらい、アイス・バーンの上に積った雪が、幅五メートル、厚さ一五センチくらいの規模でローツェ氷河側に流れる。二人ともピッケルを深くさしてやりすごす。三〇メートルほどで止まった。トップの成川はスノー・バーを打ってロープを固定する。二〇メートル登ってもう一本打つ。成川の腰から八〇メートルくらいロープがのびた。バーンの傾き具合はローツェ氷河側からローツェ・シャール氷河側に変わった。成川は、雪面から頭を出している岩に達し、ハーケンを打つためのリスを捜している。吉川も追いついて、岩に乗ってリス捜しに加わった。（二人はアンザイレンしていなかった。）その時「しまった」という声が聞こえ、成川が雪崩とともにルンゼを落ちていくのが見えた。足もとから出た一条の雪崩であった。午後一時十五分である。

上のスノー・バーは、カラビナを通す穴のところから折れていた。が、下のバーはがっちりしており、垂れているナイロン・ロープには手応えがある。私は急いで第四キャンプに引き返し、成川の落ちたローツェ・シャール氷河側の急な細いルンゼに、ロープを垂らして下った。二つのスラブ状の瀑を越えたところに、意識を失った成川が逆さ吊りになっている。頭を二箇所切っていた。

雪がチラつきだした。岩壁やルンゼからチリ雪崩、小雪崩が発生する危険があるので、吉川はロープで成川を側壁に固定した。ルンゼの傾斜は六〇度を越す。第四キャンプから一二〇～三〇メートル。一人では救出不可能なので直ちに引き返した。一方、第三キャンプの村井とラクパ・ノルブは午後二時、このキャンプに上がってきた。遭難に気づかぬ村井は、天候が悪くなりそうなので、サポートしてきた二人のシェルパを大急ぎで返してしまった。吉川が遭難




地点から上がってきたのは午後三時である。

吉川、村井は、第三キャンプから運んできたテントとシュラフを持って、成川のいるところまで降りた。村井はテントの布地をハーケンで止め、ビバークの準備をした。吉川は現場を離れ、連絡と救出態勢を整えるため第三キャンプへ下った。無線機は成川がサブ・リュックに入れていて亡くなってしまった。村井と一緒に現場に下れと命じたラクパ・ノルブは、恐がってルンゼを降りなかった。マッチなどの小物が届かず二人は寒い夜を過ごした。成川の手足の凍傷は、この夜かなり進行した。

午後七時半、吉川は第三キャンプ到着。佐藤と二人のシェルパが夜のうちに第四キャンプに上がった。第一キャンプの宮本（医師）と松浦、鏑木、ピンジューは第二キャンプに向かい、山本、カルマと合流、十九日早朝、第三キャンプに着いた。宮本は疲労で遅れ松浦、吉川とともに第三キャンプにとどまった。

現場から第四キャンプへの引き揚げ作業は、井口ら隊員七人とパサンらシェルパ十人がかりで、十九日午後二時から始まった。作業は難航し六時間以上を要した。作業に加

わった者のうち十人は、この夜のうちに第三キャンプに下った。宮本は無線で治療を指示した。成川は翌日から少しずつ意識を回復し始めたが、二十一日までは動かせる状態でなかった。二十二日、ハシゴにくくりつけ、収容作業開始。急斜面のトラバースの連続で、体重七〇キロの成川を降ろすのは難しかった。距離で二五〇メートルほどしか進まないのに日が暮れた。途中、吉川はスリップして手に火傷と凍傷を負う。この夜成川と松浦は標高六九五〇メートル付近の雪の斜面にテラスを作り、ビバークした。

二十三日、松浦と浜野ら五隊員、四人のシェルパで成川を大斜面の下（約六八〇〇メートル）まで降ろし、井口、山本が付き添った。遭難当日は、なんとか働いてくれたシェルパは、十人のうち六人が軽い凍傷や高山病などで動かなくなり、じっとしているが、食いぶちを減らすため下のキャンプへ下るのがやっとだった。二十四日、第三キャンプから宮本が上がり成川を診断。足指の凍傷が、手と同様に悪化しているのがわかった。この日は隊員も疲労しきっているので作業中止。二十五日、雪崩を避けてテントを一〇〇メートル下に移動。二十六日、強風停滞。二十七日、強風をついて第三キャンプに収容。そして二十八日、第二キャンプに降ろした。

ベース・キャンプへの収容作業を、さらに続けるべきかどうか、決定を迫られる。続けるとすれば、そのためにあと一週間は費やさねばならないだろう。五月五日頃収容し終わったとして、疲れた隊員に再び頂上を狙うだけの余力があるだろうか。食糧の手持ちは約二十日分。収容のための一週間を引いて、残る二週間のうちに登攀を再開し、アタック、撤収を終わらねばならぬ。東南稜へ抜けるルートだけでも容易でないというのに。時期が遅れれば、それだけモンスーンの影響も受けるだろう。

これは不可能に近い。とすると、登頂への残された唯一の方法は、成川を第二キャンプに留めたまま、態勢を建て直す以外にない。遭難から十日を経て、成川は日増しに元気を回復している、凍傷の症状は固定して悪化することはない、とドクターは判断した。第二キャンプは食糧、燃料とも豊富で、一応安全圏に還ったといえる。成川自身も、

このキャンプで待ちたいという。反対意見がなかったわけではないが、私は登攀再開を強行した。

## 登攀再開

二十九日、松浦と井口は休養のためベース・キャンプに下った。第三キャンプには鏑木が残り、第二キャンプは吉川、村井、山本、宮本、成川、第一キャンプには浜野、白鳥がいた、三十日、シェルパが主体となって各キャンプとも荷揚げを始めた。ところが、第二キャンプで、今度は村井が倒れてしまった。村井は、この日の明け方から発熱して昏睡状態に陥り、意識が混濁していることが、しだいにわかってきた。村井は遭難以来、成川に付き添って休みなく動いている。酸素が希薄な高所で睡眠不足と過労の無理を重ねてきた。その無理がどっと出たのだろう。視神経も冒されているらしく焦点が合わない。これらの症状は、日がたつにつれて顕著になり、悪化していった。

登攀は続けた。五月二日、鏑木らと交代に松浦、井口、佐藤が第三キャンプに上る。三日にはシェルパ四人もはいり、それまでいた二人と合わせてシェルパは六人となる。佐藤ら三人は第四キャンプへ荷揚げ。高所キャンプで動けるシェルパは、ピンジュー、ニマ・テンジン、ハクパ・テンジン、ラクパ・ノルブ、カッツェリン、カルマの六人に限られてきた。五日、第四キャンプを再建、松浦、井口、ニマ・テンジンがはいった。四月十七日、最初にキャンプを作ってから十八日ぶりである。この十八日間で、成川、村井、吉川が戦列から去り、宮本と病人に付ききりの隊員一人も登攀からはずれた。動いている隊員は六人である。

日数の余裕はあといくらもないというのに、第四キャンプは六日から十一日までを無為に過ごした。雪と強風で上方へのルートが閉ざされたからである。最初の三日間は、風雪の合い間を縫ってロープを固定しようと努力した。しかし続く三日は、気狂い風からテントを守るのが精いっぱいであった。ニマ・テンジンは十日、身体の具合が悪いことを理由に下るといい出し、制止もきかず風の中に飛び出していった。優秀と折り紙つきの若いシェルパだった

が、風の恐怖に耐えきれなかったのだろうか。テンジンは「事故が起きても隊とは何の関係もありません」と覚え書きを残して下った。（ベース・キャンプで解雇。）

十二日、まともに行動できる日が一週間ぶりにやってきた。二人は五時間を費やし、あと少しで東南稜へ抜ける地点まで登った。この日、ピンジューが第四キャンプに入り、アタック隊は松浦、井口、ピンジューの三人と決まった。アタックの最終期限は十五日。アタックが出来ないまでも、せめて東南稜へ出て頂上への見通しを得たいと思った。第六キャンプを作る希望は、気狂い風が荒れた一週間で吹きとんでしまっていた。

第三キャンプ以下では比較的に風が弱く、上のキャンプの支援態勢を十二日までに完了した。十三日、第三キャンプから山本、カルマ、ハクパ・テンジン、カッツェリンの四人が第四キャンプに入り、第四キャンプの井口、ピンジューは待望の東南稜に出て、七五〇〇メートル付近まで登った。

十四日、晴れのち風雪。松浦ら三人は山本らのサポートで第五キャンプを建設した。七三〇〇メートル。酸素ボンベは最小限の六本。午前八時出発、二〇キロの荷を背負って午後四時、キャンプ地着。午後七時の交信で松浦は「第五キャンプは唯今快晴。無風。満月。月あかりを利して明朝二時、アタックに向かう」と連絡してきた。第五キャンプから頂上までの標高差は一一〇〇メートル。成川の救出に全力を尽くし、自力で第五キャンプへの道を拓かねばならなかった三人である。どこまでやれるだろう。「健闘を祈る」と励ました。

## アタック・撤収（松浦の記録から）

眼が覚めたのは真夜中の十一時十分。寝袋の中でウトウトしたのは二時間足らずだった。井口らを起こして炊事を始める。食糧不足を補うため、ナムチェから揚げてきたツァンパに、残りものの焼飯を暖めて腹ごしらえした。凍っている酸素補給器のレギュレーターを丁寧に乾かす。携帯品はアンザイレン用の四〇メートルのロープと補助ロープ

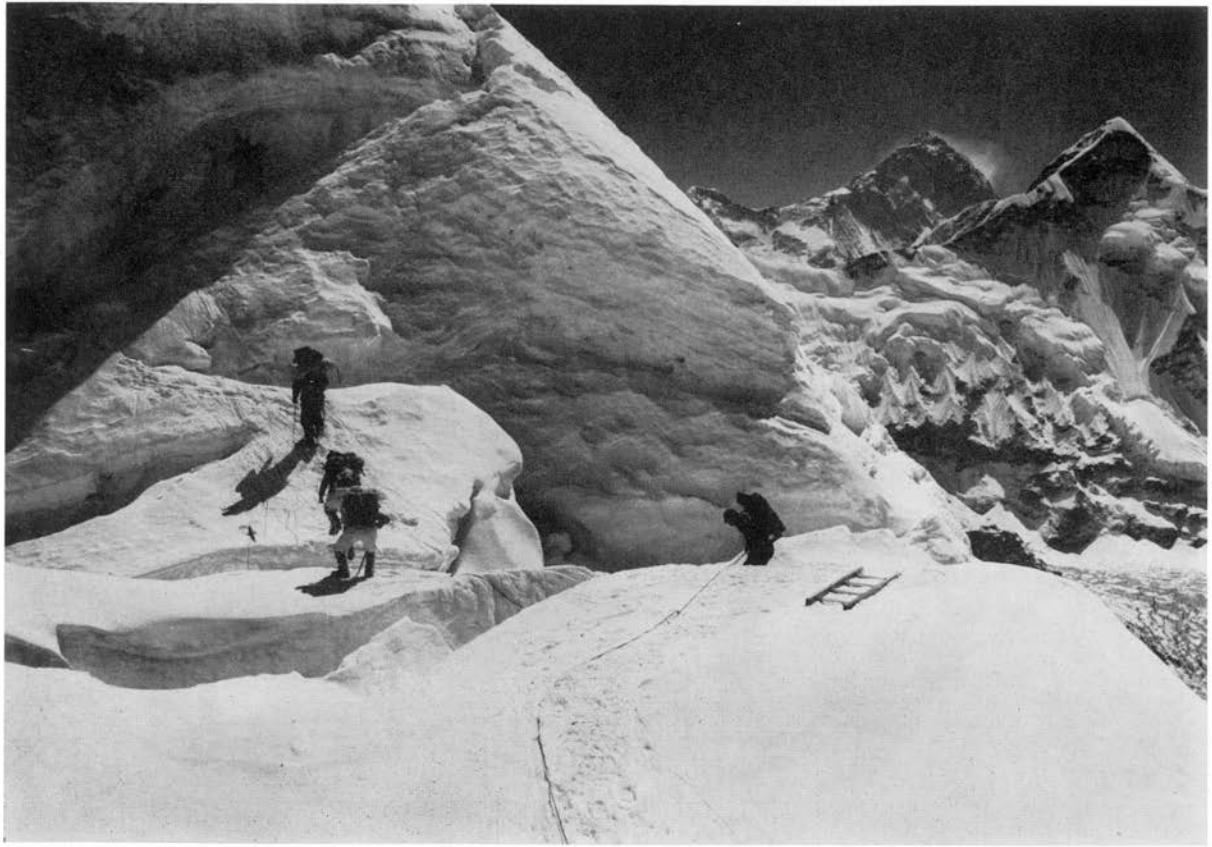
が各一本、アイス・ハーケン、ロック・ハーケン、カラビナ各五個、ハンマー一本（以上器具）、ビスケット、蜂蜜、乾燥肉、羊羹、テルモスの紅茶（以上食糧）、他にシネ・カメラ一台、カメラ二台である。酸素ボンベは、昨日のうちに一〇〇メートルほど上にデポしておいたのを、一人二本ずつ背負う。ボンベ一本は重量五・六キロ、四リットル入り、二三〇気圧（フランス製）。一分間に三リットル放出して約五時間使用できる。荷物は一人当たり一八～二〇キロとなった。

十五日午前二時、井口、松浦、ピンジューの順でロープを結び、第五キャンプを出発。零下二八度。無風状態は続いているが寒気は身体につきささる。月あかりで懐中電燈を使う必要は全くない。雪はクラストしてアイゼンが小気味よくきく。緊張しているせいか、睡眠不足や身体のだるさは感じないが、呼吸がひどく苦しい。頂上まで一一〇〇メートル。ルートが易さしければ、一時間一〇〇メートルのピッチで高度が稼げるだろう。全てがスムーズにいっても帰るまでに十五～十八時間。だから全コース酸素を吸うことは許されない。手持ちは毎分三リットルとして十時間、二リットルで十五時間しかないのだ。

尾根の傾斜は西南稜に比べればずっと緩く、幅も広い。アイス・バーンに雪がかぶさっている場所を過ぎ、スレート状の岩が露出しているところを登る。氷が薄く張りついていて神経を使う。月が傾き、東の空がしだいに明るくなってきた。五時前、七五〇〇メートルの地点で、たまりかねて酸素マスクをつけ、毎分二リットルに調節した。「シュー」とゴム管を伝わってくる酸素のありがたさ。呼吸がとたんにラクになった。身体を締めつけていた荷物が軽く感じられる。それまでは、硬い雪面にステップを刻み、岩にハーケンを打つたびに、ピッケルや岩にもたれて休んでいたが、いまはその必要もない。

六時過ぎ、目ざす頂上が初めてみえた。うんざりするほど遠くに、特徴のある三角頭巾のような頂上がある。出発してから一度も休憩していないことに気づいて、雪の上にドカッと腰をおろす。バルンツェ、チャムラン、アマ・ダ





第1，第2キャンプ間のクレバス地帯，右はチョー・ポル，後方はマカルー。
Crevasse zone between Camps 1 and 2. Cho Polu (6734m) (right) and Makalu (8470m) in the background.

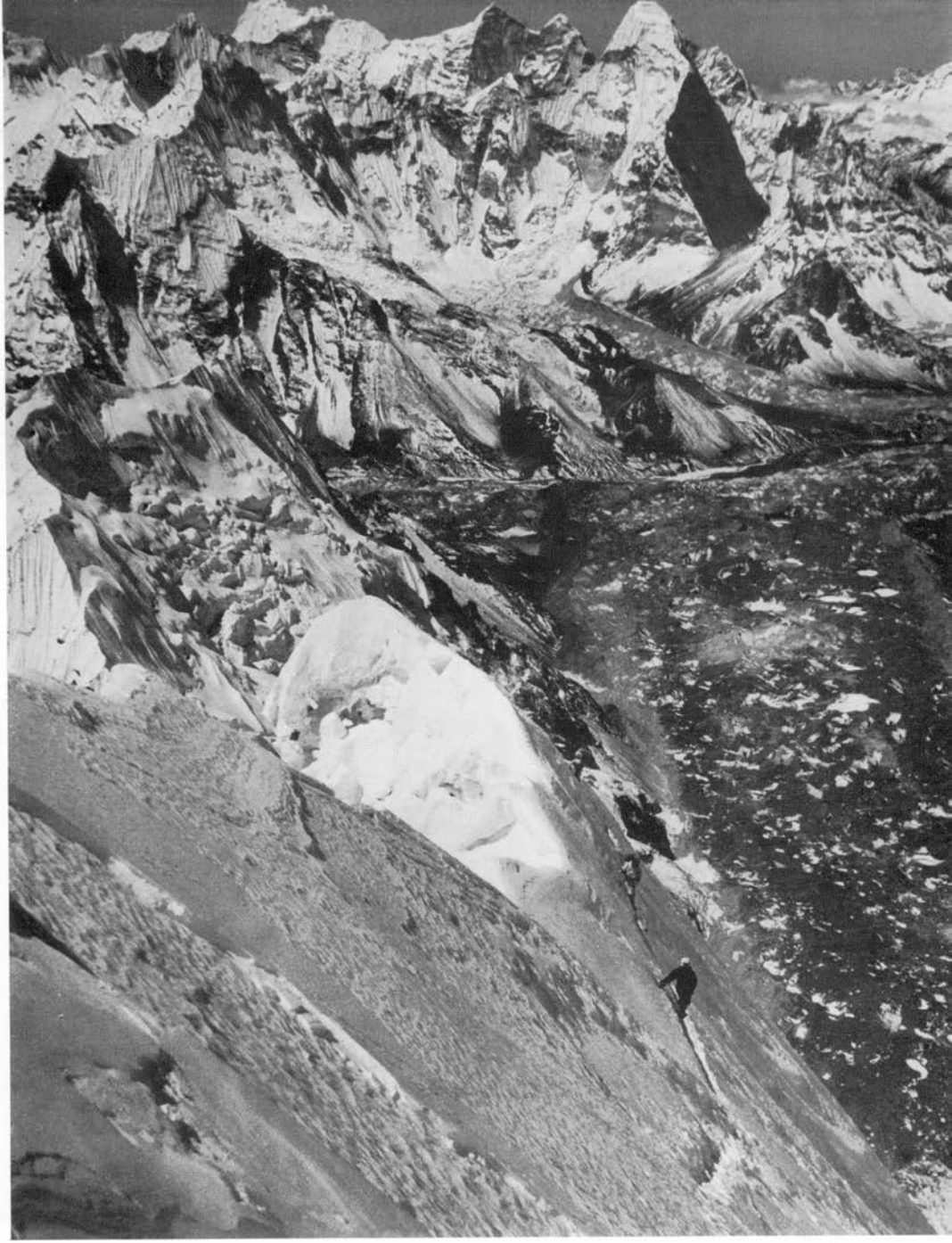
ローツェ・シャール西南稜，第1キャンプより
The South-west ridge of Lhotse Shar (8501m) seen from Camp 1.






Ⓐローツェ・シャール頂上　Summit of Lhotse Shar.　Ⓑ最高到達地点　The highest point reached
Ⓒ第5キャンプ　Camp 5.　Ⓓ遭難発生地点　The point accident occured.　Ⓔ第4キャンプ　Camp 4

左からローツェ，ローツェ・シャール，Pk.38を望む
Lhotse (8501m) (left), Lhotse Shar (8383m) (center) and Peak 38 (7589m) (right).

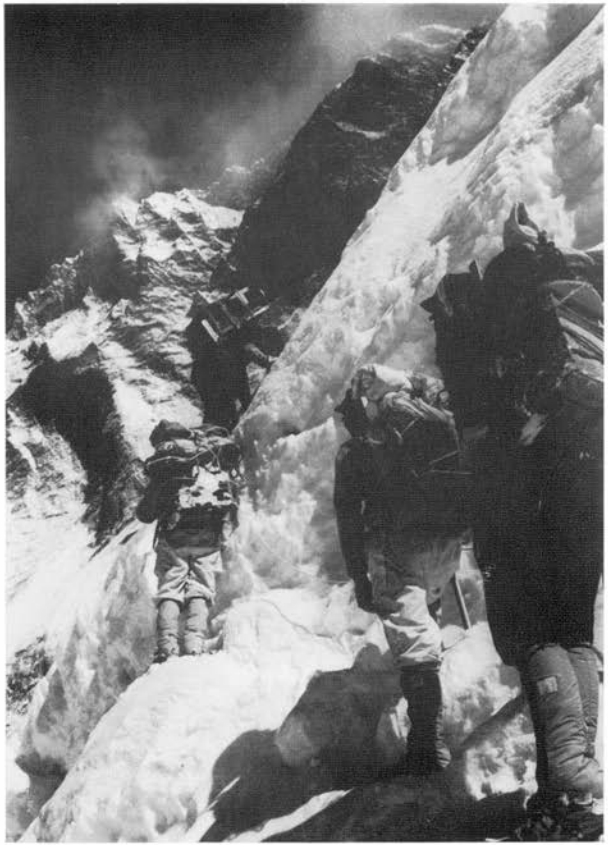


第3，第4キャンプ間は急峻なトラバースの連続。下方はローツェ氷河。彼方にアマ・ダブラムが見える。

Steep traverse continued between Camps 3 and 4. Lhotse Glacier far below and Ama Dablam (6856m) in the background.



第3キャンプへのルート．第1キャンプから望遠レンズで撮影
Climbing route to Camp 3. (by telephoto from Camp 1)



ローツェ・シャール西南稜を登る（6000m付近）。
Climbing up the South-west ridge of Lhotse Shar (c.6000m)

ブラムは目の下になった。ここより高いのは、見える限りマカルー（八四七〇メートル）とローツェ・シャールの頂上だけだ。休憩を短かく切り上げ、「さあ天気の崩れないうちに」と二人を促す。青氷があるかと思うと、適度にクラストした雪があり、スレート状の岩場に変わる。ただ足もとだけを見つめて登る。

八時三十分。盛りあがった斜面で隠されていた頂上が再び現われた。錯覚ではないかと疑ったほど至近距離に見える。頂上の東側に大きな雪庇が張り出している。頂上へのスロープはネパール側に少し傾いている。傾斜は三〇度くらい。技術的に難しい場所はなさそうだ。あと五〇〇メートル。これまでのペースからみて、五時間あれば頂上へ登れるかもしれない。

ピンジューがトップになり、ステップを切って登る。好調のようだ。その彼が突然立ちどまり、前方をのぞきこむような格好をする。「どうしたんだ。」ふり返ったピンジューが手を大きく左右に振った。ゆくてを遮ったのは大きなギャップである。青氷の壁が一〇〇メートルくらい落ち込み、向かい側には急な岩壁が二〇〇メートル立ちはだかっている。このギャップの存在は資料写真でも指摘されたし、ベース・キャンプからも望見できた。が、雪か氷の斜面がゆるい起伏を作っている程度にしか考えていなかった。勿論、十分な装備で時間をかければ突破できるだろう。あとは、たんたんとした雪面を登って、雪庇をうまく処理すれば頂上へ行ける。しかし、たった一本のロープと少ないハーケン類で、この大きなギャップを通過することは不可能に思えた。私たちが居る場所は、北から南へ抉られたギャップの南のはずれで、北の国境稜線へ向かえば、ギャップは幾分浅く、緩やかになっている。そこからも当然頂上へのルートは続いているが、余りに長すぎる、と私は判断した。雲が湧いてきた。午後は雪に変わるいつもの空模様である。

引き返さなければいけない。体力的には幾らか余裕があるが、今日のうちに登って帰り着けないとすれば帰ねばならぬ。坐りこんでいる井口に声をかけ、後日のためにもう一度頂上までのルートを頭にたたきこんで、三人は引き

返す。午前十時であった。遭難以後の苦しい日々が後髪をひいたが、「ともかく、やれるだけのことはやった」という満足感が、私にはあった。最高到達点は八一〇〇メートル前後である。（高度計は誤差が大きくて使いものにならなかった。）第五キャンプに帰ったのは午後二時。ちょうど上ってきた山本たちとキャンプを撤収し、雪の降る中を第四キャンプに向かった。

十六日、第四キャンプ、十七日、第三キャンプを各々撤収した。十六日のうちに第二キャンプまで下っていた松浦らは、十七日、八人がかりで成川を第一キャンプの途中まで降ろし、十九日、ベース・キャンプに収容した。成川は足の指全部と両手の第二関節から先を切断することになろう。村井は発病後高熱が一週間以上続き、食欲も極度に減退して衰弱がひどかった。意識も正常に戻らないので五月十日、シェルパに背負われてベース・キャンプに下り、手当を受けていた。

ベース・キャンプ撤収は五月二十三日。私たちは七〇日間ここにいたわけである。二十五日、ナムチェ・バザール着。二十八日、病人二人と吉川ら六人はルクラ飛行場へ。二十九日と六月三日の二回に分かれ、ヘリコプターでカトマンズ着。鏑木らキャラバン組も六月六日、カトマンズに到着した。

**追補**　村井の意識はカトマンズに帰るころには、ほとんど正常となった。眼は、帰国後手当てしているが、十ヵ月後もいくらか乱視で、疲れやすいといっている。

# キンヤン・キッシュ　一九六五年

鹿野勝彦

## はじめに

東京大学運動会スキー山岳部と、そのOBのクラブである東大山の会は、一九六二年にカラコルム地方バルトロ氷河流域のバルトロ・カンリ（七三一二メートル）に遠征隊を送り、その初登頂に成功した（「山岳」第五九年参照）。これに引続き、私達はカラコルム地方に第二回目の遠征を計画し、一九六四年三月、パキスタン政府に登山許可の申請を行った。当初の第一目標はバツーラ山群の主峰、バツーラ・ムスターグであったが、同年十二月末パキスタン政府から、第二候補としてあったヒスパー氷河北岸のキンヤン・キッシュ（七八五二メートル）の登山許可が通達された。

この山には一九六二年、ミルズ少佐の率いる英国パキスタン合同隊が、はじめて本格的な攻撃を行っているが、約六〇〇〇メートル付近で二名の犠牲者を出して退却している。私達の入手したわずかばかりの資料からも、非常に困難な、しかもスケールの大きい山であることが察せられた。

隊の編成は次の一四名であり、現地参加の二名以外は皆山岳部のOBである。

隊長　白木博次　（47歳）（医学部教授、スキー山岳部長）
副隊長　石川信義　（34〃）（医師）
隊員　伊藤邦幸　（34〃）（記録）
〃　下石坂勝至　（28〃）（装備）
〃　関章司　（29〃）（庶務）
〃　阿部圭　（27〃）（気象）
〃　中村岳生　（25〃）（庶務）
〃　西谷隆亘　（26〃）（装備）
〃　村上啓介　（26〃）（会計）
〃　牧野内昭武　（24〃）（写真）
〃　鹿野勝彦　（22〃）（食糧）
〃　井上邦昭　（24〃）（装備）
〃　小倉寛太郎　（34〃）現地参加
〃　モハメッド・アシフ　（20〃）現地参加

隊長は学会のため、七月初旬には現地を去らなければならないことになっていたため、登山の実質的な指揮は、石川副隊長がとることになっていた。

五月一〇日、第一陣の四名が全装備と共に横浜を出発した。ところが、その一週間後、突如「印パ国境緊張のため」パ政府から登山許可取消の通告が入った。ただちに石川、村上が、少し遅れて白木隊長がパキスタンに飛び、現地参加の小倉と共に現地での交渉が開始された。幸い各方面の好意ある計らいにより、再許可を得ることができたが、こ

の間に費された約半月の遅れは、最後まで私達の隊についてまわったようである。

六月一一日、ラワルピンディに全員が集結した。ここからギルギットへは、なだたるナンガ・パルバットごえの飛行機輸送である。唯でさえ遅れている私達の隊は、全装備の輸送が終るのを待たず、最少限の装備と共に偵察隊を先行させる方法をとった。英パ隊のたどった南稜以外に、可能性のあるルートがみつかるかもしれない。本隊キャラバンが到着するまでに登路を決定し、ベースの位置を定めておかねばならない。いささか慌ただしいが止むをえない。一三日には第一陣がギルギットに飛び、一五日には第一便の六台のジープが、ナガールにむけて出発した。一七日には偵察隊石川以下五名がナガールに集結した。

## ベース・キャンプへ

一八日、石川副隊長以下五名の偵察隊は、三〇名のポーターと共にナガールを出発した。当初、私達はできれば英国隊のたどった南稜以外のルートを、とりたいと考えていた。南稜をとるとすれば、BCから頂上までの高度差は四〇〇〇メートルをこえる。しかも途中のピークの登降は、かなり困難なものと考えられた。シャクスガム側の北面は問題外であり、東面、すなわちプマリ・キッシュ氷河側も、英パ隊の偵察の結果まず可能性はない、と考えられる。とすれば残る可能性は西面、すなわちキンヤン氷河側である。偵察の主目的は、この側面におかれた。四日目、二一日にはキンヤン氷河に入り、それから五日間に亘りキンヤン・キッシュ西面、西北面を偵察した結果は、次の通りであった。まず西面の側壁にとりつくルートは全く考えられない。またキンヤン氷河をつめ、ディスタギル・サールとキンヤン・キッシュのコルへ上り、北稜をとるルートは、技術的には可能であるが、途中七一〇八メートルの独立峰を越さねばならず、唯でさえ遅れている私達の隊にとって、登頂ルートとしての可能性はあまりに小さい。これに比べれば南稜は登降も多く、難かしいルートではあるが、長大とはいっても北稜に比べればはるかに短かい。登るつも

りなら、これをやる以外にない。特に困難にみえる部分はむしろ下半であり、ここはとにかく英パ隊がトレースしているはずだ。よし、南稜をやろう、偵察隊の意見は一致した。

白木隊長以下本隊九名がナガールに集結したのは六月二二日、ハイポーターの選定、ローカルポーターの編成と荷物の計量、配分、キャラバン用食糧の分配など、やるべきことは山程あった。なれない仕事を言葉の通じない群衆を相手に、しかも限られた時間でやらねばならない。二四日、隊員、連絡将校、ポーターなど約二六〇名の大キャラバンが、土ぼこりを巻きあげて動き出した時は、それだけに一種の興奮が私達をとらえた。キャラバンの期間は四日間、短かい日数の間に高度が急激にあがることに加えて、行動のペースがつかめず、ほとんどの隊員は頭痛、発熱、下痢などの症状になやまされた。これに比べると、偵察隊は身軽に動いたためか、かなり好調を保っていたようである。カラコルム名物のストライキは、BC直前で、賃上げ要求の坐りこみとなって現われたが、連絡将校の説得と若干のチップで事無きを得た。かくして六月二七日、偵察隊は本隊に合流、正午キンヤン・キッシュ南稜末端、高度約三八〇〇メートルのベース・キャンプ建設地点に到着した。正面にヒスパー氷河をはさんで、ヒスパー・ウォールの峻峰マクロン・キッシュを望む快適な草原である。五月一〇日、第一陣が横浜を出発して以来四七日目であった。

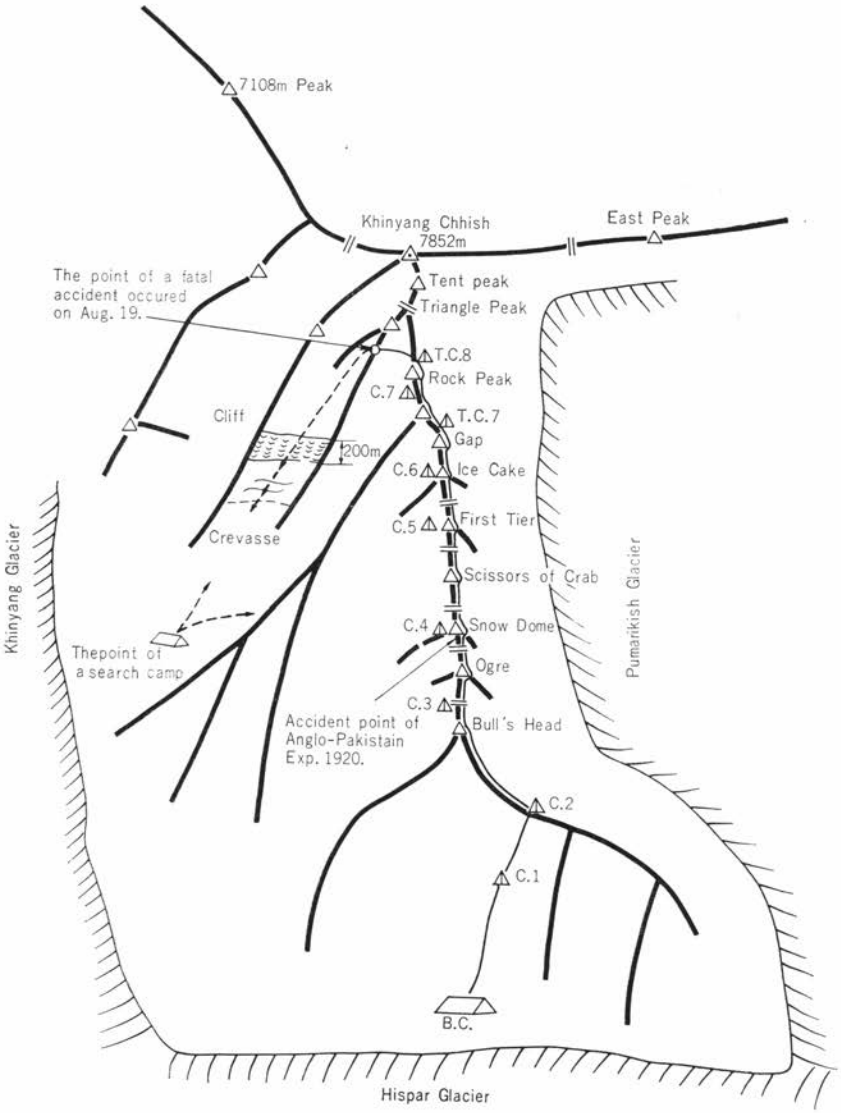
## 登攀開始

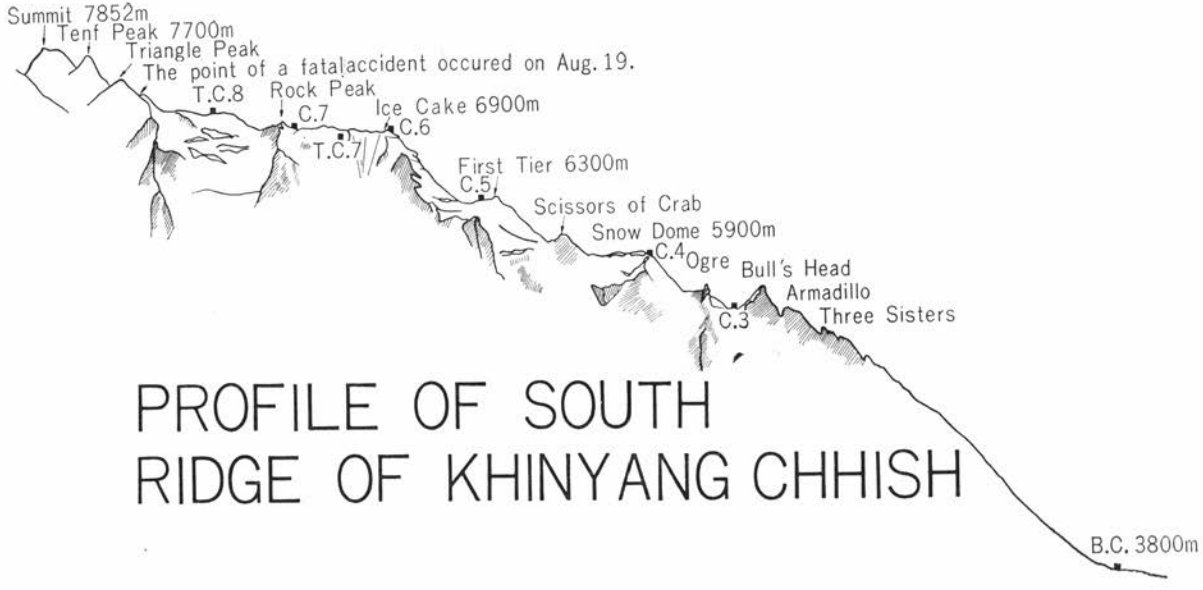
ベース・キャンプ到着後、一息入れる間もなく行動が開始された。キャンプの整備と登攀の準備で、あたりは活気をおびた。複雑な隊の行動計画の検討も重要な仕事である。第一回のバルトロ隊に引き続いて持参した長期予報によれば、七月下旬に激しい風雪が訪れることになっている。この前にアタックのチャンスをつかもう。計画は必然的にかなりスピーディな行動を要求する。BC到着の翌二八日には、早くも二五人の特選隊人夫によるCIへの荷上げが開始された。高度差一〇〇〇メートルのガラガラの尾根を、ひたむきに登りつめた所が、涸沢の底を思わせるような

CI予定地である。ここまでのルートは安全なため、一般人夫から選んだ特選隊により、五日間ですべての荷上げを行った。隊員の多くは疲労がぬけきれないためか、はじめて経験する高度のためか、依然として調子がもどらず、むくみ、不眠、頭痛、発熱などになやまされていた。

白木隊長、小倉は七月三日、帰国の途につき、石川副隊長が隊の責任者となった。この日高度約五三〇〇メートルの地点にCⅡが建設され、三名の隊員がここに入った。ここで、はじめて私達のたどろうとする南稜が、眼前に迫ってくる。「ブルズ・ヘッド」、「オーガ」、「アイスケーキ」、「テント・ピーク」、英パ隊の名づけたピークが、次々と折り重なるようにそそりたって、真に威圧的である。CⅡからプマリ・キッシュ氷河側は、すっぱりと垂直に一〇〇〇メートル以上も切れおちて、高度感満点というところだ。尾根をルートに選んだ以上、次々と出てくるピークを、一つ一つ正直に越えてゆくより仕方がない。しかも全体的に登降が激しく、また痩せた部分が多いので、キャンプ・サイトはごく制約されてしまう。前進キャンプは当初七箇を予定していた。だが、CⅦまでですむだろうか。それに七月中のアタックは、時間的に可能だろうか。だが、とにかくやってみよう。

南稜が本格的に困難さを発揮するのは、「ブルズ・ヘッド」の下りからである。「オーガ」とのコルへは、雪もほとんどつかないような、高度差約二〇〇メートルの岩壁を下降しなければならない。もし、私達がはじめてここを通るのだったら、少なくとも一週間は、ルート工作に要したであろう。だが、実際には英パ隊の打ち残したハーケンやザイルに導かれて、この間の工作は三日で終了した。このルートを開拓した英パ隊のミルズらの技術には、舌を巻く思いであった。しかし、このルートは荷を背負って通るには、あまりに急峻であった。ハイポーターに至っては、空身で通ることもおぼつかなく思われた。そこで、「ブルズ・ヘッド」から「オーガ」とのコルまで、ワイヤーを張り、ケーブル式に荷を吊りおろす輸送方法が採用された。はじめは、荷物が岩角にひっかかったり、はずれてキンヤン氷河の底までふっ飛んでしまったりしたが、軌道にのりだすと、この方法は絶対の威力を発揮した。上下二人ずつで、


7108m Peak
Khinyang Chhish
7852m
East Peak
The point of a fatal accident occured on Aug. 19.
Tent peak
Triangle Peak
T.C.8
Rock Peak
C.7
T.C.7
Gap
C.6
Ice Cake
C.5
First Tier
Scissors of Crab
C.4
Snow Dome
Ogre
C.3
Bull's Head
C.2
C.1
B.C.
Cliff
200m
Crevasse
Thepoint of a search camp
Accident point of Anglo-Pakistain Exp. 1920.
Khinyang Glacier
Pumarikish Glacier
Hispar Glacier




# PROFILE OF SOUTH RIDGE OF KHINYANG CHHISH

一日四〇〇キログラムもの荷物が吊り下ろされた日もあった。

七月一二日、ようやく四人の隊員がCⅢへ入る。高度五三〇〇メートル、CⅡとどちらが高いか、もめた位である。しかし流石にこの頃になると、高度にも大分なれてきたのか、隊員の調子も上をむいてきた。第二の岩峰「オーガ」の偵察が開始される。直登も、キンヤン氷河側のトラバースも、全く見込みはない。結局、ここも英パ隊のハーケンやザイルのあとをたどりながら、プマリ・キッシュ氷河側のトラバースをする以外なかった。しかし、このルートは真東に面しているため、早朝から陽を受ける。そして温度が上りだすと雪がくさり、氷がとけ、岩がゆるみ、危険きわまりない状態になってしまう。ここを安全に通過するには、温度が上るまえに敏速に行動しなければならない。それにしても、ミルズらのルートの選択の見事さには、ここでも頭の下る思いであった。

一五日、六名の隊員がCⅣの建設予定地である「スノー・ドーム」に達した。高度約五九〇〇メートル、ここから先は英パ隊も知らぬ未知の部分である。私達自身によって、ルートを切り開いていかなければならない部分である。しかし、この「スノー・ドーム」から前方へつながる尾根の状態を見て、私達は呆然とした。右に左に複雑に雪庇が張りだした迷路のような尾根の先に、牙のようにそそり立つ岩峰、一体こんな所が通れるのか。それも荷を背負って、何度も往復するなどということができるだろうか。あまりに危険が大きすぎはしないか。翌十六日、CⅢに集結していた一〇人の隊員によって会議がもたれた。皆、確信はなかった。しかし、絶対に通れないという証拠もなかった。それならやってみよう。一歩ずつでも前進してみて、本当に駄目ならそこで引き返せばいい。CⅡからこちらは、一寸の切目もなく固定ザイルが張りめぐらしてある。必要とあれば、これから先もその調子でやればいいのだ。しかしこうなった以上、七月中に登頂の可能性はまず考えられない。長期戦の構えが必要である。七月末に予想される悪天候までに、できるだけ上部の偵察と荷上げを行うと共に、悪天期間は全員CⅣへ下って休養、待機し、悪天終了後直ちに最終攻撃態勢に入る。従ってCⅣは前進ベースという色彩が強くなるため、悪天候前に上部の偵察と並行

して、BCから新たに食糧・燃料を補給する。幸い今のところ天候は安定している。一日も無駄にはできない。

一七日、五人の隊員がCⅣに入った。馬の背のような、テントを一歩出たとたんに、固定ザイルにしがみつきたくなるようなCⅡ、CⅢに比べると、ここは広々とした雪の頂で、別天地の感がある。正面にキンヤン・キッシュの頂上へ続く南稜のピークのつらなりを望み、周囲にはカンジュット・サール、トリヴォール、ラカポシ、さらにマクロン・キッシュをはじめとする、ヒスパー氷河周辺の山々が一望に見渡せる展望台でもある。

一八日から、雪庇の尾根とその先の岩峰へ向けて、一寸刻みの攻撃がはじまった。右に左に張りだした雪庇はあまりに大きく、また複雑で、どこが本当の尾根かわからない。いたる所にあるヒドン・クレバスも、私達をおびやかした。その上、好天続きでどんどん雪がとけてしまうので、ザイルの固定がはなはだ厄介な問題であった。岩峰（私達は「カニノハサミ」と呼んだ）の基部までの、数百メートルの雪庇の尾根のルート工作に、結局三日間を費したことになる。この間にCⅣ以下の荷上げも活発に行なわれた。CⅢからは、朝四時ごろ出発して八時すぎには帰ってくるという、「オーガ」をトラバースしてのCⅣへの荷上げが連日行なわれた。ハイポーターは、この段階では実によく働いたといってよい。二人の隊員はBCへ下り、食糧補給の任にあたっていた。

二二日、ようやく「カニノハサミ」が突破された。あまりの急峻さに、一度は下を捲こうと試みたが、結局リッジ通しに直上し、最後の「ハサミ」のキンヤン氷河側の基部をトラバースするルートが、唯一のものであった。ここさえ越えれば、CVの予定地である「ファースト・ティアー」までは、何でもない斜面の登りと私達は予想していた。しかし、ここにも思わぬ困難が待ち受けていた。うっすらと表面をおおった雪の下は、ピッケルをはねかえす程の堅い氷である。氷になれない私達は、予想以上にここでも手こずり、二三日は「ファースト・ティアー」の下の斜面の、約三分の一あたりに仮のCVを出すに止まった。二四日、CⅣ建設以来一週間ぶりでCVが建設され、三名が入った。高度六三〇〇メートル、「アイスケーキ」の大斜面が眼前におおいかぶさるようである。この斜面が全部氷だ

としたら、えらいことになる。雪であってくれればよいが、と半ば祈るような気持であった。

幸い、氷は中段のクレバスを渡った直後のカベなど、ごく部分的であり、技術的にも、一見して感じた程の困難さはなく、二五日一日で、「アイスケーキ」の最高点までトレースすることができた。これが悪天期前の最高到達点である。この「アイスケーキ」から先のルートについては、下からの偵察ではほとんど予測がつかなかった。今、ここから望む前方の状態は、全く楽観を許さないものである。「アイスケーキ」の頂部をなす稜線は、完全なナイフエッジ状をなし、プマリ・キッシュ氷河側に、顕著な雪庇を張りだしている。この稜線はどうやら「三角山」の斜面に消えているらしい。それなら、どこにルートをとったらいいのか。この解決は、悪天後のCVIからの行動に待たねばなるまい。とにかくCVIは「アイスケーキ」頂上付近と決定された。悪天前の残った日数は、CVI予定地とCIVへの物資の増強にあてられ、全員CIVへ集結の態勢をとった。

## 悪天期間

七月二九日、久々に風雪が訪れた。この日、CVから四人がCIVに下り、CIVに一二人の全隊員が集結した。これまで連日の快晴で、多くの隊員はほとんど一〇日以上も行動を続けており、かなり疲労もしていたが、とにかく悪天期間に入るまでは、とがんばっていた。したがってここで数日の休養をとることは、むしろ望ましいことであった。しかし、数日の予想は見事に外れ、五日たっても、一週間がすぎても、天候は回復しなかった。特に激しい風雪というほどではなかったが、なかなか行動できるまでには到らない。無理に動いて、その後の補給が絶たれれば万事休す、ということになりかねない。停滞一週間目の八月四日、CIIIへの逆ボッカを企てたが、「スノー・ドーム」の雪質が悪く、果さぬまま引き返した。

この間、隊の運行計画は次々と変更を余儀なくされた。「アイスケーキ」の上から観察した結果によれば、最低限

CⅧまでは必要と思われる。天候回復後、アタックを行なって撤収するまでに一五日かかるとすれば、全員が上で行動するだけの食糧の余裕はもはやない。調子の悪い者四人はBCへおろそう。残りの八人で一五日間、やれる所までやろう。これが最終段階で打ち出された計画であった。停滞八日目、九日目は食糧統制をしく破目に陥った。幸か不幸か、高度馴化には完璧なまでに成功していたので、食欲が衰える者はほとんどいない。一日にα米とインスタント・ラーメン半袋ずつでは、只でさえ焦り気味で、いらいらしはじめた隊員が、頭にこないはずはい。それでも口では「早く登ってさっさとかえろうよ」などと、意気軒昂であった。

## 再び上へ

悪天候がはじまってから一〇日目の八月七日、ついに待望の晴天が訪れた。テント・ピークから激しく雪煙がまい上る。士気は上った。この日の行動は「カニノハサミ」手前まで、降雪でうめられた固定ザイルの掘り起しに三名、CⅢへ食糧の補給に五名。はるかに見降すヒスパーの部落は、すでに緑から黄色に変って、すっかり秋のたたずまいである。めっきり日も短かくなった。気温も下った。

八日、全員でCⅤへの荷上げを行ない、八名がそのまま入る。残りの四名はこれで上部での行動は終りとなった。BCへ下る一つの目的に、BCに備えつけてある天気図受像装置によって、今後の天候の予測をつけ、最終的な行動の判断の資料にしようということがあった。長期予報は八月上旬までしか用意していなかった。この試みは、実際には装置が砂塵のためか思うように動かず、期待通りの結果は得られなかった。

九日、「アイスケーキ」の頂部、高度約六九〇〇メートルの地点にCⅥを建設、五名の隊員が入った。前進キャンプが出たのは実に一六日ぶりである。再び一寸刻みの前進がはじまった。痩せた雪庇の尾根、これに続くギャップ、迷路のようなクレバス地帯。相変らず固定ザイルをのばして、少しずつ進むより方法はない。天候は一〇日からまた

崩れはじめた。わずかの晴間をついては、わずかずつの前進が続けられた。下からみると晴れ上った空、そしてキンヤン・キッシュの上部にわずかに雲がまつわりついている、という状態である。しかし、実際その中に入ると、さっぱり視界がきかず、気温が上ると必ず小雪がまいだす。一四日、ようやく雪庇の尾根と、その先のギャップをナワバシゴを使って突破し、仮のCⅦを建設した。この先のルートの状態は複雑きわまるものであった。私達のたどってきた南稜は、「三角山」のプマリ・キッシュ氷河側の側面に消えたようになっており、主峰、「テント・ピーク」、「三角山」へつらなるリッジに達するには、一度西側の盆地へ下り、あらためて「三角山」の東側斜面にとりつき、リッジへ出るしかない。とにかく、このあたりで動くには、視界がきくことが前提条件である。

一五日、CⅦ建設、高度はむしろCⅥより低い位である。日数の余裕は後約一週間、この間にもう一度天候が回復するかどうかが、成否を握る鍵と思われた、一八日、仮のCⅧ建設。これで後二日の好天があれば、アタックという態勢ができ上ったわけだ。ここまでに使用した固定ザイル約三八〇〇メートル、BC到着以来五三日目である。天候は一八日ごろからかなり落ちつきはじめ、バロメーターは高気圧が近づきつつあることを示していた。この期を逃したら登頂のチャンスはない。時期的にも、物量的にも、また体力の限界からいっても、これは最後の機会である。BCの石川は無線で、一九日アタック・キャンプ建設、二〇日にアタックせよ、との指令を出した。上のキャンプの一八日の人員配置は、仮設CⅧに登頂隊員二名、CⅦにサポート隊員三名、CⅤに一名、CⅣに二名、であった。

## 事故・撤収・捜索

中村岳生隊員の事故は、八月一九日午前一一時二〇分に起った。同日、中村ら三名はCⅦを早朝出発、仮CⅧの二名と合流して、「三角山」上部に最終キャンプを建設する予定であった。前日、仮CⅧの二名により、「三角山」東側斜面の稜線直下まで、固定ザイルがとりつけられてあった。この「三角山」の稜線に先頭の中村が到達したのが、午

前十一時ごろである。稜線は両側共約四五度位、登り斜度一五度位で、雪はやや重くラッセルはかなり深かった。稜線直下まで固定ザイルがあったため、稜線上に達した時にはアンザイレンはしていなかった。二番目に稜線についた隊員が、ここでトップをかわり、一〇メートル程ラッセルしたが、すぐ中村が空身でトップにたち、さらに五メートル程前進した時、この二名の足元の雪が、約一〇メートル程の範囲にわたって左側にくずれ、雪崩を誘発、高度にして約二〇〇〇メートル程落下した。一名はこの時、「雪が動いたような気がした」ので反対側の斜面にとびこみ、難をのがれたが、中村はこれに巻きこまれて墜落、行方不明となった。この地点の高度は約七二〇〇メートル、私達の隊の最高到達点である。残りの四名は現場付近に集結したが、この地点からは何も認めることはできず、又ここから下降して捜索することは、全く不可能と思われた。墜落地点のすぐ下が約二〇〇メートルの岩壁となっており、さらにその下には、階段状の氷壁やクレバス地帯がつらなっていて、中村が墜落後生存している可能性は考えられなかった。

ＢＣの石川は、同日正午の交信によって事故発生をしり、上方の隊員に直ちに下山を開始するよう指示すると共に、ＢＣの隊員、ハイポーターによって、キンヤン氷河側から中村の墜落したと思われる沢筋に、捜索キャンプをおいた。

現場の隊員四名は一九日はＣⅦにもどり、二〇日、ＣⅤの一名と合流してＣⅣに下降、二一日、ＣⅣの二名とあわせ、計七名が「スノー・ドーム」と「オーガ」のコルから、キンヤン氷河へ下る沢筋を一気に下降し、夕刻ＢＣに帰着した。

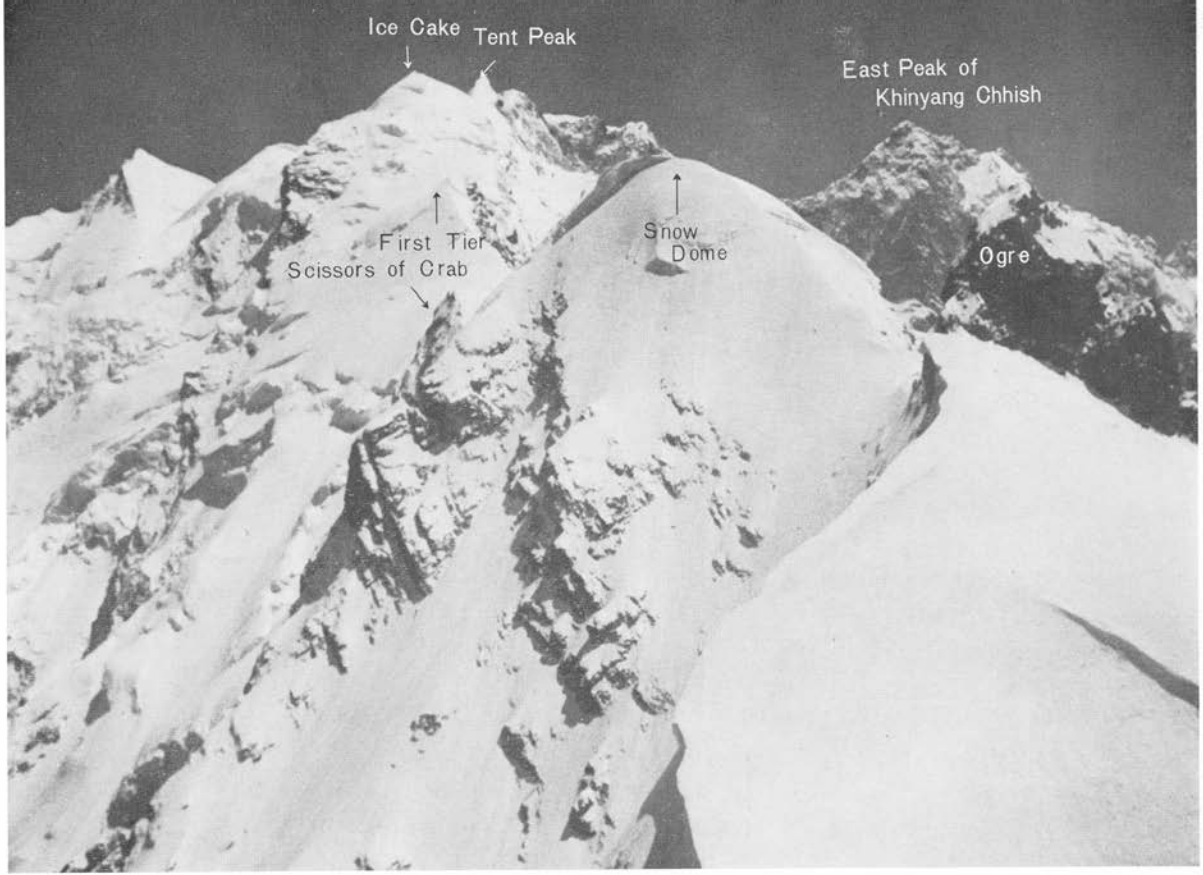
捜索キャンプからは、最初どの沢筋が問題の中村が巻きこまれた雪崩のルートなのか、はっきりつかめなかった。しかも、どこをとってみても、下部にはほとんど垂直に近い約一〇〇〇メートルの岩壁がたちはだかっており、接近は全くできそうにもない。止むをえず捜索はもっぱら、望遠鏡にたよらざるをえなかった。

しかし、二二日から天候は再び悪化した。今度はBC付近まで本格的な降雪に見舞われた。二一日、BCに降りてきた隊員も加わって、二四日迄捜索活動は続けられたが、結局何も発見することができず、二五日捜索キャンプを撤収、BCへ引きあげた。

## 下山

石川他二名は遭難報告と事後処理のため、二二日BCをたち、急遽帰国の途についた。本隊も二七日、BCを撤収、三日のキャラバンでナガールについた。ナガール、ギルギット間のジープの不足は当時一層はなはだしく、輸送の目途はなかなかつかぬまま、九月に入った。このころ、印パ国境問題が再び悪化し、かなりの緊張状態にあるとのニュースが私達の耳にも入ってきたが、正確な情報をつかむのは、このあたりでは至難の業であった。九月六日、どうにか最後の荷物と隊員がギルギットに到着したが、この日、パキスタンに戒厳令がしかれ、ギルギット、ラワルピンディ間の飛行機は運行停止となって、貨物輸送はもとより、隊員も動きがとれない有様となってしまった。カラチ、ピンディ、ギルギットに分散してしまった隊員間では、しきりに電報による連絡が試みられたが、ほとんどが届かず、お互いに気をもむばかりであった。私達の隊は、ここで最後の難関にぶつかったわけである。

九日、ギルギットの六名は、飛行機による移動をあきらめ、荷物を空港に残して二台のジープをチャーターし、バブサール・パス、カガン渓谷からバラコートへ出、ここからバスでラワルピンディに出ることにした。ほとんど二昼夜走り続けで、一一日午後ピンディ着、翌日朝の飛行機でカラチと息つく間もない行程となった。戦火勃発以来、カラチ空港は夜間着陸禁止、給油禁止令がしかれ、国際線の飛来は総てとだえていたが、同日午後、在カラチ日本人家族引揚げのための日航特別機がカラチ空港に飛来、五名の隊員はそのままこれに乗って帰国の途についた。すなわち、九月一三日、五名が帰国、先に報告のため二名が帰国していたので、石川ら三名がカラチに残り、中村に関する




ブルス・ヘッドから前方を望む（キンヤン・キッシュ）
Looking forward from the Bull's Head on the South ridge of Khinyang Chhish.



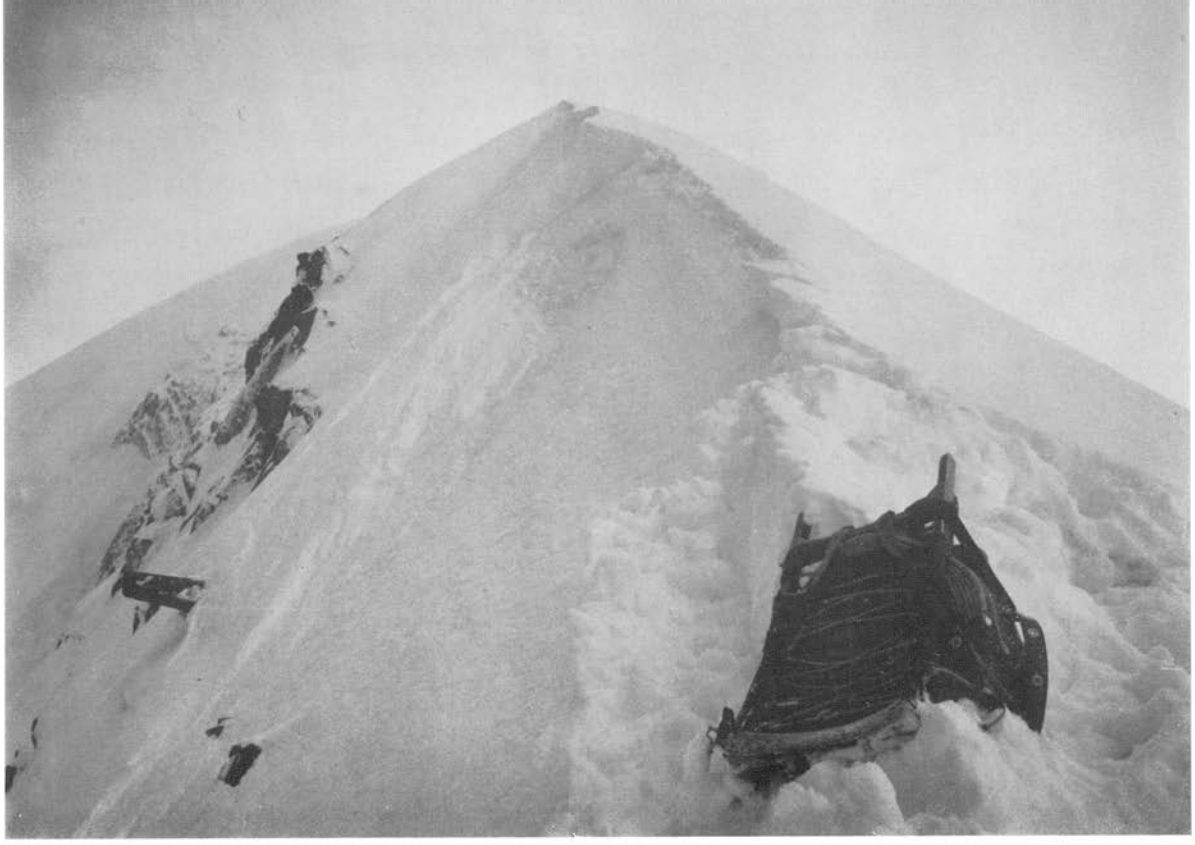
第4キャンプから前方を望む。雪庇尾根、カニのハサミ、ファースト・ティアが続いている。
Looking forward from Camp 4 of Khinyang Chhish. Corniced ridge, Scissors of Crab and First Tier are seen.



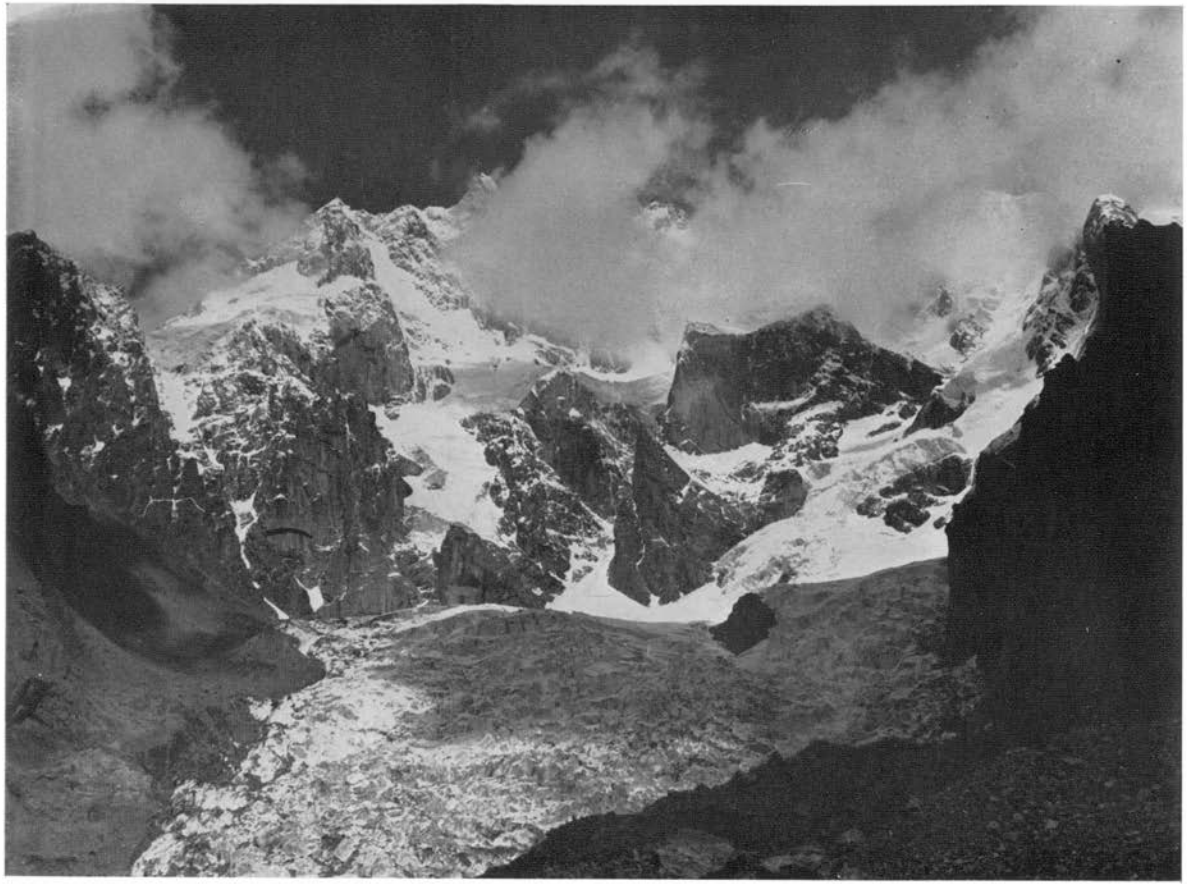
雪庇尾根をトラバースする隊員、後方はヒスパー氷河とヒスパー・ウォール。
Traversing the Corniced ridge with the Hispar Wall and Hispar Glacier in the background.



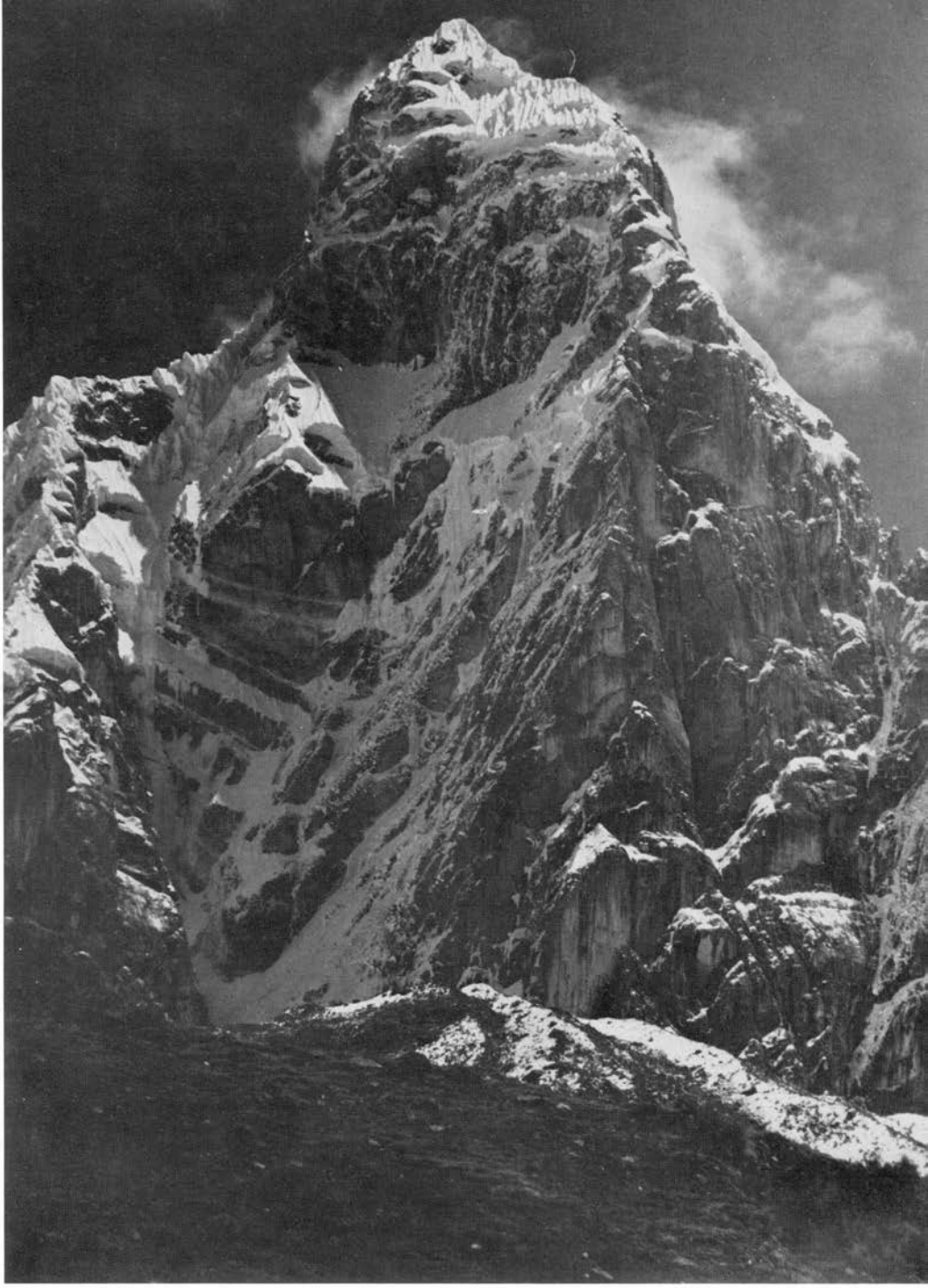
キンヤン・キッシュの第7キャンプ附近から前方を望む、右に見える尖峰がテント・ピークでその左奥が頂上。
Looking forward from Camp 7 of Khinyang Chhish. The pointed peak on the right side is Tent Peak and at the further left of it, the summit (7852m) is peeping.



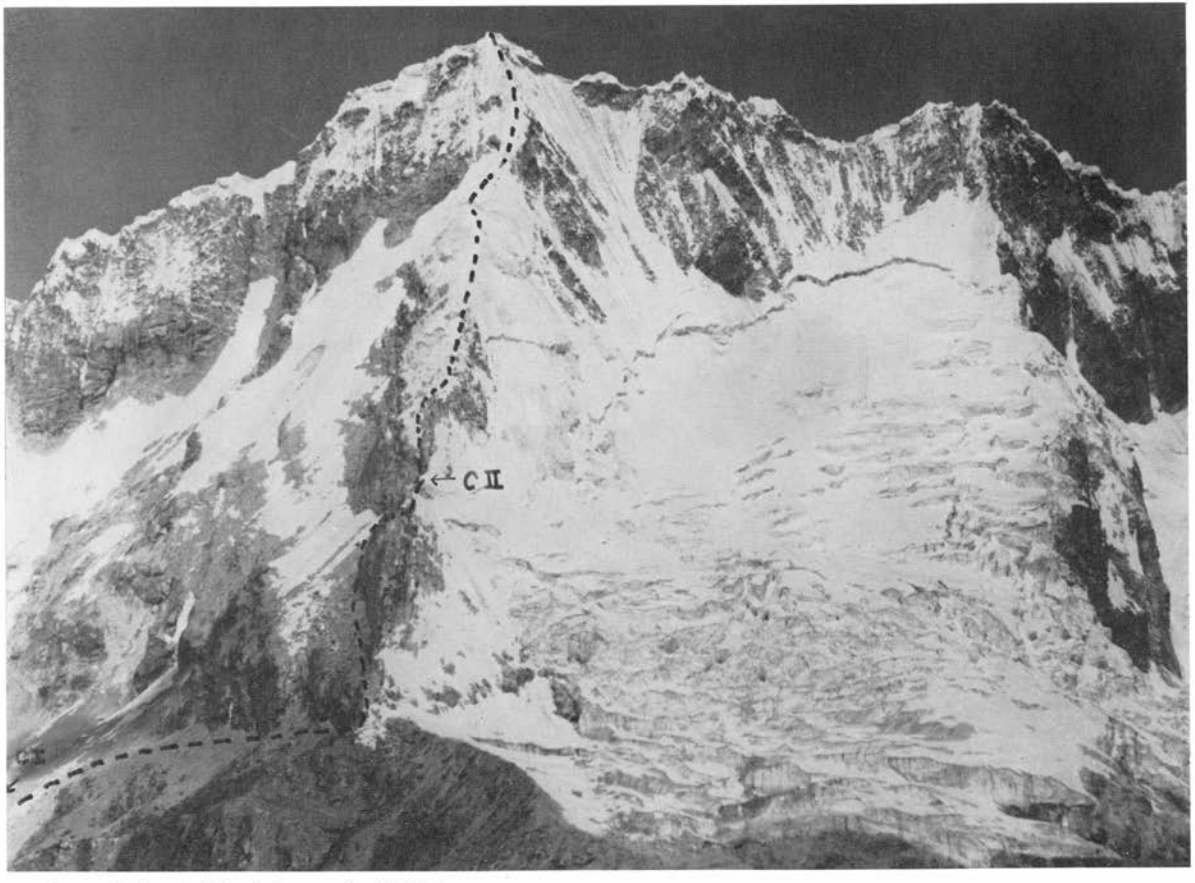
中村隊員墜落の跡、1966年8月19日午前11時20分、キンヤン・キッシュ南稜7200メートル地点。
The point of 7200m on the South ridge of Khinyang Chhish from where a member (T. Nakamura) slipped down with a avalanche.



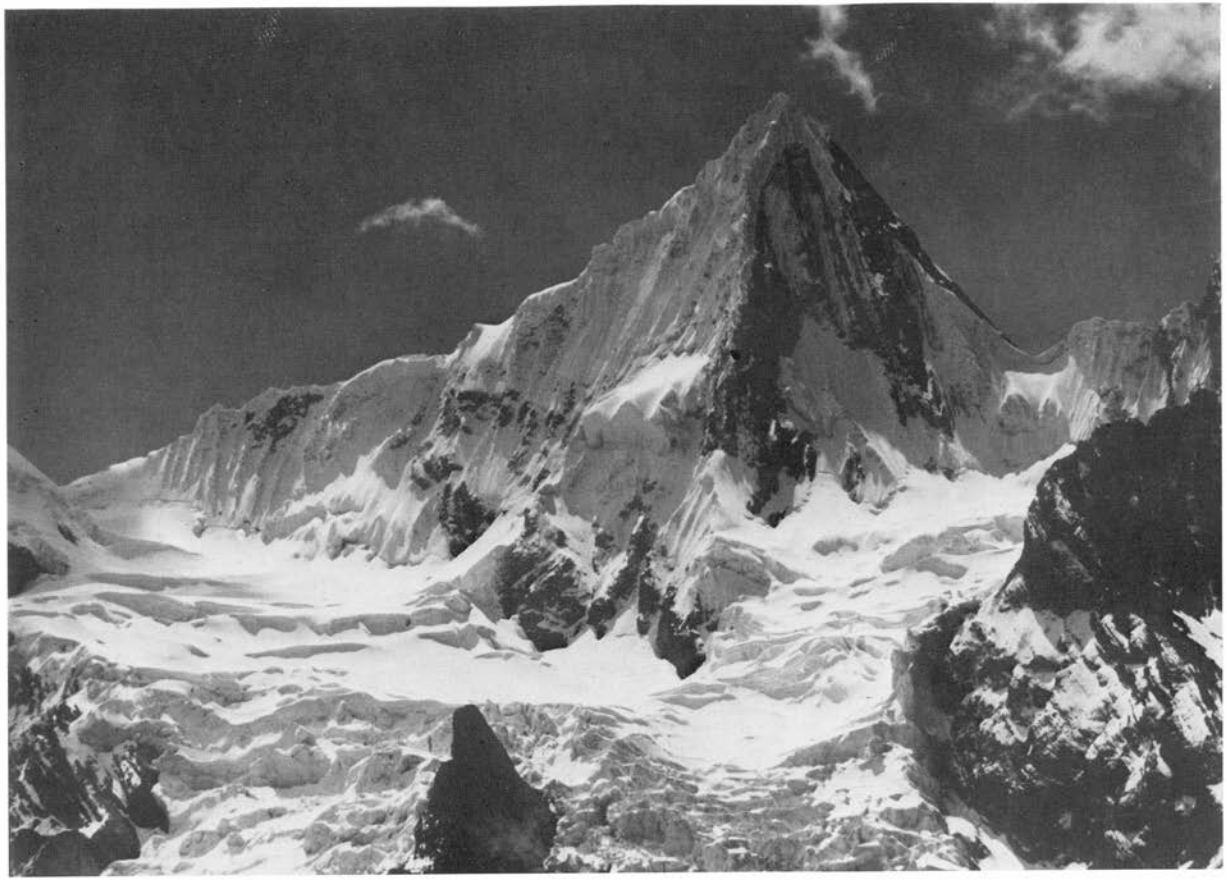
キンヤン氷河の救助キャンプから上方を望む、中村隊員は右側の谷へ落ちたと思われる。
Looking up from the rescue-camp on the Khinyang Glacier. Probably T. Nakamura was missed in the upper snow or ice on the right-hand gully.



ベースキャンプ附近から見たヒリシャンカ
Nevado Jirishanca (6126m) seen from near the Basecamp.
(By H. Hayakawa)



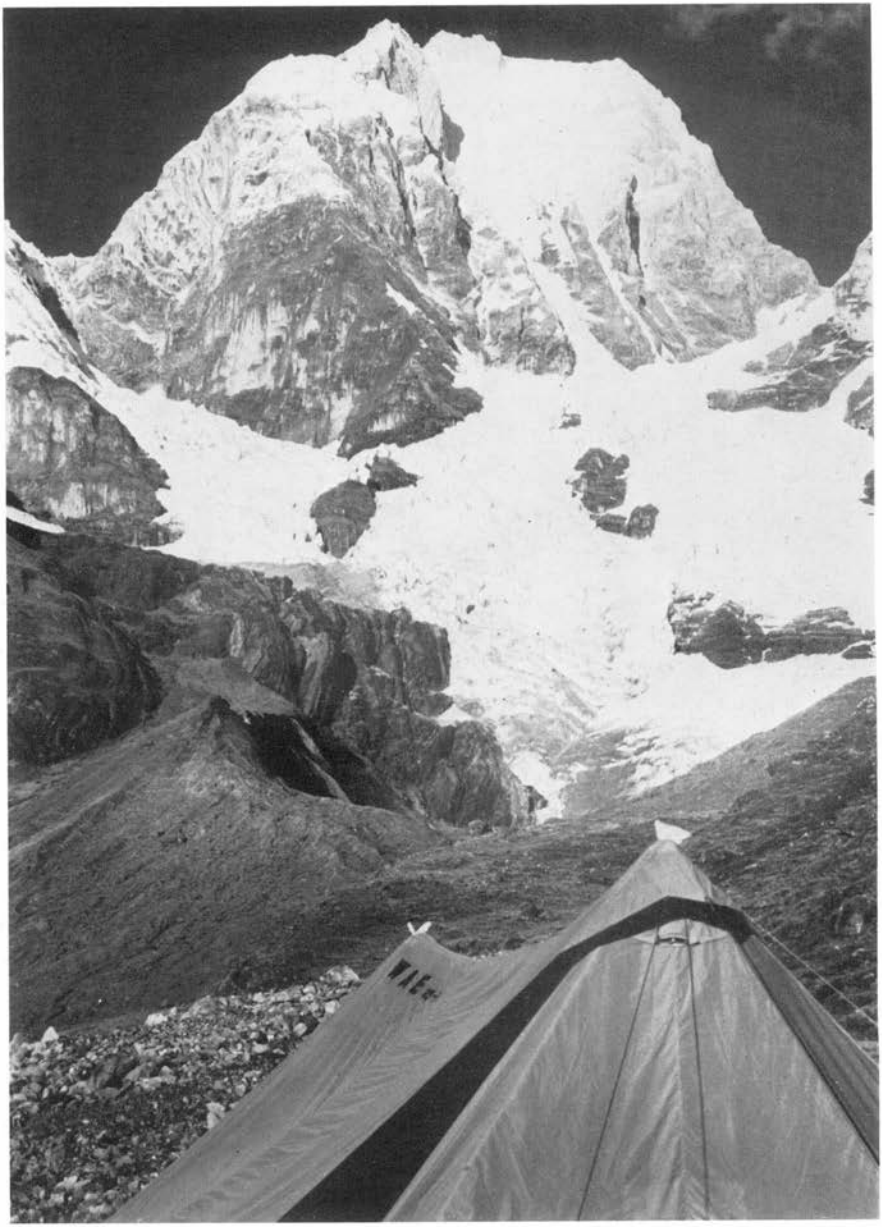

ウルス東峰から見たオクシャパルカ北面
Nevado Ocshapalca (5881m) seen from Nevado Urus este.
(By H. Hayakawa)



ベースキャンプ上部から見たヒリシャンカ・チコ
Nevado Jirishanca Chico (5467m) seen from upper the Base-camp. (By H. Hayakawa)



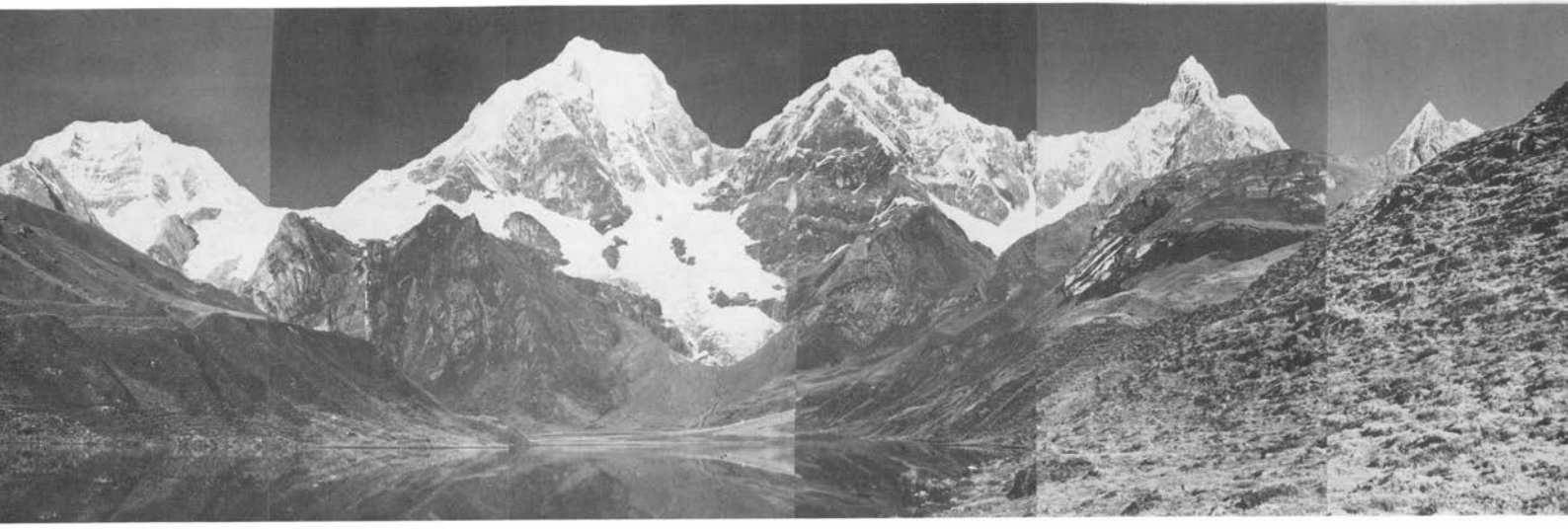
オクシャパルカの第1キャンプから見たランラパルカ北西壁。
Nevado Ranrapalca (6162m) seen from Camp 1 on Nd. Ocshapalca. (By H. Hayakawa)



ベースキャンプから望むイエルパハー東面
Nevado Yerupaja (6634m) seen from the Base-camp.
(By H. Ida)



オクシャパルカの第2キャンプから見たパルカラフ
Nevado Palcaraju (6274m) seen from Camp 2 on Nd. Ocshapalca. (By H. Ida)




カルア・コーチャから眺めたワイワッシュの連山
Panoramic View of Cordillera Huayhuash seen from Carhua Kocha. (By T. Sato)



コルディエラ・ワイワッシュの無名峰（イエルパハー東面の氷河から望む）
Nameless peaks in Cordillera Huayhuash seen from a glacier on the east side of Nevado Yerupaja. (By H. Ida)

諸手続等の残務整理にあたった。最後迄残った仕事は荷物の送還事務であったが、一〇月初旬にこれもすべて完了した。

## おわりに

今回の遠征は、東大としては第二回目の遠征であり、第一次のバルトロ・カンリの成功に続いて、もう一段の飛躍を試みたものであった。結果的には、中村隊員の遭難という悲しい事故を引きおこしてしまった。事故の原因等については、私達の検討の結果を学術調査報告とあわせて、公式の報告書にまとめ、後刻御報告したい。しかし、キンヤン・キッシュは非常に困難な山だが、私達の手でやれる、という見通しはついたように思う。できるだけ早い機会に、もう一度この山を目指したいと願っている。

なお、遭難した中村岳生隊員は、昭和三三年東大入学と同時にスキー山岳部に入部し、登山を続けてきた。三七年、工学部建築学科を卒業、大学院進学後も山行を続け、今遠征では当初から隊の実質的な中心として活動していた。中村隊員の冥福を祈ると共に、彼の遺志を継ぐ意味からも、今回の遭難の教訓を生かし、次の機会に備えたいと思っている。

**（編者附記）** 中村岳生君の父君中村勝郎氏は、本会の古い会員であり、且つ旧RCCのメンバーでもあった。会は勝郎氏に対し深い哀悼の意を表する。遭難直後、勝郎氏から会報編集者吉沢一郎氏へ寄せられた手紙に、「彼が六〇〇〇～七〇〇〇メートルの稜線登高中撮ったカラースライドを見ましたが、まことに、息を呑む美しさと大きさでした。ひどく悪い尾根で、ここまでよくやったとも思いました。今多くを書けませんが、神がこの地上に造り給うた最も大きく、最も美しい墓を、彼にふさわしいものとして与え給うたことを感じています」という、心のうたれる一節があることを記しておきたい。

# ペルー・アンデス（一九六五年）

## ＝コルディエラ・ブランカとコルディエラ・ワイワッシュの記録＝

井田英彦

早稲田大学岳友会は創立十周年を迎えるに当り、アンデスに遠征隊を出すことになった。遠征隊を出すといっても、わずか十年の歴史きり持たぬ小さな会である、行けそうな者が集って計画を立て、実行するといった方が正確なところかも知れない。

場所はペルー・アンデス、山群はコルディエラ・ブランカとコルディエラ・ワイワッシュ。リマからあまり遠くないことと、ペルー・アンデスの代表的な山群ということが、決定の大きな理由となった。

ブランカにはネバド・オクシャパルカという五八八一メートルの未踏峰がある。一九六一年にドイツ隊が頂上直下まで達しながら失敗し、さらに一九六三年にはアメリカ隊も失敗している。ルートは、ドイツ隊の報告によると南側からは不可能で北稜以外には無いようだ。アメリカ隊はハンギャラフへ連らなる尾根を選んだようだが、全く問題にならなかったらしい。我々はドイツ隊にならって北稜を選ぶことにした。オクシャパルカの隣りに六一六二メートル

のネバド・ランラパルカがある。一九三九年にドイツ隊に初登されて以来、すでに何回も登られている山だが、写真で見てもかなりスケールの大きな感じがする。オクシャパルカに登る前に登っておきたい山だ。ブランカでの目標はこの二つの山にする。ワイワッシュでは、何といっても主峰のネバド・イエルパハー（六六三四メートル）が魅力的だ。一九五〇年にアメリカ隊によって西側から初登されているので、我々は東面から入り、南稜をルートに選ぶことで、目標の山が全部決定した。

メンバーは

井田英彦（27歳）隊長・古河特殊金属(株)勤務。
近藤親弘（29〃）会計・自営。
佐藤武男（28〃）装備・早大大学院。
早川滉（26〃）記録・日本セメント(株)勤務。
宮下昭（23〃）食糧・早大法学部卒。

## 一、コルディエラ・ブランカ

### B C 設 営

六月十四日、ワラスの空は今日もきれいに晴れあがって、教会のある中央広場からはオクシャパルカ、ランラパルカの姿がクッキリと浮び上って見える。

今日からしばらくの間、山での生活が始まると思うと、何となく不安と期待との入りまじった、いつもながらの妙な気分になる。こんな気持ちは登りなれた日本の山でも、初めてのアンデスでも同じだな、などと思いながら、何から何までお世話になったワラス在住の谷川氏の家から、小型トラック二台に荷物を乗せて、朝のワラスの街を出発す

る。

二時間ほどで最奥の部落コヨンに到着、ここでロバ十六頭・馬四頭に約一トンの食糧・装備類を積み、キャラバンが始まる。

ワラスのポーター、ビクトリーノ・アンヘレスは、いつも恥かしそうな顔をして、うつむいているが、さすがにこの辺では相当な顔である。何ごとも彼の指示のもとにスムーズに進行する。

道は草の茂った谷ぞいのダラダラ登りで、隊員達はサブザックを背に、馬方の間にまじってロバの尻を追うのに夢中になり、イシンカの谷に入りこむ。

イシンカ谷がトクヤラフ氷河に消える手前に、左岸からヤナラフ谷が流れこんでいる。この谷とランラパルカ支尾根との中腹にかかると、急な登りとなり、道はいつしか岩だらけとなり、その間を流れる水も氷河の色をしてくる。真正面にランラパルカが姿を現わし、イシンカ（五五三〇メートル）の西氷河の末端付近、標高五千メートルの所に石室がある。

十五日の夕方、我々はここにBCを設営した。二日間で三千メートルから五千メートルに高度を上げるのでさえ、多少無理なことであったかも知れないのに、さらに調子を狂わせてしまうことが起った。それは翌十六日に、アメリカのアリゾナ、コロラド両大学の登山隊が、同じオクシャパルカを狙って、我々の隣りにBCを設けたのだ。そして彼等は我々に対して、オクシャパルカへの合同登山を申し込んで来た。

未踏峰には魅力があるが、見ず知らずの外国隊と合同登山も無いだろう。あせって行動した我々は全員が高山病にやられ、高度馴化をやりなおすために、イシンカ谷へ下りなければならなくなってしまった。

六月二十二日、高度馴化の終った井田、近藤は、もうオクシャパルカはアメリカの連中に登られてしまっただろうと、なかば諦らめて再びBCに戻ったところ、彼等は雪の状態が悪くて駄目だと、ドイツ隊の報告書と同じようなこ

どを言って下山の準備をしていた。

やっとBCより高くへ登っても平気になった我々は、付近の偵察とトレーニングを兼ねて、二十三日に井田、近藤が、二十五日に佐藤、早川、宮下がそれぞれBCからネバド・イシンカ（五五三〇メートル）に登り、高度馴化の終了を確認した。

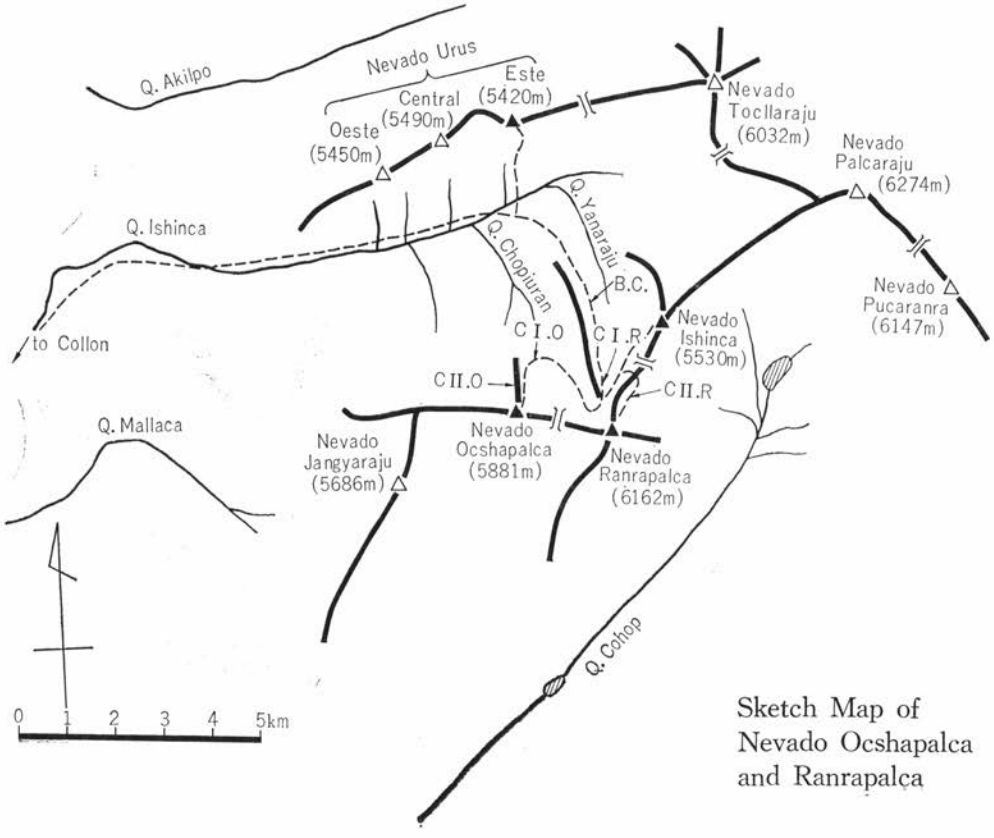
### ネバド・ランラパルカ

BCからガレ場を登ること約二時間で、ランラパルカ北西尾根の頭、北壁基部に達する。二十五日、ここにCI（五二五〇メートル）を設営し、井田、近藤が入る。そして翌日ここからCI上部の偵察を開始した。

CIからイシンカ氷河上部を横切り、ランラパルカ北稜に取付く。取付き点はクレバスと雪庇の乗越しで苦労するが、北稜に出た所は広い雪稜で一息つける。しかし、ちょっと登ると斜面は急になり、稜線にはクレバスが現われてくる。イシンカからの偵察のときに、頂上と北稜コルの中間あたりに、大きなクレバスがあったがと思いながら、ガスが出はじめた北稜を登る。ルートはだんだんとリッジをはずれて、北稜の中腹を登るようになる。取付きから約二時間ほど登った標高約五六〇〇メートルの所で、ルートは大きなクレバスによって切断されてしまった。クレバスを右側に逃げて北稜に出るか、又はクレバスと北稜岩壁のコンタクト部を登るか、ここは三段のアイス・フォールが出来ているが、何とか登れそうだ。左側に逃げれば、そこは頂上から一気に切れ落ちる、北東面の大氷河地帯に出てしまい、ルートにはならないだろう。とにかく今日はガスのため見通しが悪いので、出なおすことにしてCIに帰る。

この間にBCから全員がCIに登り、CIにはテントが二張りとなる。

二十七日、全員でルート偵察に出る。今日はCIから北稜のコルまで一時間半、そして昨日のクレバス地点までさらに一時間半を要した。ここから早川、宮下が北稜のルートを、近藤、佐藤がコンタクト部、アイス・フォールのルートに取付き、井田はこの地点からトランシーバーで両隊にルートを指示する。




Sketch Map of
Nevado Ocshapalca
and Ranrapalca

北稜に取付いた早川隊は、取付きの急な雪面を快適なピッチでステップを切り、リッジに出たが、そこは下から見たのでは想像も出来ないような悪さで、青氷の雪庇が張り出したナイフ・エッジは、とても手におえそうもなく引き返さざるを得なかった。一方近藤隊は、不安定なアイス・フォールの氷と落石になやまされ、ロック・ハーケン五本、アイス・ハーケン四本を使って、どうにか三段のアイス・フォールを登り切ったが、その上方もさらに悪い場所がつづき、どうも思わしくない。なんとか他に良いルートはないものかと、井田は大クレバス下側に出来た三十メートルほどの雪壁に登り、クレバス内部をのぞきこむと、意外にもクレバスは二段になっており、一段下った所に一個所、上側からのツララが重なって出来たブリッジがある。なぜもっと早く気がつかなかったのかと、トランシーバーで近藤隊をこのブリッジの上方に誘導し、クレバス上方からザイルを固定し、やっとこの大クレバスの突破ルートを完成する。

二十八日、井田、宮下のアタック隊は前日のクレバスを通過し、十時に頂上からの大雪壁基部に達する。この雪壁は頂稜から高差約三五〇メートル、傾斜約五〇度で、雪壁中央部は頂稜から落下するスノー・ボールと落石が、うなりをあげて飛んでいる。これを避けるため、我々はルートを右手の北稜寄りにとる。太陽の直射を受けた雪面は、表面三〇センチ程がくさっているが、その下は堅雪か氷で、少しのスリップも命取りになること確実である。雪壁基部にいるサポート隊のルート指示により、もう五時間もこの壁に取付いているが、頂上稜線はなかなか近づいて来ない。

十六時、やっと頂稜から突出した巨大な雪庇の下に着く。雪庇で日をさえぎられているこの辺は青氷だ。雪庇を右にまいて頂稜に出れば、後は楽だろうと思って、最後のピッチを頑張ったが、何と頂稜に出た部分は、北稜からつづく青氷のナイフ・エッジだ。ルートは雪庇を左へまかなければいけなかったらしい。高度約六〇五〇メートルぐらいか、太陽はもうかなり低く傾いている。今日のアタックは失敗だ。

翌二十九日、早川、佐藤が第二次アタック隊として同じルートを登り、頂稜の雪庇を左にまいて頂稜に出たが、はげしいガスで広い頂稜部はルートの判明がつかず、ふたたび失敗に終る。

二度の失敗により、三十日は全員CIで休養し作戦を立てなおし、大雪壁下にCIIとして雪洞を作ることにする。七月一日、早川は井田、近藤のサポートによりCII（五七〇〇メートル）に入る。

二日は悪天のため停滞。七月三日、頂上付近はガスにおおわれているが、アタック隊は七時にCIIの雪洞を出発し、ガスの中を登りつづけ十二時三十分頂上稜線に達し、しばらくガスの晴れるのを待ち頂上へのルートを確認する。頂稜の広い雪面にはクレバスが走っており、その向うに丸い形のピークが見える。

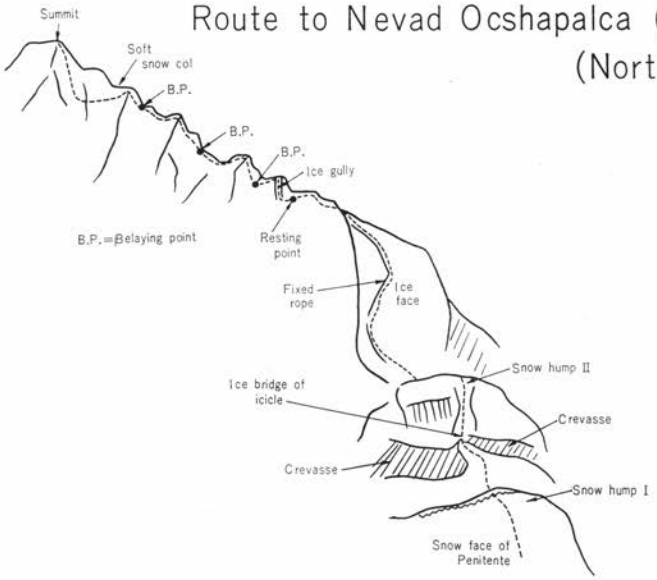
雪は軟かく膝までのラッセルをして、十四時五分、佐藤、早川はランラパルカの頂上に立った。

### ネバド・オクシャパルカ

七月四日、ここのところ天気がずっと悪く、今日はついに朝から雪となる。近藤、佐藤、早川は休養のためBCに下り、井田、宮下は引きつづいてオクシャパルカ作戦を開始する。

まず、このCIをオクシャパルカ北稜近くに移動することだ。現在のCIから西へ氷河を一たん下り、モレーン地帯を抜け、少しガレ場を登る。すなわちチョピウラン谷の源流を越えて、対岸のオクシャパルカ北稜に取付くわけである。北稜取付きのガレ場を二十分ほど登ると清水が流れ、草やコケのある絶好のキャンプ・サイトが見つかった。ここをオクシャパルカCIの地（五一五〇メートル）とし、翌五日に井田、宮下はCIを移動し、さらに六日には北稜の偵察に出かける。

CI上のガレ場を十五分ほど登ると北稜のコルに出る。ここからすぐに稜線には出ないで、コルの少し下から北稜ぞいに走る岩壁の間の、バンド状のガレ場を登ること一時間ほどで、一九六一年のドイツ隊が残していったと思われるフィックスド・ロープがぶらさがっている岩場に着く。我々もこのルートをとることにする。約四十メートルほどの




チムニー状の岩場は、下部はホールドが無く、上部は氷がつまっていて、なかなか手ごわい。荷物はザイルで吊上げる。登り切った所は北稜々線で、小さなテントなら張れそうな雪稜になっている。標高五五〇〇メートルぐらい、CIから近いがここをCII予定地として先に進む。五十メートルほど雪稜を登るとふたたび岩場となり、ここにもボロボロになったザイルが残っている。ルートはふたたび雪稜となり、発達したペニテンテの急な斜面を登ること四百メートルで、小さな雪庇を持ったスノー・ハンプに達する。この第一のハンプの上方にさらに第二のハンプがあり、この間にクレバスが出来ている。幸運にも、このクレバスには、上方から発生した一メートル以上もある大きなツララがかかっており、何とかこれを利用して、第二ハンプに取付けそうである。慎重な確保のもとに宮下がこれに挑む。どうやら使えそうだ。今日の偵察はここまでとして、下りに二つの岩場にそれぞれ五十メートルのナイロンザイルを固定する。

CIへはBCから全員が登って来て、ふたたびにぎやかになる。七日は終日雪が降る。

八日、佐藤、宮下が上部ルート工作に、井田、近藤、早川がCⅡ設営に出発する。ルート工作隊は第一・第二ハンプの間のクレバスにザイルを固定し、さらに第二ハンプにつながる三角形の氷壁の下半分に、約五十メートルのザイルを固定してCⅠに戻り、CⅡには井田、近藤が入る。九日、井田、近藤は六時三十分CⅡを出発し、九時に前日のルート工作終了点に達する。この氷壁は取付き付近は五十メートルぐらいの幅があり、上部で一点となって頂上へつづくナイフ・エッジの尾根に連らなっている。壁の左手は堅い氷、中央は五十センチほどのペニテンテが氷の表面に出来ている。ペニテンテをピッケルで払い落すと、下の氷はデコボコなので、ステップをあまり切らなくてもアイゼンのツァッケが引っかかる。前日のと合わせて一五〇メートルのザイルを固定してこの壁を登りきると、北稜はいよいよ頂上に近づく。ここから上のナイフ・エッジの尾根は、ノコギリの歯のように頂上から階段状に高度が落ちており、リッジの右側は雪庇とサラサラの粉雪、左側は青氷だ。

第一、第二のピナクルは、ピッケルで強引にナイフ・エッジの頂点を切りくずし、馬乗りになって進み、第三のピナクルは右手に出来た氷のチムニーを登る。十五時、頂上はもう高度差にして三十メートルぐらいの所に見えがくれしているが、急に天気が悪くなり雪が降って来た。このピッチは二十メートル進むのに、約一時間を要している。あと五ピッチはかかるだろう。九時から何も食べてないのに気が付く。無理をすることはない。トランシーバーでCⅠに行動の打切りを告げ、明日のアタック隊にCⅡに入ってもらう。

（以下アタック隊・宮下昭記）

七月十日、六時二十五分CⅡを出発。前夜の雪でトレールはやっと判別出来る程度まで、埋ってしまっている。空には一点の雲もない。

十時に前日のルート工作終了点に着き、ここに余分の装備・食糧を残し、身軽になって登り始める。すぐに三角錐のピナクルが立ち塞がる。左右どちらかに捲こうと試みるが、右側は雪庇で頭を押えられ、左側は青氷の壁がつづい

た。やむなく正面に取付く。アイス・ハーケンを打込むと、途中で氷は脆くはがれてしまう。しかし打込みに成功すれば、そのガッチリと喰いこんだ手応えは、非常に安心感を与えてくれる。かぶり気味なので体が完全に浮く。つり上げとピッケル、アイスバイルを併用して何とか抜け出る。ナイフ・エッジがつづく。時々突差したピッケルが向う側に突き抜けてしまい、ハッとする。どうにかピークの一つ手前のコブまできた。もうピークはザイルを投げれば引っかかりそうな所にある。ところがそこから雪質は一変し、フワフワの粉雪となり、いくら落しても安定したステップが作れない。頂上はもう間近であり、例のドイツ隊のことを思い出しガク然とする。しばらく試みたがリッジ通しのルートを諦め、足下にスノーバーを叩き込み三メートルほど下降する。側壁をまわりこんで、ピークの正面に出るより方法はない。トラバースして小さなヒダを越え正面雪壁に出た。そこは表面の雪を落せば堅雪が現われ、辛うじてアイスハーケンが効いてくれた。不安定な雪をかき落とし一歩一歩ずり上る。やがていくらピッケルを差し込んでも、今までのように青氷にさえぎられたり、堅雪に喰込んだりする手答えがなくなった。ズリ落ちそうな不安を感じる。それでも少しずつ、まるで雪の中にもぐって行くような感じで、せり上って行く。

やっと頂上に手がとどいた。

手を触れた所から、キラキラとしたガラス繊維のような粉雪が舞上る。手でゆっくりと雪をかき分け、二十センチぐらい平らにし、ヤッとばかり頂上に馬のりになった。

とうとう登った。一息ついてから大きく息を吸いこんでみた。いくらでも吸いこめそうだ。抜けるような青空には、刷いたような雲が出来はじめていた。十二時四十分だ。

ポケットからいつかの夜、用意したしわくちゃになった赤はたを取出し、ピッケルに結びつけ、はるか下に見えるCIに力一ぱい振る。

七月十一日、ＣＩを撤集しＢＣに戻る。ＢＣにはアイオワ山岳会の人達が五人ほど来ており、彼等からオクシャパルカ初登頂の祝福を受ける。

帰りのロバの手配に、アンヘレスをワラスに下らせた後、十四日に近藤、早川、宮下はイシンカ谷からウルス東峰（五四二〇メートル）に登り、七月十五日、一ヵ月間のブランカでの生活を無事終了し、ふたたびワラスの街に戻った。

## 二、コルディエラ・ワイワッシュ

ワラスからトラックで約六時間で、ワイワッシュへのベース・タウン、チキアンへ着く。

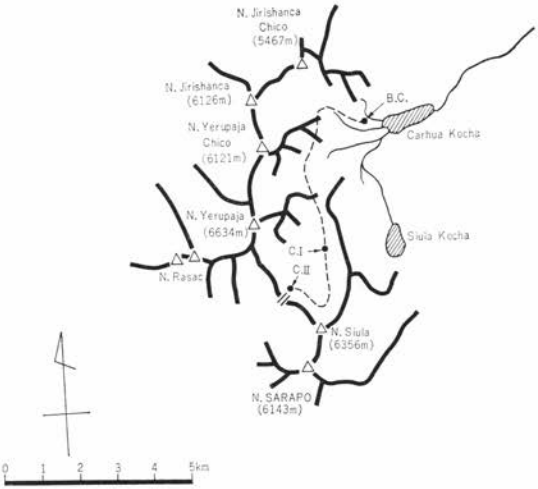
七月二十四日、ワラスでの休養を終えた我々は、ふたたび二十頭のロバを仕立ててキャラバンを始める。街道ぞいにいくつかの部落と四六〇〇メートルのカカナン峠を越え、三日目の夕方、イエルパハーの東側にある氷河湖、カルア・コチャに到着、付近の小高い草地の上にＢＣを設営する。標高四二五〇メートル。

この付近、我々のＢＣの百メートルほど上方には、同じイエルパハーを狙うアルゼンチン隊が、そしてカルア・コチャとシウラ・コチャの中間付近には、シウラ・チコを狙う関大とアルゼンチン隊が、すでに行動を開始している。

七月二十九日、偵察とボッカのために井田、近藤、宮下、アンヘレスがＢＣを出発する。早川はキャラバン中から腰とヒザの痛みをうったえ、しばらくＢＣで休養とする。

ＢＣから草付きとガレ場を登ること約三時間、標高五千メートル付近でイエルパハー東面の氷河に達する。この氷河は先に入山した関大とアルゼンチン隊によって、無数のクレバスをたくみにさけて、迷路のようなルートが開拓されており、有難く使用させてもらう。氷河のほぼ中央に、安全地帯と思われる部分が有り、ここにＣＩを設けることにする。標高五二〇〇メートル。

七月三十日、佐藤、宮下がＣＩに入り、翌日ここからＣⅡ地点、（五六五〇メートル）すなわちイエルパハー南稜とシ




Sketch Map of Yerupaja

ウラとのコル付近まで偵察を行う。八月一日から九日までの間、CⅡの設営及びCⅡから南稜への取付きの急斜面のルート工作を行い、悪天候を前に全員がBCに下り休養した。そして十日、井田、佐藤、宮下がCⅠに入り、翌十一日、この三人はCⅡに、近藤、アンヘレスはCⅠに入り、上部ルート攻略の準備がととのったかに見えた。しかしCⅡ入りした井田の調子は思わしくなく、さらに十二日南稜に取付いた佐藤も体の不調をうったえた。十三日、ふたたび南稜に取付いた佐藤と宮下は、約二五〇メートルのフィックスド・ロープの終端から、ふたたびピッケルを振りルートを進めた。しかし氷はますます固くなり傾斜は五十度を越え、すでに手持ちのハーケンを使い尽してしまった二人は、南稜上の五九五〇メートルの地点で、ついに登高を断念しなければならなくなった。

BCからの帰路、近藤、早川、佐藤の三名はオヨンに抜け、八月二十五日ワイワッシュ山群に於ける活動をすべて終了した。

# 困那(こんな)山の話

藤島敏男

本会々報二一六号（昭和三十六年八月号）に、混勿(コンナ)山の話という一文を書いてから、五年間も筆不精をしたことになるので、久振りにペンをとることを思いたった。その会報をとり出してみると、拙稿と同じ頁の下段に、三田幸夫君が川崎隆章編『会津の山々・尾瀬』の書評をかいているが、その中の〝少々腑まがりな、藤島敏男君一派の所謂、避衆登山家たちに温存されていた〟というくだりが目にとまったから、まずそれから手をつけよう。

## 登山者のヘソ

だいたい山登りなどをしようという人間は、多かれ少かれヘソが曲っているのではないか。重荷をかついで、寒い目、暑い目、苦しい目にあって、まさかの場合は、生命の危険にさらされて、頼まれもしないのに、誰もほめてくれないのに、山へ登ろうというのは、山などふりむきもしない連中からみれば、みんなヘソ曲りと思われても仕方があるまい。もっとも近頃は猫も杓子も、山へ登るようになったというから、猫にはヘソがあっても、杓子にヘソはないから、ヘソなし登山者が出現しているかもしれないが、そんなものは無視してよかろう。

若いとき、学生時代、大いにヘソをまげて勇ましく山へ登っていた連中が、社会へ出てから、どんな具合かと観察すると、これが仲々興味ふかい。

好きなものはやめられないと、ヘソ曲りを持続している連中も少くはないが、どっちかといえば、しがない勤め人などになると、四方八方への気兼ねに、心身ともに消耗して、ヘソの曲りがだんだん矯正されてくるのはやむを得ないとしても、あげくの果ては凡俗の渕に堕ちたきり、ふたたび這いあがる力も失せて、山登りから遠ざかるぐらいはまだしも、山登りなどおか

しくて出来るかい、という顔をするようになってしまう。数からいえば、この方が断然多いことは、われわれのまわりを眺めてもよくわかる。

〝山は若気の至りで登るものかは〟というのが、僕の持論だから、凡俗の渕におちた徒輩を、僕は憐れみの眼をもって眺め、ヘソの曲りはどうあろうとも、いつまでも山に登れる意力体力が、低下しない自分を、幸福だとおもっているし、JACの若い会員が、凡俗の渕に堕ちないことを心から祈ってやまないのである。

## 避衆・小パーティー

避衆登山の文字は、七年前会報二〇六号に僕が書いたもので、〝人になるべく会わないような山へ登るということであって〟ごく当り前のことだとおもう。山登りに出かけるからには、なるべく人がいない方がいいにきまっている。道中ガヤガヤゾロゾロ大勢の登山者と、あとになり先きになり、やっと登りついた頂上には、携帯ラジオで歌謡曲を鳴らしている連中が、たむろしているというようなのは真平御免、というわけだ。

山がよければよいほど、その山に登った歓喜を、自分たちだけで独占したいと願うのは、登山者共通の心理ではあるまいか。もっとも世はさまざまだから、山へいっても大勢の人がいないと物足りない、いればいるほど張合いがある、というような向もあるかもしれない。これは好みの問題だから、とやかくいう筋合いではないが、僕自身は、どこへいっても群衆、大衆に押しまくられる東京村から逃げ出して山へゆく以上、衆に煩わされたくないとおもうのである。これをしもヘソ曲りとするならば、また何をか言わんや！

山であまり人に会いたくないのは勿論だが、同行もあまり多くない方がたのしい。せいぜい四人か五人、気心のしれた仲間で出かけたいものだ。

ヒマラヤでも巨峰攻撃に大部隊は、やむを得ないとしても、すくないメンバーでヒマラヤの山を、谷を、峠をあるくことが、いかに楽しいかは、エリック・シプトン、アルフリド・ノイス、ノーマン・ハーディなどの経験者が、その著書の中でしばしば語っているところである。ヒマラヤでさえそうであるとすれば、登りつくされた日本の山は、なおさらのことであろう。

大部隊といえば、今でも毎年行われている国民体育大会の登山。僕は二十三年第三回久住山と二十五年第五回鈴鹿山脈の二回、宰領を相勤めたことがある。久住山頂で壇上に立たされた僕のまわりには、各県の旗差物がいっぱいひろがっていて、その写真をみると、近頃はやるデモ隊の状況そっくりである。お祭りの一種と片付けてしまえば、それまでだが、あんなものは登山でもなんでもない。二十四年十一月には冬山技術講習会とやらで、富士山へも登ったが、これまた無闇と人数が多くて、

ピッケル、アイゼンに身をかためたデモ行列富士山頂に到ると、いったようなもので、槇さんの顔がみえたのはおぼえているが、ほかに誰がいたのか、まるで思い出さないくらいだ。講習会などというものも、山登りではなくて、登山に関する催し、或は行事に過ぎない。しかし中には大会とか講習会とか、なにか名称のついた催しのときだけしか、山へ出かけない人もいるのではないか。もしそんな人があるとすれば、自分達の仲間だけと山へゆくたのしみを忘れた、不幸な人というよりほかない。

## 会報二一六号以後の足跡

三十六年八月白駒池ニュウ中山峠、九月薬師岳三俣蓮華烏帽子、十月三伏峠赤石岳悪沢岳デンツク峠、十一月大無間山、十二月小白森山。

三十七年一月諏訪山、二月志賀高原、四月西吾妻山スキー登山、五月赤崩山、六月高見石縞枯山横岳、七月飯縄山高妻山、九月二岐沢平ケ岳水長沢、十月岩菅山切明、十一月上河内岳、十二月城ノ峰東ミカボ。

三十八年一月節刀ケ岳西毛無山。余地峠田口峠兜岩、三月信州峠木賊峠黒平峠。志賀高原スキー、四月御正体山加入道大室山、五月二岐山小白森大白森、六月安達太良山。田代山燧岳八丁ノ湯、七月朝日岳イブリ山、九月餓鬼岳唐沢岳燕岳、十月戸隠高原、十一月大谷崩山伏岳笹山、十二月赤岩峠八倉峠。

三十九年一月青崩峠熊伏山小川路峠。茂来山栂峠桧沢峠、二月女坂下部峠熊森岳、三月鳩待峠至仏山（吹雪不登）、六月三斗小屋三本槍甲子、七月雨飾山、九月西沢国師甲武信、十月只見ダム白戸川丸山岳（不成功）、十一月須賀尾峠浅間隠山。茶臼岳上河内岳。

四十年一月白石山オドケ山、二月下十枚山（深雪不登）天子岳長者ケ岳、三月四方原山大上峠星尾峠物見山荒船山、四月白石山天丸山、五月博士山、六月森吉山掬森、九月小川山、十月鳥甲山、十一月黒法師岳。

四十一年一月七ツ峰天狗石山智者山。今倉山菰釣山、二月滝戸山釈迦ケ岳、三月稲含山炮烙峠投石峠、四月古峰ケ原峠袈裟丸山（時間切レ）、五月五竜岳柳沢峠戸隠高原、六月秋田駒ケ岳乳頭山。

まずこんなところである。余り俗衆の来ない山、来そうな山は季節を外し、つまり大衆の盲点をねらい、重い荷はもともと嫌いだし、山登りのたのしみが激減するから、天幕寝袋を要する山はなるべく避け、どうしても必要な山は応援をたのみ、といった具合で、こういう山や峠を歩いてきたのだが、いまふりかえってみると、どれもこれもたのしい想い出ばかりである。

山頂だけが山ではない。途中の深い林、明るい谷暗い沢、麓の素朴な山村、さびれた峠路、それらのものが、まじり合って山登りをたのしいものにするのである。僕が詩魂文才の持主で

あれば、ここに列記した山あるきだけでも、優に一冊の本を書きあげることが出来るだろう。ところが生憎、人まえに出せるような文章が書けないので、結局山登りは自分のためのものだ、山に在るあいだがたのしく、あとから回想してたのしければそれだけで充分、なにも苦労して稚拙な綴方をかくにも及ぶまいと、勝手な理屈をつけて怠けているのである。もっとも同じ山登りでも、大方の喜捨を仰いで出かけたような場合には、こんな理屈は通るまい。帰ってから一応、形のととのった報告をまとめるのが当然だろうが、僕の山あるきは、喜捨を仰がないでも行けるささやかなものだからこんなノンキなことをいっているのである。しかし山登りのよろこびやたのしみが、いくら心のなかにたまっても、これはたべ過ぎのみ過ぎのような害はないから、心を安んじている。

## 同行の面々

H・B・サマヴェル夫妻、松方三郎、深田久弥、川喜田壮太郎、志鷹光次郎、鈴木璋一、村尾金二、青木昇、伊集院虎一、佐藤久一朗、近藤恒雄、伊倉剛三、桜井昭吉、野口末延、松本義夫、日高信六郎、岩永安雄、井口拓夫、望月達夫、川崎精雄、井上綱、三辺夏雄、中島寛。

サマヴェル夫妻は別格だが、あとはみんなＪＡＣ会員名簿にのっている名ばかり。僕はいまだかつて学校山岳部に属した経験がないから、これらの面々はみんなＪＡＣの会員として親しくなった人達で、別に一派というようなことはない。大正八年（一九一九年）木暮先輩から、「キミも入会し給へ」と有無をいわさず会員にされたのが（僕の入会当時の紹介者は「山岳」を調べたが、どうもはっきりしないので、詮索好きの山崎安治君に依頼したが、やはり不明。大正八年十一月二十六日評議員会で入会許可になっているそうだ。恐らく木暮先輩ひとりの署名で、独断専行されてしまったのではないか）、いまこういう好い仲間をもつ幸運に、めぐまれるキッカケになったのをおもうと、不思議な気もするが、ＪＡＣがクラブであるからには、こんなことは当然なのかもしれない。

## 失った山仲間

僕は若いときから、ずいぶんいろいろな人と山を登りあるいてきた。登山経歴というと大袈裟だが、いつどこへ誰と登ったということだけを、簡単に記したメモがあってだいたい同行した人の名がわかるので、去年（一九六五年）ＪＡＣから「山歴」カードの提出を求められたときも、行をともにした人達の氏名を付記しておいた。これを取りだしてみると、登った山は勿論だが、一緒だった先輩或いは友人のことが、あれこれと思い出されるのである。山については、たとえ茫乎として記憶が薄れたものでも、すべてがたのしく回想されるのだが、人の場合は、



昭和9年1月十勝岳の頂上にて　左から故山崎春雄氏，筆者，故田中菅雄氏，初見一雄氏，相川正義氏（中野征紀氏写）

既に亡き人となった数も少くないのに気がついて、淋しいおもいを禁じ得ないのである。

亡友の中で、まず思い出されるのは黒田孝雄君である。彼とは昭和十五年秋、日光光徳小屋に幾日かの滞在を共にしただけで、山あるきをともにしたことはないが、虎ノ門時代の最もいい相棒のひとりだった。彼についての詳しいことは「山岳」四十四年二号に、彼と小学校からずっと同級だった松方君の書いた追悼記にゆずるとして、彼がいまいたならば、「山岳」三十年二号に載せた「日本山岳会三十年」というJACの歴史（これは丹念に調べてよくまとめてある貴重な文献で、ふるいことを知りたいときは、僕はいつもこれを引出してみる）に、さらにその後の「三十年」を、コツコツと粘り強く、まとめ上げて呉れたにちがいないとおもうと、彼のいないことがなんとも残念なのである。

一八九九年生れだから、もう閑地について、時間をたっぷりもって〝オイ、こんどはどこえいく?〟と、僕の老年の山あるきの仲間に一枚加えることができたろう。

一九一七年入会、会員番号六四一番の彼が健在ならば、あと一二年で永年会員である。チョッとはにかんだような表情に微笑を浮べた彼に、銀をまいたバッヂはよく似合うだろうとおもうと、本当に惜しい。

いまJACのライブラリーには、彼の遺志によって寄贈され

た「山岳」の全揃がある。会できめた灰青色のバックラム装、前後見返しは茨木画伯の墨絵スケッチを、大塚巧芸社で印刷させたもの二種。（昭和七年六月、会報十六号に発表。）これが出来上ったとき、みんな競って過去の分まで製本させたものだ。年度によって頁数がちがうので、ケースはその都度作らせたが、見返しはたくさん余分を印刷させておいたので、以後ずっとこの装本が、昭和十七年頃まで続けられてきたのである。

「山岳」第三十六年の製本されたものが、昭和十七年当時九州の地に在った私の手許にとどき、それだけが戦災をまぬかれているのだが、十八年以降は製本どころか「山岳」そのものが、十八年九月十日付第三十七年一号が刊行されたきり、二十三年十一月十日付第四十三年一号が出るまで、完全に五ケ年間の空白時代があったのである。すべてこれ愚かなるいくさのためである。

ペンはやや横道にそれたが、先頃僕は少し調べたいことがあって、ふるい「山岳」をクラブの棚から取り出し、そこに「黒田孝雄氏寄贈」の文字を見つけて、彼がどんなに「山岳」を大切にしたかを想い、また彼ほど「山岳」を隅から隅まで丹念によんだ人間は、チョット見当らないのではあるまいかと考えたことだった。



故田中菅雄氏　昭和11年11月写

昭和六年頃から約十年間、よく一緒に山に登った田中菅雄君も、僕にとっては忘れ得ぬひとりである。彼はたしか角田吉夫君などとともに、法政大学山岳部創立に参画したメンバーだとおもうが、ＪＡＣ入会は一九二五年会員番号九四三号、学生時代は仲間とともに、積雪期登山に開拓的な記録ものこしていたのだろうが、僕が知りあった頃は、勤めの関係から長休みはむずかしいが、山が好きで好きで、やめられないといったふうで、誘いをかけると、いつも待ってましたといわんばかりであった。疲れをしらぬこと機関車みたいで、どんな困難な場に遭っても、明るさを失わない性格の持主だった。僕より十年若いのだが、なぜかウマが合ったとでもいうのだろうか、随分あちこちの山あるきをともにした。四月末の連休だというのに、誰ひとり訪れる人もない月山（昭和六年）や朝日連峰（七年）にスキー登山をしたり、笊ケ岳、千挺

木山（六年）といった、いまでも余り人気のない山へ登ったのも、彼が相棒だった。十勝吹上温泉やヘルベチア・ヒュッテまで出かけて、山崎春雄さんはじめ北大の連中とにぎやかな数日をすごしたときも彼がいた。山崎さんが遥々白馬へスキー登山に来たとき、呼び出されて行を共にしたのも、なんとなく親しまれ愛されるようなものを、持っていたからであろう。

JACの理事もやったが、クラブの伝統の中によく融けこんでいたから、丁度虎ノ門時代と現在との中間に在って、伝統の仲継ぎ役のひとりになったろうとおもうと、惜しい人を亡くしたとの感が深い。

還暦をむかえた田中菅雄は想像しにくいが、恐らく元気で、それは何処だというような山を探し出してきて、僕をそそのかすに違いないだろう。こんな好い仲間の生命を無駄に奪った阿呆な戦争を、僕は憎まずにいられない。

「こんどうちの息子が、東京の大学に入ったので、学校の教育もだが、山岳会でミッチリ仕込んで貰いたい」という父君に伴われて、ある土曜日の午後、松方君や僕達常連のいる虎ノ門のJACクラブルームへ現われたのが、田口一郎君だった。山登りの好きな若者を仕込むには、本郷の大学よりJACの方がよいと考えた、田口のオヤジさんは眼が高いと、われわれは冗談を飛ばしたことだったが、当時の山岳会にはそとからみると、そんなふうに感じられる精気だか妖気だかが、漂っていたのだろう。



故田口一郎氏　昭和13年3月　ロンドン・イーリングの自室の前にて（藤島写）

それはともかく、この田口新入会員（昭和六年・一三〇六号）は、物おじしない濶達な性格の持主で、年長の先輩連ともすぐ親しくなり、クラブの雰囲気にもよくなじんで、会の仕事に深い関心をもって、よく手伝ってくれるのだった。昭和十年春、僕は日本を離れたが、この年から二年間、最も年少の理事として働いている。彼地で届く「会報」で、学生懇談会の肝入りなどをしている様子がわかり、彼やっているなと僕はよろこんだものだ。彼と僕が行をともにしたのは、北海道ヘルベチア・ヒュッテ、八方尾根、芝倉沢といずれもスキー行だが、へらず口が仲々達者で退屈しない道連れだった。

その彼が弟の二郎（昭和十年・一五九〇番）と昭和十二年夏、英京ロンドンへやって来たのである。翌年春、僕はロンドンに赴き、兄弟と毎日のたべあるき、古本屋漁り、郊外へドライブしたり、一郎とウェストン老師を訪ねたりしたのも、いまは遥かな思い出となった。四月には兄弟がパリに襲来、幾日か滞在のあと、アイガーの麓グリンデルワルトに直行、暫くスキーをたのしんだ。僕は家族を巴里へかえしてから、一郎、二郎の兄弟とベルニナ山群からはじめて、ヴァリスへ足をのばし、十日ばかりもスキーで峠だの山頂だのを、たっぷりとたのしんだ。それから間もなく、僕は東航の船にのったのだが、彼等は欧州に留って十四年、十五年と二夏大いに登ったらしい。グロース・シュレックホルンのどことかの新ルートを登ったと、写真に点線入りのたよりを寄せたこともある。たよりにはいつもJACのことを気にかけて、あれこれと意見を開陳してきたものだが、彼などはJACに魅入られたひとりというべきであろう。それがついに日本の土をふまず、アイガーの麓に永遠に眠ることになってしまったのは残念である。

いま五十五歳になった田口一郎も、思い浮べるのがむずかしいが、健在ならば、今日のJACで中心のひとりになって、例の快弁でまくし立てていることを、僕は疑わない。そうして恐らく甲羅をへて、益々アルコールをたしなむようになった彼が、僕の晩年の山あるきの道連れのひとりに、なっていることも疑う余地がない。「オイ一郎、こんども一緒に行かう」といえば、否とはいうまい。十五も年はちがうが、惜しまれる友人のひとりである。

戦後十年ぶりで日本へ舞戻った弟の田口二郎が、兄貴の形見にといって僕に齎らした、I・TAGUCHIと名入りのベントのピッケルは、メンヒのノルレン（氷の尾根として名が通っている）を登るとき、特に短かく作らせたもので、爾来僕はこれを持出すと彼のことを憶うのである。

## アルパイン・ブックスのこと

黒田、田中、田口のいずれも好書愛書の癖があった。尤もこの三人にかぎらず、虎ノ門時代僕の親しくした会員は、たいていビブリオマニアともいうべき人々であった。小島烏水先輩以来の伝統でもあったろう。山の新刊は狙上にのぼり（当時の「山岳」「会報」誌上の図書批評紹介は甚だ活溌であった）、古書の蒐集も盛んで、稀書珍籍の入手に熱を上げたものだ。

昭和九年の秋だったろう。ある土曜日の午後クラブルームへゆくと、神田の巌松堂書店から山岳図書の在庫目録が届いていて、その中に「フレッシュフィールド、ラウンド・カンチェンジュンガ、十三円」というのが、目についた。当時ロンドンのエドワード書店の目録などにも、めったに載っていない代物だから、居合せた面々が眼をひからせたのは勿論である。僕はそ

の翌日神田へかけつけたが、今朝早く売れたとのこと、さては誰か抜け駆けをやったなと、地団駄ふんだがあとの祭り。先陣が田中菅雄ということは、次の土曜に判明したのだった。昭和十年五月、JAC創立三十周年記念の図書展覧会には、この書物だけは外に所蔵者もあったろうが、特に田中の所蔵本を出陳させたのをおぼえている。

戦後彼亡きあと、彼の愛蔵本の散佚しないようにと、僕は会員佐藤久一朗君を煩わして「田中菅雄蔵書」の印を刻んでもらい、これを田中夫人に届けた。戦災で一切を焼亡した僕が、そのとき夫人の懇請もあって、新らしい蔵書印を捺し譲りうけた「H・ラットレジ、エベレスト・一九三三年」と「高山深谷・第九輯・梓版・一九三三年」とは、いま僕の秘蔵本となっている。

エドワード書店といえば、横文字の山岳書に関心をもつ仲間ならば、たいていおなじみだが、僕がこの書店のことを知ったのは、何によっていつ頃のことであろうか？　戦後、会員小林義正君にまとめて進呈した、同書店の目録のいちばん古るいのが、一九二六年五月付なのをみると（会報一九五号六頁参照）、大正十五年である。恐らくタイムズの「文芸附録」に出ていた広告で、その所在を知り、アルパイン・ブックスの目録を取寄せたものとおもわれる。

当時は航空便などはないから、目録が届くとシベリア経由便で注文状を出す。売切れずにあれば、書留小包がシベリア経由で送られてくる。本が着いてから為替を組んで送金する。相当の金額が借越になっても、一向意に介する様子もなく、ドシドシ本は送られてきた。極東日本の安月給取を、よく信用したものだとおもう。おかげで身分不相応に横文字本を買いこんだものだが、まあいってみれば、日本国が国力不相応な軍備をもったようなものである。軍備の方はお国を破滅に陥れたが、本でさんざんたのしい思いをした挙句、後日一切が灰に帰したが身の破滅には到らなかった。

そんないきさつもあって、一九三五年六月ロンドンへついた数日後、僕がエドワード書店を訪ねたのはいうまでもないが、地下室の山岳図書の大棚の前へ案内されたときは、度胆をぬかれた。カタログでみるのと現物が並んでいるのとは、こうもちがうものか。どれもこれも、ノドから手が出るほど欲しいものが並んでいる訳ではないが、片々たる小冊子に案外興味深いものがあるかもしれない。僕は片ッ端からみてやろうと度胸をきめて取りかかったが、手の届くうちはまだよかった。上段は梯子がいる。チョッと目についたものは、メモに書きとる。昼飯などは忘れて、この作業に従事しているうちに、ヘトヘトに疲れはて、時計をみておどろいた。入庫して四時間以上もたっているのである。到頭中途にして作業を中止したのだが、このあいだ店員が様子をみに地下室へ降りてくるでなし、全くノンビ

りしたものだった。このときのメモや、その後の目録で注文すると、シベリア経由とちがい、英仏海峡をへだてるだけだから、待ちくたびれないで僕のパリーの寓居へ届くのをよろこんだものだ。

一九三八年三月エドワード書店を訪れたときは、田口一郎がいっしょで、無駄口をたたきながら、あれこれと本を物色したのだが、一郎が「オヤこんなものがある」と引張り出したのは、A・F・マメリーの「アルプス及びコーカサス登攀」限定版百部の内の一冊。薄手上質紙に印刷してあるためか、普通版の初版再版より薄く出来上っている。かつて目録でも見かけたことはなく、その存在さえ知らなかったので、再版は所持していたが、「それは僕が買うことにする」と主張したところ、一郎がどうしても譲歩しない。自分が先きに手をつけたからというのだ。「キミはこれからロンドンにいるのだから、この本にまためぐり合う機会もあるだろうが、僕は日本へ帰ったらそれっきりだ。これは僕に買わせろ」と押問答をやったが、なんとしてもきかない。子供が目の前の菓子のうまそうなやつにツバをつけたようなものだと笑ったことだったが、結局この稀書は田口一郎の手に帰した。



昭和10年6月1日　八海山頂上にて，
田口一郎氏（左），田中菅雄氏（右）

しかしその翌々年、一郎二郎の兄弟がスイスで山登りに夢中になっているあいだに、欧州大戦勃発、彼等は英国へ戻れなくなり、一郎は昭和十六年八月、スイスで客死してしまったのである。このマメリーの本は、恐らくロンドン・イーリング・ジ・ユニバーシティ・カレッヂ・ホールの、彼の部屋におかれたままであったろうが、その行方はいまとなっては辿るすべもない。

## 月に一度ぐらいは

前に書いたような仲間と、よりより相談しては山へ出かけるのだが、七八月は別として（夏山は招くといって、無茶苦茶に押しかけるし、気候は蒸風呂に入ってるみたいで、僕はなるべく動かない方針だ）、あとは月に一回位は山谷を彷徨したい願望をもっている。というのは、いま住んでいる東京は、世界で最も醜悪な都会のひとつと定評があるほどだから、ときどき逃

げ出さないことには、自分まで醜悪になるおそれがある。神経のふとい人はいざしらず、僕のような神経では、どうしても逃避したくなるというものである。

登山の醍醐味を知りながら、凡俗の渕に沈潜したきり、動こうともしない人を見かけると、一体どういう神経の持主なのかと、諒解に苦しむのである。

どうしても山へ行かうとおもえば、時間などは何とかなるというのが、若いときから僕の説で、実際に当ってみるとその通りだった。現在僕は年中連休の隠居になっちまったから、仲間さえあればもっと山を歩きたいのだが、前掲の諸君まだ完全閑居の域に達しないらしいので、月一回を目標にして、相手変れど主変らずといった山あるきをやっているのである。

月に一度ぐらいなどというのは、年中連休にしてはオカシイといわれそうだが、これには僕が上野とか新宿とかいう始発駅の空気を、ヒドク嫌いなことも一因をなしている。右往左往する夥しい人間の数、それがみんな殺気立ち、眼は血ばしり、上ずって、なんともいえない騒然たるザワメキ、コンクリートの上に新聞紙をしいて、坐りこみだか土下座だかをしている一団、物乞いかとおもうと、それが山登りやスキーに出かける連中だったりして、到底正視するにたえない。「割り込み禁止」などという、恐らく世界中どこの国の駅にもない札が、ぶら下がっていても一向に守られない乗車風景。これらもろもろの不快なる現象に接するのは、月に一度ぐらいで勘弁して貰いたいということになるのである。

山から帰えると気分は清新になるし、新陳代謝がよくなって、からだの調子も甚だよろしい。このゴミゴミして薄ぎたない東京を幾日か離れるだけで、こうも違うものかと、われながら驚くほどである。

月一回は決して頻繁とはいえないが、また山かといわれることがあるのは、どういうものだろう。もし僕がゴルフに熱中していたら、閑居を幸い、週に二回位、月に八回や十回は少くとも、球を敲くだろうが、またゴルフかとは誰もいうまい。どうも山登りは外からみると、少々変わりもののたのしみとしか、受取られないようである。

## エベレストとJAC六十年祭

一九六二年七月二十四日パミールの山で、四十五歳の若さで遭難した、英国の登山家ウィルフリド・ノイス（「学鐙」五十九巻十号に、会員島田巽君の〝登山家ノイスの死〟なる行届いた一文が載っている）が、カラコラム・ヒマラヤのトリヴォール（七七二〇米）に登頂し、*To the Unknown Mountain* という著書を刊行したことは、人の知るところである。彼はトリヴォールをえらんだ理由に、全く人に知られていない山であることを強調し、エベレスト初登頂の際、ウェスト・クームにも、

ローツェ・フェースにも、彼が最初に道をひらき到達したサウス・コルにも、前の年に試登したスイス隊の残こしたものが点点とあって、未知の山という気がしなかったと述べている。

一九六〇年のインド隊のときには「クマール隊員の報告によると、サウス・コルはまるでガラクタ市のごとく、空の酸素筒、ガス・マスク、ブタン・ガス罐、破れたテント、寝袋がいたるところに散乱していた。」という。(W・H・マーリ著、山崎安治訳。はるかなるエベレスト。一七七頁)

その後も米国隊インド隊が入ったことだし、サウス・コルはさらにいろいろの残骸が散乱しているだろうことは、想像するに難くない。しかし、いかにガラクタが散らばっていようとも、地球上の最高点という魅力は大きい。JACも一九六六年には総力をあげて、エベレストへ向うことになっていたのだが、一九六五年三月十九日、ネパール政府が突如として、同国内のヒマラヤ登山を全面的に禁止する旨を発表したため、計画一頓挫ということになった。ふり上げた拳のやり場に困るという格好だが、まあ已むをえない。

ところが何が幸いするか分らないもので、一九六五年丁度創立六十周年にあたるJACのお祝いは、非常に盛大に行われることになったのである。大体西欧では五十年祭を祝う習慣らしく、ジュビリーとかセンカントネールという字はあっても、六十年祭という字はどうも見当らない。

JACの五十年祭は昭和三十年十一月であったが、記念講演会も晩餐会(会報一八三号参照)も、昨秋の六十年祭に比べると、はるかにささやかなものであった。国際文化会館の講演会も会員だけに限られていたし、晩餐会も出席者七十八名と記録に残っているが、六十年記念には晩餐会は招待者も含めて二二一名、久保講堂の講演会は千二百名が集った。たいへんな相違である。

これは五十年祭の催された三十年秋には、翌年のマナスル登頂隊の準備に既に忙殺されて、JACの働き手の力が、その方へ多分に吸収されたためとしか考えられない。もし仮りに予定通り一九六六年、JACがエベレストへ登山隊を送ることになったとすると、一九六五年秋の六十年祭は、片手間仕事になって、あのように盛大ではなかったかもしれない。

個人でも還暦などといって、六十歳を祝うのは、昔から十二支の行われている国だけであろう。ネパールも十二支が行われていると、きいたようにおもう。春秋の筆法をもってすれば、ネパール政府エベレスト登山を禁止し、日本山岳会六十年祭盛大となる、といえないこともなかろう。

私などのあずかり知らぬことだが、当国は昨今経済不況だというから、遠征資金の調達には好都合ともおもえない。この意味ではネパール政府の処置を、あまり難ずるには及ばないのではあるまいか。柿の種ではないが、時節を待とう。

## シゴキについて

昨年だったか、ナントカ大学（僕は自分がロクな学校を出たおぼえがないから、校名をすぐ忘れる癖がある）のワンゲル部（外来語だろうが、意味不明）の学生が、登山の途中、棒切れで折檻され、ついに生命をおとし、裁判沙汰になったという話が新聞に出ていた。これをシゴキというのだときいて、呆れもしたし、おどろきもしたのである。学生が金魚の糞みたいにゾロゾロつながってやってくるような山へは登らないから、実際はみたこともないが、下級生が重荷を担がされ、上級生や先輩が小さい軽るい荷をしょって、疲れて弱った下級生を、ぶったりけったりするのだそうである。

むかしよく話にきいた日本国の軍隊で、下士官や古兵が、新兵を鍛えると称して、手荒らなことをやったのとそっくりではないか。山岳部とか、ワンゲル部とかでは珍らしくないという。日本から軍隊が姿を消して二十年を経た今日、しかも完全に敗北して降参した軍隊の野蛮な風習が、山登りの社会にのこっているとすれば、これは頭がどうかしているとしか考えられない。

僕は若い頃、木暮（理太郎）先輩や武田（久吉）先輩と、山登りを共にする幸運にめぐまれたが、年少の僕だけが重荷を担いだおぼえもないし、まして先輩から棒切れでシゴカれるなどということのあろう筈もない。しかし、この両先輩だけでなく、JACの大先輩達、また同年代の山仲間から、僕が精神的にシゴカれたことは大変なもので、それがいつまでも僕の山登りの支柱になっているのだ。先輩達の精神的シゴキをうけなかったならば、僕はもっと早く山から遠ざかり、凡俗の渕におちていたかもしれない。

尤も頭の中が空ッポでは、精神的に後輩をシゴクことなどは出来るわけがないから、棒切れということになるのだろう。まことに粗末な人間が、山登りをするようになったものだと、歎かずにはいられない。

いったいシゴキの目的は何だろう。ヒマラヤ遠征に備えているのだろうか？　西欧からヒマラヤへやってくる登山者は、棒切れで敲かれた経験者が多いとでもいうのだろうか？　冗談じゃあない。

ヒマラヤ遠征を夢みるならば、登山技術の基礎を習得する必要はもちろんだが、棒切れの代わりにナイフとフォークで、めしの喰い方でも心得えておいた方が、はるかに役に立つだろう。

## アルプスでの出会い

僕は海外遠征の経験はないが、よその国の山にすこしばかり登ったことがある。はなしは古るく、一九三五年から三八年ま

で欧州に滞留した当時、スイス・アルプスのオーバーラントやヴァリスで、いくつかの峰頂に立った。

槙、松方、浦松、麻生などという連中が、グリンデルワルトやツェルマットの村に泰然と腰をすえていた頃とちがって、当時ヨーロッパ中を探しても、山へ一緒にゆかうという仲間はテンデ見当らなかった。古るくからの友達でJACの会員は、倫敦に伴野清（二八四番）、若いとき仲々の登山家だった彼は同期生だが、学校を出るか出ないに山から離れてしまったので、アルプスに誘いようもない。これも同期の井口武英（六六九番）が社用で来欧したが、僕が始めて日本アルプスに見参したときのリーダーだった彼も、山から離れてすでに久しくどうにもならない。伯林オリンピック見物にきた目黒四郎（四九〇番）も、電車でユングフラウ・ヨッホが関の山という始末。当時朝鮮にいた田辺多聞（六二五番）もやってきて、バルチック諸国だのバルカン諸国だの、ちっぽけな国々までまめに歩いたようだが、顔を合わせると独仏優劣論ばかりたたかわして、山の話なんかまるで出なかった。桑原武夫（一一三二番）も僕が帰東したあと、今は故人となった大幸甫とオーバーラントの山を登ったらしいが、始めの年は研究の方が忙しかったのだろう、巴里でもそう頻繁に往来するというほどでもなく、ましてスイスの長逗留へ誘う訳にもいかなかった。麻生武治（五二九番）とはグリンデルワルトで落合ったものの、彼はガルミッシュの冬季オリンピックへ、日本スキー選手団監督できて、大会のあと大倉喜七郎さんと平地旅行の途上だったし、アルプスの峰に登るような気配もなかった。

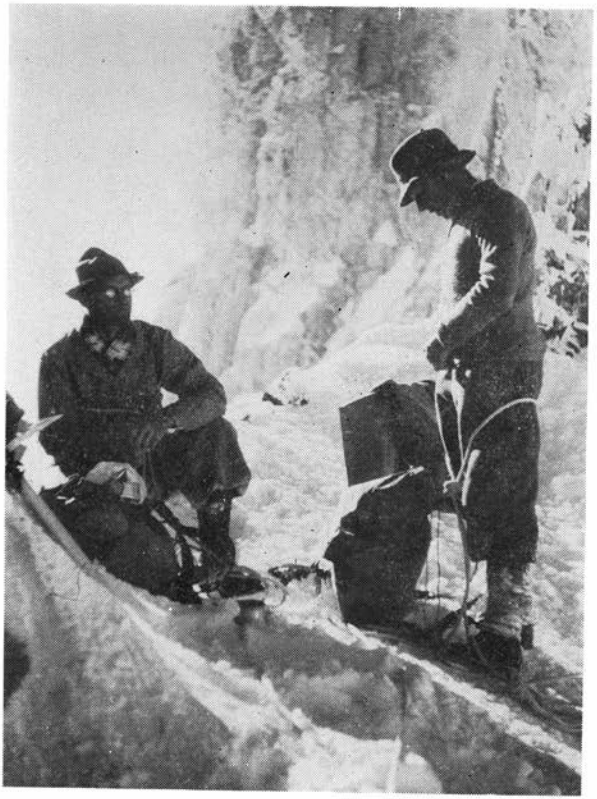
こう数えあげると随分たくさんの会員で、しかも会えば「やあ！　どうだい」という間柄の友達が海を渡ってきたのだが、結局国を出るときから、欧州へいったら一つでも二つでもいい、アルプスの峰に登ってやろうと考えて来ないと、行きがけの駄賃にチョイトという出来心だけでは、アルプスの峰頂は踏めないということなのだろう。

日本にいる山友達の誰彼を思い浮べると、辻村（伊助）さんの言い草じゃないが、〝日本なんかに引っこまないで、一緒に来ればいいのにと思うにつけても、なつかしいより腹が立った。〟（スヰイス日記二二九頁）というような訳で、一九三六年夏、七年夏とオーバーラントやヴァリスでいくつかの山に登ったが、いつもガイドとの二人連れ、或は三人連れで、日本語の通じる仲間はいなかった。なにも山登りの最中にお喋舌しなくてもいいのだが、「アアくたびれた」とか、「こう急に登らされちゃ敵わないネ」とか、「エラク急な下りだ、膝がガタガタになっちまう」とかいう台詞は、日本語でないと感じが出ないものだ。

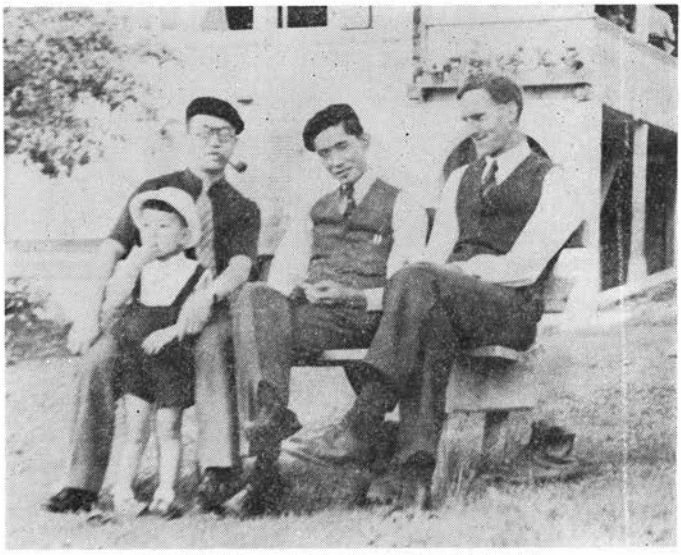
しかし終始一貫、和文仏訳をやりながらのスキーや山登りばかりではなかった。一九三五年の暮には、当時ジュネーブに在

勤した木内良胤（会員ではないが、学生時代、渋沢敬三氏などと日本の山を登ったことがあり、寿府では後にエベレストで活躍したランベールと親しく、サレーヴでの岩登りや、グラン・コンバンのスキー登山や、あちこちランベールと行をともにしている）と、スキーに出かけて、モン・ダルボアの上からモン・ブラン山群の眺めをたのしんだ。一九三七年二月には、ロンドンからきた伊集院虎一（三九〇二番、彼が戦後になってやっと入会したのは、どういうのか訳がわからない）とグリンデルワルトで、いまでこそ日本でも珍らしくないどころか、少々目にあまるようになったダウン・ヒル・オンリーのスキーを幾日か堪能したものだ。その年の七月には米国での研究を終えた伊藤秀五郎（一〇七三番）が、大西洋を渡ってきた。巴里見物もさることながら、ヘル・槇以来のアイガーをみないことには、帰国してから仲間に合わす顔がないとばかり、まずグリンデルワルトへ同行、あきるほどアイガーを仰ぎ、どこか手軽な山をとブラヴァンドに相談したあげく、辻村さんの『スウィス日記』に写真が沢山出てくる、ブリュームリスアルプホルンへ、三人で登った。そのあとツェルマットを訪れ、シンプロン・パスを車で越えて、北伊太利亜の湖水地方への旅も伊藤と一緒だった。

この旅からアイガーの麓へ戻るとまもなく、英国々王ジョージ六世の戴冠式に参列された秩父宮殿下御夫妻が、グリンデル



フィンシテラールホルン，フギ・ザッテルにて
（右）F・ブラバンド氏，（左）S・ブラバンド氏。
（昭和12年8月藤島写）



昭和12年7月グリンデルワルトにて　左から筆者，泰輔
伊藤秀五郎氏，サミュエル・ブラバンド氏

ワルトにお立寄りになり、一ヵ月近くも御滞在になった。既にこの頃、日支事変が始っていたこともあり、殿下は御休養のための御滞在とあって、山に登られるはずもなく、むかし馴染のガイドたちと久濶を叙されたり、村の小径を妃殿下とおふたりで散策されたり、ときにテニスに興ぜられたり、というふうであった。僕が山から戻ってお目にかかると、どこへ登ってきたか？　どんな具合だった？　とこまかいお話があるのだった。殿下の御胸中には、嘗てのアルプスの峰々の思い出が、大切な宝物のようにしまっておありになったと、拝察されたのである。

田口兄弟も事変の始まる前に日本を離れたのだが、亡くなった会員山崎春雄（一二八九番）先輩のように、日本からシベリア経由グリンデルワルトに直行とくれば、ちょうど僕と落合い、アルプスでの僕の収穫はずっとゆたかなものとなったろう。たまたまロンドンに一旦落ちついたもので、兄弟との山登りは、翌一九三八年春まで待たねばならなかった。しかし、これは前にも書いたように、十二分に楽しい山登りであった。僕のアルプスでの登山はかがやかしいものでも、勇ましいものでもないが、澄みきった空と乾いた空気、山麓の小綺麗な村での滞在、よく整頓された居心地のよいヒュッテの泊り、壮麗な氷河と岩峰の登攀、ガイド達との出会い、綱を結んだ仲間、それらの思い出は年をへるとともに、いよいよ甘美なものとなって、僕の心によみがえってくるのである。

## 日本の山・老年の山

アルプスで、あとになって考えれば、すべて結構ずくめのた

っぷりした、山登りをやってきたからといって、祖国日本の山はもう登りたくないというようなことはない。標高は低い、氷河はない、山小屋は……と数え上げれば、アルプスとは大分様子がちがう。しかし、ちがうのは何も山だけではなくて、スイスと日本では国柄がまるでちがうし、自分自身の生活にしても、大名から足軽に成りさがったぐらいのことはあっても、文句はいえないのである。

その上、山登りというものは、実際に自分の足で山に登らないことには、話にならないのであって、過去の回想だけにたよっている訳にはいかない。辻村伊助先輩のように、或はまたヘル槙のように、年をへてまた再びアルプスにまみえる幸運にめぐまれることを、僕とても夢みないではなかったが、おろかなるいくさのために、そんな望みは叶えられないことになってしまった。かといって僕が嘗つてみた佳き夢を、もう一度みたいからなんとかして欲しいと、大方の喜捨を托鉢して歩いたとて、誰も相手にしてくれる筈もあるまい。だが僕は山に登りたいし、また山へ登らずにはいられないのだ。

幸い日本に山は多いし、日本の山にはアルプスの山々にない味もある。若いときから登りつづけてきた日本の山の持味を、たのしいとおもえないほど僕は感受性がにぶくなってもいない。

無作法な人種との汽車旅行も、田舎の宿の粗食も、山小屋のあまり快適といえない泊りも、山登りのためとあれば我慢するだけの忍耐力も、まだ持合せているのである。これも或いは西欧の水準と比べると、足軽並みの生活の賜物かもしれない。

そこで前に書いたような山を、僕は倦まずに登っているのである。そうして常にたのしいのである。僕は一八九六年の生れだから、もう老年といっても、まだ早すぎると横槍も出まいとおもうが、まず僕ぐらいの年齢ならば、こういった山登りは出来るということなのだ。日本の山は若い時に馬鹿でかい荷物をかついで、極地法ゴッコの対象にしたり、無理に人工登攀の材料にするのもいいが、老年に及んで心静かにたのしくさまよいあるくのに、丁度手頃な山なのである。

標高は低くても、峻嶮な山容をもっていなくても、そういう山はそれなりに、登るに値いするものがあるのだ。こんなことを考えると、僕の頭に浮ぶのは『雪線の下』という本である。アルパイン・ブックにしては、珍らしく写真が一枚も入っていないこの本を、久しぶりに取出して、僕の好きなその序文をまた読みかえしたのである。

この本の著者ダグラス・W・フレッシュフィールドについては、その逝去（昭和九年）の翌年、松方三郎君が「山岳」に書いた評伝が、『アルプス記』（昭和十二年竜星閣刊）に収録されているので、その中から引用させてもらうことにしよう。

人々は只管に新登路の開拓に打込み、又或る者は既に変態的

ヴァリアンテの発見に夢中にならうとしてゐた。而も一方には早くも「アルプスは登り尽くされた」「登山は行詰った」といふやうな私語きが何処からともなく起り始めてゐた。その時代に、彼は黙々としてたゞその著述を通して一つの大きな抗議を提出した。これこそは正に大きな革命的な仕事であった。彼が半世紀の後に公けにした、彼としての最後の著述に「雪線の下」なる表題を与へたことは、この意味からして全く興味が深い。「自分は登山家である。しかし少くとも同じ程度に自分は旅行家だ」といふやうな一節がこの著の序文にある。「ピッケルを背負って氷の世界を歩いたこともあるが、時には蝙蝠を片手に山の中を歩いたものだ」と云ふ彼の意味は山登りは氷と岩の世界丈けだなんて窮窟な考へは止し給へといふ意味なのだ。尤も彼は彼一流の性格からそんな毒舌は吐かない。たゞコーカサスやヒマラヤやアフリカを跨にかけた挙句の彼からこんなことを聞かされて我々は嫌でも何か考へさせられて了ふのである。彼は山の深さと広さとを教えた。……（同書九十五―六頁）

これ以上僕が蛇足を加える必要はあるまい。英国でもとくに、偉大な登山家のひとりに数えられるフレッシュフィールドでさえ、コーモリ傘片手の山のよさを強調してはばからないとあれば、もともと一介の旅行家でしかない僕が、めったにピッケルなど必要としない日本の山を、心たのしくほっつき歩いたとて、おかしくもないし、不思議でもない。普通の健康状態を保持してさえいれば、六十、七十の坂を越しても、日本の山は登れるのである。老人にたのしむことの出来る山を、かくも身近かに無数にひかえて、これを放っておくことはないと思うのだが、どんなものであろう？

（一九六六年六月）

# ダウラギリⅡ峰　一九六五年

杉田　博

## キャラバン

一九六五年二月二十五日、本隊がカトマンズからポカラに入り、ここでボンベイ、ノータンワ、バイラワ、ポカラと入った輸送隊と合流、ダウラギリⅡ峰を目ざす一九六五年の全日本岳連ヒマラヤ登山隊の、八人の隊員、十六人のシェルパと五トン半の隊荷が集結した。

川喜田二郎氏の紹介による豪商、インドラマン・セルチャンの世話で、六十頭のミュールと六十人の馬方やポーター(註1)が集められた。運賃も、この地方としては比較的安値に、しかも短期間に輸送の手筈が整えられたのは、大の親日家セルチャンの尽力の賜物であった。二月二十八日、予定通りポカラを出発、ミュールの鈴の騒音と共にキャラバンを開始した。

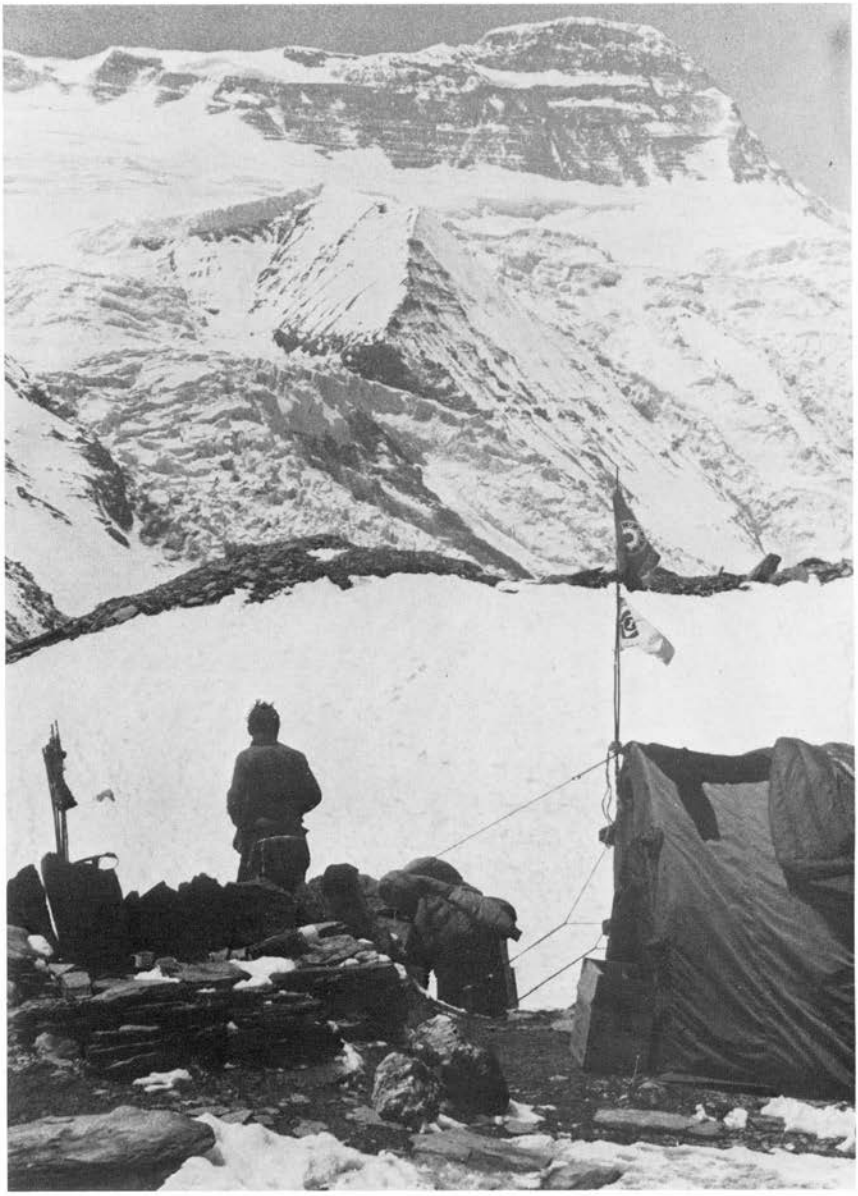
ヒマラヤ登山隊のベース・キャンプ入りは、年々早くなる傾向にあるが、特に、この山は遠い上に、チョルテン尾根の登り下りという難物を抱えているだけに、充分な時間的余裕が欲しかった。その点、本隊のポカラ出発は決して早いものでないと思っていた。

心配していた食糧事情も、ツクチェ以南のカリ・ガンダキ流域は、昨秋の収穫も予想より良く、食糧問題はさして逼迫した状態ではなく、ホッとさせられた。五日目にタトパニの温泉で垢落しして、早春の空気爽かなカリ・ガンダキを登って行った。

かつての交易の町ツクチェも、出稼ぎに往く人が多く、寂びれて人口も減って来たという。気のせいか確かに、何か活気に欠けるようであった。然し落着いた屋並みは、往年を髣髴させるものがあった。天を突く紅の長い幟りが、町端れに高く立てられていて、ゴンパの囲りはとりわけ異国情緒が満ちていた。

ジョムソンのチェック・ポストは、リエゾンのスベディ君の顔で簡単に通過した。外務省から書面連絡が来ていて、駐屯隊長始め大勢に出迎えられ、ミルクと砂糖の、たっぷり効いた紅茶のもてなしを受け激励された。

ジョムソンを過ぎてから、雷が鳴り雹が降るという、険悪なタコーラ高原入りだったが、三月八日、キャラバンの第一中継点であるダンガルゾンに着いた。ここでポカラからのポーター(註2)、ミュールを、チベッタンのポーターとヤクに替える計画であった。



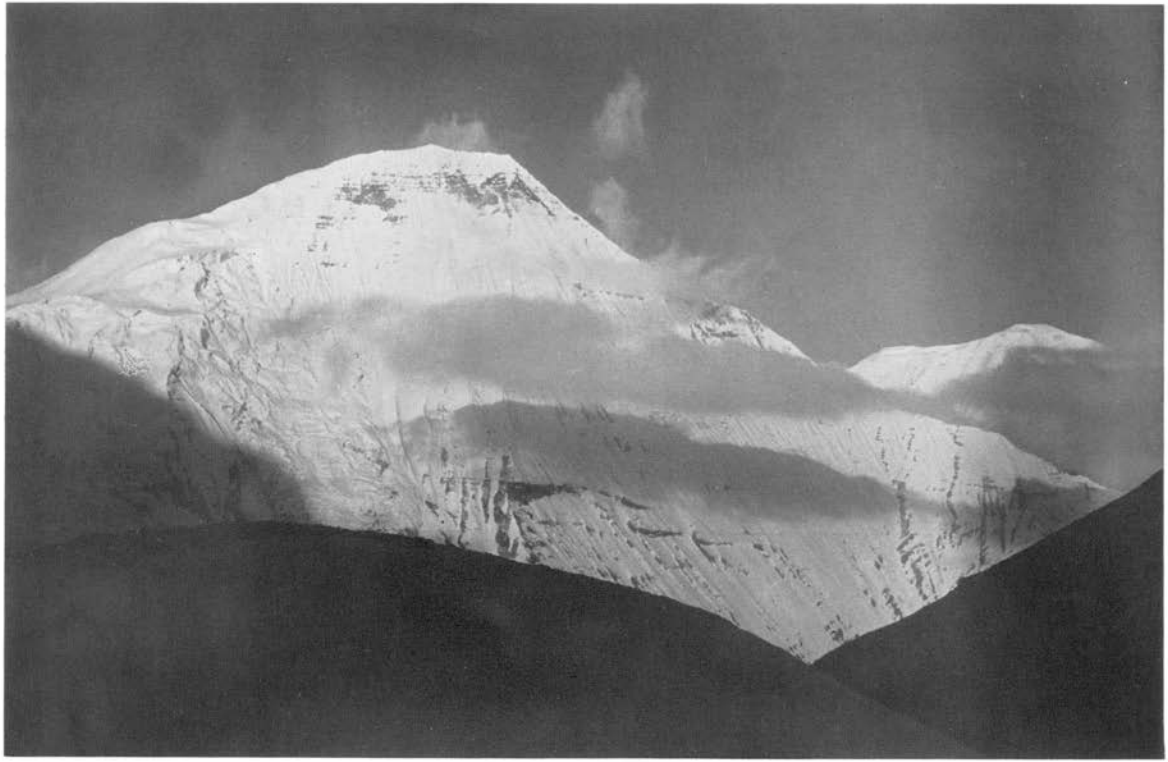
イースト・チューレン氷河上の第3キャンプとダウラギリ四峰
Camp 3 (5200m) on the East-Churen Glacier and Dhaulagiri Ⅳ (7640m)



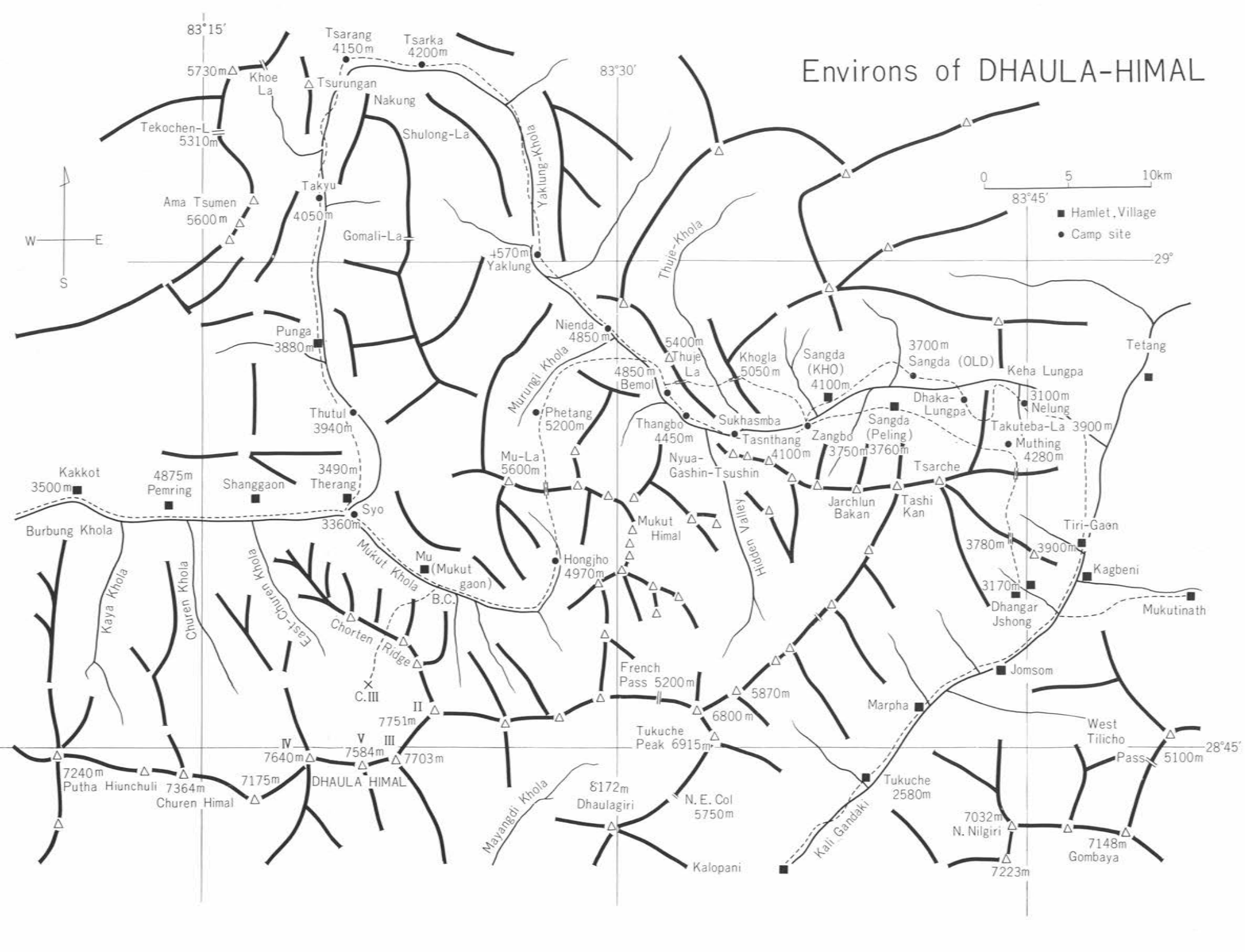
イースト・チューレン氷河の内院より望むダウラギリII峰（右）とチョルテン尾根（左）
Dhaulagiri II (7751m) (right) and the Chorten ridge (left) seen from the inner sanctuary of the East-Churen Glacier.



バルブン・コーラのプンガ附近からダウラ・ヒマールを望む（左からダウラギリII峰，III峰及びV峰）
Dhaula Himal Range taken from a point (3950m) near Punga in Barbung Khola.
Dhaulagiri II (7751m) (left), DIII (7702m) (center) and DV (7584m) (right).



1959年慶応隊の命名になるトライアンギュラー・ピークを第3キャンプから望む
Triangular Peak (7250m) seen from Camp 3. This peak has been named by a Japanese expedition in 1959.


Environs of DHAULA-HIMAL
83°15′
83°30′
83°45′
29°
28°45′
0 5 10km
Hamlet, Village
Camp site
W E S
Tsarang 4150m
Tsarka 4200m
5730m
Khoe La
Tsurungan
Nakung
Tekochen-L 5310m
Shulong-La
Yaklung-Khola
Takyu 4050m
Ama Tsumen 5600m
Gomali-La
+570m Yaklung
Thuje-Khola
Nienda 4850m
Punga 3880m
Murungi Khola
5400m Thuje La
Khogla 5050m
Sangda (KHO) 4100m
3700m Sangda (OLD)
Keha Lungpa
Tetang
4850m Bemol
Dhaka-Lungpa
3100m Nelung
Takuteba-La 3900m
Muthing 4280m
Thutul 3940m
Phetang 5200m
Thangbo 4450m
Sukhasmba
Tasnthang 4100m
Sangda (Peling) 3760m
Zangbo 3750m
Nyua-Gashin-Tsushin
Mu-La 5600m
Tsarche
Jarchlun Bakan
Tashi Kan
Kakkot 3500m
4875m Pemring
Shanggaon
3490m Therang
Syo 3360m
Mukut Himal
Hidden Valley
Tiri-Gaon
3780m
3900m
Kagbeni
3170m
Dhangar Jshong
Mukutinath
Burbung Khola
Kaya Khola
Churen Khola
East-Churen Khola
Mukut Khola
Mu (Mukut gaon)
B.C.
Hongjho 4970m
Chorten Ridge
C.III
French Pass 5200m
5870m
6800m
Jomsom
Marpha
II 7751m
IV 7640m
V 7584m
III 7703m
Tukuche Peak 6915m
West Tilicho Pass 5100m
7240m Putha Hiunchuli
7364m Churen Himal
7175m
DHAULA HIMAL
8172m Dhaulagiri
N. E. Col 5750m
Mayangdi Khola
Kali Gandaki
Tukuche 2580m
7032m N. Nilgiri
7148m Gombaya
7223m
Kalopani

ダンガルゾンでの中継は、インドラマン・セルチャンの紹介で、村の元老キムスンと甥のチョンベルに引き継がれた。ダンガルゾンからは雪もあり、道も悪いため、一人一日に十五ルピーを支払わされた。それも直ぐに出発できず、二十日間の停滞となった。例年に見ない晩冬の豪雪で、今年は特に積雪多量で、予想外の長期停滞となってしまった。この間に全く雪の降らない日は十日であった。しかし、このためチベット的郷土色豊かな、ファラクの村の春祭りにも接することが出来た。なかでも弓道大会での、弓矢を持って蛮声を張り上げて歌う「狩りの踊り」は圧巻であった。

三月九日、沖、天野、テンジン・ギルミン、ジャマン・テンジンが、元老キムスンを連れサングダ迄のルート偵察に出発したが、翌日ダンガルゾンのキャンプに戻り、コグ・ラの状態は良いようだが、ムティンの峠の手前から雪で、キャラバンを進められないと報告をもたらした。天候待ち一週間の後、再びダンガルゾン以北のルート確保の第二次偵察隊を出すことに決めた。沖、大沢、参謀格のギルミン・ドルジェと以下六人のシェルパで、他に案内人としてキムスンの手下のドルジェという馬力のある村人と、ヒムルン・ヒマールで日本隊の臨時ポーターを勤め、善行隊長の証明書を持っているポカラのウルケンとタシの二名をポーターに連れ、サングダ・コオに向け三月十七日ダンガルゾンを出発した。

コオからティジェ・ラまでのルート偵察、出来得ればヤクを通すルート工作をしようと言う計画であった。偵察隊はカリ・ガンダキに下り、ケハ・ルンパの出合から廻り込む低いルートを入ったが、二日目から吹雪かれ、ダハカルンパの岩小屋に三日間、閉じ込められたり、ケハ・ルンパ左岸で道に迷ったが、六日目の三月二十四日に吹雪の中をコオの部落に着いた。コオへ通じる三つのルートのうち、残雪の少ないケハ・ルンパの川床に近い、一番悪い半ば廃道のルートを採った。勿論、ティリガオンからコオ迄は部落は皆無であるが、往き会う旅人も無かった。

偵察が出発後、五日続きの降雪があり、これがキャラバン遅延の致命的原因を結果した。コオに着いた偵察隊は、雪の落着いた二十七日、問題のティジェ・ラをヤクが越えられるかどうかを確認に出発した。ティジェ・ルンパの氷雪上（高度五〇〇〇メートル）に天幕を張り、翌日峠に向ったが、途中で峠直下の一部が雪崩れた。充分雪の安定を待って登った積りであったが、表層雪崩を起した。このショックが大きな雪崩を誘発、上部では底雪崩（一部では雪崩後に地肌が現れた）となり、シェルパのミンマ・テンジンとハクパ・ゲルブが行方不明になってしまった。長さ五百メートル、幅三百メートル、デブリの深さ中心で四メートルという規模から考えて、沖、大沢と村長の息子サンブウが早く逃げたとは言え、無傷で助かったのは奇跡的

であった。

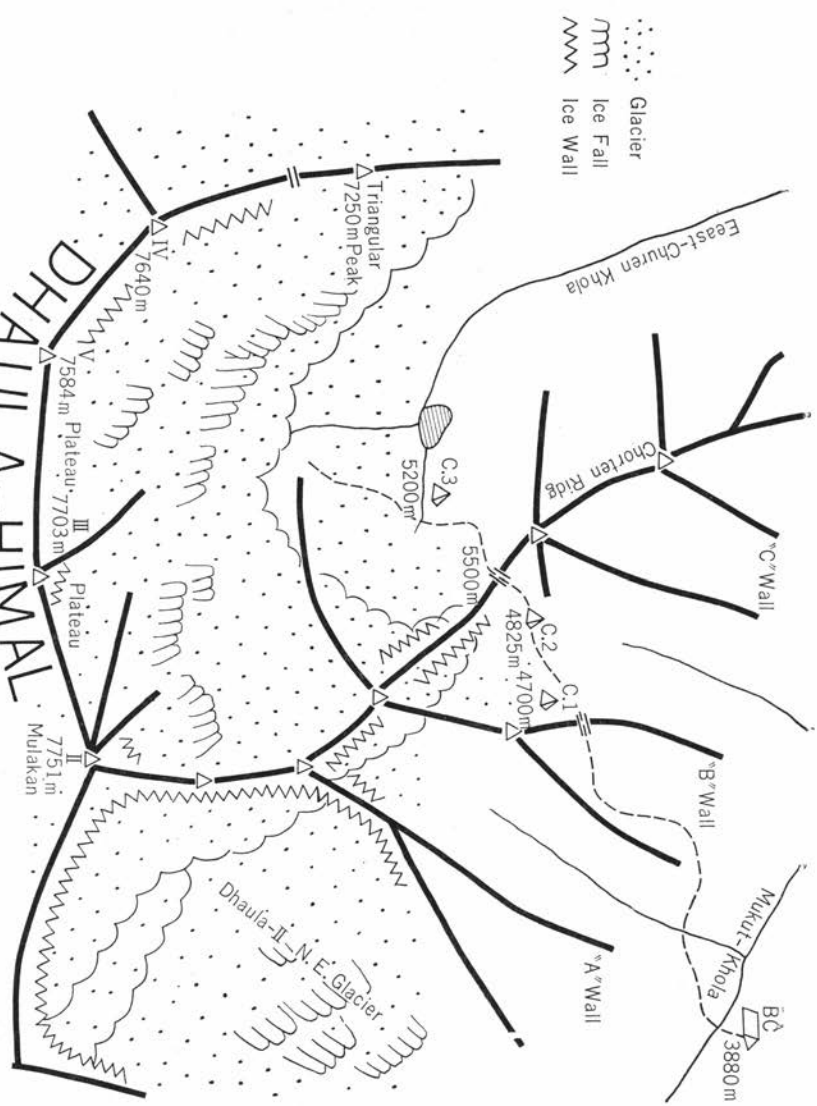
四月二日、本隊は雪の降りしきる中をコオに到着した。翌三日は怨めしいような上天気であった。雪の上にシートを拡げ葬式をあげ、七日に再びティジェ・ラ下の天幕に上り捜索を開始した。九日、十日に夫々遺体を発見し、シェルパの習慣[註3]に従い遺体はティジェ・ルンパの右岸に手厚く埋葬し、夫々一本ずつのタルチョーを立てた。二、三日続く天気も直ぐに崩れて降雪となった。峠の雪は容易に融けず、そのうえ雪崩による事故から村人も尻り込みしてしまい、コオ出発は何時のことか、全く暗澹たる状態になった。

この事故から戦力の低下は明らかになった。もとより、シェルパの数でもその余裕はなかった上に、遭難の痛手で一時は前進も危ぶまれる状態に陥った。隊員はベースに到着後の作業を片付け、荷揚げ、梱包の作り直しなど速攻作戦に到えた。また絶好の高度馴化の機会でもあるので、五千メートルを越える裏山へ、トレイニングに登り停滞期間を過した。

私達もシェルパも日一日と徐々に、精神的にも立直って来た。再三に亘るシタール村長との交渉の結果、ヤクはラ・ニーワ[註4]を越えられないので、今は旧道となった、六十五年前に河口慧海師の通ったシャランタン[註5]と言われるケハ・ルンパの源流を詰め、ティジェ・ラの西側へ廻り込み、ラプツェ・シャルマの高原に出て、勿論ムー・ラが越えられないので、バルブン川の上流、ヤクルン・コーラの源流から下って、北上し、ツァルカから西進、更にバルブン・コーラを南下して、テランからムーへ入る一大迂回案が示された。ポーター賃もさること乍ら、食糧も一週間余計に要り、全く不本意乍ら、やむを得ずこのルートを進むことにした。遂に四月二十四日、ヤク五十頭とポーター、ヤクマン二十五人でコオを出発した。

シャランタンの難所は、気の遠くなる様な断崖をヤクだけ空身で上げ、荷はポーターにシェルパも加わり二日掛りでピストン輸送するという、人獣一体のチームワークで切り抜けた。六日目には順調にツァルカの部落を通過出来たが、プンガを過ぎた所で、ヤクが荷もろ共に断崖から十メートル程落ちた。さきに、カリ・ガンダキで馬一頭を失っており、またかと思ったが、ヤクも荷も助かったのは幸いだった。ヤクの墜落騒ぎで一日遅れたが、ポカラ出発以来六十六日振りに、さしものキャラバンも終って、五月四日、ムクト・ガオンに到着した。

雪崩の事故は別にして、この間の最も強い印象はラプツェ・シャルマの雪原であった。「地の果を往く」感じだよと、川喜田、加藤（喜）、石坂の諸先輩から言われて来たが、まさしく果しない五千メートルの高原であった。赤茶けた裸山、氷を張りつめた川、骨の散乱ばかりか、角をつけた異様なヤクや羊の頭蓋骨が、ころがっている所で、強烈なチベット的神秘さを見せつけられた。


Glacier
Ice Fall
Ice Wall
DHAULA-HIMAL
Triangular 7250m Peak
IV. 7640m
IV. 7584m
Plateau
III 7703m
Plateau
II 7751m Mulakan
C.3 5200m
5500m
C.2 4825m
C.1 4700m
Chorten Ridge
East-Churen Khola
"C" Wall
"B" Wall
"A" Wall
Mukut-Khola
BC 3880m
Dhaulā-Ⅱ N.E. Glacier

ツァルカは唯一最大の部落であった。既に二十日間の滞在で、コオの食糧を喰い尽してしまい、親切な村人はジャガイモの種芋まで譲ってくれた程であった。従って、ツァルカの食糧購入には大いに期待していた。そこで米十キロとカモシカの生肉が片脚、手に入ったのは、たとえ僅か一日分の食糧とはいえ有難く、まさに旱天の慈雨であった。

## ダウラギリII峰

ベース・キャンプは、ムクト・コーラの川床から三十メートル程高い北岸の台地（三八八〇メートル）に建てた。五千メートルの峠を越え六十六日を費したわりには、高度の低い採算の採れないベース・キャンプで、ブツブツ言い度いところだが、平らな台地で陽当りも良く、強風だけが難点だが、快適なサイトであった。目の前には、古代ボン教時代から村人に信じられている、ムー神が宿っていると言う黒い岩山、ムー神山があり、その奥にムクトの雪山が輝いている。慶応隊（一九五九年）がアイス・フォール突破に奮戦した、ダウラギリIIの北東氷河、Hang Dang の末端が見え、大きく口を開いていた。三月末のベース建設が五月になり、既に計画では登山期間を失なってしまった勘定になる。勿論モンスーンまでの僅かの日数を、有効に使う速攻戦法よりない。カトマンズ放送は、東ネパールにモンスーン襲来を伝え、ガウハッティ（アッサム）の電信局が、プラマプトラ河の氾濫で倒潰し、閉鎖されたと伝えて来た。

BC到着の翌日からルート工作と同時に荷揚げが始まった。不幸中の幸に、コオの停滞、五千メートルを越える高所での遺体捜索、なかんずく重労働であったデブリ起しの経験は、第一次の高度馴化には充分であったので、一気に第五キャンプ迄押すことになった。沖、平松、テンジン・ギルミン、他のシェルパ二名で、ルート工作に先発、CI点を確保決定してCIIに向った。CIIへの、B岩壁を西側へ廻り込んでからのトラバースが悪く、三百メートル、フィックスして、BCに帰幕した。遅れを取り戻す窮余の一策として、翌六日、ムーの村人を使いCI迄の荷揚げを敢行した。二十二人の村人が厳選された。このアルバイトが成功し、鼻のつかえ相な斜面をCIへ七百キロの荷を上げた。CIへのルートは、ムクト・コーラ左岸の草付きの急斜面で、チョルテンの支稜、慶応隊の報告にあるB岩壁である。これに取りつき、三角岩壁の下のルンゼを三本トラバースして、コンタクト・ラインに出ると恰好のサイトがあり、オーストリー隊も幕営したらしく、空罐が捨てられていた。

五月七日、一気にCI・CIIを作り、工作隊はCIIへ入り、他はCIへの荷揚げに当った。八日の偵察で、チョルテン尾根の乗り越しのめどがつき、遂に九日の昼に五五〇〇メートルの地点で尾根をクリヤーした。乗り越し点は非常に狭く、やっと二人が立てる小さな窓と言うより、切れ込みであった。南北両面

は、四十五度から七十度の雪と氷の壁で、北面は雪が多かった。出来得れば、チョルテン尾根にCⅢを作りたかったが、天幕を張る所はおろか荷物一つ置く所もなく、荷上げは逆ボッカになるが、やむなくCⅢは省略して計画のCⅣをCⅢとした。

ここに六百メートルのホープライト・ロープを固定し、ステップを充分に作った。危ない個所は氷を落し、荷上げがスピーディに動けるようにした。都合CⅢまで約千五百メートルのロープを使い、ルートが完成した。CⅢは東チューレン・コーラの氷河湖を望む、広いモレインの上に建てた。ここからは七千二百五十メートルのトライアンギュラー・ピーク(註6)、ダウラギリⅣ峰、Ⅴ峰、Ⅲ峰そしてⅡ峰が手にとるように望まれた。高度は五千二百メートルで第三キャンプとしては不満だが、これもこの山の採算の悪いところである。

CⅣは、ここからⅡ・Ⅲ峰のコル下の氷の斜面を四百メートル程トラバースして、アイス・フォールに入る手前に設けることにした。計画はアイス・フォールを突破した雪田の末端にCⅥ、そして万一を考え、Ⅱ・Ⅲ峰の鞍部に最高キャンプを出し、アタック後にCⅥへ戻れない場合の逃げ込み用テントとしてCⅦを出すと言う、最終案に纏まった。然し、遂に遠征の致命傷となった、第二の遭難事故が待っていた。モンスーンも間近かになり、チューレン側からは絶えることなく雲が押し寄せ、雲量もさることながら雲ゆきも黒さをまして来た。

シェルパのあせりも確かであったが、氷河の端末を、Ⅲ峰から派出している支稜に取りつくトラバース中に、ジャマン・テンジンがスリップした。落差にして百メートル位、約四百メートル滑落した。緩斜面であったが、氷が硬かったので停止不能となったという。背骨、足首を骨折し、腰骨ほか打撲の重傷を負ってしまった。CⅡから荷揚げにCⅢへ入った大沢、松岡も加わり、全員で負傷者をCⅢへ収容した。夜を徹して医療器材、薬品の荷揚げが強行され、CⅠにいた広瀬がCⅢへ、夜八時半に入るという懸命の努力の甲斐あって、シェルパは一命を取り止めた。しかし、背骨等の骨折診断で重態なることが判明し、今にも息を引きとりそうなジャマン・テンジンを囲み、CⅢは憂鬱な空気に包まれた。

サーダーは「ジャマン・テンジンの救出を優先して欲しい」と、シェルパの意見をまとめ、申し入れて来た。雪が来ればチョルテン尾根は救出困難になると考えたのは当然で、先ずBCまで降ろしてくれと歎願して来た。これはとりもなおさず、一時前進中止、引いては取っときの短かい登山期間の犠牲、ワン・チャンスの放棄を意味するものであった。

チョルテン尾根の乗越し、休み無しの攻撃で、矢張り疲労があったと思われるが、勇敢忠実なシェルパも遂に刀折れ矢尽きた形であった。さきにシェルパ二名を雪崩で失ない、今また一人を失なわんとしている時、これ以上犠牲を出しては、「ソロ・

クーンブへ帰れない」とまで、サーダーは考えたかも知れない。事態は最悪になった。ベース・キャンプへ戻って、再びCⅢへ上って来てからの陣容の建て直しは、急いでも最低十日はかかる。五人の高所ポーターの中、三人を欠いての荷揚げ力は半減した。一方重傷患者を放置する訳に行かず、その上帰路サングダの食糧は皆無であるところから、ムー・ラを越えても、一週間分の食糧を持ってBCを出ないと、ダンガルゾンへ着けない計算になった。ムーで若干の食糧は購入出来るが、ツァルカ廻りの場合になると、二十五人の半月分の食糧調達は、なかなかむずかしいところである。近づくモンスーン程ではないが、食糧問題も背後の敵となって来た。

総合戦力は半減した感じであるが、その中でも二ヵ月余の苦難なキャラバンの後、劇的な登頂を描いて見たが、十一日に撤退を決定した。撤退決定後も、諸々な考えが頭の中を駈けめぐる。それにしても時間が欲しかった。せめて、もう二週間早くベース・キャンプに着いていたらと、何べんも愚痴を繰り返した。

瀕死の状態であったジャマン・テンジンは、直ぐに降ろすことが出来なかったが、看病の甲斐あって落ち付いて来たので、十三日にCⅢを後にBCへの救出を開始した。

急峻そのものである、チョルテン・リッジを揚げ降ろしする救助活動は、困難を極めた。狭い上りのルンゼでは、ギルミン・ドルジェが担ぎ、八人のサポートを要した。慎重な救出活動が続き、BCへの収容に成功した。疲れを休める間も無く、五月十八日、雪のちらつくムクトのベースを後に、患者輸送の急行キャラバンが編成され、広瀬、加藤が先発、ムー・ラを越え、カリ・ガンダキを下る、最短ルートをカトマンズへ出発した。五千六百五十メートルのムー・ラには、未だ雪が多いため踏跡する村人を説得して、沖、テンジン・ギルミン、タシ・トンドップがサポートし、半ば強引にムー・ラ越へを成功させた。

五月二十日、CIを撤収して全員ベースに集結した。残り六人の隊員は、杉田、平松、天野、松岡の本隊と、沖、大沢のバルブン・コーラを下る南ルートの二隊に分け、重い気持で五月二十二日帰路についた。カラガナが咲くとモンスーンが来るといわれているが、ムーでは美しい花をつけ始めた。

帰路のキャラバンは今後のことを考え、南北の二隊とした。バルブン隊はタラコット、本隊はサングダ・ペリンまでの輸送手配が、ムクトのチョプテン村長により整えられ、サングダでは実弟のシタール村長に引き継がれ、ムクチナート迄のキャラバンを順調にした。ムクチナートからマナン迄は、ムクチナートのチョーチャップが請負ったが、話しに聞く通りの欲張り男だった。しかしマナンへ着いてから、ベース・アップを要求するという要領の悪さだった。リェゾンが約束違反と激昂して、ノートを叩きつけるという一幕もあったが、コオやムクトの善良な村人の親切が比較され、懐かしかった。

しかしマナンでは幸い、トンジェの米商人であるザムリンの帰り車とも思われる、二十二頭のゾッパに巡り会えて停滞の無駄なく、トンジェ迄下ることが出来た。完全なモンスーン期に入り、低地に降りるのを高地人が拒み、途中クディでポカラの本職のポーターに切り換え、雷雨の中、ポカラへ帰ったのは六月十五日、ベース出発以来二十五日目であった。

バルブン隊は、タラコットとドルパタンでポーターを切り換え、各一日停滞したのみで、六月九日ポカラに帰着した。

## 今後のために

私達は食糧事情、人夫事情を優先考慮して、北廻りキャラバンを採ったが、結果は例外とはいえ雪に悩まされるという誤算になった。一九五八年のオーストリー隊はバイラワから南ルートを入り、ジャング・ラが越えられず、加えて人夫事情で悩まされ、ベース入りが遅れ、モンスーンに追い返されたと報告している。南か、北か、この点三人の先輩隊長[註7]の意見もまちまちであったが、タカリーのミュールマンやトルボに精通のセルチャン氏の意見も合せ考え、北廻りのルートを採った。

然しヒマラヤの五千メートルを越える峠が、雪の来たとき如何に通過困難になるか、というより致命的障害になるかを、観念的には警戒していたが、完全に理解消化していなかったと反省している。もっとも今年は、もし南ルートを採っていた場合は、一大惨事を引き起していたかも知れない。それはバルブン川のシャンガオンに、二月から天然痘が流行、交通遮断となっていた。南ルートを廻っていたら、定めし足止めを喰って「北を廻っていれば良かった」と口惜しがっていたか、或るいはシェルパ、ポーターの中に仆れる者を出していたかも知れなかった。何れにしても、この春は八方塞がりの年であった。

南ルートのジャング・ラ、四千九百八十メートルは、帰路に可成りの雪があったことから二、三月の通過は先ず困難と思われるが、これは南を大きく迂回することも可能である。キリケンの語るところによると、竹籔で可成り難渋はするらしいが、日時を費すだけの問題で、逃げ道があり、最終的には南ルートを採る可きと考えられる。勿論、食糧、人夫問題が充分に解決された上でなくてはならない。さもなくばシーズンを分け、輸送隊のみ先発させることを考える可きと思われる。

ムーから奥の院へ入るルートは、オーストリー隊のルートが最良唯一である。内院からのチョルテン尾根は、北面とまた違った凄絶さで、他にルートは発見出来なかった。

CⅢからのダウラギリⅡ峰は、Ⅱ峰直下に至る、雪と岩稜のルートが考えられないことはないが、上部で意外に行き詰りそうな感じである。その場合、Ⅱ・Ⅲ峰のコルへ逃げ込む辺りが悪いので、立ち往生にも成り兼ねないから、充分時間をかけてⅢ峰寄りに廻り込むルートを採り、Ⅱ・Ⅲ峰間のプラトーに上

り、コルから狙う可きであろう。

ムー・ラから見るムーラ・カン(註8)は、一気に三千メートルを切り立っている、美しい白銀の山だった。峠を降る時は正直いって、辛い別れだった。

(註1) ダンガルゾンまでは三十キロにつき八〇ルピーの請負い値段
(註2) 春にはサングダ・コオ以高でないとヤクは得られなかった。
(註3) 本来は火葬が習慣であると言っていた。
(註4) 双子峠の意味で、ここではティジェ・ラとコグ・ラの二つの峠をいう。
(註5) トルボ地方とタコー・ラを結ぶケハ・ルンパの旧道で、シャランタンは危険な道の意味である。
ティジェ・ラのルートは、後にタカリー族により開発された、駄獣のキャラバン・ルートである。
(註6) チョルテン尾根と同様に一九五九年慶応隊の命名による。
(註7) 一九五八年西北ネパール学術探検隊、川喜田二郎隊長。
一九五九年慶応義塾ダウラギリII峰偵察隊、加藤喜一郎隊長。
一九六二年日本大学ムクト・ヒマール学術調査隊、石坂昭二郎隊長。
(註8) ダウラ・ヒマールと呼ばれるダウラギリII峰は、サングダ・コオ及びムーの村人の間では、MULA-KHANという原住民の山名を持っている。

# 西部カラコルム・ディラン峰

塚本珪一

## はじめに

最初私達はガルワール・ヒマラヤのティルスリ山群をねらっていた。今西錦司氏は常に、未知であること、姿の良い山であること、を私達に話していた。その点ティルスリなら問題はなかった。数年間インド政府に許可を求めていたが、国境問題は決して良くはならなかった。私達の前には、いつもインナー・ラインが横たわっていたのだった。許可される見込みがないと知って、カラコルムに目標をかえた。カラコルムなら京都にとっては、十分な資料のある我が庭だった。その歴史は大谷探検隊にさかのぼる。

一九六二年からパキスタン政府にK6を目標として許可を求めた。

一九六三年には塚本、上田の二名が学術研究を目的にパキスタンにはいった。そして一九六四年には、京都隊にディラン峰の登山を許可すると伝えてきた。早速ラワールピンディにいた二人はギルギットに飛んだが、ノーマルから北へは、はいることが許されなかった。

一九六四年、どうしたことか、パキスタン政府はオーストリー隊にディラン峰の許可をあたえた。そして、その年の末に京都隊に対して、一九六五年のディラン峰登山を許可するといってきた。

ディラン峰（七二六三メートル）は西部カラコルムのラカポシ（七七八八メートル）の東にあって、ミナピン氷河源頭にそのまろやかな山頂をみせている。この山の登山については、最初ドイツ・オーストリー・カラコルム隊が、南面バグロート氷河からの登攀の不可能であることを示している。これの刺激をうけた英国隊は、一九五八年にミナピン氷河のKacheli（三七三〇メートル）にベースを置いて、北稜偵察後、西稜のコルから北面を登り、七月六日CⅣ（六五五〇メートル）を進めて頂上をめざしたが、嵐となりTed Warr, F. C. Hoyteの二名が不帰の人となった。

一九五九年、ドイツ・カラコルム隊はHans-Jochen Schneiderを隊長としてミナピン氷河にはいった。悪天候のため頂上直下二百メートルで引返した。

一九六五年、オーストリー隊がミナピン氷河にはいったが、

これも敗退した。

登山ではないが、一九六一年にケンブリッジがミナピン氷河にはいって、学術調査をやっている。

京都府山岳連盟は海外登山委員会をつくり、その特別委員会で隊員を決定していた。実行にあたっては、さらに二名の隊員を追加した。隊の構成は次の通りである。

隊　長　小谷隆一（四〇歳）伊勢藤工業KK、JAC、東大山の会。
副隊長　塚本珪一（三四歳）平安高校教諭、JAC。
マネージャー　松田禎夫（三四歳）松田商店KK。
ドクター　斎藤宗吉（三八歳）
隊　員　小山貢（三四歳）日本専売公社京都工場、JAC。
〃　中山幹夫（二九歳）積水化学工業KK。
〃　高橋正（二八歳）積水化学工業KK、JAC。
〃　高田直樹（二八歳）京都桂高校教諭。
〃　土森譲（二八歳）京都鴨沂高校教諭。
〃　上田純三（二八歳）大阪高校教諭。

## アプローチ

四月二十日、高田、上田の二名はカラチに飛ぶ。すでに送ってある船荷の到着を待つために出発したが、船荷はかなり遅れて五月十七日にカラチ港にはいった。その間小谷は、カラチの外務省をはじめ官庁に挨拶に行って、一たん日本にかえった。結果としてはこれが役立ち、同時期に許可をもらっていた東大キンヤン・キッシュ隊はキャンセルされたが、京都隊はすでに隊員も来ているからという理由でたすかった。幸にも東大隊は再許可を得た。

五月二十日、船荷の到着を知って、塚本、土森の二名がカラチに飛び、二三日には土森、上田の二名がトラックの荷物と共にラワールピンディにむかった。二十三日、小山、中山、高橋が日本を出発し、塚本はリエゾン・オフィサーのキャプテン・サファラーブ、大使館の蒔田氏とラワールピンディに飛び、カシミール省から正式の許可証を受けとった。さらにトラックの荷物をギルギットへ送る準備を進めた。

二十六日、塚本、キャプテン、蒔田はギルギットにはいり、ポリティカル・エージェントに会い、登山隊の面倒を見ていただくことのお願いをした。日本隊はいつもトラブルもなく優れているとほめられ、あらためて先人達の足跡を知った。

二十七日、小山、中山、高橋、土森、高田はギルギットに着き、レストハウスにはいった。次々と空輸される荷物は、レストハウスのベランダに積まれた。

二十九日、十台のジープで荷物と共に小山、中山、土森、キャプテンは、その日のうちにミナピン村のダックバンガロー（二二〇〇メートル）にはいった。次の日から、ロウ・ポーターに持たせるため、一個二〇キロ平均にパッキングを開始した。ラカポシの山頂部が前山の上に白銀の輝きをみせ、アンズは色

づきはじめていた。

三十日、遅れてついたLPガス等と共に高橋がミナピン村にはいる。小谷、斎藤、松田は日本を出発した。

六月一日、小谷、斎藤、上田はギルギットにはいり、塚本と合流し、二日には二台のジープでミナピンにむかった。フンザ・ロードにはいり、チャルトまで右岸につけられた絶望的な道を進む。チャルトの少しさきで左岸に渡り、二時間ほどでミナピン村にはいる。ミナピン村の手前の橋からディラン峰のまろやかなピークが見える。女性的な峰のように感じた。松田マネージャーは追加隊員申請中で、ラワールピンディに足止めである。

松田隊員をのぞき夕刻にミナピン村に集結した。このあたりはナガール・ミールの支配下にあるため、ポーターの雇傭、賃金等はすべて彼がきめる。特に日本隊のために、ジャマダールという職の男がミナピン村に来ていた。

四日、一九〇名のロウ・ポーターと六名のハイ・ポーターと共にミナピン村を出発した。ベースキャンプ予定地のタカファリまでは、一日で行けるところであるが、一九〇名のポーターと一緒では、タカファリという牧草地までで一日かかる。芝生とトウヒのすばらしいキャンプ・サイトだった。その夕、火をかこみ、やっと山へ来たという安らぎを得た。ポーター達の祈りの声は、ヨーデルのように冷たい空気をふるわしていった。

キャラバンの二日目は、前方のカールを登りBCのモレーンまでで、時間は三時間あれば十分だった。前日に塚本と中山がBCまで偵察しておいたから、悪場には先発隊員がザイルを固定した。

夕方までに、テントが五つはられBCはできあがった。

次の六日からCIへのルート偵察と荷上げがはじめられ、七日にはCIを三千九百メートルの氷河上につくった。

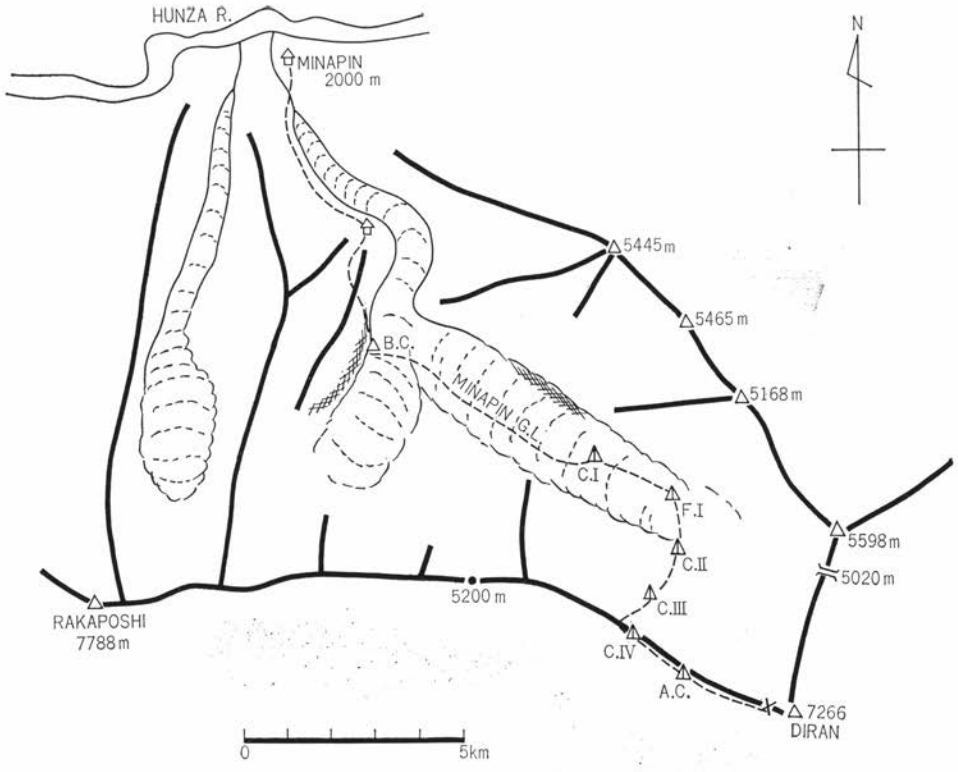
## 頂上への道

私達の手もとには、ドイツ隊のH. J. Schneider 隊長からもらった地図と写真があった。写真には、彼が鉛筆で記入してくれたルートが示されていた。ドイツ隊は相当この山では苦労しているから、彼の教示にだいたい従う方針であった。

ラカポシ頂上の少し東、丁度BCの正面の岩壁はたえず大きな雪崩が音をたてていた。さらに東へヒマラヤひだのやせた尾根が、ディランとの最低鞍部の手前まで続く。そして尾根は広くなって頂上にいたる。

ラカポシの少し東からの氷河が、BCの南でミナピン氷河と合流している。

CIまではほとんど平坦であるが、小さな起伏が多く、いくつもの流れがあらゆる方向に流れていた。丁度弥陀ガ原の五月と同じような感じだった。


HUNZA R.
MINAPIN
2000 m
N
5445m
5465 m
5168m
B.C.
MINAPIN G.L.
C.I
F.I
C.II
C.III
C.IV
A.C.
5598m
5020m
7266
DIRAN
5200 m
RAKAPOSHI
7788m
0
5km

MINAPIN GL.

BCからはルートのほとんどが見える。トランシーバーもしたがって良く使えた。だがBCに備えつけた親トランシーバーは、帯電して二日ほどで使用できなくなった。

CIとCIIの間に中間キャンプFIをつくらねばならないことになった。というのは、CIからCIIまでは長すぎるとポーターがいうのである。彼等はデポということが理解できないのか、一たん荷物を置いてしまえば一つのキャンプと考え、テントを張れば終りまで、そこを事実上のCIにしてしまった。たしかに、CIからCII、CIIIと連続的な行動は無理だった。CIをもう少し上部へもっていくべきだった。

FI（四四五〇メートル）、CII（四九〇〇メートル）、CIII（五四〇〇メートル）と、大斜面の雪崩のルートの手前にキャンプを進めた。CIIまではドイツ隊のルートとほぼ同じであるが、CIIIの位置とCIV（コル）へのルートは違うように思う。

六月十二日、CII建設にむかう。丁度この日頂上直下からはじまった大雪崩が、ルートのすぐ東を通り、氷河源頭部の底まで落ちた。あまりに大きい雪崩なので、かなりのショックを受けた。近くを行動中の隊員、ポーターは強い風を受けた。結局CIIの建設は次の十三日となった。

十三日、高田が高熱をだす。BCから登って来た上田が、同様に高熱のためにたおれる。土森、中山がCIIを建設した。

十八日、東大隊とミナピン村まで来た松田隊員がBCにはいる。これで全員が揃った。この日小山、高橋とハイ・ポーターのレイハン、グルが、CIIからコルへのルートを開いた。二十日には土森、中山はFIからCIIIにはいり、続いて高田、上田もルート工作にCIIIへむかう。CIIIは建設され、下部の物資もどんどん上げていった。

二十一日、隊長、ドクターがCIにはいり登頂時の指揮をとることになる。この日CIV（コル）に物資の一部がデポされる。

二十四日、土森、中山、小山、高橋、グル、アリシャはCIIIからCIVに達し、小山、高橋、グル、アリシャはCIIIにもどる。

二十五日、土森、中山はAC予定地まで偵察にでる。小山、高橋はCIVにはいる。

これで一応登頂への準備がほとんど出来あがった。もっと時間をかけて、登頂態勢にもって行くべきであるとの意見もあったが、この山はそうのんびりとやるより、むしろラッシュをかけた方がよいように判断した。天気の変化も一応の周期はあっても、二四時間内の変化は激しいものがある。ミナピン氷河上の雪の融けぐあいも、きわめてスピーディで、クレバスの幅もどんどん大きくなる。

一応登頂へのチャンスであると判断した。この日の一六時、隊長はトランシーバーでCIVを呼出し、もし明日晴天であれば、中山、土森を登頂隊員として、小山、高橋はそれをサポートしてほしいと指示した。

二十六日、快晴で雲一つない。八時にCⅣパーティから交信がある。小山の判断で登頂隊員は小山、土森、サポートを中山、高橋とするとのことである。一三時、AC予定地（六三〇〇メートル）に着いたといってきた。一七時三〇分中山、高橋は無事CⅣにかえりついた。

その夜のラジオ・パキスタンの京都ディラン隊向け天気予報は、六千二百メートル、晴、風向三三〇度、気温マイナス一度、風速四五ノットと報知する。四五ノットの風速は気になる。英国隊は風で飛ばされたことを思いださせる。

二十七日、快晴である。

——小山隊員のノートから——

「ドクトルの昨夜のお祈りが効いたのか、一応晴れている。しかし、どうも雲行きが気にくわない。下からは、よくなりそうだと云ってくる。荒れだした。苦しいのはこちらだから、何故よくなると解釈出来るのかと、文句をつけたら、ただ単に何となくそう思う程度らしい。

ここでアタックに出ないと、食糧、燃料の補給などでずいぶん日程が狂うので、たいしたこともあるまいと、そのまま行く。

土森隊員は、こわれて変質した錠剤をのんだおかげで絶好調とは云えないが、常人より強い彼のこと、大飯を食われ計画が狂うよりましだ。

ルートはいきなりとんでもない急なカベで、カッティングを強いられる。ここの降りは壁の方を向かないと、降りられない程の斜面だ。これを過ぎると割合楽な稜線がしばらく続く。

一二時頃大きな三角の岩を過ぎる辺りで、心配していたとおり荒れてきた。だんだん視界が悪くなり、雪の状態も大きなシュカブラが出来ていて、折角登りかけたら、崩れてもとの所にずり落ちたりして、歩きにくい。

一三時頃CⅠの隊長と交信、あと二時間はかかるだろうと答えておいたが、年齢のことを考えずに頑張れと云われて、苦笑してしまう。次の休憩の時、ツェルトをかぶったら暖かくなったので、ついつい三十分程居眠りをしてしまった。

このあたりでの行動は、われながら腹の立つ程ノロノロしている。動かないと何の苦しさもないが、少し動くと息切れがはげしく、立ち止らざるを得ない。もう高さはそろそろ七千メートルだろう。

ようやく一五時頃、頂上直下に見えていた岩のところへ着いた。ここからなら一時間程で充分頂上へ行けるはずで、高さにしてあと百メートル程、それに頂上稜線は水平で、一番高い所がかなり遠いとしても、距離だって一キロメートルもないだろう。日本の山なら二〇分程と見た。

しかし、吹雪はつのり、もう殆んど何も見えないし、ここから上はテラテラに光った氷なのは先刻見届けてある。疲れてもいるし、吹き飛ばされるのも好きではない。何しろ辺りが見え

ないのだから」。

一五時すぎ、土森よりビバークにはいるとの交信があった。頂上直下の岩の一ばん上あたりにいるとのことである。七千二百メートルの地点と判断した。隊長は二人の装備をたしかめる。完全であるとは言えないが、小山は、日本の冬山のビバークよりましだと言ってくる。

結局、隊長はビバークを許可した。

二〇時一五分の交信では、土森隊員が少し疲労度が大きいと言ってくる。

ひと晩中トランシーバーをあけっぱなしにしてドクターと交替で起きていた。

二十八日、ディラン上部にだけ雲がかかっているが、快晴の部にはいる。

六時、土森から交信がある。隊長は下山を指示する。一一時三〇分、再び交信があって、下山をこころみたが視界悪く、ビバーク地点にもどったと言ってくる。

また悪いことに、CⅣの高橋が発熱してしまった。FⅠの松田、イサナリがCⅠへ、CⅠの上田、レイハンはCⅡに登る。CⅢのアリシャとグルがトランシーバーをもっていないことは、大きなミスだった。

小山、土森は一六時四五分、三角岩の下のクレバスでビバークすると言ってくる。

二十九日、晴、五時一五分土森から交信があって、ACへ一四～一五時にはおりると言ってくる。上田、レイハンはCⅡからCⅢ、さらにCⅢのアリシャとグルをCⅣにむかわせた。小山、土森は案外早く、九時にACに着いた。

三十日、快晴、中山、グルがACにむかう。アリシャは頭痛で動くことができないとのことである。上田は、CⅡが雪崩でなくなっているのではないかと、昨日云っていたが、この日はレイハンとFⅠまで一気に下山してしまった。

アリとフセインに第二次の食糧をFⅠまであげさせる。二日もあれば、第二次アタックをするだけの食糧、装備は上部キャンプに揃うのであるが、人間がだめである。病人が続出するありさまで、一応コルまで登った隊員は、CⅠまで下山して高所順応をしているのだが、やはり高所の影響が今頃になって疲労と共にでてきたらしい。

高熱、戦慄、呕吐といった症状を見せるので、何か風土病ではないかと心配したが、下界でのカゼも四千メートルをこえると、戦慄、呕吐をともなうのであるとの結論をだした。

一四時、中山、グルはACに着き、小山、土森と合流、そして一八時無事CⅣにもどる。

七月一日、土森、高橋はCⅢ、小山、中山、グル、アリシャはFⅠまでくだった。CⅠは雨、FⅠ以上は雪となる。

二日、土森は発熱、高橋は頭痛を伝えてくる。CⅢは三〇セ

ンチの積雪、ＦＩでも同じくらい積もったとのこと。

三日、ＦＩの上田、中山、ポーター四名がＣⅢへ登り、中山がのこり、上田、高橋がＦＩにくだる。隊長、斎藤、松田はＢＣへ。

四日、天気は悪い周期にはいっているためか、上部では雪、ＣＩでは雨である。小山はフセイン、アリとＦＩに登る。再びＣＩへおりてきたフセイン、アリと塚本がＢＣへくだる。

社会人であるための悩みがでてくる。平社員ならいいのかも知れないが、経営者ともなれば、そう長く、こんなところにいることはできない。隊長、ドクター、松田は時間切れである。

五日、ＢＣはほとんど雪がなく、村から登ってきた羊や牛が草をくっていた。ＦＩのイサナリとグルがＣⅢへ薬品をとどける。

六日、ＦＩの小山、上田はＣⅡにはいる。

七日、隊長、ドクター、松田は下山。ＣⅡの小山、上田はＣⅢにむかい、小山はＣⅢにとどまる。

八日、ＦＩの高橋、アリシャ、イサナリはＣⅡへ、グル、レイハンはＣⅡからＣⅢにはいる。第二次アタックの態勢を一応ととのえようとするのだが、人的資源が空白である。

九日、ＣⅡのアリシャ、イサナリがＣⅢに荷上げをする。小山、中山、レイハン、グルがＣⅢからＣⅣに到達するが、ＣⅣのテントはポールを五センチ程雪上に出しているだけだった。ＡＣも完全に雪の中だという。

登頂断念を決定する。終った。私達のヒマラヤの最初の試みは終ったのだ。山頂に掲げるために、日本からもってきた日本及びパキスタンの国旗も、今となっては隊員のサブザックの中で重さを倍加しているだけだ。

誰れもが考えていた登頂の喜び、夢だった。隊員の中には、パイオニヤー・シップもマンメリーズムも姿を消して、安全登山一色だったと云っているものもあった。その通りかも知れない。岳連という組織、指導者といったものが、登山の自由を破壊していたのかも知れない。だが、事故がなかったことを心から感謝しよう。

七月十六日、タカファリ・モレーンはもとの静けさにかえった。八〇名のポーターと共に下山、ミナピン村にむかう。

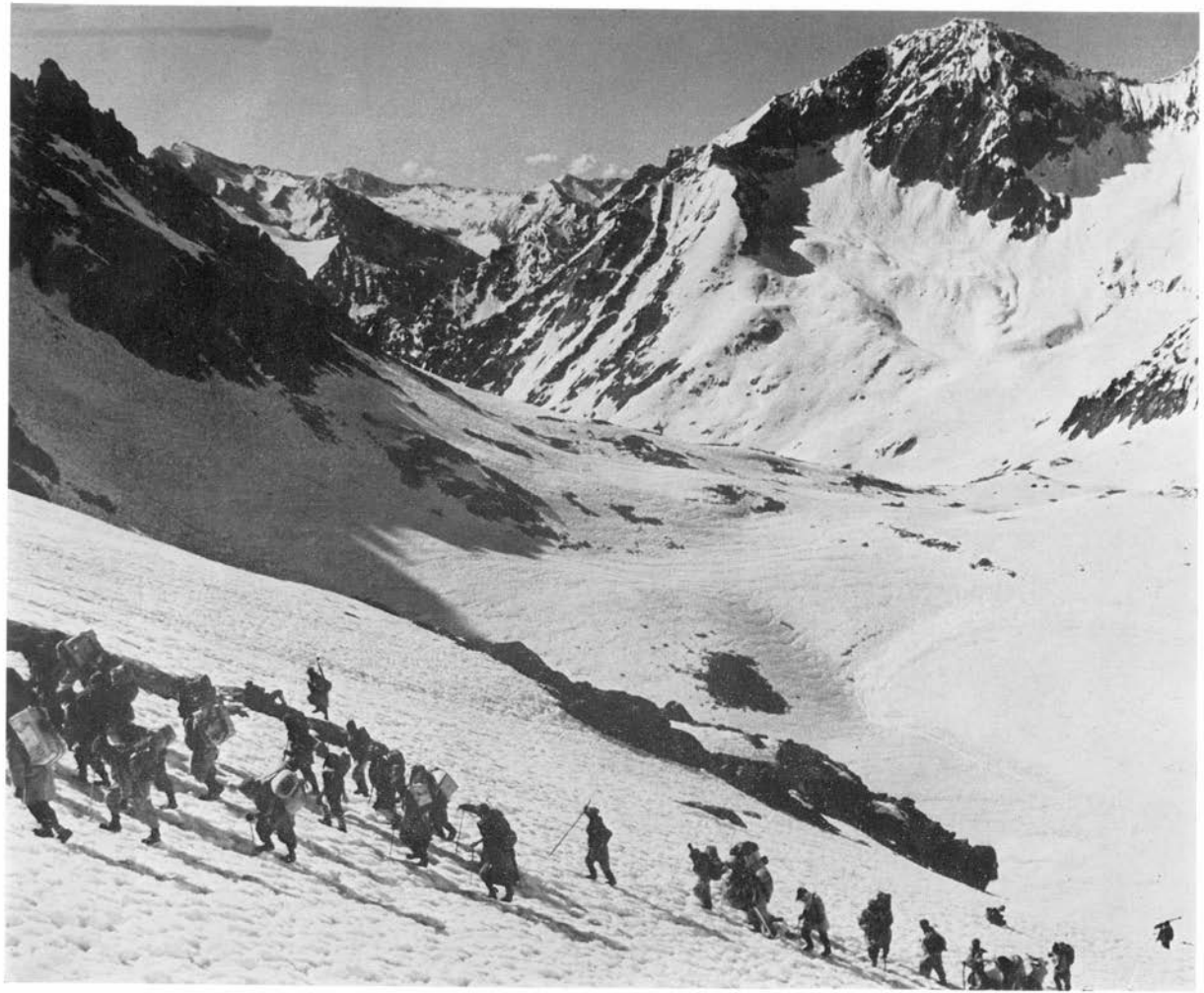
ディラン峰は白く輝いていた。



ディラン（左）及びラカポシ（右）の展望写真
Panoramic view of Diran (7273m) (left) and Rakaposhi (7788m) (right).



コー・イ・モンディ（5280m峰から）
Koh-i-Mondi （6248m） seen from the 5280m Peak on the left side of the Khauir Glacier. （By H. Umeki）



ウェラン峠を登るキャラバンの人夫たち
Weran Pass. Porters of our caravan moving up to it. (By H. Umeki)



コー・イ・モンディの第2キャンプ
Camp 2 on Koh-i-Mondi. (By M. Nishi)



コー・イ・モンディの頂上から北東を見る
A panoramic view north-east seen from the summit of Koh-i-Mondi (6248m) (By H. Umeki)

# コー・イ・モンディ（一九六五年）

矢野　真

九州の片すみである大分県などから、かりにもヒマラヤの一角なりと、とりつくことが果して可能であろうかと云う疑問も不安もあるままに、併し手をつかねては居れない連中が、勉強なりと始めようではないかと集まって「大分ヒマラヤ研究会」なるものが出来たのは、四年前であった。県下各地から志を同じくするものが二〇名そこそこ集まったにすぎず、前途洋々と言えばきこえは良いが、何からどうやったら良いか手さぐりも同様で始まったのである。それこそ会の資産も零からのスタートではあったが、二年三年とたつうちにプランが煮つまっても来るもので、あらゆる観点からして、八〇〇〇メートルだの七〇〇〇メートル等は身の程知らずだということ、更にネパールの情況は楽観はゆるされないこと等から、ヒンズー・クシュ中部山群あたりかと云う結論。こうしてドイツにつぐ第二登であるのは残念だが、コー・イ・モンディ（六二四八メートル）に焦点をしぼったわけである。

他人のすることには、とかくケチがつけたくなる人間は多いもので、われわれの計画が発表になるや、俄然陰に陽に足を引張る連中があらわれた。引張られたからとて、ひきさがっていたのでは何事も出来はしないが、山を知らない人達から、かえってはげまされたりして計画はすすめられた。

ともあれ一九六五年夏に出かけることとし、隊員の決定を見たのは六四年一二月の中旬であった。メンバーは次の通りである。年齢は六五年現在。

隊　長　矢野　真　四〇歳　歯科医
副隊長　西　諒　三二歳　山道具店経営
記　録　梅木秀徳　三二歳　新聞記者
食　糧　姫野和記　二四歳　公務員
渉　外　加藤英彦　二三歳　学生
装　備　江藤幸夫　二二歳　商店勤務

先年アフガニスタンに行かれた松井秀治氏が、鹿児島へ行かれる途中わざわざ立ちよって下さったのは一二月の初旬であったが、何か御話し頂いたなかに、「入国は出来ても、国内旅行許可は二週間あまりしないと取れない」等との御忠告。

それやこれやで矢野、梅木、加藤が先発で一週間早く乗り込むことにして羽田を発ったのが六五年六月一日。ニューデリーで連絡待ちのため二日足止めを喰い、カブール着は三日の午後。ニューデリの暑さにくらべて高原の都が、その時いかに美

しくさわやかに見えたことか。住みついても良いぞなどとつぶやいた程である。併し感心ばかりしているわけにいかない。少少部屋代はボラレそうだが、エアポートから直行したカブール・ホテルに部屋を予約。日ならずしてアリアナ・ホテルという安いところに移動はしたものの、モンダナボシ（ごくろうさん）のはじまりである。

大使館の書記官の方々、商社の人達、技術センターの方達、こんな在アフガン邦人の御好意による御力添えを頂いたことは望外の喜びであった。

警察から内務省外務省などと云うお役所めぐりをさせられることは定法通りであるが、途中で書類がなくなった等は人力の及ばぬことで、つまりアラーの神の思し召しと云うような事らしいのだが、神よりも紙一枚のお墨つきがないことには、カブールの五〇キロ以遠一歩たりともまかりならぬのだから、イキリたたずに待つ以外にない。通訳雇い入れは難航したが、ラジオで放送してもらった応募者を待ち、バハリー君というのに決めた。トラックのチャーターは、技術センターの方がプライベートなコネで交渉して下さったあげく、極彩色のバストラともいうべきものと話がついた。両替は商社の方が骨折って下さり、小額紙幣と硬貨は一七キロに及び、真紅のザックに一杯になった。

全備重量六〇〇キロ余、六名の隊員と通訳をつめこんでバストラが出発することになったのは六月一七日の朝であったから、後発が着いて一週間、先発からでも二週間である。文句を云ったらバチがあたろうというものだ。そのバストラであるが、ざっと次のようなシロモノである。

メーター類は全く動こうとしない！　エンジン、アメリカ製、車台ソビエト、ボディはおたく、タイヤはヨコハマタイヤ等とある。外は花の絵やモスク（寺院）の絵がベタベタかいてあると云う具合。

舗装路をとばすことといくばくもなく、「鉱山省の許可を持たんなら通すわけにいかん」等と云う関所にぶっつかる。安宅の関ならぬラタバンド越とはいえ、内務省のお墨つきがものを云ってくれぬとは心外だが、富樫と弁慶もどきの問答も、日本語―パルシイにもう一つ英語をはさんでなどやれたものじゃない。遊牧民が悠々と行く旧道を大廻わり。

四〇度Cはあろうかと云う熱風にさらされたジャララバードの町、カブールから標高差にして一二〇〇メートルも下ったパキスタン国境へ通ずるところである。小休止の後、夕暮近くまで沙漠とも荒野ともつかぬ平原をバストラは走りに走る。しかも途中で手をあげる連中を、いくらでも屋根（ワクをつけて荷がつめるようになっている）に乗せて金をとっている。夕暮と云っても、ここチャガサライにはもう電気がない。ランプに照らされて、クナール州の知事閣下の応接間に招じられ、旅行許

可証を提示する。夕食を御馳走になり横になると、とどろく瀬音も、ものかわ朝からの疲れでたちまち寝入ってしまった。

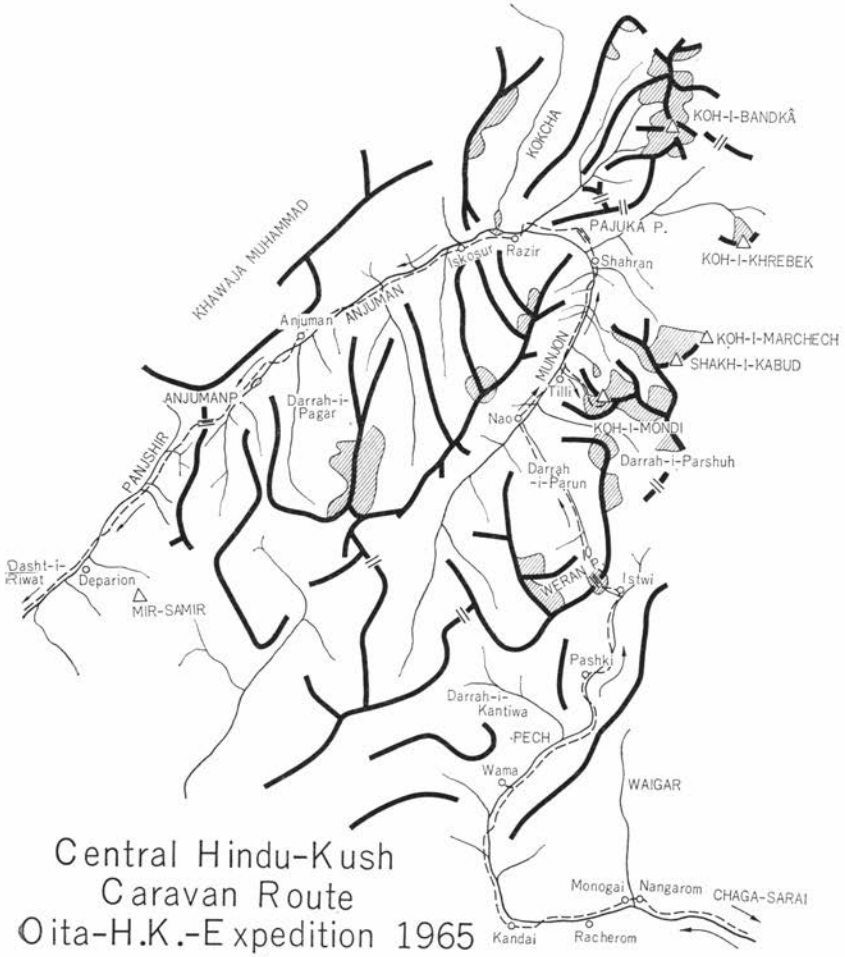
クナール川とペチ川の合流点であり、融雪期で四メートル以上も増水しているという濁流が逆まいている。道はせまくなるし悪るくなるから、ここから先はいやだと言っていた運転手が気がかわったか、ワシの車で良いなどと言う。チャガサライの運送屋とこちらが交渉しだしたりしたのを見て、慾が出たものらしい。

ペチ川はなにし負う急流である。濁流は遠慮もなく道を洗っていて、九度C位の水温の中を何度あるかされたか。そのたびにトラックは麻袋をエンジン・カバーにして、しぶきをあげて走る。あげく、さしものインターナショナル・バストラも二日目の午前中いくばくもなく、危く川に突込みそこねてエンコ。全く用をなさなくなった。プロペラシャフトが折れたのだという。

運転手は人の良さそうな男で、故障でも何でもソッチでまかなうことと約束してカブールを出たのだったから、運賃だけを受けとってトボトボ帰って行くのを見ると、可哀想やらおかしいやらだったが、こちらはいよいよキャラバンの本番である。笑いごとどころか。もともとカブールでは、どこの誰にたずねたところで、車で行けるところまでというのははっきりせず、半日でも一日でも利用出来ただけオンの字と考えて出たくらいだから、二日目で歩きとなっても当然のことであろう。あたり近所から群がって来た連中が、車を引きもどすやら。われわれの荷物をおろしてくれるやら、モノガイというこの村は近来にない大騒ぎとなったらしい。

桑の大木の涼しい高みには、威厳にみちた老村長以下村の顔役たちが立ち並んで登山隊を迎えてくれる。州知事閣下は陸軍の将官でもあり、われわれの行く先々まで、伝令を走らせるなどしてくれてあるらしく、モノガイでのモテナシを手始めに、山奥の部落までその絶大な権力はしみわたっていることを味わうこととなった。

人夫はすぐ集まったが、三〇キロはとても無理で、二五キロでもイヤな顔をするくらい。今後ヒンズー・クシュに入られる方々は、そのあたりを考えて居られた方が良いと思う。煙草は一六歳位のまでがねだるし、一五分も歩るけば一〇分位ビシビシ（すわれすわれ）と声をかけて荷をなげ出す。昼はたっぷり三時間程休み、桑の実の熟する頃で、これを見つけると一歩も前へ進まずむさぼり喰う。もっとも二升も三升もとれるしろものではあったが。日に五回の祈り、これは絶対である。郷に入っては郷にしたがえというのが、今こそ大事な教訓であることを思い知らなければならなかった。ベース予定地までは一週間、などというこちらのスケジュールは、全く通用しないし、先様の知ったことではないわけだ。




Central Hindu-Kush
Caravan Route
Oita-H.K.-Expedition 1965
(by H. Umeki)

「明日があると思うな」という御先祖様をもつわれわれだが、「今日がなければシアサッテでも良いだろう」ようなお国にお世話になっていることだし、また八百万の神々やその他もろもろの仏様など多勢いらっしゃる国とちがって、全知全能唯一絶対のアラーの神の支配し給う国のこと、一〇日以上かかるというものを、五日でやれの七日で行けのは、神をおそれぬフテイのヤカラかも知れぬではないか。

キャラバン二日目で人夫を交替させ、五人増員して二五人にする。重いと道がはかどらぬと言われると弱い。食糧係などは、どうにも分けたくない梱包もあり、大むくれになるし、会計サンもシブイ顔をするが、ここが我慢のしどころであった。人夫の交替などというゴタゴタがあった日など、歩るいた時は三時間もないのだから、誰にしたところで頭に来るわけだが、それと、通過する部落での歓待も、日程を延引させる大きな原因の一つである。年に一度か二度の御馳走をやってくれるのだから、ムゲに断わりもならぬものだ。

案内について来たムラー（学僧）は六尺豊かな大男で、どこの部落でも畏敬の眼で見られていた。狼などが居るぞと言われ、チャガサライで知事が小銃をもった警官二名とムラー、その息子がついて来た。結局コワイものは出ずにすんだが、ムラーは腕自慢とみえ、日に何回かブッパナシたものだ。煙硝が逆噴して、時折ムラーさまは鼻頭を真黒にするような、旧式のシロモノだったが。

キャラバン最初の関門はウェラン峠であると見ていた。出発前の多事多忙は誰も例外でなく、いわば体力的には最低に近いのではあるまいか。そこで、ワイワイガヤガヤの非能率的としか見えないキャラバン中に、体力の恢復、気力の充実が出来て行ったことを、忘れてはなるまい。

峠の下の部落でまた人夫の総替、面魂からして今までの連中より強そうなのが揃い、面白いことに「峠は雪が深いから人夫を一五人余分につけよう。賃金は二五人分で良い」と言う。もちろん「ビショル・タシャクル（たいへん有難う）」である。

ムラーとその長男、二人の警官はそのままついて来る。警官は「軍隊の二年よりこの一〇日の行軍の方が苦しかった」とこぼしていた。峠越えは、やっぱり楽ではなかった。雪は深く寒さは寒いし、ブッシュがなければノンも、チャイも、果は日々の祈りもそっちのけで登りに登り、下りに下り一五時間はたっぷり。こっちも「ヤメテクレ」と言いたくなったが、彼等にしてみれば、ブッシュが出て来るまで火が焚けないのだから仕方がない。

ウェラン峠（四六六〇メートル）でペチ川とも分れムンジョン谷へ。ヌリスタン山群中、唯一の森林帯を持つといわれる、ペチの深いV字形の谷にくらべて明るい広い谷である。

峠をこえる足かけ三日、部落と縁がなく接待を受けずにすん

で、やや行程もはかが行ったと思ったが、ムンジョンの最奥の部落についた時、何やらホッとして、今までやったことのない部落の屋内泊りをやったら、ダニか南京虫のたぐいに見込まれて、少ないものでも七・八匹、多いので二〇匹もたかられ、氷河でくらすようになっても、刺跡はなかなか治ってくれなかった。その部落はナオという。ナオにかぎらず、虫にやられないためには、決して部屋に泊らないことである。

待望のベース予定地ティリ着は六月二八日正午前、ここで人夫達も案内のムラーも警官も、お役御免で日当六〇アフガン也、日本円にして三〇〇円で「ビショル・タシャクル」（大へん有難う）なのだから、安いと言えば安いわけだが、ムラーには一日五〇〇円の割で支払い、なお息子の分とてプラスアルファを握らしたが、良い顔はしなかった。案内や警官には日当はいらぬ、何がしかのバクシシ（チップ）で良いのだということであったが、人夫にちょいと毛の生えた位のバクシシでは、気に入らなかったのだろう。

河畔の快適な草地にBCを建設、三〇七〇メートルの寒村で二〇戸足らずの部落のようだ。晴天続きなのと、キャラバンが延びたのと、全員元気であることなどから、明日にも行動開始と決める。が実はモンディの姿はここに到っても、はっきりしていないので、ムンジョンに支谷となって注ぎ込んでいる筈の、ハウイ谷から確認しなければならない。

部落の長みたいな男がコルバンジョンという名前だとわかる頃、ダラ・イ・ハウイがこの部落から三〇分も下ったところにあることもわかって来た。「三年前にドイツが来た時ハウイの上まで一緒に行った。上の方はバルフビショラス（雪がとても深い）」等と言い出す。

ティリからは、或いはボッカも自分等でやらねばなるまいと思っていたから、「人夫一〇人集められるか」「ホーバス（よろしい）」と、コルバンジョンが顎を斜めにしゃくって返事した時は、実はホッとしたものである。それにしてもティリの人々からは、モンディの様子は何も聞き出せない。ただコルバンジョンが幾分か知っている程度だなと思えるだけ。

六月二九日朝六時（時計などない筈だが、六時と言えばきっかりに）、人夫達がゾロゾロと来た。通訳のバハリー君を残して、全員でハウイ谷を登ることにする。三〇分ゆるやかな流れに沿って下ると、右岸から急流がほとばしっている。果してこの奥に、モンディ程のものがあるのだろうか、と思う位せまい谷である。赤茶色の荒々しい岩肌を見せて、せまる谷を登ること五〇〇メートル程、急に開けて大きくガッシリしたモレーンが現われて来た。水は伏流となり谷筋は二つにわかれる。右手の方はあまり高くないらしい。勿論左手の方がハウイ谷の本流であり、雪をつけたピークがいくつか見え出した。

コルバンジョンの足どりは確実で、他の人夫達も、ティリそ

のものが三〇七〇メートルなので高地になれているのか、平地の連中のようにブツブツは言わず、長休みもしないようであった。正午すぎ、ガラガラしたモレーンのやや平たくなったところで「ドイツもこのあたりにテントを張った」と言う。四二三〇メートル、C1と決定。約二五〇キロの荷揚げが出来た。

コルバンジョンに指でさしてもらうけれど、モンディは「ここからは見えない」らしいことがわかっただけである。

西、梅木が氷河の末端付近まで偵察に出る。姫野は食糧の区分、江藤は装備の点検、加藤は人夫八名をつれ明日の荷揚げのためにBCへ下る。偵察隊とC1、加藤とC1、夫々三〇分毎位に感度明度のテストもかねてトランシーバーで通話する。コルバンジョンと残った人夫二名驚くまいことか。「マスタル・カントーと話が出来るのか?」

加藤は英語が出来るので、通訳から呼ばれる率が多く、どこの人夫たちも最初に覚えるのは彼の名前だけ。他は十把一からげの「ヘイ・ジャポン」なのである。

三〇日、西、梅木の先導で矢野、江藤と人夫三人、六時にC1を出発、一三〇キロの荷揚げと、C2建設に向う。四四五〇メートルあたりからいよいよ氷河の登り。氷河という字面から、勝手にこちらが造りあげたイメージと、現実のそれとはひどく喰いちがうことは、知らされてはいたものの、こうもガラガラの歩きにくい所だろうとは。真青な池が点々と彩りを添えるのに出会うと、美しいなあと思いはするが。

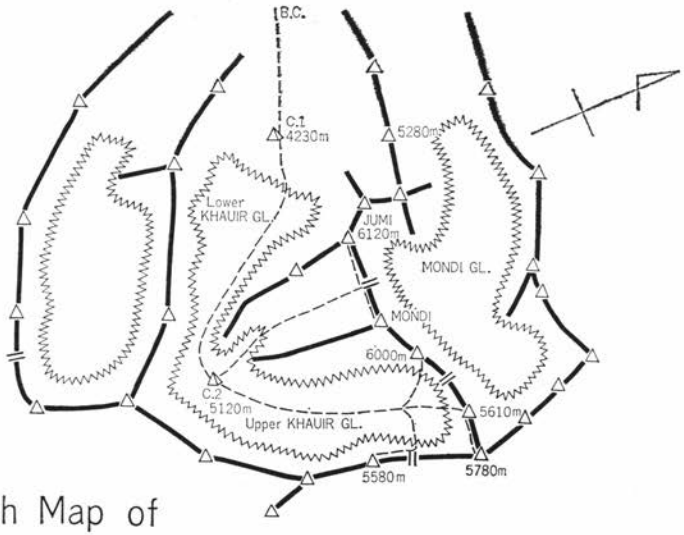
四六〇〇メートルぐらいから急斜面をもって大きく左に折れて上る。七〇〇〇メートル、八〇〇〇メートル級なら、凄いアイスフォールでもかかろうという所だろうか。クレバスは殆んどないが、雪がやわらかくなり足がもぐる。

C1から見ると、谷はこのあたりから逆L字形に折れて、岩の連峰にさえぎられて見えなくなる。このあたりを境に便宜上、上ハウイ、下ハウイと呼ぶことにした。強いと思った人夫達が、頭が痛い薬をくれと言い出す。われわれはそんな症状は出なかったが、正直に言ってアゴが出た。上ハウイ氷河に登り、やや平たい雪面、小さい池が凍っている。このあたりにしましょうやという地点、高度計は五一二〇メートルを指す。C2はきまったが、モンディは実は姿を見せてはくれないのだ。

西と江藤を残し矢野、梅木は人夫とともにC1に下る。翌七月一日、西と江藤は上ハウイ氷河をつめた五六一〇メートル峰と、更に頑張って五七八〇メートル峰まで高度をあげて偵察の結果、モンディの姿をありありとつかんでくれた。偵察は成功である。

この日姫野は三人の人夫を指揮し、C2へ八〇キロの荷揚げ、BCから上って来た加藤、梅木、矢野は久々に完全休養日となる。

二日、C2は休養日、C1から三人で六〇キロの荷揚げ。む




Sketch Map of
KOH・I・MONDI & KHAUIR GL.

つかしい所はないが、梅木が手製の分度器やコンパスで、器用に方向やピークの概念図をつくりながら登る。いつの間にあんなことを覚えたのだろう。

午後三時すぎ、くさった雪に足をとられながらC2に着く。西等が「天気はひどくわるくはなるまいが、時折り雪も降るし、C2は今日一日休んだから、明日でも第一次アタックをやりたい」と言う。西を登攀隊長に、梅木、江藤がやる。姫野はサポートということにする。夕方から咳をし熱を出した加藤は、残念だが仕方がない。抗生物質を投与し休ませる。

七月三日四時二〇分C2を出発する四人。以下記録係の梅木のデータを引用する。

《氷河の右岸を登り、一〇分後九〇〇メートルのアイス・リンネにとりつく。五五〇〇メートル付近から粉雪が降り出す。五六〇〇メートルでサポートの姫野を帰すこととする。五七〇〇メートル付近から蒼氷となり、ステップ・カッティングが苦しい。どうやら雪はやんで青空が見えるが歩みは一〇歩と続かなくなる。一一時ついにリンネを突破、山の背に出る、六〇三〇メートル、大休止。いつか一時間経っている。

大きな雪庇を張り出した尾根は深い雪で、ももまでもぐる所もあり、また時には岩が露出している所もある。いくつものコブをこえること一時間、ひときわ大きなコブ、これが頂上であった。西、江藤が登る。ファインダーの視野で西がピッケルを

大きく打ち振った。午後一時一〇分。こうしてモンディはわれわれのものとなった。

頂上滞在一時間、一度リンネまでもどり、コー・イ・ユミへ往復。下降を開始する。午後の暖気でゆるんだ雪に苦しめられながら、フラフラになって午後六時すぎC2へ帰着。》

四日は朝から雪が降り、前夜つもったのに加えて四〇センチ程もあったろうか。昇華などという現象は、知識としては知っていたが、見たのは始めてである。日が照ると雪がなくなり、出て来た岩肌は乾いていようという寸法。

五日快晴、気落していた姫野も元気になったので、江藤と二人で前衛峰六〇〇〇メートルへ出かけて行った。対岸からルート指示をしてやろうと、西、梅木は氷河を登り、左岸のピーク五五八〇メートルに向った。加藤は気管支をやられたが咳ひどく熱は三八度C程だが食慾なし。無念やる方ないところだろうが、ロジノン三〇ミリと、ビタミン剤の静注、クロルテトラサイクリンを昨日から八〇〇ミリグラム内服させているので、大事には到るまいと思い、折から約束通り上って来たコルバンジョンをつけてC1に下らせる。

西、梅木はルート指示をやりつつも、ハウイ氷河をとりまく群峰の測量？　をやって来たのである。彼等は三日の登頂の際も、各ピークの方位確認等をやってくれたので、モンディを中心とする群峰の概念図は、略々精確なものを持ち得たと言って良いと思う。論ずるまでもないが、その道の玄人が、然るべき器機をもってやったわけではないから、そんな意味でつめよられては困るのだが……。

コー・イ・モンディ（六二四八メートル）、その姉妹峰コー・イ・ユミ（六一二〇メートル）、前衛峰六〇〇〇メートル、前後における偵察行でものにし得た五〇〇〇メートル級を入れて六峰がわれわれのものとなった。異論なくC2撤収と決まる。

六日、急造のソリを旗竿等でつくり、荷おろしをやる。上ハウイ氷河と下ハウイ氷河との境の急斜面は、飛ぶような早さで下る。疲れはしているものの、嬉しさがじわじわとこみあげて来るというところか。

C1では元気をとりもどした加藤が、きちんと整備して待っていたが「困ったことになりました」と言う。バハリー君が待ちくたびれたものか「妻の兄が交通事故で死んだ。カブールへ早く帰れとラジオが放送した」という口上を、人夫が持って来たと言う。われわれのラジオを一台貸していたが、それで聞いたそうである。荷物等は厳重に保管し、帰る途々の部落でも、登山隊の世話を充分やってくれるよう手配して置くから等とメモしてある。疑えばきりがないが、やむを得まい。「ホーバス（よろしい）」と言って人夫をかえす。同時に九日には一〇人の人夫を上げてくれるよう書きそえた。

七日、西と加藤、姫野の三人でC1から東方の五二八〇メートル峰に登る。二〇歳台などは良いもので、二、三日の休養で加藤が終始元気でこのピークを登ってくれたのは、われひとともに喜びであった。頂上を踏んだ峰々は計七峰である。

八日停滞、皆ヒゲヅラのこきおろしや、石集めにやっきとなった。持参のウィスキーはとっくになく、隊長はやむなく局法のエチルアルコールを処方する。クセがなくてうまいなどと、負けおしみでなく思ったのも、四〇〇〇メートルの高みのなせるわざか。

九日、C1撤収、山は薄く雪がついた。正午頃とたのんでおいた人夫も、五人オーバーしてそれも朝九時頃に登って来た。カセギどきというわけか、荷物のうばい合いをやりそうなことになり、コルバンジョンも頭をかかえる仕末だった。無理にさばこう等とあせらない方が良いらしい、仲間うちで話はつくものだ。通訳のバハリー君はいなくなったが、カタコトながらパルシイが通ずるようになっていたし、また現地の人達との接触交流という面では、むしろプラスになったと思う。

ミコシをあげるのに、一日二日をあらそうこともなかったようだが、コースはこの地域を一周するように組んだスケジュールであり、やっぱり一日でも早く先が見たい気になり、一〇日には早々とティリを引きはらうことにした。人夫一八人警官一人。とコルバンジョンが案内役。村中総出の見送りで賑やかなこと。そう言えば、ここに来た時不思議にさえ思ったが、ティリで始めて女たちから「モンダナボシ（ごくろうさん）」「サラマレコム（こんにちわ）」「ホバスティ（ごきげんよう）」等と声がかかったもので、ティリ以外ではカブールでさえ絶えてなかったことである。

その日、パルシュウに入るというドイツ隊（その中にモンディの初登をやったのがいた）に出会うし、数日後英国隊ともすれちがい、また英国の高校生の一人旅等に出会うと、ウカウカして居れない気がしてくる。

アンジュマン谷は様相がガラリと変り、広々として荒々しい。行く程に人夫達も狎々しさが出て来ることは、致し方のないことだが、小ずるさも持ちあわせているようで、何かと言うとピッチをおとしたがる。コルバンジョンに「馬かロバに切替えんと、ムンジョンの人間はナメシャ（だめだ）」と言うと、アンジュマンからそうしようなど殊勝なことを言いはしたが、さてアンジュマン（ここは大きい村落だ）に着くと、村民と結托して、「コタル・バルフ・ビショラス」等と胸のあたりを指す。「峠には雪が胸まである」というわけだ。だから馬でもだめだと、村人たちも相づちを打つ。だまされたような顔をしとく方が良さそうだ。馬は貸さんというし、ティリの連中が本当に荷を投げ出して帰るなら、完全にお手あげだから。

案の定、峠は四二二五メートル、雪は足首も良いところ。さ

すがにコルバンジョンも間のわるそうな顔。併しこちらも、何か一分一秒を惜しんで先を急ぐ必要があるわけでもなかったのだし、ヤイノヤイノ追い上げなくてもよかったわけだろうけど、一日延びればいくらと、ソロバンをはじかねばならぬ会計さんなどは、そうノンキな顔もして居れない筈ではあろう。

ダシト・イ・リワトからのバスは、朝から走りづめに走って夕刻やっとカブールに着いた。カブールを出てまる一ヵ月。七月一八日のことだった。

## 山岳　第六十年

（一九六六年三月刊）

古原和美
近藤哲也
向一陽
樋口明生
島澄夫
山野井武夫
北村泰一
浅野清彦
室田欣一
川崎巌
宮野準治
成瀬岩雄

ギャチュン・カン登頂
ランタン・ヒマール一九六四年
ボリビア・アンデス一九六四年
アンナプルナ南峰登頂
グレイシャー・ドーム登頂（一九六四年秋）
バルンの山々へ（一九六四年）
アラスカの山々
セント・エライアス（一九六四年）
ローガン峰東稜（一九六四年）
ローガン峰（一九六四年）
アルタアル連峰・オビスボ峰登頂
知床岳と知床半島一周の旅
海外登山略報（グノン・キナバル登山、カナダ親善登山、マウント・クック登頂）

追悼
高野鷹蔵氏（前田久吉・中村清太郎・山川黙・三枝守博・藤島敏男）、佳広造氏（武田久吉）、山口国俊氏（浜田一馬）、吉川良平氏（石黒清蔵）、篠原敏弘氏（山本健一郎）、三輪孝氏（小野幸）

ヒマラヤ登山年譜（一九五九年―一九六二年）　田中栄蔵・馬場勝嘉
ヒンズー・クシュ山脈覚え書　吉沢一郎
図書紹介・会務報告・英文梗概
A5判三〇〇頁・写真六四葉・地図一八面

# ミール・サミール紀行（一九六五年）

佐藤之敏（ゆきとし）

ともかく、これはエクスペディションなどと呼ぶべき代物ではない。強いて云うならエクスカーションとでも呼ぼうか。もともと我々の第一の目的は、一九六六年度の一橋大学山岳会カラコルム遠征の許可取付にあったのだが、わざわざ向うに行く限りは、山登りでも、しかも簡単に許可の取れるヒンズー・クシュに、という訳で決まったのである。始めはワハン谷に入りたかったが、やはり許可されなかった。そこで中央ヒンズー・クシュ北部のバンダコール山群に決めたのだが、今度はアフガニスタン北部に蔓延したコレラの脅威のために、これも放棄せざるを得なかった。結局カブール出発二日前に、目標は、第二登にはなろうが、ミール・サミール峰（六〇六〇メートル）と、出来ればその東方のラムガール峠周辺の六〇〇〇メートル近い未登峰に、急遽変更のやむなきに到った。

こうして二八〇キロの荷物と、三人分の一般外貨をひっさげたわが遠足隊三名は八月一二日朝カブールを出発した。なお、カラチから三井物産支店の関口氏が途中まで同行した。

八月一二日朝九時過ぎ、我々は二台のジープに分乗して出発した。道路は素晴らしく良い。話によれば、ソ連の援助で作ったという。どうもアフガニスタンには、こうした外国援助で作られたものが多い。先ずアメリカ、ソ連、西ドイツが三大勢力で、チェコスロヴァキアがそれに割り込んでいる。例えば二つの国際線空港は、北方のカブールがソ連、南方のカンダハールがアメリカ、新らしく出来た立派なホテルはチェコという風に。

むし暑い大都会カラチから、このカブールへ初めて来た時は、空港から市内に通ずるポプラ並木を流れる爽涼な風の匂い、ロバに乗った蒙古系の少年の顔の中に、中央アジアを感じて思わず胸をふくらましたものだが、今こうして東西の競合援助の様を、まざまざと見せつけられると、いささかの驚きとある種の寂しさを禁じ得なかった。

その素晴らしいハイウェイを、すっ飛ばすこと二時間、と云いたいところだが、実際には誰かが、高度計と薬品全部をカブールに置き忘れるという、あまり嬉しくて泣きたくなるような、おおらかなことをやってくれたので、四時間程のロスをまじえて、グルバハールという村へ着いた。ビタミン補給とお楽しみのためということで、ここでリンゴ、ブドウ、それに人間の頭

の二倍もある名物のメロンを、しこたま買い入れて積み込んだ。

そこからジープは、パンジールの谷ぞいの細い危険な道を行く。途中幾度か遊牧民に出くわすが、その都度のろのろと道幅一杯に歩く羊の群が行く手をはばんで、初めの内こそ物珍らしかったものの、しまいにはいらいらしてきた。二〇〇〇メートル以上の高原とは云え、日中風の無い時は、かなり暑い。狭いジープの中を、例の巨大なメロンと人間とが、ゴロゴロ、ガタンガタンとゆさぶられ、埃りにまみれて、メロンはいたみ、人間はふてくされてしまった。

カブールで雇ったペルシャ語＝英語通訳のナジブラ氏は、この中にあって、例の我が陸軍の戦闘帽に似た形の羊毛製の帽子をバッチリ被り、我々が、雪豹が出るからとか、昨年ドイツ人二人が現地人に殺されたからとかいって、嚇かして持って来させた彼の兄貴のライフル銃を、これまたガッチリ握りしめて、頑張っていた。

あたりに夕暗せまる六時頃、フルンジュという村に着き、そこの有力者の家で泊めてもらうことになった。ここで初めてアフガニスタンの現地食を食べたが、主食はノンと呼ばれる、パキスタンのチャパティのようなもので、直径三〇センチ、厚さ一センチ程の円型で大して味もないが、紅茶を飲みながら食べれば結構いける。

民族間の生活慣習の相違というものは、時には旅行者を当惑させ、あるいは、そこに珍妙な光景を生ぜしめる。寝る前に用を足したくなって、その旨を告げると、付添いの者がランプをさげて、その場所に案内してくれたが、そこは何と裏庭の真中で勿論何の囲いもない。どうも彼らの生活には、トイレットなどという気の利いたものはないらしい。まあ、それは良いとして、折からの快晴で月の光が皎々と照る中を、テキは物珍らしそうに見守っていて、一向にその場を去ろうとしない。追払おうとしても、言葉が通じないのでニコニコするばかりである。大体彼らには紙を使う習慣などはない。適当な石ころを捜し、その石ころの適当な角を見つけて、処理する。カラチの公衆便所にも、中に小さな石が沢山ころがっていたようだ。ネパールでは、ヘラのような物を使うと聞いている。それはとも角、今から思えば、あの月明りの下で、ターバンを巻いたアフガン人に見守られながら用を足しているその姿の、なんともはや、冴えないことよ！

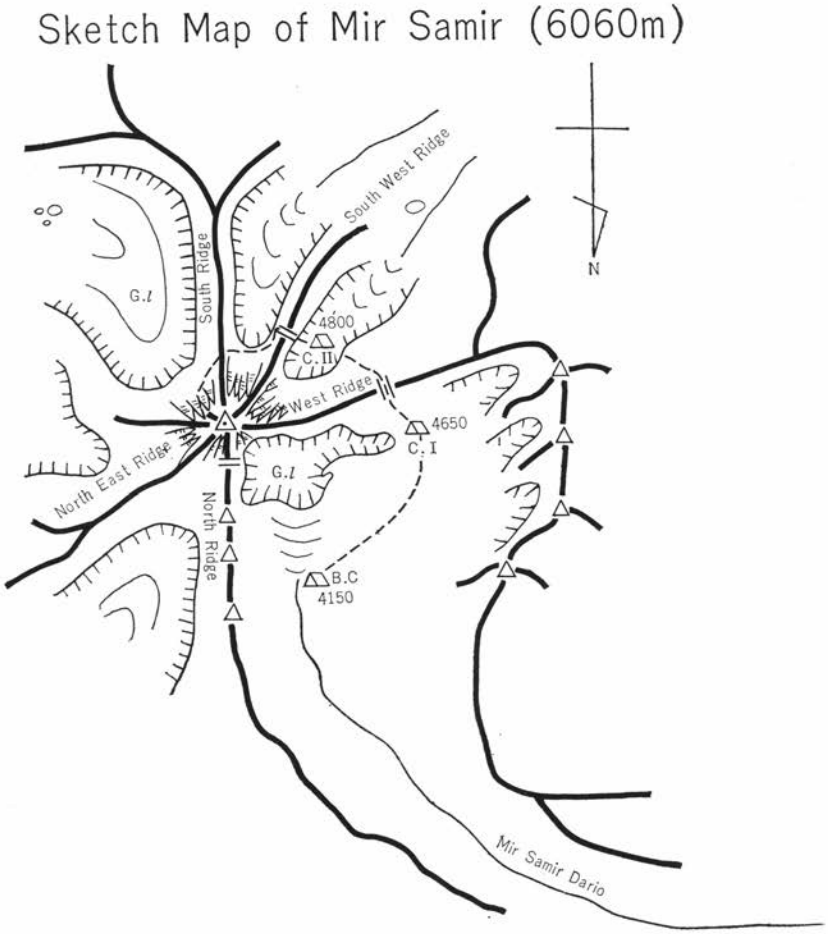
八月一三日、明るい朝の光の中で見るフルンジュは、緑の美しい感じのよい村であった。成人の女を除いて、ほとんど村人の全員が、我々の姿を見ようと集まって来た。。首都カブールを除いた地方では、回教の戒律によって、どんな珍客が訪れても妻が姿を現わすことはない。どんなに親しくなっても駄目である。女の姿が見られないということが、どんなに殺風景であるか、日本などでは到底想像出来ない。

我々はロバ八頭、馬一頭を雇い、村人に見送られて、八時半に出発した。ロバ一頭には、隊員が交替で乗ることにしたが、腹が出た隊長の甘利氏が小さなロバに股がり、足が地に着かんばかりにして、ユラユラと進む様は、まさに喜劇的でさえもある。もっとも二〇貫の彼を乗せたロバの目は悲劇的ではあったが、道はパンシールの谷筋を、時には河面すれすれに、時には遥るか一〇〇〇メートル位下に河を見下ろす急斜面を行く。谷の両側はミルクコーヒーのような色の禿山に囲まれているが、数キロメートル毎に、緑したたる明るいアルプを擁し、大小の村落を育てている。

八月一四日、我々はカウジョンという村に着いた。この地から我々は、目的の山ミール・サミールに源を発し、パンシール谷に流れ込むミール・サミール・ダリオに入る。このカウジョンの高度は二六〇〇メートル、ちなみにカブールは一七〇〇メートル、フルンジュは二三〇〇メートル。全く非能率なキャラバンで、高度の上昇は遅々たるものである。明くる一五日、カウジョンを出ると道はいよいよ峻しく、ロバは恐怖におののいてなかなか思うように登ってくれない。急な岩場にさしかかると、ロバは全くシュリンクしてしまって、付添いの現地人と我々隊員は必死になって、前から両耳を持って引っ張ったり、尻を棒でひっぱたいたりするが、どうも工合悪い。そこえいくと、馬は平気なもので、ぐんぐん登ってくれる。馬の方が幾分高いというので、ロバを八頭も雇ってしまったが、今になってみれば、少々の金を惜しんだことが悔まれてならない。そうこうしている内に二頭のロバが相ついで谷底に墜落し、幸い死にはしなかったが、体の到る所から血が吹き出して、幾分憐れをもよおした。この二頭はもう使いものにならないので解雇し、どうも結核らしいと思われる男をつけて帰すことにした。しかし荷物を取りはずしてやると二頭のロバはヒョッコリ起き上り、結構元気にスタスタ降りて行ってしまった。やはり、ロバでも根性のない奴は駄目だ。

一六日正午頃、初めて目標のミール・サミールが姿を現わした。雪はあまり付けていないが、急峻な岩稜、岩壁で四方を固く擁護された岩山である。黒い程の青空に真白な浮雲を配したバックに、初めて見るミール・サミールは美しいコントラストを成していた。ミール・サミール・ダリオのどんずまりは、まるで美しいゴルフ場である。上方の氷河の末端から流れ落ちてくる氷河の融水は緑の牧場を静かに蛇行して、ここかしこに大小の池塘を残している。我々はここにベース・キャンプを建設した。いや何も建設などという大袈裟なものではなく、テントを一つ、おっ建てたのである。

驚いたことに、我々のベース・キャンプの五〇メートル程上方、見えない所に、イギリスのニューキャッスル大学の遠征隊が、大ベース・キャンプを張っていた。まるでテント村であ


Sketch Map of Mir Samir (6060m)
N
South West Ridge
South Ridge
G.I
4800
C. II
West Ridge
4650
C. I
North East Ridge
G.I
North Ridge
B.C
4150
Mir Samir Dario

る。大小のテント一〇張り近く、観測用機械が乱立している。彼らは隊員一二名の大部隊で、女性一名を混え、いとも賑やかにやっている。それにひきかえ、我々はどうだ。黄色い六人用テント一張りっきり。彼らは既に五週間以上もここに滞在しており、折りしも二名の隊員がアタック中であると。これは一体どうしたことだ。我々は今やっとベース・キャンプに着いたばかりだというのに、一方ではアタック中であるとは。幾ら初登ではないといっても、目の前で他のパーティによって登られた山を、すぐその後に登る気は起らない。しかし結局、彼らのアタックは失敗に終ってしまった。非常な悪天でコンディション悪く、五〇五〇メートルの最終キャンプから五三〇〇メートルの地点まで、往復に一三時間も掛かったそうだ。

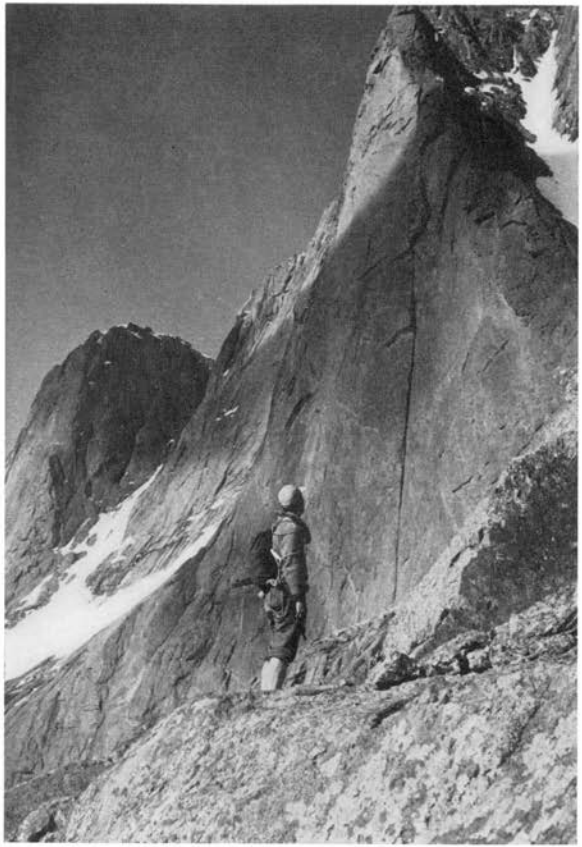
彼らの話から察すると、我々のベース・キャンプ四一五〇メートルから正面に見える、ミール・サミールの左側のスカイラインに当たる東北稜は、一見やさしそうだが、氷と岩の入り混じった平均傾斜六五～七〇度の悪いアレートを成しているとのこと。これは事実、私が後に独り偵察に行った際、確認出来た。日本に帰ってから判ったことだが、一九五九年のドイツ隊（リーダーのハラルド・ビラーはアンナプルナⅣ峰の初登攀者）は、この東北稜から初登に成功しているが、その登攀は実に困難を極めたようだ。西方に長々と続く西稜は、約五〇〇〇メートルの地点から垂直な壁に吸い込まれて消えている。ベース・キャンプから、この山を半周して、ほぼ反対側にある西南稜からのルートが、最も可能性があるとのことである。

そこで我々は、この西南稜へ近ずくためのCⅠを建設すべく、偵察に出かけた。その日丸子氏は、下痢のためベース・キャンプで休養するはずだったのに、我々が偵察に出た後、こっそりと近所の五〇〇〇メートル程の山に遊びに行ってしまった。お蔭で帰って来てからますます調子が悪くなってしまった。大体、それまで下痢でふうふう云って寝ていた男が、幾ら山が美しいからとは云え、ガバっと起き上り、フラフラ山に遊びに行ってしまうなんて無茶苦茶である。もし、これが大きな遠征隊だったら、隊長から大目玉を喰うところだが、そこが我ら小遠足隊の良いところである。ニヤニヤで終りである。

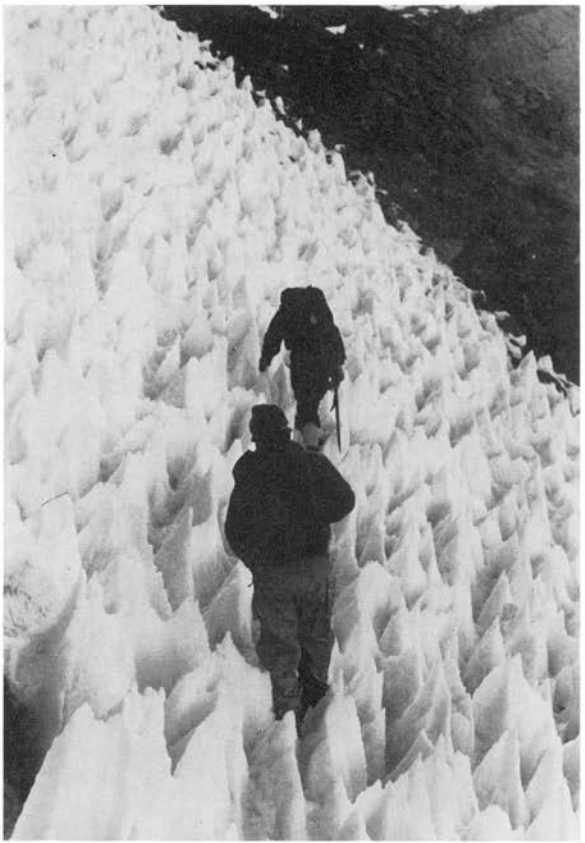
八月一八日、四六五〇メートルの地点にCⅠを建て、一九日、西南稜コルまで偵察。二〇日、私のみ東北稜方面偵察。二一日、一九日の偵察によって、西南氷河から西南稜コルまでの、高差二〇〇メートル程の雪と氷の急斜面を荷上げして、コル上五〇五〇メートルにCⅡを上げるのは、消耗でもあるし無駄でもあるような気がしたので、西南氷河上四八〇〇メートルにCⅡを設け、出来ればそこから先の偵察とルート工作を充分にして、一気に頂上まで一二〇〇メートル余を登り切ることにした。結局、CⅠとCⅡは行程2時間程の近距離に、あい位置することになった。



ミール・サミールの全貌（第1，第2キャンプ間4500mの地点から）。
Mir Samir (6060m) seen from a point of 4500m between Camps 1 and 2.



ミール・サミール西南稜上5100m附近から西壁を見上げる。
Looking up at the west wall from a point of 5100m on the southwest ridge of Mir Samir.



アンデスで云うニエベ・ペニテンテの乱立した所をトラバースする。
On the peculiar snow pillars like as conspicuous "nievepenitente" in the Andes.



フォーレル峰の東南面
South-east aspect of Mt. Forel (3360m) in Greenland.



アンマスサリックの部落
Settlement of Angmagssalik.



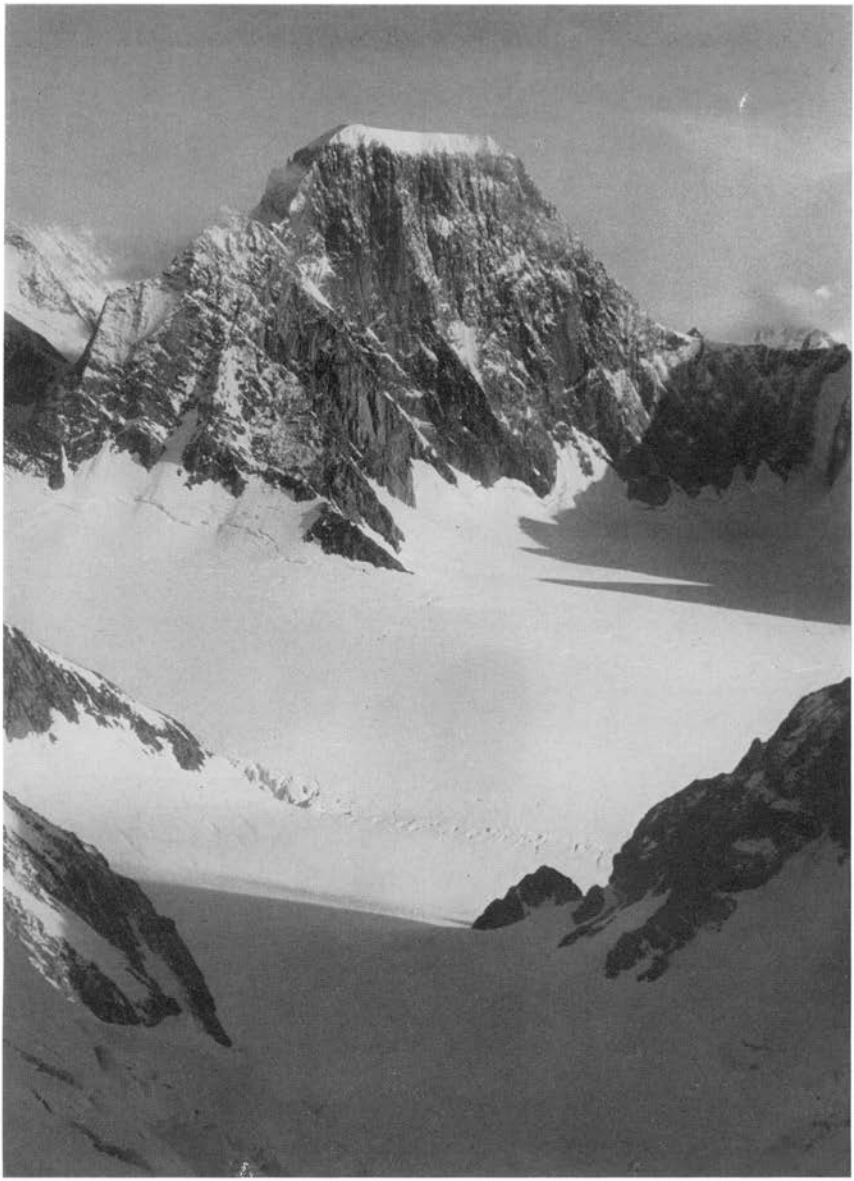
セルミリガック・フィヨルドの氷河
Glaciers in Sermiligàq Fjord.



フェムステョルネンの雪原から北方を望む
View north seen from Femstjernen.

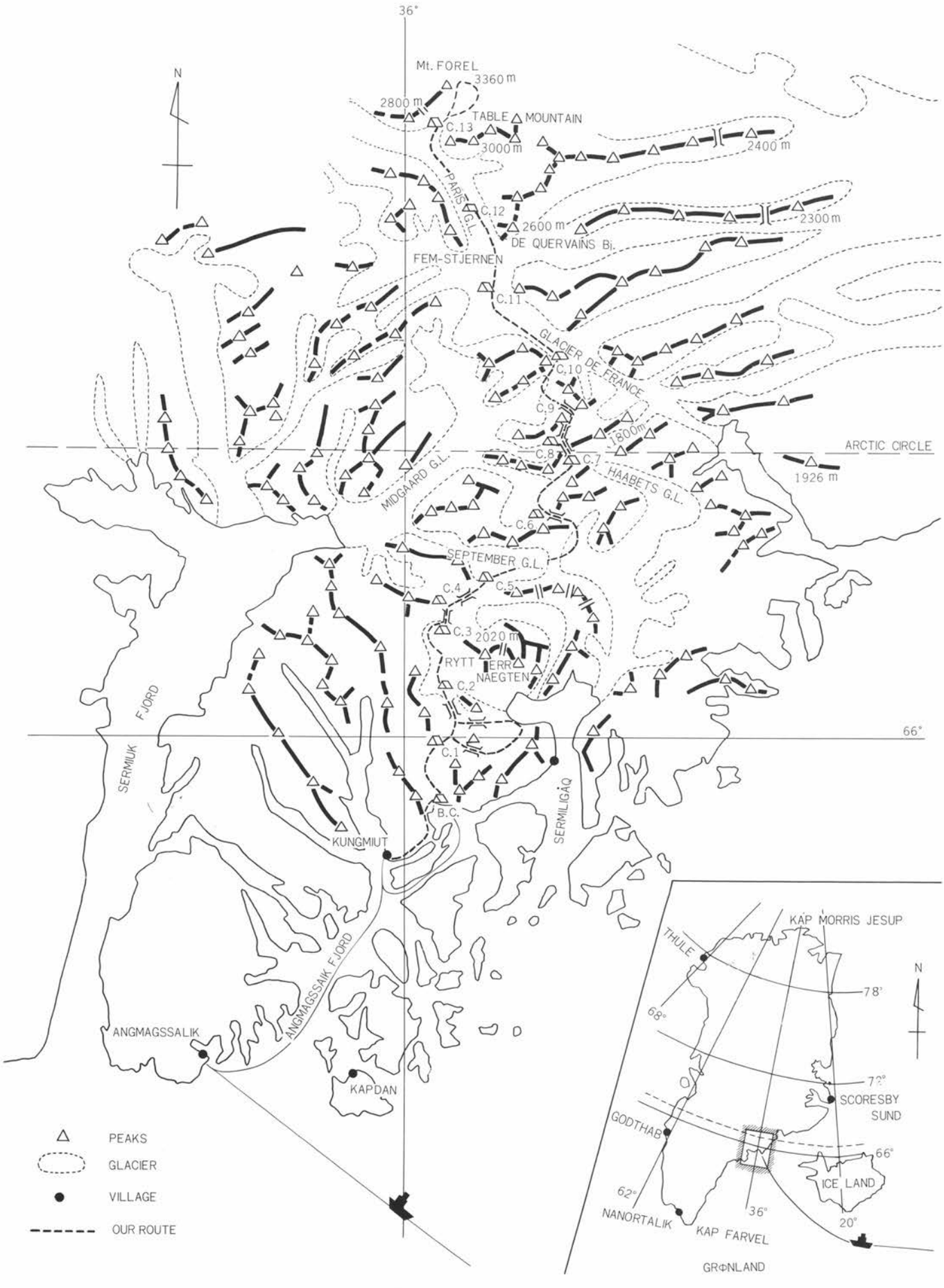


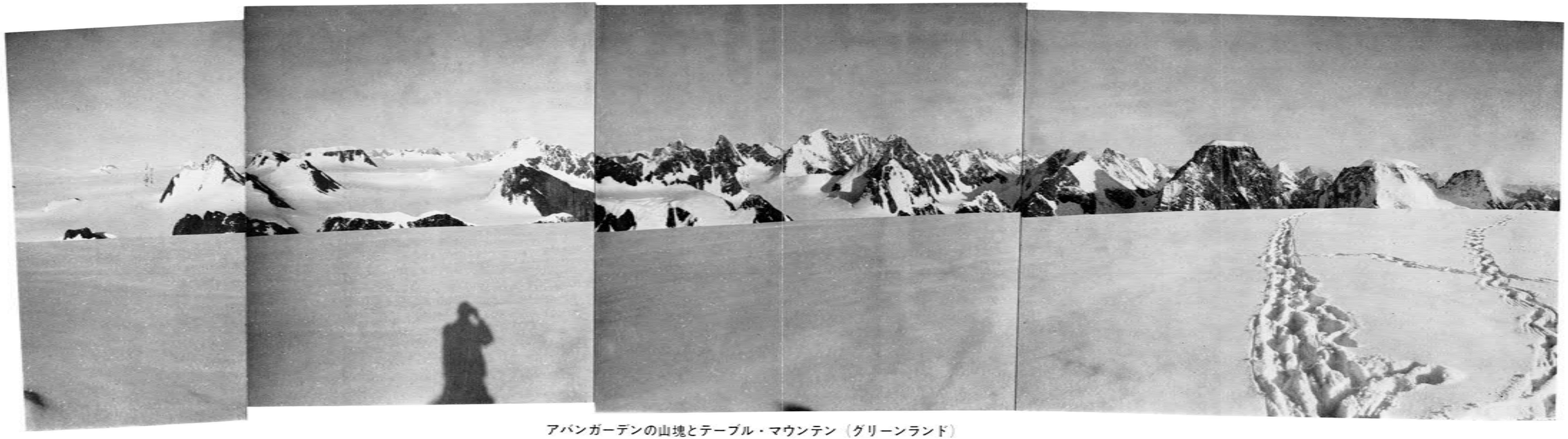
ミドガード氷河への下り
Crevasse zone down to the Midgaard Glacier.



テーブル・マウンテン
Table Mountain (3000 m) in Greenland.

# SKETCH MAP OF THE MOUNTAIN REGION OF SCHWEIZERLAND





アバンガーデンの山塊とテーブル・マウンテン（グリーンランド）
Mountains in Avantgarden and Table Mountain (3000m), Greenland.

CⅡ建設後、丸子氏と私は西南稜コルから一五〇メートル程、リッジ通しに登ってみたが、すこぶる悪い。こんなのが高差一〇〇〇メートルにも亘って続くかと思うと、目の前が暗くなってしまった。リッジの左側はすっぱり切れて、高差一〇〇〇メートル以上の垂直の西壁を形成しているし、右側へ落ちれば、はるか南氷河までさえぎるものもない。いやはや全く恐ろしい。テントへ帰ってから、我々三人は真剣に考えた。正直のところ、この六〇〇〇メートルそこそこの、しかも未登でもない山に、命を賭けるような気はしないし、ハーケン類も充分ではない。我々は早くも逃げ腰であった。しかし、ともかくもう一度、偵察を試みてみようということになった。

こうして二二日、甘利隊長と私は最後の偵察を行ったが、全く幸いなことに、我々は西南稜から南稜方面への横断バンドを見つけることが出来、そのバンドの消える辺りから、南稜の小キレットに真直ぐに突き上げている、一五〇メートル程のアイスガリーに九時間を費やして、フィックス・ロープを固定することが出来た。

このアイスガリーは平均傾斜六〇度程、最後は垂直に近いものだが、結構きびしい登攀を強いられ、お陰で私は寒さのために、痔などという体裁の良くない代物に取りつかれてしまい、結局三日間の休養をとってアタックを延ばさざるを得なかった。この三日間は全くつらかった。もともと我々には、そんなに日数の余裕はないのである。私が尻を押えて寝ていると、甘利、丸子の両氏がぼそぼそ何やら話している。三日目には、私もつらくなって彼ら二人にアタックに行ってもらい、私は無念をこらえてCⅡで寝ていようかな、とも思ったりした。

八月二六日、どうやら私のお尻も治り、いよいよアタックである。我々三人は六時にCⅡを出発した。どうも高差一二〇〇メートルは気が重い。ビバーク不可避を覚悟した我々のザックも、また重かった。ヒンズー・クシュの夜明けの空は、一段と美しかった。月と星は濃紺の空に、残んの光彩をちりばめている。日中の暑さが嘘のような寒気の中を三人のアイゼンはキュッ、キュッと気持の良い音を立てて登る。西南稜と南稜の間には雪面のトラバースがあるが、これはアンデスに見られる例のペニテンテ（氷柱）、全く美しい。鍾乳洞の石筍のようである。問題のアイスガリーは、苦心の固定ザイルを使って、わずか一時間半で登り、午前一〇時には早くもガリー上、五三〇〇メートルに立った。南稜のキレットに出る箇所は小さな風穴になっていて、人間一人がやっと通れる程なので、二〇貫の甘利氏には気の毒であった。この風穴を抜けて向う側に出ると、眼下に明るく美しい眺めがある。ミール・サミール東方の氷河が純白に輝き、氷河の尽きる辺りには、エメラルド・グリーンの小さな氷河湖が点在している。

この南稜上のキレットから五〇メートル程向う側に降り立

ち、岩場をトラバースすると、再びペニテンテの急斜面である。所々氷を混えて悪い所もある。しばらく登っていると、このペニテンテはとんでもない厄介物になってきた。時には高さ一メートルを越す氷柱は一本一本たたきこわす訳には行かないし、これを一つ一つ乗り越えて行くのは、全く消耗である。ラッセルどころの騒ぎではない。高さ一メートルにも及ぶ無数の白い柱のなかにいると、ともすれば、魔法の世界に迷いこんだような錯覚にとらわれる。いい加減、薮漕ぎならぬペニテンテ漕ぎに、飽き飽きした頃、雪の斜面は高さ三〇〇メートル程のバットレスに突き当った。

我々は、その基部で昼食をとった。時刻は一二時で、高さは大体五六〇〇メートル位であろう。岩は南に面しているので、雪がなく、よく乾いていた。我々は明るい日射しを背に受けて、快適な岩登りを楽しんだ。この岩場が尽きると、雪の急斜面である。見えている雪のドームが頂上ならば、あと一五〇メートル程である。我々三人はザイルから離れて、めいめい自分のペースで登って行った。二時三〇分、我々の前に登りはなく、北方の空が眼前に広がっていた。

我々の山登りは終った。静かな、美しいベース・キャンプに戻った我々は、通訳のナジブラ氏や現地人達と彼らが撃ち取った雪豹ならぬ鹿で、すき焼きを思う存分楽しんだ。

帰途は、あのいまいましいロバはやめて馬にした。我々三人は、荷物をナジブラ氏と現地人にまかし、キャラバンを離れて先を進んだ。夕風の気持良い中央アジアの高原を、三人は夕陽を背に浴びて、馬を駆った。短かくはあるが素晴らしい駆足山行であった。

パーティ＝甘利仁朗（三三歳）・丸子博之（二九歳）・佐藤之敏（二三歳）

# グリーンランド・スイスの踏査とフォーレル峰の試登（一九六五年）

宮原巍

一九六五年七月から九月にかけて、日本大学グリーンランド遠征隊は、グリーンランド東海岸の北緯六六度から六七度付近にかけてひろがるグリーンランド・スイス山岳地帯において、同地域の踏査と二、三の山への登山とを行った。この計画は、グリーンランド・スイスの地形及び自然条件を知ることと、フォーレル峰（三三六〇メートル）の登頂及び内陸氷床の橇旅行に備えての諸調査を目的として、企画されたものである。行動は、一部計画の縮少はあったが、「人曳き橇」による同山岳地帯の横断と、登頂は失敗におわったがフォーレル峰の試登、そしてそのかたわらに行った気象の観測と氷河の観察などであった。

以下グリーンランドとグリーンランド・スイスの概略を述べたのち、今回の計画と行動の経過について報告してみたい。

## グリーンランドとグリーンランド・スイスの概略

**グリーンランドの概念**　グリーンランドの面積は、二、一七五、七〇〇平方キロメートルで、日本の面積と比較すると約六倍の大きさをもっている。島の大部分は北極圏に位置していて、内陸は厚い氷床に覆われ、沿岸部の氷河とともに、全島の約八五％までが氷に覆われている。氷床は島の中央に向って次第に高まり、その最高地点は、北緯七二度、西経三八度付近で約三二〇〇メートルに達する。内陸の雪原の大部分は、標高二〇〇〇メートルを越す高原である。それにひきかえ、島の基盤は内陸に低く、外郭の沿岸部の方が高い盆地状であるとされている。従って氷床は、沿岸部で山岳によって分けられるため、氷河となって海に流れ出ている。そのためグリーンランドの海岸線は、山岳をぬってフィヨルドが陸地に奥深く入り込み、まわりの群島とともに非常に起伏に富んでいる場所が多い。

グリーンランドの山岳地帯は、このようにすべて島の沿岸部にあり、山の高さは、一般に高い地域のもので二～三〇〇〇メートルである。島の最高峰は、東海岸の北緯六九度付近にあるワトキンス峰で、高度は三七〇〇メートルである。グリーンランドでは三〇〇〇メートルを越す山はいたって少なく、数ヵ所かぞえるだけであるが、高度こそ日本の山と変らなくも、様相は

いたって険しいものがあり、また山間をうめつくす巨大な氷河は、その山容をおぎなって余りあるものがある。

過去に登山された地域から、主な山岳地帯を二、三拾ってみると次のようになる。

㈠ スタウニング・アルプス　東海岸の北緯七二度付近にあり、ペーターマン・ピーク（二九四〇メートル）など三〇〇〇メートルに達する山岳が多い。グリーンランド・スイスとともに、グリーンランドでは最も著名な山岳地帯の一つであり、また広範囲にわたっている。

㈡ ワトキンス峰地域（クン・ラスムセン・ランド）　ワトキンス峰はグリーンランドで最高であり（前述）、地域としてはあまり広くはないが、矢張り多くの山岳をもつ。

㈢ グリーンランド・スイス　後述。

㈣ ケープ・ファーベル付近（南端）　近年フランスや英国の小規模な遠征隊によって登山が行われた。

㈤ ディスコ島及びナグサック半島付近　最高二三一〇メートルまでの山が散在する。グリーンランドでは、約一〇〇年前から遠征隊による登山が行われたが、この付近は最初に知られた地域である。

一般に、氷河上からそびえている部分の山の高さは、一〇〇〇から二〇〇〇メートルである。

**グリーンランド・スイスの沿革**　グリーンランド・スイス山岳地帯が発見され、こうした名称が付けられたのは、一九一二年、スイスの気象学者ケルヴィンによってであった。彼は西海岸から氷床の横断旅行をして来て、この地に達し、遥かに連らなるこの山岳地帯に初めて足を踏み入れた。沿岸のアンマサリックの部落には、考古学などをも含めた幾つもの遠征隊の基地が置かれたが、内陸に踏みこんだ隊はあまり多くはない。次に一九三〇～三一年にかけて、英国のG・ワトキンスが英国からアメリカ大陸を結ぶ飛行ルート偵察のため、大掛りな探検をこの地域を含めて行った。フォーレル峰への登攀を最初に試みたのも彼のパーティのL・R・ウェージャーであったが（一九三一年）、以後再三の企てにもかかわらず、一九三二年、ワトキンスのセルミリック・フィヨルド内での遭難のために、その目的を達することは出来なかった。

グリーンランド全域にわたる地図作成の仕事は、一九二七年からデンマークの地理学会のもとに始められたが、この地域での測量は、一九三二～三三年にかけて行われた。一九三四年には、英国隊がこの北に隣接する山岳地帯に、また一九三七年にはフランスのヴィクトールが、西海岸から来てこの山群の南端に達している。この地域の踏査で最もすばらしい成果を上げたものは、一九三八年のアンドレ・ロックに率いられたスイス隊によってであった。フォーレル峰はこの時に初めて登られた。近年にいたっては、一九五九年のオーストリア隊が、ミッドガ

ード氷河の左岸の山々に、一九六二年にはデンマーク隊がその沿岸の山で、また一九六三年にはスコットランド隊とスイス、ドイツ合同隊が、カレドニア・アルプスと名付けた地域で各種調査とともに活発な登山を行った。

この山岳地帯の大きさは、長さ約二〇〇キロ、幅一〇〇キロメートル位で、山々は一連の山脈というよりは、海岸から氷床に接する地域に向って幅広く散在し、かつ次第に高まっている。フォーレル峰はこの地域の最高峰である。

## 計画と準備

**計画**　グリーンランドへの遠征の計画は、最初氷床の横断旅行について考えられた。しかし、犬橇や雪上車などを考えるにいたっては、計画の規模が大きくなり過ぎることと、橇旅行についての実際的な知識及び経験がないために、計画は漠然と考えられる程度で、それでは一向に具体化出来そうになかった。そこで実現可能な計画ということで、ともかく「人曳き橇」について考える結果となった。そしてグリーンランドの地域を検討してゆくあいだに、グリーンランド・スイス山岳地帯が次第に興味ある対象と考えられるにいたった。即ちグリーンランド・スイスは、次の計画のため、そこの状況を知っておく必要があったが、それ自体グリーンランドの著名な山岳地帯の一つとして、充分な規模と内容の面白味を持った場所として、考えられるにいたった。交通も、ヨーロッパから渡るとして、東海岸のアンマサリック付近にあることは、ソ連経由でヨーロッパに行けることとともに、全く好都合なことであった。

計画の内容は、アンドレ・ロックの記録と「人曳き橇」の行動範囲とから、アンマサリック北方約五十キロメートルのセルミリガック・フィヨルドから、フォーレル峰までの片道約一七〇キロメートルの橇旅行と、フォーレル、ケルヴィン峰の登攀及びその東方の踏査が考えられた。

隊は日本大学体育会山岳部OB及び学生からなり、次の七名によって構成された。宮原巍（リーダー、昭32年工業化学科卒、31歳、会社員）、片柳実（総務・記録、昭36年商業学科卒、28歳、会社員）、池田錦重（渉外・装備、昭36年建築科卒、26歳、会社員）、今村文彦（写真・食糧、昭37年写真科卒、25歳、カメラマン）、高緑繁伸（会計・衛生、昭37年商業学科、25歳、自営）、池田新三（装備、土木科四年在学中、21歳）、多和田忠（気象・食糧、法律科三年在学中、20歳）。この他、場合によっては現地で、二、三名のグリーンランド人の雇用を考えた。

グリーンランドへの交通は、コペンハーゲン又はアイスランドのレイキャビックから、適当な船便をつかまえることにしたが、それが出来ない時は、レイキャビックから、アンマスサリック沖合二〇キロメートルのダン岬にあるクルサック迄、飛行機をチャーターする方法をとることにした（この間に定期の交

通はなく、クルサックには軍用の飛行場がある。

なおこの計画は、日本極地研究振興会及び読売新聞社の後援と一般の会社、団体からの法人寄付及び個人寄付、さらに若干の隊員負担によって行われた。総経費は約三五〇万円であった。

**準備**　この計画と同時に行われていた、グリーランド以外の地域への登山計画と、前に述べた計画の経緯があって、はっきり方針が決ったのは三月末になってからであった。そのため、その年に計画を実行することになれば、遅くとも六月中には日本を出発しなければならず、それにしては準備期間が短か過ぎる懸念があった。態勢としては、他の計画を通してある程度組まれていたので、特に問題はなかったが、その懸念は六月出発としても、時期が少し遅すぎること、船による荷物別送の時間的余裕がなく、シベリヤ経由で同時に資材を運ぶことになるため、橇の長さや荷物の重量がかなり制限されること、及び手続き上の問題が解決するかなどであった。勿論、全般の事柄を通じて、準備不充分のおそれは免れないが、他の事情もあり、ともかくその年の夏に計画を実行することになった。

時期の遅い問題に対しては、グリーンランド滞在の期間を五〇日ときった。荷物の制限に関しては、食糧の大部分と、一部装備をコペンハーゲン若しくはレイキャビックで購入する方法をとり、日本から携行する橇、スキーは出来るだけ短かいものとした。なお橇については、現地で借用又は購入の方法も考えたが、良い設計のものが出来たので、新潟のスキーメーカーで二台製作した。

入国許可と交通に関する手続きは、五月に入ってから行われたため急を要したが、申請書類に日本山岳会の推薦状を添付して、駐日デンマーク大使に提出し、大使を通じて本国総理府とグリーンランド省の許可を得た（チューレ等西海岸の一部について、アメリカ政府の許可も必要）。また日本の外務省にも必要な手続きをした。

交通に関する情報は、日本ではあまり詳しく知ることは出来なかったが、船の便乗が出来ない時は、飛行機のチャーターでともかくグリーンランドに渡る見通しはついた。

荷物の総重量は、日本出発時で約三〇〇キロ、コペンハーゲンで約六五〇キログラムとなり、最終的な梱包はコペンハーゲンで行った。なおコペンハーゲンにおける食糧品の価格は、日本に比較して殊に高いことはなかった。

グリーンランドへは、結局、運良くロイヤル・グリーンランド貿易会社の貨物船に便乗を許されて（グリーンランドに上陸する場合には、グリーンランド省の乗船許可が必要）、七月二一日、コペンハーゲンから東海岸のアンマサリックに直接向うことが出来た。

## 行動の概要

六月間の船旅の後、七月二七日東海岸のアンマスサリックに着いた。日本を発って丁度一ヵ月目である。船は前日の夕方から、浮氷群の中に入り速度を落して進んだ。はるか沖合から見たグリーンランドの海岸は、鋭い山と氷河ばかりが望まれ、その前面は絶壁となって、海面の靄の中に落ち込んでいるように見えた。しかし、船が入ったアンマスサリックの入江は、もの静かで、そのあたりに氷河などはなく、周囲の岩山に残雪がある程度で、丁度剱沢の初夏を思わせる場所であった。さしずめ、北アルプスの雲海を本物の海に譬えれば、その感じがでるのではなかろうか。

ここ、アンマスサリックは、本島と離れた島の上にあり、人口約七五〇人で、学校、病院なども整った東海岸随一の部落である。あらかじめデンマークの新聞社を通じて、こちらに連絡がしてあったので、二、三の関係者が船を訪れたが、上陸に関しては一切の手続は不要であった。直ちに橇の組立てなど旅行の準備を行い、次の日一〇〇トン程の機帆船の便を得て、グリーンランド・スイス山岳地帯の上陸地点に向った。本島と群島の間の水路を通って、数時間の航海の後、目ざす地点に達した。浮氷はかなり密であった。湖面のようなフィヨルドと、これをはさんで切り立つ岩峰と懸垂氷河は、覆さえたなびいて、ただ美しいというほかはなく、景色には、もう、これ以上の何ものもないように思われた。

上陸地点の海岸は、氷河が海辺から約五キロメートル後退しており、比較的穏やかな感じの所で、勿論樹木はないが、スギゴケやコケモモが群生しタンポポなどが見られた。海岸地域の山の高さは、一〇〇〇メートル前後のものが多く、すべて氷河に削られて険しい山容を示している。

七月二九日からフォーレル峰目ざしての行進が始まった。グリーンランド人の雇用は、ガイドとしても特に有用でないという、現地人の意見を聞いてとりやめ、自分達七人だけで行動することにしていた。ひとまず氷河末端に荷物を集結して、三〇日から氷河上の行進にうつった。第一キャンプ地は標高約五〇〇メートル遡った場所においた。そこは二度目のクレバス地帯に入る手前であったが、その辺りまでの氷河の表面は、氷がむき出しで凹凸がはげしく、そのうえ橇は思いのほか重く、一人当り五〇キログラム程度の荷物で、その動かなさには、すっかり音を上げてしまった。さらに、数メートル間隔にあるクレバスをぬって右往左往するので、いっそのこと、荷を背負って歩いた方が余程楽のように思われた。しかし、これも最初の二、三日のことで、次第に雪の状態が良くなり、慣れも手伝って、橇の威力も日増しに発揮できるようになった。ただし、氷河の表面が雪で覆われて橇の滑りが良くなれば、今度は隠されたクレバスが多く、神経を使うようにもなった。

八月一日、標高八〇〇メートルの最初の峠の上に、荷物をデ

ポして、夜は九時頃第一キャンプ地に帰った。行程の約三分の一までは、荷物の都合で二往復する必要があった。

二日からは、夜間といっても白夜であることと、日中は直射日光がきつく体にこたえること、表面の雪が軟化して歩きにくく、クレバスの上の雪が緩むことなどのため、日中の行動を止めて、夕方から朝にかけて行進することにした。もっとも、この方法は、その頃すでに日一日と夜は暗くなるようになり、十日後には、夜の十時半頃から二時間位は、暗さのために行動ができなくなり、さらに十日後には、朝方から午前中にかけて行動するようになった。

第二キャンプは最初の峠を越えてから、標高にして三〇〇メートル下り、カラレス氷河の出合においた。その後、ライターク・ナグテン峰を遠く回り込む方向に進んで、その氷河をつめ、五日後の七日、標高一一〇〇メートルのコル・デ・パウリーに着いた。この間にあったクレバスは、旅行中で最もたちが悪く、一時は前に進めないのではないかと思われる程であった。

次の峠の登りは二〇～三〇度の傾斜があり、アイスフォールを避けて、左側の雪の斜面との境を登ったのであったが、全ての荷物を上げるのに、連続二〇時間のアルバイトであった。以後小さな峠を二つ越えて、セプテンバー氷河の上部を横切って、八月十二日、行程中で一番高く（標高一四〇〇メートル）、またその中心点でもある峠の上に達した。そこから北方遥かにフォーレル峰山塊とそれに連らなる山群を見ることが出来た。しかし、まだあまりに遠く、山も幾重にもなっていて、おぼろげであった。

この地点からミッドガード氷河に出る迄の間が、はじめから最も困難を予想されていた場所であった。峠に着いた日の日中、直ちに峠の下りのルートを偵察したが、案に違わず峠の上からは見えない斜面の下部は、クレバスが縦横にはしって、梯を降すことはかなり困難に思われた。雪面の少し怪しいと思う部分の雪を調べてみると、下は矢張りクレバスであったりして、何処が安全か見当もつきかねるほどであった。次の日、偵察した時のルートに従って下りたが、距離にして一キロメートル、標高にして三〇〇メートルの下りに八時間を要した。もっとも、これは少し慎重に過ぎたためで、帰りにはこの場所を、荷物が軽いとはいえ、二時間で登りきることができた。その日、完全に安全地帯にぬけ出る前に天候がくずれ、雨さえ降り出したが、予定の遅れもあって、キャンプ地（第八）を斜面の下に決め、メンバーの四人はスキーをつけて、正面の峠の偵察と若干の荷上げとを行った。しかし、峠の反対側のミッドガード氷河への下りは、クレバスが洗濯板を連想させ、その下部に予想されるアイスフォールと、谷の気配の陰惨さのために、担ぎ上げた荷物を驚いて持ち返ってしまった。

次の日、峠をはさんだ左右の峠と出合に出るルートの偵察を

行い、結局は向って右側の峠を越えることになった。二日後、ミッドガード氷河に出たが、この間、二度橇から荷をおろして担いだりした。その後さして困難はなく、八月一六日、グラシエ・ドゥ・フランスの出合に十番目のキャンプを置くことができた。この場所は、最初ベース・キャンプに予定していた場所であったが、計画の遅れと、氷河の状態が想像以上に悪かったことから、ここを根拠としてフォーレル峰以外の場所に行く計画はとり止め、従ってベース・キャンプを設ける考えも止めてそのまま橇を曳いて、フォーレル地域に入った。フォーレルへはフェムステョルネンの雪原をよぎり、さらに氷河を遡って五〇キロメートル余の行程であったが、八月二〇日、ようやくその南面の氷河の上に、一三番目の最終キャンプを置くことができた。

その付近は内陸の氷床の近くで、氷帽をもつ山が多く見られ、山岳もグリーンランドで最も高い地域のものである。そしてその東部に、なお興味ある山岳が続いている。殊にアバンガーデンの山塊はすばらしく、テーブル・マウンテンはその中の秀峰である。

フォーレル峰には二度の登攀を試みた。最初はアンドレ・ロックの記録の写真をたよりに、東面から試みたが、写真に見るような容易さはなく、その基部にとりついてみて、氷河のあまりの急峻さに、苦もなく追い返されてしまった。一応前日に偵察はしてあったのだが、その距離がかなり離れていたのにもかかわらず、周囲の景色の広大さに欺かれ、壁を小さく見積り、上部にある氷の切断面を登る準備もしていなかった。キャンプの標高が一八〇〇メートルであるので、頂上までの高度差一五〇〇メートルとして、丁度徳沢から奥穂に登る程度に考えていた。しかも、この考えの甘さは、次の登攀の際にも正されず、そのことは結局登頂失敗へとつながった。

北面については、すでになお二日間の橇旅行を行って、そこに回り込む時間的な余裕もなかったが、それまで見てきた山が一般にそうであったように、氷河をまとって非常に険しいことが想像された。西面は長い尾根続きであり、従って二回目の登攀はその南面で行った。

一回目の登攀の日の夕方から降り出した初雪は、二日間続き、止むなく停滞となったが、八月二四日陽がかなり高くなってから、南面の偵察に出掛けた。そしてそのルートが、かつてのアンドレ・ロックの記録と符合することを知り、高度約二八〇〇メートルの地点にまで達し、頂上を間近に見て、確かに登攀可能なルートであることも知った。特に困難なようにも思われなかったので、またもや登頂は一日で可能という、不用意な計画をたててその日は五時頃に帰幕した。

八月二五日登攀隊を池田（錦）、今村、サポート隊を宮原、池田（新）として午前三時に天幕をあとにした。外はまだ薄暗

く、気温はマイナス一五度位であったが、天候は落付いて風もなく、絶好の登攀日和であった。お互いにアンザイレンして、急な氷河の基部までは、スキーで約一時間の登り、次に胸をつくような急峻な氷河を登りつめて、偵察の時の倍のピッチで、昨日の到達点に達した。さらにそこから、スノードームまでも快適な歩調で登りきった。天幕を出てから四時間半を要した。これにつながる雪稜からは、数日前に苦汁を嘗めさせられた東面の斜面が、ずっと下方に眺められ、新しいデブリなども見えた。

しかし問題はそれからであった。氷化した堅雪の上の新雪と、尾根を跨ぐと両足の下にそれぞれの谷の氷河が見下せる痩せ尾根に、時間はすっかりかかりだしてしまった。ルートはその尾根を経て、一たん一〇〇メートル弱下って、最後に四〇〇メートルばかりの氷の斜面を登るものであった。一〇時頃に、ようやく痩せ尾根を通過して、下りにかかった。サポート隊は、ここで待機することになったが、その下りは不安定な雪と岩のために、状態は殊に悪く下降は一向にはかどらず、ついに午後二時になってもコルまで到達することができなくなってしまった。

この頃は午後になると、かなり陽が傾くようになり、気温もそれにつれてどんどん下り、夜はすっかり暗くなるようになっていた。登攀が長くなることを覚悟はしていたが、私達はそれで重装備となるより、軽装備でとばす方法をとっていたので、このような躊きには弱かった。ザイルの不足とともに、登攀に携行した食糧、防寒具が少なかったので、その日それ以上の登攀を続けることは適当でなくなった。頂上はすでに指呼の間にあり、ヤホーの声も容易にこだまする程であったが、なおきつい氷の斜面を眺めて、登攀は諦めるより仕方がなかった。

なお二日分の食糧の余裕はあったが、余裕といっても、予備なしの余裕であることから、来る時の行程のきっさを考えると、なおここに滞在することは少し不安になってきた。それに、一週間足らずの間に急に気温が下がってきたことや、その日西の方に見えた雲行きの怪しさから、一層その不安はつのり、ついに三回目の登攀を諦めることになった。結局ここ二日ばかりを不用意に過したことが、時を失う原因となった。あまりこだわりもなく登頂を断念したが、あるいは広大なグリーンランドには、そんなところがあるのかも知れない。しかし、充分に力を出しきれないままに、フォーレルから離れることは、勿論計画の拙さに原因するが、ここまでに至る道の困難であっただけに残念であった。

八月二七日、その麓から帰途につき、二、三小さな山に登ったり、他の沿岸の偵察を行いながら、十日後、上陸した海岸に辿り着くことが出来た。氷河上の行動が、そのクレバスのため、正に不安と緊張の連続であっただけに、海岸の砂の上はこ

とのほか懐しく感じられた。

九月八日、クミュートという住民約四〇〇人の部落に出てアンマスサリックに出る船を待った。

帰途コペンハーゲンで、過去の探検隊の記録の幾つかにふれて、古から立派な報告書のあることに驚くと同時に、今迄考えていたグリーンランドとは又別な、様々な歴史とその全貌に思いをめぐらすことができた。

またそれ等は、科学が地球を網羅することができなかった時代に行われた、科学と探検の結びつきにみる探検の業績が、真に偉大であったことを物語っているようでもあった。

# コルディエラ・ノルテ　一九六五年

細野淳美

ペルー・アンデスの登山で、われわれは、計画の当初から目標のなかに、できることなら未踏の山群を入れたいと願っていた。しかしアンデスもすでに開拓期は終りで、未踏の山群、しかも氷河を有する山群となると、皆無に等しい状態になっていた。

未知への憧れは、それを他に転化させることで消え去るものではない。先輩の話の一節に、地図の片隅に、あるいは推測だけの可能性のなかに、未知への憧れは入ってゆく。

一九六五年九月、コルディエラ・ブランカのネバド・チンチェイ Nevado Chinchey（六二二二メートル）南尾根初登に失敗して、意気銷沈してしまったなかで、コルディエラ・ノルテ Cordillera Norte への期待がわずかにわれわれを救ってくれた。

コルディエラ・ノルテ（以下ノルテと略す）の記録は、一九三二年のハンス・キンツルによるものがあるのみで、他には全然ない。しかも、この記録はわずか数行で、ネバド・カバーナ Nevado Cabana（五一八〇メートル）の名だけを記しているのに過ぎないものであり、ノルテは全く曖昧模糊としていた。

## ワラスからベース・キャンプへ

コルディエラ・ブランカの基地ワラスから、如何にしてノルテに入って行くか。われわれはリマで苦労して手に入れた、ペルー陸軍の二十万分の一の地図コロンゴを、唯一の手がかりとして、カバーナを訪れたことのある税務所長などの話を聞きながら、入山経路を検討した。しかし、通訳兼案内人のパブロ・モラレスさえ、ノルテの名を聞くのは初めてだと云い、地図上の氷河のしるしが不安になってきた。一方、地図に在るのだからというペルー陸軍への信頼が、ワラスを発たせることになった。

八月三一日早朝、トラックでワラスを出発しユンガイ・パンパに向った。三週間分の食糧と登山用具は五〇〇キロを欠ける量で、さして多いものでもなかった。

荒涼としたペルーならではのカニヨン・デ・パトーの異様な景観に、トラックの砂塵を多量に吸い込みながら感心した。昼近くにユンガイ・パンパに着いた。チンボテ、ウッヤンカ間の鉄道の小駅で、ブランカ北部の町々に行くバス、トラックの始

発駅でもある。コロンゴ行きのバスの屋根に荷を積み替え、午後一時半ユンガイ・パンパを出発。

結局、入山経路は自動車とブーロを使って、ワラスから三日以内にベース・キャンプ地に到着できるコース、ということになり、コロンゴからの入山とした。カバーナからの入山では、鉄道の乗り替えもあり、自動車の使用も不安なので、中止することにした。

ラ・パンパを通過し、標高三一九二メートルのコロンゴには夕刻五時に着いた。夕暮れの中にネバド・チャンパラ Nevado Champara（五七五四メートル）が白く浮きでていたが、目指すノルテは望まれなかった。期待が失望に変りつつあった。コロンゴの住人達もチャンパラ以外に山は知らず、誰れもノルテの山群など聞いたこともないという。それもその筈であった。われわれがコロンゴを訪れた最初の登山隊であり、またツーリストでもあったのだから。

翌日、コロンゴの裏にある小高い丘に登って、プリズムを北方に向けた。チャンパラだけが大きく映った。

そして、その遥か北方に小さく白いピークが望まれた。地図と照合してみる。コロンゴから直線距離で約十五キロに、ノルテ最南峰のネバド・カイコ Nevado Kaiko（五一〇〇メートル）がある。それより数キロ北にベースキャンプの予定地を求める。ホットして明日からの計画が生き生きと拡がっていった。

九月三日、九頭のブーロに荷を分けてコロンゴを出発した。ブーロ代は一頭十五ソール（二一〇円）でブランカでの三分の一ぐらいであった。登山隊はわれわれが初めてなので、おそらくこの値段が一日のブーロ代としての彼等の相場かもしれない。

途中クスカで道案内人の若者を雇った。ここまで来ると、地図を拡げて彼等に説明してみても、彼等の頭の中にある地図と一致することはほとんど無いので、ノルテに至る道を先導させることで満足しなければならない。あとは村と山と地図をたどりながら、現在地点を確かめるだけであった。

リオ・ケロバンバに沿った鉱山の廃道を、コルディエラ・ウァルコ Cordillera Huarco（四七六八メートル）の南端をまきながら、ゆるゆると登っていった。ようやく峠状の地点に立って、ノルテの全容を望むことができた。ここはまだノルテの南部であり、正面にネバド・パクラ Nevado Pacra（五一〇〇メートル）の岩峰が立ち塞さがり、その右手にはカイコが同じような岩の黒さを見せていた。左手北方にはロスコ・グランデ Rosco Grande（五一八八メートル）の白い峰が見える。岩壁・岩峰の多い山塊である。その上、深い谷を埋めるように深い湖があり、入山に困難さをともなうような感じがする。

夕刻ベース・キャンプ予定地の湖のほとりに着いた。いままでのブランカの感じと違って、緑の多い、水のきれいなキャン

プ地であり、心のなごむ思いがした。ふと日本の山の何処かで合宿をしているような、しっとりとした気持になってきた。緑のせいであろう。それだけに雄大さ、厳しさ、するどさにもの足りなさを感じ、「未知」以外の喜びは無いのではないか、と思われた。

ベース・キャンプは標高約四二〇〇メートルの所にあった。

## 第一キャンプ（CI）へ

すでに九月に入ってしまっては、たとえブランカの北部に位置するとはいえ、ノルテの天候は決して良いものではなかった。コロンゴは雨が少なく朝夕の冷え込みがするどい町であり、山岳地帯もほぼ同じである、と聞いてきたのであるが、ベース・キャンプでは雨の降る日が多く、ノルテ全山が見える日は遂に無かった。

ベース・キャンプはノルテの中央部にある湖のほとりに設営したので、氷河の多いノルテ北部に登るには都合が良かった。計画通りロスコ・グランデを登り、北部を踏査してから南部に入ることとした。

ベースから湖の対岸の岩壁に取りついて、ロスコ・グランデへの登路を求めるのは、氷河に洗われ白く輝くU字谷を登るようなので、不可能に近かった。コルディエラ・ヤナコーチャ Cordillera Yanacocha（四八九九メートル）の末端を湖に沿って登ることとした。

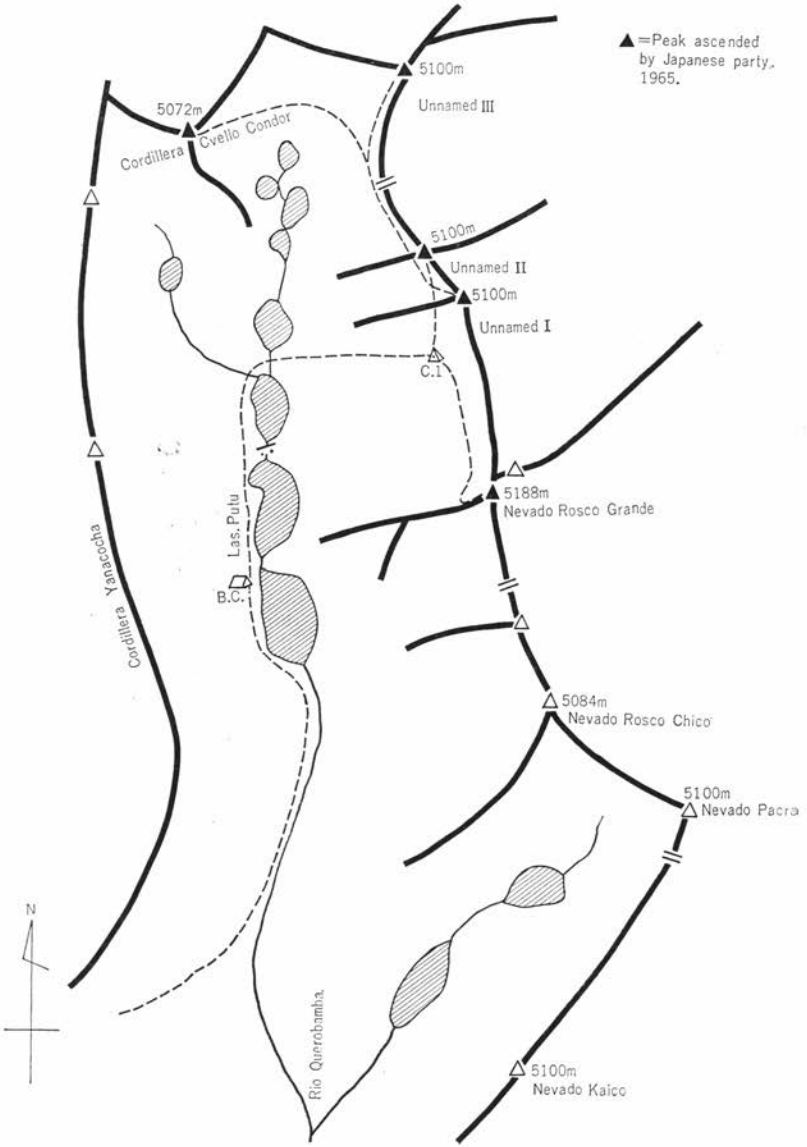
ベースからすぐ上の湖を越えると、次にまた湖があらわれ、ロスコ・グランデからの岩尾根が絶壁となって落ち込んでいる。さらに上の湖に登る。ヤナコーチャ側は草原に近い、なだらかさとなり、わずかに湖の近くで急になっていたが、湖をたどるに従ってノルテとの間がせまくなってくる。

ベースから三つ目の湖と四つ目の湖の間が、対岸に渡れそうであり、そこからノルテの稜線に至るガレと岩壁が望まれた。ここ以外にノルテに入り込むルートは無さそうであった。ここまで来ると雨もあられや大雪に変り、風の無い湖のほとりで何回かのボッカの雨宿りに、火を焚いて衣類を乾かさねばならなかった。雨から雪の中へ、雪から雨の中へ、ずぶぬれの繰り返しであった。

ガレ場をつめあげ、大まかな岩棚をたどって、四八〇〇メートルの広い岩帯の上にCIを設営した。ここはロスコ・グランデからの氷河の舌端にあり、最北のクエヨ・コンドル Cuello Condor（五〇七二メートル）にも強行一日の行程と思われる位置にあり、北部踏査には絶好のCIである。

CIでは終日雪が降り続き、完全に雨季に入ってしまったのではないかと思われた。あるいは天候不順の年であったため、雨季のようであったのかもしれない。

# Sketch Map of Cordillera Norte



九月七日ロスコ・グランデ（五一八八メートル）登頂　細野、高山、木下、横地。

CIに平行しながら岩帯をトラバースして氷河に入る。氷河は新雪で蔽われヒドゥン・クレバスが待ち構えていた。ときには膝を没する雪で高度はなかなかはかどらない。プリズムで偵察したルート通り、CI上部に続くロスコ・グランデからの主稜線に立とうと氷河を直上してゆく。しかし、クレバスにはばまれ右に廻り、さらに氷壁の崩壊あとに右行させられ、結局ロスコ・グランデの大雪庇から派出して、二番目の湖まで一気に落ちこんでいる急な尾根に取りつくことになってしまった。ナイフ・エッジをつめあげると、雪壁に至り、小さなクレバスが数を増してきた。

六十メートル程のトラバース。クレバスの上部に垂れ下った氷柱をくだきながら、頂上に至る急峻な雪氷壁の中間に出る。アラレ交りの雪が視界を閉ざし、豆をはじくような軽い音をたてながら、クレバスの中へ落ちていった。

十二時。CIから六時間経っている。今日は偵察までと思ったが、明日の好天が期待できるわけでもないので、そのまま頂上を目ざすことにした。

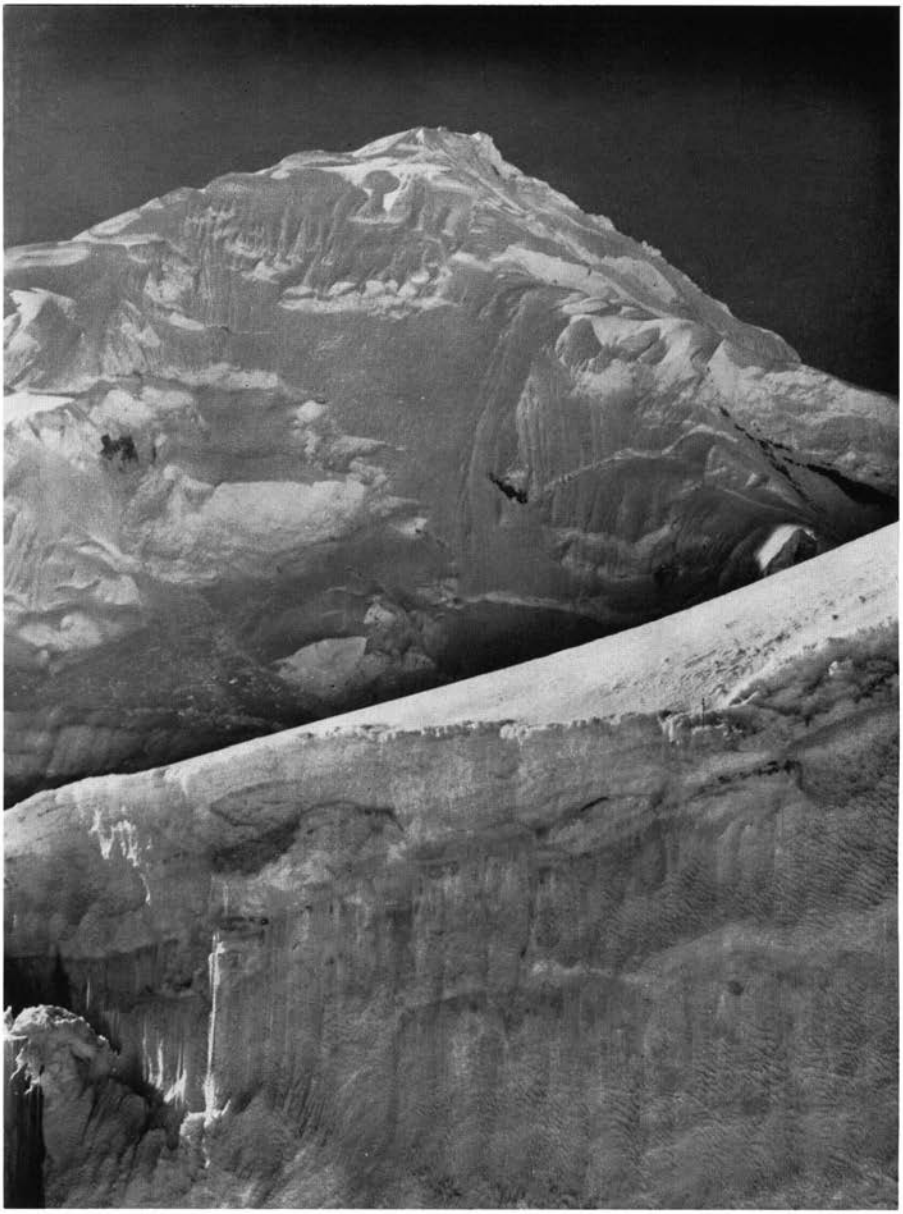
手首からアラレが流れ込み、鼻の先をトップのステップ・カットの氷片がこすってゆく。とき折り下の湖が股の間にぼんやりと見えた。雪庇の下をトラバースして、乗っ越し点を見つけ出す。十四時頂上に出る。視界は悪いが風も無く暖かなので、囲りが見えるまで、下山の時間をぎりぎりまでのばすことにした。

ロスコ・グランデの南方には、すぐ近くのロスコ・チーコ（五一〇〇メートル）のノコギリの歯のような岩稜の続きとは思われない程遠くに、ネバド・パクラ（五一四〇メートル）、ネバド・カイコ（五一〇〇メートル）が凄まじい岩峰を見せていた。この三峰を囲む周辺が、わずかに岩山らしい様相を呈しているだけで、あとは目立つ岩峰氷峰も無い。氷河は小さく、雪田のような感じで谷部に着いているだけである。

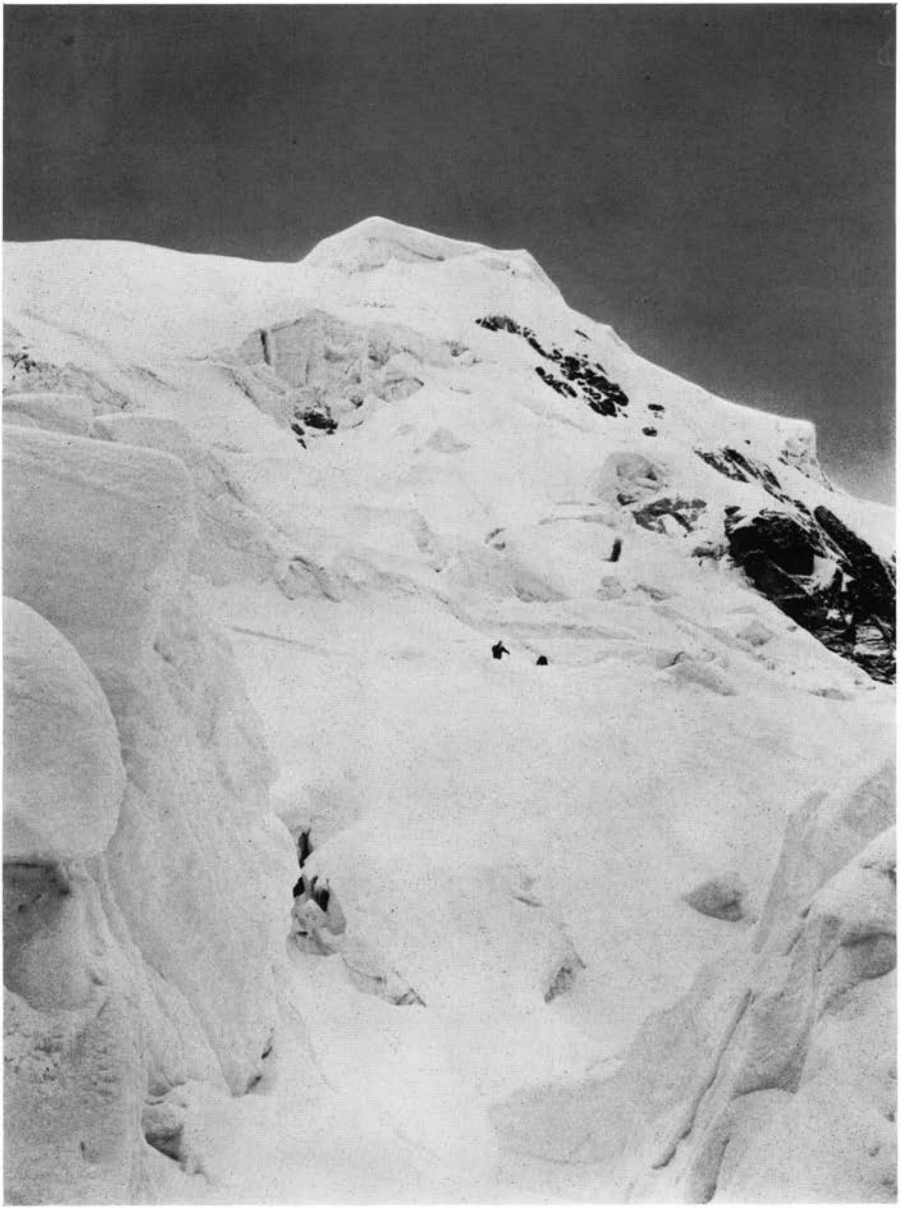
北部には、地図に無かった無名のピークが白く三角につき出ているが、おそらくこのピークがノルテ最北のピークであると思われる。ノルテの北北東約二十五キロの地点にあるネバド・ペラガートス、Nevado Pelagatos（四九二八メートル）コルディエラ・パクラクーチョ Cordillera Pacracucho の二つの氷峰は、天候の故か、それとも遠さの故か見ることはできなかった。

湖を点在させた草原が、だだっぴろく拡がっているだけで、目ぼしい山も見あたらない。

月明にボンヤリと浮き出た氷河の中を、消えかかったトレースを追いながら二十二時CIに帰着する。



コルディエラ・ブランカのネバド・チンチェイ
Nevado Chinchey (6222 m) in Cordillera Blanca.



コルディエラ・ノルテ山群のネバド・ロスコ・グランデ
Nevado Rosco Grande in Cordillera Norte.

九月九日　無名峰ⅠとⅡ（五一〇〇メートル）　高山、横地、細野、木下。

九月十日　クエヨ・コンドル（五〇七二メートル）　里居、パブロ・モラレス。

九月十日　無名峰Ⅲ（五一〇〇メートル）　高山、横地。

## ノルテとその周辺

ノルテのコロンゴ側は氷河も発達しているが、その反対側は切り立った岩壁やガレが多く、登攀はなかなか困難のようである。一般に氷河に洗われた岩であるのか、堅くスラブ状の岩が多く、ロスコ・チーコの西面（CⅠ側）は、その典型的なものの一つであろう。

緑の多いこともノルテの特長であり、ブランカやその他のアンデスの山々が持っている荒々しさや困難さは、そのために失ってしまったような感じである。

ノルテの北部、ロスコ・グランデから無名峰Ⅲに至る部分は、われわれのベース・キャンプからの登攀が最適であったが、南部については不適当であった。それ故に、われわれの踏査も北部だけに終ってしまった。天候の不順ということもあったが、ベース・キャンプを移動させるのに、偵察も入れてなお四、五日を要するようなので、踏査も北部だけにとどめてしまった。

ロスコ・チーコ、ネバド・カイコ、ネバド・パクラは氷河で構成された山というよりも、氷河に洗われた岩峰群と云った方がより適切である。不幸にして岩の性質は調べてこなかったが、相当に堅い岩質であることは間違いなく、登頂のルートも、その殆んどが岩場になることも疑いのないことである。

ノルテの周辺では目立って登攀意欲をそそる山群もなく、わずかにわれわれの期待していった、ペラガートス、パクラクーチョの二峰がノルテの北方にあるだけであろう。それとて確かに目にしたわけではないのだから、どのような山か分らない。ただペルー陸軍の地図によれば、それぞれ西側に氷河記号がつけられているので、われわれは見ることだけでも期待したわけである。

この二峰はペラガートス湖の東側にあり、チンボテからの入山となるだろう。

この二峰の周辺はもとより、ノルテの周辺には四〇〇〇メートル以上の山峰、山群が地図を埋めつくしている。しかし、そのどれもが登攀の対象になるものではなく、ガレた岩山の感が強い。ペラガートスの近辺には、コルディエラ・チンチャンゴ・アンカパータ（四六七一メートル）、パクラクーチョの北にコルディエラ・テクリオ（四六五五メートル）などが高度の点で目につく山である。

さらに南下してコンチュコス町の周辺になると、コルディエ

ラ・シュンドウ（四八七五メートル）、その東にコルディエラ・ミラドール（四九三三メートル）があり、ミラドールにもわずかに氷河記号がついている。

ノルテの北方にはコルディエラ・コンアラス（四九三八メートル）があり、その北にはコルディエラ・デル・ブルーホ（四九〇九メートル）がある。ミラドール峰からノルテまでの間になると、四六〇〇メートルを越える山群が、十座近くあるが、どれもノルテから見た場合には、登攀の意欲をそそらなかった。

だいたいにおいてブランカ北部は、高原状を呈しているので、四五〇〇メートルを越える山峰でも、それ程高さを感じない。それだけに、岩峰あるいは氷河を有する山群でないかぎり、踏査以外の興味はないようである。

## ノルテの気象

一九六五年のアンデスは、全般的に不順な天候に見舞われていた。それ故にノルテの天候体験が平常のものとは思われない。

八月三十一日にワラスを発って、九月十五日コロンゴに帰って来るまでの二週間、晴天が一日中続いた日はなく、午前中晴れが六日、しかも大抵の日が午前十時頃までで、その他の日は雨か雪であった。午前中（十時頃まで）晴れていて、その日に雪か雨が降らなかった日は、六日のうち一日しか無かった。

このように天候が悪かったのも、すでに九月という前雨季のためかもしれないが、現地の話を総合してみても、われわれの入山期間は、いつもならば晴天続きの日にあたっていることになるので、前雨季というよりも不順な天候のため、という方がより正確かもしれない。

しかし、ノルテの緑の多いことについて考えれば、気温もある程度高く、湿気や雨も相当に多いことが推測される。

今回のノルテは、やはり未知への踏査の方が、登攀そのものよりも大きかった。しかし、われわれにより専門的な知識がなかったために、ただノルテ及びその周辺について、一望して来たに過ぎないのが残念である。再び、あの氷河に洗われたU字型のスラブや大岩壁に、ハーケンの音を響かせることはないであろうが、少しでもそれ等について知り得たことで、満足しなければならないであろう。（一九六六・三・三一）

上智大学山岳会ペルー・アンデス登山隊
隊　長　細野　淳美　（31歳）
隊　員　里居　基義　（26〃）
〃　高山由比古　（26〃）
〃　木下　周三　（25〃）
〃　横地　泰英　（24〃）
ポーター　パブロ・モラレス

# ローガン峰北面
## インディペンデンス・リッジ（一九六五年）

川上　隆

六月二二日、白銀に輝くローガン北稜の末端部、ローガン氷河上に日章旗が掲揚され、ベースキャンプの建設を完了した。登攀開始である。

一九六一年三月、防衛大学校創立十周年を記念して計画されたアラスカ遠征が、五年目にして実現、今ローガン氷河上にベースキャンプを建設することが出来たのである。登攀予定ルートである北稜は眼前に迫り、士気は大いに盛りあがった。

しかし、北稜のルート偵察の結果は悪かった。取付き点から、高度差にして一三〇〇メートルの間は、五〇〇メートルの氷壁、その上部は大きなアイスブロックをつみあげ、ダイレクトに北峰稜線につきあげているため、適当なキャンプ地がなく、氷雪の状態も不安定なのでルートを変更、一九六四年、アメリカのコロラド隊によって開拓された、インディペンデンス・リッジを採用することにした。この決定はスピーディで、かつ正確であった。（三日後、我々の予定していた北稜下部の中継キャンプ地は、ブロックで埋っていた。）

六月二三日、ベースキャンプの移動開始、北稜末端部にあるコルを越え、東側に下るとローガン氷河の視界は大きく開け、幅一〇キロメートルの大雪原、前方にはマッカーサー西峰が槍状のピークを、そびえたたせるという雄大な眺望である。

コルを下って、たんたんとしたローガン氷河左岸を、南東に八キロさかのぼり、インディペンデンス・リッジ末端二三〇〇メートルの地点を、新ベースキャンプ予定地とする。ベースの移動と並行して、第一キャンプへのルート偵察を行う。

六月二四日、新ベースキャンプ建設、三名の工作隊員がいる。

ローガン北面はローガン峰で最も積雪量が多く、したがって氷河活動も活発である。氷河雪崩について言えば、インディペンデンス・リッジの両側、北稜の東北面と、北東稜の西面は、それぞれ二〇〇〇メートル以上の高さに切りたった氷壁となっており、この氷壁にかかる懸垂氷河から落ちる氷河雪崩は、集中的な落雷のような凄まじい音をたてて二〇〇〇メートルちかく走りぬけ、時をかまわず雪崩れているようであった。しかし雪崩発生のきっかけについて、ある程度注意して観察してみる

と、温度の安定している時は少なく、降雪中と、日かげ、日射のはじまった直後、温度の上昇、低下――温度が変化しはじめてから三時間ぐらいの間が一番多く、しかも規模の大きい雪崩がでるようであった。

インディペンデンス・リッジの末端から第一キャンプまでのルートは、まず一六〇メートル、傾斜五〇度位の雪壁からはじまる。それを登りきると、ルートはピーク1の西側に大きく張りだしている雪庇の下のトラバースとなる。この斜面を通過すると、傾斜六五度前後、高さ二〇〇メートルの急な雪壁となり、これをダイレクトに登り、ピーク2の雪庇の直下を五〇メートルトラバースして、稜線上にでる。これから先、第一キャンプ予定地までは、割合楽なルートであった。

ベースキャンプから第一キャンプまでは、稜線の西側をまいているため、全ルート中一番雪崩の危険性の多い所で、降雪の都度ルートはデブリでうまっていた。このため行動時間を、このルートでもっとも積雪の安定している、午前三時から一一時までの八時間と規制した。

積雪は風成雪状のしまり雪で、日中は高温のためくさり雪となる。温度は日中の最高でプラス三〇度、夜間はマイナス二〇度に下り、一日四〇――五〇度の日較差は、我々の身体の順化を遅らせ、雪質にも大きな影響を与えていた。

アイスハーケンはあまり役たたず、スノーバーが効をそうした。長さ一メートルのT字型のジュラルミン製で、フィックス用に素晴らしい偉力を発揮した。

六月二九日、ピーク3直下に予定された第一キャンプへのルートが開かれた。

七月七日、久しぶりの快晴、三名の工作隊は第一キャンプ（二八〇〇メートル）にはいる。二日間停滞してテント生活を満喫したためか、身体が少々だるく、第二キャンプの背後、ピーク3の約三〇メートルのオーバーハングした氷壁の乗越しには、人工登攀でまる一日を要した。人間は縄梯子で登降し、荷物は滑車で吊りあげた。

ピーク3から先は、大きな雪庇の波を、リッジぞいに丹念にたどる。雪質もいままでと変り、温度の低い午前中は青氷状で、温度が上るにしたがってコンペイ糖大のザラメ雪となり、足場が不安定で、かつハーケンが効かず苦労させられた。

第二キャンプはキノコ状雪庇の上、ピーク4の頭（三三〇〇メートル）に建設、この登りは三〇〇メートルと長く、傾斜も割合にきつかった。

七月九日、第二キャンプへのルートが確保されるや、翌一〇日、三名の工作隊員は第二キャンプにはいる。

ピーク4は半径八〇メートルに及ぶ広い台地で第一キャンプの狭かった場所に比べ、心が晴れる思いであった。その眺望も素晴らしく、ボナ峰、ベア峰が西方に、ローガン氷河が眼下に

開け、マッカーサー西峰は目前に迫り、その白銀に輝く様子は全く言語に言い尽せないものがあった。しかし入山以来すでに二〇日余を経過、一刻の猶予も許されなかった。

七月一一日、五日間にわたる強行軍にひきつづき、隊は全力を挙げて前進しなければならない。第二キャンプから上部は、悪場の連続であった。一日に二〇〇メートル工作をするのがやっとである。工作がはかどらないためか、距離が長く感じられる。今日こそ第三キャンプの予定地にと、工作隊は出るのであるが、一〇時間の実動でやっと二〇〇メートル、疲れきって帰幕する。一日に八〇メートルも進まない日もあった。荷上げ隊は一人三〇キロ、二往復とがんばり続け、予定の荷物全部を第二キャンプに荷上げしてしまう。工作は第三キャンプ予定地までまだ届かない。工作の終った地点まで荷物はどんどん集積され、デポ地点が出来あがる。工作隊員にあせりが見えはじめる。最も苦しい時機をむかえたのである。一〇〇〇メートル用意された固定ロープは底をつき、急拠第二キャンプ以下の固定ロープを撤収する必要があった。チームワークは最高に発揮された。ルートはあらゆる難場の連続である。五〇メートル前後の氷壁、雪庇状のオーバーハング、縦横に走るクレバス、岩場、長い急斜面のトラバース、とさまざまな様相をもっていた。しかし、この困難も一週間であった。

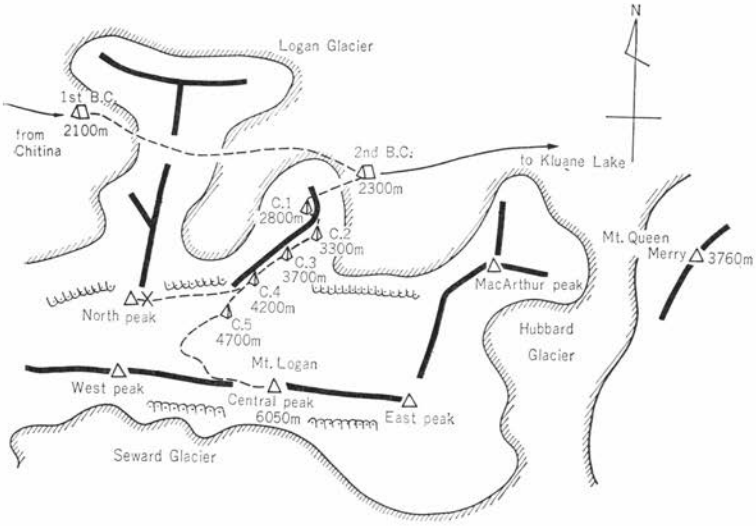
七月一六日、第三キャンプ（三七〇〇メートル）にはいる。第三キャンプから第四キャンプへのルートは、傾斜六〇度前後、二〇〇メートルの雪壁で、上部は部分的ではあるが青氷で、しかもオーバーハングしており、ルートの開拓には苦しめられた。次の壁は所々に青氷がある程度で、平均五五度、二〇〇メートルの坦々とした登りであった。しかし、ここを登りきると無数のヒドン・クレバス帯となるが、これを西側にまきぎみに登ると、二〇〇メートルにわたるナイフ・エッジ（四一五〇メートル）が現われる。傾斜八〇度前後、二四〇〇メートルのローガン氷河まで切れこんでおり、慎重にトレース、いっきにインディペンデンス・リッジの頭を登りつめた。

七月一八日、ついにこの山稜の第二登に成功、翌一九日、この山稜の頭（四二〇〇メートル）に第四キャンプ建設のはこびとなった。若浦、大須賀、長田のアタック・メンバーを発表、行動規制について打合せを行う。

七月一九日、第四キャンプ建設、登頂隊がはいる。登頂予定日数八日間、天候は下り坂である。この日北壁は雪崩にあけくれた。

七月二一日、ローガン北面の基部にたった日から一ヵ月、強力なチームワークのもとに、第四キャンプまでの建設は行なわれた。いよいよアタック態勢は、完了するはこびになったのである。

第五キャンプ建設の第一歩は、ローガン氷河源流、ローガン




頂上氷河帯末端のトラバースからはじまった。丸ビル大のアイス・ブロックの中を、右に左にルートを求め、ヒドン・クレバスを避けながら氷河の右岸にでて、一路北峰のコルを目指して進む。腰までのラッセルと若干の高度の影響に悩まされて、第五キャンプの建設は苦しかった。二往復一五時間のアルバイトの後、頂上氷河右岸、北峰よりのクレバス帯の中、アイス・ブロックに囲まれた平坦地に、第五キャンプ（四七〇〇メートル）は建設された。

### 中央峰登頂（大須賀隊員の手記）

七月二三日、午後一〇時起床、空には星がいくつか見える。二四日午前一時、第五キャンプ出発、しかし夜明けとともに天候は崩れアタック断念。この日の八時間の行動は、アタックのためのルート偵察と、トレースをつけ、標旗をたてておく。

七月二四日、午後一〇時起床、まずテントから顔をだすと、満天に星が輝き、明日のアタック成功を約束しているようである。石油コンロに火をつけて朝食の準備に熱をいれる。いつもより入念に朝食をとる。次第に空は明るみをおびてきた。用意しておいた装備、食糧を点検し、身仕度を整える。テントの外に飛び出しアイゼンをつける。三人の身体が、がっちりとロープで結ばれた。温度が下り、快晴の続くことを祈る。

七月二五日、午前一時出発、前日のトレースをたよりに、ル

ートを北峰よりの谷筋にとる。ここで前日のトレースは終り、新しいルートを切り開きながら前進する。膝までのラッセルに埋まりながら、黙々として登る。ルートの複雑なところは標旗を四〇メートルおきにたてる。時々ガスが流れるが、天気は一八日以来の久しぶりの雲ひとつない快晴、やっと谷を登りきり北峰基部の平坦地に出る。本峰の山塊群が白銀に輝き、われわれを招く。雪はしまり、アイゼンがキュウ、キュウときしんで心地よい。高度の影響はまださして感じない。さらに山ひだをいくつか乗り越す。やっと頂上氷河帯中央部に出る。東西一六キロ、南北一〇キロの大氷河帯である。この部分、西から東へと流れるこの氷河の中は、幅三〇～五〇メートルのクレバスが、われわれのゆく手をさえぎる。渡渉点を探さねばならない。スノーブリッジを求めて西峰よりに移動する。やっと西側一キロ程上流に、良好なスノーブリッジを発見、慎重に確保されて前進する。ガスの流れが激しくなってきた。気になる。しかし、いっきに氷河を渡りきった。

午前八時三〇分、中央峰に連なる尾根の基部にたどりついた。この尾根はだだっ広い一〇度前後の斜面である。斜面が広いため、果てしない雪原を歩いているようでたよりない。しかもガスがだんだんと深くなる。視界三〇〇メートル目標がうまくつかめない。一〇時四五分、ついに天候待ちを決する。ひとまずツェルトを張って、石油ストーブで雪をとかし水をつくる。のどをうるおし、テルモスを満たしておく。落着かない二時間がすぎた。一二時一五分。ガスが切れ目を見せはじめた。再び前進である。しかし、五五〇〇メートル辺りから高山病のきざしがではじめた。足は重く、はき気や、頭痛がする。疲れやすい、もちろん呼吸も少々苦しい。あえぎながら前進するが、ものの二〇分も歩くとダウンである。

中央峰に近ずくにしたがい風も強く、二〇メートルを越す。ただひたすら登る。ついに午後五時三〇分頂上（六〇五〇メートル）にたった。やっと着いた。しかし天候は下り坂であり、風も頂上付近で二五メートルぐらい吹いている。雲は五〇〇〇～五五〇〇メートル付近にたれこめ、ローガン南面の壁がかすかに見える。南壁にはカリフォルニア隊が、中央峰めざして苦闘していることだろう。彼等の健闘と無事を祈る。

五時四五分下降開始。天候は悪化の一途をたどる。五五〇〇メートル付近からガスはひどくなり視界一〇〇メートル、雪も降りはじめる。七時頃から降雪はひどくなり、積雪の白とかさなり、しかも日暮れのため、視界は二〇～五〇メートルに下ってしまった。ルート・ファインディングに神経を消耗させながら、標旗をたよりの下降を続ける。身体は二〇時間を越す行動と、高山の影響で綿のように疲れている。疲労回復にと口に運ぶ食物も、全く受けつけない。もはや精神力だけである。午後一一時、二二時間の行動の後、まさに金色のテント、第五キャ

ンプにたどりついたのである。ザックを下ろし、ロープをはずすのももどかしく、やっと靴をぬいでスリーピング・バッグにはいった。

七月二七日、二六日まる一日吹きまくった暴風雪もおさまり快晴、疲れきった身体にむちうって、第五キャンプを撤収する。午前一〇時出発、前日の降雪でラッセルは膝まであるが、力をふりしぼって前進。一一時三〇分、頂上氷河末端に豆つぶのような人影を見る。サポート隊である。コールがかかる。一週間ぶりの再会である。登頂隊は成功を報告する。午後二時、第三キャンプにはいる。隊長の出迎え。固い握手が交わされる。その夜は成功の喜びで、第三キャンプはわきかえった。明日は第三キャンプから、北峰（五八〇〇メートル）へのアタックである。メンバーが発表され、行動規制についての打合せが行なわれる。

七月二八日、午前三時出発、大須賀、高見、志賀、田代の四名、快調に第四キャンプ跡を通過、インディペンデンス・リッジを登りきった地点から北峰への稜線にとりつく。頂上は間近かに見えるが遠い。高度をあげるにしたがい、高見の調子が悪くなる。日射とともに雪崩の危険がともなう。一〇時ついにトップの足下から雪面がきれ、雪崩れる。これ以上トラバースを続けることは危険である。尾根筋を忠実にたどる。規制時間は刻々とせまる。北峰まであと五〇〇メートル、残念であるが、隊員の調子もあまりよくなく登頂を断念する。五二〇〇メートルの地点である。午後になるとまた天候が悪化しはじめる。しかし三時三〇分無事第三キャンプに帰幕、いよいよ明日から撤収である。

第三キャンプ以下は、この一週間で雪庇は後退し、尾根はやせ、ルートは氷化する一方、一日も早くあとはベースキャンプに降る必要がある。チャーター機のパイロット、ウイルソンは、他の隊、ローガン南面のカリフォルニア隊、セント・エライアスのハーバード大隊、それにハンターをむかえる関係から、我々に一日も早く下山するよう連絡してくる。この日は夜遅くまで、撤収についての打合せが行なわれた。

## 撤収

七月二九日、撤収開始、工作隊は早朝から行動をはじめる。ルートは青氷と化し、あるいは新雪をかぶり、複雑に変化している。クレバスは大きく口をあけ、斜面はいっそう傾斜をましたため、切りたった斜面のトラバースや、ダイレクトの下降の連続に神経を消耗する。七月も中旬をすぎると、冬をむかえるにあたって、天候も良い悪るいにつけ極端な現象をみせ、ルートも極端にその積雪状態を変質させた。まさに氷河は生きているということを、まざまざと見せつけられた感じである。

四〇キロちかい荷物は肩にくいこみ、バランスをとるのにひ

と苦労する。なにしろ慎重に下るよう指示する。午後一〇時、やっと第二キャンプにたどりついた。

七月三〇日、第二キャンプ撤収、いっきにベースキャンプまで下山する。第二キャンプからの下降は、三、三、二名のパーティを編成、アンザイレンして慎重な下降を続ける。ピーク3手前から降雪がはげしくなる。この氷壁はアプザイレンでいっきに下る。ピーク2から大きく張りだしていた雪庇は、すでに崩落、このルートは様相を一段と悪化させ、オーバーハングしてローガン氷河まで、五〇〇メートルにわたって切れこんでいる。幸い降雪はやみ、視界は八〇メートル前後に開けてくる。しかし下降にはいる頃から、日はとっぷりと暮れはじめる。隊員の心は落着いている。一人一人が力を出しきればよいのだ。トップのロープがスルスルとのびていった。

ベースキャンプの上部の肩にでると、下から懐中電灯の合図がはじまる。撤収支援の田中、小林ドクターである。コールがこだまする。ついにベースキャンプにたどりついた。肩を組み防大校歌を合唱、午後一二時であった。

登山隊一〇名、全員無事ベースキャンプに集結、ここにローガン峰北面インディペンデンス・リッジにおける登山活動を完了した。

（隊の構成メンバー）

| | | |
|---|---|---|
| 隊長 | 川上　隆 | 三七歳（横浜市立鶴見工業高校） |
| 副隊長 | 若浦　義弘 | 三〇歳（第十三普練隊一尉） |
| 隊員（渉外） | 田中　甫 | 三〇〃（航空幕僚監部一尉） |
| 〃（食糧） | 弘中　一寿 | 二八〃（第一〇一通信技術教育隊二尉） |
| 〃（記録） | 大須賀　浩 | 二八〃（第十三普練隊二尉） |
| 〃（会計） | 高見　巌 | 二六〃（第二七連隊付二尉） |
| 〃（庶務） | 志賀　伝 | 二八〃（第五連隊付二尉） |
| 〃（気象） | 長田　正行 | 二六〃（小牧気象隊二尉） |
| 〃（装備） | 田代　儀雄 | 二七〃（第三二連隊付二尉） |
| 〃（医官） | 小林　弘 | 三九〃（第九衛生隊二佐） |

## 後記

一、ローガン峰北面の登攀可能なルートは、①北面の西側に位置し、北峰に直接つきあげている北稜。②北面の中央部、北稜と北東稜の間に奥まって位置するインディペンデンス・リッジ。③東峰より北側に派生している長大な北東稜の三ヵ所が考えられる。

われわれは当初、北稜を登路として予定したのであるが、いざ当面してみると、北稜の西側はブロック状の懸垂氷河をかけ、時期的に氷雪の状態悪く（特に氷河雪崩）登攀不可能であった。今後北稜を志すとしたならば、比較的氷河の安定している四月下旬から、六月中旬までの間がよいようである。六月下旬にはいると、すでに北面、特に北稜、北東稜の西側氷河帯は雪崩の巣となる。われわれに対するウォールター・ウッド博

士、アラスカ山岳会、アラスカ米陸軍山岳部隊の人達の意見も、一般論として、この時期をすすめていた。

インディペンデンス・リッジは殆んどダイレクトに、ローガン氷河（二三〇〇メートル）から頂上氷河帯（四二〇〇メートル）につきあげているため、急傾斜であるが、北稜、北東稜と比較して積雪が安定している。一九六四年七月、コロラド隊によって開拓された。（コロラド隊は、アメリカ合衆国独立記念日に、このリッジから中央峰登頂に成功したので、それを記念してインディペンデンス・リッジと名付けた。）

北東稜は尾根の末端部に四〇〇〇メートル前後の、双子山のような容姿の峰をもった長大な尾根で東峰へと続いているが、スケールの大きい男性的な魅力ある尾根である。しかし下半分が長いのが欠点である。北稜、北東稜ともに処女ルートである。

積雪の状態については、われわれが登路としたインディペンデンス・リッジについていえば、七月中旬をすぎると、それまでの定期的な気象のサイクル（三・四日晴天、四、五日悪天）が、くるいはじめただけでなく、ルート上の氷雪面の融解が非常にはげしく、撤収が不可能になるおそれすらある。このことは、ローガン峰全域について言えることであろう。（「山岳」第六〇年、川崎巌「ローガン峰」一四九頁(2)参照。）

二、温度は最高でプラス三〇度、最低マイナス二九度を記録した。日較差は平均して五〇度というはげしいもので、身体の調整、雪質に与える影響、雪崩等、種々問題となる。

装備については、夏期アラスカ、ユーコン地域にはいった各隊の報告によれば、日本の春山装備で十分であるという意見が多かったが、われわれはアラスカ米空軍の航空気象隊や、ウッド博士、特にコロラド隊が五〇〇〇メートルで最低温度マイナス四〇度を記録したという報告をうけていたので、ヒマラヤ装備に準じたものを携行した。その年により、また北面の場合は、東、西、南面と少し事情がちがうようである。

三、通信機については、アラスカ、ユーコン地域における登山活動では必携品であるが、携行についてカナダは非常に厳格というか、殆んど携行が不可能である。現在のところ、カナダ人をメンバーにいれる以外に、解決の方法はなさそうである。

氷河の歩行、および氷河雪崩に関連した氷河上でのテント地の選定については、日本山岳会々報二四五号一〇頁、川上　隆「ローガン余話」参照、特に氷河の歩行については、クレバスに墜落した場合の救助法を含めて、金坂一郎氏著「冬山技術セミナー」を一読し、十分にトレーニングをしておく必要があろう。

# マッキンレー南壁東稜（一九六五年）

塚崎義人

この度のマッキンレー登山は、関西登高会にとっては三回目の海外登山である。海外の山をめざす場合、魅惑的なところは数多くあるが、最も手っとり早く最少の予算と期間という条件がつけば、やはりアラスカに落着くのではなかろうか。そういう意味で一九六四年は、浅野清彦氏を隊長とする八名の遠征隊をセント・エライアス峰に送り（「山岳」第六〇年参照）、比較的短期間に登頂し、われわれの若く小さな山岳会にも、海外登山のムードと経験とをもり込んだ。その余熱のまだ覚めやらぬうち、一九六五年はマッキンレー峰に目標をおき、より大きな可能性の実現をめざしたわけである。

マッキンレーについては改めて述べるまでもなく、北米の最高峰であり、またアラスカの名山としてよく知れわたっており、アメリカの国立公園にも指定されている。アンカレッジの北方約二二〇キロに位置していて、晴れた日にはアンカレッジからもはっきり望むことが出来る。一九一二年ハドソン・スタックが登頂して以来、すでに十数隊によって頂が踏まれており、そのうち殆んどはカールステンツ山稜と呼ばれる北東稜から登られた。一九五一年アメリカ隊の登頂は、西側のバットレスからのものであり、一九六〇年の明治大学の登山隊もこのコースによっており（「山岳」第五七年参照）、今では一般コースの一つになったように思われる。

この山の概略は、北面にピーターズ、マルドロウ、トライカの諸氷河と南面にカヒルトナ、ルースの両氷河など、それぞれ五〇キロから八〇キロの長大な氷河に囲まれ、ハンター峰、フォーレイカー峰とともに独立峰的なマッキンレー三山をなしている。したがって風が強く、北緯六三度という高緯度と相まって気温も寒冷で、夏季も氷点下二〇度を下ることが稀でなかった。山容は南北両ピークをもち、一般に北面は雪と氷で覆われた比較的広大な氷河地形によって形成されているに反し、南面は急峻な岩場が多く、したがって従来の登攀は北面または西面のものが主であった。しかし南壁は主峰からカヒルトナ氷河まで、一挙に三〇〇〇メートル切れ落ちた岩氷壁となっており、一九六二年イタリア隊が南壁西稜に初登攀して以来、世界の岳人の注目をあつめるようになった。とくに主峰稜線上につきあげた中央稜は、数百メートルの岩壁と懸垂雪田とが交錯し、絶えず氷雪崩にあらわれており、アラスカ、ロッキー山脈を通じ

て最もむずかしい登攀といわれている。われわれと殆んど時を同じくして、アメリカ、エベレスト隊の一行が、中央稜直下にベースを構えてねらっていたが、殆んど手もつけずに引き揚げていった。今後岳界の宿題の一つになるであろうが、恐らく十年以内に登攀を許すことはないだろう。

当初のわれわれの目標は南壁の西稜か東稜か、出来れば中央稜の偵察試登ということにあった。手もとにあつめた資料は、「アメリカン・アルパイン・ジャーナル」と、ウォシュバーン博士より送られた南壁全貌の航空写真とであった。しかし総ての登山に云えるように、実際に現地に着き山を仰いで見なくては、本当のコースは選定できるものではない。全装備一トン弱ではあったが、登攀対象の点で比較的登山装備に重点をおいて、充分の固定ザイルとアイス・ハーケン、ロック・ハーケンを用意した。

また登山手続きは至って簡単で、早目にマッキンレー国立公園管理事務所に登山申請を提出すること、アラスカ山岳会の同意書および装備検定を受けることだが、これはいたって形式的なもので、われわれの場合は、留学生としてアンカレッジのメソジスト大学に学んでいる西前隊員のおかげで、荷物検定は全くノータッチであった。従ってヒマラヤ登山のような、ネパール政府との面倒な許可書、ロイヤリティーの問題、シェルパ指名手続、荷物検閲から税金等の雑事は全くなく、観光旅行同様の手続きで万事がかたづき、少し大げさに云えば十年前日高山脈に行った時と、変らぬような装備構成であった。隊員の編成は以下の通りである。

隊長　塚崎　義人（35歳）ツカザキ外科病院。
隊員　梶浦　正敏（29〃）デイリースポーツ新聞勤務。
〃　鏑木　勝彦（29〃）住友金属勤務。
〃　西前　四郎（26〃）メソジスト大学留学。
〃　中村　久住（21〃）生駒毛織KK勤務。
〃　Arthur Davidson（23〃）コロラド大学生。

全然未知の米国人を、いきなり遠征隊に加えることは、ちょっと無謀な気もするが、彼はコロラド大学山岳部に属し、ロッキーの山で屢々遊んだ男であり、遠征というものの国際性、また、われわれの会独特のスケールの広さで、あえてチームメートに選んだのである。比較的低調なようで時に大きなことをしでかす、アメリカ山岳界の力量の一端でもうかがえれば幸いと思った。

## アンカレッジへ

六月一七日早朝アンカレッジの飛行場で全員六名は初顔合せした。先発の鏑木、中村は海路で二日前に着いており、前年のセント・エライアス以来一年ぶりの西前、それにアート君、着いたばかりの私と梶浦を囲んで握手を交わす。早速アート君の

車で、雲の低くたれこめたアラスカの原野を、一路アンカレッジの街へ飛ばす。一昨日陸揚げした登山隊の荷物は、すでに昨日タルキートナに運ばれているので、生食品やガソリンなどを仕入れし、午後早々とアンカレッジを発ちタルキートナに向う。途中街はずれのアメリカ軍宿舎に滞在する、自衛隊のローガン遠征隊を訪問する。約一週間前に着いたとのことだが、船積の荷物がおくれて、専ら宿舎で無聊をかこっているとのこと。われわれの場合は、隊員が川崎汽船で荷物と同道し、船員の好遇を受け、アンカレッジの入港当日に荷物を下ろしてもらうという、異例のサービスを受けたのである。

約四時間にわたるドライブも、夕刻疲れをおぼえる頃には、タルキートナの寒村に着く。マッキンレー専属のパイロット、ドン・シェルドン氏と握手をかわす。東京を発つこと二四時間にして、すでにわれわれはマッキンレーの根拠地タルキートナに旅装を解き、天候さえ許せばいつでも氷河上に飛び立てる状態にあった。ドンの飛行機格納庫にシュラーフを並べて眠りにつきながら、私はつくづく思ったものだ。何んとヒマラヤ遠征とちがうことか、そのアプローチの時間の長短はまさに雲泥の差だ。幾日ものキャラバンの末やっと仰ぎ見るヒマラヤの山にくらべ、一挙にふところに飛び込める輸送力は、外部から否応なく登山態勢をつくりあげてしまう。

## カヒルトナ氷河へ

アラスカの天候は、六月頃から九月頃まで曇天模様で、時に青空がちらつく程度、週一回ぐらいしか晴れ渡らない。一日待って一八日雲間に青空がのぞかれるや否や、強引に梶浦、中村をのせて第一機便が飛び立つ。第二機便に私と鏑木、広大なアラスカの大原始林の上を、荒れ果てた広漠たる河の彼方に、遥か雲に覆われたマッキンレー山塊が近づく。機はかなり揺れながら氷河の末端に入り、左右に旋回しながら、迷路のように入りくんだ山塊と氷河の上をかすめ飛ぶ。やがて広大なカヒルトナ氷河の白一色の雪面に、ほとんど音もなく着陸する。第四機便が着き、全員六名でドンの飛行機を名状し難い気分で見送ったのは、すでに八時過ぎ、白夜のはじまろうとする頃であった。残りの荷物は、後日さらに上部の二五〇〇メートルあたりに、エアードロップの手はずになっている。

翌一九日は曇天、梶浦、中村がコースの選定に先発する。ガス、降雪の多い氷河上では、時間のあるうちに出来るだけ速やかにルートを見つけ、標識旗を立て、あとの行動はこの標旗をたよりにポッカしなければならない。BCまで約半分と思われる処に一応中間テントを張る。直射光と反射光のためガスのかかった氷河上の行進は、熱気が鬱滞して山馴れしてない体にはなかなか苦痛だ。ピラミッドのような目前のフォーレイカーの

巨大な山容が威圧的だ。カヒルトナ氷河からの登攀は未だなされていないだけあって、コースは簡単にみつからぬ。この同じ雪面の道を、当分の間何往復もせねばならぬ。翌日も翌々日も天候は予想外に悪いが、相変らずわれわれはBC、中間テント間のボッカを行なう。

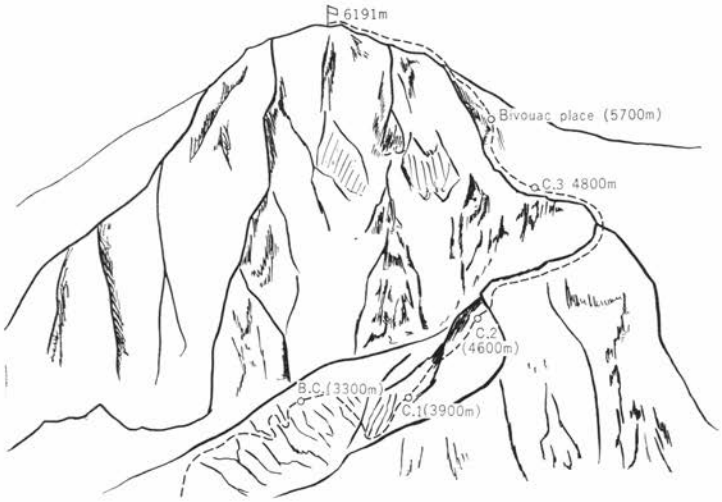
二十二日　連日の降雪に強風が加わる。夜半にいたり吹雪がおさまり、白夜の空は一段と冷え込み、天気は稍々好転する。午前二時、梶浦、中村を上部氷河への偵察に送るがラッセル深く引き返す。午前九時、私と鏑木とは再びBCへのルート工作に向う。ガス、降雪となりほとんど視界きかず、暗中模索のような状態で仕方なく引き返す。午後九時再度西前、アートを送る。さしも続いた悪天もようよく晴れ渡り、約九時間のアルバイトの後、BC予定地を選定して帰ってくる。氷河上の天候は意外に悪い。しかし最初面喰ったこの天候も、よく観察すれば、早朝から午前、正午過ぎと漸次悪化し、深夜から早朝にかけて回復するという循環に気づいた。こうしてBC設営まで、専ら昼はテントでゴロ寝をし、夕刻と共に起き出し、白夜のしらむ頃には寒気をついてテントを発つ。いわば夜勤専門のナイターが始まったわけだ。

二十三日は久し振りの快晴、午後BCへのボッカの途中かすかな爆音と共に蚊トンボのような飛行機が、氷河上に姿をあらわした。ドンのエアードロップ。氷河上の緩雪面上に低空飛行から、三十個余りの荷物がまるで爆弾のように落下する。雪煙をあげて荷物が散る。われわれは逃げまわり、空襲そのままのすさまじさだ。最後に大きく旋回し翼を振って去って行った。再びもとの静寂にかえる頃には、雪上広範囲に四散した荷物集めの重労働がはじまる。アラスカ登山のユニークな魅力の一つも、この辺にあるのかも知れない。

翌二十四日寒気をついて東天の明ける頃BCに入る。ほとんど規則化した氷河上の気候も、自然への順応次第で至極便利だ。BCの下部にあるかなり錯綜したクレバス地帯から、南壁西稜が主峰にのび、マッキンレー南壁の壮大な岩塊が頭上を圧する。午前三時BC入り、無風だが寒気は肌をさす。

二十五日　晴天とは云っても北極の空、その青さは紺碧からはかなり遠い。梶浦、西前を西稜ルートの偵察に送る。氷河上に着陸以来、殆んど休む暇なしの行動と、ナイターによる昼間の寝不足で何となく頭が重い。私だけ一日休養をもらってテントで仮眠をとる。西稜のコースはノッチにつき上げる岩場が意外に手ごわく、ほとんど垂直三〇〇メートルの岩壁となっており、その上部がオーバーハングとなり、相当な登攀力を要するという。たとえコースは付きフィックスを張っても、以後のボッカは極度に困難さを増してくる。いろいろ議論の末、西稜を捨て技術的にはより困難さの少ない、サウス・バットレスから南壁東稜へのコースに変更せざるを得なくなった。

# Climbing Route to Mt. McKinley (South Buttress)




こうして二六日、鏑木、中村をBC上部のサウス・バットレスの最初の難関、アイスフォールのルート工作に送るが、クレバス、セラックスの迷路地帯にはばまれて引き返す。今日で氷河上のボッカも一段落し、ベースは名実ともに完備した。活気に満ちたテント内では鏑木がコロッケ作りに腕をふるっている。肉、卵、野菜にミルク、全く今しがた市場から仕入れたような原料で、ちゃちなレストランそこのけの匂いを発散させる。氷河の源頭で盛大な晩餐会がいとなめるのも、アラスカ登山の醍醐味の一つであろう。

翌二十七日早朝、西前、アートを再びアイスフォール工作に送る。正午すぎ折り重なるセラックスの上部に、切り抜けたらしい二つの黒点を認める。俄然色めき立ったわれわれは、CI用の荷物を背負い、彼らのトレースのあとを追う。アイスフォールのしょっぱなから、いきなり二〇〇メートルの急雪面を登り、セラックスとクレバスの交錯する中を抜けると、五〇メートルの氷壁上にある大きな雪庇が、見事に切り落とされている。フィックスド・ロープの助けをかりて、やっと雪庇を乗り越える。遥か下方にはベースキャンプが見おろされ、昨日今日と続く好天に全くたのしい。

二八日四人でBC、CI間の荷上げを行なう。西前は単独でCI上部の懸垂氷河へのルート工作に発っており、彼との定時交信で、急斜面のラッセルに相当骨折っているとのこと、二ヵ

処ほどの氷壁に固定ザイルをほどこした、といって張り切っている。昼すぎわれわれはCⅠに着く。暫らくして、CⅡ予定地を確認して下って来た西前と協議の末、少々オーバーワークであったが、梶浦、鏑木、中村をCⅡ建設にあげることにする。CⅠ、CⅡ間は懸垂氷河の急斜面をトラバースし、稜線から出る広大な尾根筋に取りつき、これを直登するのである。夕日を浴びた雪面に遅々として動いて行く彼らの黒点がみえる。マッキンレー南壁は黒と白の鮮明な像を描き、遥かにフォーレイカーの雄姿がシルエットとなって素晴らしいパノラマを作り出している。

二九日五時、私と西前はCⅠを出発、全くのガス空、ついで降雪、吹雪と変る。深いラッセルと吹雪にシュプールは殆んどなく、時にヒドン・クレバスに面喰いながら苦しい登高の末、ほうほうの態で夕刻CⅡに入る。CⅡは尾根直下約二〇〇メートルで、急峻な斜面にある大きなアイス・ブロックに囲まれた、テントを張るのがやっとという甚だ危っかしい処だった。テントの入口から、カヒルトナ氷河に一挙にすべり落ちているこのキャンプ・サイトは用を足すにも大変だ。ピッケルでおさえ込んでいる四人用テントに、五人がつめこまれる。私と鏑木は頭痛を訴え、何となく吐き気をもよおす。高度約四六〇〇メートルだから、高山病症状があっても不思議ではない。三十日CⅢへのルート工作に向う。曇天だがマッキンレー主峰は目前に姿をあらわす。果たして到達出来るだろうかと思われる程、冲天高く威圧的だ。

以下頂上アタックの経過は、梶浦の手記による。

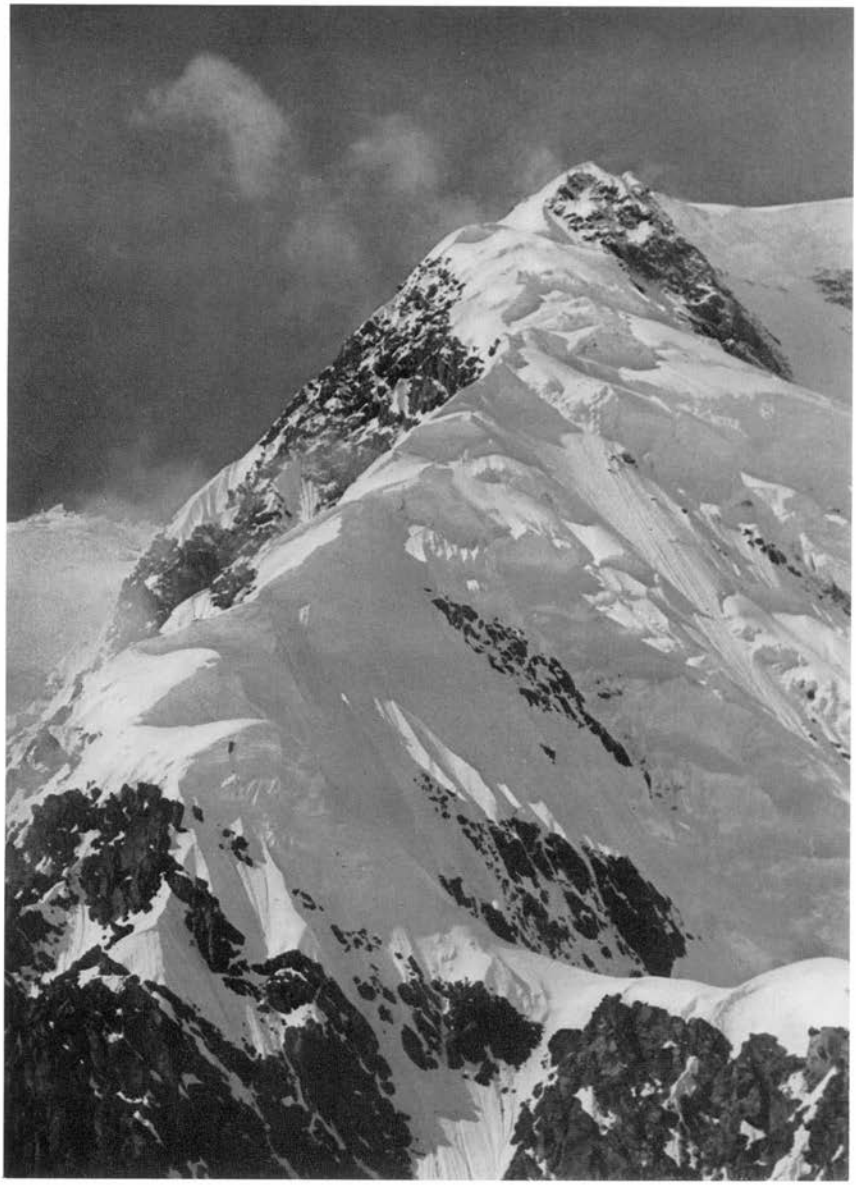
## 頂　上　へ

七月一日隊長以下五人がサウス・バットレスとイースト・バットレスの合する一五、五七〇フィートのコルにCⅢを設営したのは、午後もまだ早い二時三〇分だった。ここからそびえる東稜は、東カヒルトナ氷河から眺めて予想していたより、はるかに急峻でスケールが大きかった。東稜という感じより、大きな壁と云った方が当っていた。二日前に一挙に一二〇〇メートル登り切った疲れが残っていたのか、東稜がわれわれに与えた圧迫感は重苦しかった。

CⅢで一夜を過ごした二日の朝は、これからマッキンレー頂上まで、あと一四〇〇メートルをアタックするにしては、もう一つピリッとした緊張感に乏しい、けだるいような出足だった。食量は二日分、ブタン・コンロ一個にカートリッジ一缶、ロープは六〇メートル二本、三ツ道具、ツェルト、ほかにフィックスド・ロープ三〇メートル、それに各自キルティング服上下がルックの中に詰め込まれていた。荷物はさして重いものではなかったが、今日中に頂上へと意気込むわれわれにしては、ピッチは上がらなかった。ルートはコルから斜め上に、南壁との



インディペンデンス稜の第3キャンプへの登り
Climbing up to Camp 3 on the Independence ridge of Mt. Logan (By Shiga)



ベースキャンプからローガン峰インディペンデンス稜上部を望む
Upper part of the Independence ridge of Mt. Logan seen from the Base-camp. (By Osuga)



マウント・マッキンレーのベースキャンプからそのイタリアン・リッジを仰ぐ
The Italian ridge (Mt. Mckinley) seen from the Base-camp.

---

マウント・マッキンレー南壁東稜上部
Upper part of the South buttress east ridge of Mt. Mckinley (6191 m)

境をなす岩稜に向かって突き上げる雪面を選んだ。この雪面は三〇〇メートルほどで岩場に達する岩の間の雪をよって、やや右より急な斜面を一〇〇メートルばかり登ると、傾斜は落ちて台地状のところに出た。真正面南壁に折れる岩稜は急峻で手が出ない、左寄りに台地を進むと、ルンゼ状の地形に雪がとぎれとぎれにつづいている岩場の下にやってきた。ちょうど高度一七、三〇〇フィートぐらい。正午を過ぎていた。

このあたりで朝からの天気が変わり出し、左手南壁の方向から吹きあげるように、雪をまじえた強風がたたきつけて来た。しばらくはただ、上へ上へと岩場をよじ登るより仕方がなかった。だが、われわれにとって未知の岩稜で見通しもつかないのに、がむしゃらに登りつづけるのには限度があった。足下から急に雪面がなだれ落ちる。これ以上行動するのは危険な状態に追い込まれて来た。隊長の「どこかで止まれる場所を捜せ」と怒鳴る声も、強風にかき消される。岩場にハーケンをたたき込んでも、一向に効いてくれない。やっとオーバーハングした岩場の上に見つけた、堅い雪面をけずってツェルトをかぶったのは午後二時三〇分、白夜の空とはいえ殆んど視界は零であった。

一日で一四〇〇メートルを登り切ろうという計画は、多少無理だったようだ。このビヴァーク地点は、まだその半分を登ったばかりであった。高度順応を充分に行なっていないわれわれには、一夜の睡眠の後にくるものは、全身の云い知れぬ倦怠と寒気のみであった。この地点でのビヴァークは、強風と寒さに殆んどまどろむことさえ出来ず、可なりつらいものであった。かくて午前一時半寒さに耐え得ずかすかに東天の空が白らむ頃、登頂にすべての余力をふるってツェルトをはい出した。それまで隊員にはさほど現われなかった高度の影響が、はっきりしだした。西前は目まいで雪の中に坐わり込む始末、私は三歩つづけて歩くのがつらい。稜線に突き出した岩場を、右に巻くように登ると、細く上にのびる雪面に出た。雪面にステップを刻んで二〇〇メートルほど登ると、頂上につらなる一八、九六〇フィートのピークの下に広がる台地に出た。この登りは急な雪壁の登りだ。ここにフィックスド・ロープをつけて乗り切ると、あとは頂上まで雪稜がつづいている。もう岩場はない。一九、五〇〇フィートあたりまでは傾斜もゆるく雪稜も広い。このあたりは鏑木がずっと先頭に立った。頂上稜線はさすがに雪も堅く締まり、上天気とあって高度の影響さえなければ、口笛でも吹きたくなるところだが、何だか吐き気をもよおして足元もおぼつかない。稜線は一九、五〇〇フィートあたりから、大きく右にカーブしぐんと傾斜を増す。真っ青に抜けた空に、白一色の稜線が高く高くのびている。美しいはずのこの景色も、ふらつく足を堅雪面に蹴り込んで、一歩一歩荒い息をくり返えすわれわれの目には、ただどうしても越えなければならない障

碍としか映らなかった。三つ目のピークにかかるころから、両側はすっぽり切れ落ち、左側は三〇〇〇メートルの南壁となって落ち込み、右側はタイヤー・ベーズンまで急雪面が光っている。先頭の西前と中村がアンザイレンし、鏑木と私はフリーのまま、ロープをつけるべきだとは思いながらも、なんとなく心身が言うことをきかなかった。頭の中ではロープを結ぶべきだと叫びながら、そのまま急な細い雪稜を乗り越えて、カータのホルンに到着した。ここで今まで一緒に登りつづけて来た鏑木が倒れ、はげしく呕吐をくり返し、ついに血塊まで吐き、可なり興奮状態となった。止むなく彼をその場におく。このあたりからはマッキンレー頂上も望見され、広いなだらかな雪面が続き、もはやむずかしい処はなかった。軽い興奮を感じながら三日午前九前二〇分西前、中村、梶浦はマッキンレーの頂上に立っていた。

# マッターホルン一九六五年

## ―その北壁の登攀―

芳野満彦

一九六五年のツェルマットとマッターホルンほど多彩な年はなかったろう……。

エドワード・ウインパーがマッターホルンの初登頂に成功して、丁度一〇〇年たったこの年……一世紀後のマッターホルンにも、まだ初登攀が残されていた。

一九六五年の冬、イタリヤの名クライマー、ワルテル・ボナッティによって最もグレイドが高いと評価されていた北壁のダイレクト・ルートが単独で、しかも一週間のビバークの末、完登された……この大記録は全ヨーロッパの岳人をアッといわせた。それと同時にヨーロッパの登山形式は、新しい『強行主義』というか、ゲバルトアルピニズムの新方向を示すようになった……。そのような輝やかしい歴史的な幕は、再びツェルマットから、マッターホルンから切って落された。

そして夏、七月十五日はウインパーの登頂一〇〇年祭だ。この日こそウインパー個人やマッターホルン一つだけの追憶ではなく、まさにヨーロッパのセンチュリー・オブ・マウンテニアリングそのものであった……。

イギリスのBBCテレビでは、全ヨーロッパにこの登山一〇〇年祭を記念して、スイスの名ガイド、ミッシェル・ボーシェが夫人をともなって北壁より登頂に成功した、女性によるマッターホルン北壁初の登攀者が生まれた瞬間を放映した……この登攀とテレビ放映も、マッターホルンの歴史には特筆すべき出来ごととなった……。

このように一〇〇年祭と北壁は、はなばなしく幕をあけ、女性によって美しく幕が閉ざされようとしていた……だがわれわれ二人の日本人は、その幕切れというか、フィナーレにやっと間に合った……。

### ≪登攀≫

一九六五年八月四日　晴　朝風強し

三二六〇メートルのヘルンリ小屋を午前三時一〇分に出発。

小屋の人々は皆な寝静まっていた。

私のパートナーは九州の飯塚市出身の二七歳になる渡部恒明君。彼は一九六四年七月渡欧して約一年間ミュンヘンに滞在していた。私以上に大きな岩壁を登ることに情熱を抱いていた。

別にアセリというものはみえなかったけれど、彼は一刻も早やく取付点に行きたかったのだろう。一年間蓄積された登攀意欲が一気に爆発したかのように、足早やにマッターホルン氷河を北壁に向って下りて行った。この氷河は北壁の左上から発生して、一度大きく段になっている。この段のセラック地帯は、ツムット・グラートに行く場合も通過しなくてはならない。ツムット・グラートへのガイドブックを読むと、この氷河の段（セラック地帯）はアイス・グレイド四級から六級で困難な地帯とされている。しかし、われわれは偵察のとき前後四回通過しているので気楽だった……。

一応慎重にザイルを出して結び合い、そのまま同時に登り出す……午前三時四〇分。

一〇〇メートルほどの、その氷河の段を通過すると再び氷河は平坦になる。風速二、三〇メートルもあろうと思われた強風も、夜明けと共に小止み（約五メートル）になった。

北壁の真下を廻り込むように取付点のラントクルフトに着いたのは四時三〇分を廻っていた。再びザイルを結び直し腰に新たに三つ道具が着装された。

ラントクルフトの最大傾斜は九〇度近かった。しかし始めの登りなのでスピードは早やく、しかもアイス・ハーケンを二本使用しただけで、アブミなど使わずに三〇メートルを登り切ることができた。

トップを切る渡部君のスピードは、まるで猫が階段でも登るようにスムーズだ。取付点からの初めのピッチ（ラントクルフトの三〇メートル）が終ると、氷の斜面の登攀は想像していたよりも少し急ではあったが、せいぜい平均傾斜五〇度内外の比較的楽な登りであった……比較的楽というのは単に斜度のことで、氷の質は決して楽ではない。その硬さは正にアイスグレイド六級であった……ヒマラヤや、南米、またはアラスカなどの氷河の氷の硬さは、日本製のピッケルなど全くうけつけない硬さであると聞いたことがある。私はそれらの山々の氷河は知らない。しかし、その人々はこのマッターホルン北壁の氷壁を知らないだろう。私はホッフ・シュテッターの出っ歯のように二本靴先にとび出た、シュタイクアイゼンを着用し、靴先を力一杯氷の斜面にけ込む。しかし、その鋭い二本の爪が一ミリでも喰い込めば満足して登った。右手にはアイスバイルを持ち、左手にはアイス・ステッチェル（針のように鋭い鉄棒）をホールドに、常に三点の鉄先が氷に喰い込みわれわれを支えてくれた。われわれはこのながい登攀中一センチもスリップすることはなかったが、初めの「登りの氷壁」では、スリップの恐怖と氷の硬さに悩まされて、それを克服するのに少なくとも四、五時間を費やした。

なんにも考える余裕はなかった……

ここは北壁なんだ

氷の硬い壁……
おれたちは　ただ
攀れば佳いんだ
そう……なにも考える必要はない
この氷壁に
うち克つには
思考力を抱いては不可能
己を信じ
ただただ攀れ……
『アルプス三つの壁』がなんだ
……そう攀れば佳いのだ……

単調ではあったが、われわれはある程度、機械的にツマ先を蹴り込み、両手の鋭い鉄先を自由に使えるようになった。

すでに時は十時半を回っていた。

「登りの氷壁」は、われわれにとってはアプローチではなかった。最大の氷壁登攀であったかも知れない。この「登りの氷壁」は北壁全体の四分の一か五分の一にしか過ぎないが、この氷壁を登ってしまえば、あとはある程度機械的に登れる。氷壁登りというものに馴れてしまうからなのだろう……。

午後になり「登りの氷壁」から「岩と氷の結合地帯」にはいり込む。その「岩と氷の結合地帯」へ右に向ってトラバースする地点で、この壁はじめての落石と落氷があった。われわれの頭上を越えて飛んで行くもので、恐怖感はあったが命中率は十分の一くらいだった……こぶし大の氷のかけらがバウンドして、ヘルメットにポコーンと一度だけ当った。別に痛くなかったが頭の毛が汗で濡れた……古い、この壁の登攀記録を読むと、取付点付近でパチンコのタマくらいの落石を頭に受けて即死した人もいるので、いかにこの壁の落石が危険であるかも、われわれは知っていた。落石があれば当然、その登攀のスピードは早くなるものだが、われわれの場合は逆だった。上ばかりながめて一こうにトラバースする気配はなかった。ダイレクトに登るよりも、トラバースの方がはるかに落石の命中率が多いだろうという考えと、足先が痛く、出っ歯のアイゼンの爪をけ込む作業が困難になってきたのだ……。

私は、一九四八年の冬、八ヶ岳でひどい凍傷にやられて完全に足の先がない。足の底面というか、足の長さ、文数はせいぜい十二、三センチ、五文程度しかない。それに二十四、五センチの山靴をはき、さらにその山靴の先に飛び出た出っ歯式のシュタイクアイゼンを着用しているので、この登りほどつらく感じた登攀は未だかつてなかった。当然のことながら足首がハレ上り痛く、まるで膝から下は焼けた鉄棒のようだった……。

九州男子の渡部君は、なに一つ文句を云わず、常にトップを切って私をいたわってくれた。私は彼の行為に答えなくてはならない。スピードもトップに敗けてはならなかった……。

ルートの不安ということも「岩と氷の結合地帯」で始めて経験した。「斜めのクーロアール」にはいるところが分らなかったし、われわれの頭上には一片の雪も氷もない巨大なオーバーハングが待っていた……しばしば、われわれは相談した。右か左か、岩か氷かと迷った……丁度そんな迷いの中に、小さな岩稜（実際には氷で完全にコンクリートされた小氷稜）から、氷のクーロアールに向うとき、突然渡部君が『誰れかのステップがある』といい出した。昨日、今日、この氷面を通過したものがあるのか、われわれは深い興味と、この北壁にはわれわれだけだという優越感に似た小さなヒロイズムが消えてしまった。二人とも、われ先にそのステップにかけ登ってみた。たしかに大きな階段状のステップが点々と残っているが、随分古いものだ。おそらく二十日ほど前のミッシェル・ボーシェが、その夫人のために切り込んだ大ステップだろう。この硬い氷にステップを刻んだということは大変困難な作業だ。われわれは、そんな大作業よりも、足が痛くとも両手両足を氷面にケ込み、なぐり込んだ方がスムーズに登れた。

ミッシェル・ボーシェの美しい、ほほ笑ましい行為は、その夫人だけが甘んじたのではなく、われわれも、その行為に便乗して、古いステップを利用しながら登ることができた。「岩と氷の結合地帯」はいつか終ろうとしていた……午後四時。

これより「斜めのクーロアール」にはいり込むわけだが、その入口がどうしても分らない。取付点からスタートして初めての岩場であった。残置のロック・ハーケンが二本在り、直上も可能のようだった。われわれは始めてのロック・ハーケンに小おどりしてぶら下り、ステップを刻み休息した。

直上し垂壁を登るか、右の氷のバンドを辿り垂壁の右肩に出るか、意見が対立した。私は氷のバンドを、渡部君は垂壁を登ることを主張した。お互に推すルートをたしかめようと、私がまず垂壁に直上してみた……氷のルートからはずれて、岩場に出たよろこびはあったが、どうも出ッ歯のアイゼンの爪がじゃまだし、どうみても、このルートはグレイド五級か六級の最悪のものだった。たしかに古びたハーケンが、頭上五メートルくらいのところに在ったが、少し無理のようだ。一度、垂壁の基部まで下りた。今度は渡部君が、私の推薦した氷のバンドを、右に向ってトラバースしてみた。『やはり悪い……』と彼の返事だったが、なんとか二人でがんばって明日もう一度やろうと話がまとまった……五時。

垂壁の左横のルンゼにLの字型に大きなステップを刻み、われわれの一夜の豪華なベッドが出来上った……かろうじて二人坐れる程度だったけど、天候も佳いし、食糧も燃料も充分過ぎるほどあったので、結構楽しいビバークだった。氷を融かして飲んだり喰ったり、いそがしく、暗くなるまで随分時間が余った。

ここは北壁のド真中だという軽い興奮からと、足先と足首の痛みで、ほとんど一晩中起きていた。起きていたというよりも、眠れなかったのだ。おまけに渡部君のイビキと寝言は、今までで最高のものだった……。

八月五日　晴、夜一時吹雪。

さすがに寒かった。氷の椅子に一晩中坐っていたのと、快晴だったので、おそらく零下五度くらいはあるだろうと思って、ツェルト・ザックの外に在る寒暖計を見ると、落石か落氷かによって針はこわされていた。

のんびりと朝食を摂っていると、渡部君が『あっ誰れか登ってくる』とさけんだ。五時少し廻っていた頃だろう……たしかに「登りの氷壁」を相当のスピードでスムーズに登って来る。でも、まだまだ豆粒より小さく、男か女か東洋人か西欧人かも、とうてい見極めはつかなかった。その早い登りっぷりを見ているのは、首が痛くなるほど下の方だが、あまりモサモサしているとわれわれは追いつかれてしまう……。

一夜の荷を整理しながら二人同時に立ち上った……食糧を今、しまったばかりの小さな袋が、『おっ』という間に氷壁をころげ落ちて行った。『チキショウ……』と口ぎたなく、その袋をノンシッタ。その返礼のように、氷の上に置いた熱いアルミの水筒入りの紅茶が、コロンコロンと小気味の佳い音をたてて落下して行った。これは全くの不注意で、熱い水筒は当然氷を融して落ちて行くはずだ……。

残りの食糧はほんのわずかだけど、どうせ二人立ったまま満足に食事など出来るはずがない。『荷が軽くなったから、それだけ早く登れるぞ』とへらず口をたたいて出発した。五時三〇分だった。

昨夕の私の主張した右の氷のバンドをトラバースしたら、意外と雪の稜というか氷になじんでいない硬雪のカンテ状の稜に出た。おそらく北壁の下半分の中では、一番やさしいところだった。約一〇〇メートル、ザイルはのびた、六時三〇分。

いよいよ「斜めのクーロアール」にはいり込む。このクーロアールは右上に約四十五度から六十度内外の傾斜で、距離三〇〇メートルほど続く。入口がチムニー状でもろく、悪場というよりもいやらしい岩と硬雪の、なにか冬の滝谷でも登っているようだった……。この入口付近でスピードはぐっとおちて、苦闘した。氷の硬さは正に第六級で、スラブ状の岩を完全にコンクリートしている。

「斜めのクーロアール」へはいる入口のところで、トップを登る渡部君が石を落し、ザイルが五メートルを残し半分ほど切れてしまった。小アクシデントもあったが、人間がスリップするほど、われわれは気を許してはいなかったし、昨日からくらべれば、遥るかに氷登りは上達した。むしろ岩場より氷の斜面を選んで、グングン登った。下のパーティのことなどあまり気

にしなかった。ときたま股の間から下を眺めると、黒いアリのように登ってくるのが分った。

「斜めのクーロアール」の所要時間は六時間……このクーロアールはソルベイ小屋とほぼ同高度（四三〇〇メートル）のところで、大きく左にまがり、そのままヘルンリ尾根の肩に達する。われわれは、その左折地点で雪の付着している岩稜に向って直上し、北壁唯一の二人腰かけられる平坦な岩の上に出た。古いがっちりしたハーケンが在った。

雪のある岩稜はすぐ終り、みごとなスラブ状のフェイスになる。右上に氷の大滝というか、一面のツララの大氷瀑があるが、その大氷瀑を右に捲くか、左から上部に出るか、随分迷った。残置ハーケンが右にも、左上にもあったので……われわれは、ほとんど直上することにして、大氷瀑の真横に出た。意外に上部の頂上岩壁付近はオーバーハングの連続で、大氷壁の上部を右に水平にトラバースするしか方法はなかった。私は左を肩に向って今一度「斜めのクーロアール」に下降することを主張したが、渡部君は、このもっともむずかしそうな大トラバースを敢行しようとした。今度は私が彼の意見に同調した。午後五時。

ダン・ブランシュの上空にあった雪雲は、一瞬にしてマッターホルンを包み、小雪から吹雪になった。

ほとんどの氷面に降った雪はサラサラと落ちてしまうが、このトラバース地点には凹凸がはげしく、たちまち吹溜りが出来た。と思うと、例の硬い地球の心までとどくような氷が露出して、大変困難な状態になった。もっともこの大トラバースは、われわれ二人の計算だと、三時間近くの労力を費やすだろうと考えてスタートした。五時三〇分。しかし実際には一時間で突破することができた。なにか死の匂いがするような恐怖と悪天候……そんなとき、人間はすばらしい力が発揮できるものだ。おそらく、この壁の初登攀者が行った、例の大トラバース・ルートと同じだったろう。

後続パーティの二人は小雪の舞うなかで、われわれの地点より約二〇〇メートル下で、まだ大声でなにかいいながら登行を続けていた。われわれは背後の岩を利用し氷面をカットして、昨夜よりも快適なビバーク地をつくった。七時三〇分。雪は止み、再び星夜となった。

八月六日　快晴

ほとんど二日間寝ていなかったので、死んだように佳く眠った……午前四時。渡部君に起こされた。睡眠中、燃料を落してしまったのでローソクで氷を融し水をつくる。ロクに食べるものもないので、すぐ出発しようと思ったが、私のシュタイクアイゼンが片方ないのに気がついた。昨夜あまり足が寒いので、アイゼンを靴からはずしたのがいけなかった……。

時間を費やしても、氷と雪にステップを刻みながら行けば、

なんとかなるだろう……四時四〇分登攀は開始された。
昨日の硬い氷壁や、大トラバースから思えば実に楽な登行だった。片足だけのアイゼンも別に気にすることはなかった。右に左にルートをとり、ツムット・グラートめがけて登り、頂上直下で再び北壁の中心に廻ったり、実に楽しい登攀だった。岩も氷も雪も、グレイド的にはせいぜい三級から四級のもので、別に問題になる個所はなかった。

Das Gipfelkreuz auf dem Matterhorn……
スタートしてから
約五〇時間あまり……
われわれは常に頭の中に画がいていた
一〇時四五分
現実に山頂の鉄の十字架は
私の足下にあった
蒼勁い大気だけが頭上に在った
とうとう　ヤッタンダ
日本人のいや東洋人の
誰れもがなしとげ得なかった
アルプス三つの北壁を
われらこそ攀じ登ったのだ……

**≪登攀時間について≫**

第一日目＝約十一時間三十分、第二日目＝約十三時間弱、第三日目＝約六時間強、で合計三十時間四十分に近い。大変遅いというか、スロータイムのようだが、氷や雪の状態と、体のコンディションから考えて決してスローとは思わない。たしかに登攀中の休息が多かったので、もしもう一度登るとしたら、このタイムの半分か三分の一のタイムで登れるだろう。
登攀史をみても、夏で第二登が二回のビバーク、それ以後は一九六二年冬季登攀までに、そのほとんどの登攀者が一回のビバークか、ビバークなしでスピーディに登っている。しかも一九五九年にはオーストリヤの一八歳の青年（ディター・マルチャルト）が、単独で五時間余りの超スピード登攀を行っている。トニー・ヒーベラーの『暗い壁・マッターホルン』によると、一九六二年七月までに冬季登攀を含めて、二十七登が記録されているが、その後の三年間に随分登られているようだ。われわれの登攀は、おそらく第五十登目ぐらいになるだろう。

**≪補稿≫**

登攀用具、その他食糧などは、われわれが日本の冬山の岩壁で使用しているものをそのまま使った。別に悪いものはなに一つとしてなかったが、日本に無い特殊な用具、たとえばアイス・ステッチェルとか、ながいザイル、ねじ込みのアイスハーケンなどは実に有効であった。特にマッターホルンの北壁には、

最低一〇〇メートルのザイル（九ミリで良い）が必要だろう。たしかにマッターホルンの北壁は、アルプス三大北壁の一つに数えられているが、登ってしまったから云うのではないが、アイガーやグランド・ジョラスからみれば、やさしいだろう。壁の高距も約一一〇〇メートル（実際には岩場は、せいぜい三～四〇〇メートル、それも四級はない。だが氷登りという特殊なテクニックと高度が影響する。それと、一度取付くと下降（悪天候などで引き返すとき）するのは、登るよりも困難であることが特筆すべきことだろう。

この登攀の立役者で、わが最良のパートナー渡部恒明君は、この登攀後十一日目にアイガー北壁で墜死した。あんなに優秀でしかも慎重な男が死んだ……山での死はやはりわれわれに思いもよらぬとき、突然やってくるものかも知れない。不可抗力の遭難などないと主張する私も、彼の死だけは、マッターホルンの栄光のためにも、無言で見瞠めたい。（一九六六年六月）


## 山岳バックナンバー

第四六・四七年（一九五二年十月刊）

| | |
|---|---|
| ネパール紀行 | 西堀栄三郎 |
| 冬の十勝岳・大雪山縦走 | 北大山岳部 |
| ギド・レイのこと | 日高信六郎 |
| 明神岳五峯東壁と前橋高北尾根四峯正面壁の登攀 | 岩稜会石岡繁雄 |
| 春の白馬岳以北の縦走 | 岸田権二 |
| 赤石南半の覚え書 | 沼井鉄太郎 |
| 山の周辺・欧米ところどころ | 松方三郎 |
| 白馬岳志雑攷（下） | 中島正文 |
| 追悼 | |
| ヒマラヤン・ノーツ | |

A5判二一五頁・写真二一葉・地図一四葉・定価四〇〇円。

★バックナンバーは右号のみ僅かに残っております。会員には右記**定価の二割引**三二〇円にて、お頒ち致しますので、御希望の方は、本会事務室まで御申出下さい。

★郵送御希望の方は、別に郵税七〇円を御負担下さるよう願います。

# ドリュの北壁（一九六五年）

吉尾弘

八月八日、午後の太陽がモンタンベールの谷一ぱいにそそいでいた。私たちは昨日来、ドリュの西壁と北壁を登るべく、岩壁真下のロニヨンのビバーク地で待機していた。午前中は谷全体が濃いガスでおおわれて、もちろんドリュの姿もみえず、雑誌の切抜きのルート図しか持参していない私たちの取付ける状態ではなかった。

昨夜から、すこし下の位置でビバークしていた外人の二人組も、朝方下山していった。

岩穴からでてみると、昨日までいた氷河の対岸の尾根の斜面に、登山電車の駅の建物と、一軒だけしかないホテルの屋根が、とても小さくなって眼の中に飛込んでくる。うしろには西壁の赤茶けた岩壁が、一〇〇〇メートルの高差をもって聳立している。

ここにいるのは西壁を登る星川、加藤のパーティと、北壁を登る私たちの四人だけなのだ。なんともいえない期待のようなものが、心の中までしみ込んでくる。また若干の不安感もなくはなかった。とくに私は、六月にヴェッターホルンの北壁を登ったときに身体をこわし、ジュネーブの州立病院に、当時毎日新聞のジュネーブ特派員だった竹岡敏夫氏の御世話で入院して以来、今度が行動らしい行動としては初めてなのだ。湯浅（道男）がいるので技術的な点での不安はなかったが、体力の点からは、その大きさに圧倒されていた。

北壁の大きさは約八〇〇メートルあるといわれ、寝所と呼ばれる大洞穴を境にして上部と下部に分けられ、寝所から上の三〇〇メートルは、五級六級の難かしいピッチがいくつかでてくる。一九三五年七月、当時フランス一の名クライマーといわれたピエール・アランとレイモン・レイナンジェによって初登攀されている。

だが、今ではすでに古典的なルートに数えられているところだ。登り切れる自信は充分にあった。

「どうだろう、ここでまたビバークするのも能がないと思うのだ。今夜のビバークは北壁の途中でやらないか、先に進んでおいた方が最後になって楽だぜ……」

「いいね、今夜は北壁の途中でビバークしよう。西壁パーティは……」

「俺たちは水がないと困るから、明日未明に行動を起す。」

私たちは雪渓にながい影をおとしながら、北壁に向って氷河をたどった。やがて太陽は、西壁と北壁とをわける岩稜によってさえぎられる。全身がひえ込んできた。北壁に入ったのだ。ほどなく北壁の取付点である氷の張りつめた大岩溝につき当った。私たちは二ピッチほど登ったところで悪質な氷に遭遇し、ついにアイゼンを付けての岩登りを強要された。岩壁の状態について前途に不安が生まれてくる。さらに数ピッチ登って岩溝を抜けると、斜度が落ちて陽の当る広いガラ場にでた。急に気分が楽しくなる。岩溝で遭遇した氷はあすこだけのものだったのか、単なる杞憂にしかすぎなかったのだろうか。

このガラ場のつき当りは垂直壁に遮断され、数分おきに寝所から落ちてくる雪塊の通路となっている。私たちはそこを横断して右手の岩稜にルートを取り、一〇〇メートルほど高度をかせいでビバーク地を設営した。

九日、ルートは岩稜ぞいの入組んだクラックとなって寝所まで数百メートル、なお右上に続いている。そして北側のクラックの底には必ず氷がつまり、ルートにするには足場切りの工作に、かなりの時間を消費しそうだ。

湯浅は氷のついていない右手のクラックにルートを取った。ヴェッターホルンのときには、まだつかれが抜切っていなかったせいか、それほど目立った技量を発揮しなかった。でも、あれから一ヵ月以上たっていた。ベスト・コンディションに近い、目のさめるような動作をしていた。湯浅はゲレンデで使うようなテクニックを駆使し、ようやくクラックの入口をはばむ岩塊の上に立った。そのとき、いきなり岩塊がくずれ落ちた。バランスがくずれた。無意識に岩壁にそってザイルを張ってバランスの匡正をする。墜落か……と思われた一瞬、彼の身体は左手でつかんだ小さな岩角を支点として、ゆるやかに振られるだけで再び岩壁に止った。

下をみると、昨夜私たちがビバークをした岩タナに激突した岩塊は、岩をけずっていくつかにわれ、大音響を残して西壁の方に落ちていった。「西壁パーティにぶつかるなんてことがあるだろうか……」降りてきた湯浅の目が話しかけてくる。「大丈夫だ、位置と時間からいって、この下にはいない。」

私たちは、再び氷のつまったクラックである正常なルートを登路に選んだ。場所によっては、日本で冬の岩場を登っているような錯覚にとらわれるような、アイス・クライミングがあった。それでも途中にある難所の一つ、ランベール・クラックも無事通過して、午後二時、寝所のわきの雪壁部分にたどりついた。このとき、濃いガスが岩壁にたちこめはじめた。午後五時、ルートの選定にかなりの時間を消費しながら、北壁のグランド・テラス、西壁との結合地点に到着した。

今夜のビバーク予定地だ。西壁側をのぞき込むと、赤茶けた岩壁が一枚岩となって切れ落ち、ガスの切れ間からアリのよう

に蠢めく、いく組かの登攀者の姿がうかがえる。さらにテラスの下の位置からは、西壁の中央部めがけて、おそらくギド・マニョヌらのフランス人たちが、初めて西壁を登ったときに固定したものだろうか、古いザイルが張られているのをみつけた。それは雨にたたかれて色あせ、今にも切れそうに思われた。

このとき私は、初めて岩登りをしたころに味わった感情の起伏というか、ガスの中でさびたハーケンをみつけたときのようなうれしさというか、なつかしさというか、それとむなしさといったようなものが、胸一ぱいに広がってくるのを感じた。

その夜私たちは、テラスをおおった雪をどかしてビバークをした。今夜もガスの去来と夕やけが異常だった。

十日、北壁最難場を通過しなければならない今日は、朝からガスの中での行動ではじまった。テラスからいきなり困難な凹角の登攀が続く。トップの湯浅がそこを越えると、つづいて私が、打込まれたハーケンを一本一本丹念に抜いて進んでゆく。登るとき、二〇本ほど各種のハーケンをまぜて持参してきたのだが、いつ、どこで消耗したのか、今は六本ほどしか残っていない。もしハーケンがなくなったら、私たちは最悪の状態に追込まれるのだ。

次のピッチも難かしかった。つづいていよいよ六級（最難関）のピッチに遭遇した。

私たちは、ここで意外なことをさとった。五級六級のピッチは斜度も強く、手がかりや足場になる岩角も確かにこまかい。しかし私たちは、これらのところでは、それほどの苦しさというか、評価にあたいするほどの困難を感じることはなかった。むしろ今までのところ、等級をつけるにあたいしないようなチムニーというか、凹角の場所でかなりの苦しみをなめさせられてきた。

ここでもそうだった。午後になって私たちは順調に最難場を足下にしていた。そして最後にでてきたやさしいはずのチムニーでは、氷が張りつめていたせいもあったが、突破したときには二人とも肩でいきをしていた。チムニーの上は再び氷が多くなった。そして傾斜も落ちてきた。

頂稜まじかなのだ。稜線から吹きおろす風で、ガスの切間が現われてきた。みるとグランド・ドリュの頂上がすぐ左手にあった。その赤茶けた岩塊の上には、陽光を反射したマリヤの像が、金色に光っているようにみえた。

このあと私たちは頂上に向わず、水晶の断崖ぞいのテラスから南壁の側にまわり込んだ。すでに食糧も燃料も残り少なかった。一刻も早く下降点の確認をしておく必要を感じていた。

午後四時、再びガスが視界をうばっていった。「もしかすると明日もまたビバークでは……」こんなことは考えるだけでもまっぴらだった。私たちはこのあと、状態さえよければグランド・ジョラスの北壁を登りたいのだ。一刻も早く天幕に帰っ

て、体調をととのえ、装備と食糧を買い揃えなければならない。南壁のトラバースはガスが立ちこめ、ザイルの端につながる仲間の姿もみえないところで行なわれた。そして感覚だけをたよりにして三回の懸垂下降の末、岩溝の底に達して第三回目のビバークをした。

翌日、下の氷河まで一〇回近い懸垂をふくめた七時間におよぶ下降の末、ついに下の氷河に達した。

この数日あと、私たちは高田、渡部両氏パーティが、アイガーの頂上にせまったことを知った。無事完登してくれるものと期待していたが、万一の場合のことを考えて次の目標にあがっていたグランド・ジョラス北壁の登攀を一時中止し、いつでも救援できる態勢をととのえたあと、合同隊の隊長である私が、とりあえずアイガーの下に急行した。アイガーではアクシデントが発生し、高田氏が一人アルピグレンの私たち本隊のベース・キャンプに降りてきたのは、私のついた翌朝のことだった。結果は渡部氏の死亡ということで終り、今年のアルプスは終幕したのだったが、それはなにものにもかえることのできない、大きな代償をもった終幕だった。

（**編者註**）フランス山岳会編『ヴァロ案内書』の記述によって、ドリュ針峰の説明をしておこう（近藤等訳、ボナッティの『わが山々へ』一〇五～六頁より）。「巨大な岩のピラミッドであるドリュ針峰は、モン・ブラン山群中の最も純粋で驚嘆すべきもののひとつである。この山は、ふたつの隣接した頂を有している。グラン・ドリュ（三七五四メートル）と、ドリュの窓（三六九七メートル）によって切り離されているプチ・ドリュ（三七三三メートル）だが、後者は、もしも歴史が他の違った処置をとったのならば、グラン・ドリュの単なる肩とみなされたことだろう。

一八七九年八月二九日、J・E・シャルレ・ストラトン、P・パイヨ、F・フォリゲは、南面からプチ・ドリュの頂上にはじめて達して、登山史上の一時期を画した。このコースは、現在、ドリュの一般ルートであると同時に、アルプスでの最もクラシックな登攀のひとつになっている。

一九三五年七月三一日から八月一日にかけて、P・アランとR・レイナンジェは、八五〇メートルの標高差を有する北壁を登攀し、現代登山界の最も重要であり、覇を争われた課題のひとつを解決し、一九三二年、ロックとグレロが、この岩壁を懸垂下降してからこの壁に与えた形容語〈不可能〉を消してしまった。この岩壁の征服は、登山史上の重要な一時期を画すものであった。プトレイのノアール針峰の南稜、グランド・ジョラス北壁の中央側稜の征服につづいたこの壮挙は、一九三七年以来、この山群で〈最も困難〉な登攀と見なされていたものであった。

一九五二年七月一日から五日にかけ、次に一七日から一九日にかけ、フランス第一級のクライマー、G・マニョヌ、L・ベラルディニ、A・ダゴリー、M・レネの四名は、中間に一二日間の休止期間を入れた二回にわけて、すくなくとも一一〇〇メートルの高差を有する恐るべき西壁を完登した。「すばらしいスケールの登攀、極度に困難、まれにみるほど急峻であり、体力を要す、……この偉業は、登山史上、ひとつの時期を画するものである。」

# ドリュの西壁（一九六五年）

星川政範

夕日に染った赤褐色の岩壁、針のように空中に突き刺っているドリュの雄峰、モンタンベールの草原に寝ころんで、刻々と移り変る景観をあきることなく眺めていた。

八月九日

薄暗いうちにビバーク地を離れ、ベルグシュルンドを越えて西壁ルンゼの中に入った。陰惨で、不気味なこのクーロアールは、今ねむっているのであろうか！　ことりとも音がしない。一刻も早く登ってしまわなければ。浮石の多い右側の岩壁を登って行くと、水晶の層が一面にあったが、今は取り尽くされて、白い屑がたくさんころがっているだけであった。

氷になっている所を、加藤（滝男）はスピーディに乗り越してしまったが、私は氷と岩の間に両手を差し込み左側に移ろうとしたが、何んとしても足場に達することができず、また登りなおし、氷を打ち砕きかろうじて左側に廻りこんで取付点に着いた。

そこは幅広い、外傾した、ザラザラのバンド状になっているボナッティ稜との分岐点である。長めのハーケンが打たれており、どこかのパーティが南西岩稜に取り付くのを横目で見ながら、私達は、はじめてザイルをとり出した。トップになった加藤は、一枚岩にそって走る割れ目を利用して直上して行くと、まもなくピタリと止ってしまった。「はじめからそんなにむずかしいのか!!」と声をかけると、ザックをおいて行くから頼むと言い残し、右側に廻り込んで見えなくなってしまった。

ここから西壁は極端に牙をむき出し、非常に困難になって来た。いったいここはどうなっているのだろう。加藤はどのようにして、ここを登っていったのであろうか！　摩擦を利用するには傾斜がきつすぎるし、だいいち摑む物がない。四フラン七〇もするハーケンを、もったいないと思って引き抜いてしまったが、どうしても登れず、引き抜いたハーケンをまた叩き込んで直上しようとしたが、だめであった。私はついに兜を脱ぎ、ゴボーでこの場所を越えた。

私が上にいくと同時に、彼は「悪い悪い、一ピッチ初登攀しちゃった」と笑っている。そこからバンドを伝わり、落石によって粉砕されたガラガラしている岩を、卵の上を歩いているような思いで、岩壁の中央に出る。バンドはこの位置で終り、垂直になっている岩壁を登ってから、浅いクラックに入る。くる

ぶしまで靴が入り、かんぬきをかけるようにして高度を稼ぐ。割れ目は狭くなり、両手を差し込んで挙しにすると、素晴しいホールドになり、オーバーハングを右にまわり、スピードをあげた。この登攀で加藤も私も両手の皮膚は破れ、血はにじみ出し、傷だらけになってしまった。

クラックの中央では右足がはさまってしまい、なんとしても取ることができず、ザイルを固定してもらい、ぶらさがるようにして靴ひもをほどき、やっとの思いで靴を取りはずすことができた。

クラックは狭くなり、靴の先だけっっこんで登っていると、幅広いクサビが打ってあった。初登の時からの物であろうか。角は痛んでいるが、ハンマーで叩いてもびくともしなかった。

このピッチでも、荷物の吊上げをしたが、落石で私のザックはこわれてしまった。オーバーハングに突き当り、右に廻り込むと、クラックは広くなり、身体を半分押し込んでオーバーハングを乗り越し、一人が立てるところに出る。クラックの奥には氷がビッシリと張りつき、濡れていて非常に難かしい。真夏だと言うのに、丸太ン棒のような氷がさがっているのには驚いてしまった。

加藤は何度も踏躇している。そしてハーケンにザックをぶらさげ、空身になって、オーバーハングしているクラックを辛うじて抜け、二人がやっと立てる足場に達したのである。

ここは自由登攀ではアルプスにおける最悪場の一つ、六級のルートであったのだ。初登の時この狭い場所で、三人がビバークしたらしいが、いったい彼らはどのようにして寝たのであろうか。想像もつかない。二人が立っていても動きがとれないのに。しかし私達は午前中に着いてしまった。この上は垂直になっているチムニーを、腕を突張り、足を岩に吸いつかせて出口に達し、いきなり虚空に飛び出る。私は暗いチムニーから目もくらむような空間に、いきなり出たので戸迷ってしまった。股の下から今朝登ってきたクーロアールまで、一直線に落ち込んでいるのだ。あわててホールドにしがみつき、素早く快適なビレー点である場所に登ってしまった。しっかりした足場に立っていても、不安定な気持になってしまう。

すばらしいのではなく、物凄い所なのだ。どこを見渡しても、一枚岩がそそり立ち、この岩壁には一本の割れ目も見ることはできなかった。広大なスラブ、巨大な岩壁、寒む気がするような空間、デモーニッシュな光景。この場面を目に焼き付けるように凝視していたのであった。

オーバーハングを乗り越え、浅いジェードルを三〇メートル登り、小さな棚に出る。ここで濃いガスに包まれルートを間違え、貴重な労力と時間を無駄にしてしまい、ビバークになった。

加藤は、二秒間に一しずく岩壁を伝わって落ちてくる水を辛

抱強く待って、すするようにして飲んだのである。だが、この水も夜中に凍りついてしまい、楽しいリズムは失われ、ただ静寂だけが残った。

八月十日

厚く張りついた氷を打ち砕きながら、右側に廻り込んでいった。「まだ身体が堅いから、慎重に行けよ」と声をかける。四時間ほど登ってから大きいテラスに這い上がり、雪を溶かし腹の中が水で満腹になるまで飲みつづけた。

濡れているクラックを登って、雪面に出、楔状になっている岩の真下に着く。加藤は岩壁の真下からアブミを使い、四メートルも張り出しているオーバーハングを越えようとするが、途中ザイルが動かなくなり、わめいている。「ゆるめてくれ、早く。」彼は必死になって引っぱる。狂おしいような動作、荒い息使い。私は彼の下にかけよりカラビナをはずし、自由にしてやりたかった。加藤は最後の力をふりしぼって、死にものぐるいになり、ついに抜けたが、雪面にうつぶせになり、しばらく動かない。今まであんなに元気であった彼は、この登攀で一遍に疲れてしまったのであろうか。

今まで始終笑顔が消えることはなかったが、私もこのオーバーハングに振り廻され、今はただ悲壮感が漂い、悶え、苦しみ、あえいでいる。岩壁を呪い、自分の非力をののしり、私は吠えた。咽喉は渇き、口の中は焼けるような痛みを感じた。文字通り私もぶっおれてしまい、呼吸を整えるまで、しばらく起き上がることはできなかった。

加藤も私も同時に岩壁を見た。これが九〇メートル・ジェードルか、ほとんど垂直に立っている。どんずまりは巨大なオーバーハングにふさがれており、はたしてここにルートがあるのだろうか！　二人顔を見合わせ、微笑を交していた。岩壁を見て、闘志が燃え、雪面を登って行く。まだ早いが明日にそなえジェードルの真下でビバークする。二人はツェルトから顔だけ出し、巨大なジェードルを暗くなるまで見つづけていた。

八月十一日

岩は冷たく手はかじかんでいたが、加藤は相変らずすばらしいピッチで九〇メートル・ジェードルに挑んだ。アブミの掛替えであるが、クサビが腐っていて苦戦している。彼は手の皮がむけてしまったのであろうか。血が岩膚にベットリとこびりついている。ジェードルの上部から岩の割れ目に両手を入れ、摩擦を利用しフリークライミングで右側に斜めに登り、捨綱がたくさん掛っているところから、右側に二五メートル下降しながら廻り込み、小さな棚に出る。

北壁への脱出口にボルトが打ってあった。スベリ台のような岩を一〇メートル下降して、右のカンテを廻り込み、氷のつまったクラックを登る。時々北壁から落ちてくる氷の破片が、ヘルメットにするどい音をたててあたった。「あがって来ていい

よ」と彼の明かるい声が聞こえてくる。私は全身くたくたになって西壁を後にした。

ここは北壁の寝所の上で、周囲は雪と氷の世界であった。北壁へ出てから七ピッチで、岩膚をくりぬいたような、天井のある幅広いところに出た。足元には水晶の屑がゴロゴロころがっている。這うようにして左に廻り込むと、あったぞ、マリヤの像が……。夕日を浴び、銀色に光を放っているではないか！頂上に達したのは、日没寸前一九時一五分であった。

しかし私には感激はわきでてこなかった。あれほど夢見ていたドリュの西壁に、足跡を残したというのに……。

頂上でビバーク、私は夜中にツェルトの外に出た。月光に照らされて昼間のように明るい。ウォーカー・バットレスはと見ると、目前に月の光に反射され、岩壁の部分と雪、氷のところが異様なコントラストをしめし、恐ろしいくらいに美しく、また神秘的な感じで胸にせまってきた。

十二日、早朝から下降を始め、六時間にわたる懸垂に次ぐ懸垂で、シャルプア・ヒュッテに着いた。疲れた身体にむち打ち、メールドグラス氷河を通り、モンタンベールの天幕に午後四時にたどりついた。

（**編者註**）なおドリュ西壁の初登攀については、前掲ドリュ北壁の末尾に付した編者註を参照されたい。


## 1967年版『山日記』日本山岳会編

**おもな内容**　＊見るところ＝カラー10ページ＝アイガー峰／風見武秀撮影　冬の原野と日高山脈／坂本直行画　山の植物／山下一夫画　＊書くところ＝160ページ＝月別予定表欄　日記欄　白紙ページ　方眼紙用紙　天気図用紙　住所録　＊読むところ＝208ページ＝山の生態学／今西錦司　登山の基礎／山崎安治　山の装備／松田雄一　山の医学／住吉仙也　登山と気象／宮内駿一　遭難対策／大塚博美　ヒマラヤの概説　山の歌　山と民俗／松方三郎　山小屋の一覧　登山行程表（越後三山　八幡平・駒ガ岳・岩手山　朝日連峰　飯豊山塊　上越国境　奥日光・尾瀬　八ガ岳・蓼科山　北アルプス　中央アルプス　南アルプス　奥秩父　丹沢　鈴鹿山脈　比良　大峰・台高山脈　大山・蒜山　石鎚山　九重・祖母・傾山　白山）　日本の山と峠一覧表　夏山臨時電報電話取扱所一覧　日本のおもな登山年表／山崎安治　富山県登山届出条例　地図図幅一覧　日本山岳会について　日本山岳会支部一覧　＊付図＝ラジオ天気予報・気象通報放送時間　七曜表　日出・日入時刻表　フィート・メートル換算表　全国主要ラジオ放送局一覧

A6判ポケット型　380ページ　**定価390円**
東京都千代田区神田駿河台2の1　茗渓堂発行
電話・東京291局9442／振替・東京24723番

# アイガー北壁登攀報告会の記録

日本山岳会東海支部
アイガー登攀報告書編集委員
田中　元

これは東海支部が開催した「高田光政氏のアイガー北壁登攀報告検討会」（一九六五年九月二三日、場所名古屋観光会館）の速記録の一部分をまとめたものである。報告会は、

第一部（一三・〇〇～一四・四五）
　a、高田光政氏の報告。
　b、報告に対する質問。
第二部（一五・〇〇～一八・〇〇）
　a、登攀に関する問題。
　b、渡部恒明氏の遭難に関する問題。

と云った内容のものだった。この登攀で亡くなられた渡部恒明氏に対する黙祷を捧げてから、約五時間に亘り報告と質疑応答が行われた。その間の速記量は約二〇〇枚の内容のものだった。紙数の関係上全般に亘り要約することはむずかしく、又説明不足となる恐れがあるので、主に高田光政氏の報告の部分について要約することにした。

## 高田光政氏の報告

アイガー北壁を登ってみたいと考えたのは、八年程前にアンデレル・ヘックマイヤーの『アルプスの三つの壁』（安川茂雄訳）を読んだ時だった。その後ヘルマン・ブールの『八千米の上と下』（横川文雄訳）、ガストン・レビュファの『星と嵐』（近藤等訳）、ルイ・ラシュナルの『若き日の山行』（近藤等訳）、ハインリッヒ・ハラーの『白い蜘蛛』（横川文雄訳）等を読み、ますますアイガーに登りたいと思うようになった。

具体的にアイガー登攀の計画をたてたのは、四年前の一九六〇年だった。当時所属していた名古屋山岳会の仲間四人で計画したのだが、外貨の事情でその時は計画を断念した。そして今度観光外貨の自由化をきっかけに、ふたたび計画、決断したのは一九六五年の冬頃だった。単独登攀でやろうというきっかけは、昨年（一九六四年）の秋の屏風岩の東壁の単独登攀、今年一月と五月の二回に亘る屏風岩中央壁の単独登攀が意外に好調だったので、アイガー北壁の単独登攀を決意した。

渡欧の出発準備は一人なので、たいした手間も時間もかからず、約一ヵ月で終了した。装備は国内で出来る限り集めたが、アイゼン、アイス・バイル、ハーケン等は、現地の製品でなけ

れば駄目だという判断で、日本からは持参しなかった。旅程は横浜―ナホトカ―ハバロフスク―モスクワ―ウィーンというソビエト経由の一週間のコースで現地に着いた。

現地では、まず不足の装備を購入し、六月二三日に下降路の偵察とアイゼン等のテストを兼ね、アイガー西壁を頂上付近迄登降、登り六時間、下り一時間半の行程だった。六月三〇日は北壁の偵察と荷上げのために、困難な割れ目（ディフィカルト・クラック）の下にある《湿った岩穴》迄登り、そこに荷物をデポした。登り五時間、下り二時間の行程。必要な装備の荷上げが済み、登攀のチャンスを待った。

七月に入ってからは天候に恵まれず、約一〇日間程は連日雨だった。その間アイガー北壁は雪で白くなる一方だった。そのため七月上旬に予定していた登攀計画は、完全に崩れてしまった。それからずっと現地の天気図を眺め、天候の回復待ちの生活が始まった。ヨーロッパ大陸の天候の特徴については、日本を出発する前に名古屋気象協会の吉川氏に若干の講義を受けていたので、多少の予備知識は持っていたのだが、ヨーロッパ大陸の規模が大きいため、高気圧等の移動速度がピンとこず、最初のうちは予報が適確に出来なかったが、後半はかなり慣れた。

七月上旬四日程ミュンヘン迄行き、そこで前年アイガーに登ったクライマーに面会し、色々疑問の点について説明してもらった。その帰りプモリの遠征隊長ゲルハルト・レンサーの家に偶然寄ることが出来、そこで彼から今年の悪天の原因と例年の気圧配置等について聞くことが出来た。

登攀のチャンスを待つ間、トレーニングとしてミッテルレギー山稜か他の山へ登ることも考えたのだが、他のルートや山を登っている間に、北壁登攀のチャンスを失ってはと考え、結局何処にも登りに行かず、下部岩壁を登ったり、ヴェッターホルンの麓のオーバーグレッチャーで氷壁登攀の練習をしたりしながら、北壁登攀のチャンスを待っていた。

八月一〇日、天気が悪いのでグリンデルワルトの町をブラブラしている時、渡部・服部の両氏にバッタリ会った。彼等はマッターホルンの北壁を登り、今度はアイガーの北壁を登る予定で、丁度グリンデルワルトに来たところだった。お互に旧知の間柄なので、その夜は一つのテントに泊ることになった。

その晩、渡部君から私と一緒に組んで北壁を登りたいという話が出た。彼はアイガー北壁はぜひ登りたいのだが、パートナーの服部氏がマッターホルン北壁の登攀で足を痛めてしまい、登る気はあっても肉体的に登れる状態ではなかった。私の方は単独の計画だったが、過去百年に四回の悪天候とやらで、八月一〇日になっても相変らず天候は落着かず、その頃は今年は駄目かもしれない、といった諦らめの気持ちが強かった。九月頃迄待って若し駄目ならば、一年間ドイツがスウェーデンあたり

で働きながら来年迄待つ計画を本気で考え、実際働く先も世話してもらうことになっていた。しかし、彼の実績と技術は信頼していたので、彼と一緒に組んで二人で登れば、多少壁の状態が悪くても登れると判断し、一緒に登ることにした。

一九六五年八月一二日（木）快晴

（八・〇〇）アルピグレン・ホテル出発―（一〇・〇〇）アイガー北壁取付―（一二・〇〇～一三・〇〇）湿った岩穴（荷物の整理）―（一五・〇〇～一五・三〇）ヒンターシュトイサー・トラヴァース・ルート―（一六・〇〇）ツバメの巣（ビヴァーク）

出発の朝、天気図の判断では三日間は良いと考えた。結果は二日間しかもたなかったが。それに今迄の記録を読んでも、又経験者の話を聞いても、天気が良かったという年に登った人でも、何らかの嵐に会っているという例が多い。結局アイガー北壁登攀には、一度位の嵐は突破する自信と覚悟が必要なのだと考えた。

当日の朝は夏としては非常に気温が低く、セーターを二枚位重ね着しないと寒くていられない程だった。そのため前回はキック・ステップで登れた下部雪渓も、アイゼンが必要だった。岩の部分もベルグラが張り、アイゼンでの登りとなった。お互に何度か登降している所なので、別にアンザイレンせずに自由に登った。一二時に困難な割れ目の下にある《湿った岩穴》に着き、六月三〇日にデポした荷物を約一時間かかり整理した。《湿った岩穴》からはアンザイレンをし、スタカットで登り始める。相変らずアイゼンは付けたままの登攀だ。困難な割れ目へは薄氷が張りつめていたが、固定ザイルがあったので、たいした困難もなく通過した。困難な割れ目の上から約四ピッチ登りヒンターシュトイサー・トラヴァース・ルートの始点に着いた。丁度一五時だった。ルートには一本のかなり古い固定ザイルが残っていたが、新しく六ミリのナイロンを四〇メートル、フィックスし、約三〇分で通過した。トラヴァース・ルート終点から約一ピッチ真上へ岩場を直登し、一六時にビヴァーク予定地《燕の巣》に着いた。《燕の巣》はこの北壁の中では最高のビヴァーク・サイトだった。

八月一三日（金）晴夕方雷雪、夜雪

（五・三〇）《燕の巣》出発―（六・三〇）氷の管入口―（七・三〇～九・〇〇）第二雪田―（一一・三〇）アイロンの岩場基部―（一四・三〇～一五・〇〇）《死のビヴァーク》―（一六・〇〇）ランペ入口―（一七・三〇）カミーンの下

ビヴァーク・サイト《燕の巣》を五時三〇分に渡部君がトップで出発、前日と同様につるべで登ることにした。約二ピッチで第一雪田と第二雪田をつなぐ割れ目《氷の管》の下に着く。《氷の管》のルートは、氷の少ない年は左約一五メートルの岩場を二ピッチ右に登り、《氷の管》に移るらしいが、今年は氷が多いため約一ピッチで《氷の管》に入ることが出来た。《氷

の管≫は傾斜が非常に急で、七〇度以上あるのではないかと思われる程だった。約三ピッチで出口付近に着き第二雪田に入る。昨年登ったミュンヘンのクライマーに充分話は聞いていたが、第二雪田は一見二ピッチ位で終るような錯覚を起こす。第二雪田の登りは各ピッチ毎にビレイ用にスクリュー式のアイス・ハーケンを安全のため二本ずつ打込み、そして又抜くと云ったくり返しの約五ピッチ、約一時間半の登攀で雪田上端に到着。そこからは雪田の上端をだいたい真横に約八ピッチ、トラヴァース、途中岩壁に打ち残されたハーケンも二・三本発見出来た。特に困難もなく、予想より早い時刻、一一時半に≪死のビヴァーク≫に登る岩場の基部に立った。そこから氷の張った岩場を約五ピッチ登り、直接≪死のビヴァーク≫地点に着いた。アイス・バイルで坐れる場所を作り、お茶をわかし、ここで約一時間程休憩した後、第三雪田のトラヴァースに入る。第三雪田には残置ハーケンをピンに左下に約一〇メートルの懸垂で着く、第三雪田のトラヴァースは約三ピッチで終る。この雪田の氷は第一・二雪田のものよりはるかに固く、アイス・バイルも思うようには突き刺さらない程だった。左手のアイス・メスをアイス・バイルで二～三センチ打ち込み、安定させ、それをホールドに、一歩一歩渡ると云った状態だった。

第三雪田に入る頃、アイガー北壁特有の西日がさし込んでくる。アイガー北壁はだいたい一五時頃から日がさし始める。日の光が岩壁にさし込んでくると、上部岩壁からの落石に加え、氷のかけらまでが音をたてて落ちてくる。今年は氷が多いためか、幸い大きな落石はなかった。

第三雪田からランペに入る。ランペは右側はオーバーハングした、ものすごい岩壁、左側はスパッと切れていると云った状態。ルートは適当に選びながら登って行った。残置ハーケンはほとんど見付からない。ここもところどころ氷と雪があるので、相変らずアイゼンの登攀だった。日がさし始めると、上部の氷雪が溶け、雨のように激しい勢で降ってくる。左側に出るとまともにシャワーを浴びるので、出来るだけランペの右側を登るようにした。第三雪田から約六ピッチ、カミーンの下まで登り、ここでビヴァークすることにした。一七時半。

その頃ウェンゲンの谷の方から変な雲が発生、かなり岩壁に接近し、雷が鳴り出した。氷を削り二人が坐れる場所を作り、ビヴァークに入る頃はものすごくなり、時には顔がぽっとする程のものだった。夜半に入りもっとも恐れていた悪天候となり、雪が降り出した。

八月一四日（土）朝のうち高曇、雪

（六・〇〇）出発―（九・〇〇）ランペ雪田―（一一・〇〇～一二・〇〇）神々のトラヴァースに抜ける割れ目―（一四・〇〇頃）神々のトラヴァース途中、高田スリップ―（一五・三〇）神々のトラヴァース中間

朝起きた時はもう岩壁は真白で、完全に冬の様になってしまった。戻るか、登攀を続けるか、お互いに考えたが、ここまで登れば下降も続登も危険の程度、労力を考えると、どちらとも云えない。結局天気は悪いが、少しでも登ることに決めた。

そこからの五〇メートルは困難な登攀だった。慎重を期し、三ピッチに分けて登った。新雪のついた割れ目にルートを取り、最後、ランペ雪田に出るところは、右側のふくらんだ氷壁をアイス・ハーケン五本を打ち登った。ランペ雪田に抜け出た頃は、新雪が固い氷の上に足首位迄埋る程積っていた。雪田から神々のトラヴァースへ移るルートは、あまり氷も無い純然たる岩に近いフェースで、ハラーの説明通り、五級だけの困難があったが、一応無事抜けることが出来た。

《神々のトラヴァース》は普通、氷はあまり無く、あってもまた少ないらしいが、この時は氷が非常に多く、その上に新雪が三〇センチ程積っていた。まず私がトップで雪面の一番上端、岩壁との境を、岩にへばり付くように右へ右へと一ピッチ渡った。二ピッチ目渡部君がトラヴァースした後、そのステップを使い私がトラヴァースを始めたが、何歩目かで不注意なスリップをしてしまった。雪面を約三〇メートル一気に滑落したが、運良く、丁度小さなピナクルにザイルがかかり、私は岩壁に一部はりだした雪面の上で停った。ほんの一瞬の出来ごとだったが、気が付いた時には胸が痛くて、息苦しくて、しばらく声も出なかった。ヘルメットも何処かに素飛んでしまっていた。それでもなんとか登らねばと考え、ステップを作りながら徐々に登った。途中迄登った時渡部君が、予備ザイルを半分に切り、下降してきて、ステップを切ってくれたので、彼のあとについて登った。上で体の調子を調べてみたが、どうやら右の肋骨が一本折れているらしいし、右手には力が入らず、腰もかなり打撲して、いたい。

時間は未だ早やかったが、体の調子が悪く、この日はもう、これ以上の登攀は無理と考え、そこで三日目のビヴァークをすることになった。ビヴァーク・サイトは急な雪面の最上部の氷を削り、坐るだけの場所を作った。気温が高く、降った雪がどんどん溶け、岩の上を流れるので、体が濡れ、不愉快なビヴァークになった。

その夜、若し明日天気が引続き悪かったならば少しでも下降しよう。しかし天気が良くなった場合、体の調子から見て自分がトップで登るのは自信がないが、渡部君がトップをやりセカンドでならなんとか登る自信は未だあったので、登攀を続ける、という二つのことを決めた。

八月一五日（日）晴午後時々曇り

（六・〇〇）登攀開始―（八・〇〇～九・〇〇）《白い蜘蛛》―（九・〇〇～一〇・三〇）頂上へぬける割れ目入口―（一二・三〇～一三・三〇）四級上の岩場―（一四・三〇）岩溝への

トラヴァース—（一六・〇〇）岩溝入口から約七〇メートル登ったところ—（一六・三〇）約七メートル左下にザイル横断した場所—（一七・〇〇頃）渡部君墜落—（一八・〇〇）高田単独で登攀開始—（二〇・〇〇）北東稜とミッテルレギ山稜との分岐点—（二一・〇〇）アイガー頂上

夜半から雪が止み、天気が徐々に回復してきた。袖口、膝、尻が濡れていたが、天気が回復してくると、空気が乾燥するためか、非常に乾きが早く、夜明け頃には体もかなり乾き、二～三時間熟睡することが出来た。

天気晴、登攀続行ときめる。

神々のトラヴァースは三級程度の困難とされているが、不安定な新雪が岩壁にへばりついていたため、ハーケンはもちろん、リスも思うように発見出来ず、むずかしさの程度は五級に近い感じだった。これがアイガー特有の変化ではないかと思った。約二ピッチで《白い蜘蛛》に出た。蜘蛛は固い氷の上にくるぶし位の新雪があった。登攀中この斜面が直接雪崩れるという感じは受けなかった。しかし、降った雪が積らないように、どんどん落ちるのではないかという気はした。傾斜は第二・第三雪田に近い五〇度、或いはそれ以上のものと感じた。蜘蛛の真中あたりにふくらんだ所があり、そこを丁度弧を描くように登り、約四ピッチで白い蜘蛛の最上部に出た。その上は五級の登攀なのだが、下から見ると比較的容易に見えるためか、渡部君はザックを背負ったまま登り始めてしまった。困難な部分を登る時はトップは空身で登り、後でザックは吊上げるというのがお互いの約束だったのだ。途中アイス・ハーケンを一本打ち、そこから約一〇メートル登った。その辺は不安定な氷で、ステップを切る時にあまり強く叩くと、氷が破れ下の岩が出てしまうといういやらしい場所だった。そこで渡部君の最初の滑落があった。

不安定なステップが崩れ、墜落、途中のアイス・ハーケンも抜け、下で確保する私の右の大腿部にまともに彼の身体がぶつかり、さらに一〇メートル位落下して停った。私も一緒にとばされたが、まえの確保用のアイス・ハーケンに辛うじて助けられた。この時渡部君は「おれはこんな大きな墜落は生まれて初めてだ」とくやしそうな顔をして云っていた。今度は空身で前に登ったところよりも右寄りに取付き、途中二本のアイス・ハーケンを打ち、約二〇メートル登った。この二〇メートルに一時間半を要した。次のピッチは前の部分よりは楽だったが、氷の状態が悪く、アイス・ハーケンがあまり効かなかった。そこからさらに二ピッチ登り、白い石英の岩がバンド状に右に走っている所に達した。そこで三〇分程休憩、お茶を沸し、いろいろの物を食べた。

上はアイガーでは最後の難所だと思われる《四級の上》のオーヴァーハング、左の岩場に向う。すぐ下に行くとオーヴァー

ハングが激しく突き出て、相当難しそうだったが、実際は見た目よりは容易だった。このハングの登攀は上からのザイルの引きが強く、ゼルブストのカラビナが引き上げられ、昨日折った肋骨にあたり、痛くてたまらないので、渡部君に教わり、彼がミュンヘンの山仲間から習った、新しいブーリン結びにまき方を変えた。さらに割れ目は上に通じているが、段々悪くなり、ときにはオーヴァーハングしていて非常に困難なので、ルートは左横に渡っている。そこはつるつるのスラブで、前日の雪で真白になっていた。左へ約七～八メートルはいずるように渡り、カンツェルンと呼ばれている場所に出た。一九五七年イタリアのクラウディオ・コルティが遭難救助されたのが、このあたりだった。

カンツェルンの斜め左下に固定ザイルがあり、そのザイルを使い岩溝に渡る。その岩溝はずっと続き一四〇メートル位あると思われた。岩溝の中は前日降った新雪が不安定についていた。その頃又北壁特有の午後の陽光がさし込み始め、上部から雪や小さな落石が落ち始めた。岩溝を二ピッチ登った所の左側の壁に、やや古い相当頑丈なリング・ハーケンが二本並んで打ち込まれ、さらにそのすぐ右に普通のロック・ハーケンが一本打ってあった。そこで渡部君は、ハラーの『白い蜘蛛』の最後にあるルート解説の切取ったやつを読んでいた。彼は定期券入れのようなセルロイドに入れ、登攀中ポケットに入れておき、時々それを出して読んでいた。「……この岩溝を八メートル登る。テラス。こんどはまっすぐ登らずに、はっきりわかるカンツェルンを目ざして左へトラヴァースする……」の文を読み、彼の判断したことは、「岩溝を八メートル登ったところで、ザイルで左へ渡らなければならない、そこからまた岩溝を直上するのだが、八メートルの場所には何もなかった。しかし八〇メートルのところにはハーケンが三本も打ってある。このハーケンは若しかするとそのために使われたものではないだろうか、そしてこの解説の八は八〇の間違いではないだろうか」と云うものだった。

私がミュンヘンで聞いた男の話では、これからは真直ぐだと聞いていたので意見は分れてしまったが、慎重を期して、一度下降してみて、だめならばまた今いる岩溝にもどる。戻るためにはザイルをフィックスしておけば良いということになり、六ミリのナイロンをフィックスして左下に渡った。渡ったところで渡部君がハーケンを一本ビレイ用に打ったが、あまり良いリスが見付からず、あまり良く効いてはいなかった。私もそれとフィックスをビレイに使用し、渡部君を確保した。渡部君の方に伸びているザイルも、このハーケンを経由していた。登攀中の彼の姿は手前の岩が邪魔して見ることが出来なかったが、二〇～三〇分位過ぎる。ザイルは少しずつ伸びていく。見通しはどうだと声をかけた時、彼は何か非常に難しいと云うようなこと

を云っていた。それから五分か一〇分もたたないうちに、彼が悲鳴のような、落ちるというような声をあげ、落ちていった。

私はとっさに、そのザイルをたぐり寄せようとしたが、効果なく、気が付いた時はビレイのハーケンが抜け、身体が半分位傾いていたが、辛うじて確保していた。下は二〇メートル近くある、つるつるのハング気味の垂壁だった。足元を覗いてみたが、渡部君の姿は最初見えなかった。渡部君が落ちていると思われる少し上に雪の斜面があり、そこは氷をカットすれば、ちゃんとしていられると判断したので、必死になってザイルを五センチ、一〇センチと引き上げ、渡部君も辛じてその雪の斜面の見えるところまで這い上ってきた。その時渡部君は足が折れているのか、腰がどうかなっているのか、ひょろひょろとして立てない状態だった。立とうとして半分位立ち上がるとザイルをつかんで倒れてしまう。そういうことを二度程くり返していた。私も必死にこらえ、彼に動くな、というような言葉を数回かけた。彼の動かない間に、幸いにもテラスに残っていた抜けたハーケンを拾い、しっかり打ち込んだ。

その時はロック・ハーケンが三本程とアイス・ハーケンが五本程しか残ってなかった。それを全部持ったまま渡部君が登っていたので、もっと打ちたくても手元には一本も無いので打てなかった。その時自分が一緒に落ちなかったのが不思議だった。若し私が確保に失敗し、引きずり込まれていたら、あとはフィックスにビレイしてあるだけなので、宙吊りになってしまっただろう。その事故の発生の時刻は興奮していたので、正確には解らないが、時計を見たのが、五時一〇分頃だったので、多分四時三〇分を少し廻った頃だったと思う。

渡部君はさらに立ち上がろうとしたが、前と同じ様に、半分も立ち上がらない内に、横に倒れてしまい、二～三度位同じことをくり返した。私は渡部君に動くな、落着いてそこに居るように云った。そのうち、彼が「おれは一体どうしたのだ、ここは滝谷かい」というような言葉を二度位云った。それに対して私は「ここはアイガー北壁で、君はちょっとスリップしただけだから、動かないように……」というような内容の言葉を二～三回くり返した。

そうしながら色々と助ける方法を考えた。ザイルは渡部君と私を結んでいる主ザイルの外には、ここを横断するためにフィックスした六ミリのナイロンより無かった。ハーケンは全部渡部君のところだし、ボルトは三本程あったが、登攀中に彼がジャンピングを落してしまっていたので使用出来ない。今ビレイ用に打ってあるハーケンに二人の体重をかけるのには不安があり、六ミリのナイロンのフィックスを取ってしまうと、岩溝には戻れなくなってしまうし、又六ミリで下降するのも不安だった。そして若し渡部君が登れる状態ならばと思い、主ザイルを少し切り、ループを二本作り、プルージック用に彼のところに

下ろした。しかし、それに対して全然反応を示さなかった。食糧は二人でビヴァークすると、完全に一日でなくなってしまう。彼を一人残すのは非常に危険だし、心苦しい、どうするべきか、一時間位迷っていた。しかし彼を助けるためには、自分が頂上に抜け、一刻も早く救助を求める以外に方法がないと考えた。

私が持っていたビヴァーク用の小さな組立て鍋を、ポリエチレンの袋に詰めて、カラビナをはめザイルを通して下ろした。渡部君は、それを受取るだけの意識はあったかどうか確信はないが、一応受取った。八時から八時半頃には完全に暗くなるが、ビヴァークはしないつもりだったので、食糧は全部彼のところに残した。

六時頃、彼に二日間がんばれと声をかけたが、最初彼は二日ももたないと云った。急ぐ必要があったので、何回か彼に同じような言葉をくどく云った。そのうち彼は全然そのことに対し反応しなくなり、半分眠ったような顔になり黙っていた。

登る決心をし、ザイルは彼を確保したままにし、フィックスを伝って元の岩溝にもどり、岩溝が正規のルートだと判断し登り始めた。登攀用には六ミリの固定ザイルをはずし、持ってゆくことにした。又余分な荷物をへらすため、フィルムを抜き取りカメラも捨てた。

岩溝はもろい岩で、くさった雪が付いていた。昨年登ったドイツ人の話では、上の方はそう難しくはないと聞いていたが、岩がもろく、逆層気味の岩だった。だんだん傾斜がゆるくなり、岩尾根が二～三本走っている。その真中あたりで、岩尾根を登った。雪田を攀ればと思ったが、雪が不安定なので結局岩を登るしか手がないと考えた。岩が非常にもろいので、雪を払いながら慎重に登った。二時間後北東稜の稜線に出た。北東稜から頂上直下の雪田をややまっすぐ登って、ミッテルレギー山稜に出、それをたどった。八時半頃懐中電灯をつけようとしたら、前日迄ついたものが全然つかず、一瞬迷って、そこでビヴァークしようと思ったが、とにかく一刻も早く下りなければと考え、明るい時の二～三倍の時間をかければと思い登り続けた。だんだん夜目にも馴れ、午後九時に頂上に着いた。頂上に登った感激も関係なく下降にかかった。西壁の下降ルートは六月の偵察で大体解っていたが、暗いので後ろ向きになり一歩一歩はいずるように下った。非常に興奮していたためか、たいして疲労を感じていなかったが、過労のためか二回程吐いた。途中一度三〇分程うつらうつらとしてしまったが、寒くなり目が覚めた。下に来るにしたがい、雪がくさっていて、時々膝から腰までもぐってしまう程だった。クレヴァス地帯も前に通っていたので、なんとか無事に下降出来た。

八月一六日（月）曇

（三・三〇）アイガーグレッチャー・ホテル前―（四・〇〇）

クライネシャイデック（五・三〇）アルピグレン・ホテル

三時半頃アイガーグレッチャー・ホテルに着き、助けを求めるべく入口を叩いたが、全然起きない。一五分位叩いて起こしたが、起きないので諦めて、また歩きだした。後で考えると、何故ガラス戸を石で破ってでも起さなかったのかと悔まれた。頭では一刻も早く連絡せねばならないと、絶えず考えていたのにもかかわらず、疲労のためか、あと二時間も歩けば、アルピグレンの日本人の大勢いる所に着けるのだと考えてしまった。途中のホテルの入口も叩いてはみたけど、誰も起きてはくれず、結局アルピグレン迄来てしまった。そこで吉尾弘君達に会い事情を説明した。

今年アイガーを登りに来ていた日本の山仲間がすぐ一致協力して、救助体制に入り、日中は雨が降ったりして天気が悪かったが、西壁から頂上に向うべく出発してくれた。私は一〇時頃グリンデルワルトに下り、地元の救助隊に会い、場所、事情を説明した。その日は地元の救助隊は動かなかった。

一七日朝、双眼鏡により岩壁の基部に赤いものが発見され、ヘリコプターで調べた結果、それは赤ツェルトで、そこから約五〇メートル下部に渡部君の遺体が発見された。

報告会の第二部は、アイガー北壁登攀に伴う技術的な問題、登攀用具、一般装備、日本での岩壁登攀との相違、類似点等に関しての高田氏の見解について、広く質疑応答があった。又当時の天候に関しては、当時期のヨーロッパ大陸の気象資料を、名古屋気象協会の吉川氏から説明を受け判断の資料とした。そして最後に渡部恒明氏の遭難に関する問題の質疑応答に入った。遭難の真の原因が何であるかは、当時も今も解らないのだが、当時新聞等に発表された種々の推定の原因の一つ一つについても、それが真に原因であるかどうかも検討してみた。何が原因で墜落したかは解らないが、彼は約四五メートル岩場の部分を墜落した。そして高田氏の説明では、落ちてからの渡部氏の言葉と動作は正常ではなかった。その墜落で実際どの程度の欠陥を受けたかは解らないが、それについては次の名古屋大学医学部の岩瀬博士の見解を紹介するにとどめる。

「……最初返答がなく、そのうちに返事が出来るようになった。かなり錯乱状態にあるけれども、一応正確な話が出来た。それから、そうこうしているうちに、だんだんはっきりした会話が出来なくなるということから想像すると、やはりスリップ（墜落）の際に、致命的な頭蓋内出血があったのではないかと思う。そして、それが致命的になる前に、一時話ができた。そして昏睡状態になったために、最後は話ができないようになったのではないかと思う。一時的ショックであれば、おそらく話しているうちに段々はっきりしてくる。時間がたつにつれて正確になってくる。どうも意識の明瞭な時間がほとんどなかったということで、その時に内出血があったと想像するほうが、一番可能性が強いと思う。」

以上簡単に書いたが、枚数の関係上内容を要約したため、説明不充分な部分も多いかもしれない。しかし、この登攀をより良く理解するための、一つの資料にはなると思う。（一九六六年七月一〇日）

## ○アイガー北壁で使用した主装備と食糧

| | |
|---|---|
| ツエルト（ナイロン二人用） | 一 |
| ビヴァーク用コツヘルセット | 一 |
| スイスメタ | 三箱 |
| マッチ | 三箱 |
| ライター | 一 |
| 懐中電灯 | 一 |
| ザイル（エーデルリット一二ミリ四〇メートル） | 一本 |
| 補助ザイル（ナイロン六ミリ四〇メートル） | 二本 |
| プルジック用綱 | 三本 |
| アブミ（二段） | |
| すて縄（ナイロン六ミリ） | 五本 |
| ボルト・ホルダー・セット | 一 |
| アイス・バイル | 二 |
| アイス・ハンマー | 一 |
| カラビナ（軽金属） | 一八 |
| ロックハーケン | 一五 |
| アイス・ハーケン　ドリル式 | 六 |
| 打込式 | 二 |
| アイス・メス | 二 |

| | |
|---|---|
| 砂糖 | 四日分（約二〇〇グラム） |
| コーヒー | 二回分（四ケース） |
| 紅茶 | 四日分（ティーパック） |
| オヴォマルティン | 一回分 |
| オイル・サーディン | 一罐（1/4ポンド） |
| ベーコン | 三〇〇グラム |
| サラミ | 三本 |
| チーズ | 一ポンド |
| ビスケット | 二箱（四回分×二人） |
| スープの素 | |
| アルファ米 | 二袋 |
| コニャック（ポケット瓶） | 一本 |
| コーラミン | 二箱 |
| ドロップ | |
| チョコレート | |

# 狩場山雑記

望月達夫

数年前に約三年間、札幌に在勤したことがある。その間に北海道の山を垣間見る機会をもった。登った山々のなかで、日高の幌尻岳とかクッウンナイからのトムラウシとか、五月の羅臼岳の憶い出は今にあらただが、道南の狩場山へ登ったことも忘れ得ぬひとつである。

それは人臭くなった北の山のなかでも、人煙を遠く絶した山という感じが濃厚であったこと、その山塊の予想外のおおらかさ、五月上旬というのに尨大な積雪の残っていたことなどが、私の受けた強い印象となって、永く忘れ難い憶い出を残しているものと思う。

その後、当時の同行者の一人、石崎貞子君からの便りで、同君らはその後も狩場のよさが忘れられず、日数の都合で私が登り得なかったフモンナイ岳やオコツナイ岳へも登ったということを知った。そこで私は、北海道でも余り登る人の多くないこの山塊のことを、過去の記録などと共に書いてみないかと、石崎君へすすめてみた。すると、暫らくして同君からは、過去の資料の蒐集は出来るだけやろう、併し執筆はご勘弁願いたい旨の返事と共に、若干の資料が届き、引続いて小樽在住の一原有徳氏から、石崎君の依頼をうけたといって、かなりの分量の資料が送られてきた。

折角集まったこれらの資料を前にして、私は不適任ながらこれを纏めざるを得ない気持ちになった。私が禿筆をとった所以は大体こういうわけだが、『山岳』にも一度はこの山塊のことを載せておきたいということも、その理由の底にあったことは否めない。

## この山のあらまし

狩場山と言っても本州の登山者には、殆んど馴染みがなかろう。北海道の山と言えば、大雪山、日高山脈をはじめとし、最近では利尻や知床がすぐ頭に浮かぶ筈である。しかし、この山は道南部にあって、高さも僅か一五〇〇メートル台、にもかかわらず後方羊蹄山についで道南では第二の高度をもつ。

北海道の地勢の顕著な傾向として、その日本海に面したところは、暑寒別の山群でも、積丹半島でも、ひとしく断崖をなして、海に落ちこむところは切り立った箇所が多い。この狩場山塊でもその例にもれず、日本海に面したところは断崖がつづいて、突端の茂津多岬は、積丹岬、雄冬岬と共に古くは西蝦夷の三険と言われた。

まともにシベリヤからの風雪をうけるためか、積雪の量は道内でも指折りに多い。

国土地理院五万分の一の地図は狩場山、原歌、大平山の三枚にまたがる。右図について見られたい。

主峰の狩場山（一五一九・二メートル）は西狩場とも言われ、これを中心に、東狩場山（一三一八・八メートル）、前山（一二六〇・二メートル）、オコツナイ岳（一一七〇・四メートル）、フモンナイ岳（一三三七・三メートル）の山々をもち、南方にはカスベ岳（一〇四九・二メートル）、メップ岳（一一四七・二メートル）を、東方には大平山（一一九〇・五メートル）などの山々を従えている。

東側に入りこむ千走川の源流は、明るい、ひらけた感じを与えるが、西側にくいこむ須築川は急峻で、川筋はゴルジュをなし険悪な相を呈しているという。一五二〇メートルの落差を、僅か九キロの距離で海に流れこむことから、その急峻さは容易に想像されよう。

## 過去の記録など

狩場山の文字を記した最も古い文書は、当然旧幕時代に遡らねばなるまいが、目下のところ詳細に調べる余裕はなかった。一、二散見したものを述べると、まず第一に、江戸時代の著名な旅行家菅江真澄の『えぞのてぶり』のなかに「カリバの岳」という記述を見る。それは、彼の寛政三年（一七九一年）六月二日の旅日記の箇所にあたる（昭和四一年六月、平凡社発行、内田武志、宮本常一共編訳『菅江真澄遊覧記』(2) 二一五ページ参照）。

つぎに松浦武四郎の『蝦夷日誌』（東西蝦夷山川地理取調紀行）に、狩場山の記述があるのを指摘しよう。「カリバは桜の事也。此山桜多ければ号く。本名カリンバウシ岳也」と書いている（昭和三七年一月、時事通信社発行、吉田常吉編『蝦夷日誌』(下) 四六ページ参照）。原本は西蝦夷日誌・初編で文久癸亥（三年）嘉平月（十二月）、即ち一八六三年に草せられた。

狩場山が初めて登られたのは何年か、とか登頂者は誰なのかという詮索は、一応不明のまま残すこととして、現在の五万分の一地図の三角点が置かれた年代は、調べる気なら、方法はなくもなかろう。

登山者として初めてこの山塊に分け入ったのは、北大山岳部の伊藤秀五郎氏であった。『北の山』に収められた「狩場山」の一文によると、伊藤氏は昭和三年（一九二八）三月、単身で寿都から馬橇に七時間もゆられて千走に至り、賀老の駅逓を根拠地として三月二〇日東狩場山に登頂、悪天候のため主峰には達せず、帰路は北海の冬を吹く寒風にいじめられながら、大平、飼鹿、厚瀬、本目と続く漁村を歩いて、月越山脈の母衣ノ月山というのを越えて寿都に戻った。

この山が初めて登山者に記録され、発表された最初であろう。と同時に昭和初期のこの付近の様子が、よくうかがわれる一文である。私が狩場山に心を引かれるようになったのも、伊藤さんの文章によるところが大きい。

冬の狩場主峰が登られたのは、翌昭和四年であった。一行は北大山岳部の野崎健之助、菊池寛の両氏。二月六日寿都から永豊迄行って泊り、七日千走を経て賀老の駅逓に着いた。八日は

吹雪で途中まで、九日曇天ではあったが、頂上から東南に千走川源流へ向って走る尾根（伊藤氏は、この尾根を狩場主峰へ登るのに最良のコースとして、前記の紀行で指摘している）を登り、一一〇〇メートル位で薄氷の箇所が現われたため、スキーをアイゼンに替えたが、一二〇〇メートル付近から急に深雪となり、頂上まで膝を没する深い雪であった。賀老からの往復時間八時間二〇分。一〇日寿都へ帰る。（「北大山岳部々報第二号」所収）

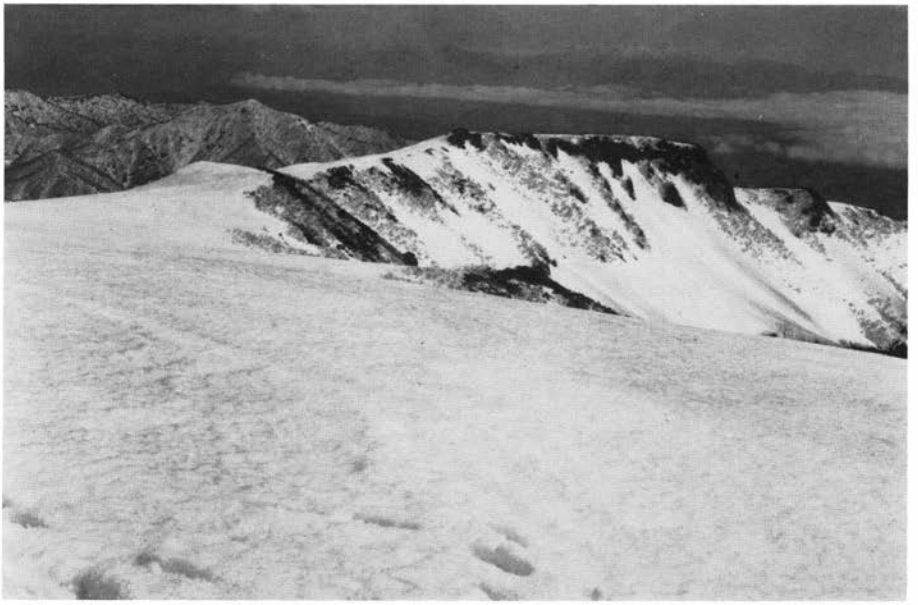
次に積雪期の古い記録として、昭和八年（一九三三）に北大山岳部の伊藤紀克氏が単独で行ったものがある。四月六日札幌から寿都まで。七日発動機船で千走に着き賀老駅逓に泊る。八日曇風強く後雨、賀老台地を北寄りに進んで八〇〇メートルの崖上を通り、東狩場山直下の崖下にデポ、東端より頂上に達した。更に尾根伝いに狩場山の頂上をきわめて引き返した。一〇時頃から糞まじりの雨が西側から吹きつけ、朝のうちは硬雪を利用して能率をあげたが、東狩場と主峰との間は雪軟かく時々膝を没することもあり、且つ雨まじりの横なぐりの強風のため意外に時間を要した。と云っても約七時間の所要時間は決して遅くない。九日歌島に一泊後、一〇日寿都を経て帰札。尚同氏は最後に次の記述をのこしている。——土地の人は狩場山を西狩場山と云ふて居る。狩場山の夏期登路としては標高尾根（註・東南尾根）北側の沢を直接頂上に至るのであるが、この沢は非常に楽であるとの事。近年積雪期以外の登山者（主に土地の人）相当あるらしく、昨年は約三十名ありたる由、此の外須築方面よりも登られて居るとの事である。寿都、千走間の発動機船は風であっても荷物のない時及び漁繁期には出ない。且つ確かな事は其の日の朝にならなければ判明しないと云ふ、甚だあてにならないものであるから、寿都に一泊は覚悟しなければならない。因に賀老——千走——寿都の距離は四十二粁である。（「北大山岳部々報第四号」所収）

昭和一〇年（一九三五）には積雪期のフモンナイ岳が登られた。一行は嘗谷重二、一原有徳、中島信二、伽賀三郎の四氏。三月二八日小樽から寿都に至り、二九日寿都から千走まで発動機船、賀老駅逓に至る。

——海上平穏、山頂が雲におおわれた狩場山、フモンナイ岳の山腹をまむかいに徐々に進んだ。千走にて賀老駅逓行の馬橇にザックを積んでもらい、スキーで出発した。海岸は雪がないのに賀老の台地は一望の雪原であった。太い根曲笹の導標がどこまでもつづいていた。そのむこうに南稜からメップ岳につづく山脈（やまなみ）が、屏風のように立ち、道北では見かけぬブナの樹におおわれ、他郷に遠く来たような思いであった。台地に出て一キロ程のところに駅逓があり、そこに泊るよう、父の友人がここの分教場の教師をしている人に頼んでおいた。しかし、家のかげは全く見当らなかった。馬橇が二三頭停っているところで尋ねると、そこが駅逓であった。馬橇のかげに雪の段が掘りさげられて、洞窟のような入口であった。当時六〇戸程の人家があったが、すべて棟を越す雪に埋れておった。駅逓の土間に入って、ヒッコリーのスティール・エッジのスキーがたてかけてあるのに目を見はった。（まだこのようなスキーを持つ者は、札



東狩場山附近からの狩場山（1519m）
Kariba-san (1519m) seen from East Kariba-san in Hokkaido, on May 5th, 1962.
(By T. Mochizuki)



狩場山南稜とカスベ岳（1049m）
The southern ridge of Kariba-san and Kasube-dake (1049m) in the background.



東狩場山の西方から見たフモンナイ岳（1337m）
Fumonnai-dake (1337m) seen from west of East Kariba-san.
(By T. Mochizuki)

幌でも数少なかった頃のことである。）その主は函館日魯漁業に勤める垣内佳三氏であった。その夜狩場山のルートについて、こまごまと聞くことができた。氏は、ここには二度目で、このときも十日間悪天候にはばまれ、この日ようやく登頂したとのこと。コースは初登頂のときの南東尾根であった。――と一原氏は述べている。

三月三〇日、この日の狩場登頂を再び一原氏の記述によって記そう。――台地の中央の学校に寄り、さらに一キロゆくともう道はない。深いラッセルで、百歩交替で休みをとらずに進んだ。千走川に下り垣内氏の指示通り南東尾根末端を西に廻りこんでいった。このあたり、大きなブナと僅か針葉樹があった。青空の中に真白な尾根を垂れた主峰を一度仰いだのみ。あとは深いガスの中であった。尾根の取付きからウィンド・クラストしていた。一四〇〇メートル近くは痩せてクラストもひどかったが、垣内氏の言によりスキーで通した。ここを過ぎると、頂上まで深い雪であった。深いガスの中で、頂上を見きわめるのに、ストックを細引にむすび、前方に投げながら進んだ。西と北に急に落ちこんだところが頂上であった。痩せ尾根を過ぎて、コース・フラッグをたてなかったので、一時間程尾根に出るのにさ迷った。尾根に出てからは、スキーのうまい菅谷、中島らは停止することなく、悪雪の尾根を下っていった。――この日の所要時間駅通から狩場山往復一一時間二〇分。

三月三一日、東狩場山、フモンナイ岳登頂。所要時間は六時間四五分。

――窓がふさがれていて、朝になっているのがわからず、昨日の疲れに寝すごしてしまった。外に出て見ると、雲一つない快晴。一同を起こして急ぎ出発した。幸い昨日のシュプールがそのままで、取付きまで時間がかからず、東狩場山への登りも雪がしまって楽であった。頂上は東から北へ廻りこんで登った。蒲鉾のような頂稜、透き通る氷の三角点付近。檜の木が二、三本残っていた。（後日、ここの写真を初めて登った北大の伊藤さんに見せたことがあるが、非常になつかしがられた。）主峰にもう一度登ろうかとも思ったが、まだ冬の記録のないフモンナイ岳に行くことにした。大きなスカブラをいくつも越えて、フモンナイ岳につくと、午後の日に陰影の濃い狩場山全貌が視界にあった。暗箱カメラの三脚をたてて、慎重にシャッターを切った。引き返すころ、主峰のふところに雲が湧いていた。伊藤さんも書かれていた靴形尾根の北の谷は、雪質よく思う存分スキーを楽しめた。

四月一日、一日余裕があったが、天気も上々ではなく、便船の途絶えるおそれがあるので下山した。便船はあったが風波がひどく、船酔いに苦しめられた。室蘭の菅谷氏は弁慶岬の政泊（まさどまり）で下船し、他の三人は岩内までのぼした。刀掛岬の沖で逆浪に押されて進めず、怖い思いをした。十トン位の小さな焼玉エンジンの漁船で、助宗鱈を船艙一杯の漁獲であったという。

（以上一原氏の報告による）

以上の諸記録がすべて北東面千走から賀老を経由するものであったのに反し、西側須築からの記録は極めて少ない。

昭和二三年（一九四八）三月、榆金幸三氏他一名の記録があるが、積雪期の同方面からの記録としては最も早期のものと思う。二三日瀬棚から須築の部落に入る。同所泊。二四日、早暁三時頃出発、須築川から標高尾根（註・前山から西へ張り出した大尾根であろう）に取り付き狩場山を往復した。所要時間は一三時間位。瀬棚から須築に至る間は、崖を何度もよじ登り、降りして随分苦労した。（以上石崎君からの報告）なお私が在札中榆金氏と会ったとき、尾根の末端をスキーで下るときは、海中へ飛びこむような気がしたというような話を聞いた記憶が残っている。

また昭和二四年（一九四九）四月には、札幌国鉄の村川豊次郎氏（単独）が、千走川から賀老台地を経て狩場山へ登っている。

狩場山への夏路が、南側の真駒内川から、或いは馬場川からその南稜に達し、尾根通し開かれるようになったのは、比較的新らしいことであるが、南尾根から冬期に登られたのは昭和三四年（一九五九）一二月から翌年一月にかけてである。一行は室蘭山岳会の及川俊夫、土谷敏夫、大佐々哲夫、別所武、佐藤賢治、石田茂の六氏であった。その時の記録を次に掲げよう。

一二月二九日　室蘭―長万部

同　三〇日　長万部―東瀬棚（九・三〇）――松岡（一二・三〇―一・三〇）――ベースハウス（六・〇〇）東瀬棚から一三キロの最終部落まで馬橇でザックとスキーを運ぶ（松岡部落高野氏にかねて依頼）。積雪は例年の半分、松岡から二キロの営林署の真駒内事業所まで馬橇でザックを、われわれはスキーをはく。熊戻橋から真駒内渓谷はぐっと狭くなる。滝は大ツララ、小さな函状の左岸沿いにラッセルを交替して、ベースハウスの飯場に着いた頃は、すでに薄暗くなっていた。

同　三一日　ベースハウス（八・四五）――登山口（八・五五）――キャンプ（C）（四・〇〇）ガスのため山の様子が判らない。静けさは無気味な程、登山口には「頂上まで八・五粁」と導標がたっている。真駒内川をスノーブリッジで渡り、対岸の尾根に取り付く。急傾斜とブッシュ、それに加えての湿雪でラッセルは苦しく、仲々高度を稼げない。要所に標識をつけて登る。尾根の右側は切れ落ちて雪庇ができており、緊張の連続である。斜度は増し、コブの連続で全くアゴが出る。高度が高まると気温が下がり、雲で濡れたヤッケがバリバリに凍った。P5（六六〇メートルのコブ）の上り一五〇メートルは急傾斜のため胸まで没し、ツボ足で登る。C予定地は一〇〇〇メートルの高度を考えていたが、僅か二・五キロに七時間を費したので、やむなく七〇〇メートル付近をCとした。

一月一日　C（七・五〇）――分岐点（九・一〇）――引返し点（一〇・四五―一一・一五）――C（一二・五五）前日とはがらりと変った緩傾斜と疎林帯を、サブザックで軽快に登る。振り返るとカスベ岳のピラミッドが朝日を受けて美しい。分岐点付近からは岳樺の樹氷帯である。一二〇九メートルの肩に着く頃、再び天候は崩れ始める。北の肩に出る頃西風は益々烈し

く、ガスが視界をさえぎり始めたので、ツェルトをかぶって天候の恢復を待ったが、一層悪化してきたので退却ときめる。

一月二日　C（七・〇〇）―一二〇九峰（九・三〇）―露岩（一四六〇メートル付近）――狩場山頂上（一一・一一）――C（一・五〇）分岐点に着く頃から天候は次第に恢復してきた。前日の引返し点まで快調に登る。小憩していると、暗雲の一角が割れて強烈な陽光が降り注ぎ、頂上へのルートを示す。南面の大斜面がギラギラ輝きはじめた。露岩を過ぎるころ再びガスがかかり、視界が悪くなってきた。露岩からは平坦な斜面である。風に雪を混えて視界は益々悪化してくる。二―三〇メートルおきに標識をたてながら、スカブラの雪面を進むうちに突然前方がなくなる。狩場山の頂上は、ガスと風雪でわれわれを迎えた。大斜面はわれわれだけには勿体ない程だった。スキーは滑りに滑り、粉雪は五体を覆って飛び散った。

一月三日　C（九・三〇）――ベースハウス（二・〇〇）―事業所（三・四五）下りも登行と変らぬ苦役だった。滑るというより、ズリ下った。時間があったので事業所まで下った。ストーブも薪もあり、水場はすぐ側で、われわれにはまるで御殿であった。

一月四日　事業所（七・〇〇）―松岡（七・四五）―東瀬棚（一〇・〇〇）松岡の高野氏に馬橇を用意してもらって、スキーとザックを積み、今度は皆その上に腰をすえて下った。

私が行ったのは昭和三七年（一九六二）だから、年次とすればこの次に入ることとなる。同行は橋本誠二、石崎貞子、高沢光雄の三君。記録としてはとるに足らぬが、参考までに概要を記しておく。

五月三日、札幌発六時五四分の汽車に乗り、黒松内乗替え一二時三〇分に寿都に着いて、一時一〇分発のバスに乗った。政泊から歌島までは平凡な海岸段丘だが、歌島を過ぎると行く手に真白な狩場山塊と、その少し左に大平山が望まれる。聞きしにまさる豊富な積雪。本目から永豊までの海岸線は、はげしい凹凸と断崖のため数多い隧道がうがたれ、景色も捨てがたい。千走着二時三五分。途中までトラックに便乗し、千走川沿いにタラノメなどをつみながら千走温泉（地図の湯の沢温泉）に着く。温泉は農家のような建物が一軒だけで、湯は鉄分が多く赤茶色の濁り湯、湯舟の底からボコボコと湧いている。宿はまだランプで電気も来ていない。カタクリ、エゾエンゴサク、キクザキイチゲなどの花が近くに咲いていた。

五月四日、早暁は雨が降っていたので出発はあきらめたが、七時半頃には雨も止んだので、とも角行けるところまで行こうと、九時に宿をあとにした。賀老は曽て四十世帯も開拓民がいたが、今では二世帯しか残っていないという。その一人Fさんが偶々温泉に泊り合わしており、同行を希望した。温泉の前の吊橋が落ちたままで、まだ改修されていないため、少し上流の橋で対岸にわたり、そこから路に出るまでの薮こぎとへっつりにひと汗かいた。賀老台地へ登ると、大平山が標高のわりに立派に望めたが、曽て伊藤さんらが泊った駅逓の建物はくちはて

ていた。そのあたりから一面の残雪。台地のはずれのこわれた飯場で弁当を開いていると、また雨が落ちてきたので、そこから引き返した。

五月五日、天気好転のきざしがうかがえたので六時一〇分に宿をたった。昨日と同様に賀老台地まで登ると、しだいに晴上ってきた空を背に、東狩場からフモンナイへの白い稜線が輝やく。昨日引き返した飯場へ八時三〇分に達し、幅広い道をさらに西進し、やがて道を離れて残雪の上を北へ方向をかえた。私たちは、地図上東狩場三角点の東方に上下に二つ記されている岩場記号の、間の沢を登ろうと考えたからである。千走川源流を過ぎると、手頃のひらたい大岩があり、そこで一服して一〇時一〇分登りにかかった。この辺りはブナやダケカンバの類が多く、ちょっと本州の山のような感じである。雪はしまって殆んどもぐらず、一二時一〇分東狩場の頂上に達し、そこから偃松、ダケカンバをくぐって、やや北側よりに西の鞍部へ下る。フモンナイ、東狩場との三叉点をなす広々とした地点、夏には高山植物が美しく咲いている所だという。コブを二つ越えると、最後の登りとなる。登りきると頂上は広い台地状をなし、最高点は西端なのでそこまで行った。一時四〇分着。ゆっくり休み休み登ったとはいえ、出発から七時間半を要した。上天気に恵まれた私たちは人気ないこの山頂から、四周の眺望を恣にしたことは言うまでもない。二時一〇分頂上をあとにし、斜陽をあびていやが上に壮麗な狩場の山容を振りかえりつつ往路を戻り、七時温泉に帰着した。

五月六日、大平山から長万部へぬける計画は、日数の都合でとりやめ、千走から一一時一〇分発蘭越直行のバスにのる。蘭越では三時一二分の汽車に間に合い、札幌へ着いたのは七時前であった。

昭和三九年（一九六四）の春には、狩場山で二つの新らしい記録が残された。

その一つは北面の小田西川から主峰をはじめ前山、オコツナイ岳、東狩場、フモンナイ岳が登られたことと、次は長万部岳から狩場山までの縦走がなされたことである。

前者は小樽商大山岳部のパーティが中心となり三隊に分れて行われた。第一隊（北村浩、小野寺久、中沢謙、竹沢秀宏、鈴木陽爾、河西孝尚）、第二隊（北村豊、田辺英夫、本間暹）の商大隊に第三隊として一原有徳、小林年、長谷川秀男の三氏が加わった。以下は一原氏による報告の抜萃である。

まず第一隊が三月四日から行動を起し、小樽から蘭越まで汽車、そこから第二栄浜までバス（現在は小樽からバスが直通している）により小田西川の偵察を開始。川は雪が少なく岩が出て、水量も多く遡行不能のため、オコツナイ尾根の山道を水準点三一七・〇三メートル付近まで行き、尾根の側面を進む。三月六日、小田西川二俣上方高度五〇〇メートルの地点にBCを置く。地図上島牧村の島の字の付近である。

三月七日、偵察。八日、晴後雪、前山、オコツナイ岳登頂。前山北東稜の一〇〇〇メートル付近をデポとした。三月一二

日、第一隊の下山と入替りに第二隊が出発。一三日BC着。一四日、北西稜高度九五〇メートルにACを設ける。一六日第三隊も入山して合流。

三月一七日　雪　主峰登頂　BC（七・五〇）—AC（八・五〇—九・三〇）——一二二〇メートル台地（一一・〇〇—一一・三〇）—支庁界稜線上（一二・〇〇）—主峰頂上（一二・二三—一二・五〇）——AC（一・三五）——BC（三・三〇）

北西稜はBCの狭い台地から一段登ると、七〇〇メートル位迄広い緩い斜面と、その東に狭い尾根をもっている。七〇〇メートルからは、その尾根がなくなり、一つの広い尾根となり、一段と急になる。学生らはこの狭い尾根に取り付いていた。起伏もかなりあるので、広い斜面をとった方がよい。AC地点からは急になり、クラストしているのでデポした。踵が埋る程度であったが、一二二〇メートルの台地では腰まで埋った。雪は烈しく降り視界一〇メートル位。その晴れ間に東面の雪庇の張り出した大きな崖が見えた。慎重に標識をたてつつ登った。支庁界稜線付近からはクラストして楽であった。頂上の取付きは一〇メートル位の霧氷を鎧う露岩で、右をまいた。最近登ったらしい黄色の標識があった。露岩の上は平らで頂上であり、東狩場山よりの風蔭にツェルトをかぶって休憩。私には正に二十九年振りの頂上であった。今回もガスがこめて視界がとざされ、露岩地点の下り口が僅かの距離なので標識をたてず、一寸まごついた。下りはボッカの跡が消え、一二二〇メートルの台地は一層深い雪であった。ACには学生達と小林年が泊り、私と長谷川はスキーで下る。楽しみにしていた滑降は、深雪のため滑らず、七〇〇メートル下からは広斜面をラッセルして時間をとられた。BCのテントは半ば雪に埋れていた。

三月一八日　主峰と東狩場山登頂　AC（八・三〇）——一二二〇メートル（九・二三）——支庁界稜線（一〇・五〇）—主峰頂上（一一・二〇）——最低鞍部（一一・三〇）——東狩場山（一二・〇〇）——頂上（一二・五〇）——AC撤収（一・五〇—三・五〇）——BC（四・三〇）積雪一メートル、一二二〇メートル台地で一時晴れたが、引き続き強風、視界とざされ、ラッセルは膝までの難行で頂上まで続く。頂上から東狩場まではクラストして、まともに風雪のつぶてを受けた。北西面は切れ落ちて危険なので南東側を下る。この方も下方は崖になっていた。

三月一九日　曇後晴　前山とオコツナイ岳登頂　出発（六・一〇）—尾根に取り付き六〇〇メートル（七・三〇）——一〇〇〇メートル、デポ（八・四〇）——前山（一〇・〇〇）——オコツナイ岳（一一・二五—一二・〇〇）——デポ（一・〇〇—一・三〇）——帰着（二・一五）右股沢沿いに台地に登り、前山北東の尾根に取り付く。岳樺がまばらに、よいスロープ。雪質も風蔭でよい。前山付近は飛行場のように広い尾根で、茂津多岬（上からは見えない）と続いている。オコツナイ岳は地図で想像していたより意外に大きく、鞍部からの登りも痩せていて、雪も深く時間と労力を要した。デポ地点から沢までは一気に下るには惜しいくらい、思い思いのシュプールを描いて下っ

た。天候が次第によくなり、向い側のフモンナイ岳の陰影が美しかったが、主峰は薄霞の中で写真によい情況は常にこなかった。オコツナイ岳からフモンナイ岳のルートをよく観察した。

三月二〇日　晴　フモンナイ岳登頂　出発（六・二〇）―フモンナイへの沢の入口（八・三〇）――一〇〇〇メートル、デポ（九・五〇―一〇・一〇）――頂上（一一・〇〇―一一・四五）――デポ（一二・〇〇）――途中一時間スキーを楽しむ―帰着（一・四五）台地の縁をつたい、三つ目の出尾根の沢から川に下る。昨日観察した主峰中央稜末端付近に椴松の群生したところに来ると、函状で川が開いていた。左岸を高捲きした。開いた渕に木の実を落すと、人を知らぬ岩魚が多数ひらめくのが見えた。フモンナイ岳西鞍部からの尾根の左股を登り、この尾根の上に出て、八〇〇メートル付近で浅くなった沢をよぎり、直下の小さな尾根に取り付く。一〇〇〇メートルでデポ、風をまともに受ける所で、クラストはきつく、山稜上はスカブラの発達が二メートルに及び、雪像群のような自然の造型が美しかった。原歌への尾根も谷よりは雪質よく、滑降は素晴しいものがあろう。未来のスキー場として狩場山を見るとき、ここはさしずめダウンヒルバーンの候補としてよいだろう。オコツナイ岳と青々とひろがる日本海、しかし、この日も主峰は薄霞に覆われ、スカイラインを見せなかった。尾根の雪質はよくなかったが、数分で下ってしまった。途中スキーを楽しみ、昼寝をしたりして、この日の天候を充分楽しんだ。函のところは、右岸の上方をへずりながらスキーで通過した。

三月二一日　吹雪　下山　出発（六・四五）―第二栄浜（一一・一五）昨日フモンナイ岳から主峰中央稜を観察し、学生のみの登行予定にしていたが、夜半から荒れて来たので中止して下山ときめる。湿気を含んだ新雪、強風のなかを下った。水準点三一七までスキー、それからツボ足で下る。杉本家で暖をとりバスを待ったが、新聞で運休とわかり、小学校から原歌局に電話して、トラックに迎えに来て貰う。原歌からバスに乗った。

狩場山は東方の賀老から最も多く登られていた。室蘭山岳会が南稜から登ったが、これも長いコースである。環状に支峰をめぐらしているので、小田西川に入りこめたら、非常に楽に登れる。北西稜も千走川からの南東尾根とそう変りはないし、中央稜からの登行もよいと思う。私らがBCをおいた地点は、狩場山の内院といったところで、今後ここからの登行をすすめたい。狩場山登行の最もよい位置ではないだろうか。雪も多いが、南東側よりもクラストすることが多い。（以上一原氏報告）

長万部岳から狩場山までの縦走は、富士製鉄室蘭山岳部の大佐々哲夫、大佐々光子両氏により昭和三九年（一九六四）四月二八日から五月五日まで八日間でなされた。同氏らの報告からその概要を次に記してみる。

四月二八日、二股駅から二股温泉まで。夜半温泉に到着。四月二九日、鉱山までは踏跡があって歩き易い。九時頃から快晴となる。鉱山裏の急斜面でワカンをつける。急斜面を登りきっ

てから、長万部岳北鞍部へトラバース気味に進む。鞍部から長万部岳往復。狩場からフモンナイへの翼をはったような山稜が大きい。鞍部から一つ目のコブ（八八〇メートル）で、先週デポしておいた荷物を掘り出す。三角点九四二・二と独標一〇〇六との鞍部から、高さで五〇メートル程登ってテントを張った。（温泉発六時二五分、長万部岳一〇時二〇分、キャンプ二時一〇分）

四月三〇日、快晴、雪面硬く快調。独標一〇〇六は上部で右を捲く。分岐点で大平山往復。独標一〇二五は右を捲く。大平山西面の地形図で岩記号のあるリッジは、特に登攀価値があるとも思えない。一〇時頃から風向き東となり天気は下り坂らしい。三角点一〇二一・五の西南のコルへ下るとき、右手の支稜を主稜と間違え、泊川の源流へ下って再び前記のコルまで登ってテントを張った。（発四時二〇分、大平山六時三〇分、三角点一〇二一・五、一〇時二〇分、キャンプ〇時五五分）

五月一日、一面のガスで雨が降ってきたため停滞。五月二日、終日雨で風の音がひどい。今日も停滞とした。五月三日、ガスだが雨は降っていないので出発とする。テントの周りの雪が二〇センチも融けている。一〇メートル先も見えないガスのため、登りはとも角として、下りには正しいルートを見出すのに苦労した。地図と磁石に頼って歩く。新らしい五万分の一の地形図の精度は、殆んど完璧に近い。三角点九五四・二の西のコルは縦走コース中の最低鞍部で五八〇メートル。そこを過ぎ七〇〇メートル付近の平坦地にテントを張る。全身、雨でビショぬれ。（発五時三五分、キャンプ一〇時四〇分）

五月四日、一面のガスだが、昨日の天気図で今日は好転するのは判っているので、早々にテントをたたむ。三角点九一〇・四で雲海の上に出る。素晴しく綺麗な巻積雲が、見るみる巻層雲に変るのがよくわかる。三角点一〇九二・九は左を、メップ岳分岐点のピークは右をほぼ水平に捲く。九時、西南西の方角から巻積雲と巻層雲が放射状にひろがる。コブ八六〇は左を捲く。マス川源頭のコル（七四〇）から二五〇メートルの登りは一寸つらい。一一時弱い日暈。「狩場山」の地図に入り、コブ九二〇メートル手前の肩（標高約九〇〇）にテントを張る。濡れ物干しにおおわらわ。五時、狩場が雲にかくれる。（発四時一〇分、キャンプ一時三五分）

五月五日、変な雲はあるが山はよく見える。五時頃から狩場の上にクラゲみたいな、いやな吊し雲が出来る。狩場南稜とのジャンクションへ着く頃は、狩場は完全に雲のなか。風邪が悪化して歩くのがつらく、予定の須築へ下る計画を断念し、空身で狩場を往復し、夏道尾根を下って東瀬棚へ出ることにした。狩場の登りは稜線に雪がなく、常に千走側を捲かなければならない。ラントクルフトが開いていたりして歩きずらい。露岩を過ぎて少し進み、平らになった所を頂上ということにしてさっさと下った。思い出深い夏道尾根を下る。雪は標高六八〇メートル付近までであった。事業所で長いこと車を待った。四時、寒冷前線が通過しおわって快晴となる。（発四時一〇分、南稜ジャンクション六時五五分、狩場山九時二八分、冬のキャンプ地

（六八〇）一一時五〇分、事業所二時八分、東瀬棚六時四五分）

――念願だった長万部岳と狩場山をつないだ。多分初縦走と思う。積雪量は同時期の日高山脈などよりは多い感じだが、標高千メートルを上下するに過ぎない山稜の低さ、スケール感の小ささは如何ともし難く、この縦走の価値は、この山稜に注目していた、ほんの少しの僕らの仲間だけのもの以上ではあり得ないだろう――と大佐々氏は控え目に書いている。

昭和四〇年の春には石崎君らが再度狩場山塊に遊び、三日間の晴天を得て主峰の他フモンナイ、オコツナイ、前山等に登頂した。その時の石崎君の記録を次に掲げよう。

一行　平間正男、大森和子、石崎貞子

五月一日　晴、札幌（六・五七）――寿都（一二・三〇―一三・二〇）――千走（二・二〇）――千走温泉（四・五五）黒松内、寿都間の汽車は、例によって三十人も乗ると満員になるストーブつきの小型車。時速二〇キロ位でヨタヨタ走る汽車を、車が軽く追い越してゆく。狩場山への山旅は、先ずこの汽車に乗ることから始まるようだ。千走の部落でバスを降りると、運よくトラックに便乗できる。賀老台地についている車道と、千走温泉への二股路で下車。ここから千走温泉まで約二キロ半。三年前に来た時には、千走川に沿って春の花が楽しい群落をつくっていたのに、今年は雪が多く花の目覚めも遅いらしい。

五月二日　晴、千走温泉（六・五〇）――賀老台地北端（八・〇五）――尾根取付（一二・一〇）――一一〇〇メートル・キャンプ予定地（二・〇〇）――東狩場山鞍部（二・四五）―フモンナイ岳（四・〇〇―四・一五）――キャンプ地（四・四五）驚くほど積雪多く、賀老台地への山道も、野の花の色どりも、すべて雪の下。台地の北端に直登する。曽ての開拓部落も、今年は遂に老人が一人残るのみとなった。前回登った東狩場山南東の、上下二つの崖の間の沢には、雪崩の大きな跡があり、見上げると雪庇が張り出して今にも崩れそうにみえる。それでこの沢を通るのを避け、崖を捲きながら東狩場山の東側に出る。一一〇〇メートル地点をキャンプ地にきめ、荷物をデポしてフモンナイ岳に登った。スキーは山頂まで担ぎ上げ、降りの大滑降を楽しんだ。フモンナイ岳から見た狩場山は、深い陰影をつけて壁のように立ちはだかり、オコツナイ岳の鋭い稜線からは、デブリの跡が尾をひいて深く沢に落ちていた。後方羊蹄山やニセコ連峰、遠くに大千軒岳などが望まれた。

五月三日　晴、キャンプ地（七・五〇）――東狩場山（八・四五―九・一〇）――狩場山（一〇・二〇―一〇・四〇）――前山（一一・五五）――オコツナイ岳（一二・三五―一・三〇）――前山（二・〇五）――狩場山（三・三五）――キャンプ地（四・二五）天気に恵まれ昨日に続きよく晴れている。東狩場山から大平山が実に立派に見える。狩場山とフモンナイ岳との分岐点のあたりは、気持のよい広がりをもっている。ここから大きなコブを乗越して、狩場への登りを一気に続ける。雪が多いために花や緑が少なくて淋しいが、その反面偃松こぎのアルバイト

からは解放される。狩場の山頂に立つと、えぞ山岳会の連中が南東尾根から登って来た。また瀬棚の方向の尾根に人影があり、西の前山からも二人の姿を認め、三年前の全く人影も見なかった時が、懐しく思い出される。狩場から前山に続く尾根は、痩せている上に両側が深く落ちているので、頂上にスキーをデポしてツボ足になった。通ってみるとそれ程ではなく、スキーを置いて来たことが悔まれた。二五〇メートル程降ってから緩やかな登りになり前山に着いた。その辺りは広々として岳樺が生え、雪洞が掘ってあった。オコツナイ岳への稜線の東側には巨大な雪庇が張り出し、踏みはずさないように注意して歩いた。最後の登りは岩が露出しており、なだらかな広がりをもつ他の峰に比べて、鋭い感じがする。オコツナイ岳の山頂にも立ち、これで小田西川に流れこむ深い谷々を取りまくフモンナイ岳、東狩場山、狩場山、前山、オコツナイ岳と外輪の山々をすべて登り、しかも天候に恵まれて、のどかな春の狩場を心から楽しんだことに感謝する。主峰の頂きから一気にキャンプ地まで滑り降りた。

五月四日　曇り後雨、キャンプ地（一二・四五）――賀老台地西端（一・一五）――台地北端（三・〇〇）――千走温泉（四・一五）天気は遂に崩れて雨となる。心おきなくテントを撤収して沢の入口へ降りてくると、登りに見た雪庇が崩れて大きな雪崩をひきおこしていた。雨に濡れながら静かな賀老台地を歩くのも、またいいものである。

五月五日　雨のち晴、千走温泉（七・一〇）―千走バス停（八・五〇）―寿都―岩内―札幌　連日の好天と昨日の雨で雪は大分減り、カタクリやフクベラ、ミズバショウの花々が咲き出していた。ゆっくり歩いていると、またトラックに拾われた。磯谷、歌棄を通り、雷電海岸から岩内の町へとバスは入っていった。（石崎貞子氏の報告）

最後に須築川からの登攀を述べてみよう。ここに目をつけたのは富士製鉄室蘭山岳部で、昭和三八年、三九年、四〇年と三回の記録が残されている。

昭和三八年には九月一日～三日まで、大佐々哲夫、安友征夫の両氏が須築川本流を遡行したが、標高三七〇メートルの屈曲点から雨のため退却した。この行で初めて須築川の概容が知られたが、この川は二股沢の手前から険悪となり、ゴルジュと深渕の連続であることが明らかとなった。最悪部は奥二股沢の合流点（滝となって注ぐ）付近である。

この経験を土台に翌三九年八月一五日～一八日、大佐々哲夫、安友征夫、東俊清、扇等、石川豊の五氏が再度この川に入った。一五日瀬棚へ最終で着きタクシーで美谷まで。一六日、雨時々曇、標高一二〇メートル、岩魚沢落合の少し上流でキャンプ。一七日、晴れたり曇ったり、昨日と変って減水したが、昨年と比べるとまだ水量も多く、二股沢合流点手前のゴルジュや奥二股沢落口付近も昨年のようには通過できず、大いに苦労した。これでは奥二股沢より奥の核心部の通過はむつかしいと考え、本流をすてて奥二股沢に入ることとした。奥二股沢

に入ってキャンプ。一八日、晴れたり曇ったり、奥二股沢はまあまあ歩き易く、幾つかの滝も捲いたりへつったりして越え、やがておだやかになった源流を伝い、水がきれてから三〇分も薮をこぐと、南稜にとび出した。丁度馬場川登山路と真駒内川登山路とのジャンクション。安友、扇、東が狩場を往復し真駒内川へ下る。須築川をつめて狩場山へ登った初めての記録であろう。

つづいて昭和四〇年八月下旬、同山岳部は本流遡行（大佐々哲夫、安友征夫、小林悟、神原正紀）及び岩魚沢遡行（石田茂、鈴木網雄、石川健一、吉江千知）の二隊をおくり、夫々に成功をおさめた。

八月二〇日、瀬棚から美谷までトラックをチャーターし、美谷の学校に泊る。

二一日、晴れたり曇ったり、須築への新道は殆んど出来上り、来年は須築まで車が入るかもしれぬ。須築川の水量は少ない。岩魚沢で本流遡行隊は岩魚沢遡行隊と別れる。二股沢手前の渕までは特に問題なく、その渕も過去二回泳いだのに、今年は胸までの渡渉ですむ。二股沢からはちょっとしたヘッつりもあるが、水面から五メートルとは離れない。スノー・ブロックがある。渕を泳ぎ、狭いゴルジュを進んで左に曲ると奥二股沢合流。土地の人が矢渕と呼んでいる幅二メートルもないゴルジュである。安友が空身で泳ぎ、出口の小滝は用意してきた鉤を滝上へ投げて乗越す。このゴルジュは暫らく泳ぎの連続。三八年に一番苦労した渕も、安友トップで鉤を使って通過。四時半、左岸オーバーハングした岩の下にキャンプ。

二二日、晴れたり曇ったり、キャンプ地から沢はすぐ左へ曲り、さらに右へ折れる。曲り角に雪渓。三八年の引返し点から予定の高捲ルートを偵察。支沢をつめて尾根に出ると、本流の上部がよく見えた。そこからやや戻り気味に急な小尾根を下って、本流の雪渓へ下りテントを張る。今日は本流沿いにすればたった一キロ強進んだだけである。

二三日、快晴、左岸を高捲きして本流に下ると、難場はなく、滝を三つ越えると川は開けて明るくなる。小滝の多い沢通しに進み、最後の滝は遠くからでは登れそうに見えなかったが、左の壁を快適に登って越えた。その上で本流を離れ左の支流に入る。その次の滝は垂直二〇メートル、神原がトップで左岸のルンゼを登る。次の滝との間でキャンプ。

二四日、四時半頃から雨で一日停滞。

二五日、曇後晴、夜中にテントは浸水したが、出発する頃は晴れ間も見えてきた。水がきれてから西稜稜線までは、そうひどい薮でもないが、鞍部からは猛烈な薮に悩まされた。頂上着一一時二五分、そこで岩魚沢隊の置手紙を見つけ、ホッとする。雨のため滑り易い南稜の道をかけ下りる。

なお岩魚沢隊は、二一日沢の上部で泊り、二二日は西尾根に近い支稜上に泊り、二三日西尾根の偃松に悩まされたが、午後二時過ぎ頂上を踏み、南稜を下って登山口へ七時二〇分に到着した。

（付記）

最後に、千走温泉主の長谷登氏から石崎君宛に報告された事項は、興味も多いので左に要約しておく。

①現在の登山者数　目下のところさ程多くない。千走方面からは夏道がなく、沢づたいに登るほかなく、ネマガリダケが深くて困難なため、賀老台地まで上って狩場山を眺めるか、賀老の滝を見物するのが精々である。従って山頂に至るのは冬期間が主である。また当地は積雪も多いので三月、四月、五月中旬頃迄が登山に一番理想的である。一年を通じ、ここへ来る登山者は七、八十人程度である。

②熊の害　当地方の熊は人間には殆んど害を与えない。五、六月には竹の子取り、夏季は魚釣り、秋にはナメコ取り（天然ナメコ）の人々がかなり沢山山奥へ入るが、今迄熊の害をうけたことは全くない。

③千走温泉のこと　千走川流域にあるので千走温泉というが、千走川温泉としたら更によいと私は考える。温泉の歴史は相当古く、明治時代に発見されて、私で五人目の経営者である。私は丸という人から買いとったが、その前には戸田という人が経営しており、当時は今の建物より大きく、道路が悪く通行に不便であったにも拘わらず、毎日数人の泊り客がきれなかった由である。現在の泊り客は魚釣り、登山客、遊山客が主である。

この地は道内でも春から秋にかけて気候がよく、おいしい米がよくとれて不作を知らない。また畑作もよく、スイカ、メロン等もよくとれる。今年（昭和四一年）温泉をボーリングする計画を進めている。湧出量を更に多くし、様々に利用してみたい。建物も多少大きくしたいが、山中の自然の温泉の姿を保存したい考えである。

千走川の魚はヤマベが一番有名、サクラマスは大きいので有名で一貫匁級はざら。アメマスも二尺位の大きさのは普通。その他アユ、イワナ、ウグイ等がとれる。

④賀老の滝のこと　この滝は大きい点では北海道一と言われている。実に見事なものである。位置は千走川の上流で、温泉から川伝いに約二里強である。春から秋にかけては、賀老の滝を見に来る人がかなり多い。島牧村でも近頃観光に力を入れ、滝に通じる道路をつけたりしている。

（一九六六年七月）

# 連嶺一千キロ

## ＝長野県境地帯一周踏査の記録＝

日本山岳会信濃支部

### 出　発

「県境を歩いてみよう」そんな声が、いつか、だれかの口にのぼった。それが出発だったように思う。無意味と論ずる者もあった。「馬鹿らしい」の一語で片付ける者も多かった。その通りだったかも知れない。海外登山のもつ栄光とは、およそ類縁のない、唐突な発想だったからだ。だが、この地道な故郷の山への憧れは、決してそれを無意味では終らせなかった。会員一人一人の中に育てられていた故郷を愛する心は、いつしか、この原初的山行の重みを、ずっしりととらえていた。故郷の山を知ることの重みであった。

長野県は広い。東に埼玉、群馬。西に岐阜、富山。南に山梨、静岡、愛知。北に新潟の八県に隣接する山の国だ。東西一七〇キロ。南北二一二キロ。面積一三五八二平方キロという。しかも、その七七％は鬱蒼とした森林原野だ。いわばジャングルの国だ。外周およそ一〇〇〇キロ、大町市をはじめとして四市十町二十九ケ村にまたがっている。南・北アルプスを中心にして、うち続く連嶺は、その数さえ定かでない。三千メートル峰十数座、二千メートル峰百数座、そこを分断する峠の数は五〇を下ることはないだろう。岩稜とジャングル、これが県境の山だ。偉大な自然の与件なのだ。漠然とした懼れと、未知の山野への憧れとが錯綜する。だが、渇きは潤さなくてはならないのだ。

一九六五年七月十一日。踏査行の出発の日だ。だが、乗鞍岳山頂の嵐はことのほか激しく、第一隊の出発は危ぶまれた。待機する時は長く、焦燥は隠せなかった。午前九時四〇分。衰えぬ風雨をついて、四名の隊員は出立した。壮途を送る六十余人の歓声は烈風に消され、登高する隊員の影は、朝日岳山腹に幻のように吸いこまれていた。〈以下はこの踏査の山行記である。〉

### 雨中、野麦へ下る

四〇キロの荷は執拗に肩に食いこむ。視界のきかない乗鞍の山稜を無言の行が続く。風速三〇メートル、気温九度、体感温度はマイナスを数える。熔岩の堆積からなる朝日岳をまわって、蚕玉岳のコルに出る。足はもたつき、這うように前進する。右手足下に権現の池もない。「山上瘴気を発し、頂を極むるものなし」と古書に云う。そんな暴風雨になぶられながら、ようやくにして剣ヶ峰山頂に立つ。大国主命を祭ると伝える権

現社を観賞する暇もなく南下する。視界一〇メートル、コースは勿論ない。三ノ四〇度の斜面を直降すると、足もとにコマクサがわずかに芽を出している。小さな蕾も見える。広く鍋のように円い高天ケ原の一角に違いない。視界は依然として狭い。

乗鞍の本峰からは、奥の院岳の東側をトラバースして黍生部落へ下る石仏道がある。また千町ケ原から金平を経て高山へ通ずるコース、そして野麦部落への道がある。しかし今は何も見えない。勘を頼りに野麦へのルートを辿る。這松の密集する中を、あえぎ下ること十数分。沢の水音を聞く。雨は依然として強くたたきつけていたが、風は弱まっている。這松の間を流れる水は連日の雨のため多く、コースは皆目見当もつかない。全身ぐしょ濡れ、骨まで水にしゃぶられてしまうのではないか。高天ケ原下方三〇〇メートル、高度二七八〇メートル、気温一〇度、時間は一二時を回っていた。とにかくコースを捜さなくてはならない。数分後、川沿いに荒廃したルートを発見する。風はやみ、視界はやや開けて来た。高天ケ原からおよそ八〇〇メートル、ルンゼを下ったこの辺は、這松と大きな火山弾の散在する中に残雪が濡れていた。

やがて川はルートとともに大きな雪渓に落ちて消える。幅二〇〇メートル、長さ一・五キロになんなんとする大雪渓を観る。雪渓左岸を下る途中、高度二三〇〇メートルの地点に、鉄分を含むおびただしい冷泉が岩層から吹き出していた。雪渓末端にクレバスを見る。斜度二〇、雪渓の終る地点に古く朽ちた道標が立っていた。高度二二〇〇メートル、樹相が岳樺から針葉樹に変わる頃、嶽谷滝の水音がはげしく聞える。左側八〇〇メートルは県境の尾根であろう。一八五〇メートル、古い牧場の柵を発見する。赤松、ヒメ松、唐松、五葉松、白樺などにまじって、数本の這松を見る。広い牧場に改良和牛が七、八〇頭群をなしている。ワラビの群落に牛、牛はワラビを食べない。山百合の咲くワラビの山腹を野麦部落へと下る。雨は絶え間なく降り続いた。

## 忘れられた峠の村、野麦

明けて十二日。雨は一向に衰えない。部落を流れる益田川に沿って、峠へ登る。野麦峠一六七二メートル。かつて栄えた野麦街道も今はさびれ、平竹の群生が道をさえぎる。峠付近には一メートルを越える熊笹が密生している。時々シロバナノヘビイチゴのはいずっているのが可憐である。人々の往還は絶えて、キャンパーの名残りだけがあちこちに散らばっている。かつてここが加賀、越中からの捷路として、相当量の荷駄や人々が往きかったなどと、今時の誰が想像できよう。飛騨鰤（飛騨経由の越中鰤）の名も、すでに往古の名残りをとどめるにすぎない。峠は乗鞍から連なった広い尾根であり、あちこちに小川が流れて美しい。信州側、奈川村川浦からは林道が開発されている。野麦側の開発と呼応して、信飛間を観光バスが走るのも程遠からぬ未来のことか。

県境は峠から鎌ケ峰を経て御岳山へ向っている。豪雨の熊笹をわける無暴を避けて、再び野麦へ下る。戸数二六戸、山峡に

ねむる隔離された部落である。ヒエ、ソバ、大豆、馬鈴薯を主に、最近野生ワサビの栽培も盛んになったという。全戸にテレビアンテナが立つ近代化された秘境の現況は、旅人の心を妙にこそばゆいものにする。野麦から益田川に沿って下ること五キロ、阿多野郷を経て、日和田部落へ出る。戸数約一八〇戸、江戸より明治にかけては、馬の育成が盛んに行われ、馬地主、馬小作の制度もわずかに残されていると聞く。往時一八〇〇頭の親馬を所有したという当地随一の豪農、原慶順の馬小舎と屋敷跡は、今でも日和田中学校横に残されている。

## 御岳山への登路を迷う

翌十三日。雨は小止みなく降り続く。日和田からの御岳山道は、案内人が必要だと土地の人々は云う。幕岩川を遡ると、数戸の開拓農家のある留野原牧場地帯に出る。十数年の苦闘も実らず、家には家具らしいものさえない。御岳山麓開拓民共通の不振は、ここも例外ではない。留野原は大森林地帯の名残りを古い切株にとどめている。雨水の流れに道はわからなかったが、桧や椹の美しい千間樽国有林を右へ登る。雨は一段と激しく、斜面全体が水壁となって登行はままならない。牛糞が散在する森林帯を過ぎて、標高一八〇〇メートル、ルートは失われている。胸までの笹やぶを漕ぎ、ようやくにして県境標示板をさがす。山腹を這う営林署道をめぐって、ものすごい水量の沢を渡り、沢沿いに直登する。危険この上ない登行三〇分。山道は発見したが、倒木にさえぎられて侭ならない。案内人の必要を痛感する。長い長い這松の緑が続く。一時として乾く間のない荷は重く、感覚は麻痺して疲労は一段と濃い。継子岳（二八五三メートル）山頂には、天文台のドームそっくりの円型コンクリートの祠がある。疲れと寒さのため、しばらくは我を忘れて横たわる。雷鳥のヒナがそんな一行を慰めてくれた。御岳山頂剣ケ峰まで四キロ、道は平坦で楽しかったが、風雨は依然として強く、山頂を行く一行をなぶり続けた。七月十三日、御岳山には一人の登山者もいなかった。雨量は三〇〇ミリを越えた。大糸線、梓橋鉄橋流失のニュースを山小屋で聞いた。

## 木曽原始深林を行く

岐阜県恵那郡付知町倉屋から車で三〇分、付知川に沿って遡ると付知峡に出る。井出小路谷と高樽谷とが合流する地点である。夏はハイカーやキャンパーでにぎわう。近くには小さな温泉が湧き、大小さまざまな滝がいたる所に落ちる。辺りは一面の桧の大木である。付知峡をめぐって林道はすばらしい。林鉄撤去のあとを車道にした道は「白巣峠」入口まで続いている。峠への荷揚げを終える。峠周辺には背丈よりはるかに高い熊笹が密集し、樹木はいたるところにある。このジャングルを、明日はかきわけて来なくてはならない。無事この地に辿り着くことを祈る。夕闇に星が二つ、きらりと光った。

八月十五日。快晴、益田郡御厩野を経て鞍掛峠へ急ぐ。三浦ダムまではマイクロバスが自由に往来する。木曽からの人跡がまばらなのに較べ、驚くべき開発の足跡である。海抜一四〇八

メートル、鞍掛峠に着く。山峡を縫って下呂へ通ずる路が、眼下にかすんでいる。美しい眺めである。背面桧の大木の間に御岳山が手にとるように見える。熊笹と大桧に被われた峠の西面白草山には広い牧場がある。

軽い荷を肩に、熊笹の中の人となる。両手でかきわけて泳ぐことしばらくにして三国山（一六一〇メートル）山頂に立つ。小さな鳥居と祠がわりの石がたった一つだけある。二メートル余の熊笹と一面の風倒木で、三角点は見あたらない「登山路あり」と地図には記されているが、皆目見当もつかない。倒木と熊笹の中を小秀山へといそぐ。どこに誰がいるのか、ただ熊笹の動きだけがせわしい。熊はいないという。途中草原帯を通る。起伏ののんびりした尾根である。御岳山がすばらしい。分度器で位置を確認する。思った程歩いていない。この頃、一面の這松帯に入る。高度一七八〇メートル。こんな場所に這松があるはずがない。北アの南限は御岳山のはずである。しかし確かに這松に違いない。御岳山南限説は書き変えなくてはなるまい。

再びもの凄い倒木地帯に出る。どうにもならない歩行が続く。軽いはずの荷が妙に重い。一〇〇メートルを一時間で歩く。歩くなどというものではない。大木の下にもぐり、木から木へ飛び移り、密集する熊笹をわける。さながら忍者の苦しみである。とにかく小秀山に辿り着く。岐阜側の大木に較べて長野側に大樹は少ない。時々古杭を見る。区画班界の赤地に白のマークである。この時急な夕立に逢う。ドシャ降りを避ける何物もない。三国山から小秀山まで五キロ、なんと八時間の行程である。山頂には大きな石がごろごろして、登山者の踏跡をしばしば見る。一時も早く白巣峠へ行かなくてはならないのだが、たちこめたガスにルートも定かでない。その上また一面の倒木の山だ。もうこりごりだ。高度一六九〇メートル地点から沢に沿って下る。再び雨は激しい。目的地をあきらめ、大きな岩の下でビバークを決意する。

八月十六日。抜けるような空だ。昨夕下った沢に沿って尾根に出る。一六二九メートルの三角点はすぐに発見された。白巣峠は眼下である。かすかなルートをたどって下ると小さな古い道標がある。この辺も大変な倒木が密集している。しかも整理作業中と見えて、各所にたち切られた枝が山をなしてルートを消している。ビバーク地点より三時間、ようやく白巣峠（一四二五メートル）に着く。

白巣峠を木曽へ下ると、王滝村滝越、三浦太夫（和田義盛と巴御前の子）一族が隠れ住んだと伝えられる部落である。ちなみに木曽の代官山村氏が残した『木曽巡行記』をひもどいてみよう。「民屋十四、五軒あり、人物は男女わかりがたく、ただ髪の長を以て女とす。歯を染めず、まゆをそらず、農業、山仕事は女の業にて、男はそま、木びきを致し、多くは他所へ出る。そのため常に女ばかりにて、言語も通ぜざること多く、ソバ、ヒエを食し、冬春は雪深く一丈余もあり……」と言う。弘化二年（一八四五）滝越の記録である。しかし、昭和十一年三浦ダムの築堤が完了して以来、林鉄利用の住民の生活は大幅に

変様している。

白巣峠から南下する尾根への登りは、相当な急勾配である。加えて、新しい荷の重みが苦しい登高を強要する。だが尾根すじは平坦な登りで、倒木もない。予想外の安易行である。予定地一六九六・五メートルの三角点をすぎ、平坦な熊笹の原野に幕営する。

八月十七日。快晴、水のないコースも残り少ない。平凡な上り下りで小さな尾根がいく筋も曲りくねっている。再び熊笹の密林と倒木、まったく始末が悪い。一歩踏みこんだが最後、行くことも引くこともできない。なんとか樵道をさがす他はない。天気はいいというのに全身ずぶ濡れ。喉は乾くにまかせている。水が水筒の底をつく頃、へとへとになりながら、真ろ峠の頂上を踏む。ここから南へ入った一隊のことが気にかかる、だがあとは木曽へ下るだけ。とにかく水が欲しい。

## 恵那山の周辺

島崎藤村の出生地馬篭。そして県境問題の極端なこじれが、いまだに解決をみない山口村を恵那山へと向う。山口村の氏神、諏訪社にある樹齢四五〇年の老杉も、国道十九号線拡張工事のため材木の運命にあると聞く。文明とは、自然の残している天然の歴史をすべて無にしてしまうものか。同じ長野県とはいえ、県南のこの地は濃美の平野に近い、寒暖の境界地帯である。二三〇種を数える寒暖植物の存在も故なしとしない。積雪は時に一五センチ、霜は三月中旬で終る。お茶は自家産、いちじくも多い。ゆずは天然で産するという。

新茶屋から十曲峠を下り、落合を経て湯舟沢を遡る。中切、霧ケ原を過ぎ、バス終点、強清水から神坂峠に向う。古くから開けた東山道の最高所、神坂峠（一五九五メートル）に、今は峠の茶屋もなく、夏草に埋もれた淋しい峠である。〝ちはやぶる神の御坂に幣まつり、いはふ命は母父（おもちち）がため〟神人部忍男（かんとべのおしお）の歌である。だがこの失われた東山道も、再び古代の脚光を復元しつつある。歴史と伝説の名所、園原の箒木は三六年の台風で倒れ、古びたお堂と石碑しか残ってはいないが、ここが中央道恵那トンネル（八五六〇メートル）の入り口として、機械文明の塵を浴びることは、もう時間の問題である。峠はさびれていても、県立公園富士見台高原を訪れる人は年に二万を越えるという。

神坂峠から鳥越峠への尾根道はない。阿智村戸沢部落へぬけるこの峠も、今は完全に忘れられて千鳥笹の繁るにまかせている。笹露に全身を濡らしながら、名のみの縦走路を恵那山へと向う。岐阜側に地図未記載の大崩落を発見する。中央アルプス最南端の、歴史と信仰の山恵那山も、伊勢湾台風の爪あとをそのままに残している。釜沢ルート、旧川上ルートは廃道となり、現在の黒井沢ルートも決して整備されてはいない。一七八〇メートルの独標、信州側に直径三〇メートル程の池を発見する。地図には記されず、土地の人々は「野熊の池」と呼んでいる。

翌日、晴れ、暑気著しい。信州平谷村五軒小屋部落から鯉子

山への逆走計画を立て、中津川から恵那、上矢作とめぐって平谷村へ入る。合川に沿って岐阜県側の山道を登る。木地小屋部落は二軒。四〇年程以前までは木地師がいたと伝えているが、今はいない。釣橋が県境をつないでいる。フシの木二軒。モモの木三軒。岐阜側の高台に苗圃が見える。車道はここで絶える。合川を左岸へ渡って前進。一一五〇メートル地点に古い木馬道の跡を発見して進む。笹はないがつる草が繁茂して昼なお暗い。時々鉈で切って進む。鯉子沢に出る。熊よけの火を燃して眠る。

再び雨中の踏査行が続く。昼を過ぎて豪雨。鯉子山（一五九〇メートル）踏破を断念して、一三〇〇メートル地点から退却する。県境は五軒小屋から達原まで、合川に沿って下り、南へ尾根伝いに根羽村へ向っている。後続隊の成功を祈るも、雨はますます激しくしぶく。

## 最南の県境高原

長野県南端、根羽村、北は上村川によって岐阜県上矢作町と接し、東南に茶臼山（一四一五メートル）、丸山（一一六〇メートル）、折元峠をもって愛知県北設楽郡につながる。丘阜起伏して平坦地はない。古来三州街道の要衝として、数多い遺跡を残す古い宿場である。「こちらなごやみち」「こちらぜんこうじみち」の古い道しるべにも、かつての繁栄の面影をしのぶことができる。

五軒小屋から達原を経て池の平へつき、三国峠（一一六一メートル）へむかう。流れる水は非常に多い。雨天のためばかりでなく、岩層の浅さが地下水を作らないのだ。山頂近くまで水は多い。亀甲石と呼ばれる奇岩をみる。降路、小川川沿いの横畑部落に、天正元年（一五七三）病没した武田信玄の塚を建見て、月ケ瀬に下る。樹齢一五〇〇年、周囲一二・八メートル、高さ四九メートルという大杉を見る。

雨はいつまで続くのか。今日もまた雨中の踏査である。一〇〇〇メートルに満たない袖路峠付近辺はともかく、萱場山（一一三一メートル）を左に見て登る県境へのルートは見通しもきかぬ。やむなく桧原川に沿って大又入に向うことにする。大又入から一二二九・二メートルピーク付近の偵察に向う。ピーク近くに名古屋営林局の境界標識を確認する。県境ルートを国界橋から、丸山牧場、折元峠へと向う。愛知県北設楽山岳県立公園に接するこの地域は、牧場、キャンプ地としての適地であるが、愛知県に較べ長野県の開発はいまだしの感が深い。中心地茶臼山（一四一五メートル）には二等三角点がある。この地方の最高峰であり、展望はすばらしいと聞くが、今は何も見えない。中京圏の軽井沢としての観光宣伝に関連があるのか、両県立公園地域における県境問題のこじれは、著しいものがあるという。踏査も終りに近づいて、天候は回復に向う。ブナ峰（一一九六メートル）を経て新野峠へ下る。後続隊は、もう新野で待ち受けているだろう。

## 民俗学の宝庫、南端の秘境

南信濃高原、阿南町新野、いうまでもなく、信州最南端に開らける美しい盆地の村である。千石平を中心にした山間のかくれ里、そこには古い時代のさまざまな篤信の行事が残されている。たとえば、仏教渡来以前の精霊まつりの様式を残すという盆踊り歌。古代舞曲と質朴な性の踊りが繰り返される雪祭り。生きながらミイラとなって安座されているという「行人様」等々。

だが、今は夏季学生村発祥の地として、九〇余軒の民家が民宿を担当して、七月一日から九月三〇日まで、延一二、〇〇〇余の学生を収容している。関氏支配の古書『関伝反故』等の古代資料に未練を残しながら、遠州街道を南へ三〇分、新野峠に着く。峠付近一帯に分布する第三紀の地層からは、すでに三七種に及ぶ二枚貝や、巻貝、動物類の化石が発見されており、県指定の天然記念物「マガリバナウツギ」等のウツギの珍種が一帯に分布している。

新野峠（一〇六〇メートル）から一時間、林道を辿ると大河内部落がある。大河内から一時間の登高で、県境稜線に出る。愛知県側の私有地に対して、長野県側の国有林の比較が著しい。明瞭な境界線をしばらく辿る。鍋割、本山の部落は廃絶して、くずれ落ちた廃屋があわれを止めている。県境稜線を左にまいて、三ツ沢部落へ急ぐ。標高一一〇〇メートル、劣悪の生活条件に耐える四軒の部落である。一家の構成例を紹介しよう。家族六人——祖父、夫婦、子供三——田一反五畝、牛一匹、鶏四羽、犬一匹、二間、畳なし、家具なし、ランプ、医療は年二回の富山の売薬に依存している。三ツ沢部落から地蔵峠を過ぎる。地蔵峠は新野、坂部をつなぐ古代の交易路である。

地蔵峠から一挙に高度を落す先に、坂部部落がある。坂部は広村二五、太田八、田代五、柿の平四、日向坂、先途三の小部落によって構成される。虫川の急流がけずるような断崖をわずかに切り込み、石垣を幾重にも積み重ねた、山城のような家屋が点在する。想像を絶する人間生活の実状である。中心地元村は、天竜の濁流を直下に見下す領家変成岩の角礫岩に覆われた、断崖上の歴史と伝説に包まれた小部落である。江戸時代には「左閑部」とも書き「さかんべ」と呼んでいたが、現在「さかべ」と呼ぶ人が多い。無形文化財「坂部の冬祭り」は一月四日の夜行われる、内外に知れわたった奇祭である。『熊谷家伝記』にまつわる天竜峡谷一帯の開発史は、新野、遠山とともに、この地方の興味ある民俗史研究の対象となっている。「坂部」については『熊谷家伝記』を中心にして、平凡社刊『日本残酷物語』第一部に掲載、紹介されている。

海抜三二〇メートル、天竜峡谷の底地に、静岡県水窪町奥領家にかかる県境橋、高瀬橋がある。飯田線小和田駅に近い橋畔を左折して、静岡県側を登高すること一時間にして引田部落につく。文政年間に入植したと伝える宮浦、鈴木二氏のみの部落である。それより五〇分、宇連部落を右に見て上平部落につく。石積みのジグザグな急坂は決して容易でない。これら小部落を総称して、鶯巣宇連という。桑畑の点在する段々畑は驚異的な人間の生のいとなみを感じさせる。中学生は小和田駅に下

り、平岡の中学校へ通うという。

上平部落にて人家は絶える。蝮と熊の恐怖を肌に感じながら、観音山（一四一八メートル）に向う。人跡絶えてない山頂へ、一挙に一〇〇〇メートルの高度をあげる。そよとの微風もない炎暑（三〇度）の登高である。遠くに鳴く鹿の呼び声に慰められながら、山頂に立つ。江戸時代末頃までは、秋葉街道に通ずる尾根道があったと伝えられているが、今はその影もない。山頂から北東へ稜線を辿る。造林整備された静岡県側と、未開のジャングルの長野県側と、県境稜線は判然としている。やがてコブの多いやせ尾根の登降に悩む。風もなく、水もない、炎暑、太陽がうらめしい。熊伏山（一六五三メートル）の標柱を見る。熊の爪あとも生々しいこの山中に、わずかな人間の踏み跡をはじめてたどる。往時の秋葉街道は青崩峠の両面に面影だけを残して、ひっそりと静まりかえっている。バス路線は長野、静岡ともに、峠からは遠い。

## 南ア南端の苦闘

七月十四日。青崩峠から県境稜線に沿って三〇分。人獣の踏みあとは絶える。ヒョー越の手前二〇分を除いて六時間。凄絶なジャングルとの死闘である。時々樹上に登りコースを確認する。天気は絶好だが疲労はいちじるしい。熊の足跡のみ多く、一日中笛を離すことはできない。全く心細い。水皆無。

七月十五日。ヒョー越から、白倉、鶏冠まで七貫の荷を背負って、四メートルに及ぶ熊笹をわける。四キロの行程を七時間。未知のジャングルにあっては、バランスもなにもあったものではない。疲労極度。

七月十六日。鶏冠山からの尾根に出るために六時間を費す。道という概念はもう忘れてしまった。鶏冠山（二二四八メートル）手前に、うらめしい重荷を置いてテントを張る。空身で白倉山（一八五二メートル）に向うが、熊笹のジャングルにはばまれて方途を失う。夕刻テントに戻り、水のない食事をとる。明日もまた道なき道。うんざりする。熊笹との心中行これで三日。心身ともに困憊する。歩くことだけしか今は頭にない。道のある道を。時々蝮に出合う。他事を考えて歩く余裕はさらにない。七貫の荷をかついで歩くことより、重く苦しくとも道を歩きたい。鎌や鉈を頼りにしてしか歩けない今は、まるで山賤だ。飲み水は勿論、食事も倹約。塩分も余りとれない。ここらで休養日をとりたいが、天候が余りよくない。

七月十七日。この日鶏冠から加加森山（二四一九メートル）へ向って十七時間余りを苦闘する。サブザックのみでも熊笹の中はつらい。今日ある限りの全力をふりしぼって夜半まで歩く。この分だと駄目かも知れない。テントに帰っても何もやる気なし。就寝二時、疲れきって眠れず。

七月十八日。昨夜からの雨止まず、明日も明後日も雨らしい。身体も完全にまいっている。このまま頑張っても、コースをつなぐのは困難と判断。下山を決める。バス停まで四時間を雨の中。時々ものすごい勢いで降る。足がおかしい。計画通り完走出来なかったせいか、余計足が重い。道はなし、水はな

し。このコースを完走するには冬期が有利だと思う。

信濃路の最南端、下伊那郡南信濃村、南ア連峰の根っこにある山峡の村である。遠山の霜月祭りに象徴される、暗い運命の村の九〇パーセントは森林原野、いわゆる山である。わずかな畑が急傾斜面にある。昭和四〇年九月十七日、台風二四号はこの村の機能を完全に麻痺させてしまった。踏査隊が苦難のジャングルをかきわけて、丁度二ケ月後のことである。雨量三七五ミリ、村の中心を流れる遠山川は氾濫して、被害総額は七億六千万に達した。村予算五ケ年分にあたるという。

「ついにおそれた台風が、ぼくの村をおそったのだ。戸がガタガタとゆれる。トタンもぶきみな音で……。そんな台風は学校をのみ、家をのみ、そしてぼくの家の田をのみこんだ。台風ばかりが悪いのではない。なぜふせげないのか、被害を出さないようにできないのか、人が安心して住めるように、自然を征服できないのか。……」遠山中学校、一生徒の悲憤の記録である。

## 残された美しい山、南アルプス

南アルプス踏査隊は三班に分れて入山した。

八月十四日。下伊那郡大鹿村に入る。昭和三六年六月、一時間に三〇ミリを越えた梅雨前線豪雨の爪あとは、今もなまなましい傷痕を村のあちこちに残している。総額五〇億にのぼる大被害だった。村を南北に走る中央構造線によって出来た断層の各所には、今も黄色いヘルメットとトラック、ブルトーザーがひしめいている。荒れはてた鹿塩の部落の片すみに、コカコーラの看板が白々しい。

塩川土場から塩川に沿って登り、尾根越しに三伏峠へ出る。ハクサンフウロウ、マルバダケグキ等の亜高山植物が咲き乱れ、塩見岳の大きな影が夕日に映える。水は豊富だが、人間の排泄物の異臭はひどい。

八月十五日。快晴。峠にて北上班と別れ、南下コースを辿る。峠の小屋からは崩壊した稜線をたどるのだが、沢からのルートを烏帽子岳の肩へ一気に登る。例年ならば色あせている植物も、今年はまだ盛りを過ぎていない。冷夏の影響は三〇〇〇メートルの高地とて変わりがない。烏帽子岳から小河内岳への砂礫帯、大日影山、板屋岳、高山裏にかけては道を埋めつくす高山植物の宝庫である。高山裏キャンプ地の水場は小西俣源流へ約七分下った所にある。大鹿村では近年中に山小屋設立の予定と聞く。また高山（二二九二・六メートル）を経て、小渋の湯にいたるルートも開発の予定だという。

小西俣の森林帯をトラバースして、荒川岳北面のV字谷の底部に達し、這松とガラ場を登ると県境稜線に出る。前荒川岳（三〇六〇メートル）山頂には旧御料局の三角点があるが、信州側の大崩落のため倒れかかっている。それは飯田線の車窓からも見ることができる。ここから中荒川岳までは十分、三〇八三メートルの三等三角点がある。前荒川岳南面のカール上端を通って一挙に下ると、奥西河内の源流上部に、荒川小屋がひっそりと建っている。先頃、雪崩事故のあった地点は、ラヴィーネ

ン・ツークとなっているため、冬期は荒川小屋から県境稜線に出て、尾根通しのルートをとるのが常識であるという。塩見岳以南はシーズン最盛期にあっても登山者は少ない。

八月十六日。快晴に明けた荒川小屋は、美しいお花畑の中にあった。悪沢、荒川、小赤石岳の真中である。大聖寺平への横手をゆっくりと歩く。大聖寺平は稜線上の最低鞍部を云うのであるが、これより十分、赤石側に登った辺がさらに広い台地となっている。ダマシの平という。この台地（二八〇〇メートル）には、直径十メートル、高さ三メートルのオワン状の石を積みあげ、その上に高さ一、二メートルのケルンがある。南北朝抗争にまつわる、良月親王の伝説が伝える石塚であろうか。トウヤクリンドウの美しく咲き乱れる、三〇〇〇メートルのゆるやかな稜線を経て、赤石岳（三一二〇・一メートル）山頂に立つ。山頂の一等三角点の上には、二・五メートルに及ぶ大櫓がくんであり、約四メートルの大方向指示板がある。東方のピークには小社が二つ、周囲にはおよそ百体の石塔が並んでいる。頂上はゆったりと広く、南アの盟主の風格を誇っている。

カールや二重山稜地形の多い南の肩を急降下して、這松の中のゆるやかな登降を繰り返すと、やがて百間平の一角に出る。一面の這松の樹海の中に、アオノツガザクラ、シャクナゲ、コケモモ、ウサギギク、ミヤマダイコン草が美しい。この広い平を横切って急下降すると、大沢岳とのコルへ着く。稜線通しの道は廃道となっている。稜線から五分下ると水の豊富な百間洞キャンプ地である。キャンプサイトは花の中にある。午後五時、仙丈岳（三〇三二・七メートル）にいる北上隊と交信する。夕方から降り出した雨は、夜になって止む。

八月十七日。大沢岳、中盛丸山の急斜面に朝日があたる頃、大沢岳北のピークからキャンプ地に向って真直に下りている尾根を直登する。急勾配、石はむやみに動く。赤石岳から真西に向っていた稜線が、大沢岳北のピークで、再び南北の稜線となっている。極端な荒れ道を大沢岳（二八一九・四メートル）に向う。一般ルートは中盛丸山を経なくてはいけない。大沢岳頂上は南北に細長い岩稜からなっている。荒川、赤石、聖の諸峰が、朝靄の中に黒々と静かだった。

ここで、遠く仙丈、八ケ岳にいる北上パーティと最後の交信をする。八ケ岳パーティは編笠岳にいた。それぞれ三〇キロ、六〇キロの遠距離中継に成功したのである。再び縦走を続けることにする。中兎岳をトラバースして兎岳（二七九九・三メートル）への急斜面を登る。頂上は標柱のみ、三等三角点は西方約一五〇メートルの地点にあった。聖岳（三〇一一メートル）は霧につつまれ、たった一輪のタカネイバラが露に濡れて可憐だった。赤石の名がそこから生まれた、ラジオラリヤ板岩が見事な赤肌を露出している。聖岳への道は崩落する信州側を避けて、静岡県を大きく巻いている。旧御料局の四等三角点と大方向指示板のある聖岳山頂をあとに、奥聖岳（二九七八・五メートル）へ向う。二重山稜をなす北稜の日陰に、珍種チョウノスケ草の群落を発見する。霧雨の中をザラザラの砂尾根を踏んで、急角度に高度を下げ、聖平（二〇三八メートル）に出る。今縦走コー

ス中最低部の稜線である。枯木と倒木の中に大きな二棟の小屋が、霧にまかれていた。井川山岳会の管理である。

八月十八日。上河内岳の登りは森林帯の中からはじまる。ツガの林の中に亜高山植物が美しい。背後に大きく聖岳がある。茶臼、易老、光の峰々が間近にせまる。上河内岳（二八〇二・九メートル）北西のカールにはラジオラリヤ板岩が露出している。坦々とした下りをたどれば、やがてダケカンバの中の美しいお花畑である。縦走路はその中を惜し気もなく続いている。花は色あざやかに足もとを埋める。典型的な南アの美観がこの中にあるように思う。やがて道は広い二重山稜を過ぎる。大正十二年三月、内務大臣指定、雷鳥天然記念物の標柱を見る。やがて見事な亀甲状砂礫を見る。直径五～一五センチの岩石が、高さ三〇センチ、幅一メートルに堆積した上に赤土が盛られ、植物が生える。わずかな間隔をおいて数十個の現象を観察する。土壌の凍結と融解の繰り返しによって出来るという。トウヤクリンドウの群生する道を楽しむ。二五五四メートルのピークを巻いて稜線に出ると、間もなく茶臼小屋へ着く。急斜面に作られた丸太作りの素朴な小屋である。水は豊かに流れ、富士山が目前に大きい。

八月十九日。快晴、上河内岳は背後にあって三角状に高い。這松とコメツガの混生するゆったりとした登路を経て、せまい岩稜の茶臼岳（二六〇〇メートル）頂上に立つ。仁田池はつい目の先である。池は二重山稜の南面にあるが、水は赤く濁っている。仁田小屋はトタン張りの質朴な小屋である。無人の気象観測所がある。仁田岳（二五一三・八メートル）は這松と砂礫の中にある三等三角点の山である。光、信濃俣（這松の南限）、大無間、小無間と南ア最南端の山々が、どっしりと控えている。山はどこまでいっても深い。這松とコメツガの混生した稜線が続いている。倒木は多いが、易老岳（二三五九メートル）はツガとダケカンバの中に静かに眠っている。光岳への道は判然としているが、辿る人は少ない。

南アルプス南部の美しさは、まだ人間に害されてはいない。それだけになお、この美しさをいつまでも残したいと思う。

## 秩父の山

八ケ岳連峯をバックに、一段とすばらしい印象を残してくれる「美しの森」を下っていった、北沢峠からの一隊のあとをついで、八月十二日、秩父ルートの踏査につく。南牧村平沢部落、電話も清里、勿論山梨県を経なくては入れない。信州側には飯盛山（一六五八メートル）が見えるだけだ。遠くに南アルプスの駒、仙丈、北岳が霞んでいる。隔絶の土地である。甲州に耕地を持ち、税金も甲州へ納める人もあると聞く。飯盛山から横尾山（一八一八メートル）へは豊かな草原の尾根通しである。飯盛山の混雑に較べ、横尾山への稜線は訪ずれる人も少ない。暮色の信州峠に旅情を嚙む。甲信唯一の交易の峠である。西に八ケ岳、東に金峰、国師、甲武信の秩父連山が待っている。南沢に下って泊る。

十三日。南沢越しで出た尾根伝いに、カシワとナラの樹林帯

を漕ぎ続けて、ようやく林班標識を確認する。標高一七五〇メートル地点にて、シャクナゲの群生を見る。倒木とシャクナゲの群生に手をやく。二〇〇〇メートルを越えて苔の上を歩き、ようやく小川山（二四一八メートル）に着く。

十四日。小川山―八丁平―大日岩―金峰山―朝日岳―大弛小屋を快調に歩く。明けて十五日。朝からの霧は一日中晴れなかった。樹林帯は朝露に濡れて登山者は少ない。国師岳（二五九一・八メートル）から甲武信岳（二四六〇メートル）への稜線は、甲斐側に深く切れ落ちて、笛吹川の峡谷から吹きあげる霧はつめたかった。奥秩父栃本より信州梓山へ二四キロ、観音五体の道標が四キロごとに置かれている。十文字峠は原生林の中にあって昼なお暗い。倒木とブッシュに困惑しながら、武信国境を北上すると、野菜畑の段丘が眼下にあった。

## 三国境いの峠と山

三国山の南面五〇〇メートルの地点に、新三国峠が開通している。その名の示す通り、埼玉・群馬・長野の分岐点であり、荒川、利根川、千曲川の源流域である。三国山の西に古い三国峠が、ひっそりと往古の面影をとどめている。標識もなく踏み跡もない県境稜線を、彼我の樹相の違いだけを頼りに北上する。群馬県は雑木の原生林、川上村は唐松の林である。やがてスズ竹の密生地帯に入る。背丈を没する竹叢の歩行はつらい。「みすず刈る信濃」などという古雅な風情はどこにもない。ようやくにして南相木村地藤に入る。植林は整然としてあるが、下草はすごい。一面の野バラが肌をさいなむ。日陰も見当らず、水もない。二キロに足らずを三時間の行程といっても、決して不思議ではない。一七〇五メートル峠は土地の人も名前を知らない。ザルやビクが生活必需品であった当時、「スズ竹取り」が歩いた道である。今は廃道に近い。足下の谷に鐘乳洞がある。入口はどれも小さく、中の様子は皆目わからない。造林小屋に憩う。

小屋下の貯木場から、三川の分校へ通う子供達と別れて、栗尾峠を越える。標高が低いのと台風の影響からか、妙にむし暑い。御座（おぐら）山（二一一二メートル）山頂には、避難小屋と気象庁の無人雨量計が建てある。曇天のため眺望はきかぬ。八月二一日夜十時、台風十七号が頭上にいることを知る。台風は足踏み状態であった。再度の踏査を決意するまでには時間がかかる。雨中、三寸木部落へと下る。犬がけたたましく吠えかかって来た。

小海線羽黒下駅から旧大日向村（佐久市）を経て十七キロの峠道が武州街道である。栂峠から十石峠を経て、更に続く道は開発の途次とおぼしく、伐採、植林の最中であった。小さなコブ尾根の登降は相変らず続いていたが、スズ竹や野バラの密生はなく、優しい熊笹がひっそりと群れている。峠の頂上にある地蔵の背には、文化十三年子年と刻まれている。振りかえると富士、秩父の山々、八ケ岳から北アルプスの峰々が遠くに霞み、荒船、浅間、高峰と続く県境の山々が行方をふさいでいる。県道秩父佐久線の通う十石峠から、北、大上、矢沢の峠は

今は廃れて、余地峠だけが材木運搬の道として、新しく蘇っていた。

## 上信の峠を越えて

余地峠からの群馬側は、鋭い傾斜の雑木原生林である。所々に林班標識は建っているが、県境と同一かどうかを迷いながらブッシュを分ける。一二六五メートル独標から熊倉川上流への北進コースを止め、高崎営林署の標識を頼りに、落差七〇メートルに及ぶ象の滝へ下る。こんにゃく畑の散在する熊倉部落は、初秋蚕の片付けに忙しい。馬坂川は幅七メートル。県境を流れるこの川をはさんで、十八戸は長野県、八戸は群馬県へと分断されている旧田口村馬坂部落を尋ねる。地形的には当然上州領であるべきこの部落が、なぜ信州領なのかを土地の人々も知らない。伝説はあるが、郷土史家にも決定論はないという。平均斜度二五度、上州式養蚕農家構造の家屋が多い。全戸に自家用車が揃い、臼田町までは一時間の行程とのことである。辺境地の貧困はこの部落にはない。広河原部落も川沿いに細長い。大小十二の弁天の洞窟を見る。成因は不明とのことであった。部落を離れて、田口峠を荒船山へと辿る。荒れはてた桑畑を傍見してつづら折りの坂を越えると、荒船不動が闇の中にあった。

荒船山（一四二三メートル）の展望はすばらしい。四囲の高峰はもとより、内山峠、物見平、神津牧場が一望のもとにある。眼下の大岩壁は一挙に一五〇メートルの切れこみを見せている。内山峠を通る国道二五四号線を経て、樅の植林地帯を北へ進むと物見平である。神津、内山、志賀と三牧場の牧柵に沿って、草原の散策が終ると香坂峠につく。楢、楓、栗、柏の森林を抜けると鉄骨の避難小屋のある矢川峠である。一名吹雪ケ原と呼ばれる、なだらかなすすきの草原は美しい。八風山（一三一五メートル）から樅、しらびの樹林をわけて進むと、次第に唐松が多くなって来る。軽井沢レイクニュータウンという別荘地をぬけて、日暮山の分岐点を過ぎる頃から赤松が多い。和美峠の南、一一四〇メートル峰に立つ。開発された和美、入山の峠をあとに、矢ケ崎山（一一八四メートル）へ向う。極端なばらやつる草の繁茂する全く切り開きのないルートだ。なんとかガレ場に出てほっとする。このコース、フィナーレの難場だった。二等三角点のある山頂はごつごつした石の峰で、測量の櫓が組まれ、吹き流しがなびいている。眼下に国道十八号線が蛇行し、浅間山も近い。碓氷峠は指呼の間にあった。

## 古火山のあとを辿って

車坂峠のにぎわいに追われて、秋の気配に埋れた県境稜線から烏帽子火山群を望む。水の登（二〇〇〇メートル）、東篭の登（二二二八メートル）、西篭の登（二二〇〇メートル）は三方ケ峰の北方に、東西に仲よく並ぶトロイデ火山である。水の登山頂付近から、コースは信州側に鋭く落ちる。いわゆる〝赤ゾレ〟という連嶺となり、東篭の登に急崖をなして続く。深沢川から吹き上げる風を肌に受けたのは、水の登の山頂であった。ふり

返えると黒斑連峰、そして浅間が静かに横たわっている。上州側になだらかに落ちて行く高峰高原。やや急な浅間のスロープ、陽はすでに西に傾き、高原の旅情は淡い。足もとには、今なお崩壊の続く赤ゾレの急崖が、古い爆裂火口の面影を伝えている。人間の歴史の時代でない、地質と岩石の歴史の中に秘められた沈黙の時代、それを知っているのはこの赤ゾレの急崖であり、今腰を下している岩石なのだ。東篭の登は烏帽子山系の中で最も東端に位し、北東の傾斜はゆるやかだが、その南面は赤ゾレに続き、急崖となって深沢川へ落ちこんでいる。その下には高峰温泉がある。

煙草の烟がゆったりと上州へ流れて行く。三方ケ峰、高峰、湯の丸山の向うに、佐久・小県の平がぼんやりと見える。遠く富士、八ケ岳、南北のアルプス、その間にぽかっと平がある。山頂で眺める信州はいつもそんな感じだ。上州は浅間山の裾野、火山の噴出物におおわれた未開の高原が続いている。田代を中心とした地域に、高原野菜の畑が続く。緑にうすい鉛色を混ぜて、一つ一つはっきりした区画を作っている。多分カンランの畑であろう。その北側に根子岳、四阿山の山麓が広がっている。唐松の森林、牧場、高原野菜、浅間から四阿にいたる、火山が生んだ高原の生活である。西篭の登は行く人も少ない。コケモモ、ツガザクラ、ガンコウランなどの、数多い矮小潅木も荒されてはいない。東側斜面には、コメツガ、シラビソ、トウヒなどの混生原始林、山頂からは眼下に地蔵峠がある。「西へ落ちれば日本海、東へ行けば太平洋」県境一周のプレートを打ちながら誰かが言う。二〇四〇メートル、三方ケ峰の下部に高原の湿地帯、池の平がある。一帯に点在する巨岩の重なりの中に「忠治のかくれ岩」がある。幕吏に追われて信濃路へ逃げた、国定忠治が宿ったかくれ岩と伝えるものである。高山植物の女王「コマクサ」が二〇〇〇メートルの三方ヶ峰に見られるのは珍しい。三方ケ峰のコマクサ、兎平のヤナギラン、湯の丸山荘からは、これらの植物保護を訴えるアナウンスが盛んに聞えて来る。

地蔵峠の道は古く「ゆみち」と呼ばれ、信州から旧鹿沢温泉への湯治客は、年間二千を数えたと云う。この道にはまた町石という古い道標が残っている。全国的にも余り類例のない、特殊な民俗資料だと歴史家は教えてくれる。車坂、地蔵、角間、鳥居、いずれも上信を結ぶ国境の峠である。湯の丸山頂にも巨大な岩石がひしめいている。上田、小県方面から見ると、山頂部が烏帽子に似ているという烏帽子岳（二〇六五・五メートル）の急崖が西正面の眼下にのぞまれる。北にくっきりと頸城の山々が浮び、東には大さじき山（一九一五メートル）小さじき山が並んでいる。角間峠では「猿飛佐助修業の地」と書いた標柱を見る。講談本の英雄が、ついにこの山系の名士となってしまった。それだけ、昔から人に近い山だったといえるのかも知れない。四阿山麓、菅平高原、吾妻高原、そのスロープがゆったりと流れる先に鳥居峠（一三六二メートル）がある。日本武尊、源頼朝、親鸞、日蓮の通った道として、幾多の伝説を残す峠を、ごおっと地ひびきをたてて、高原野菜満載のトラックが通り過

ぎていった。

八月も二十五日を過ぎた。山はもうすっかり秋色が濃い。色あせた松虫草をわけて、全長四〇〇メートルにわたる天然記念物「的岩」の偉観を見る。急峻な尾根筋に屹立する岩肌は、複輝石安山岩で、地下の岩漿溜から地殻の裂目に沿って潜入凝固した岩漿である。両側面から直角の節理が発達し、重箱状の水平柱状節理は見事である。上信火山帯の中で浅間に次ぐ高峰二三三二・九メートルの四阿山は、直径十二キロに及ぶコニーデ型成層火山である。アルプスのお花畑とは較べるすべもないが、この辺としては珍しい這松、ガンコウラン、コケモモ、クロマメ、ミヤマリンドウが点在し、時々オコジョの糞をみかける。北には、これから踏査する浦倉山、小串の鉱山の煙も淡く、白根山の荒れた山肌も遠望できる。眼下には米子鉱山の廃墟がわびしかった。浦倉山（二〇九〇・六メートル）は樹林の中に隠され、県境ルートはあまりにきびしかった。土鍋山のコルに着く頃は疲労の極、広い草原の別天地にいつまでも寝ていたいと思う。毛無峠への道も非情のジャングル地帯である。時々黄ペンキの道しるべは見られたが、苦行は変らない。倒木と熊笹に苦しめられながら、ようようにして土鍋山（一九九九メートル）に辿り着いた。山の両面はズバリと切り取られている。眼下に小串鉱山の荒涼たる景色が展開する。硫黄を運ぶ索道の音が、静寂の中に空しく響く。毛無峠に水はない。須坂市から小串鉱山への路を行くトラックの音が、人間くさい臭気を運んでいた。

御飯山（二一六〇メートル）から黒湯山（二〇〇七メートル）、万座、渋への道はまさに未踏のジャングルだった。時々樹間に見える北アルプスの岩稜が懐しい。東眼下はるかに万座温泉が、さらに横手山のパラボラアンテナさえが見える。だが、足もとのルートは一向に好転せず、行く先も定かでない。大木によじ登ってのルート指示が繰り返される。万座、山田と観光開発の手は縦横に延びてはいるが、県境稜線は原始のままだ。県境の忠実なトレースが如何に困難かを身をもって知った。

渋峠（二一七二メートル）ヒュッテで暫く休み、スキーリフト建設工事中の横手山（二三〇五メートル）から彦兵衛尾根を経て、今は廃れた草津峠（一九五六メートル）を越える。とにかく、志賀高原の開発はすばらしい。四十八池を横目に眺めて、強酸性湖として特異な存在である大沼池に着いた。

## 隔絶の秘境

上信越高原国立公園の中央部から北へ、赤石山（二一〇九メートル）、大高山（一九七九メートル）、佐武流山（二一九二メートル）、赤倉山（一九三八メートル）と越後境の山々を経ると、湿原植物の宝庫として名高い、高層湿原の山、苗場山（二一四五メートル）がある。山頂は東西四キロ、南北八キロ、周囲約二四キロで、その大部分は長野県に属している。標高一八〇〇メートルから二一〇〇メートルにわたって、ごくゆるやかな斜面をつくっている山頂一帯には、五〇〇を数える大小さまざまな池が点在する。池には畳表にするイグサの同種、ミヤマホタル

イが密生して、さながら稲の苗代を思わせる。苗場の名も、この景観によっているという。山頂からの展望はすばらしい。西に鳥甲山、岩菅山、東には谷川岳が目前に切り立ち、遠く南西に富士を眺め、浅間の煙を見る。南に赤城、榛名、北に佐渡ケ島、北西には能登半島を望むことができる。また、山頂をめぐると、数え切れないほどの祠や石塔を見る。その中心に農業信仰の神、保食命他七柱の神を祭ったと伝える苗場神社が、オオシラビソの根方に鎮座する。素朴な信仰のあり方が、この山麓に住む人々の悲しい願いの強さを物語るように、ひっそりと建っている。山麓の秘境、秋山郷は全く閉された「陸の孤島」である。平家の落人部落として名高いこの里は、奥志賀といわれる岩菅連峰から、北に流れる中津川によって深くきざまれた、鳥甲山と苗場山の峡谷にある十二の部落である。近年、新聞ジャーナリズムによって脚光を浴びている、この秋山郷も、かつては桃源の里としてあった。『信濃奇勝録』に井出貞道は、「衣食足りて、恒に争い怒る事なく、只質朴にして太古の人の如し。まこと世外の一世界なり」と記している。かつては『北越雪譜』の鈴木牧之。近くは長野高校の市川健夫氏が『平家の谷―信越の秘境秋山郷』等の著書によって、詳細な研究を積まれている。

## 人とわぬ北端の山

高妻山や乙妻山、おそらく前踏査パーティが、そのどこかにいるであろう信越国境の山々を眺めながら、笹ケ峰牧場を乙見山峠へと向う。人通りのない登路は苦むしてはいるが、小谷温泉への道は綺麗に開けている。峠を右折して、古い鉈目を頼りに、つる草を分けると薬師岳（一三〇二メートル）に出る。焼山を間近に望んで尾根道をゆくと、所々水芭蕉の生える水溜りに出合う。だが、根曲り竹の叢は、行けども行けどもあとを絶とうとしない。標高二〇六〇メートル地点で、ついにビバークを決める。ものすごい蚊の襲来に、眠ることもできない。

翌八月二五日、昨日に続く根曲り竹に苦しみながら、天狗原山の急坂を登る。竹がイタドリに変る頃、ようやく稜線に出る。小さな池が頂上付近に点在する。小谷温泉からの登山道もはっきりわかる。稜線を辿る。金山周辺は湿原地帯で、湿原植物の種類も多い。金山の東側に雪田を見て、東山腹を行く。金山から雨飾山への尾根は大きく下り、起伏も多い。日本海が美しいのがせめてもの慰めである。雨飾山（一九六三メートル）の小谷側は岩壁が大きく切り立っている。登山道は整備されているが、登山者は少ない。中の池はきたない溜り水の池である。梶山温泉へ下る。一軒の大きな家が無気味に建っている。人間が嫌いなのか、主人は無愛想で口もきかない。止むを得ず梶山部落まで下り、根知川のほとりで再度のビバークを決める。

翌日は越後領大久保部落を通り戸土に登る。戸土部落では、いたる所でボーリングが行われている。地滑りの調査と工事なのであろう、急がしく人が往き来する。この部落への車道は一本、新潟県糸魚川市から通ずる。あとは峠越えの歩き道しかない。海の見える分校として名高い、北小谷小中学校戸土分校の

建物は立派である。僻地行政の表層面が、そんな所にも顕著である。白池はミョーバンを含んで、わずかに白いが、青く澄んで透明であった。小さな段々田圃の用水に使われているとのことである。角間池までの道はわからない。細い道は通っているが、ひどいブッシュがそれを隠してしまうのだ。鎌倉山三角点からは、姫川の流れが光っていた。一挙姫川川岸へ、流水の滝壺を下った。

## 北部ジャングルに迷う

九月十二日。雨、大糸線平岩駅から国境橋を過ぎると、くずれるような滝谷にぶつかる。岩はもろく、すべりやすい。やむなく滝の右岸を巻いて森林帯に入るが、再び渓谷に逃げる。標高一二〇〇メートル。沢は急且つ狭。ステップは崩れて、登高はますます苦しい。二段、三段の滝は、右に左に出現する。雨はますます激しい。沢の登行をあきらめ、再度森林帯にとりつく。スコップでステップを切り、遮二無二登る。やがて稜線上の鞍部に出る。難場岳の近くと思われるが、視界はきかない。現在地の確認もできない。とにかくジャングルをかきわけて進む。時々ぶつかるブナの大木を目安に登高を続ける。方途不明、わずかな平地をみつけ、ブッシュを刈り払ってテントを張る。高度一五〇〇メートル、気温十二度。一杯の紅茶が、奇妙なやすらぎを与えてくれる。

九月十三日。曇、幕営地にプレートをつける。再び見ることはあるまい。ルートを南にとる。昨日と変らぬ原始ジャングルとの死闘を続けて一時間、無名峰に通ずる尾根に出る。遥かに日本海の海岸線を見る。右眼下に池を発見、駈け下って憩う。池より対岸の尾根に出たが見通しはきかない。ルートを再検討して南にとる。密集する笹三メートルを越えて歩くこともできない。倒木の上に立ってコースを観察しながら、牛の歩みを続けて無名峰のピークに着く。

コースを西に振ってしばらく行くと、眼下に白池らしい池を発見する。とすれば無名峰は難場山か？　ここで更にコースを南に振る。五時間の苦行だった。雲の切れ間に小蓮華岳、鉢、雪倉の山々を望むも、たちまちガスにさえぎられて、現在地の確認もできない。ジャングルはますますひどさを増す。笹というよりは竹である。高さは四メートルを越える。南のピークは簸岳ではないと判断する。前進は思うにまかせず、疲労のみいやます。前面のピークが簸岳だとすれば、白池は北面にあるはずだ。だが池は西面にある。これ以上の前進は無理であろう。むしろ危険と判断する。後日を期してやむなく白池へ下る。沢へ迷いこむのを極力避け、ブッシュをかきわけて下る。やがて川筋に沿った廃道を発見、朽ちた橋のたもとに幕営する。

北へ流れる広い沢をはさんで、白池台地の斜面が眼前に開けている。ここから見る無名峰の稜線は長く広い。簸岳は見えない。あの稜線上のジャングルでは、一時間に一〇〇メートルも進み得たかどうか？　白池の北面には林道が通っている。平岩から栂平までのルートである。県境稜線の原始ジャングルへ一歩踏みこんだら、人間の判断も、歩行もすべて失われてしまう

というのに、紙一重の山腹をバスが走っているのだ。文明とは、あるいはこういうものなのだろうか？

南西の風が吹き荒れて来た。原始林はごうごうと唸っている。台風はどうやら頭上にあるらしい。

## 踏査終る

九月十八日午後五時、長野県境地帯一周踏査隊、北アルプス縦走班最後の一隊は、十石峠を南下して乗鞍岳肩の小屋に到着した。風速十五メートル。気温五度。台風二四号は乗鞍岳山上に低迷していた。

行程一〇〇〇キロ。七〇日間の踏査行は終ったのである。最後の一隊を迎える隊員七三名の表情は、暗雲の中に明るかった。

（小林俊樹　記）

最後に踏査地区別に、隊員名を記して、長野県境地帯一周踏査隊の報告を終りたいと思う。

| 踏査地区 | 期間 | 隊員 |
|---|---|---|
| 乗鞍岳―御岳山 | 七・一一―七・一四 | 西牧康、原喜杉、高木猛、高橋貞利 |
| 御岳山―坂下町 | 八・一四―八・二二 | 矢崎源市、高橋貞利、太田秀春（御岳山～鞍掛峠～真弓峠～坂下町） |
| 坂下町―五軒小屋 | 七・一三―七・一八 | 井口謙司、保科文人、大久保泰司 |
| 五軒小屋―新野峠 | 七・一八―七・二五 | 浅輪幸久、山浦源太郎 |
| 新野峠―青崩峠 | 七・二四―七・二七 | 高橋貞利、小林俊樹、小岩井治 |
| 青崩峠―仁田岳 | 七・一三―七・一八 | 中野和郎、手塚英信 |
| 仁田岳―駒ガ岳 | 八・一四―八・二〇 | だけかんば山の会（瀬戸、中村、藤田、唐沢、河手、加藤、宮下、西牧、松田、小沢、赤羽、小林） |
| 駒ガ岳―清里 | | |
| 清里―三国峠 | 八・一一―八・一六 | 早乙女緩次、柳沢勝輔 |
| 三国峠―余地峠 | 八・二〇―八・二四 | 河西弥一、新津茂雄 |
| 余地峠―碓氷峠 | 八・二四―八・二八 | 市東貞雄、清水澄 |
| 碓氷峠―鳥居峠 | 八・二一―八・二七 | 川西山岳会（遠藤、増田、久松、志摩、小山、成沢南沢、赤羽、大井、堀、宮下、上原） |
| 鳥居峠―大沼池 | | |
| 大沼池―森宮野原 | 八・二九―九・二 | 小林忠治、丸山昇、（早乙女緩次） |
| 森宮野原―関田峠 | 九・六―九・一〇 | 神村明徳、小山峰男 |
| 関田峠―田口 | 九・九―九・一三 | 二木計臣、塩野谷重行、金子芳郎 |
| 田口―平岩 | 八・二三―八・二七 | 山浦源太野、赤穂誠、百瀬寿雄、中島忠 |
| 平岩―白馬岳 | 九・一一―九・一六 | 塚本茂樹、永田好行、金子誠吾 |
| 白馬岳―五竜岳 | 八・一―八・三 | 青柳安照、竹村文雄 |
| 五竜岳―鳥帽子岳 | 八・一二―八・一六 | 久保田宣夫、小林俊樹 |
| 鳥帽子岳―槍ガ岳 | 八・一五―八・一八 | 百瀬一茂、藤沢敦 |
| 槍ガ岳―西穂高岳 | 八・二一―八・二五 | 小里頼忠、吉武正子、稲田房子 |
| 西穂高岳―安房峠 | 九・二六―九・一七 | 堀内章雄、宮沢功、下田愛博 |
| 安房峠―乗鞍岳 | 九・一七―九・一八 | 高山忠四朗、佐藤貢、蒲生明登、穂苅貞子 |

# 創立六十周年記念行事

本会は昭和四十年（一九六五年）をもって創立六十周年を迎えた。六十年という歴史は、英国の一〇八年、オーストリーの一〇三年、スイスの一〇二年、フランスの九十一年等には及ばないが、アメリカの六十三年とカナダの五十九年との間にあって世界中の山岳会の歴史の中では、相当のランクを占めているということができる。

六十周年は東洋では、還暦にあたるので、大変にめでたい年に当るが、欧米でもDiamond Jubilee と称してお祝いする習慣もあり、本会が創立六十周年を記念して記念行事を行なうのは、当然のことである。

まして、本会が創立五十周年を迎えた一九五五年はマナスル登山の準備に忙殺され、落着いて記念行事を行なう余裕もなく、十一月二十六日午後二時半より、国際文化会館にて、五十周年記念講演会と晩餐会が開催されたことと、「山岳」五十周年号の発行、記念絵葉書が製作されたことのみにとどまったので、六十周年記念行事は盛大に行なうことを申し合わせ、昭和三十九年十月より準備に着手した。

こうして昭和四十年八月の役員会で具体案が承認され、次にのべる五つの計画が行なわれることになった。即ち

(1)創立六十周年記念祝賀パーティー
(2)記念講演会
(3)記念山行（各支部で実施する）
(4)記念品頒布（会員佐藤久一朗氏製作）
(5)記念展覧会（昭和四十一年六月、西武デパート）

以下それぞれの行事について報告する。

## 創立六十周年記念祝賀パーティー

本会は昭和四十年（一九六五年）で満六十年を迎えた。会の創立については、これだけで一巻の書物になる程のさまざまなエピソードが伝えられているが、正式にいつ発会式をあげたかということは明らかでない。ただ明治三十八年（一九〇五年）十月十四日、飯田町の富士見楼において山岳会創立の最終的な打合わせ会が開かれたという記録が残されている。

そこで、この日を会の創立記念日として、創立六十周年の記念祝賀パーティーを昭和四十年十月十四日、東京目白の椿山荘において開催した。当日はあいにく夕刻より雨となったが、内外知名来賓五十一名、会員二七二名という、本会創立以来最大の、しかも国際色豊かな祝賀会となった。

会は沼倉委員長司会のもと、第一部式典、第二部パーティーにわけ開催、先ず一部の式典は松方会長の挨拶にはじまり、在籍五十年に達した会員二十七氏を永年会員とし、多年に亘る本会に対しての御尽力を謝して銀枠のついた永年会員章を贈呈し

た。次いで功労者の表彰に移り、功労者として次の二十三氏が表彰され、記念品が贈呈された。

・名誉会員……武田久吉、山川黙、辻村太郎、三枝守博、鳥山悌成、中村清太郎、冠松次郎、田部重治、近藤茂吉、槇有恒

・歴代会長……日高信六郎、松方三郎

・歴代副会長……藤島敏男、三田幸夫、渡辺公平、西堀栄三郎

・十五年以上在藉の支部長……後藤幹次（山形）、藤島源太郎（越後）、伊藤弥十郎（福島）、高山忠四朗（信濃）、織田収（山陰）

・今回名誉会員に推薦された神谷恭、藤木九三（以上二三名）

続いて名誉会員として、新たに日高信六郎、藤島敏男、神谷恭、藤木九三の四氏が推挙された。

最後に、秩父宮妃殿下のお言葉を戴いて第一部の式典を終了したが、こよなく山を愛し、山岳会によき友を得られた故宮殿下の思い出をはじめ、最近の続発する遭難事故を深く憂慮され、その防止についての心のこもったお言葉には、参会者一同深い感銘をうけた。

続いてパーティーは噴水の間に席を移し、長老近藤茂吉氏の発声による乾杯により第二部が始まった。杯を重ね、宴酣わとなった頃、司会者深田久弥氏、加藤泰安氏の紹介により、来賓の祝詞が披露された。先ず、遥々この祝賀会のために招待されて来日した、中華民国台湾省体育会山岳協会周百錬会長夫人の祝詞があり、同夫人より松方会長宛、祝日本山岳会六十周年「青山不老」と刻まれた、豪華な桶が贈られた。続いて訪日韓国登攀隊八名を代表して隊長の柳洪烈博士が、洪鐘仁韓国山岳会々長のメッセージを伝え、お祝いの楯「螺鈿漆器記念牌」の目録が松方会長の手に渡された。続いてヒマラヤの国ネパール王国のバンダリー大使、尾関全日本山岳連盟会長等の祝詞がつづき、更に、特に昔、本会会員が大変にお世話になった大町対山館の故百瀬慎太郎氏の息女美江さん、別宮元会長梅子未亡人、飛騨案内人の古強者松井憲三君、有明にその人ありと知られた大和由松君、神河内山荘管理人平林次男君等の紹介があった。

尚この日は、地方支部からも多数会員が参加され、久方振りに旧交を温める会員も多く、英国山岳会員リチャード・ガウイング氏、インド大使館付武官ナンダ大佐、アメリカ大使館マクドナルド夫妻等を囲んでの歓談はつきず、九時、深田久弥氏の閉会の辞によって盛会裡に幕を閉じた。

**招待出席者**（順不同）

針谷　正之（外務省文化事業部長）
伊達　邦美（外務省情文第二課長）
吉沢清次郎（初代ネパール大使）
松島　茂善（文部省スポーツ課長）
早川芳太郎（同右課長代理）
尾関　広（全日本山岳連盟会長）
藤代　豊喜（日本山岳協会常務理事）
渡瀬　亮輔（元毎日新聞社常務）
対馬　好武（毎日映画社社長）

灘山　日吉（毎日新聞社事業部）
斎藤　得司（同右）
竹内　清隆（ＮＨＫ社会部長）
高橋　勤（ＮＨＫ科学産業部長）
太田善一郎（同　右副部長）
本田　正次（自然保護協会常務理事）
有吉　正義（東京銀行）
塚越　雅則（西武百貨店・堤店長代理）
小柳　喬史（日本興業銀行）
殿村　秀雄（エッソスタンダード）
別宮　梅子（元会長別宮貞俊氏夫人）
百瀬　美江（百瀬慎太郎氏令嬢）
平林　次男（神河内山荘管理人）
村上　守（同右　委員）
松井　憲三（元案内人）
大和　由松（〃　）
訪日韓国登攀隊・柳洪烈隊長以下八名。中華民国台湾省体育会山岳協会周呉秋冬（周百錬会長夫人）以下六名
R. R., Bhandary（駐日ネパール大使）
Colonel C. M. Nanda（駐日インド大使館付武官夫妻）
Richard Gowing（英国山岳会）
H. A. Mehdizadeh（テヘラン山岳会）
John F. McDonald（アメリカ大使館教育交流部長代理夫妻）
Adrian Hohler（英国大使館）
Juan Sopeña 神父（上智大学）
S. De Roy（P・T・I 支局長夫妻）

（以上五十一名）

**当日の出席者**（順不同）

曽原喜久蔵、高木菊三郎、田中正智、同　テヰ子、確井橘造、山下久男、折井健一、鳥山悌成、牧野　衛、倭島進、松方三郎、同　星野、斎藤健治、同　文子、松田雄一、同　柳子、大塚博美、深田久弥、同　志げ子、田中弘美、高橋定昌、細川沙多子、中野　満、飯野　亨、同　紀佐子、橘本　正、樋口一男、平山武志、斎藤かつら、塚本珪一、同　ユキ、田崎市松、同　幸子、早川種三、成瀬岩雄、中川　武、小倉薫子、田辺寿、川森左智子、池元善秋、高山忠四朗、菅原尚司、吉沢一郎、山口節子、菊地文雄、平沢亀一郎、辻　荘一、青木　昇、同　瑛子、村井米子、小味秀純、川崎　巌、関口周也、村井田博、藤木九三、同　富子、石原憲治、織田　収、近藤　等、藤森元夫、丹部節雄、上村　篤、藤島敏男、同　紀子、三辺夏雄、城山正三、住吉仙也、安川茂雄、佐伯富雄、長尾悌夫、同佳子、板倉勝正、竹田寛次、芳賀孝郎、辻井秀一、藤井運平、三井高周、同　嬉子、交野武一、望月達夫、同　薫、永原輝雄、神谷　恭、同　カネ、吉阪隆正、佐藤一栄、藤島　玄、清水周一、外山義夫、中　保、早川義郎、小原晴子、安彦六郎、諸岡一次、伊藤弥十郎、浜田一馬、同　勝子、亀田与三次、加藤泰安、同　ひろ子、松本善二、奥山文次、中島正文、槙　有恒、町田立穂、渡辺公平、井口正男、岡田喜一、阿部節子、中尾正武、尹　官炳、荒巻広政、辰沼広吉、同　寿恵、河野義




日本山岳会創立六十周年記念祝賀会式典
Sixtieth Anniversary Ceremony of the Japanese Alpine Club (held on October 14, 1965 at Chinzanso, Tokyo)




創立六十周年記念祝賀会パーティー
Sixtieth Anniversary Reception of the Japanese Alpine Club (The Princess Chichibu making a gracious presence at the reception)




日本山岳会創立六十周年記念山岳展覧会開会式
Opening Ceremony of the Sixtieth Anniversary Exhibition (held on June 11–22, 1966 at SSS Hall of Seibu Department Store)



六十周年記念山岳展覧会を御覧になる皇太子御夫妻
The Crown Prince and Princess taking a gracious inspection at the Sixtieth Anniversary Exhibition.

雄、宮下秀樹、同　敦子、勝田房治、同　京子、佐藤久一朗、同　孝子、宇田川久太郎、三代沢本寿、岩崎京二郎、富田美智子、西堀栄三郎、同　美保子、安藤鐸（末松大助代理）、三田幸夫、同　静子、三井松男、山崎安治、野口末延、今井雄二、同　喜美子、坂倉登喜子、黒石恒、鈴木文子、島田　巽、同　順子、田辺博道、三浦多美子、村尾金二、同　義子、松本義夫、吉武正子、北　博正、茶谷東海、佐藤達夫、高遠　宏、同　千栄、田口三郎助、金子泰助、山口健児、石村　実、同　裕子、小泉　満、渡辺武彦、羽田栄治、根本洋子、加藤　一、津田周二、松本熊次郎、山崎金二郎、関根吉郎、太田　敬、岡本竜行、今井嘉道、同　直子、福井正吉、竹内義夫、山本朋三郎、今西寿雄、牧野四子吉、同　文子、小里頼忠、鈴木昭、同　敏子、横山厚夫、山下一夫、児島勘次、斎藤清太郎、矢田城太郎、田口二郎、栗栖勝雄、近藤恒雄、二木信次、進藤波男、同　みち子、小山智、同　美智子、桑原武夫、中里　巌、奥川雪江、近藤茂吉、同　夫人、柴田晴彦、沢井貞夫、日高信六郎、藤野欣也、川越孝次、川村博道、増田洋子、今村正二、大沢蔦、杉浦耀子、織内信彦、脇坂　誠、前田宗寿、山野井武夫、網蔵志朗、村木潤次郎、田村扇一、川喜田二郎、芳野赳夫、同　菊子、米田茂、小堤達雄、直井八十吉、隈部恵子、沼倉寛二郎（以上二二一名）

## 記念講演会

記念祝賀パーティーの翌日、十月十五日午後六時より、毎日新聞社後援により、虎ノ門、久保記念講堂で開催した。

当日は国会デモ行進の混雑が憂慮されたが、定員一、二〇〇名を満す盛会であった。

午後六時五分、加藤泰安氏の司会によって開会した。講演は先ず松方会長の「登山界と登山者」という題で始まった。山から受けた恩恵と、山岳会員としての幸せ、自分の人生から山をとってしまうと寂しいものになってしまう等、聴衆の共感を呼ぶ内容であった。

プログラムの二は「日本山岳会創立前後」と題して名誉会員武田久吉氏の講演。今なら話せるというようなエピソードを交えた名演説は、大変に興味のある内容であった。

休憩後、串田孫一氏の率いるコンセール・ゼフィールの笛奏による一七世紀の珍らしい古典曲は、優雅にして牧歌的な詩情をたたえた。

プログラムの四は、「六十年を振り返って」と題して槇有恒氏が登壇、わが国近代登山の歴史と共に歩かれた氏だけに、若い聴衆の胸をうつものがあった。

次いで、西丸震哉氏の指揮するフォレスト・ワンダラースの混声コーラスが、雪山讃歌にはじまり、未発表の「森林」とか「渓流」とかの曲をたっぷりと披露され、会場は和やかなムードに包まれていった。

最後に登壇した桑原武夫氏の「登山の文化史」は、学びとろうと期待した講演だけに、聴衆を魅了し、時間が余りに短かかったことが惜しまれた。

こうして九時十五分、充実した講演会は終了したが、さすがに六十周年記念講演会の名にふさわしい内容であった。

当夜は、前日の祝賀パーティーに出席された地方在住会員も、ほとんどの方が出席された他、名誉会員、長老の方も多数お見えになられ、散会が余りに早すぎるような感じであった。

尚、当日の講演内容はその全部を録音テープにおさめて本会で保存することになっている。（詳細本文一頁―三〇頁参照）

## 記念山行

アルパイン・クラブの百年祭の時は、その年の五月のウェールズでの山の集りから始って、八月にはツェルマットでも記念の集まりを行なっている。本会の六十周年記念行事でも、どこか全国から集まり易い場所で、記念の集会を行なってはとの話もあったが、それも大変であるので十一月三日の文化の日を期して、全国各支部一斉に記念山行を行なってはどうかということになり、別表の通りの記念山行が行なわれた。今回は特に東京からも代表が地方の各支部の行事に参加し、また、ＪＡＣの会旗も新調して各支部に贈られた。

尚支部によっては恒例の行事をもって記念山行に代えたところもあり、従って日時も十一月三日に限らず、その前後に行なわれたところもあったが、参加者は合計すると約五〇〇名にも達し、地方色豊かな記念山行や集会が行なわれ、意義深いものとなった。尚これら行事の詳細については会報二四六～二四八号にかけて報告されているので御参照下さい。

別表　**日本山岳会 60 周年記念山行一覧表**

| 支部名 | 日　時 | 場所・コース | 参加人員 | 本部からの派遣者 | 記録掲載会報 |
|---|---|---|---|---|---|
| 東　京 | 11/3 | 箱根明神岳 | 65 | 神谷他 | No. 246 |
| 関　西 | 10/23-24 | 大津ユースホステル・比良 | 31 | 吉沢 | No. 248 |
| 越　後 | 11/3 | 巻機山（雨のため禅寺見学，懇談会とする） | 77 | 山崎 | No. 247 |
| 福　島 | 11/3 | 吾妻山群（吾妻小屋，高山，土湯） | 25 | — | No. 247 |
| 山宮形城 | 11/3 | 蔵王（集会，観光ホテル） | 16 | 渡辺（公） | No. 247 |
| 石　川 | 11/6-7 | 白山岩間ヒュッテ | 20 | 沼倉 | No. 247 |
| 信　濃 | 7/11-28日間 | 県境縦走（1000粁，支部発足20周年記念） | 本隊５名 | | No. 248 |
| 富　山 | 10/2-3 | 立山ベルグハウス集会，立山三山，奥大日岳 | 18 | | No. 247 |
| 山　梨 | 11/13-14 | 夜叉神峠，広河原，大樺沢 | 45 | 加藤(泰)，望月 | No. 248 |
| 静　岡 | 11/13-14 | 寸又峡 | 68 | 松方，松田他 | No. 248 |
| 熊　本 | 11/20-21 | 阿蘇瀬の本高原―久住登山 | 13 | 三田 | No. 247 |
| 福　岡 | 11/7-8 | 九重山荘，弥彦山 | 20 | 槙 | No. 248 |
| 秋　田 | 11/6-7 | 白岩山 | 7 | 成瀬 | No. 246 |
| 東九州 | 11/7-8 | 阿蘇釣―筋湯―九重山荘，福岡へ合流 | 7 | 槙 | No. 247 |
| 東　海 | 10/24-25 | 名古屋集会，長良川上流ハイキング | (集会)50<br>(山行)15 | 深田，加藤(泰) | No. 248 |
| 山　陰 | — | — | — | — | — |

## 記念展覧会

記念展覧会は、当初は、アルパインクラブの「百年記念展覧会」のように山岳会の内輪の展覧会として記念祝賀会の前後に開催し、この機会に本会で保存している資料をすべて公開し、また会員の所持している珍しい資料を出品してもらっては如何かという考えであったが、会員塚越雅則氏の御骨折りにより、西武百貨店を会場として提供下さることになったので、デパート側の希望もあって、昭和四十一年六月十一日～二十二日に開催することになった。

会場は六年前に「日本人による大ヒマラヤ展」を行なった東京池袋の西武百貨店七階ＳＳＳホール。主催は大ヒマラヤ展と同じく本会と毎日新聞社の共催。

タイトルは日本山岳会創立六十周年記念展「第三の極をめざして」とし、外務省、文部省、厚生省、ネパール王国大使館、国立公園協会、日本自然保護協会、日本山岳協会が後援することになった。

展覧会の内容については折井実行委員長のもとに四月以来慎重に検討した結果、単に日本山岳会史のみでなく、この機会に是非、遭難対策、自然保護等のキャンペーンも行なった方がよいということになり、内容を、日本山岳会六十年史、遭難対策、自然保護、海外登山の四つのセクションに分けて具体的準備を行なうことにした。個々のセクションの内容につき説明すると次の通りである。

**一、日本山岳会六十年史**

本会の創立に至る迄の経緯、山岳会設立主旨書、七人の発起人の写真、秩父宮殿下の肖像並びに想い出の登山用具、ウエストン師レリーフ原版、「山岳」「博物之友」「高山深谷」等の刊行物、その他古い資料、登山用具の変遷、内外著名ピッケル等が展示された。

**二、遭難対策**

明治大学遭難対策委員会が担当し、遭難史年表、各種遭難統計資料、救助用具一式、著名の遭難報告書、遺稿集等が展示された。

**三、自然保護**

会場には吉阪隆正氏の設計による立山室堂小舎の実物大の復元模型の一部が展示され、国立公園協会出品による油彩画四点、自然保護協会出品による自然保護に関する各国の刊行物、穂苅貞雄氏出品による雷鳥、かもしかの模型、その他自然保護キャンペーンの写真パネル等が展示された。

尚、このコーナーには、日本の代表的登山家槇有恒氏の装備、各種記念品が展示された。

**四、海外登山**

このコーナーは、日本人による海外登山年表、各地域別の地図、代表的山の写真、海外登山隊の持ち帰った蒐集品、海外山岳会のジャーナル、バッジ、書簡等が集められ、次いで過去に日本山岳会が派遣したマナスル、ヒマルチュリ登山隊の写真、装備、記念品、頂上の石、報告書等が展示された。最後のコー

ナーは、日本山岳会の当面の目標エベレストに関するコーナーで、過去の外国隊の写真、登山年表、エベレストに関する文献約一〇〇点（単行本のみ）が展示された。さすがに世界の最高峰である山だけに、この山に関する単行本だけでも一〇〇点に及ぶ本を集めることができたわけで、またこうした資料が簡単に集められる日本という国も何とも不思議な国であるということができよう。この展覧会はタイトルに「第三の極をめざして」とあるように、日本山岳会が目下計画しているエベレストとはどういう山で、またどうして登る意義があるのかということが一目でわかるように企画され、本会のエベレスト峰登頂に対するビジョンがうちだされていた。

この展覧会には、開会式の当日、秩父宮妃殿下の御来臨を戴いたのをはじめとし、会期半ばの六月十八日（土）には、皇太子御夫妻、常陸宮御夫妻の御来臨を戴き、その他来日中のグルジア共和国の訪日登山隊の一行や、ネパール王国大使御夫妻等も興味深く見学された。

尚この会期中に、隣接するマウンテン・ホールでは、槇、深田氏等の講演があり、映画「マナスルに立つ」も上映された。また東京支部担当で登山相談所が開設され、好評を博した。

参考までに、この展覧会会期中の入場者は、六月十一日～二十二日の十二日間で六六、二八一人を数え、最高は十九日（日）の一二、一一六人、最低は二十一日（木）の三、四二二人、平均は六、〇二五人であった。入場者数からみても成功裡に終了したということができよう。

尚この展覧会の詳細については、会員山崎安治氏編集により刊行された展覧会のパンフレット（会場にて二〇〇円で頒布したもの）を御参照下さい。

（松田　雄一）

# 追悼

## 山川黙(しずか)氏（一八八六―一九六六）

本会発起人の一人である山川黙君からは、永らく消息がないので、いかが消光して居られるかと思い乍ら、日を送る内に、他界の通報を得て、驚いたことであった。

山川君は旧姓河田、五人兄弟の二男坊であった。長兄は烈君、私と中学の同窓であったが、方面が違うため、中学卒業後は、数回河田君の家で偶然会っただけに止まった。黙君との初対面は、明治三十六年（一九〇三年）一月十一日、日本博物学同志会第三回談話会の席上で、この折には先年物故された高野君とも、亦山岳会発起人の一人であった梅沢親光君とも顔を合わせたのであった。

その頃山川君は、熱心な植物採集家であったので、その前年の八月十日東京を出発して、甲斐の金峰山に採集を試みて居る。

三十六年の春五月三日には、共に高尾山に採集したが、夏には、私の誘いに乗って、七月の下旬に八ケ岳に採集旅行を企てた。その時の記事は、山川君の筆により『博物之友』第四巻に掲げられ、八ケ岳の紀行は、『山岳』第一年第一号に詳しく報告されている。

翌年の七月中旬、私達二人は戸隠山と妙高山に登って植物を採集し、その紀行文は『博物之友』第五年に、共同で執筆した。

明治三十八年四月一日から、日本博物学同志会の催で、日原から仙元峠を越して浦山に下り、秩父大宮に出て泊り、翌朝節分草を得んがために妻坂峠に向ったが、山川君も行を共にした。この年の八月初め、私達二人は、白馬岳に採集を計画し、同じ日に東京を出発し、私は途中権現岳に登り、山川君は金峰山に登った。二人は上諏訪で合流し、塩尻峠を徒歩で越え、散々苦心の末白馬山麓の四ツ屋に達した。その記事の前半は、『山岳』第一年に掲載してある。河田が山川と変ってからは、登山はあまりされないように承知している。

（武田久吉）

*

以下にかかげる山川黙氏の略歴及び登山歴は、会報第二五〇号所収の山崎安治氏調査のものに、編者が故人の次男山川重次氏から送付された資料を加えて、編したものである。

**略歴及び登山歴**

明治十九年（一八八六）七月二十六日　河田烋（元東京市助役・元貴族院書記官長）の次男として東京四谷、信濃町に生れる。『武蔵通志』（その山岳篇は『山岳』第十一年第一号所収）の著者河田黙氏は、黙氏の伯父にあたり、また河田楨氏（霧の旅会）とは従兄弟の関係にある。

明治三十四年七月　日光奥白根山登山。
明治三十五年八月　富士山、金峰山登山。
明治三十六年七月　八ケ岳。同年八月　浅間山登山。
明治三十七年三月　東京府立第一中学校卒業。府立一中在学中、武田久吉、梅沢親光氏等と日本博物学同志会に加わり、これが後に日本山岳会の母体となった。
明治三十八年八月　白馬岳、杓子岳、鑓ケ岳登山（同行武田久吉氏）。
明治三十八年十月　城、小島、高頭、武田、高野、梅沢の六氏と共に山岳会を創立した（発起人・会員章番号七）。そして多年幹事・評議員をつとめた。
明治三十九年八月　木曽駒ケ岳、御岳、乗鞍岳登山（同行辻村伊助氏）。
明治四十年七～八月　甲斐駒ケ岳、地蔵岳、鳳凰山登山（同行鳥山悌成、武田久吉、梅沢親光の三氏）。白崩山と甲斐駒ケ岳の同一山なることを確かめた。
明治四十年十月　赤城山から合瀉峠を越え、日光男体山に登る（同行辻村伊助、那須皓の両氏）。
明治四十一年七～八月　燕岳、大天井岳、常念岳、槍ケ岳、笠ケ岳、前穂高岳登山（同行川島禄郎、辻村伊助、那須皓の三氏）。
明治四十一年　小石川、同心町山川操（元権掌侍）の養子となり、山川姓を名のる。
明治四十二年七月　（旧制）第一高等学校卒業。
明治四十二年八月　塩見岳、仙丈岳登山。市ノ瀬地方の所謂荒川岳と赤石山脈の間の岳、即ち現在の塩見岳の同一なることを確認した。
大正二年七月　東京帝国大学理科大学植物学科を卒業、藤井健次郎博士に師事した。
大正二年七月　針ノ木岳、蓮華岳、赤牛岳、黒岳、鷲羽岳、ワリモ沢下降、東沢乗越より中房に到る（同行山川洵氏）。
大正四年八月　立山、薬師岳登山。
大正四年　元子爵久世通章長女三千子（元明治天皇照憲皇太后女官、元権掌侍）と結婚。
大正五年八月　北岳、間ノ岳、農鳥岳縦走。
大正十三年四月　東大卒後東大理学部副手、京北中学校教諭、慶応義塾大学予科教授等を経て、（旧制）武蔵高等学校教授に就任、植物学、自然科学等を担当。その後同校に於て生徒監、高等科主幹、教頭を歴任した。
昭和十年十二月　日本山岳会名誉会員に推薦された。
昭和十七年七月より昭和二十一年二月退任迄（旧制）武蔵高等学校々長を勤めた。
昭和四十一年二月十一日　東大付属分院において肺癌のため死去。享年七十九歳。

・『山岳』への主な寄稿
信州八ケ岳（一ノ一）
白馬篭城記（一ノ二、三）
赤石岳果して赤岳より望み得るか（三ノ一）

秩父の一角（三ノ二、三）
日本アルプス中央部横断の旅行談（三ノ三、四ノ一）
金峰山御室及駒ケ岳屏風岩小舎の焼失（三ノ三）
三峰川の上流（荒川岳及仙丈岳に登る記）（四ノ三）
間の岳より北（五ノ一）
野呂、田代両川の分水嶺に就て（六ノ一）
信州甲駿境の一部（七ノ一）
白峰付近につきて（七ノ二）
鉢伏山に就て（七ノ三）
白峰各座の名称に就て（八ノ一）
鋸岳付近の甲信境（八ノ二）

・主な著書

原色高山植物（昭和三年三省堂）、原色貝類図（昭和三年三省堂）、原色蝶類図（昭和四年三省堂）。これらは原色写真版によるこの種の図譜として、最も早期のものと言われる。戦後風間書房から日本高山植物図鑑、新貝類図鑑、新蝶類図鑑として再刊された。

（山崎安治氏付記）登山略歴は私が会報を編集していた当時、昭和三十六年四月四日付で山川氏よりいただいた御返事にもとずいたもので、「あまり登っていませんが二五〇〇メートル以上のものだけ挙げます」と注記されている。

## 北沢基幸氏（一八八九―一九六五）

昨年十月、本会の創立六十周年記念晩餐会の直前に逝去された北沢基幸（もとゆき）氏は、明治三十九年一月に本会へ入会（会員番号一二番、紹介者は小島烏水、高野鷹蔵の両氏）、会籍に在ること、六十年に及ぶ最も古い会員の一人であった。従って現在の会員中で故人を熟知されている方も殆んどなくなり、同じ横浜に古くから居住された神谷恭氏に何度か御足労を願って、シゲ子未亡人から聞いて頂いたことと、私が早期の『山岳』の会員登山報等から調べ上げた資料を以て、故人の足跡等を記してみた。

北沢氏は明治二十二年四月十五日、横浜において誕生。同三十七年三月神奈川県立第一中学校を卒業。シゲ子夫人との間には二男一女があった。昭和四十一年十月六日逝去、享年七十六歳である。

山登りを始めたのは明治三十九年頃からであるが、大正十二年の関東大震災で、日記や写真等の記録を焼失したため、今日では詳細がわからなくなったのは残念である。

『山岳』所載の最も古いものは、後記する寄稿のほか、明治四十一年七月下旬、中房温泉―燕岳―常念―大天井―二ノ俣―上高地―焼岳の紀行（『山岳』第三年第三号、会員登山彙報）と、明治四十四年七月の白馬岳から祖母谷温泉へ下り（高野鷹蔵氏と同行）後、戸隠山へ登ったものであろう（第六年第三号、会員登山報）。

ついで第八年第三号所収の会員登山報には、大正二年の通信として次のものが目につく（二〇〇頁）。

拝啓秋旅十九日より連日の快晴に紅葉を観賞いたし候十九日横浜―青梅（坂ノ上）。廿日青梅―氷川―日原（水原屋）。廿一日日原―仙元峠―鷲川（因）。廿二日鷲川―三峰山―栃本（大村与一）。廿三日栃本―十文字峠―梓山（白木屋）。廿四日栃本滞在。廿五日梓山―金峰山―黒平（黒平鉱泉）。廿六日黒平―御嶽―甲府。同行は会員忽滑谷君而して同氏は天竜川を下り小生は富士川を下りて帰途につき申候（豆州長岡温泉にて十月廿九日北沢基幸）

またこの時写されたと思われる「梓山の旅舎白木屋」他四葉の写真が、第九年第二号の挿画として載せられている。

第一〇年第二号の会員通信（一六一頁）を見ると、大正四年七月の紀行が次の書信によってわかる。

御蔭を以て廿六日夜行にて出発せしより晴天つづき針木峠五色原一の越等を通過いたし候。／今年の山はどなたも成功の事と存じ候。／浄土山付近にて南日氏、木暮氏の勇姿を拝し候写真現像楽しみなれど未だ当分帰宅せざるにより暫くは成功と糠喜びを致し居り候明けて名しからずば幸にて候。（八月四日北沢基幸）

この頃は山岳会の諸会合の出席者の中にも同氏の名が屢々見え、第十五回有志晩餐会（大正五年四月十六日）には高野鷹蔵、加山竜之助の両氏と共に当番幹事をつとめ（第十年第三号、一九七頁）、また横浜在住会員の集りなどにも、屢々幹事役をやられたようである。

大正五年七月には加山竜之助氏と後立山を縦走した。この通信は第十一年第一号二二七頁に加山氏との連名で載っているが、内容を一読すると執筆者は加山氏らしい。少々長いが左に転載してみよう。

小生の旅程申上候。七月十五日大町出発大沢泊、十六日針木峠より蓮華岳に上り峠へ戻ってマヤクボ泊、十七日雨滞在十八日スバリ岳、赤沢岳、鳴沢岳を経て新越の池泊、十九日岩小屋沢岳……扇沢岳、祖父岳を越えて冷の池泊、二十日鹿島槍岳を越えて槍の南北峰の釣尾根に泊、二十一日八峰のキレットを過ぎて五竜岳の手前に泊、二十二日五竜岳に上り大黒鉱山に泊、二十三日唐松岳に上り不帰谷を過ぎ長ザクを上って泊、二十四日不帰の三角点を過ぎ鑓岳を越えて白馬岳頂上の小屋に泊、二十五日雨滞在、二十六日杓子岳、鑓岳に上り鑓裏温泉に泊、二十七日四ツ谷に下り大町に帰着／北沢君は雷雨を恐れて十八日朝マヤクボより一端大町に下山せられしも翌日矢沢を溯って祖父岳に出で二十日午前冷の池にて再会し白馬迄続行致し候。／鹿島槍の裏で私は四ツ這いになってヘズリました八峰は奇妙な所です。大木君の通った所を横切りました。／大黒鉱山で御馳走をしてくれました。不帰谷は大黒から行くと下る一方で白馬から来るのと比べると非常に困難を感じます危険という程の場所ではありません／不帰谷で二時間も道をさがすのに費やしました、大町の人夫は皆んな初めてです。山に弱い臆病者の私としてこの縦走はレコードだと北沢がいっています。（下略）

（加山竜之助、北沢基幸）

なお同書二三一頁には、雨のためいったん大町へ下った北沢氏の七月十八日付書信が、報告として載せられているが、それにはマニラ、ジュート製の草鞋の極めて丈夫にして、普通のわらじの二足乃至三足分に当る、というようなことが述べてある。

第一二年第二・三号二五六頁には、大正七年五月十二日、加山竜之助、忽滑谷安美ら五氏と神奈川県鳥屋村から塔ケ岳、丹沢山へ登ったという記事がある。

それ以後の『山岳』には、或いは私の見落しかも知れないが、北沢氏の名が殆んど見えない。いつも山へ出掛ける時の仲間は、加山竜之助氏が多かったようで、以上のほか八ケ岳、木曽御嶽、乗鞍岳、甲斐駒ケ岳等に登り、五万分の一の地図に朱線を入れて保存していたという。

関東大震災を横浜市中区清水町、現在の赤門町でうけ、グラグラゆれている家の中から、夏山テントやスキーを担ぎ、テニスのラケットと貴重品を入れた皮鞄を手に持って、逃げだしたエピソードが残っている。また晩年になっても、白馬をハクバ、湖尻をコジリなどと言うのを聞くと、いやな顔をして、シロウマ、ウミジリが正しいことを強調していた。

死ぬまでにもう一度スキーを履きたいと、口ぐせのように言っていたが、昭和三十年二月、六十六歳の時、越後中里へスキーに行くことができ満足していた。大正九年赤城山でスキーを始めてから、菅平、池ノ平、越後湯沢等へ親戚、友人、また子供を連れてスキーに出かけた。晩年は五万分の一の地図の新らしいのを買い求め、旧いコースや地名の変更などを修正したり、新聞の山に関する記事を読んだりして、満足していた。

『山岳』に執筆された北沢氏の文章は次の通りである。「飛騨乗鞍岳岩井谷の登路に就て」（三ノ一）、「日光女貌山専女山を越えて帝釈山に到るの記」（三ノ二）、「二十三年前」（二五ノ三）。

会員歴六十年という最も古い会員の一人を失い、只管その霊の安らかなることを祈る。

（編　者）

## 柴山乙彦氏（一八八六―一九六五）

終身会員柴山乙彦氏は明治四十三年十二月本会へ入会（会員番号二五九番）紹介者は日比野信一、小島久太両氏で、五十五年の永きに亘る会員であった。氏は明治十九年十一月二十六日の誕生で、愛知日産自動車、中部八洲自動車の各社長を歴任、ゼネラルパーツ商会相談役も勤めた。昭和四十年六月二十三日、脳卒中のため逝去。享年七十九歳。会はこの古い会員の遠逝に対し謹んで哀悼の意を表したい。

東海支部木村哲夫氏を厄わして故人のことを調べて頂いたが、柴山氏を熟知している人々も既に故人が多く、ようやく早川友吉（北汀）氏から次の一文を得たので掲載する。

柴山さんは生粋の名古屋ッ児である。明治十八年、碁盤割―今の中区丸の内に生れ、兄寿太郎さんの事業を助けて不動産関係の事業に従い、温厚篤実の性格を以て知人間の信頼を受けた。後に自動車関係に転じて、終戦後愛知日産、中部八洲自動車の各社長を歴任した。

山との結び付きは、明治の末年、当時の名古屋新聞の北尾鐐之助さんを中心として発足した愛山会に加盟したのが初まりで、主として北ア方面の山々を踏破し、現在の登山ブームの先駆者の一人である。

逝くなった小林橘川さんも、名古屋新聞の関係から愛山会の会員であった。だが、創始時代の会員は多く故人となり、親から引継いだ二代目の会員には名古屋タイムズ社長の亀山巌さん、芸能評論家の寺田栄一さん等があり、之等二代目会員は山には理解を持っているが、自ら登山活動をしないのは惜しまれる。

（編　者）

## 曽原喜久蔵氏（一八九六―一九六六）

曽原君を知ったのは一九二三年二月、私が友人のS君とスキーで二回目の鹿沢入りをしたとき、S君の友人の仲間ということで、行をともにしたのに始まる。籍をおいた学校も勤め先も、私とは全く違うのだが、山登りが好きというだけで、四十何年親しい友達のひとりであった。彼がいつ頃から山に登っていたかというようなことは、ついきいてみたこともなかったのだが、この一文をつづるに当って、JACに提出済であったレジスター原稿を参照したところ、中学時代には明治四十五年夏の富士登山があるのみで、日本アルプスなどへ足を向けたのは、一橋大学に入ってからのことで、もちろん山岳部創立以前のことだから、同好の仲間を誘っては出かけたものであろう。

屈托のない明るい性格の持主だったから、いく日かの鹿沢温泉スキー滞在で、私達とすっかり親しくなり、山登りやスキー行の仲間に加わったばかりでなく、下界での往来も頻りという間柄になった。

山登りもスキーも巧者という方ではなかったが、弱音を吐いたことなどはついぞなく、どんな悪場でも、強行軍でも、いつも冗談をとばして、一行の気持を引立てるような存在だった。奇行に富むといえば少々大袈裟だが、ときどき仲間が唖然とするようなことを、やってのける癖があった。ある正月、まだ志賀高原などという名称のないころ、発哺温泉天狗ノ湯へ常連でスキーにいったときのことである。帳場で食事をしている最中、自分達の部屋に焼海苔があった筈と誰かがいうと、曽原君が「俺がとってくる」と買って出たのはいいが、待てど暮らせど戻らない。一同待ち草臥れた頃に、焼海苔持参で現われた彼を難詰すると、「途中で風呂場の前を通ったら、チョット入りたくなったんで、一風呂浴びてきたんさ。」これには一同呆れ

て、返えす言葉もなかったのをおぼえている。

こういう素ッ頓狂な一面もあったが、少年時代から毎日日記を欠かしたことがないというし、カメラはニューマン・ガーディヤなどという手間のかかるものを持ったり、和洋の山岳図書を丹念に蒐集したり、なかなか几帳面なところもあった。

曽原君がどんな山をのぼったか、レジスター原稿山歴欄をここに写しておこう。

明治四十五年八月富士山。大正五年七月針ノ木峠五色ケ原立山（沼井鉄太郎、槙山次郎、宮本璋同行）。七年三月蔦沼十和田湖（佐藤朝山同行）。八年八月奥白根三平峠尾瀬沼尾瀬ケ原。九年七月赤岳夏沢峠。十年七月蔵王山。十年十月三方ケ峰鹿沢温泉。十一年七月烏帽子雲ノ平薬師岳有峰。十二年二月角間山湯ノ丸山三方ケ峰スキー（藤島）。同年五月三峠山（山口成一、戸沢英一、大島永明、黒田正夫、藤島）。同年八月瓜哇スメロウ山高原。同年十月比律賓ルソン島タール火山、パクサンハン峡カヌー下江。十三年一月神奈山スキー（藤島）。同年六月唐松尾将監峠。同年六月蓼科山白駒池。同年七月木曽駒ケ岳。同年七月苗場山岩菅山横手山（戸沢、藤島）。同年九月地蔵岳鳳凰山。同年十月将監峠惣小屋谷雲取山。同年十月東沢釜沢甲武信岳梓山（戸沢、岡山俊雄、藤島）。十四年七月至仏山尾瀬沼鬼怒沼林道八丁ノ湯（戸沢）。同年八月赤岳鉱泉赤岳編笠山（戸沢）。十五年十月番所乗鞍岳平場。昭和二年九月三城牧場美ケ原（藤島）。同年十月三国山苗場山岩菅山。三年一月角間山スキー（黒田正夫、藤島、黒田夫人骨折）。同年二月栂森山スキー（黒田、藤島）。五年十月カシミール（スリナガール、グルマルグ、タングマルグ漫歩）。七年十月ダージリン、トングウ、サンダップー泊（エベレスト展望の旅）。十八年七月尾瀬沼至仏山狩小屋沢湯ノ小屋。同年九月樺太敷香。同年十月物見山鬼怒沼尾瀬沼田代山会津駒ケ岳。同年十一月足馴峠転付峠樺島。四十年五月蒸ケ湯八幡平。

以上が記載の全部だが、嗣子国蔵君によれば、中学時代（三重県）大台ケ原山や鈴鹿の山へ登ったというし、戦後は国蔵君が長蔵小屋の建築設計を担当した関係もあって、毎年三、四回は尾瀬を訪れ、沼の周辺から南会津にかけての山や峠を歩いたり、武田久吉博士と落合って昔話に興じたりしていたらしいが、山歴欄に省略されているのは残念である。同行者名の記入のないのも、単独行ではなかったとおもわれるが、黒田正夫君や私の名がよく出るのは、ＪＡＣの会員という点を考慮してのことであろう。

またカードの別の欄に次のような記載がある。

○山への誘いは日本山嶽志（中学生時代）、「山岳」、「日本アルプス」（烏水）。

○植物愛好は祖父。林光平先生（小学校担任）。植物図鑑（中学生時代）。

○尾瀬への導きは武田久吉（山岳一号）、大下藤次郎（みづゑ尾瀬号）。

○カシミール、シッキム思慕は長谷川伝次郎、三田幸夫、大谷光瑞の影響。

○山の本は藤島敏男の影響。
○スキーは黒田正夫、藤島と。

こんな具合で私の名も出るので、少し面はゆいが彼の意思を尊重して写しておく。いずれにしても、曽原君の山も若いときだけのものでなく、長く息のつづいた山であった。最後の山行は一橋時代のクラス会（みんな七十歳前後である）を小岩井牧場で催したとき、集りのあと独り飄然とリュックサックを肩に、月なかば、まだ雪一面の八幡平へ出かけたというのだから、その熱のほども推しはかられようというものだ。

大正十三年（一九二四年）十二月入会、会員番号九〇八番の曽原君が、戦後の混乱時代に会員籍をはなれていたのに気付いて、復活を勧めたところ、そんな制度があるのかといってすぐ手続をしてくれた。それから小集会などにも顔を出したり、六十周年記念宴にも出席して、学校の後輩を煙にまいたりしていた。箱根外輪山への東京支部記念山行にも参加して、山頂での万歳三唱の音頭をとらされ、「大日本帝国じゃなかった、日本山岳会万歳」と彼の面目を発揮したり（会報二四六号所載）、会へ戻ったことを喜んでいる様子であった。

曽原君はふるい会報に通信を一、二回のせたきり、会の刊行物に寄稿したことはない。ましてジャーナリズムに縁などなかった。ただ無性に山が好きで、ＪＡＣの会員になって会の仲間と交歓の機会をもつのがたのしみであった。会員としては目立たない存在だったのかもしれない。しかしＪＡＣのような会では、一時パッと目立っても、じきに無関心になり、やがて会からも山からも離れてゆくというような会員よりも、会に対して愛情と関心を長く持ちつづけ、会の動きをじっと見守っているような会員の方が、はるかに貴重な存在なのだ。

曽原君は、そういう大切なひとりだった。不測の事故で彼を失ったことは、会にとって取り返しのつかないことだとおもう。（一九六六年六月記）

（藤島　敏男）

**略　歴**

明治二十九年十月十一日　三重県伊勢市に生まれる。
大正七年四月　一橋大学卒業後直ちに古河合名に入社。古河鉱業、古河電気工業、日本アルミニウム、日本弗化鉱業、宇部貿易に勤務。
晩年は曽原建築設計事務所の監査役であった。
昭和四十一年三月二日　交通事故のため逝去。

## 森本次男氏（一八九九―一九六五）

たいへん迂濶なことであるが、森本先生が終身会員（会員番号一〇八八番、昭和三年九月入会）だったことは、「会報」二四八号一〇頁の訃報を読むまで知らなかった。昭和十七年から終身会員になられた由であるが、最近になって仄聞するところによれば、戦中、戦後の事情もあるが、終身会費を払いこんだ

という理由で、自分から連絡されることもなく二三度住所をかえたせいもあって、山岳会の方では消息不明になったとか。こんな訳で、山岳会ではあまり知られていないと思うから、略歴から誌したい。

明治三十二年二月八日、群馬県前橋市に誕生。スキーの猪谷六合雄氏とは従弟の間柄である。岩清水八幡宮家に養子となり、森本姓を名のる。中学四年の時に京都へ移り、京都高等工芸学校（京都工芸繊維大学の前身）卒業後、京都市立第二商業、市立西京高校、光華女子短大にて教鞭をとる。

旧二商時代、山岳部長となってから、昭和十年秋、京都北山は直谷に麗杉荘を創建「麗杉荘の会」（二商山岳部OB会）が、一中～三高～京大のいわゆるアカデミー派に対して、今日でも実業的なひとつの系統として、京都岳派の底流となっている。

朋文堂版『京都北山と丹波高原』を処女出版され、京都派の心のよりどころであり、揺籃の地である北山を紹介された意義は大きい。自ら北山課程と称された洛北のヤブ山から、ヒマラヤ遠征に巣立った岳人も多い。さらに〝テラ・インコグニタ〟を求めて、奥美濃に山旅を続けた結果が、『樹林の山旅』（奥美濃紀行）として、今日も案内書の真空地帯の古典となっている。

先生は文学集団『昨日』の同人でもあり、アーサー・シモンズにあやかった「朝史門」という筆名で、山の随筆集も上梓されているが、専門は物理と化学であった。

関西山小屋倶楽部と京都山岳会が戦時中に合併した時、日本山岳会や日本アルカウ会に続いて、現存する会では比較的古い京都山岳会（創立大正九年十月）の会名を残されたのは卓見であろう。京都山岳会の初代会長に就任されて以来、戦後岳界の再編成に着手された。故西岡老や今西錦司博士らと、京都府岳連を全国にさきがけて再興された。先生は山岳会も岳連も、つまりは一心同体であると主張されたが、今日それが山岳協会として結実され、満足されていることだろう。

先生は家庭的には恵まれなかったが、上州人らしく荒っぽい反面、チャブさんと愛称され、先生をしたう門弟が絶えなかった。持病の胃潰瘍のためと、戦時中の国策登山への反省から、組織づくりは後継者に托され、一介の山旅人として、峠路の遍歴と亡びゆく廃村への挽歌を、生涯うたいつづけた。

晩年の先生は、山村民俗にも深い関心をよせられ、西岡老と「木曽会」をつくって、木曽古道の研究に没頭された。さらに飛騨路をライフワークとされながら、不幸にも胃癌のため、昭和四十年十一月二十六日午前十時五分、京都府立病院にて永眠さる。葬儀は冷雨ふりしきる十二月十一日、神式により六角会館にて、友人および門弟多数参列して、しめやかな中にも盛大にとり行われた。神道（神官）の家柄のため、戒名というものはない。享年六十六歳であった。

生前は山岳会とあまりご縁のなかった先生であるが、ひょんなことから佐藤久一朗氏の特別のご厚意で、先生の一周忌を記念して、京都北山の大先達のレリーフが除幕されるはずである。先生もこんなことなら、山岳会ともっと深いつながりをもっておくのだったと、おそらく苦笑されているのではあるまい

か。老の一徹から頑固で通した先生だが、山と酒と書物を愛し、孤高の中に大往生をとげられたのは、まことに惜しいかぎりである。

もともと物故会員の追悼文は、比較的古い会員が草すべきものであろう。団体会員であり、しかも門弟の一人にすぎないのに、あえて筆をとったのは、望月さんが「会報」二四九号六頁で、「遠逝された会員のことを『山岳』にできるだけ記しておきたい」と要望されているのに、心を動かされたからに他ならない。

〈主要著作〉

| | | |
|---|---|---|
| 京都北山と丹波高原 | (朋文堂) | 昭和13年10月 |
| 山と漂泊 | (朋文堂) | 昭和15年5月 |
| 樹林の山旅 | (朋文堂) | 昭和15年12月 |
| 山の言葉 | (朋文堂) | 昭和17年10月 |
| 山の風景 | (蘭書房) | 昭和23年6月 |
| 山・旅・人 | (蘭書房) | 昭和23年10月 |
| 比良連峰 | (山と渓谷社) | 昭和36年11月 |
| 木曽路の旅 | (山と渓谷社) | 昭和37年11月 |
| 新版・京都北山と丹波高原 | (山と渓谷社) | 昭和39年6月 |

**(京都山岳会・阿部恒夫)**

## 橋本三八氏 (一九〇三―一九六五)

橋本さんと呼ぶのは、公的の会合でのことであって、朋友間ではさんぱちさんの愛称で通っていた。それがかえって親近感を覚えるし、ご本人も先刻納得済みであり、まして音読が非常に良いのである。JAC福岡支部長をやっている、八幡の末松産業の末松大助さんもだいちゃんの愛称で、友好会社の主役者間で通っているし、「私、大助ですが……」と、公席でも自己紹介し、親しみ易いトレード・マークとなっているのと同じで、ぴったりしていると思っている。三八さんの名前のことを夫人から承わってみると、父親が三十八歳の時の出生であったので、命名されたのですと申されていた。八幡製鉄所職員間で、三八さんの存在は知れ渡っていたであろう。勤務先が新入社員は勿論、研修生として、長年勤務者といえども必ずその門をくぐらねばならぬ教習所(今の教育センター)というところで、その事務掛長であったし、親和会という文化、体育部門の中の山岳部リーダーであったことも、否めない要素を持っていた。

親和会の中には、随分と変り種の有名人が各部門に存在していて「無法松の一生」で一躍名をなした岩下俊作氏(本名八田、筆者とは小学校級友)も居て、三八さんとも勿論交誼を厚

くしていた。告別式にも逸早く馳せ参じ、名文による彼の弔詞は列中の人の涙をさそっていた。その詞文の中に「貴方の微笑を含んだ、山男らしい逞しい写真を見るにつけても、こんなに若々しい情熱と青年に劣らぬ頑健な体格を持ちながら、どうして私達の仲間から去っていったのでしょう。私達は限りない哀傷と寂寞を切実に感じる次第です。橋本さん、貴方が戦後日本として、最初に台湾の新高山を征覇された時、中華民国から贈られた旗に『仁者は山を楽しむ』という文字が書かれています。これは知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむという言葉から出たものと思います。貴方は所謂才気煥発の才子型の人ではなく、寛仁大度の愛情の人でした。……貴方は単なる登山家でなく文筆の才能があり、『九州の山旅』『山と人と』等の著書があります。貴方の感情を抑制した文章と精緻を極めた記録は真に立派なものでした。貴方は惜しみてもあまりある人でした。今ここに貴方とお別れするに当り、私達の目蓋に浮ぶのは、高い山頂に輝く新雪を目ざして登り行く逞しい貴方の姿です。今日はそれに相応しい厳しい寒さです。……」

上記岩下さんの弔詞文にある微笑を含んだ写真とあるは、告別式の仏殿に喪章に包まれた肖像写真のことであって、これは昭和三十一年十一月九州岳連、福岡県岳連主催の第二回九州登山体育大会を、福岡県の名山英彦山を起点として犬ケ岳、求菩提山への山伏峰入りコースで開催した際、筆者が撮影したものであって、当時の「岳人」誌の口絵写真に岳人往来が連載されていて、三八さんの肖像写真を編集部より依頼があった折とて、山姿の写真を写してくれとの要望で、旅館前の桜並木参道でローライフレックスでものにした五、六枚の中の一枚で、苦心の作といっても良いというのは、三八さんの表情はすますと厳しくなり、やたらに笑わすと顔面小じわだらけで、その中庸の柔和な表現というところに至難さがあった。ご本人にも至って喜ばれ、勿論「岳人」の口絵に掲載されていたが、喜世夫人から、主人が生前一番気に入っていた写真だったので、是非あの写真を引伸して告別式に間に合せて欲しいとのことで、急拠半切に伸して差し上げたのであった。

三八さんご自身も大変写真愛好者であって、サロン調ではあるが、大自然を歪曲しない率直さの中に流るる雲、山村民のいぶき、四季の山姿の変遷を前景、中景と巧みに取り入れてあり、九重山荘の主人として六年間の写真記録は、随分なものになっていると思う。筆者が道楽旁々D・P屋を兼業し出してからは、現焼を全部受け持っていて、秀作を四切大に作画するのが楽しみの一つであった。一昨年頃から、九重の四季のカラー写真による絵葉書を作るのだからと、張り切っておられたが、その念願も中絶して全く惜しいことである。カメラはセミ判のセミイコンタと、三五ミリのレチナを愛用されていた。そのセミイコンタを筆者が借用して、昭和二十五年十一月JAC主催の富士山における冬山技術講習会に参加し、氷雪に閉ざされた吉田口頂上の写真をものにした、いわく付きのカメラである。

三八さんの清廉潔白な人格は、山岳人の等しく尊敬するところで、後進の育成指導についても全く得難い人材であった。三

八さんの著書『山と人と』の純益金（福岡県岳連内の販売）数万円の全部を、県岳連の遭難対策基金に寄付されたことは異例の美挙であって、岳連記録の中で永久に開花することであろう。

三八さんも伯耆大山の雪壁において全員雪崩に遭遇し、ピッケルで外傷を受けるショックをうけ、爾来冬山における遭難予防対策については、機会ある毎に熱意ある施策を披歴し、遭対基金蓄積運動の旗頭として尽粋し、今後もこの種の企画遂行に残された岳連員は、責任をもって三八さんの遺志を受け継いでゆくことを誓い合っている。

「若い人たちが山でどんどん死んでいくのはたまらない。遭難ゼロを達成するのは私たちの仕事……。」臨終の枕頭で三八さんのかすれた言葉は、耳朶より消えることがない。また部員には「山に入ってからの雪と岩への一歩一歩は、自分の苦しみを征服することが全部であって、頂に立つなどというのは派生的な目的でしかない」と、訓示していた。

三八さんには多くの山友達があったが、槙有恒氏や藤木九三氏や畦地、足立両画伯などとは、ことのほか親しみ深かったようである。福岡支部設立発会式にも、槙さんは多忙を割いて戸畑の西日本工業倶楽部に来駕され、一同感謝したものだった。三八さんが二度目の入院を医師から申し渡されたのは九月中旬だった。JAC六十周年記念にあやかって、福岡支部総会を九重山の九重山荘（八幡製鉄所健保経営）で開くに当り、病重き三八さんを是非見舞って支部総会に臨みたいと、佐藤久一朗、福井正吉両氏と同道で製鉄病院の三八さんを見舞われたことは、三八さんにとって今生唯一の嬉しさに違いなかった。横臥したままの三八さんが、槙さん来るの朝は嬉しさが一杯で床に起き直り、めったに笑わない顔に満面の笑みをたたえ、僅かの時間ではあったが、発音も充分でないのに盛んに語り、遠来の客に対する感謝の応待、明日をも知れぬ九州の山の先達三八さんを、深くいたわる槙さんの柔かい物腰、接する者は誰も涙なくしては見ておれなかった。

全岳連の創立十周年記念に当り、三八さんに感謝状が贈られ、見舞来訪者毎に話していたところをみると、余程嬉しかったのに違いない。今は主なき橋本家に額に入れて飾ってあるのも、夫君の気持ちを受け継いだ夫人の思いやりであろう。

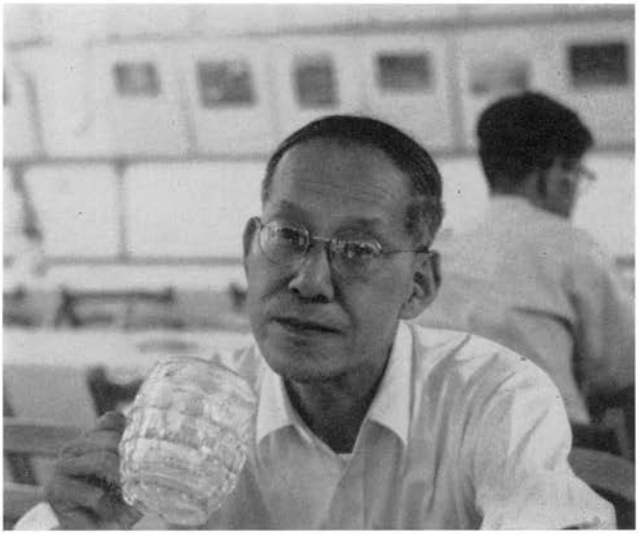
全岳連発足の礎となった第三回国体九重山（昭和二十三年）は、また三八さんのゆかり深い山となってしまった。初七日には、長男賢作さんや山岳部員に抱かれた三八さんの遺灰の一部を、久住山頂にしずめた一事も、九重愛着者三八さんの心を汲んでの行事であったと思う。東京の明治通信社に勤務している長男賢作君の最近の便りに「父の残した山道具で、大いにこちらの山を歩こうと思っています。ヤマキチにはならないつもりですが親子二代となると破産してしまいそうですから……道具のムシボシのつもりで、カビを生やさない程度に歩こうと思っています……」と書かれていて、卒直に山に対する態度を表明されているが、果してどの程度の山キチになられるか予測は許されない。決して無謀な山行はしない人だということだけは確



名誉会員　山　川　　黙　氏
Shizuka Yamakawa (Hon. mem.)
(1886－1966)



北 沢 基 幸 氏
Motoyuki Kitazawa
(1889—1965)



曾 原 喜 久 蔵 氏
Kikuzo Sohara
(1896—1966)



森 本 次 男氏
Tsugio Morimoto
(1899—1965)



橋 本 三 八氏
Sanpachi Hashimoto
(1903—1965)



山川勇一郎氏
Yuuichiro Yamakawa
(1909—1965)



君島久登氏
Hisato Kimishima
(1935—1965)

かだ。

**略　歴**

明治三十六年九月三十日佐賀県小城郡小城町に生れる。四歳の頃八幡市に出る。昭和四十年十月四日逝去、享年六十二歳。大正七年八幡製鉄所に入社、停年退職迄約四十年勤務、嘱託として製鉄所教育関係で八幡大学に勤務後、健保組合設立の九重山荘主任として約六年間勤務。一男二女。

日本山岳会へは昭和十二年（一九三七）六月入会、会員番号一七一三号。紹介者は竹内亮、藤崎定雄の両氏。

**主なる山歴**

八幡製鉄所山岳部創立（昭一〇）、冬季八方尾根と唐松岳（昭一〇）、大雪山、北アルプス、大崩山塊踏査、冬季屋久島（昭二二）、朝鮮金剛山、伯耆大山屏風岩初登攀、台湾新高山（昭三九）その他。

最後に、岳連への貢献もさることながら、常にＪＡＣにそそがれた関心と愛情は尊敬の他はない。九重の名花みやまきりしまの開花は間もない。蓮ならぬ淡紅色の花園に包まれて、永久の眠りにつき給えと、哀悼合掌するものであります。（一九六六年四月）

（月原　俊二）

## 追　悼

# 福田庸雄氏（一八八七―一九六五）

（前略）故中島久万吉氏（元商工大臣男爵）を中心に山のグループがありまして、福田庸雄、吉阪俊蔵、三田尾松太郎、田島勝太郎の同好者が集まって時々懇談会をしておりました。それに木暮理太郎、田部重治、私など招ばれて一夕の歓談をしたことが二、三回ありました。私は福田さんとは山に行ったことは、あまりありませんでした。戦前愛鷹山脈を縦走して、東海道の原へ出たことがあります。この時には福田さんは、お嬢さんをつれて吉阪、三田尾氏と私と、須山の渡辺徳逸氏が先導で愛鷹山荘に泊り、翌日越前岳から愛鷹山稜の峰を鋸岳、三枚歯などを通り、位牌岳から愛鷹山頂の桃沢神社に詣で、それから約二里の里道を通って原駅に出て帰京したことがありますが、これは相当の強行でした。

その後日本山岳会の集会で二、三度お目にかかりましたが、最近では年賀状の交換位でした。それで訃報に接して驚いた訳です。

福田さんは、穏やかなよい人柄の人でした。まことに惜しいことをしました。当時丸ノ内の鉄鋼連盟の重役をしておられたと覚えています。（下略）

（冠　松次郎）

*

会報二四九号に望月達夫氏が、会員福田庸雄氏の逝去について、書かれているのを読んだ。福田庸雄氏は、山好きで山草が好きで、またシダ植物の愛培家でもあった。私共の運営している日本シダの会の会員でもあり、福田庸雄氏の実弟の福田助雄氏もシダの会会員の関係で、助雄氏が兄の追悼記を会報に書いているので思いついて、山岳会の会誌へ転載して庸雄氏の霊を弔いたいと思うのである。

「昭和四十年六月私の長兄福田庸雄は、東大病院の内科の病棟で発病以来半歳、重態と診断されて入院してから三ケ月、心臓喘息の発作や尿毒症と戦っていた。而して入院後一ケ月陽春五月に入ると、病気は奇蹟的に快方に向い面会謝絶の張紙も引込めて、この分では夏には軽井沢の山荘に出かけて暮すことは無理としても、せめて窓から北アルプスの連山を眺めて暮せる小諸の懇意な病院にでも行って、涼しい夏を過せるんではないかと一同喜んでいたが、それも束の間、再度病勢悪化、入院以来百五日間の闘病生活の効もなく、七月十五日遂に七十七年の生涯を閉じて仕舞った。兄は山と山草をこよなく愛した男で、役人時代も土曜、日曜だけは万難を排して山に出かけていた。兄が商工省鉱山局長として在職中、日本の鉄鋼業を確立する為の日鉄大合同に寝食を忘れて取組み、昭和九年日本製鉄株式会社を創立、その監理官を兼ね翌十年退官して日鉄の役員に就任、日鉄鉱業茂山製鉄等の役員を兼務、昭和十七年戦争遂行不可欠の鉄鋼原料を確保する為、支那派遣軍総司令部と日鉄を代表して独断交渉可能の者を派遣せよとの軍の要望に応え日鉄の中支総局長として大陸に赴任、十九年よりは北支那製鉄株式会社の社長に転じ、二十三年内地引上げ迄責任者として残留、帰国後米軍より財界を追放され、その解除後また日鉄関係の傍系会社の社長として昨年夏まで勤務、数年前より高血圧に由来する諸々の障害に悩まされていたので、強引に社長の職を後進に譲って、昨年七月以降は会長になることも固辞し、ただ相談役として止っていた。兄は山登りと高山植物の採集栽培に関しては、私の師匠であったがシダの方は私が先輩だったので、三十四年に入会以来（日本シダの会）兄の軽井沢追分山荘を基地として、浅間やその周辺をよく一緒に採集して廻って、山荘の庭や東京の本邸のロックガーデンに山地のシダ類を集めて楽しんでいたが、入会後（これも日本シダの会）二年位でそれまで自信満々だった足が駄目になり、好きな山登りが出来なくなったので、運転手に無理をいって車で行ける極限まで登らせて僅かに慰めていたようだ。昨年の九月兄の車で兄と笠原氏と私とも一人私達の従兄の八十七歳で今なお矍鑠たる老提督と四人で山中湖畔に二泊、初日は富士の五合目まで行って付近でヘビノネゴザ等を採集、翌日は山梨県林業試験場の会員斎藤敬文氏に案内を依頼して、青木ケ原の樹海でウサギシダその他を採集したが、これが遂に兄との最後の採集行になってしまった。

その後私共夫妻は北海道、山陰地方を半月間廻り、兄は私共の旅行中は信州の山々を車で乗り廻して私共と同じ頃帰京、それから一緒に谷川岳の乗物で行けるところまで行って見ようと、富士の帰りに約束していたが、兄は信州での無理が祟っ

て、時々前掲の心臓喘息の発作を起すようになったので、その計画は取止めざるを得ないことになった。本来私は姉一人、兄二人の四人兄弟の末っ子に生まれたが、次兄を大正十二年の震災の日に失い、姉が昭和八年に病没したので爾来長兄は私に残されたただ一人の兄弟になってしまった。二人の役人時代は年末年始の一週間の休暇は、二人で東北や信越の山の温泉に出かけてスキーを楽んでいた。しかし私が妻の健康上の都合で、昭和九年に東京を引払って辻堂に移転した頃からお互に仕事もますます忙しくなるし、次第に世間も騒がしくなってきたので、揃って年末年始を滑って暮すことも出来なくなったが、それから二十年余のブランクがあって、十年前から今度はスキーではないが、兄が年末年始には辻堂の吾が家に出かけてきて、一緒に正月を迎えることにしていた。それで去年の暮もすでに病中ではあったが、喘息の発作には海岸の方が多少いいと思うから、例年の通り出かけて来ないかという訳で、三十日に私の家にやって来て、四十年の正月も共に辻堂で迎え、今年は寒が明けて少し暖かになるまで、私の家で静養して帰京することにしたらと勧めたので、東京に引上げるときは大分調子がいいように思われたが、自宅に帰って一ケ月余で再び病勢悪化し、平常自分の友人で東大病院に入院して生きて退院した男はいないから、あそこに入院するのは御免蒙りたいといっていた。その東大病院に担ぎ込まれ、予言通り生きて再びあの門を出ることは出来なかったのであった。」（日本シダの会会報七九号福田助雄記より転載する。）

（行方　沼東）

＊

会報二四九号に福田庸雄氏の訃報について、望月さんが書いておられる。故人になられた方にせよ、現存の方にせよ、山岳会で人を論ずる場合、その方が「どんな山登りをされたのか」とか、「どんなお考えを山に対して持っておられたのか」ということが大切な問題であって、その方の職業とか地位などについては、枝葉末節のことかも知れない。しかし、たまたま、福田さんが旧日鉄時代の製鉄業界の長老であったこと、私自身、その晩年に両三度お目に掛って山のお話をした一人であったこと、などを考え併せると、職業上の大先輩であると共に、趣味の上での大先輩でもあったといえるのである。前記、望月さんの記事に引用されている冠さんの御手紙のなかに、いわば枝葉末節に類することであるが、福田さんの御仕事に関する点で若干の誤りがあるので、職業上の末輩である私ぐらいが、この際訂正しておかなければ、そのままに見過されてしまうのではないかと考えて、筆をとった次第である。

福田庸雄氏略歴

| | |
|---|---|
| 明治二〇年　九月六日 | 熊本市に生まる |
| 大正　二年　七月 | 東京帝国大学法科政治学科卒 |
| 昭和　五年　七月 | 商工省鉱山局長 |
| 昭和　八年　九月 | 日本製鉄（株）設立委員 |
| 昭和　九年　五月 | 日本製鉄（株）監理官 |
| 昭和一四年　五月 | 日鉄鉱業専務取締役 |
| 昭和一四年一二月 | 日本製鉄（株）取締役 |

昭和一七年　二月　日本製鉄　中支総局長
昭和一九年　八月　北支那製鉄　社長
昭和二七年　九月　友和産業(株)　社長
昭和三九年　六月　同社　相談役
昭和四〇年　七月一五日　逝去　同日、勲二等に叙せられ、瑞宝賞を授る

福田さんの告別式に、友人或いは後輩として弔辞を述べられた小島新一、横田道三、森田恵三郎の三氏は、何れも口を揃えて、同氏が山を愛されたこと、かなり晩年まで山登りを続けられたことを、同氏のお人柄に結びつけて強調しておられるのを見ても、並々ならぬ傾倒振りであったことが伺われるのである。お目に掛った頃を思い出してみると、「ヒマラヤの話」とか「近頃の山登りの様子」を聞かせろということで、こちらばかり話をして、肝心の福田さん御自身の山登りの話を、あまり聞かせて頂けなかったことが、私としては一番心残りなことである。

（村木潤次郎）

＊

福田庸雄氏は、日本山岳会へは木暮理太郎、冠松次郎両氏の紹介で昭和十六年二月に入会、会員番号一八三番。内地の山は北、中央、南アルプス、その他に足跡を残し、欧州アルプスの一部や支那大陸の山の一部にも登った。昭和四十年七月十五日逝去、享年七十七歳。

（編　者）

# 竹中要氏（一九〇三―一九六六）

竹中要氏は日本山岳会の古い会員であった。同氏は昭和二年東京帝国大学理学部植物学科を卒業して、直ちに京城帝国大学（予科）の教授となり、終戦までその職に留って多数の子弟を育成した。同氏の朝鮮における登山は、植物採集を一つの目的としていたのであろうが、ほとんどすべての山々を踏破しているといってよかろう。冠帽峰連山（二五四一メートル）、金剛山、白頭山（二七四四メートル）にはどれも数回登っている。従って著者に『半島の山と風景』（昭和十三年　古今書院）がある。

昭和十三年には陰山山脈の小五台山登攀、内蒙古の高原で植物採集をして帰った。翌年『蒙彊の自然と文化』（京城帝国大学蒙彊学術探検隊報告書）を出版した。二十年再び蒙古の奥地に入る途中終戦に遇って、苦難な旅行をして京城に戻った。

終戦後は三島に創設された国立遺伝学研究所に入り、そこで細胞遺伝部長となって研究に専心した。しかし、登山の方は足の関節をいためてやらなかった。

氏の細胞遺伝学は、東大時代に藤井健次郎博士から教えられたものであったが、その方面の仕事より、サクラの博士として知られ、また親しまれた。ソメイヨシノザクラの起原を調べた

り、昭和ザクラ、その他の新品種を育成した。この方はおそらく同氏の名を長く伝えるであろう。

氏の育成したサクラの品種は、千代田城（宮城）、修善寺その他に植えられているので、数年後には美事な花をつけると思う。

（木原　均）

略　歴

明治三六年一一月七日　兵庫県で生れる。
昭和一七年三月　日本山岳会入会（会員番号二一三五番）紹介者は藤島敏男、初見一雄の両氏。
昭和四一年三月一八日　胃癌のため東京築地の国立ガンセンターで永眠した。享年六二歳。
理学博士。著書に「日本高山植物概論」「遺伝学入門」等がある。

## 斎藤清太郎氏（一九〇七―一九六六）

昭和四十一年五月四日午前十一時、斎藤清太郎（58歳）、簑口治信（56歳）両氏の遺体が、富士吉田大沢七合目の雪上で発見された。ベテランというにふさわしい御二人の遭難は、信じがたい異例の事故だった。

斎藤氏は明治四十年十二月一日東京浅草で生まれ、済美高校を終えると同時に父の職業である理容イス製造に入り、石田理器（株）の重役として、彼が設計の新形イスが当たり、不況をよそに忙がしくて山へも行けぬとなげいていた。

山は、昭和二年に野歩路会に入った時にはじまり、同じ会員の横田糸子さんと意気が合つて十年に結婚、二女をもうけた。あけび会を主宰して低山、高山、スキーと四季にわたってまめに登る実践家で、情の厚い人なつこい誰からも好かれる徳をもっていた。

奥さんとの憶い出の乗鞍岳へは、毎年のスキーじまいには一人でも出かけていた。国体、全国大会、地区大会の常連で、講習会のコーチなど全国の山に親しんでいた。東京岳連、日本岳連の遭難対策委員長の在任中には、関係官庁を集めての遭対協議会を開いたり、救助組織を動員して国安氏（電々）の大捜索を一ケ月にわたり指揮した業績は感謝されている。

戦後、山岳巡礼クラブに入り、一月の槍ガ岳、北岳等に登る。富士山へは何十回登られたか、登らない月はないといっていた。上越のスキーツアーで、苦しい不時露営をした仲間でもある。

私との最後の山行は、北海道の全国大会ニペソツ（十勝）に登った時で、零下三十度の雪洞で二日間暮らした。帰京と同時に結核を発病し山から離れた。二年間の療養、退院して四年、試運転も快調、今冬は簑口氏と安達太良山へ入っていた。

（遭難経過）五月三日東京発、簑口氏と二人、富士山五合目みはらし小屋に泊る。四日朝六時スキーをもって登る。二十メートルから三十メートルの強風が吹き廻していた。六合五勺ツバクロ沢の大岩かげにスキーをデポして登頂を目指した。七合

三勺の小屋前で難波一郎氏（山巡）と会ったのが最後の姿となった。

大沢七合五勺でシャフトのないピッケル、曲ったアイゼン、時計などが発見され、十時十八分で止まっていた。この時刻の山頂測候所の記録は、西風三十メートル、御殿場観測所の山本三郎氏は、吉田大沢上空で雲が渦を巻いていたのを見ている。遭難地点は、出発から四時間とすると七合八勺付近と推定される。富士遭難の殆んどが、この付近で発生しているので注意したい。山頂部を両側から廻ってくる風と、山頂部を乗り越えてくる風がぶつかり合う地点となり、逆風、竜巻の乱気流が発生する。斜度が強いなどの悪条件をもつ最悪の地帯となる。

夏道を登っていた二人は、竜巻に捲き上げられたか、東からの突風に吹き飛ばされたか、大沢側露岩壁に叩き落とされ、大沢雪渓を一五〇〇メートル滑落し七合目ホテル横、雪渓の末端、高度二七二〇メートルの地点に止まっていた。検案書の死因は頭蓋骨粉砕骨折（脳挫創）とある。

収容作業には山梨県から百瀬舜太郎、秋山英二、芦沢俊雄、石坂博道、小林松男、前島信氏等が駈けつけ協力した。東京から海野治良、中野満、安久一成、高橋照、秋山正人氏等、私達山巡部員十六人、遺族五人が当たり、吉田で火葬、遺骨として帰る。十日の告別式は四百人にのぼる会葬者により冥福が祈られた。

法名　自適院富岳日清居士

御遺族の意志により、生前から登山事故防止に尽力していた故人の遺志を尊重し、御香奠の御返し分すべてを、日本山岳協会遭対委員会へ寄贈されたことを付記する。

なお日本山岳会へは昭和三十三年六月、折井健一、渡辺公平両氏の紹介により入会（会員番号四五二三）している。

（高橋　定昌）

## 君島久登氏（一九三五―一九六五）

先頃お彼岸に真新しい君の墓石に額ずいて、一人静かに香を焚いた。春の午後の暖かい日射しが、辺りを一層静寂なものにしていた。私はその時恐ろしく純情で、ひたむきだった君が、日焼けした顔に白い歯を見せて、そこに立っているような錯覚を懐しんでいた。

昨年の七月二十日の未明、けたたましい電話に呼び起されて、君のモンブラン山麓での墜死を知らされた。辰沼君からの電話であってみれば冗談事であろう筈はない。その時君のお宅へ事の次第を連絡するよう依頼を受けたのであった。一ケ月ばかり前に、あんなに喜んでフランスへと旅立って行ったばかりなのに、一体こんなことがあろうかと、二、三日を呆然と暮してしまった。それから約一ケ月、告別式を終るまで忙がしい日が続いた。

君は職として帝都高速度交通営団設計課に勤務し、上司同僚の信頼を得、また山岳会東京支部委員としてよき先輩、心を許す山仲間を得ることができ、君の日々はほんとに張り合いのある毎日であったろう。君が若き日の遍歴は終って、いわば人生の最高潮に至らんとする時、忽然として世を去ってしまった。君がモンブラン山稜の遺影と君が残した書籍とは、ささやかな私の書架に飾られてある。君が短かかった三十の人生はかくて終った。君が御家族夫人達の悲嘆を思うとき、今日も亦胸が痛むのを覚える。

私が君を知るにいたったのは、そんなに古いことではない。その初めのことははっきり覚えていないけれども、富士山に雪崩遭難の事故があった時のことかと記憶している。吉田口馬返しで一緒になり、遭難現場を見に行った時のことであったろう。君の風体は襤褸のチョッキは着ているものの、殆んど裸に近い恰好で、何と言う汚ない奴だろうと言うのが第一印象であった（案外お洒落で凝り性の君だったのは、後日発見した所であるが）。そこから佐藤小舎までリュックやなんか、すっかり君に背負わせて、空ら身で登って行った。

その後君は母校山梨県立第一高校山岳部の監督として、何年か努力してくれた。北岳のバットレスには季節を問わず、よく単独で行っていたようである。いくつかのバリエーションも君はトレースしていた。君の部員指導は相当きびしいようであったが、ずい分山の勉強もしていることが段々分って来たので、安心して任せることとなった。君のひたむきな、真摯な性格から、時として仲間と意見の対立を生ずることもあった。この何年かの間が、迷いと言うか、遍歴の時代であったのであろう。けれども、これと思う所に信頼と全生命を賭ける、美しい資質をも備えていることを、早くから読みとっていた。

君が東都に職を得ることとなってから、幸いに山岳会の先輩同僚は君の望みに応えてくれたと思う。上京してから一、二ケ月に一度は、私の宅を訪ねてくれるようになった。その頃君と一緒にヒマラヤの計画を実現しようと、ささやかな幼稚なものであったが、情報を交換し調査を続けることとなった。体力も衰え、足も不自由になってしまった私でも、君の助けに縋って根拠地位まで行って、巨峰を眺めて見たいと言うのが、私の人生最後の望みでもあったのだ。それは各様の事情でなかなか実現するにいたらなかった時、たまたま白い峰の誘いと、岳界の巨人の風貌を見、その謦咳に接すべく、フランスへと旅立つこととなったと思う。

君が生花、茶道にそれぞれ師範の資格を持っていたことを知っている人は、案外少ないかも知れない。

君は常々山で遭難することなどないよと、家族の方々に言っていたそうである。そうだとすれば、人に勝れた体力と、バランスのとれた登攀技術と、大胆さに恵まれた君のことだから、困難な氷壁に立ち向かった時の事故とは思えない。路傍の小石に躓ずくと言った些細なことが、大事を引き起してしまったとしか思えない。

金峰山麓金山の木暮翁の記念碑のある台地に、嘗って君が植

えてくれた木も枯れてしまっている。今年の五月御家族の申し出により、辺りに相応しい常緑樹を植えて、君の短かかった生涯の永遠の記念にしようと思っている。

略　歴

昭和十年八月　甲府市に出生。
昭和二十九年三月　山梨県立第一高等学校卒業。
昭和三十五年三月　日本大学工学部卒業。名鉄工業株式会社静岡支店入社、同社を退社帝都高速度交通営団勤務。
同　年三月　日本山岳会入会（会員番号五〇二五）紹介者は百瀬舜太郎、三井松男。
昭和四十年五月　本会エベレスト委員会から推薦され、会員倉知敬氏と共に国際アルピニスト集会（Le Ressamblement International d' Alpinistes）に参加することとなり、六月下旬出発。七月十日シャモニー着、十二日から集会が始まり、十三日は快晴に恵まれ倉知氏と二人でモンブランのブレンヴァ山稜を目ざし、十四日に登攀を終った。その後三日間天候悪く、十八日モンタンヴェール付近のフレート・デ・シャルモで不慮の墜死をとげた（会報二四三号六頁参照）。

（三井　松男）

## 山川勇一郎氏（一九〇九―一九六五）

山川勇一郎君がアンデスで遭難死したという外電が私に伝えられたのは、昨年（一九六五年）十一月十一日の午前だった。それが新聞に出て、私は多くの人から悔みを受けた。ところが、その後山川君が生きているらしいという報道があった。ヘリコプターからクレヴァスの中にいるのを発見したというニュースを、私は信じかねたが、一縷の望みを托していた。しかし十三日の夜半、私は旅先の宿で電話に起され、山川君の決定的な死を知った。

遭難の真相が大阪アンデス隊の隊長久野英一郎君から、こまごまと私に書き送られてきたのは、遺骨が羽田に着いた二日あとだった。それによると、山川君は十一月九日午後行衛を絶ってから、十二日の午後発見されるまで、全く消息がなく、いろいろの噂はみなデマであることがわかった。

山川君がチリへ渡ったのは一昨年の春だった。私も誘われたが、ほかに計画があったので断わり、彼一人鉱石輸送船に乗って出かけた。三ケ月位という予定だったが、放浪癖のある彼は南米のあちらこちらを訪ね歩き、一年半以上も過してしまった。昨年秋、中央アンデスのロ・バルデス地区へ登山に来た大阪府岳連隊に参加して、単身ロマ・ラーガ氷河の雪原を歩いていた時、径四十センチ、深さ二十三メートルの雪をかぶったクレヴァスの穴に落ちた。必死の捜索の結果三昼夜ぶりに発見されたが、凍傷甚だしく十一月十二日午後五時三十分絶命した。救助隊がクレヴァスを見つけて、大声で呼ぶと、うめき声らしいものが聞えた。作業が困難で穴の底へおりるのに一時間ほどかかった。初めにスケッチ・ブックを見つけ、その奥にポンチ

ヨーがあり、山川君がいた。救い出して濡れた衣服を着換えさせ、人工呼吸を二時間続けたが、ついにその効がなかった。

三昼夜クレヴァスの底で山川君は生きていた。その間の彼のことを想像するのは私にはつらい。ナイフで氷壁にステップを切り、脱け出ようとした形跡があったという。ピッケルを持っていたら助かったかもしれなかった。しかし彼はスケッチが目的で、登攀するつもりでなかったらしいから、装備も食糧も持っていなかった。

遺体はチリ空軍のヘリコプターでサンチァゴに運ばれ、在留邦人、チリ山岳連盟の人たちによって、手厚い葬儀が行われた。遺骨は空路羽田に帰り、十一月二十九日麻布の国際文化会館で盛大な追悼式が挙げられた。

遺作や遺品が到着して、三月新宿の伊勢丹で遺作展が開催された時は、私はシルクロードの旅に出て日本にいなかった。聞くところによれば、山川君の絵は、主催側もおどろいたほど、多くの人々に買い取られたという。

山川君は私の三十数年のよき山友達であり、親しい話相手だった。最初に出あったのは菅平のスキー場で、彼はまだ美術学校の学生だった。その次は十二月半ばの乗鞍岳で、彼一人冷泉小屋で自炊しているのに行きあった。一緒に快晴の乗鞍岳に登り、その頂上から白山を眺めながら話しているうちに、その白山の向う側の私の故郷が、偶然彼の故郷でもあることを知った。

山川君の祖父の山川勇木氏は、私の生れ故郷の小さな城下町（石川県大聖寺）の旧藩士で、青年時代笈を負うて上京し、のち横浜正金銀行（現在の東京銀行）の最初の頭取になった人である。山川君の父君の麒一郎氏は造船の権威の工学博士で、彼が神戸一中の出身であるのは、神戸が父君の任地であったからである。

そういう恵まれた家庭に育った三代目の山川君は、おっとりしてコセコセしたところがなかった。先を争ったり、他を押しのけたりしなかった。大きな図体に似ず、実にやさしい心を持っていた。道端の草花や小鳥、棄て犬や棄て猫にも、彼は無関心で通りすぎることが出来なかった。彼の絵が多くの人に愛されているのも、軽薄やコケオドシのない、誠実でおおらかな彼の人柄が現われているからであろう。

山川君は本当に山が好きだった。私はよく彼と一緒に山やスキーに出かけた。八年前ヒマラヤへ行った時も、最初の言い出しは私と山川君だった。彼はよく言った、暇のあることが第一の贅沢ですよ。たしかに彼はその贅沢を十分に楽しんでいた。一緒に山やスキーに行っても一緒に帰ったことはごく稀で、彼だけがあとに残り、いつ戻ってくるかアテがなかった。ヒマラヤの時もそうで、いつまでもインドに居残っている彼を、用件のためようやく電報で呼び戻した。今度の南米も三ケ月の予定が一年半たっても帰って来ない。そしてついにアンデスの雪の中で消えた。山へ行ってももう君のおだやかな笑顔は見られないし、私の山の文章にいつも描いてくれた君の挿絵も、もう貰えなくなった。

今年の旧盆に、山川君の遺骨は故郷の山寺の墓地に収められた。祖父の勇木氏の建てられた立派なお墓である。それと比べものにならないが私の家の墓が、そこから五十メートルと離れないところにある。いずれ私もそこへ入るだろう。そうなれば私たち二人は、生におびやかされることもなく、安らかな骨となって、永遠に近くにいることになろう。（深田　久弥）

*

日本山岳画協会の一員として、同志の一人山川勇一郎を失ったことは痛惜に堪えない。

山岳画といえば、文字通りに解釈すれば山の画ということになるが、私ども山岳画家としては、単に山を写した画というだけでは満足しがたく、山に対する深い愛情と崇敬の心をこめて山を描くところにこそ、山岳画というべきものが存在すると考えるのである。

こういった意味から、ほんとうに山岳画家といえる人は思いのほか少ないのである。山川勇一郎はその数少ない山岳画家の一人で、身体も健康で春秋に富み、将来にのぞみをかけていただけに、このたびの遭難をきいた時は、愕然として眼の前が暗くなる思いであった。

山のきびしさ、おそろしさを十分知っていた筈の山川勇一郎が、こともあろうに、アンデス山中氷の中で命をおとすとは、なんということであるか。かんがえ及ばないところだが、すべて天命とあきらめるよりほかないことであろう。いまは遺された作により、故人をしのび魂やすかれといのるのみである。（石井　鶴三）

略　歴

明治四十二年（一九〇九）四月二十六日誕生。神戸一中を経て昭和九年東京美術学校を卒業、昭和十六年応召、昭和十八年現地除隊後、昭和二十一年帰国まで華北で描く。

安井曾太郎氏に師事し、一水会、連袖会、窓井会、日本山岳画協会の会員であった。昭和三十三年一水会優常受賞。

スキー、山旅をよくし昭和三十三年には深田久弥氏らと共にジュガール・ヒマール及びランタン・ヒマールを探査する。

昭和三十九年　日本山岳会入会（会員番号五七〇七）紹介者は深田久弥、中村清太郎の両氏。

昭和三十九年三月　北九州戸畑を出航、四月チリ着。十一月ボリビヤ、ペルーを訪ねクスコ市にて飯山達雄氏と奇遇、チリ南部を同行する。

昭和四十年十一月　大阪府岳連岳友クラブ中央アンデス登山隊に同行、同月九日中央アンデス、ロ・バルデス地区、ロマ・ラーガ氷河に設けられた第一キャンプ上部の雪原で、雪をかぶったクレバスに落ち、十二日三昼夜ぶりに救出されたが、全身の凍傷甚だしく、十七時三十分絶命した。享年五十六歳。同十八日サンチァゴ在留邦人、チリ山岳連盟により共同墓地礼拝堂で慰霊ミサ及び告別式が行われた。同二十二日遺骨は空路羽田に帰着。十一月二十九日麻布鳥居坂国際文化会館講堂において追悼式が行われた。本会からは松方、日高、深田氏ら多数の会員が参列し、深田理事が追悼の辞を述べた。

昭和四十一年三月二日から九日まで読売新聞社主催、後援団体の一つに日本山岳会も加わって遺作展が催された。南米での数多くの傑れた作品と過去の山の絵が展示された。

故人の山の絵は「山と渓谷」その他の山岳雑誌に古くから収載され、多くの岳人に親しまれた。「山岳」第五十三年の巻頭にもドルジェ・ラクパを描いた油彩の一葉が載せられている。画集としては「ヒマラヤ画集」（一九五九年十一月一日山と渓谷社刊）がある。（編　者）

## 図書紹介

### アンデスからヒマラヤへ
#### —早稲田大学登山隊の記録—

浜野吉生著　A5判　二七四ページ　写真三〇ページ　一九六六年五月二〇日　白水社発行　定価九〇〇円

一九六二年のアンデス、コルディエラ・ブランカのネバド・アルパマヨ（六一二〇メートル）第二登、一九六五年のネパール・ヒマラヤ、エベレスト山群の未踏峰ローツェ・シャール（八三八三メートル）の試登の記録である。

著者は、この両山行に参加した早大大学院学生であり、目下同校山岳部の監督である。ともに隊長は吉川尚郎であり、南米隊の隊員はそのままヒマラヤ隊の隊員でもあり、同じ部で同期に育った人々である。

アルパマヨは一九五七年ギュンター・ハウザー隊により南稜から初登頂されたが、早大隊は同ルートを安全確実に攻め、第二登に成功した。もっとも、これはこの隊の後半のことで、同山塊南部のチュルプ（五四九三メートル）の西壁を直登し、七月十八日初登頂の方が先きである。翌日北隣りのネバド・ウァマリンパ（五一〇〇メートル）（命名）へ初登頂した。北上してアルパマヨ谷に入り、八月九日から十二日にかけて、南稜にルート工作をし、十三日アルパマヨに第二登した。続いて北西にあるミルアコーチャ（五四八〇メートル）に八月二一日初登頂した。これらの山は氷雪の峻峰で、ヒマラヤへの瀬踏みといえる。

ローツェ・シャールは八千メートル峰として、かねて注目していた山である。登山申込みで問題が起きたが、本書の三分の二を費しても、まだ足りない気がする。ディレンフルト教授が『第三の極地』でむずかしい山といったが、その通りであった（まだ東面は未知だが）。南西稜にルートを見つけ、攻撃をかけるが、氷雪と風のはげしいこの稜を登って、安全地帯に出る前に、成川隊員の滑落が起り、この救助中に村井隊員の高所低酸素の疲労からの疲弊、これに加えて隊長の怪我という三重苦を背負っての隊員の行動は、筆舌につくしがたいことであったろう。救出が終ると、残された松浦、井口、ピンジューがアタックを開始し、五月十五日、三人は八一〇〇メートルに達したが、そこにあるギャップに登頂を断念した。

著者の人柄は明るく、素直な記述に若さと天性を感じる。不

運にもめげない点は立派である。隊長が撮影した映画『ローツェ・シャールに挑む』の後半の緊迫感の方が生々しい。それだけに、著者の問題の掘り下げ方が、淡白であるという感をうけるが、これは文字と映画の差であるとはいい切れない。それが書きされるようになるまでには、まだ時間が必要なのであろうし、これから身につけてゆく、ゆき方でもあるだろう。アンデスの登った山の写真は入れてほしかった。なお日付などの校正ミスが目立つ。写真・造本は佳である。

〔諏訪多栄蔵〕

## あるガイドの手記

佐伯富男著　A5判　二五四ページ　写真入り　一九六六年四月二十八日　あかね書房発行　定価五五〇円

「ガイド」という言葉が気になるし、著者も決して「ガイド」として生活しているわけではあるまい。この題名には少々抵抗を感じるが、この本が作られているとき、著者はパタゴニアの氷河にかこまれていたはずだから、この題名は本屋が勝手につけたに違いない。

著者とはじめて知りあったのは、昭和三十四年読売新聞社が日本山脈大縦走をやったとき、東からの縦走隊の隊長として彼が活躍して以来だが、それよりも彼の豪傑ぶりにびっくりしたのは、日本山岳会が月山で最初の海外登山技術研究会を開いたおりだった。

会場に当てられた志津の宿屋の広間で、辰沼ドクターが高所医学について蘊蓄を傾けている最中、壁ぎわで大いびきをかきながら、寝込んでいる男がいた。たっぷりおみきがはいった、佐伯富男であったことはいうまでもない。その研究会で、彼が持参してきたスキーとストックが、また異彩を放っていた。ストックは上にトビ口のついた、しかもリングが輪カンほどもある一本杖である。月山の下りで、彼はそのスキーとストックを巧くみに使いこなして、豪快なシュプールを画いていたのが、まだ印象に残っている。とにかく彼は体に似あわない豪傑であった。

その著者の性格が、そのまま文字となったのが、この本であるといえるだろう。「トンコ山日記」、「山は、おっとろしい」、「アワ、なで、雪崩」の三章にわかれ、生れ故郷の芦峅での幼い日の思い出から、立山、剣を、文字通り自分の庭のように活躍する著者の面目が躍如としている。

文章の大半は、山での遭難事故についてふれたものだが、とくに意識して書いたというよりも、自然と話しがそこへ移っていったという感じで、素朴に、山の恐ろしさと、そして、その救助がどれほど大変なものかを物語っている。そして、その中心として活躍する著者の、スーパーマン的な活躍に思わず胸を

打たれる。といって著者は決して自分を、誇張して語っているわけではない。適度にお酒がまわって、おしゃべりしているように、そこにユーモアがただよい、一風変った面白味のある文章となっている。大学山岳部のシゴキについて、著者はそれがいかに非常識なものか、実際の目撃談をしるし、また雪崩について、身近かに発生したさまざまな例をあげて、その危険を警告している。

「あるガイドの手記」などという題名は、いかにもものものしいが、この本はそのタイトルとは関係なく、著者のどっしりと地についた鋭い登山観を通じて、たんたんと綴っている遭難救助話で、そこに貴重な教訓が山ほど盛られているのである。

〔山崎　安治〕

## 心に山ありて

今井雄二・喜美子著　A5判変型二五六ページ　写真一七葉
一九六五年五月二九日　(株)同信社発行　定価七五〇円

昭和三十九年の五月に、今井雄二さんは『高原風物誌』を同信社から出版された。この時は装釘などのご相談をうけたので、本の評判を耳にすると私もうれしかった。どちらかというと派手なことを避け、控え目で、しかもユーモラスな人柄が、著者を直接に知らない読者にもすぐ理解できたと見え、若い山好きのあいだでも話題となった。

『心に山ありて』は、それから一年後の、昭和四十年五月の発行だが、今度は今井さんご夫妻の共著で、まず書名に感心した。ご夫妻の長い山の生活、山を忘れることのない生活に、つまりそれを綴られた内容に、まことにふさわしい書名である。

キャンバス地の、黒の背文字だけのこの本の目次をひらくと、そんな必要もないのだがというように、ごく小さい※印がついて、それが今井夫人の書かれた文章である。幼き日の山、山小屋の青春、岩との戯れ、雪山そのころ、孤独な散歩、還暦登山、と分けられ、そこに、かつて書かれた文章や想い出の記が数篇ずつ編まれて、五十年にわたる山行が、今は美しい文学として結晶している。

今井さんは、既にふるさとの飛騨の山を少年時代から愛して、精神的悩みを山によって救われたという方だが、一橋在学中に、四万温泉で当時十四歳の少女であった喜美子夫人との出会いがあり、九年後に結婚、その後おふたりの山行は現在に続いているが、いつも必ず一緒の山行があったわけではない。

昭和の初期には女性の登山は、今では想像しにくいほど珍らしかったし、そういう点では日本の女性の登山の歴史を、つくって来られたとも言える。

戦争中に今井さんは、白樺湖に近い南平で炭焼きをしておられた。(この生活は前の『高原風物誌』に詳しく書かれている。)

今井さんは、ルソーにせよ、セナンクールにせよ、よく選んでよまれた文学作品を、実によくご自分のものにしておられ、独自の山に関する静かな文学的境地をひらいておられるが、山を愛する心は文化の所産であるという考え方も、長いあいだに築かれて来た一つの山の思想だと思われるし、またこれほど山での体験を、一つの貴い考えにまで育て上げられた人も、滅多には見当らないのではないだろうか。

また一方、夫人の文章の中では「山と女ごころ」は、現在その数は非常に多い女性の山好きの人たちに、よんで頂きたいエッセエである。というのは、今井さんの場合にはもちろん家庭生活に入られてからも、山登りを続けるのにいい条件ではあったにしても、精神面での勇気（例えば子供を残して山へ行く母親としての）や、その他女らしくはあるが、そのために一層強くなければならない心、そういう学ぶべき大切なものが、ここには語られているからである。

〔串田　孫一〕

---

## 義　一　日高に逝ける登山者

義一追悼録編集委員会編　A5
判三五五ページ　写真多数入
一九六六年三月一日刊　発行者
沢田巳之助　非売品

AP通信社のテレタイプが、その日、東京支局発で異様な電報をたたき続けていた。

"I have dug and dug, but still I cannot see light. Mother, I truly regret that I must die now. I think the time has come. I'll be watching over all my friends and family from heaven. Please take care of your bodies."……

昨年の六月十六日、私は会社の編集局の片すみにあるテレタイプから流れ出てくるこの電文を、喰い入るように見つめていた。

北海道日高山脈札内川上流十ノ沢で、昭和四十年三月十四日未明雪崩のため雪洞がつぶされ、北大パーティ六名が遭難し、リーダーの沢田義一君はただ一人、雪崩にうまりながら四日間脱出を試みたがついに空しく、二十四歳の生涯をとじた。そのとき彼は地図の裏に、くわしく遺書をしたためていた。その遺書が六月捜索隊によって発見され、大きな反響を呼んだが、そのニュースは日本ばかりでなく世界中に伝えられたのである。

遭難の模様を、遭難者が死を前にメモしておいたというケースは、古く昭和五年一月剣沢小舎の東大パーティ以後いくつかあるが、沢田君のものほどきちんとしたためられていたのは、初めてではないかと思う。

本書は、サブタイトルにもある通り、リーダーであった故人の追悼録で、山歴、遺稿、追想、遭難、年譜にわけ、くわしく故人の面影を伝えている。ことに遺稿の章は、山行ノート、日記抄その他、札幌からの手紙の三部からなり、本書における最

も重要な部分を構成している。山行ノートは、日比谷高校時代の一九五八年春の鹿島槍天狗尾根、一九六二年十二月知床半島縦走、六三年春の剣から燕への縦走記三編。日記は昭和三十六年四月から三十九年十一月まで。札幌からの手紙は、北大に入学した故人の、札幌から父母にあてた手紙がおさめられている。高校時代の若々しい山登りから、北大山岳部の生活を通じて、次第にたくましく成長をとげていく過程がはっきりと読みとれるし、またきわめて温かい雰囲気にくるまれた家庭生活が、そこに浮き出している。希望通りの就職も決まり、三月四日、あとは卒業式を待つばかりと、父あての端書をしたため、胸をおどらせて山に出かけ、それから十日後に最後となったペンがとられた。遺書は、それから三月あとで遺体とともに発見されたのである。

私の手もとにいま『歩み』という遺稿集がある。昭和十五年一月、やはり日高の札内川で雪崩にやられた北大山岳部有馬洋、葛西晴雄両氏の追悼集で、昭和十六年四月に発行されたものだ。清楚な、いかにも日高の山でなくなった人をしのぶのにふさわしいような書物である。それから二十五年たって、また一つ立派な追悼集が北大関係者によって編まれた。喜ぶべきことか、悲しむべきことか。たとえどんな見事な追悼集が出たところで、悲しみが消え去るわけではない。私は美しい追悼集をみるたびに、いつもそう思うのである。

数日前の新聞によると（昭和四十一年七月二十三日朝日新聞）、札内川六ノ沢で、また北大パーティが渡渉中、流された女子部員を救おうとしたリーダーとも二人が、行方不明になったという。札内川は恐ろしい川のようである。

なお、本書は、学友先輩など関係者による追想記をはずし、『雪の遺書』と題し大和書房から発行されている。〔山崎安治〕

## エヴェレスト登頂記
### ―一九六三年　アメリカ隊―

ジェームス・アルマン著　丹部節雄訳
A5判　四八〇ページ　写真多数　一
九六五年一二月一五日　ベースボール
・マガジン社発行　定価三八〇〇円

この原著 "Americans on Everest" については、すでに「山岳」第六十年に吉沢一郎氏による紹介が掲げられているので、やや屋上屋を架する感があるが、邦訳を通じての読後感といったものを、簡略に記すことにする。

ノーマン・ディレンファースに率いられたアメリカ・エベレスト遠征隊（AMEE）は、周知の通り一九六三年五月一日に南稜から、さらに同月二十二日に南稜と西稜とから、それぞれ二人ずつを登頂させるという偉大な成果を収めた。とくに西稜からの攻撃は処女ルートであったばかりでなく、このルートで登頂に成功したのちサウス・コルを経由して、ローツェ・フェ

ースを下降するというトラバースに成功したのであった。「過去何十年もの間、ヒマラヤの高峰を縦断することは登山家の夢だった。私たちがとくにうれしくかつ誇りに思うことは、これがヒマラヤ最初の縦断であるというだけでなく、それがエベレストでなされたということである」と、隊長は語っている。したがって第十四、十五の両章は全巻を通じての最も印象的な部分で、この遠征記をエベレスト文献のなかの重要な一つとして定着させるものと言える。そして、このあたり訳業も原文の精彩を失なうことなく伝えているように思われる。

この書は第一部「山行」と第二部「遠征隊資料」から成っており、第一部の方はジェームス・アルマンの筆でまとめられている。アルマンは右脚の故障でカトマンズにとどまって、遠征隊の書記として任務を果したが、元来、山の著述家として一家を成しているので、隊員の日記や談話を材料にして書き上げた。随所にアルマンらしい才筆が認められるが、時にはその記述が巧みに過ぎて——たとえば映画的手法を連想させるあたり——かえって迫真力を減じているのではないかと思わせる面もある。この点は別に訳書に責任があるわけではなく、ただ私自身の読後の一印象である。

米国的な表現の多い、しかも部厚な一冊を、比較的すみやかに全訳した訳者には、その労をねぎらいたい。ことに原著で百ページを越えている資料篇についても、それぞれの科学分野の専門家を煩わして全訳された点は、今後の海外遠征のために役立つにちがいない。

残念なことは、折角の写真があまり鮮明でない点で、これも原著自体がひどく悪いので、責任はそちらにということになろう。訳書の方には、ナショナル・ジオグラフィック・ソサイェティから直接貸与された、カラー写真が加えられている。折衝の努力が酬いられたもので、訳書にとってのプラスといえよう。AMEEの写真収穫は、その後、サンフランシスコのシエラ・クラブから“Everest The West Ridge”として刊行された。この方は写真そのものも、製版も、編集も第一級のものと称してよく、私たちに十二分の満足感を与えてくれる。とくに、それらの写真が、本書の資料篇にも記されているように、日本製カメラに依るものが多かったという点も、快とするに足るだろう。

〔島田　巽〕

## “Le mie montagne”

Walter Bonatti

Zanichelli Bologna, Italie, 1962, L. 5600

この間、望月君とあった時、この本の話しが出たが、彼も「ボナッティという男は、際どい山登りばかりやっている男ですね」といっていた。全くその通り、どのページをみても、何

処を読んでも、常に人間の限界スレスレのところを攀じ登り、攀じ降ってばかりいるような印象を与えている。よくあれで神経が擦り減ってしまわないものと感心するが、実際会って、あの大工の棟梁的な真黒な顔をみると、擦り減るのは岩の方ではないかという感じがしてくるのである。

今度、近藤等氏が、仏訳から日本語にしたのを白水社から出したが（定価九五〇円）、よく訳してある、というと高飛車に聞えもしようが、私のいうのはそんなつもりではない。やはり慣れた人は違うもので、私などとても足許にも及ばない。私のところにあるのはイタリア語の原本と英訳のものとであるが、やや厄介なところをスラリスラリと流している。原文を変えてしまうのではなく、意味を素直に日本語に表現しているのである。

唯、近藤氏の訳には、原本及び英訳にもある Traversata sci-alpinistica delle Alpi (Through Alps on Ski) という二三ページ分（原本）がぬけている。これはスキーによるアルプス縦断記（六六日で一七九五キロ走破、登降した高度総計一四六、三八六メートル）で、山スキーに関する用具その他への有益なアドバイスがあるので、やはりあった方がよいように思う。

近藤氏の訳本の中でちょっと気がついたことは、校正洩れは大してないが、スキアン・カングリはキヤン・カンリ、クエン・ルンは崑崙、ヒエロ・コンチネンタルはイエロとした方がよいと思ったことである。

ボナッティの登山観は、近藤氏もあと書きでいっているように、その実際行動における尖鋭さにも拘わらず、根は古典的、正統派的思想から発していることに気がつくのである。そういう点は、前書きや、ドリュの南西岩稜登攀記をよく読むと理解が出来る。

それから彼はいつも限界すれすれの、いわば劇的な登攀ばかりをやっている男のように見えるが、彼の生涯での最も劇的なエピソードが、第一七章のフレネイの中央岩稜記で語られている。この章一つ読んだだけで、ボナッティの人間と技能のほどがよくわかるし、非常に示唆に富んだ文章なので是非読んで欲しいと思う。

尚、この本の英訳本についての紹介は、私が日本山岳会の会報第二四七号及び二四八号で行なっているので、一度目を通しておいて頂きたい。

〔吉沢　一郎〕

---

## "EVEREST The West Ridge"

by Thomas F. Fornbein, Introduction by William E. Siri, Edited by David Brower, Sierra Club, San Francisco, 1965

202頁、カラー写真100枚、$ 25, 350mm×260mm

索引なし。

この本の予告は大分前に出されていたが、値段をみると二五

ドル、一寸考えると安そうに思えるが、日本円に換算すると、本屋の手数料や送料を入れると一万円にはなる。ちょいと飛びつきにくい値段である。私は暫らく静観することにした。

ところがである。三月二日付の手紙がＡＡＪの編集長アダムス・カーターから来た。――この本は少し高いので（彼にも高いと思えるのかな？）、もし貴殿がもう買ってあるなら贈らないが、まだなら一冊贈呈したいと書いてある。毎年私がＡＡＪに原稿を送っているので、そのお礼という意味からしい。私は〝高嶺の花〟だと思っていた本だったので、早速送って欲しいと返事した。やがて、それが大した損傷もなしに船便でついた。私は直ぐお礼の手紙を書いた。折り返えして来た彼の手紙の冒頭に、"Of course, I thought of you when first saw it" と書いてあった。私は今までに本のこと、特に横文字の本のことで、こんなに感激したことはない。やはり苦労はするものだ、とつくづく思う。

エピソードはこの位にして主題に移ろう。

著者のホーンバインは、一九三〇年に St. Louis で生れ、山はロッキーの Longs Peak が最初だが、本格的にやり出したのは十四歳の時からであり、その後、米国西部の山々から、一九五七年にはアラスカの難峰、ハンティングトンに挑み、一九六〇年には、クリンチやアンソルドとともに、マッシャーブルムへ行っている。その時の登攀記がＡＪとＨＪに出ている。

現在（一九六六年）はシアトルに住み、妻の他に五人の子供がいる。それも規則正しく、6、8、10、12、14ということだ。ワシントン薬科大学の助教授で、専攻は麻酔学、生理学、生物物理学であるが、最近は呼吸生理学を教え且つ研究している。一九六三年に酸素を担当したことも当然であろう。その当時は海軍少佐で、サン・ディエゴの海軍病院に勤務していたので、特別休暇を得て、参加したわけである。

この本は、著者が書いたものではなく、物語ったものである。というと妙に聞えるが、その意味は、単なる記録ではないということで、彼も講演をする時は、映画の題名みたいであるが、いつも "West Side Story" という題でやっていたそうである。この本の題名も、はじめは "How the West Was Won" か、"The One Less Traveled by" ということになるところであったが、結局保守主義が勝を制して、首記のような、尤もらしい平凡なものになってしまったのだという。著者自身には余り気に入っていないようである。

この本は写真と本文と多くの先覚者の寸言の引用から構成されているが、まず本文の基になったものは、彼の日記、妻に宛てて書いた手紙、遠征隊員間の討論と無線による会話の録音などであるが、釘や鋲に関する表面的なものではなく、もっと深く心に触れた、内省的な書き方、運び方をしている。それに彼の文章が特に人の心をうつのは、彼自身が現場にいた人間であることと、その生来の純粋な感受性にあるようである。

約一〇〇枚に及ぶ厳選されたカラー写真が又素晴しい。写真というより絵のようである。私はこれらをみていて、直ぐセガンティーニのそれらを思い出した。全く芸術性の高い作品ばか

りであるが、面白いのは、エベレストの本でありながら、その姿が余り現われて来ないことである。私に最も印象的なのは、西稜からのロンブク氷河俯瞰図二葉、南峰から下降中の二人を入れたマカルー、飛行機の中で撮ったブライテンバックの横顔（彼はクンブ氷瀑で死んだ）などである。

この本のもう一つの特徴は、四〇人以上、主として登山界の先覚者乃至は現存の第一人者の書いたものからの、引用句の多いことである。日本人のものが一つも出ていないのは残念だが、日本語は彼らには無縁の言葉であるからでもあろうか。（尤も二〇〇ページには、リ・ポという人のものが一つある。これは漢文が原典であろう。）

この中には John Muir(1838-1914) のが多いが、それも当然で、彼はスコットランド生れであるが、アメリカの有名な博物学者で、アラスカその他で足跡が広い。私も B. Hall Young の書いた"Alaska Days with John Muir"という本を持っている。この本の発行所であるシエラ・クラブは、一八九二年の創立で、その初代の会長にこのムアーがなっている。セオドア・ルーズベルトの友人で、自然保護に関する進言を数多く行い、ヨセミティを国立公園にしたのも彼の提案によるものらしい。

私もサン・フランシスコのシエラ・クラブへは、クリンチに案内されて行ったが、地下牢のようなＪＡＣの事務所とはこと違い、とてもスマートで明るいルームが幾続きにもなっていた。この本の最初に出てくる彼の言葉は、〝どっちへ行くにしろ静かに歩いて、登山家としての自由を味わうことだ〟であるが、今の若い尖鋭連中にこの言葉を進呈したい。

ジョン・ラスキンのいった〝山は風景のはじまりであり、終りである〟は有名な句だが、エベレストで死んだマロリーの言葉としては、〝エベレストに登って何の益があるか〟の答え、〝何も益なし〟、但し、人生の目的は"Joy"にある、私はエベレストに〝歓喜〟を求めて登るのであるという言葉がある"が、彼の有名な文句、"Because it is there!"は、突嗟に答えた返事であって、その心は〝バカ気たことを質問するな〟という意味で、私なら"Because I am there!"と答える、とT・H・ソマーベルがいったということが紹介されている。

私は珍らしくも Elizabeth Knowlton の名前を発見して驚いた。彼女はランド・ヘロンとともにアメリカ人として、一九三二年のウィリー・メルクル隊に参加してナンガ・パルバットへ行ったことがある。もうとっくに死んだものと思っていた誰かに、故エリザベスと書かれ、ＡＡＪの通信欄で、まだピンピンしていますと天下に声明していたのを、私は読んだことを覚えている。彼女はアメリカ人としては、ワークマン夫人に次ぐヒマラヤの先覚者であったが、その意味でアメリカの登山界には、重く見られているのであろう。

さて最後の引用句は再びジョン・ムアーのが登場する。詩才のない私が、文字通りに訳せば次の通りになる。

〝この偉大なる景観は永遠である。日の出はいつも何処かにあり、朝露は決して一度には乾かない。驟雨は永劫に降り注ぎ、水蒸気はいつも昇っている。丸い地球が回転するにつれ、

海洋に、大陸に、島々に、かわるがわる、永遠なる日の出、永遠なる落陽、永遠なる黎明と薄暮が訪れるのである〃と。

〔吉沢　一郎〕

## The Mountain World 1964/65

The Swiss Foudation for Alpine Research
Edited by Malcolm Barnes.
London : G. Allen & Unwin Ltd. 1966
215 頁，写真65枚，スケッチ・マップ8葉，地図1葉，42 S.

「世界の山々」第十五巻の英訳版で、ドイツ語版は六五年末に上梓された。例によって内容は豊富で、個々に紹介するわけにはゆかぬが、主なものについて述べてみたい。

巻頭はミューラー・マッターホルンの初登頂百年祭を記念するもので、主として同時代に報告された出来事の反響を、当時の新聞発表や書簡文を引用している。ヒンズー・クッシュは二篇で、G・グルーバーは一九六三―六四年のオーストリアの行動で、六三年はノシャック西峰（七二五〇メートル）と六四年のシャチャウエル（七一一六メートル）およびウドレン・ゾム（七一三一メートル）の初登頂記。次はM・シュムックら三名で、六二年チトラルで行われた、フシュコ氷河からコ・イ・ショゴルドク（六八五五メートル）と雪のドーム、コ・イ・シャヨズ（六九二〇メートル）の初登頂記である。カラコルムでは、六四年のモムヒル・サル（七三四二メートル）の初登頂記をR・ピシュインガーが報告している。

ガルワルでは六四年インド隊のナンダ・デヴィ第二登をN・クマールが、五七、六一年と頂上に迫り、三回目に成功した。内院入りには、荷の三分の一をヘリコプターで揚げている。航空写真は見事で、ルートが鮮明である。

W・F・ホーンバインのエヴェレストの西稜は、六三年AMEEの画期的な初縦走の行動をよくつたえた力作で、『エヴェレスト・西稜』の写真と文よりも引きしまっている。F・リントナー、タルン・ピーク（七三四九メートル）は六四年ドイツ隊の初登頂記である。

B・C・オルシャク、シッキム（同名の単行本あり）は、レプチャ語でこの山国の山名、峠、湖、川の地名と意味を一七一語採録している。著者はウィーンのこの方面の碩学ときく。

アウグスト・ガンサー、ブータン・ヒマラヤにおける地質学的調査を六三年三―六月に亘って行った。行程は中尾佐助さんの足跡と似ている。本書の圧巻は、ブータンの立派な写真であろう。例えばツェリム・カン、マサカン、メルンギカンの素晴らしさはどうだろう。またキュンラ・カーリは、付図によればチベット領となっている。だがガンケルピュンツムとメルンギカンは国境にある。在ブータンの会員西岡京治君は、六五年西から東まで三ヵ月間踏査したという。この収穫の発表がまたれ

るが、中央部ではガンサーの弟子にあったという。ガンサーの新著『ヒマラヤの地質』の写真とは少しダブるが、眼を開かせる写真ばかりだ。六四年は日本からもヒマラヤに多くの遠征隊があったのに、本書に一つも報告がのらないのはどうしたことであろうか。

アンデスは三篇あり、D・ギィオビイ、ペルーのコルディエラ・ブランカ南部のツコ、ラリア、ポンゴス山群に、六三―四年の登攀記（表）が参考になる。E・イムホーフ教授のペルー、コルディエラ・ヴィルカバンバのパンタ山群の地図作成の概要、E・シュパイスの同上の地図製作担当者の地誌学者としての見聞が語られ、巻末の地図「パンタ」二万五千分の一（多色図）が好資料となる。

リオネル・テレイの最後の大遠征となった（六四年のフランス隊）、アラスカの名峰マウント・ハンティングトン（三七三二メートル）の北西稜からの征服は、雪、雲、寒冷とやせ尾根に粘りぬき、いかにも行動派のテレイらしいきびきびしたタッチが気持よい。彼の筆に接しられない寂しさを感じさせられる佳作と思う。なお地図は六〇―六一年の巻末のものを参照されるとよい。

F・ラギァドルは六三年八月、カナダ北極圏のバッフィン島に小人数短期間の登攀を行い、ターンウェザー（二一八五メートル）などに登頂している。

南極圏は登山者に注目されてきたが、次の二篇は学術的であるが見落せない文献である。A・J・ブランデンベルガー（オーストラリア隊）の南極圏の地図作成は、米国やIGYの援助で行われ、雪冠地九七パーセントの地だけに、航空測量を主とし、また氷河測量が行われている模様がうかがえる。B・シュペルリイは、エルスワース山塊で行われた、アメリカ地質遠征隊の長期に亘る活動を、航空偵察、野外調査にわけてのべている。写真はこの山塊を目指す人々の好資料となろう。億単位の資金を要するとあっては、国家的援助を必要とするだろう。だが航空機で見物をした会員向一陽君の話をきくと、これからという感が深いのだが。

最終はA・ボリンダー、ヒマラヤとヒンズー・クッシュ登攀クロニィクル、六三―六四年で、前巻六二―六三年より始められたものの続篇である。次に同筆者とディレンフルト父合作の、七四〇〇メートル以上の世界の既知峰の表がある。一〇三座をあげているが、その五三座は登られている。同じくボリンダーは、アンデスの最高峰十座の表、および最高到達記録と最高登頂記録表をかかげている。ハンス・ボルトは、一九五八―六三年のペルヴィアン・アンデスの探検を二〇地域にわけ、詳細な登攀年譜を記述している。

スイス山岳財団のこの年鑑は、アルピニズム・エキスペディション・サイエンスの発表機関誌として、それに相応しい独自の内容をもるようにつとめられている。登頂記一本調子のものもあったが、やはりヨーロッパ的な学問尊重の気風は、わが国でも学ぶべき手本のような気がする。もちろん財団という性格を確立してかからねばならないだろうが……。

〔諏訪多栄蔵〕

# 会務報告

## 一九六五年七月～一九六六年六月

◇**七月理事・評議員会**　七月一日（木）図書室
出席者　松方、渡辺、加藤、深田、辰沼、大塚、松田、飯野、武藤、田村、住吉、田辺、竹田、川崎、杉浦、日高、神谷、吉沢、村井、藤井、川喜田、野口、石原（憲）、沼倉、芳野
▽議事、報告
一、経理規定（会費納入規定、支払規定、旅費規定）検討の件。
二、遭難対策（案）検討の件。
三、六十周年記念事業の件。
四、海外登山隊に対する推薦状発行規定（案）検討の件。
五、支部主催による海外登山の承認規定（案）承認の件。
六、各担当理事業務報告の件。
七、その他報告事項。
（詳細、会報二四二号参照）

◇**八月理事・評議員会**　八月五日（木）図書室
出席者　松方、三田、渡辺、加藤、深田、辰沼、大塚、松田、飯野、田村、住吉、杉浦、宮下、神谷、村井、藤井、望月、石原（憲）、中田、野口、沼倉、倉知、山本（朋）
▽議事、報告
一、シャモニーに於ける君島久登氏事故顛末報告。
二、日本山岳協会の新しい組織について。
三、六十周年記念事業の件。
四、四十年度実行予算案検討の件。
五、各担当理事業務報告。
六、その他報告、提案事項。
（詳細、会報二四三号参照）

◇**九月理事・評議員会**　九月二日（木）図書室
出席者　松方、三田、加藤、深田、辰沼、大塚、松田、村木、飯野、住吉、田辺、川上、杉浦、川崎、日高、神谷、村井、吉沢、藤井、成瀬、望月、石原（憲）、沼倉、橋村、高山、三井、牧野、山本（朋）、野口
▽議事、報告
一、六十周年記念行事計画決定の件。
二、山岳協会組織改組の件。
三、名誉会員推薦の件。
四、各支部報告。
五、その他報告事項。
（詳細、会報二四四号参照）

◇**十月理事・評議員会**　十月七日（木）図書室
出席者　松方、三田、渡辺、加藤、大塚、飯野、松田、川崎、竹田、宮下、田村、日高、村井、神谷、藤井、津田、吉沢、牧野、石原（憲）、三井、沼倉
▽議事、報告
一、六十周年記念行事の件。
二、名誉会員推薦の件。

三、功労者、永年会員表彰の件。
四、国体委員総会報告。
五、大分支部名称変更の件。
六、年次晩餐会開催の件。
七、各担当理事業務報告の件。
八、各支部報告。
九、その他報告事項。
（詳細、会報二四五号参照）

**◇十一月理事・評議員会**　十一月四日（木）図書室
出席者　松方、渡辺、加藤、村木、辰沼、飯野、松田、川崎、竹田、杉浦、住吉、吉沢、村井、青木、石原（憲）、沼倉、松本、野口

▽議事、報告
一、六十周年記念事業収支報告。
二、六十周年記念山行報告。
三、日本山岳協会臨時役員総会報告。
四、年次晩餐会開催の件。
五、経理事務方式変更の件。
六、各担当理事業務報告の件。
七、その他報告事項。
（詳細、会報二四六号参照）

**◇十二月理事・評議員会**　十二月二日（木）図書室
出席者　松方、三田、加藤、深田、辰沼、大塚、飯野、松田、川崎、田村、田辺、竹田、杉浦、宮下、住吉、折井、藤井、村井、石原（憲）、牧野、中田、高山、沼倉

▽議事、報告
一、山岳協会の新組織に伴う各支部、団体会員のあり方につき検討。
二、収支決算、予算編成方式変更に関する件。
三、年次晩餐会開催の件。
四、学生部報告。
五、その他報告事項。
（詳細、会報二四七号参照）

**◇一月理事・評議員会**　一月十三日（木）図書室
出席者　松方、三田、渡辺、加藤、深田、辰沼、村木、大塚、松田、竹田、杉浦、住吉、川崎、藤島、神谷、折井、村井、石原（憲）、高山、牧野、吉沢、沼倉、山本（朋）

▽議事、報告
一、定款改正の件。
二、支部規定改正の件。
三、役員改選の件。
四、各支部報告。
五、その他報告事項。
（詳細、会報二四八号参照）

**◇二月理事・評議員会**　二月三日（木）図書室
出席者　松方、渡辺、加藤、辰沼、大塚、松田、住吉、川崎、杉浦、田村、宮下、吉沢、村井、石原、野口、松本、沼倉

▽議事、報告
一、定款改正の件。
二、昭和四十一年度予算案検討の件。
三、会費値上げの件。
四、昭和四十一年度役員改選の件。
五、日本山岳協会臨時役員総会報告。
六、藤木顧問の件。

七、各支部報告。
八、その他報告事項。
（詳細、会報二四九号参照）

**◇三月理事・評議員会**　三月三日（木）図書室
出席者　松方、三田、渡辺、加藤、辰沼、大塚、村木、松田、飯野、宮下、川崎、杉浦、竹田、田村、川上、吉沢、村井、青木、藤井、石原（憲）、中田、松本、沼倉
▽議事、報告
一、定款改正の件。
二、昭和四十一年度予算案検討の件。
三、通常会員総会開催の件。
四、役員改選の件。
五、各支部報告。
六、その他議事、報告事項。
（詳細、会報二五〇号参照）

**◇四月理事・評議員会**　四月七日（木）図書室
出席者　松方、渡辺、加藤、村木、大塚、辰沼、松田、川上、川崎、中田、津田、入沢、望月、石原（憲）、村井、松本
▽議事、報告
一、通常会員総会開催の件。
二、役員候補者一部変更の件。
三、六十周年記念展覧会開催の件。
四、その他報告事項。
五、各支部報告。
（詳細、会報二五一号参照）

**◇通常会員総会**　四月二十三日（土）ドイツ東アジア研究協会ホール
出席者　松方会長以下九四名、委任出席二、三三三名。
▽総会次第
一、開会の辞　加藤　泰安
二、会長挨拶　松方　三郎
三、昭和四十年度事業報告　松方　三郎
（会報、会員名簿、会員カード、ルーム、山岳、山日記、集会、山岳協会、学生部、海外登山、六十周年記念事業、会員動静、物故会員など）
四、支部報告
越後支部（藤島玄）信濃支部（高山忠四朗）、富山支部（中田勇吉）、その他支部（加藤泰安）　飯野　亨
五、昭和四十年度決算報告　野口　末延
六、監査報告（収支決算全員承認）　松田　雄一
七、定款変更の件　飯野　亨
（右全員異議なく承認）
八、昭和四十一年度収支予算案審議
（右全員異議なく承認）　折井　健一
九、役員改選の件
一九六六年度の理事として加藤泰安、辰沼広吉、村木潤次郎、大塚博美、松田雄一、飯野亨、竹田寛次、住吉仙也、川崎巌、宮下秀樹、平山善吉、山口節子、小方全弘、広谷光一郎、長尾悌夫、竹内通雄、倉知敏の十七氏を選任、会長、両副会長を含め二十氏に決定。退任された深田久弥、皆川完一、川上隆、田村扇一、田辺寿、武藤晃、杉浦耀子の七氏の労を謝す。
監事一名は松本熊次郎氏を再選。
評議員は、折井健一、村井米子両氏を除き全員任期満了につき左記十

八氏を選任す。吉沢一郎、後藤幹次、藤島玄、津田周二、伊藤秀五郎、水野祥太郎、望月達夫、石原憲治、中田勇吉、藤井連平、高山忠四朗、三井松男、島田巽、堀田弥一、中屋健弐、深田久弥、佐藤久一朗、須賀太郎。

十、閉会の辞　加藤泰安

◉総会終了後、懇親会を催し、東大キンヤン・キッシュ隊、早大ローツェ・シャール隊の記録映画を上映した。

◇**五月理事・評議員会**　五月十二日（木）図書室

出席者　松方、三田、渡辺、加藤、辰沼、村木、大塚、松田、飯野、竹田、住吉、宮下、平山、山口、小方、広谷、長尾、竹内、倉知、折井、石原（憲）、佐藤、野口、松本、沼倉、野田、山本（朋）

▽議事、報告

一、理事任務分担の件

加藤（総務・企画・支部）、辰沼（遭難対策・自然保護）、村木（指導）、大塚（海外登山・装備）、松田（総務・庶務・海外連絡）、飯野（会員・経理・山荘管理）、宮下（ルーム・指導）、川崎（集会・装備）、竹田（指導・山岳）、住吉（関西・指導）、平山（調査研究）、山口（婦人・会員）、小方（会報・庶務）、広谷（指導・東京支部）、長尾（医療・遭難対策）、竹内（山日記）、倉知（図書・ルーム）

二、常務理事互選

加藤、辰沼、村木、大塚、松田、飯野、川崎、宮下の八氏を互選す。

三、常任評議員の互選

吉沢、望月、藤井、島田、堀田、中屋、深田の七氏を互選す。

四、本年度の方針について。

五、六十周年記念展覧会の件。

六、その他報告事項。

（詳細、会報二五二号参照）

◇**五月臨時理事会**　五月二十六日（木）図書室

出席者　三田、加藤、辰沼、松田、長尾、宮下、広谷、大塚、山口、倉知、川崎、飯野、平山、小方、竹内、沼倉、橋村、水瀬、佐伯

▽議事、報告

一、各種小委員会承認の件。

二、各担当理事、昭和四十一年度方針説明。

三、支部報告。

四、その他報告事項。

（詳細、会報二五二号参照）

◇**六月理事・評議員会**　六月二日（木）図書室

出席者　三田、加藤、村木、松田、飯野、宮下、川崎、広谷、山口、竹内、倉知、竹田、長尾、小方、住吉、佐藤、深田、折井、吉沢、島田、藤井、中屋、折井、石原、沼倉

▽議事、報告

一、役員会の運営方法および方針。

二、実行予算案検討の件。

三、支部長会議開催の件。

四、六十周年記念展覧会開催の件。

五、会費徴収の件。

六、職員交替の件。

七、ルーム移転案検討の件。

八、支部報告。

九、その他議事、報告事項

（詳細、会報二五六号参照）

× × ×

◇小　集　会

▽第二二八回　四十年九月二十九日（水）於図書室
南極の山　武藤晃氏・平山善吉氏

▽第二二九回　四十一年五月九日（月）於国際文化会館
マナスル登頂十周年記念小集会
（会報二五二号一二頁参照）

◎会場の関係で小集会としてではなく、東京支部主催の毎月第三水曜日の夜の定例集会「三水会」として次の集会が開催された。

▽七月二十一日（水）於図書室
ビールパーティー

▽八月十八日（水）於図書室
台湾の山　小味秀純・富田美知子氏

▽九月十五日（水）於図書室
夏山懇談会

▽十一月十七日（水）於図書室
キンヤン・キッシュ　石川　信行氏

▽十二月十五日（水）於図書室
恒例の忘年会を開催

▽一月十九日（水）於図書室
山の医学あれこれ　飯田　誠氏

▽二月十六日（水）於図書室
インド博物誌　西丸　震哉氏

▽三月十六日（水）於図書室
グリーンランド紀行　池田　錦重氏

▽四月二十日（水）於図書室
雪の研究　菅原　省司氏

▽五月十八日（水）於図書室
中部ネパールの旅　薬師　義美氏

▽六月十五日（水）於図書室
南極の話　村山　雅美氏

◇主なる行事および集会

▽信濃支部主催長野県々境一周一、〇〇〇粁縦走。七月十一日～九月十八日、支部発足二十周年の記念行事として実施。（山岳六十一年二一六頁参照）

▽日高名誉会員、石原評議員の紘勲。十一月三日の第三回生存者紘勲に際し、本会から左記の方が栄ある紘勲を受けられた。
勲二等旭日重光章　日高信六郎
勲四等旭日小綬章　石原　憲治

▽静岡支部主催第八回紅葉会。十一月十三日～十四日、寸又ヒュッテにて。東京よりの参加者四十一名を含み、六十八名が参加した。（会報二四八号参照）

▽一九六五年度年次晩餐会。十二月三日、日比谷ビル八階ホールにて開催。司会者深田久弥氏、松方会長の挨拶のあと、鳥山名誉会員の音頭で乾杯、司会者の指名で次々とスピーチが行なわれたが、今年は、日本のマッターホルンにちなんで、槍ケ岳に関係のあるスピーチが特記される。
出席者　一七八名（会報二四六号参照）

▽この一本展。十二月三日、年次晩餐会の会場の一隅に恒例によって展示された。今年はマッターホルン一〇〇年祭に因んで、槍ケ岳に関する資料が展示された。
（会報二四八～二五〇号参照）

▽東京支部主催スキー講習会。一月十五日～十八日、信州山田温泉。参

加者七九名。

（詳細、会報二四八号参照）

▽東京支部主催懇親スキー行。二月五日―六日。奥日光光徳ロッジ。三十九名参加。

（詳細、会報二四九号参照）

▽春季懇親会。四月二十三日（土）午後五時三十分より、通常会員総会にひきつづいて、ドイツ東アジア研究協会ホールにて開催。司会望月達夫氏。尚、懇親会終了後、東大キンヤン・キッシュ隊、早大ローツェ・シャール隊の記録映画を上映した。出席者九四名。

▽越後支部主催新潟県境縦走。支部二十周年記念行事として計画、四月～六月にかけて積雪期残雪期の県境完全縦走を行なった。

▽木暮翁碑前懇親会。五月十四日、山梨支部主催により開催した。東京より神谷名誉会員他が参加。（会報二五三号参照）

▽東京支部主催第六回登山技術研修会。五月二十一日～二十三日、岳川谷に於て実施。参加者二十二名。（会報二五三号参照）

▽第二十回ウェストン祭。六月四日～五日、信濃支部主催により上高地で開催。

東京より加藤、飯野両常務理事他多数が参加した。

▽第九回有志閑談会。六月十八日（土）六義園・心洗亭で開催。出席者三十四名。世話人は今井雄二、松本熊次郎、牧野衛の三氏。

（会報二五三号参照）

▽海外登山懇談会の開催。会員サービスの一環として、海外登山に出かける会員を対象として左記の通り懇談会を開催した。

第一回　七月五日　ネパール　（会報二四二号参照）

第二回　八月二日　女性の海外登山（会報二四三号参照）

第三回　九月六日　アルプス（会報二四五号参照）

第四回　十月四日　アラスカ（会報二四六号参照）

第五回　十一月七日　アンデス

第六回　十二月六日　グリーンランド（会報二四八号参照）

第七回　二月七日ニュージーランド（会報二五〇号参照）

第八回　三月七日　ペルー・アンデス（会報二五〇号参照）

（尚、創立六十周年記念行事関係は本文と重複するため省略した。（本文二三四頁～二四〇頁を御参照下さい。）

**◇海外登山界との交流**

▽本年度は二十八ケ国、四十八団体と Journal の Library Exchange を行なった。

▽**国際アルピニスト集会**　フランス国シャモニーで七月十二日から三週間の予定で開催された国際アルピニスト集会に、本会より君島久登、倉知敬の両氏が参加したが、七月十八日、君島氏は不慮の遭難により逝去された。（会報二四三号参照）

▽**訪日韓国登攀隊来日**　本会の招聘により柳洪烈隊長以下八名、十月十一日来日。十四日の創立六十周年記念祝賀会に出席した後、新雪の穂高を縦走。十一月一日、ルームで歓迎会を行なった。（会報二四四、二五一号参照）

▽**台湾省山岳協会代表来日**　本会の招聘により、創立六十周年記念祝賀パーティーに出席のため、周百練会長夫人等六名が来日。

▽**グブラー夫妻来日**　元北大教授グブラー博士夫妻他六名のスイス山岳会員が観光のため来日、本会では四月四日、関係者が北京マンションにて歓迎会を行なった。（会報二五一、二五三号参照）

▽**フィリップ・ローゼンタール夫妻来日**　ドイツ山岳会外国担当理事のローゼンタール夫妻が来日、加藤（喜）、宮下、須田の三名と六月六日富士山に登山した。（会報二五三号参照）

▽**グルジア共和国訪日登山隊来日**　横浜山岳会の招きで来日した同登山隊の一行を六十周年記念展覧会に案内し、七月五日歓迎会を開催した。（会報二五三～二五四号参照）

◇**海外登山**

本年度は別稿の如く五十四隊もの数の登山隊が海外の山に出かけたが、これらの各隊には、本会会員多数が参加した。尚、本会に直接関係ある海外登山に関するトピックとして次の点を記録しておきたい。

▽**大分支部ヒンズークシ遠征**　大分支部は大分登高会と合同にて大分ヒマラヤ委員会の名で、ヒンズークシに登山隊を派遣、同隊は七月三日コー・イ・モンディの登頂に成功した。（会報二四五号並びに本文一二五頁参照）

▽**東九州支部韓国合宿**　三月～四月、済州島で合宿した。

▽**東海支部アコンカグア遠征**　東海支部では名古屋大学高所医学研究会と合同で四十年十月～四十一年七月、学術遠征隊をアンデスに派遣。同隊は二月二十四日、アコンカグア南壁の登攀に成功した。（会報二五三号参照）

▽**学生部アラスカ、カナダ登山隊**　四月～八月、六名でアラスカ、カナダに遠征、ハンター、フォレイカーの第三登に成功、更にカナダでも、三峰に登頂した。（会報二五二、二五四号参照）

▽**海外登山審議会**　昭和四十一年度国際スポーツ行事用外貨枠は十月十八日開催した海外登山審議委員会に於て、エーデルワイスクラブ＝プカランラ四九三〇ドル、芝浦工大＝シウラ・チコ六六一七ドル、東北学院大＝コー・イ・バンダコール六八五九ドル、千葉大ミール・サミール六八四四ドルの四隊にそれぞれ割当てられた。

▽**エベレスト登山**　ネパール政府の登山禁止の状態が続いているため、本会の計画も保留の状態が続いている。

◇**日本山岳協会**　日本山岳協会は、かねてより懸案の全日本山岳連盟と本会の二本の柱をなくして、一本化することになり、これに伴う組織変更について協力した。即ち昭和四十年五月三十日の協会役員総会で一本化の構想が打出され、八月八日の臨時役員総会で積み上げ方式による新組織構想、規約案の作成が行なわれ、十月二十二日の臨時役員総会では、規約案の修正、県体協加盟山岳団体への加盟の働きかけをすることが決められた。更に一月二十九日、加盟団体承認のための臨時役員総会を開催。かくして二月五日の第一回全国評議員会で新組織による協会は正式に発足した。その後五月二十九日には、定例全国評議員会が開催され、協会活動も漸やく軌道にのることになった。これに伴い、本会の支部は、県単位で県体協加盟の山岳団体（県岳連または県山岳協会）に加盟することになり、東京、信濃、静岡、山梨等の支部が加盟して今日に至っている。

（尚、協会の組織変更については、会報二四一、二四三、二四六、二四九号等参照のこと）

尚本会では、例年通り協会主催の次の行事に全面的な協力を行なった。

▽**第四回海外登山技術研究会**　四月二十九日～五月二日、白馬山麓、親の原東急山荘にて開催。担当松田理事の他、日高、槇名誉会員等、会員多数が参加協力した。参加者九十八名。（会報二五三号参照）

× × ×

◇**山岳**　第六十年（通巻一一九号）を十二月二十五日発行。編集者望月達夫。

◇**会報**　第二四一号～二五二号（編集者吉沢一郎）を発行。他に会報二五〇号付録として洋書目録（編集者倉知敬）、二〇一号～二五〇号総目録（編集者中島寛）を発行。

◇**山日記**　一九六六年版（第三十一輯）を発行。編集代表皆川完一。

◇**名誉会員**　昭和四〇年一〇月一四日、創立六十周年記念祝賀パーティーの席上、本会は新たに左記四氏を名誉会員に推挙した。

## 一九六六年度役員

会　　長　松方三郎

副 会 長　三田幸夫、渡辺公平

常務理事　加藤泰安、辰沼広吉、村木潤次郎、大塚博美、松田雄一、飯野亨、川崎巌、宮下秀樹

理　　事　竹田寛次、住吉仙也、平山善吉、山口節子、小方全弘、弘谷光一郎、長尾剋夫、竹内通雄、倉知敬

監　　事　野口末延、松本熊次郎

常任評議員　吉沢一郎、島田巽、堀田弥一、中屋健弐、深田久弥、望月達夫、藤井運平

評　議　員　後藤幹次、藤島玄、津田周二、伊藤秀五郎、水野祥太郎、佐藤久一朗、折井健一、石原憲治、中田勇吉、高山忠四朗、三井松男、村井米子、須賀太郎

支　部　長　荒巻広政（秋田）、小林雄次郎（石川）、藤島源太郎（越後）、野口秋人（東九州）、水野祥太郎（関西）、三谷孝一（熊本）、織田収（山陰）、山本朋三郎（静岡）、高山忠四朗（信濃）、石原国利（東海）、石原憲治（東京）、中田勇吉（富山）、末松大助（福岡）、伊藤弥十郎（福島）、北川正次（宮城）、後藤幹次（山形）、三井松男（山梨）

書　　記　昭和四十一年六月末日をもって前任者吉野昇氏は健康上の理由で退職、後任として七月一日より川瀬伊三郎氏が就任した。

# 社団法人 日本山岳会定款

## 第一章 総 則

**第一条** 本会は、社団法人日本山岳会（The Japanese Alpine Club 略称 J. A. C.）という。

**第二条** 本会は、事務所を東京都渋谷区神宮前三丁目三十一番十八号におく。

## 第二章 目的および事業

**第三条** 本会は、山岳に関する研究、知識の普及および健全な登山の指導、奨励をなし、あわせて会員相互の連絡懇親をはかるとともに、登山を通じてあまねく体育、文化ならびに自然愛護の精神の高揚をはかることを目的とする。

**第四条** 本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

一、登山の指導奨励に必要な集会、研究会、講習会および展覧会等の開催
二、登山施設改善の促進、その他登山のための適切な事業
三、山岳遭難の予防とその対策に関する企画及び指導
四、自然保護活動の推進
五、海外登山の企画および実施
六、機関誌「山岳」、「会報」および「山日記」その他の図書の刊行
七、目的を同じくする国内および国外団体との連絡、情報の交換
八、その他、目的を達成するために必要な事業

**第五条** 本会は、理事会の議決を経て必要な地に支部をおくことが出来る。
支部に関する規定は、総会においてこれを定める。

## 第三章 会 員

**第六条** 本会の会員は、次のとおりとする。

一、通常会員　本会の目的に賛同し、本会の定める入会金五千円および左記の年会費を納める個人または団体。

| | |
|---|---|
| 東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県に在住するもの | 二千円 |
| 右記以外の国内に在住するもの | 千六百円 |
| 国外に在住する者 | 五米ドル |

二、終身会員　本会に入会後五ケ年間以上在籍せる個人会員にして、所定の終身会費を納めた者。
但し終身会費は次の通りとする。

| | | |
|---|---|---|
| 入会後 | 五年以上在籍せる者 | 五万円 |
| | 十年以上在籍せる者 | 四万円 |
| 二十年以上在籍せる者 | | 三万円 |
| 三十年以上在籍せる者 | | 二万円 |
| 四十年以上在籍せる者 | | 一万円 |

三、賛助会員　本会の事業を後援し、特別な寄与をなしたもので評議員会が推薦した個人または団体。
四、永年会員　本会入会後在籍五十年に達した者は、永年会員として会費を免除する。
五、名誉会員　本会に対し、特に功労のあった者のうちから、評議員会が推薦した者。

名誉会員推薦規定は、評議員会の議を経て別に定める。

**第七条** 本会に入会を希望する者は、会員二名（うち一名は、原則として本会役員、評議員又は支部長であることを必要とする）の紹介により、所定の入会申込書を提出し、理事会の承認を受けなければならない。

団体が入会しようとするときは、入会申込書にその団体の代表者名を明記しなければならない。

入会承認の通知を受けたときは直ちに入会金を払込むものとする。但し入会の当該年度は年会費を納入することなく、入会の月より会報の頒布を受けることができる。

入会承認の通知後一ケ月以内に前項の手続きをしないものに対しては入会承認を取消すことがある。

**第八条** 会員は、機関誌「山岳」および「会報」の配布を受け、本会の開催する各種の集会に出席し、かつ、本会備付の図書の閲覧をすることが出来る。

**第九条** 会員は、次の事由によってその資格を失う。

一、退　会
二、禁治産および準禁治産の宣告
三、死亡、失そうの宣告および団体会員の解散
四、除　名

**第十条** 会員が本会から退会しようとするときは退会届を提出しなければならない。

**第十一条** 会員が次の各号の一に該当するときは、総会の議決を経てこれを除名することができる。

一、会費の支払を滞納したとき
二、本会の名誉を傷つけたとき

**第十二条** 既納の入会金および会費は、これを返還しない。

## 第四章　役員・評議員および職員等

**第十三条** 本会には次の役員および評議員をおく。

理　事　十五名以上二十名以内（うち会長一名、副会長二名以内、および常務理事若干名）
監　事　二名
評議員　十五名以上二十名以内

**第十四条** 理事および監事は、入会後満二年以上を経た会員（賛助会員を除く）のうちから総会がこれを選挙する。

2　会長および副会長は理事のうちから総会がこれを選挙する。

3　理事は、互選で常務理事若干名を定める。

4　監事は、評議員会の推薦する候補者のうちから総会がこれを選挙する。

**第十五条** 評議員は、会員のうちから総会がこれを選挙する。

評議員は、互選で常任評議員若干名を定める。

評議員は、理事を兼ねることが出来ない。ただし会長、副会長はこの限りではない。

**第十六条** 会長は、本会の業務を総理し、本会を代表する。

2　副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき、または、欠員となったときは、会長があらかじめ指名した順序によって、その職務を代行する。

3　常務理事は、会長および副会長を補佐し、理事会の決議にもとずき日常の事務に従事し、総会の決議した事項を処理する。

**第十七条** 理事は、理事会を組織し、この定款に定めるもののほか、総

会の権限に属する事項以外の事項を決議し執行する。

**第十八条** 監事は、民法第五十九条の職務を行う。

**第十九条** 評議員は、理事会の諮問にこたえ、会長に対し必要と認めた事項について助言する。

**第二十条** 役員および評議員の任期は次のとおりとし、再任を妨げない。

会長および副会長　三年
その他の理事　一年
監事　二年
評議員　三年

2 補欠または増員により選挙された役員および評議員の任期は、前任者または現任者の残任期間とする。

3 役員および評議員は、その任期満了後であっても、後任者が就任するまでは、その職務を行う。

4 役員および評議員は、本会の役員および評議員としてふさわしくない行為のあった場合、または特別の事情で、その任に耐えないと認められた場合には、その任期中であっても、総会および理事会の議決によって、会長がこれを解任することができる。

**第二十一条** 本会には顧問若干名をおくことができる。

2 顧問は理事会および評議員会の議決により、会長がこれを委嘱する。

3 顧問は、本会の事業の運営について、会長の相談に応じ、必要と認める事項について会長に助言する。

**第二十二条** 本会の事務を処理するため、主事、書記等の職員をおくことができる。

2 職員は、会長がこれを任免する。

3 職員は、有給とする。

## 第五章 会議

**第二十三条** 理事会は、毎年二回会長がこれを招集する。ただし、会長が必要と認めた場合、または理事現在数の三分の一以上から会議の目的たる事項を示して請求のあった場合には、会長は、臨時の理事会を招集しなければならない。

2 常任評議員は、理事会に出席し、意見を述べることができる。

3 理事会の議長は、会長とする。

**第二十四条** 理事会は、理事現在数の三分の二以上が出席しなければ議事を開き議決することができない。ただし、当該議事について書面をもって、あらかじめ意思を表示したものは、出席者とみなす。

2 理事会の議事は、この定款に別段の定めがある場合を除くほか、出席理事の過半数をもって決議し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

**第二十五条** 評議員会は、会長がこれを招集する。

評議員会は会長、副会長および評議員で組織する。

2 評議員会の議長は、会長とする。

**第二十六条** 評議員会は、当該評議員数の二分の一以上が出席しなければ議事を開き議決することが出来ない。ただし、当該議事について書面をもってあらかじめ意思を表示したものは、出席者とみなす。

2 評議員会の議事は、出席評議員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

**第二十七条** 通常総会は、毎年一回、会計年度終了後二ヶ月以内に会長がこれを招集する。

2 臨時総会は、会長、理事会または監事が必要と認めたとき、いつ

でもこれを招集することができる。

**第二十八条**　会長は会員現在数の五分の一以上から付すべき事項を示して総会の招集を請求された場合には、その請求のあった日から二十日以内に臨時総会を招集しなければならない。

**第二十九条**　通常総会の議長は会長とし、臨時総会の議長は、会議のつど会員の互選で定める。

**第三十条**　総会の招集は、その開催日より十日以前に会議に付議する事項、日時、および、場所を記載した書面をもって通知する。

**第三十一条**　次の事項は、通常総会に提出して、その承認をうけなければならない。

一、事業計画および収支予算に関する事項
二、事業報告および収支決算に関する事項
三、財産目録
四、その他理事会で必要と認めた事項

**第三十二条**　総会は、会員現在数の二分の一以上が出席しなければ、その議事を開き、議決することができない。ただし、当該議事について書面であらかじめ意思を表示したものは、出席者とみなす。

**第三十三条**　総会の議事は、この定款に別段の定がある事項を除くほか、出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

**第三十四条**　総会の議事の要項および議決した事項は、会報によって会員に通知する。

**第三十五条**　総会および理事会の議事録は、議長が、これを作成し、議長および出席者代表二名以上が署名押印のうえ、これを保存する。

## 第六章　資産および会計

**第三十六条**　本会の資産は、次のとおりとする。

一、別紙財産目録記載の財産
二、入会金および会費
三、事業に伴う収入
四、資産から生ずる果実
五、寄付金品
六、その他の収入

**第三十七条**　本会の資産を分けて、基本財産および運用財産の二種とする。

2　基本財産は、別紙財産目録のうち、基本財産の部に記載する資産および将来基本財産に編入される資産で構成する。

3　運用財産は基本財産以外の資産とする。

4　寄付金品であって、寄付者の指定のあるものは、その指定に従う。

**第三十八条**　本会の基本財産のうち現金は、理事会の議決によって確実な有価証券を購入するか、または定期郵便貯金とするか、もしくは信託銀行への信託、または定期預金として、会長がこれを保管する。

**第三十九条**　本会の基本財産は、消費し、または、担保に供してはならない。ただし、本会の事業遂行上やむを得ない理由があるときは、理事会および総会の議決を経、かつ、文部大臣の承認を受けてその一部に限り処分し、または担保に供することができる。

**第四十条**　本会の事業遂行に要する費用は、入会金、会費、事業に伴う収入および資産から生ずる果実等の運用財産をもって支弁する。

**第四十一条**　本会の事業計画およびこれに伴う収支予算は、毎会計年度開始前に、会長が編成し、理事会の議決を経て文部大臣に届け出なければならない。事業計画および収支予算を変更した場合も同様とする。

**第四十二条**　本会の収支決算は、毎会計年度終了後二ケ月以内に会長がこれを作成し、財産目録、事業報告書および会員の移動状況書とともに、監事の意見を付して理事会および総会承認を受けて文部大臣に報告しなければならない。

2　本会の収支決算に剰余金があるときは、理事会の議決および総会の承認を受けて、その一部もしくは全部を基本財産に編入し、または翌年度に繰り越すものとする。

**第四十三条**　収支予算で定めるものを除くほか、新たに義務の負担をし、または権利の放棄をしようとするときは、理事会および総会の議決を経、かつ、文部大臣の承認を受けなければならない。借入金（その会計年度内の収入をもって償還する一時借入金を除く）についても同様とする。

**第四十四条**　本会の会計年度は、毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終る。

## 第七章　定款の変更ならびに解散

**第四十五条**　本定款は、理事会および総会においておのおのの出席者の四分の三以上の議決を経、かつ、文部大臣の認可を受けなければ変更することが出来ない。

**第四十六条**　本会の解散は、理事会および総会において、おのおのの出席者の四分の三以上の議決を経、かつ、文部大臣の許可を受けなければならない。

**第四十七条**　本会の解散に伴う残余財産は、理事会および総会において、おのおのの出席者の四分の三以上の議決を経、かつ文部大臣の許可を受けて、本会の目的に類似の目的を有する公益事業に寄付するものとする。

## 第八章　補　則

**第四十八条**　この定款施行についての細則は、理事会および総会の議決を経て別に定める。

（昭和四十二年一月六日改正認可）

# 支部設立並びに運営等に関する規定

昭和四十一年四月
社団法人　日本山岳会

## 第一章　総　則

**第一条**　定款第五条に定める支部の設立並びに運営は本規定による。

**第二条**　支部の名称は当該支部の所在する地域を明示して「日本山岳会○○支部」とする。

## 第二章　設　立

**第三条**　支部を設立するためには次の各号に適合しなければならない。

一、支部設立地域内の会員もしくは入会手続中の者が二十名以上支部会員たること。

二、支部設立地域内の会員にして前号に反対する者が同意者の三分の一を超えないこと。

三、同一地域内にすでに支部が存在しないか、または当該地域が他の支部地域と重複しないこと。

**第四条**　支部を設立せんとするときは、発起人代表者は予め理事会の了解を得た後、次の必要書類を会長に提出する。

支部設立趣意書
発起人名簿
第三条第一号による同意書
支部規約
支部役員名簿
設立以後一年以上の事業計画書
同予算書

**第五条**　前条の書類は理事・評議員会の審議に付し、会務遂行上支障がないと認めた場合に支部の設立を承認する。

**第六条**　支部の設立が承認された場合発起人代表者は一月以内に支部設立総会を招集し、第四条の書類を承認して支部を設立する。支部の設立並びに右書類は「会報」および山岳」に発表する。

**第七条**　支部の名称変更、支部の包括地域の変更、支部規定の変更等重要書項については理事会の承認事項とする。

## 第三章　運　営

**第八条**　支部には支部役員として支部長一名、委員若干名及び会計監事二名以内をおく。

**第九条**　支部委員及び会計監事は支部会員総会で支部会員の互選により選任する。

支部長は支部委員の互選により当該支部地域内に在住する支部会員の中より選任し、理事会の承認を得ることを要する。

**第十条**　支部役員の任期は支部長三年、委員一年とするが、重任を妨げない。

**第十一条**　支部の経費は支部会員より徴収する支部費その他の収入を以ってあてる。但し支部費の金額については理事会の承認を要する。

**第十二条**　支部の会計年度は毎年四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る。

**第十三条**　支部長は毎年一回以上支部総会を招集し、事業報告、会計報告、事業計画及び予算の承認を得、支部役員の改選を行うものとする。

支部長は右事項を毎年四月十五日までに会長に報告するものとする。

## 第四章　解　散

**第十四条**　支部は支部会員三分の二以上の同意により解散することが出来る。

**第十五条**　解散時の会計決算については支部解散総会の決議により支部役員の責任において処理するものとする。

**第十六条**　支部が次の各号のいずれかに該当する場合には会長はこれを

理事・評議員会の審議に付して解散させることがある。
一、支部が本部の目的に反した事業を行ったとき。
二、会計処理上不都合あるとき。
三、必要な報告を全く怠ったとき。
四、支部会員数が定数以下に甚しく減じ当分増加の見込みがないとき。

**付　則**

**第十七条**　会報一〇八号（昭和十六年八月）所載「日本山岳会支部規定」、会報一三七号（昭和二十一年三月）所載「日本山岳会支部規定案」及び山岳第五十一年所載「支部規定（昭和三十一年六月実施）」は本規定の実施により廃止する。

# SANGAKU

The Journal of The Japanese Alpine Club

**Vol. LXI** **Issued in March, 1967**

**Contents**

(in English)
After Manaslu, Postwar Japanese Mountaineering Expeditions ……By Kyuya Fukata…… 1
Ngojumba Kang, 1965 ……By Susumu Takahashi……11
Lhotse Shar, 1965……By Hisao Yoshikawa……14
Khinyang Chhish, 1965……By Nobuyoshi Ishikawa……15
An Andean Expedition, 1965 ……By Hidehiko Ida……16
Dhaula Himal, 1965 ……By Hiroshi Sugita……17
Diran, 1965 ……By Ryuichi Kotani……19
Koh-i-Mondi (Hindu Kush) ……By Makoto Yano……21
A short excursion to Central Hindu Kush (Mir Samir), 1965 ……By Yukitoshi Sato……23
Greenland Expedition, 1965……By Takashi Miyahara……25
Cordillera Norte and its surroundings ……By Atsumi Hosono……26
Mt. Logan, Independence Ridge ……By Takashi Kawakami……27
Mt. McKinley……By Yoshito Tsukazaki……29

(in Japanese, except the articles mentioned above)
The Mountaineering world and mountaineers……By Saburo Matsukata…… 1
Memories on the foundation of the J.A.C. ……By Hisayoshi Takeda…… 5
Looking back over the sixty years of the J.A.C. ……By Yuko Maki……15
A cultural history in the mountaineering ……By Takeo Kuwabara……23
(These four articles being arranged from the lectures for the Sixtieth Anniversary of the foundation of the J.A.C.)
Random thoughts on mountains, mountaineering and mountaineers ……By Toshio Fujishima……90
The North Face of Matterhorn, 1965……By Mitsuhiko Yoshino… 175
The North Face of Drus, 1965 ……By Hiroshi Yoshio… 183
The West Face of Drus, 1965 ……By Masanori Hoshikawa… 187
On the Ascent of the North Face of Eiger, 1965 ……By Tokai Section of the J.A.C.… 191
Some notes on Mt. Karibasan……By Tatsuo Mochizuki… 202
Traversing the mountains on the boundaries of Nagano Pref. ……By Shinano Section of the J.A.C.… 216
The events of the Sixtieth Anniversary of the foundation of the J.A.C. …… 234
In Memorium:
S. Yamakawa, M. Kitazawa, O. Shibayama, K. Sohara, T. Morimoto, S. Hashimoto, Y. Fukuda, K. Takenaka, S. Saito, H. Kimizima, Y. Yamakawa …… 241
Book Reviews …… 263
Club Proceedings…… 274
The memorandom and articles of the Japanese Alpine Club…… 287
Chronicle of Japanese Overseas Expedition, 1965 Ed. by Yuichi Matsuda ……30

**Editor: Tatsuo Mochizuki**
Associate Editors: Junjiro Muraki, Yuichi Matsuda
Kanji Takeda, Hiroshi Nakajima

## The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address: No. 31-18, Jingumae 3-Chome, Shibuya-ku, Tokyo.

(April, 1966~April, 1967)

*President*: Saburo Matsukata
*Vice-Presidents*: Yukio Mita, Kohei Watanabe
*Honorary Secretaries*: Taian Kato, Yuichi Matsuda
*Honorary Editor*: Tatsuo Mochizuki
*Honorary Librarian*: Kyuya Fukata
*Honorary Treasurer*: Toru Iino
*Auditors*: Suenobu Noguchi, Kumajiro Matsumoto

*Committee*

Toru Iino
Taian Kato
Yuichi Matsuda
Yoshio Nagao
Senya Sumiyoshi
Hirokichi Tatsunuma
Zenkichi Hirayama
Iwao Kawasaki
Hideki Miyashita
Hiromi Ohtsuka
Kanji Takeda
Setsuko Yamaguchi
Koichiro Hirotani
Kei Kurachi
Junjiro Muraki
Zenko Ogata
Michio Takeuchi

*Council*

Unpei Fujii
Kanji Goto
Hidegoro Itoh
Tatsuo Mochizuki
Kenichi Nakaya
Tatsumi Shimada
Shuji Tsuda
Gentaro Fujishima
Yaichi Hotta
Matsuo Mitsui
Yoneko Murai
Kenichi Orii
Taro Suga
Ihiro Yoshizawa
Kyuya Fukata
Kenji Ishihara
Shotaro Mizuno
Yuukichi Nakada
Kuichiro Sato
Chushiro Takayama

*Chairmen of Local Sections*

*Akita*: Hiromasa Aramaki
*Miyagi*: Shoji Kitagawa
*Echigo*: Gen Fujishima
*Yamanashi*: Matsuo Mitsui
*Shinano*: Chushiro Takayama
*Ishikawa*: Saburo Isono
*Kwansai*: Shotaro Mizuno
*Fukuoka*: Daisuke Suematsu
*Oita*: Akito Noguchi
*Yamagata*: Kanji Gotoh
*Fukushima*: Yajuro Itoh
*Tokyo*: Kenji Ishihara
*Shizuoka*: Tomosaburo Yamamoto
*Tokai*: Kunitoshi Ishihara
*Toyama*: Yuukichi Nakada
*Sanin*: Osamu Oda
*Kumamoto*: Koichi Mitani

# After Manaslu

## Postwar Japanese Mountaineering Expeditions

By Kyūya Fukata

On May 9, 1956, after two unsuccessful attempts, a Japanese mountaineering team finally conquered lofty Manaslu (8125 m), one of the most formidable mountains in all the mighty Himalayas. This conquest of one of the Himalaya's eight-thousanders was more than just a mountain-climbing feat that ranked with any in the world; it gave impetus to a series of Japanese mountaineering expeditions around the world that gradually increased in number and scope. The Manaslu group was not the first Japanese team to challenge the Himalayas. To mention only the groups that were mountaineering teams in the strictest sense (which is to exclude various private exploratory expeditions), the Rikkyō University team succeeded in 1936 in making the first ascent of Nanda Kot (6867 m), and the Academic Alpine Club of Kyoto challenged the mighty Annapurna Ⅳ (7525 m) after World War Ⅱ. However, whereas both of these groups were backed by a university alpine club, the Manaslu expedition was launched by the Japanese Alpine Club, and the team was picked from the best mountain climbers in Japan and given nationwide support. Yūkō Maki, the leader of the team, had had many triumphs, including the first successful assault on the east ridge of Eiger (3975 m) in 1922 and the first ascent of Mt. Alberta (3619 m) in the Canadian Rockies in 1925: he was Japan's number one alpinist.

Japan's highest mountain is the beautiful Mt. Fuji (3778 m), and there are a dozen or so peaks higher than 3000 meters in the central mountain range known as the Japanese Alps. The rest of Japan's mountains range from 2,000 to 2,800 meters and they are everywhere, thrusting up from the islands like a porcupine's quills. This means that mountain slopes have been a familiar sight to most Japanese since their childhoood and that the Japanese people have respect for and interest in their native mountains. There are said to be nearly five million avid mountaineers and hikers in Japan today.

It is no coincidence that this broad-based and energetic mountaineering activity reached its pinnacle with the first ascent of Manaslu. For ten years after the defeat

in 1945, the Japanese were deprived of all the luxuries of life. Then, gradually, the sapped strength of the nation was restored and a new, youthful energy burst its island bounds and spilled across oceans into foreign lands. Every mountain in Japan had been climbed, climbed by variation routes, scaled, climbed during the winter months—climbed. It was only natural that Japan's ambitious alpinists began to yearn for the higher and steeper slopes of foreign mountains. There were no glaciers in Japan's mountains, nor were there any peaks that soared above 4,000 meters. But Japanese mountaineers trained in the mountains that were available to them, and refined their skills.

Unfortunately, Japanese alpinists had had very little experience in the Himalayas: there was virtually no tradition. Consequently, they had no way of anticipating what sort of difficulties they might encounter or what sort of techniques would be needed to surmount them. Though the Japanese alpinist yearned to meet the challenge of the Himalayas, the mountains themselves were no more real to him than a remote land in a dream. Then the Manaslu expedition made the dream come true.

A preliminary expedition was sent to Manaslu in 1952 to determine a climbing route; the first climbing team started up the mountain the following year, but was forced to turn back a mere 375 meters from the summit. A year later, a second team left for the Himalayas, but was so harassed by natives dwelling at Sama in the foothills that it had to abandon Manaslu and turn to another mountain. Finally, in 1956, the team led by Yūkō Maki started up the mountain, determined not to accept defeat, and succeeded in reaching the summit.

It is well known that there are 14 mountains in the Himalayas that are over 8000 meters. Since 1950, when Annapurna(8078 m) was conquered by a French party these lofty peaks had yielded one after to climbing teams from all over the world. To the Japanese team that climbed Manaslu went the distinction of being the only Asian group to participate in this series of first ascents. It should be mentioned, however, that a climbing team from Communist China later climbed Gosainthan (8013), the last remaining eight-thousander.

The Manaslu triumph stimulated mountaineers all over Japan. It gave them confidence and it taught them the techniques that were best suited for the Himalayas. The Manaslu success became an invaluable example, not only of climbing techniques, but of the difficulties that accompanied expeditions abroad, the problems of passing customs clearance, of shipping equipment, and of negotiating with the inhabitants and with porters. The Himalayas were no longer a range of phantom mountains.

The fruits of the first success appeared two years later. In 1958, four Japanese expeditions set out for the Himalayas. The first was a small private team that consisted of three artists (a writer, a painter, and a photographer) and a doctor. Since this group was very modestly equipped and since the men were too old to risk ascending the highest peaks (the average age was 43), there were no noteworthy achievements in terms of mountain climbing; but this expedition did inform the Japanese people about the delights of wandering in the Himalayas. The objectives were Jugal and Langtang Himals, and the party crossed glaciers, and hiked through passes, and visited the little villages that nestled in the mountain valleys, returning to Japan with photographs and sketches and travel logs about an area of the world completely unknown to Japan. These men demonstrated for the first time that a Himalayan expedition on a modest scale was possible—and enjoyable.

That same year, two scientific exploration groups journeyed into the mountains of Bhutan and northwest Nepal. Though these were primarily scientific expeditions, the members of both teams were also mountaineers and the Bhutan group explored vast unknown region while the team in northwest Nepal investigated approach routes to Kanjiroba Himal.

A fourth team, whose only objecive was to climb mountains, attacked Chogolisa (7654m) in the Karakoram and succeeded in reaching the summit. An exploratory group had ascended the Baltoro Glacier in 1955, but this was the first time any Japanese had reached the summit of one of its peaks. That same year, three foreign climbing teams started up the Baltoro Glacier at approximately the same time. They were an American team aiming for Hidden Peak (8068m), an Italian aiming for Gasherbrum IV (7925m), and the Japanese that made the assault on Chogolisa. All three teams conquered the peaks that were their objectives, an unprecedented event in the history of Himalayan mountaineering. Standing atop a glacier surrounded by snow and ice-covered peaks, these men overcame barriers of language, nationality, and race to unite in the warm brotherhood of mountaineers.

Once the road to the Himalayas had been opened, Japanese mountaineers became infected with alpine fever: the following year, in 1959, five separate climbing teams set out for Nepal. The most important of these expeditions was sponsored by the Japanese Alpine Club and had as its goal Himalchuli (7864m) just south of Manaslu and belonging to the same mountain group. The Japanese had been interested in Himalchuli since the time of the Manaslu conquest, and a preliminary team had been sent out the year before to determine a climbing route. Now the main team launched an attack on the summit. However, the climb was unsuccessful. The team

managed to get as far as a huge ice wall just below the summit and there they ran out of time.

Two minor expeditions accepted the challenge of the Nepal Himalaya. Though most Japanese expeditions originated either in Tokyo or Kyoto, these teams came from two of Japan's rural areas, Nagano and Fukuoka prefectures. One group moved into the Langtang Himal and succeeded in making the first ascent of Salvachum (6918 m) ; the second team started up Gaurisankar (7144 m) in the Rolwaling Himal but they were forced to turn back.

Late in the autumn of 1959, another team set out for Namche Bazar and stayed there until early in 1960. This group was doing research on the Yeti—the abominable snowman—and they chose the Namche Bazar range because it seemed a likely breeding ground for these mysterious creatures. The team searched far and wide for trace of the Yeti, crossing countless glaciers and exploring all the valleys in the region, but their efforts were in vain.

No discussion of the Himalayas can be complete without some mention of the strange riddle of the abominable snowman. The Japanese research party was preceded by both English and American Yeti expeditions. But no one in any of the parties ever saw a snowman. Some of the researchers involved even maintained that the abominable snowman did not exist.

No definite conclusion has ever been reached, but all mountaineers who love the Himalayas are united in the hope that the snowman, whatever be or it may be, will never be captured. The possibility that all mystery may some day be eliminated from our world must appall any true Romantic.

The Japanese obsession with the Himalayas grew steadily stronger: in 1960 five teams set out to test their skill, and three of them challenged the Nepal Himalaya. A few figures concerning mountaineering activity in the Nepal Himalaya alone will demonstrate the extent to which Japanese alpinists had been captivated by the Himalayas. Three of the seven teams that climbed in the Nepal Himalaya in 1958 were Japanese; the remaining four were English, American, Swiss, and Indian. Of the eight expeditions in 1959, five were Japanese; the remaining three were French, Austrian, and international. Of the ten teams that challenged the Himalayas in 1960, three were Japanese; the other seven were English, New Zealand, Swiss, French, Indian, Chinese and international. In short, Japan accounted for 11 of the 25 expeditions to the Himalayas during this three-year period. And the pitch of this activity was to rise sharply in the years that followed.

To send a mountaineering expedition to the Himalayas is no easy job for any

country. Preparations for the departure, the problems of selecting the team and negotiating with the mountain dwellers as well as countless other bothersome preliminary chores add up to a lot of time and effort, a fact which becomes apparent on reading the narrative of any Himalayan expedition. The most difficult problem, and one that has undoubtedly harassed mountaineering teams all over the world, is that of raising funds for the expedition.

Unlike an ordinary tourist trip, a journey to the top of a lofty Himalayan peak and back costs a considerable amount of money. In addition to the expense of stocking food, equipment, and clothing, there are customs clearance fees, Sherpa's salaries, and wages to be paid to the innumerable porters who are needed during the long trek to the foot of the mountain. The team must also have a reserve fund to be used in the event of an accident. Then where, the reader may wonder, does Japan get the money to launch so many Himalayan expeditions?

Some years ago, this writer participated in a mountaineering expedition of the Himalayas. Anxious to save every penny we could, our team set out for India on a freighter. En route, I was occasionally asked by foreigners: "Have you people been sent by your government?" When I answered, "No, we are a private expedition," the foreigner would look at me with a combination of surprise and new-found respect. I suppose they thought I was wealthy landowner—at any rate, a man of means. In fact, I had no properties whatsoever, I lived in a cramped little house in a Tokyo suburb, and never knew for certain that I would be able to pay my bills for the coming month.

Unlike the Soviet Union and Communist China, the Japanese Government has yet to sponsor a mountaineering expedition abroad. All of Japan's teams are organized and launched by either the Japanese Alpine Club or by one of the university alpine clubs and their alumni. Expenses must be borne in part by the team itself; and some funds are donated by newspapers or radio and television stations (recently it has become very difficult to find such a sponsor; unless the expedition is large and prominent, no one is interested.) For the rest, the team must depend on contributions from the Japanese public: soliciting contributions has become a vitally important part of the preparations for any expedition. Fortunately, Japan is full of people who are intensely interested in mountain climbing.

As for the three Japanese climbing teams that challenged the Nepal Himalaya in 1960, the Dōshisha Alpine Club succeeded in making the first ascent of Api (7132 m); and the Keiō University Alpine Club conquered Himalchuli, the lofty peak that had defeated the Japanese Alpine Club the previous year—another first.

The third team, backed by the Tōkai Alpine Union, managed to get almost to the top of the Big White Peak (7083 m), the highest mountain in the Jugal Himal, but failed to reach the summit. This team was the first Japanese non student group of Japanese businessmen ever to climb in the Himalayas. Since every Japanese university has an alpine club, most Himalayan expeditions had been and still are—composed of students.

That same year, two more teams were able to report that they had reached their objectives, neither of which were in the Nepal Himalaya. The Academic Alpine Club of Kyoto conquered the virgin peak Noshaq (7490 m) in the Hindu Kush; and the members of the Japanese Ladies Alpine Club reached the summit of Deo Tibba (6001 m). Female alpinists began increasing rapidly after the war, and it wasn't long before women were to be seen on every mountain in Japan. Now the "weaker" sex had demonstrated its prowess in a conquest of the mighty Himalayas.

This was not, of course, the first time that women had climbed in the Himalayas. Two of the first women to risk the adventure were an American named Workman and a Dutch housewife named Visser. Though there was nothing unusual about women joining mountain climbing expeditions, it wasn't until after World War II that an all-woman team accepted the challenge of the Himalayas. The first such team, which was English, left for the Himalayas in 1955. Though many people were concerned about the team's welfare, the women succeeded in making the first ascent of a 6000 meter peak without mishap. Assured by this first success, England sent another all-woman climbing team to the Himalayas the following year, and still a third in 1958. The fourth female alpine team was Japanese. On the way back from their triumph in the Himalayas, the Japanese woman's team paid their respects to the Dalai Lama, who was seeking political asylum in India at the time, and also met with Premier Nehru, helping to cement bonds of friendship between India and Japan.

At this point, I would like to leave the Himalayas and consider Japanese expeditions to other parts of the world. Next to Asia, there are more high mountains in South America than anywhere else in the world, and Japanese mountaineers were quick to accept the challenge. The first Japanese expedition to South America was in 1953 when the Waseda University Alpine Club scaled Aconcagua (6960m), the loftiest peak in the Andes. In 1958, the Kobe University Alpine Club made the first ascent of Cerro Arenales (3437m) in Patagonia; and in 1959 the Kansei Gakuin University Alpine Club made the first ascent of Ausangate South (6200 m) in the Peruvian Andes and also conquered a second, unnamed peak to the east which they

named Pico de Arroz (6000 m). In 1960 the Kobe University Alpine Club launched a second expedition, this time into the Chilean Andes, and succeeded in making the second ascent of the Cuerno Blanco (5030 m), and in scaling several other virgin and unnamed peaks.

In 1958 a Waseda University climbing team that included several women climbed Mt. Kilimanjaro (5895 m), the highest mountain in Africa, and this was followed by several Japanese expeditions to Kenya and Ruwenzori. Mt. McKinley (6191 m), the highest mountain in Alaska, was ascended in 1960 by climbing teams from Meiji and Waseda universities, each following a different route. Leaving Japan in December of 1958, two small Japanese expeditions set out to climb mountains in New Zealand, where they remained until the spring of 1959. Like this the scope and range of Japanese expeditions gradually increased.

However, the most compelling challenge still came from the Himalayas. And even in the vast Himalayas there were certain areas with which the Japanese had become familiar because of frequent expeditions to them. One such area was the Manaslu group; another was the Jugal-Langtang Himal. The Manaslu group includes Manaslu, Peak 29 (Thulungi) (7835 m), and Himalchuli, all higher than 7800 meters. Japanese teams had already conquered two of these and hoped to make the first ascent of the remaining Peak 29. The Manaslu group was by that time very familiar because several Japanese expeditions had already climbed there, but no one had managed yet to conquer the highest point of Peak 29. Japanese alpinists were determined to achieve this triumph too.

Then, in 1961, three expeditions set out for the Himalayas with these unvanquished mountains as their objectives. The first team chose Peak 29 and tried to find a route on the western slope, but the approach was blocked by a sheer cliff wall and the slope seemed to be a pocket for endless avalanches: the team was forced to resign itself and turned back. The second team made a second assault on the Big White Peak, the loftiest mountain in the Jugal Himal, but they were unable to reach the summit, though they managed to get higher than before. The third team had started up Langtang Lirung (Gangchen-Ledrub) (7245 m), the highest mountain in the Langtang Himal, when an accident resulted in the first deaths in a Japanese Himalayan expedition.

Since the Japanese climb their native mountains in prodigious numbers, there are more mountain casualties in Japan than anywhere else in the world. But until the tragic accident in 1961, there had been no Japanese deaths in the Himalayas. This was extraordinary, in the sense that mountaineering teams from every other

country in the world had had fatal accidents in the Himalayas; only the Japanese teams had escaped injury. But then tragedy struck on Langtang Lirung. The men had put up their tent on a snow plateau 5600 m up the mountainside and were sleeping when a huge block of ice hurtled down on them in a snow avalanche and two of the climbers and one Sherpa were crushed to death.

However, Japanese alpinists were not to be defeated by one tragic accident. The following year, in 1962, four more climbing teams set out for the Himalayas, and all of them reached their objectives. By this time there was hardly a single large university alpine club that was not planning, together with its alumni association, some kind of expedition to the Himalayas. Without boring the reader with a long list of universities, we shall just say that one team made the first ascent of Chamlang (7319m), a peak just south of Everest that other foreign teams had been attempting for some time; that another group reached the summit of the virgin peak Nupchu (7028 m) in east Nepal; and that still another set out for the Mukut Himal and made first ascents of several minor peaks there. A fourth team, the only non-university group that year, finally succeeded in reaching the summit of the Big White Peak that had repulsed two previous attacks.

But successes were not limited to the Nepal Himalaya. The Japanese ascended Saltoro Kangri (7742 m) in the Karakoram a mountain that had defeated an English team in 1935; and made the first of Indrasan (6221 m) in the Punjab Himalaya that various other foreign teams had been eying for a long time.

In total, Japanese expeditions to the Himalayas in 1962 managed first ascent of five virgin peaks. An achievement record such as this is extraordinary to say the least, and the rest of the world began to view Japanese mountaineering activity in the Himalayas with astonishment and awe. The achievement seems even more remarkable when one remembers that, as recently as ten years ago, the only photographs of the Himalayas in Japan were of Manaslu. By now, Japanese photographers have taken pictures of every prominent mountain in the vast Himalayan range. Next to England, with her long history and well established tradition of mountaineering in the Himalayas, Japan has probably covered a wider area than any other country in the world. Moreover, research on various problems peculiar to the Himalayas is being conducted all over the country, and Japanese alpinists have developed unique all-weather paraphernalia and new methods of packing and preserving food. All ambitious Japanese mountaineers whether they belong to a university club or a private league, look forward to testing themselves against the Himalayas, and have come to look upon the climbing they do in

Japanese mountains as preliminary training for that future test.

The pinnacle of Japanese activity in the Himalayas was reached in 1963. In that year, including scientific research groups, there were 11 Japanese expeditions to the Nepal Himalaya! Since the number of expeditions to the Nepal Himalayas was 19, Japan alone accounted for more than half. The major achievements, beginning with first ascents, were as follows:

(1) Saipal (7034 m) in northwest Nepal; an Austrian team tried unsuccessfully to climb this peak in 1954, and the Japanese team succeeded in reaching the summit by a different route; (2) Sharpu (7100 m), an unknown mountain in northeastern Nepal; every member of the young Japanese team that made the climb reached the summit; (3) Numbur (6954 m), a peak in the southern part of the Rolwaling Himal; as with Sharpu, this mountain had never been climbed before, which meant that the Japanese team had to determine everything for themselves, even the approach route.

In addition to these first ascents, there were several other attempts which were defeated just short of the summit. One was the attack on Twins (7350 m) in the Sikkim Himalaya. Though a German party had previously attempted to climb Twins from the Sikkim side, the Japanese group was the first to try from the Nepal side. We mentioned earlier that a Japanese team had investigated the western slope of Peak 29, the third highest peak in the Manaslu group, and given it up as hopeless; this time, the Japanese team's mission was to search for a possible climbing route on the eastern side.

Nearly successful attempts were also made on Himlung Himal (7126 m), which lies to the north of the Manaslu group, and Kande Hiunchuli (c. 7000 m) in western Nepal. Neither of these mountains had ever been climbed before. Still another Japanese team spent approximately one month climbing and surveying the area around Nalkankar (6635 m), a mysterious mountain lying in the extreme northwest of Nepal, almost on the Tibetan border, which had never been accurately located on any map. The Japanese team made a great contribution to Himalayan geography by correcting the mistaken altitude figures for Nalkankar and by accurately charting the topography of the surrounding area. Finally, a Japanese team made the first ascent of Baltoro Kangri (7312 m) in the Karakoram and proved that it was not Peak II, as everyone had thought, but Peak III that was this mountain's highest peak.

In 1964 Japan sent five teams into the Himalayas, all of which accomplished their goals. The most noteworthy achievement was the first ascent of Gyachung Kang

(7922 m), which had remained alone in the Himalayas as unclimbed and probably unclimbable. Unfortunately, the death of one of the Japanese climbers on the point of about 7700 meters cast a shadow over this triumph. This was Japan's second casualty in the Himalayas. The first casualty, as was mentioned earlier, occurred on Langtang Lirung. The same university alpine club later returned to the mountain to avenge the death of one of their teammates, but once again they failed to reach the summit. Instead, they made first ascents of two virgin peaks in the same area, Kyungka Ri (6979 m) and Urkimmang (6397 m).

Two rather small expeditions succeeded in making first ascents of Ganesh or Moditse (7256 m) and Glacier Dome (7255 m) in the Annapurna group. Still another minor team started up the Barun Glacier and, after failing to climb Baruntse (7220 m), succeeded in making the second ascent of Pethangtse (6729 m).

This year, 1965, Japan would have sent ten more expeditions to the Himalayas if the Nepalese Government had not issued an unprecedented proclamation prohibiting mountaineering activity. Three of the teams did receive permission to enter the mountains and approached Lhotse Shar (8383 m), Ngojumba Kang II (7646 m), and Dhaulagiri II (7751 m). The Ngojumba Kang team succeeded in making the first ascent. Two other groups with first ascents as their objectives moved into the Karakoram and started up Khinyang Chhish (7852 m) and Minapin, also known as Diran (7253 m).

No less remarkable than Japanese activity in the Himalayas has been the recent increase in number and scope of Japanese mountaineering expeditions to other parts of the world. The first of the three teams that were sent to South America in 1961 made ten first ascents in the Peruvian and Bolivian Andes, working down from Pucahirca Norte (6050 m); and also achieved five second ascents. The second team scaled both the north and south peaks of Huascaran (6655—6768 m), the loftiest mountain in the Cordillera Blanca, in addition to climbing several other mountains. One other Japanese team climbed Chimborazo (6264 m) in Ecuador. Japanese mountaineering teams poured into the Andes throughout 1962, '63, and '64, and the search for unvanquished mountains and unknown regions continued. The outstanding achievement during this period occurred in 1964 when a Japanese climbing team made ten first ascents of unnamed mountains along the Cordillera Real in the Bolivian Andes.

It is only recently that Japanese alpinists have begun to show interest in the Alaskan mountains of North America. The highest mountain in Alaska is Mt. McKinley, which was climbed in 1960; and in 1964, two Japanese teams reached

the summit of Mt. Logan (6050 m), the second highest moutain in the Alaskan range. That same year Japanese teams also climbed Mt. Saint Elias (5488 m), Mt. Blackburn (5038 m), and Mt. Regal (4209 m), to name just three: everything suggests that Japanese expeditions to Alaska will continue to increase in number.

In 1964 a Japanese team climbed Sukarno Peak (Carstensz Top) (5029 m) in New Guinea, the highest mountain in Oceania, and another team reached the summit of New Zealand's highest mountain, Mt. Cook (3763 m). Once this had been accomplished, it could be said that Japanese mountain climbers had stood atop the highest mountains in every continent on the globe, with the exception of Asia's Mt. Everest.

We have seen that postwar Japanese mountaineering expeditions have been numerous and ambitious. Not counting exploratory trips to the South Pole, Japan launched a total of 93 expeditions, a figure that only a very few countries in the world can match. During the past 15 years a total of 135 mountaineering teams have been sent into the Nepal Himalayas, of which one-third have been Japanese teams. With the exception of the mountains that lie behind the Iron Curtain—the Caucasus, the Pamirs, the mountains of Central Asia—there is no prominent mountain area, anywhere in the world, that Japanese alpine teams have not yet challenged. And if it were not for various poltical barriers, this energetic activity would undoubtedly continue to increase.

(In 1966 three minor expeditions are going into the Caucasus and the Pamirs.—*Ed.*)

(We acknowlege our thanks to the Editor of *Japan Quarterly* for allowing us to use this article.—*Ed.*)

# Ngojumba Kang, 1965

## By Susumu Takahashi

Ngojumba Kang (7839 m) is the sixth highest unclimbed mountain in the world. It is located between Cho Oyu (8153 m) and Gyachung Kang (7922 m). Meiji University Alpine Club had sent the first overseas mountaineering expedition to Mt. McKinley in 1960 and made the first Japanese ascent. (see "*Sangaku*" vol. 57, 1962) Soon after, we started to make preparations for an expedition to Gyachung Kang

in 1965. However, we learned that the Nagano Party had reached the summit of Gyachung Kang in 1964. (see "*Sangaku*" vol. 60, 1965) Consequently, our plan had to be changed quickly to scaling Ngojumba Kang lying to the west of Gyachung Kang.

1. Members:

| | | |
|---|---|---|
| Leader | Susumu Takahashi | (34 of age) |
| Deputy leader | Yoshihiro Fujita | (31 〃 ) |
| Member | Shinichi Hirano | (26 〃 ) |
| 〃 | Takeo Odaka | (24 〃 ) |
| 〃 | Masahisa Kobayashi | (23 〃 ) |
| 〃 | Naomi Uemura | (23 〃 ) |
| 〃 | Masaru Irisawa | (22 〃 ) |
| Doctor | Yoshio Nagao | (35 〃 ) |

2. Liaison officer: C. B. Rai (31 〃 )

3. Sherpas:

| | | |
|---|---|---|
| Sirdar | Ang Dawa I | (35 〃 ) |
| Cook | Dawa Temba | (31 〃 ) |
| Sherpa | Mingma Tsering | (30 〃 ) |
| 〃 | Dorje Sherpa | (28 〃 ) |
| 〃 | Dakya Sherpa | (23 〃 ) |
| 〃 | Pemba Tenzing | (30 〃 ) |

4. Record:

February 26 All members departed from Kathmandu with 146 porters and 4 tons of baggage.

March 13 Arrived at Namche Bazar.

16 Departed from Namche Bazar to Base Camp.

22 Set up Base Camp (5000 m).

April 4 Set up Camp 1 (5700 m).

10 Set up Camp 2 (6000 m).

18 Set up Camp 3 (6500 m).

22 Set up Camp 4, the final camp (6900 m).

23 Three members, Hirano, Kobayashi, and Mingma, left Camp 4 for the summit at 5 A. M. They were, however, compelled to give up the ascent and to return to the Camp 4 at 5 P. M. The crevasses in the ice falls had made them waste too much time in their advance to the top of the mountain. What was

worse, Mingma was in poor condition since the night before.

April 24 Two members, Uemura and Pemba, left Camp 4 at 4 A. M. Using the route established by the previous day's party, they were able to climb quickly and efficiently, at 5 : 04 P. M., the two-man party was standing on the summit of Ngojumba Kang. That night they bivouacked in a crevasse at 7500 meters. The next day returned to Camp 4.

28 Descending to the Khumbu Valley, we visited the Base Camp of the Indian Everest-Expedition.

In order to call on the Base Camp of Waseda University Expedition to Lhotse Shar (8383 m), we descended through the Khumbu Valley to Imja Khola.

May 28 Arrived at Kathmandu.

5. Notice :

As the name of Ngojumba Kang had not been found on the map published by the Nepalese Government, permission had been given to us under the condition that our expedition would climb Cho Oyu Ⅱ. Some years later, through the full investig ıtion made by Sherpas and the natives, it was clarified that Ngojumba Kang is a mountain with three peaks and situated between Cho Oyu and Gyachung Kang. Accordingly, we changed the title of our mountaineering party to the Ngojumba Kang Expedition.

6. Editor's Note :

On the map of " Mount Everest Region " published by the Royal Geographical Society in 1961, there is a peak of 7839 meters between Cho Oyu and Gyachung Kang. In Japan this 7839 m—peak has been thought to be Ngojumba Kang. But according to the recently published map of Khumbu Himal by Research Schema Nepal Himalaya and to " Mountain World 1964—65 " page 197, there are three peaks between Cho Oyu and Gyachung Kang. They are Ngojumba Kang (or Ri) Ⅰ (7806 m), Ⅱ (7646 m), and Ⅲ (7610 m), respectively. The peak ascended by the Japanese party in 1965 is thought to be Ngojumba Kang Ⅱ (7646 m), its central peak.

# Lhotse Shar, 1956

## By Hisao Yoshikawa

Waseda University Lhotse Shar Expedition was organized by its Alpine Club. Lhotse Shar (8383 m) is a virgin peak situated east of Lhotse (8501 m). Its route begins at the southern side of Imja Glacier. This expedition consisted of eleven members, including a doctor. The members were as follows:

| | | |
|---|---|---|
| Leader: | H. Yoshikawa, | age 30 |
| Sub-leader: | T. Matsuura, | 30 |
| | M. Inokuchi, | 28 |
| | Y. Hamano, | 26 |
| | N. Kaburagi, | 27 |
| | T. Narikawa, | 27 |
| | A. Murai, | 27 |
| | T. Sato, | 25 |
| | S. Yamamoto | 25 |
| | K. Shiratori | 25 |
| Doctor: | S. Miyamoto | 42 |

The members left Japan between January 17 and February 15, and gathered together on February 17 at Kathmandu. Here Pasang Phutar III, acting as sirdar, and thirteen Sherpas joined our party. After a three weeks caravan, on March 14 we established Base Camp at an altitude of 5350 m on the Lhotse Shar Glacier (East Lhotse Glacier). Eight tons of baggage, including equipment, food, and oxygen bottles, were transported by 240 porters to Base Camp.

Several days of reconnaissance proved that there was a risk of avalanches on the Southeast Ridge, our planned route. As it was too difficult to pass over the ice fall, we decided to advance along the Southwest Ridge, which branches from the Southeast Ridge at 7250 m. The Southwest Ridge, which is the shortest course, divides Lhotse Shar Glacier and Lhotse Glacier. The extremity of the ridge is linked with Island Peak (6189 m).

Four advance camps were established: Camp I (5850 m) on March 8, Camp II (6350 m) on April 3, Camp III (6650 m) on April 8, and Camp IV (7050 m) on April 17. The climbing route was knife-edged and sloped at an angle of 45°.

Between camps, 2400 meters of fixed ropes were necessary to make the route safe.

On April 18, T. Narikawa and I started from Camp IV. He slipped and fell about 130 meters. He lost consciousness and was suffering from hardly frostbitten hands and feet. We spent days in returning him to Camp II. Also, A. Murai, one of the rescue party, became ill because of the strain of sleepless nights and lack of oxygen.

On April 29, we started climbing again and reestablished Camp IV on May 5. On May 11, Camp was made at 7300 m. [According to our plan, Camp V was to have been established at 7800 m, but the shortage of food, time, and labor prevented us from setting up the camp at that height.] On the following day, T. Matsuura, M. Inokuchi and Sherpa Pinju departed from the final Camp. They set out at 2 A.M., in the moonlight. Using the oxygen bottles above 7500 m, they climbed at a pace of 100 vertical meters an hour. It was not difficult to climb the rock and blue ice. Eight hours later they had reached 8010 m and found themselves staring at a huge gap running from north to south. There was no time left to descend the blue ice and ascend the steep rock wall on the opposite side. Food had deen exhausted and the weather was growing worse. While it appeared that there would be no further difficulty once the gap was crossed, they were forced to turn back.

On May 19, all members returned to Base Camp. On May 27, the two injured and ill members were flown to Kathmandu by helicopter. The other members returned to Kathmandu on June 6.

# Khinynag Chhish, 1965

## By Nobuyoshi Ishikawa

Our expedition party was composed of thirteen undergraduates, graduates, and postgraduates of the Tokyo University Ski Alpine Club: Dr. H. Shiraki (Leader) and Dr. N. Ishikawa (Deputy leader); K. Ito, M. Shimoishizaka, S. Seki, K. Abe, K. Murakami, T. Nakamura, T. Nishiya, A. Makinouchi, K. Inoue, K. Kano, H. Ogura, and Mohammed Asif (Pakistan), whose language and ability in mountaineering was of great help to us.

The reconnaissance party left Nagar on June 18 and spent 5 days in the Khinyang Glacier trying in vain to find a possible route to the summit from this side. On the 27 th, Base Camp was established at 3800 m, at the foot of the south ridge, which had once been attacked by the English-Pakistani team in 1962. On July 17, Camp 4 was settled on the Snow Dome at 5900 m. A snow storm forced us to stay there for 9 days. Rocks, ice-walls, and sharp knife ridges with complicated snow caves and crevasses from Camp 2 to Temporary Camp 8 also forced us to use our 3600 m of ropes as fixed ropes.

On August 19, 5 members set out to pitch Camp 8 at an altitude one day's climb from the summit (7852 m). On their way, at 7200 m, a narrow snow ridge suddenly collapsed, and one of our members, T. Nakamura, fell down far below to Kninyang Glacier. All of the other members rushed down to Base Camp and began to search for his body, but no trace could be found. In deep sorrow, we left Base Camp on August 27.

# An Andean Expedition, 1965

## By Hidehiko Ida

From June to August, 1965, we, the Andean Expedition of Waseda University, Tokyo, made our first climbing trip overseas to Cordillera Blanca and Cordillera Huayhuash in Peru. The Party was camposed of Hidehiko Ida (leader), Yoshihiro Kondo, Takeo Sato, Hiroshi Hayakawa, Akira Miyashita, and our Peruvian porter, Victorino Angeles.

We left Huaraz on June 14 for our Base Camp, a hut about 5000 meters high in the Quebrada Yanaraju. After a week of acclimatization, our first Andean snow peak, Nevado Ishinca (5530 m), on the ridge between Ranrapalca and Palcaraju, was climbed on June 23 by Ida and Kondo, followed by Sato, Hayakawa and Miyashita on the 25 th of the month.

Our next goal was Nevado Ranrapalca (6162 m). We set up our Camp 1 at 5250 m and Camp 2, a snow hole at 5700 m. Taking a route on the snow face near the north ridge, Sato and Hayakawa reached the summit of Ranrapalca on July 3.

After a two day rest we removed our camp with the goal of the yet unclimbed

Nevado Ocshapalca (5881 m). We established Camp 1 at about 5150 m at the foot of the north ridge and Camp 2 at 5500 m in a narrow snow site on the same ridge. At two places in a rock chimney on the way to Camp 2 we found old, fixed, manila ropes, quite frozen and tattered, which seemed to be those of the 1961 German Party (the Swabian Andean Expedition). We replaced them with our new nylon ropes. Beyond Camp 2 there was an uneasy knife ridge, consisting of soft snow on one side and blue ice on the other, with small ice pinnacles appearing at frequent intervals. Along this snow route we fixed nylon ropes about 450 m long. At 6 A.M. on July 10, Sato and Miyashita left Camp 2 hoping to reach the summit. At 10 A.M. they reached the highest point of our fixed rope, which was set the day before. The point was located about 30 meters below the summit and the direct distance from the summit was considered to be about 100 meters. Sato and Miyashita finally reached the top of Ocshapalca after three rope lengths and three hours of difficult climbing. It was 12 : 40 P.M. The top was quite steep and narrow. There was not even standing room on the summit, so that snow on the very top had to be removed with an ice axe.

After evacuation of our camp to Quebrada Ishinca, Kondo, Hayakawa and Miyashita climbed Nevado Urus East (5420 m). This completed our climbing program in the Cordillera Blanca.

In the Cordillera Huayhuash, we were unable to explore a new route to Nevado Yerupaja (6632 m) via the south peak from the Carhuakocha side (east side).

On July 30, Camp 1 was established on the glacier. On August 4, Camp 2 was placed near the col between Yerupaja and Siula (6356 m).

However, on August 13 we gave up further advance, after reaching about 5950 m on the south ridge.

# Dhaula Himal, 1965

## By Hiroshi Sugita

On the last day of February in 1965, we, the All Japan Himalayan Expedition, left Pokhara for Mukutgaon. For a long time we had the desire to climb Dhaulagiri II on the west side of Dhaulagiri, it is the leading peak (7751 m) of the Dhaula Himal

range which runs from north to south. In the past, an Austrian party tried to climb this peak in 1963, and Japanese expeditions went to this region for reconnaissance in 1959 and 1962. But it had not been climbed by anyone. So our party hoped to be the first to reach the summit of DhaulagiriII.

The party consisted of Hiroshi Sugita (37 years old), Leader; Masato Oki (30), Deputy-Leader; Yutaka Hirose (32), Surgeon; Akira Katoh (32), Manager; Kazuo Hiromatsu (31), Masayoshi Osawa (27), Tatsuya Amano (26), Nobuo Matsuoka (25) and K. P. Subedi (20), Liaison Officer. We were accompanied by sixteen Sherpas: Tenzing Gurmi, Sirdar; Kiriken, Cook; Girming Dorje, Nyima Dorje, Jhamang Tenzing, Lhakupa Gelbu, Mingma Tenzing, High Altitude Porters; Pasang Temba, Pemba Phutar, Phu Tharkey, Ang Chotare, Dawa Tenzing, Local Porters; Tashi Tundop, Sange, Mail Runners; Dorje and Hakupa Tsering, Kitchen Boys.

At the first stage of transportation, we used sixty mules and fifty porters up to Dhangar Jong. After nine days' caravan in Kali Gandaki ravine, on March 8 we arrived at the village of Dhangar Jong, which was the first relaying point of our transportation plan. 5500 kgs of equipment were smoothly conveyed to that point by mules and porters under the kind assistance of a Thakalese rich man, Indoraman Serchan of Pokhara Bazar. On March 9, we dispatched to Sangda-Peling. Oki, Amano, two Sherpas and a villager as a guide to examine snow conditions. On the following day, this first reconnoitering party came back to Dhangar Jong camp and reported that a pass near Muting was covered by snow two meters deep, so that the equipment could not be carried through by the porters. As we expected, villagers in Falak and Dhangar Jong refused to start a caravan immediately. On the 17 th, we sent the second reconnoitering party to Sangda-Kho. The pary was led by Oki and consisted of Osawa, six Sherpas and one strong villager, Dorje, as a guide. Snow fell continuously for five days, which eventully delayed the caravan for forty days. This heavy snow storm forced the party up into the shade of a rocky cave by the side of Dhakha Lungpa. The party made their way through the lowest route at the confluence point of Keha Lungpa and Kali Gandaki through Keha Lungpa to avoid deep snow. After six days of suffering, the caravan, Oki and his party arrived at Sangda-Kho. They made an advance camp in Thuje-Lungpa (5000 m) on the 27 th. On the following day, March 28, an avalanche occurred suddenly when they reached a point 100 meters below the pass of Thuje-La.

We lost two Sherpas, Lhakupa Gelbu and Mingma Tenzing, by this accident. The main party left Dhangar Jong on March 29 and arrived at Sangda-Kho on

April 2. We had to stay there for twenty three days as our way to the proposed base camp was closed by deep snow. After the funeral ceremony, we made our third caravan for Mukutgaon via Tsarka on April 24. We took a rather dangerous route via Sukhasangba, the highlands of Lupche Shalma, Thorbo village of Tsarka and Barbung Khola.

The sixty six day journey was finally finished on May 3. Then we made the final rush for ascent as soon as possible after establishing Base Camp by the Mukut Khola. We also established Camp 1 (4700 m) and Camp 2 (5200 m) on the north side of Chorten Ridge on May 7. The reconnoitering party passed a small col (5500 m) on Chorten Ridge and entered the inside of East Churen Khola. On May 9, Camp 3 was established by Oki, Hiramatsu, Osawa and three Sherpas on a moraine at the glacier. On the next day, another accident happened. A high altitude porter, Jhamang Tenzing, suffered a fracture of his backbone by slipping down a glacier on East Churen Khola. After this accident, we had to carry him from Camp 3 to Base Camp. We spent six days in this dangerous rescue work, lifting him up and down over knife-edged Chorten Ridge. On the 18 th, we dispatched a small advance party for the purpose of enlisting special transportation for the wounded Sherpa to a hospital in Kathmandu.

Owing to the late heavy snowfall on our way between Dhangar Jong and Mukutgaon, we were fifty days behind schedule. Under these circumstances, the climbing plan had to be given up. We withdrew from Camp 1 to Base Camp on the 20 th. On our return, we divided the party on May 22 into two, one party went by the Barbung route, the other via the Manangbhot route. The Barbung party crossed Jung-La (4700 m) and reached Pokhara on June 9. The Manangbhot party crossed four passes-Mu-La, Thuje-La, Khog-La, Nisango-La, and reached Pokhara, through Marsyandi river, on June 15 in the midst of the monsoon.

# Diran, 1965

## By Ryuichi Kotani

Attempts to climb Diran (Minapin) (7273 m), in the Karakoram, were made by three expedition parties, the British in 1954, the Germans in 1959 and the Austrians in

1964, but these attempts were unsuccessful. In 1965, for reasons of military security, the Pakistan Government refused to permit all foreign expedition teams to climb any peaks in the Karakoram except for two Japanese teams, Tokyo University and our Kyoto Alpine League. Members of the Kyoto Alpine League were as follows: Ryuichi Kotani (40), leader; Keiichi Tsukamoto (35), deputy leader; Sadao Matsuda (33), manager; Sokichi Saito (38), doctor; Mitsugu Koyama (35); Mikio Nakayama (30); Naoki Takada (28); Tadashi Takahashi (29); Yuzuru Tsuchimori (27); Junzo Ueda (27).

Around the end of April, the leader and two other members left Japan for Karachi to confirm permission to climb Diran from the Pakistan Government and to see various officials. The remaining members of the party left Japan on May 20th, flying direct to Gilgit. The balance of the journey to Minapin Village was made by jeep, meeting the advance group there.

On June 4 th, arrangements were made for a liaison officer from the Pakistan Government, seven high porters. On June 5 th, we made our Base Camp at Takafari, 3400 meters, and could see Minapin Glacier fully snow covered. High camp investigations were made on June 6 th and camp sites were decided. Camp 1 was made on the top of Minapin Glacier, at an altitude of 3800 meters on June 7th. This was followed with Camp 2, also on the top of Minapin Glacier at 4200 meters on June 12 th. Camp 3 at 4800 meters was made on the ridge on June 16 th. June 20 th, Camp 4 was made at 5600 meters. June 24 th, we made Camp 5 at the col of the main ridge. We established the attack camp on June 27 th, at 6400 meters.

Early on the morning of June 27 th, two members Koyama and Tsuchimori, from Tokyo, made the summit attack and were expected to reach the summit around 2 P. M. However, around 12 noon, it became cloudy, strong winds were encountered, followed by heavy snow which greatly hampered the advance. At 3 : 00 P. M., at a height of 7200 meters, with further climbing impossible, they were forced to spend the evening there. On June 28 th, plans were made to attack the top again but the weather remained the same and the evening was spent 50 meters below the crevasse. The weather cleared on June 29 th, but due to being physically tired, the two returned to the attack camp.

We were at the attack camp until July 5th, when the party descended to Camp 2. The attack members ascended to Camp 5 again on July 9 th and found this tent and the attack camp tent fully buried in snow. Consequently, it was impossible for us to proceed to the summit. On July 16 th, all members of the party returned to Base Camp. We returned to Japan on August 10 th.

The three expedition parties mentioned above and ours could not reach the

summit. Our Kyoto Alpine League Expedition went about 1000 meters higher than the German party.

The main reasons we were unsuccessful were that the Karakoram high porters were not fully trained and that only two high porters could climb as high as 6000 meters. The approach was short so that we had much illness in the expedition party. With the glacier fast melting, we encountered many crevasses and avalanches were plentiful which made the selection of routes most difficult.

Diran is located 20 kilometers southeast of Rakaposhi (7788 m). We could see the summit of Rakaposhi daily from Base Camp and the range outline was very beautiful. The climb to Rakaposhi from Diran along the crest range was very fascinating.

# Koh-i-Mondi (Hidu Kush)

## By Makoto Yano

In December 1964, the Ōita Himalayan Kenkyūkai (a local Alpine society in Kyūshū, Japan) and the Ōita branch of the Japanese Alpine Club, agreed to send out their expedition to the Hindu Kush in Afghanistan in the summer of 1965.

Following the agreement in February we set up the Ōita Himalayan Expedition Committe, and they appointed the following six persons as the members of the expedition:

Dr. Makoto Yano (dentist and expedition leader age 40)

Mr. Makoto Nishi (sports goods store keeper, 32)

Mr. Hidenori Umeki (newsman, 31)

Mr. Kazuki Himeno (city office official, 24)

Mr. Hidehiko Kato (college student, 23)

Mr. Yukio Etō (employee of hardware shop, 21)

We settled on the summit of Koh-i-Mondi as our goal. 20499 feet in height, it stands almost in the central part of Nuristan mountain district among the Hindu Kush. On our departure, we divided the members into two groups.

The first left for Afghanistan by plane, taking along food and equipment. On June 10, the other group arrived in Kabul by plane and soon rejoined with their

teammates. About a week later, with the help of the Japanese Embassy, we received a local govermment domestic travel permission for each of us.

We left Kabul by truck with 1400 pounds of food and equipment on June 17. After an all day ride, we reached Chagasarai, the Capital of the state of Kunar, and submitted to the governor an application to enter into Nuristan mountain district. The following day we went up along the basin of the River Pech. About noon the truck we were riding broke down and as it wasn't fixed quickly, we had to hire 25 porters and have them carry the suppllies from that point.

After eight long days of hiking, we approached Weran Pass. The 15288 feet high pass cost us three days. On the other side was Munjan valley. We went down the valley, passing by a small village called Nao and then came to Jilion June 28. This was the place where we had planned to establish our base camp. Early on the next morning, the six members and eleven porters carried up 600 pounds of supplies, climbing along the Hawi Valley to a height of 15295 feet, where we elected Camp 1. On June 30, Yano, Nishi, Umeki, Eto and three porters, carrying 286 pounds, started from Camp 1 and went along the Hawi Glacier, to a height of 16798 feet.

We pitched there the advanced camp which we called Camp 2. Nishi and Eto twice made an attempt to climb the peak, which rises from the heart of the Hawi Glacier, looking for the best route to reach the summit of Koh-i-Mondi.

On July 3, Nishi, Umeki and Eto organized the final assaulting team. They took a route along Eis Rinne of 2950 feet long height. After nine hours of struggle, they finally reached the summit. On the same day they also conquered the little Mondi, called Koh-i-Jumi, 20080 feet high. Eto and Himeno succeeded in reaching the summit standing in front of Koh-i-Mondi. Finally we had conquered three peaks that were more than 20000 feet high and four summits more than 15000 feet high.

We folded up Base Camp and left for home on July 10. On our way to Kabul we went down Munjan valley up the Anjuman valley, and then over the Anjuman pass, a height of 13862 feet. After a week of travel, we arrived in Dasht-i-Rewat, a small town where we caught a truck back to Kabul. We got back to Japan on July 25.

# A short excursion to Central Hindu-Kush, Mir Samir, 1965

By Yukitoshi Sato

Our first aim was some unclimbed peaks in Wakhan Valley. However, the difficulties of obtaining permission were too great to overcome, as other foreigners had learned in the past. We decided to enjoy a climb around Koh-i-Bandakor. As far as we knew there seemed to be a few virgin six thousanders. And we could get permission for climbing activities in this region.

So we three gathered in Kabul, August 4. The members are as follows.

Jiro Amari (33), leader. He is a potbellied gentleman whom nobody is likely to believe to be a climber, but was a former vice-leader of the 1961 Andes expedition of our Hitotsubashi University Alpine Club.

Hiroyuki Maruko (28). A distinguished rower as well as a climber, he once won the championship at the All Japan Regatta Championship.

Yukitoshi Sato, (23) a student of commerce, destined from the beginning to be a cook and a carrier only because I am the youngest.

I find it more appropriate to call our party an excursion than an expedition. I don't know what the definition of so-called expedition is. We were only three with just 280 kg of equipment and food, and we could spend only several weeks for mountaineering activities. A few days before our departure from Kabul for Koh-i-Bandakor, we felt utterly miserable at the news of the dreadful Cholera spreading around northern Afganistan. It meant our destination was also involved in the menace. At first, we were a little optimistic about it. But a frightful sympton of this disease, mentioned vividly and menacingly by a dispatched member of WHO, was effective enough to discourage us and we changed our destination rather quickly.

Our new aim was Mir Samir (6060 m), which was ascended for the first time by a German party headed by Mr. Harald Biller, a conqueror of Annapurna Ⅳ. On August 12 th, we started from Kabul in two jeeps for Mir Samir with almost no information about this mountain. A one day, rattling, dusty drive brought us to a village called Chrunje, where we hired one horse and seven donkeys. Soon after we repented of refusing to spend a little more money for hiring horses. I

learned, for the first time, that the donkey is extraordinarily sluggish, stupid and cowardly.

After a four day's approach with an incident of the slipping down of two donkeys and the dismissal of them, we reached the end of Mir Samir valley. Magnificently beautiful, picturesque, another world lay there. Snow-melted water from the glacier above made a brook, and the brook wound its way slowly on the green meadow.

In front of us stood pointed Mir Samir protruding its snow-crowned top high up in the sky. And the gigantic rocky mass wearing its meager snow made a splendid contrast against the dark blue sky. There we set up our base camp, a one tent affair. The height was 4150 m.

To our surprise, there was another party aiming for Mir Samir. That was the New Castle University party from England. Unfortunately they failed in the final assault owing to bad weather and gave up all climbing activities after six weeks stay at the base camp.

On August 18th, we were at Camp I, 4650 m in height. Mir Samir had several steep rocky ridges. Between each ridge, almost perpendicular walls or steep icy slopes guarded the snow dome of the top. We thought the south west ridge was the most likely route, so we set up Camp II, 4800 m in height, on the south-west glacier. After some reconnaissance from Camp II for a few days, we decided the assault route as follows: Camp II——the col of the south west ridge——traverse forward to the south ridge——the steep ice gully to the col of the south ridge——the steep snow slope and rock wall between the south ridge and the east ridge——to the top. We fixed ropes about 150 m long with 12 rock pitons and 7 ice pitons at that steep ice gully for the aid of the assault. On August 26 th, we left Camp II for the top at 6 : 00 A. M. The height of Camp II was 4800m and the top was 6060 m, so we were to climb 1200 m on end.

At 10 : 00 A. M. we stood above the gully, on the col of the south ridge, at 5300 m. Then we climbed a steep slope mixed with blue ice. A pillar of *nieve penitente* sometimes came up to be 1 meter high, and climbing over numerous pillars one by one was terribly laborious. We reached the base of a buttress of about 300 m at noon, and took a rest there. After enjoying some pleasant sound rock climbing with warm sunshine on our backs, we unroped. Separately we climbed the last snow slope breathlessly and reached the top at 2 : 30 P. M.

# Greenland Expedition, 1965

## By Takashi Miyahara

From the end of July to the middle of September 1965, we, the Nihon University Greenland Expedition, made a mountaineering exploration in the area called Schweizerland, which is situated just inside the Arctic Circle on the east coast of Greenland.

The purposes of the expedition were as follows:

(1) Preparatoy research of the natural features of Schweizerland for future expeditions.

(2) Preliminary expeditions for the ascent of Mt. Forel (3300 m) and the crossing trip of the inland ice sheet.

Our party consisted of following seven Nihon University Alpine Club members.

T. Miyahara: Leader, Chemical engineer, age 31

M. Katayanagi: Clerk, age 28

K. Ikeda: Architect, age 26

S. Takamidori: Accountant, age 25

F. Imamura: Press cameraman, age 25

S. Ikeda: Student, age 21

T. Tawada: Student, age 20

This expedition plan has been partially sponsored by the Yomiuri Newspaper and the Japan Polar Research Association and also assisted by our University and many Japanese companies.

The permission of entry issued by the Danish Government's Prime Minister's Department, Ministry for Greenland Affairs, was processed through the Embassy of Denmark in Japan.

We reached Copenhagen via U.S.S.R., from where we traveled on a Konglige Greenland Handel ship to Ang Magssalik.

After our arrival at Ang Magssalik on July 27, 1965, we landed at the shore of Sermiligâq Fjord where once a Swiss Expedition led by Andre Rock had made a landing, on the next day.

Starting for Mt. Forel from this point, we traveled 400 kilometers using men drawn sledges. Many crevasses on the way made our march very difficult. Finally, 23 days later, on August 20, we reached the base of its south face.

We attempted to ascend via the east face, then onto the side ridge rising toward the southeast, and finally on the south face. However, we failed to reach the summit. The coming of winter did not permit us to continue our climbing activities. We were forced to return to the col at 3000 meters. This route had seemed promising, but our attack had started too late.

# Cordillera Norte and its surroundings

## By Atsumi Hosono

| | |
|---|---|
| August 31 | Started Huaras. |
| September 2 | Started Corongo. |
| September 5 | Established Camp 1 (4800 m) on the rock terrace at the end of Rosco Grande glacier. |
| September 7 | Climbed Rosco Grande (5188 m). Party (A. Hosono, Y. Takayama, S. Kinoshita, Y. Yokochi) |
| September 9 | Succeeded in climbing two peaks which are located nearest to Camp 1. A. Hosono and S. Kinoshita climbed an unnamed snow peak (5100 m). T. Takayama and Y. Yokochi attacked the rock peak. |
| September 10 | Climbed Nevado Cuello Condor (5072 m). Party (M. Satoi, P. Morares-porter) an unnamed peak (5100 m). Party(Y. Takayama, Y. Yokochi) |
| September 13 | Went down. |

Among Cordillera Norte mountains, Rosco Grande group seems to be the only mountain that is worth climbing. This group is situated at about 25 kilometers north from Nevados de Champara and stretches about 15 kilometers from the north to the south.

We explored only the northern part of Rosco Grande group, but could not find so conspicuous glacier in its southern part. In Rosco Grande group, rock peaks stand close together, such as Nevado Rosco Chico (5064 m), Nevado Pacra (5100 m), Nevado Kaico (5100 m) etc.

Generally speaking, the southwest part of Cordillera Rosco Grande was abundant

in snows and ices but the northeast part had little of it, and moreover was full of green plants. The humidity seemed higher.

There are many mountains from 4500 m to 4900 m in Rosco Grande surroundings, but each of them would not be worth climbing.

There are mountains called Co. Huarco (4768 m) and Co. Yana Cocha (4899 m) in the west side of Rosco Grande, and they are connected towards north with Nevado Cuello Condor, Co. Con. Alas (4938 m), and Cos. del Brujo (4909 m). Farther northward, near Conchucos we can find Co. Shundur (4875 m), and in the east side of it, Co. Mirador (4933 m), the only mountain which has the remarks of the glacier around there.

Ndo. Pelagatos (4928 m) and Co. Pacra Cucho (4849 m) which are in the east side of the Lake Pelagatos have the remarks of glacier.

Our Success of Rosco Grande climbing was admitted by Sr. Cesal Morales, the president of the Peruvian Alpine Club, as the 21 st exploration of the unknown mountain group among Peruvian Andes. Our members are as follows:

Leader Atsumi Hosono
Motoyoshi Satoi
Yoshihiko Takayama
Shuzo Kinoshita
Yasufusa Yokochi

(La Expedicion de los Andes, 1965, Univ. Sophia)

# Mt. Logan Independent Ridge

## By Takashi Kawakami

The Defense Academy Alpine Club sent an expedition for the ascent of Mt. Logan in 1965. Three members topped successfully the central peak.

The members were :

Takashi Kawakami (37) Leader,
Yoshihiro Wakaura (29) Sub-leader,
Hajime Tanaka (29) Manager,
Kazuhisa Hironaka (28) Food

Yutaka Ohsuga (28) Records,
Tsutae Shiga (28) General Affairs,
Iwao Takami (27) Packing,
Yoshio Tashiro (27) Equipment,
Masayuki Osada (26) Meteorology,
Hiroshi Kobayashi (38) Doctor.

We left Japan between June 1 and June 15, 1965. On June 15, all members gathered at Anchorage. On June 19, we left Anchorage for Chitina with the equipment and the food by a small bus, two sedans and a truck. From Chitina we flew to our base camp in Logan Glacier with a bush pilot, J. Wilson.

At first, we built a base camp near the foot of the ridge where we had been advised to go by Dr. Wood, president of the Geographical Society of America, as we had planned to reach the central peak via the ridge. But it was in very bad condition because of the collapse of ice-blocks. Then we gave up the idea of climbing via the ridge and decided, in haste, to make another attempt to the central peak via the north ridge or Independent Ridge. We moved in to a new base camp near the ridge.

A new base camp and five advance camps were established on this ridge. On the ridge below Camp 3, ice and snow, in particular snow, strongly reflected the sunlight, which afflicted us. We had to make an effort to acclimatize ourselves to variations of temperature of about 40° Centigrade a day. The ridge had great variety, such as many walls 50 to 200 meters in height and many crevasses. Above Camp 3, we had some problems, which were the influence of the highest area on the human body, passing many crevasses and going through the glacier near the top of Mt. Logan.

On July 25, three of our members, Wakaura, Ohsuga and Osada, topped the mountain, taking 22 hours for the climb. It was fine in the morning but began to snow and to be windy in the afternoon; therefore the attack was very difficult. On July 27, four of our members, Ohsuga, Takami, Shiga and Tashiro, tried to attack the north peak of Mt. Logan, but they did not succeed because of lack of time. However, they could obtain valuable data and the experience of being at a point more than 5000 meters in height.

We withdrew from the camps between July 28 and July 30. On August 1, all members regathered by Kluane Lake. On August 3, we arrived at Anchorage again. That finished our climbing activities.

# Mt. McKinley (South Buttress), 1965

## By Yosito Tsukazaki

In June and July of 1965 the members of the mountaineering club of Kansai Tōkōkai made an ascent of Mt, McKinley in Alaska. The party consisted of six members: Y. Tsukazaki, M. Kajiura, K. Kaburagi, S. Nishimae, H. Nakamura and A. Davidson.

We arrived at Anchorage on the 18 th of June and the next day started by car for Talkeetna. Early on the morning of the 19 th we started by plane, piloted by Don Sheldon, who was especially engaged in air service to McKinley, and alighted on a spot 2200 meters high, on the glacier of Kahiltna.

The weather condition was bad with continual snowfall and fog, but about a week later we set up our base camp at 3300 meters, the highest point of the glacier. At first our intention was to climb Italian Ridge—the south buttress of McKinley, but owing to the difficulty of the route and frequent avalanches, we had to take another course to the South Buttress East Ridge.

On the 26 th of June we climbed the icefall and set up Camp 1 (3900 m). In the icefall there were seracs and crevasses. We fastened 250 meters of fixed rope. On the 28 th of June Camp 2 was set up at 4600 meters on the ridge of the South Buttress and on the 30th of June Camp 3 was established at 4800 meters on the East Ridge Col. At 10 A. M. on the 2nd of July five members of the party left Camp 3, climbed the steep slope of snow and made an urgent bivouac at 5800 meters, just below the sky line.

At 2 : 30 A. M., July 3rd, we climbed the last steep slope of the East Ridge and reached the knife-ridged sky line as the eastern sky was gradually turning gray. At 9 : 20 three members stood on the top.

# 海外登山年表　＝1965年＝

(Japanese Overseas Expeditions in 1965)

松田雄一編

海外渡航の自由化に伴い，わが国から海外へ出かけた登山隊の総数は1965年だけでも54隊の多数に達した。この中にはヨーロッパ諸国のように陸つづきであれば，Overseas Expedition などとはいえない Excursion のようなものも含まれてはいるが，ともかく数の多いことは事実で，とてもこの「山岳」61年にそのすべてを収容することは困難になった。そこで本会の海外連絡委員会で検討し，この中の主なもののみを選んで本文に収録し，他はこの年表に一括して整理し，記録として残すことになった。

この年表を作成するに当たっては，各隊の代表者に「海外登山遠征隊調査表」の用紙を送って記入してもらったが，一部書いてもらえぬものもあり，これについては新聞その他の資料により補足せざるをえなかった。また各隊とも地名，山名，人名等英文名もいれたかったが，資料に記載されていないものが多く，これらを調査してまとめる時間的な余裕がなく，そのためやや統一を欠くところもあるが，その点は御寛容戴きたい。

なお，これらの資料を整理して1965年における Overseas Expedition の内容を分析してみると，

(1) 数が多かったが，これは海外渡航の自由化によるもので，Private なものが多かった。

(2) ネパールが登山禁止令をだしたので，目的を変更して，許可をとり易いアンデス，アラスカ，ヒンズークシ等へでかけたものが多かった。

(3) アルプスのアイガー北壁に大挙して集中し，しかも悪天候であったにもかかわらず，アルプス一流のルートを数多く登攀した。

(4) ネパール・ヒマラヤ，カラコルムの大物をめざした隊5隊の中，登頂に成功したものは，わずかに1隊のみで，しかも各隊とも事故が目だった。

等の諸点をあげることができる。これらの特徴についても，それぞれ理由を分析していけば面白いが，ここでは誌面の都合で省略する。なお参考までにこの54隊に登場した参加者の延人員301名の中，本会会員は95名でほとんどの隊の中心として活躍し，また本会の団体会員は25団体がでかけており，本会に関係のない隊はわずかに12隊にすぎず，本会会員の海外登山での活躍ぶりに注目することができる。

注：年表の Nos に※印のある登山隊のみ，記録を本文に収録してある。また隊長や隊員名などの前に＊印を付したものは本会の会員である。

## ネパール・ヒマラヤ

| Nos | 活動期間 | 目　　的 | 記　　事 |
|---|---|---|---|
| ※ 1 | 1965. 1～6 | ローツェ・シャール Lhotse Shar (8383 m) 試登 | **早稲田大学ローツェ・シャール登山隊** (Waseda Univ. Lhotse Shar Expedition)<br>**隊長**＝*吉川尚郎(30)　**隊員**＝松浦輝夫(30) 井口昌彦(28) *浜野吉生(27)*鏑木昇(27)*成川隆顕(27)村井葵(27)*佐藤辰雄(25)山本聖二(25)白鳥健二(25)　**医師**＝宮本周三(42)<br>**サーダー**＝パサンプタールⅢ　**コック**＝ラクパ・ツェリン<br>**シェルパ**＝アヌルー，ニマ・トンドゥ，ラクパ・ゲルブ，ダワ・トンドップ，アン・ドルジェ，カルマ，ニマ・テンジン，ダワ・ノルブ，ラクパ・テンジン，ラクパ・ノルブ，ピンジュー，アン・テンバ<br>**行動概要**：2月20日カトマンズ発，3月14日ＢＣ入り，23日西南稜より登攀開始せるも，4月18日，成川，Ｃ4上部で雪崩のため遭難。Ｃ2への収容に10日間を費やす。5月初旬より登攀再開，14日Ｃ5を建設，5月15日松浦，井口，ピンジューの3名で 8100 m まで達した。<br>**文献**：「山岳」61年47頁参照，浜野吉生「アンデスよりヒマラヤへ」(1966年5月・白水社刊) |
| ※ 2 | 1965. 1～6 | ゴジュンバ・カン Ngojumba Kang (7646 m) 登頂 | **明治大学ネパール・ヒマラヤ学術調査隊** (Nepal Himalaya Academic Expedition of Meiji University)<br>**調査隊長**＝渡辺操(54)　**登山隊長**＝*高橋進(34)　**副隊長**＝*藤田佳宏(32)　**隊員**＝*平野真市(26) 尾高剛夫(24)*小林正尚(23)*植村直己(23) 入沢勝(22)　**医師**＝*長尾悌夫(35)<br>**サーダー**＝アン・ダワⅠ　**コック**＝ダワ・テンバ　**シェルパ**＝ミンマ・ツェリン，ドルジェ，ペンバ・テンジン，ダキャ<br>**行動概要**：3月22日ＢＣ建設，4月4日Ｃ1，10日Ｃ2，18日Ｃ3，20日Ｃ4を建設。4月23日植村，ペンバ・テンジンの2名により Ngojumba Kang (A. Bolinder による Ngojumbu Ri Ⅱ, 7646 m) の登頂に成功。<br>**文献**：「山岳」61年31頁参照，高度については「JAC会報」253号 (1966年3月) 参照 |
| ※ 3 | 1965. 1～7 | ダウラギリⅡ峰 Dhaulagiri Ⅱ (7751 m) 試登 | **愛知県山岳連盟1965年全日本ヒマラヤ登山隊** (All Japan Himalayan Expedition 1965)<br>**隊長**＝*杉田博(37)　**副隊長**＝*沖允人(30)　**隊員**＝広瀬豊(32) 加藤彰(32) 平松和男(31) 大沢正義(27) 天野達也(26) 松岡伸郎(25)<br>**サーダー**＝テンジン・ギルミ　**コック**＝キルケン　**シェルパ**＝ギルミ・ドルジェ，ジャーマン・テンジン，ラクパ・ゲルブ，ミンマ・ツェリン，ニマ・ドルジェ　**ローカル**・ |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | ポーター＝パサン・テンバ，ペンバ・ブタール，プー・タルケイ，アン・チョタレー，ダワ・テンジン<br>**行動概要**：2月28日ポカラ発，ツクチャ――サングダ経由，ムー・ラを越え，5月4日BCを建設，直ちに前年のオーストリア隊のルートに従い，登頂を試みるも5月9日C3に達したのみで，ジャーマン・テンジンの転落負傷事故のため，計画を中止，22日BCを撤収，6月15日カトマンズに帰着。<br>**文献**：「山岳」61年108頁参照。愛知県ヒマラヤ委員会刊“Dhaula Himal” |
| 4 | 1965. 3～6 | ランタン・ヒマール踏査 | **魚津岳友会ヒマラヤ踏査隊**<br>**隊員**＝*佐伯郁夫(30)*山口得美(31)<br>シェルパ＝クサン・ノルブ・ダワ<br>**行動概要**：3月23日空路カトマンズに入り，約1ヵ月の予定でランタン谷に入り，カン・カルモ（Kan Karmo 6830 m）他に試登，約6000 mの地点で引返す。その後，5月11日より10日間ポカラよりカリガンダキを旅行。<br>**文献**：「魚津岳友会年報」Zinne No. 10（未刊） |
| 5 | 1965. 4～6 | バルン渓谷踏査 | **広島商科大学山岳部ヒマラヤ先遣隊 1965**<br>**隊員**＝*小林紘一<br>シェルパ＝ラクパ・ツェリン，ペンバ・ノルブ，ラゾ<br>**行動概要**：ビラトナガールよりダンクータを経てカンド・パリに至り，ヌムを往復後，ディング・ラを経てホング・コーラ上部のエリ氷河（仮称）に入り，キャンプを3個所進めてチャムランの南稜6300 mに達す。その後，メラ・ラを経てインヌク氷河源流を踏査。ナムチェ・バザールに至りクムジュン，タミ等を訪れた後，リシリング峠を経てカトマンズに帰着。<br>**文献**：広島商大山岳部刊「広島商科大学山岳部ヒマラヤ先遣隊 1965」 |
| 6 | 1965. 9～66. 2 | ティリ・ツォ・ピーク Tilicho Peak（7148 m）の偵察と中部ネパールの広範な踏査 | **泊山岳会中部ネパール踏査隊**<br>**隊員**＝*薬師義美(29)*伊東信隆(29)金山清一(23)<br>シェルパ＝ラクパ・テンジン，ソーナム（ゴサインクンド旅行のみソーナムの代りにノルブ）<br>**行動概要**：【第1次登山】 10月1日ポカラ発ジョモソムパ経由，11日 Tilicho 湖BCに入り，Tilicho Peak の岩尾根を約5400～5500 mまで試登，雪尾根を約5300 mまでとりつく。その後，Tilicho lake を一周，Muktinath Himal の南端の Peak（約6000 m）を約5900 mまで登る。10月29日BC撤収，マルシャンディー経由，ポカラへ下山。<br>【第2次登山】 11月23日カトマンズ発，Junbeshi 経由，12月7日 Namche 着。9日より12日間の予定で Gorak |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | Shep, Chakri la, Chola la, Imja 氷河, Ngojumba 氷河の Gokyo までのぞき,11月23日帰途に着く。Chainpur 経由 Biratnagar へ1月10日下山。<br>【第3次登山】 1月16日 Kathmandu 発, Trisuli Bazar までジープ, Syabrubensi 経由, 22日 Gosainkund 着。Tarke Gyang 経由, 31日 Kathmandu 帰着。<br>**文献**：泊山岳会刊「1965-66年中部ネパール踏査報告」 |
| 7 | 1965. 9～12 | 中央ネパール地質調査 | **北海道大学山岳会中央ネパール地質氷河調査隊**<br>(Central Nepal Scientific Expedition of Hokkaido)<br>**隊長**＝酒匂純俊(35) **副隊長**＝渡辺興亜(25) **隊員**＝石田隆雄(24) 益田稔(24) 伏見碩二(22) 遠藤八十一(25) 市村輝宣(25)高松秀彦(27) 米田功(26) 小野田文彬(現地参加)<br>**シェルパ**＝テンジン, クサン・ノルブ, パサン・ダワ, アン・カミ<br>**行動概要**：日本地質学会北海道支部の主催により中央ネパール地域の地質, 氷河, 植物の調査に向かい, 許可がとれればチューレン・ヒマールの試登も考えた。バイラワよりタンセンに至り, 隊をA, B, Cの3隊に分け, それぞれグルミタンガス, バグルン, ルクムコットを経てドールパタンに達するコースで各種調査を行ない, その後, それぞれトクチェ, ジョムソン, カトマンズ経由, ポカラへ帰着。その後, 石田, 遠藤はナムチェ・バザールを訪問。 |
| 8 | 1965. 11～66. 1 | 中央ネパール山地旅行 | **京都熊笹会中部ネパール踏査旅行**<br>**隊員**＝大西康郎(29) 八木昭二(26)<br>**行動概要**：ビルガンジー⟶カトマンズ⟶アルガト・バザール⟶クンチャ⟶ポカラ⟶シカ⟶トクチャ⟶ジョムソン⟶ベニ⟶カロパニ⟶クスマ⟶ポカラ⟶カトマンズ |
| 9 | 1965. 12～66. 2 | ソロ・クーンブ Solo Khumbu地方の冬期旅行 | **エーデルワイス・クラブのネパール踏査旅行**<br>**隊員**＝*関田美智子(26)*水野靖子(25)<br>**シェルパ**＝ユール・テンジン<br>**行動概要**：12月15日カトマンズ発, 1月15日ナムチェ・バザール着, Pokalde (5806 m) に試登。25日ナムチェ・バザール発, ビラトナガール経由, 2月8日カトマンズ帰着。女性のみによる冬期の楽しいネパール踏査旅行。<br>**文献**：「エーデルワイス」28～29号 |
| 10 | 1964. 10～65. 5 | 西北部 東部ネパール・ヒマラヤの撮影旅行 | **風見武秀ネパール・ヒマラヤ撮影旅行**<br>**隊員**＝*風見武秀(56) 芳司久恵(32)<br>**行動概要**：【第1次撮影】 カトマンズ⟶ポカラ⟶マナンボット⟶トクチェ⟶ムクチナート⟶ジョムソン⟶ポカラ。<br>【第2次撮影】 カトマンズ⟶ナムチェ・バザール⟶タ |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | ンボチェを往復し，エベレストの撮影を行なう。<br>その後，タライ地方での撮影を行なって帰着。<br>**文献**：「岳人」210号（1965年8月号）「日ネ協会会報」（1965年1月号）他多数 |

## カラコルム

| Nos | 活動期間 | 目　　的 | 記　　事 |
|---|---|---|---|
| ※11 | 1965. 5～8 | キンヤン・キッシュ Khinyang Chhish (7852 m) 試登 | **東京大学カラコルム遠征隊**（Tokyo University Karakorum Expedition 1965）<br>**隊長**＝白木博次(47)　**副隊長**＝石川信義(34)　**隊員**＝伊藤邦幸(34) 下石坂勝至(28) 関章司(29) 阿部圭(27)†中村岳生(25) 村上啓介(26) 西谷隆亘(26)*牧野内昭武(24) 井上邦昭(24) 鹿野勝彦(23) 小倉寛太郎(34) Mohammed Asif (20)（カラチ医大）<br>**高処人夫**＝8名<br>**行動概要**：6月18日ナガール発，27日BC建設，南稜にキャンプを進め，8月18日 7100 m に仮設C8を建設せるも，翌19日C8建設に向かう途中，7200 m の地点で中村の遭難事故発生。直ちに計画を中止し捜索するも，発見できず，8月27日捜索を打切り，BCを撤収下山，29日全員ナガールに帰着。<br>**文献**：「山岳」61年63頁参照，東大カラコルム遠征隊報告「キンヤン・キッシュ—1965」 |
| ※12 | 1965. 6～7 | ディラン Diran (Minapin)(7273m) 試登 | **京都府岳連カラコルム遠征隊**<br>**隊長**＝*小谷隆一(40)　**隊員**＝*塚本珪一(35) *高橋正(29) 小山貢(35) 中山幹夫(30) 松田禎夫(34) 上田純三(28) 高田直樹(28) 土森譲(27) 斎藤宗吉（医師）(38)<br>**行動概要**：塚本他1名は1963年6～8月にかけ，Gilgitを根拠にして偵察した。1965年隊は6月27日土森と小山が頂下 170 m まで達したが強風と吹雪のため退却，最高キャンプ（6700 m）に向かったが，日没のため 7100 m 付近でビバーク。翌日午後再び退却2回目のビバークの後，翌日C5に帰着。これが最後の攻撃となる。<br>**文献**：「山岳」61年117頁参照「岳人」225, 226号（1966年9月，10月号） |

## ヒンズークシ

| Nos | 活動期間 | 目　　的 | 記　　事 |
|---|---|---|---|
| 13 | 1965. 4～6 | 西部及び中央ヒンズークシ偵察 | **東北学院大学山岳会ヒマラヤ調査隊**<br>**隊員**＝*四方田靖(29)*松倉和義(29) |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | **行動概要**：当初ネパール入国を目的に準備していたが，ネパール国が登山を禁止したため，アフガニスタンに計画を変更。この季節はヒンズークシ登山には早すぎて，雪が多く，雪崩の危険もあり，2人だけでは無理で西部ヒンズークシ山脈のコー・イ・ババ山群のシャーフラディー（5143 m）を試登。約5000 m まで到達するも雪の状態悪く断念。次いで中央ヒンズークシのミル・サミールに向かい，登路の偵察を行ない付近の無名峰に登る。<br>**文献**：東北学院大学山岳会刊「ヒンズークシ調査報告書」「JAC会報」242号（1965年8月） |
| ※14 | 1965. 5～7 | コー・イ・モンディ Koh-i-Mondi（6248 m）第2登 | **大分ヒンズークシ遠征登山隊**<br>**隊長**＝*矢野真(40) **副隊長**＝*西諒(32) **隊員**＝*梅木秀徳(31)*姫野和記(24) 加藤英彦(23) 江藤幸夫(21)<br>**行動概要**：6月17日カブール発，ヴェラン峠を経て29日ティリ着，ハウイ谷を登り，6月30日C1建設，ハウイ氷河にC2を設け，7月3日西，梅木，江藤の3名にてコー・イ・モンディの第2登に成功。その他コー・イ・ユミ，コー・イ・ティリ（5280 m）等6峰の登頂にも成功し，7月10日ティリ発，アンジュマン峠を経て18日カブールに帰着。<br>**文献**：「山岳」61年125頁参照。大分ヒマラヤ委員会刊「ヒンズークシ中部，コー・イ・モンディ峰登山報告書1965」「JAC会報」245号（1965年11月） |
| ※15 | 1965. 7～9 | ミル・サミール Mir Samir（6059 m）第2登 | **一橋大学カラコルム・ヒンズークシ調査隊**（Hitotsubashi Univ. Karakorum Hindukush Expedition 1965）<br>**隊長**＝*甘利仁朗(32) **隊員**＝*丸子博之(28) 佐藤之敏(22)<br>**行動概要**：8月12日カブール発，16日BC着，18日C1，21日C2建設の後，8月26日全員にてミル・サミールの第2登に成功。9月1日カブール着，分散して帰国。<br>**文献**：「山岳」61年136頁参照「山と渓谷」324号（1965年12月号） |

## アラスカ・カナダ

| Nos | 活動期間 | 目　　的 | 記　　事 |
|---|---|---|---|
| ※16 | 1965. 6～8 | ローガン Mt. Logan（6050 m）第11登（インディペンデンス・リッジより第2登） | **防衛大学校山岳会ローガン峰登山隊**（Defense Academy Alpine Club Mt. Logan Expedition）<br>**隊長**＝*川上隆(37) **副隊長**＝*若浦義弘(30) **隊員**＝田中甫(30) 弘中一寿(28)*大須賀浩(28) 高見巌(26) 志賀伝(28) 長田正行(26)*田代儀雄(27) **医官**＝小林弘(39)<br>**行動概要**：6月15日アンカレッジ集結，19日チチナ着，21日BC建設，7月22日C5建設，7月25日若浦，大須賀，長田の3名にて中央峰に登頂，30日BC集結，8月3日ア |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | ンカレッジ帰着。<br>**文献**：「山岳」61年159頁参照 |
| ※17 | 1965. 6～7 | マッキンレー Mt. McKinley(6191 m) 東稜より登頂 | **関西登高会全日本山岳連盟アラスカ登山隊**（All Japan Alaska Expedition 1965）<br>**隊長**＝*塚崎義人(35)　**隊員**＝梶浦正敕(29) 鏑木勝彦(29) *西前四郎(29) 中村久住(21) Arthur Davidson(23)（コロラド大学山岳部）<br>**行動概要**：6月17日アンカレッジ集合，18日カヒルトナ氷河に空輸，24日東カヒルトナ氷河の3261 m の地点にBC建設，ここよりサウス・バットレスの 4842 m 峰に登り，東稜の 4746 m のコルにC 3を設け，ここから 1400 m の頂上まで2日間で往復，7月2日梶浦，西前，西村の3名で登頂に成功。<br>**文献**：「山岳」61年167頁参照 |
| 18 | 1965. 7～8 | ドンジェク Mt. Donjek（3736 m） 初登 | **芳野夫妻のセント・エライアス氷河での個人的登山**<br>**隊員**＝*芳野赳夫(36)*菊子(28)<br>**行動概要**：北米北極研究所（Arctic Institute of North America）におけるセント・エライアス氷河上での雪氷の調査，研究のため，7月20日羽田発，アンカレッジを経て22日陸路クルアーネ，26日空路カスカウルシ，ハッバード氷河の IRRP デバイド・キャンプに着き研究開始。8月6日4時キャンプ発，9時ドンジェク峰に登頂。8月13日研究終了。空路クルアーネ帰着，チュガチ山群を陸路経由，24日アンカレッジ帰着。<br>**文献**：「JAC会報」243号（1965年9月），246号（1965年12月） |
| 19 | 1965. 7～8 | ランゲル Mt. Wrangell (4318 m) 第4登 | **東京教育大学アラスカ遠征予備調査隊**<br>**隊員**＝三井勝雄(34) 永峯隆(30)<br>**行動概要**：1965年派遣する遠征隊のためボナ峰への登路偵察，ランゲル山域の地形，氷河状況偵察。7月27日グルカナ Air Field 発，サンフォード，ランゲル間の氷河に着陸，ランゲル周辺の偵察を行ない，8月4日ランゲル峰に登頂，翌5日グルカナに帰着。<br>**文献**：東京教育大学山岳部部報「偃松」No. 8 |
| 20 | 1965. 7～8 | ウォーディントン Mt. Waddington (4042m) 試登 | **守口市暁山岳会，全日本岳連カナダ親善登山隊**<br>**隊長**＝*角口想蔵(59)　**副隊長**＝*斎藤裕二(31)　**隊員**＝津田敬(26) 島崎直(25) 今川昌明(24) 柴田輝雄(24)<br>**行動概要**：守口市とカナダ国コロンビア州ウェストミンスター市の姉妹都市の親善をかね，ウォーディントン峰を試登し，8月3日斎藤，津田，島崎，柴田の4名にて主峰の前衛峰ブレボピーク（3200 m）に登るも，主峰の登頂には失敗。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | **文献**：「ＪＡＣ会報」247号（1966年１月） |
| 21 | 1965. 6～8 | アルバータ Mt. Alberta（3619 m）第５登 | **長野高校ＯＢ山岳会カナディアン・ロッキーズ遠征隊**（Nagano High School Old Boys' Alpine Club Canadian Rockies Expedition）<br>**隊長**＝田島守(32)　**隊員**＝中村忠(29) 原謙一(27)*渡辺一(25) 下平和範(22)<br>**行動概要**：６月25日バンクーバー着，７月１日バンフ着，３日ＢＣ，７日Ｃ１設営，10日無名峰を試登せるも不成功，12日ウーレー峰の試登も不成功に終わる。再び７月14日Ｃ２発，15日原，渡辺の２名でウーレー峰（Mt. Woolly 3404 m）に登頂。７月16日Ｃ３設営，17日田島，中村，下平の３名で無名峰（3292 m）ならびにスタットフィールド・ピーク（Stutfield Peak 3450 m）の両峰に登頂。７月23日Ｃ４設営，28日Ｃ４発，29日田島，渡辺，下平の３名でアルバータ峰（Mt. Alberta 3619 m）の第５登に成功，30日Ｃ４に帰着，８月３日ＢＣ撤収，10日バンクーバー発帰国。<br>**文献**：「ＪＡＣ会報」245号（1965年11月） |
| 22 | 1965. 7～8 | テンプル Mt. Temple（3547 m）登頂 | **東京薬科大1965年日本カナダ親善隊**（Japan-Canada Friendship Team 1965）<br>**隊長**＝*朝比奈菊雄(47)　**隊員**＝*平山善吉(31) 関根幸子(26) 小林宏子(26) 坂本栄子(25)<br>**行動概要**：Canadian Pacific Air Lines の招待により東薬大 OG を主とする親善隊は７月４日 CPAL 機でバンクーバー着，10日バンフ着，15日カナディアン・ロッキーの Mt. Temple（3547 m）に全員で登頂。その後，ジャスパーを経由，７月27日バンクーバー着，８月１日 CPAL 機にて帰国の途につく。<br>**文献**：映画「カナダの休日」 |

## アンデス

| Nos | 活動期間 | 目的 | 記事 |
|---|---|---|---|
| 23 | 1965. 3～11 | サルカンタイ Salcantay（6300 m）第３登<br>コルディエラ・ビルカバンバ山群での登山活動，ならびにウルバンバ川のゴムボートによる下降 | **同志社大学南米ペルー・アンデス・アマゾン登山探検隊**（The Doshisha Univ. Andean-Amazon Expedition 1965）<br>**隊長**＝*江上康(29)　**副隊長**＝*前芝茂人(28)　**隊員**＝里藤武(25) 岩間清平(25) 宮本光将(25) 川田哲二(25) 小川允己(23) 沢祥晃(22) 堀江礼二(22)　**カメラマン**＝安倍正喜(31) K.B.C.<br>**ポーター**＝Marcelino Morales (27)<br>**行動概要**：５月上旬リマ着，クスコ経由，サルカンタイ |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | (Salcantay 6300 m) に向かい，6月初旬BC建設，21日北東稜（新ルート）より里藤，岩間，宮本，川田により第3登に成功，翌22日も第4登に成功。これに先立ち，6月2日小川，沢はピコ・インカチリャスカ（Pico Incachiriyasca c. 5000 m）の初登に成功。6月末全員BC着。7月16日別動隊の里藤，川田はキシュアール（Quishuar c. 5770 m）の初登頂を行なった。<br>その後，8月3日全員クスコ発，隊を2つに分け①アマゾン隊はウルバンバ川下降，②登山隊はコルディエラ・ビルカバンバでの登山を行ない，9月20日全員リマ集結，10月初旬リマ発，帰国の途についたが，この間，登山隊はメリソス Mellizos（Minor Peak 5320 m は8月20日川田，小川により初登，31日岩田，川田は Main Peak 5410 m，North Peak 5395 m の両峰にも登頂）Cima roca Llosa 5000 m（8月27日前芝，川田，モラレス，により第2登，28日堀江，小川により第3登）Nevado Blanco 5250 m（9月3日川田，小川により第2登）等の登山を行なった。<br>**文献**：「山岳」62年に掲載予定，江上康「緑の秘境，白い巨人」（1966年2月講談社刊） |
| ※24 | 1965. 6～8 | コルディエラ・ブランカ，コルディエラ・ワイワッシュ山群での登山 | **早稲田大学岳友会ペルーアンデス遠征登山隊**（The Peruvian Andes Expedition of Waseda University 1965)<br>**隊長**＝*井田英彦(27)　**隊員**＝近藤親弘(29)*佐藤武男(28)*早川滉(26)*宮下昭(23)<br>**ポーター**＝Victorino Angeles<br>**行動概要**：6月14日コルディエラ・ブランカに入山，イシンカ谷上流にBC設営後ネバド・オクシャパルカ（Nevado Ocshapalca 5881 m＝7月10日初登）ランラパルカ（Nevado Ranrapalca 6162 m＝7月3日登頂）イシンカ（Nd. Ishinca 5530 m＝6月23，26日登頂）ウルス東峰（Nd. Urus Este 5420 m＝7月14日登頂）に登頂後，7月15日下山。7月23日コルディエラ・ワイワッシュ山群に入山，ネバド・イエルパハー（Nd. Yerupaja 6634 m）に試登後，8月2日下山。<br>**文献**：「山岳」61年78頁参照，早大岳友会会報「アルパイン・フォラム」アンデス特集号（1966年6月下旬刊） |
| ※25 | 1965. 7～9 | ネバド・チンチェイ試登とコルディエラ・ノルテ山群での登山 | **'65 上智大学山岳会ペルー・アンデス遠征隊**（'65 La Expedicion de Los Andes, Univ. Sofia)<br>**隊長**＝細野淳美(31)　**隊員**＝里居基(26)*高山由比古(26)木下周三(25)　横地泰英(24)<br>**ポーター**＝Pabro Morares<br>**行動概要**：ネバド・チンチェイは7月20日より8月24日にかけて行動し，南尾根より6170 m まで達する。コルディエラ・ノルテ山群では8月31日～9月14日に行動し，ネ |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | バド・ロスコ・グランデ（Nevado Rosco Grande 5188 m＝9月7日初登）ネバド・クレオ・コンドル（Nevado Culleo Condor 5072 m＝9月10日初登）他無名3峰に登頂。その周辺の踏査を行なった。<br>**文献**：「山岳」61年152頁参照 |
| 26 | 1965. 6～8 | コルディエラ・ビルカノータ山群での登山 | **1965年度立教大学山岳部ペルー・アンデス踏査隊**（Rikkio Peru Andes Expedition, 1965）<br>**隊長**＝滝口義弘(24)　**隊員**＝寺島義雄(24)石塚誠之輔(24)下村赳夫(22)広瀬褒(21)<br>**行動概要**：クスコよりティンキに入り，3日のキャラバンの後，ビチタ・コーチャ上端にBCを設置（4700 m）コルケ・クルス（Corque Cruz 6111 m＝7月21日寺島，下村により第3登）ワイナ・アルパマヨ（Huayna Alpamayo 5947 m＝7月24日石塚，広瀬により第3登）ネバドサパト（Nevado Zapato 6011 m＝7月30日滝口，石塚，下村により第2登）ハトンリティー（Jatunriti 6067 m＝7月31日滝口，石塚，下村により第2登）等に登頂。<br>**文献**：「立教大学山岳部年報」65年度 |
| 27 | 1965. 6～8 | コルディエラ・ワイワッシュ山群での登山 | **関西大学ペルー・アンデス学術調査隊**（Kansai Univ. Peru Andes Investigation）<br>**隊長**＝杉原弘人(44)　**学術班**＝神月彰(36)中野力(22)久野邦雄(24)近藤嘉彦(26)　**登山班**＝日比進一(29)池内嘉宏(28)長谷川裕一(24)米川利美(26)<br>**ポーター**＝ドナト・ソラノ<br>**行動概要**：学術班は考古学，地震学，土壌，動医学等の学術調査を行ない，中野，近藤は登山に参加。6月4日全員リマ集結，12日チキアン，16日 Mitsukocha 畔にBC設営，30日までの間，ヒリシャンカ北峰（6015 m）試登。6月30日～7月5日ヒリシャンカ・チコ（5473 m）試登。7月9日BCを Caruhuakocha 畔に移動し，8月5日までの間にシウラ・グランデ（6356 m）及びシウラ・チコ（6265 m）を試登。この間，7月30日米川及びドナト・ソラノはサンタ・ローザ東峰 Santa Rosa E.（5578 m）の初登に成功。 |
| 28 | 1965. 5～6 | ボリビア・アンデスのブブヤ山群での登山 | **浅野ボリビヤ・アンデス探査隊**<br>**隊長**＝牧口順一(27)　**隊員**＝宮崎啓介(25)城台成和(24)岡島成行(21)太田光成(21)二宮英一(21)<br>**行動概要**：ボリビア・アンデスのブブヤ山群に入り，次の11峰の登頂に成功。コルキニ（5810 m）クリーン（5560 m）クリチョ1峰（5565 m）同2峰（5510 m）カサララ（5702 m）コロワリ（5625 m）＝以上初登頂。コロロ（5915 m）アカマニ（5665 m）カバヤン（5706 m）カニサヤ（5704 m）ウェランカヨック（5836 m） |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | なお同隊は5月30日から6月2日にかけて，アカマニからウェランカヨックまでのアンデスの主稜線の初縦走にも成功。<br>**文献**：「山岳」62年に掲載予定「Andes, '65 浅野アンデス探査隊中間報告書」「JAC会報」257号（1966年11月） |
| 29 | 1965. 11～12 | セントラル・チリー・アンデスの Loma Largo（5385 m）及び Nevado Juncal Sur（5910 m）の登頂 | **大阪府岳連，全日本山岳連盟1965年セントラル・チリ・アンデス登山隊**（All Japan Mountaineering Union Andes Expedition 1965）<br>**隊長**＝*久野英一郎(39)　**隊員**＝井関将人(30) 浅川安雄(29) 松本憲庚(25) 中戸正宣(22) 簾昌弘(22) 中武夫(21)　**カメラマン**＝友田彦士(43)　**チリ側隊員**＝Claudio Lucero Martinez (30) Mario Puig Rio (38) Luis Allende G (28)<br>**行動概要**：【第1次登山】 11月3日よりモラド河流域の登山を行なうため，ロマラルゴ氷河にキャンプを進め，11月9日中戸，マリオは，ロマラルゴ4峰の中 Loma Largo 主峰（5385 m）プンタ・アマリージャ（Pta Amarilla 5300 m）プンタ・チレ（Pta Chile 5400 m）の3峰に登頂，松本，中，ルセロはコルタデラス（Cortaderas 5200 m）の登頂に成功したが，この日C 1付近にてサンチャゴから同行の山川勇一郎画伯が行方不明になり，捜索活動に入る。遺体発見。11月15日，サンチャゴへ下山。なお11月10日事故を知らずにC 3より中戸，マリオは 5080 m の未踏峰に登頂したが，このピークは後ほど Cerro Yamakawa と命名された。<br>【第2次登山】 11月29日よりネバド・フンカル・スール登山を計画。オリバレス氷河より12月8日 Nevado Juncal Sur (5910 m) Cerro Amistado (5150 m) 両峰の初登頂に成功。その後悪天候のため撤収に苦労したが，12月18日全員デポ地へ下山，22日サンチャゴへ帰着。<br>**文献**：「JAC会報」250，251号（1966年4月，5月） |

## ニュージーランド

| Nos | 活動期間 | 目　　的 | 記　　事 |
|---|---|---|---|
| 30 | 1965. 12～1 | タスマン氷河源流の踏査，クック山の登頂 | **1965年長野県山岳連盟ニュージーランド登山隊**<br>(Japan New Zealand Expedition 1965)<br>**隊長**＝堺沢清人(30)　**副隊長**＝小池明義(29)　**隊員**＝志川輝夫(31) 清水満(28) 知久平彰(25) 福沢勝幸(25) 丸山晴弘(25) 井上進(23) 島田公博<br>**行動概要**：12月8日クライスト・チャーチ発，ハーミテージよりタスマン氷河の奥地へ入り，12月21，22日グレシャー・ドーム（2443 m）23，24日クック（3763 m）1月3 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | 日タスマン（3498 m）シルバーホルン（3160 m）8日ミナレッツ（3055 m）8～10日マルテブラン（3176 m）8日ターンブル（2500 m）11日デ・ラ・ベーシェ（2992 m）12日グリーン（2826 m）13日エリー・デ・ビューモント（3109 m）ホックステッター・ドーム（2822 m）の11峰に登る。<br>その後，ニュージーランドの北島を一周し，2月13日ウェリントン発，帰国の途につく。 |
| 31 | 1965. 12～66. 1 | クック山登頂 | **明治大学体育会山岳部ニュージーランド親善登山隊**<br>**隊長**＝*橋本清(27)　**隊員**＝斎藤郷太郎(22) 坂本文男(21) 小野勝昭(21)<br>**行動概要**：クライストチャーチより12月10日アサーパス地域に入る。ロールストン山等に登頂後，18日よりタスマン氷河に入り，ミナレッツ登頂，24日より1月9日までクック地域に滞在し，この間に1月6日斎藤，坂本，8日橋本，小野がクック山に登頂。<br>**文献**：「山と溪谷」329，330号（1966年5，6月号） |
| 32 | 1966. 1～2 | ミナレッツ山登頂 | **大阪経済大ニュージーランド遠征隊**<br>**隊員**＝広沢行雄隊長以下3名<br>**行動概要**：タスマン氷河に入り，2月初旬ミナレッツ（3055 m）等 3000 m 級の2峰の登頂に成功したが，主目標のマルテ・ブラン峰（3176 m）の登頂は悪天候で失敗。 |

## グリーンランド

| Nos | 活動期間 | 目　　的 | 記　　事 |
|---|---|---|---|
| ※33 | 1965. 7～9 | フォーレル峰 Mt. Forel（3360 m）試登 | **日本大学グリーンランド登山隊**（Nihon Univ. Alpine Club Greenland Mountaineering Expedition 1965)<br>**隊長**＝*宮原巍(31)　**隊員**＝*片柳実(28)*池田錦重(26)*今村文彦(25)*高緑繁伸(25) 池田新三(21) 多和田忠(20)<br>**行動概要**：コペンハーゲンよりアンマサリックを経て7月28日コンミュート付近に上陸。上陸後7名にてソリ2台をひき，海岸より 200 km におよぶソリ旅行の末，フォーレル峰の麓に到着。8月21日及び25日の2回フォーレル峰の試登を行なったが，グリーンランドの登山としては時期的に遅く，登頂は失敗し，帰路を引返し，9月12日アンマサリックに帰着。<br>**文献**：「山岳」61年143頁参照「山と溪谷」325～7号（1966年1月号～3月号） |

## ヨーロッパ・アルプス

| Nos | 活動期間 | 目　　的 | 記　　事 |
|---|---|---|---|
| 34 | 1965. 6～9 | アイガー北壁試登 | **全日本山岳連盟ヨーロッパ・アルプス親善隊**<br>**隊長**＝*中野満(40)　**隊員**＝石田嘉一(35) 現地参加 *秋山正人(32)*加藤幸彦(32)*安久一成(27)*茂野徹太郎(31)<br>**行動概要**：1962年のビッグ・ホワイト・ピークの登頂メンバーでアイガー北壁登攀とヨーロッパ各国の山岳会を親善訪問するため渡欧。アイガーは悪天候のため，偵察にミッテレギー稜から登攀したのみで終り，北壁の登攀は渡部氏の遭難事故があったこと等で中止。その後，ヨーロッパ各国の山岳連盟，山岳会等を親善訪問して，9月帰国。 |
| ※35 | 1965. 6～9 | ドリュー西壁，北壁等登攀 | **全日本合同隊**<br>**隊長**＝吉尾弘(28)　**隊員**＝星川政範(31)*湯浅道男(28) 石川富康(28)*稲垣公平(25) 加藤滝男(25)*佐々木徹(25)<br>**行動概要**：6月10日横浜発，17日グリンデルワルト着，19日アルビグレンにBC設営，星川，石川，稲垣の3名西面よりアイガー登頂。6月20日～23日吉尾，湯浅，佐々木，加藤の4名でヴェッターホルンの北壁登攀。その後，アイガー北壁隊を石川，稲垣，佐々木にしぼり，星川，加藤は8月9日～11日ドリュー西壁，湯浅，吉尾は8月8日～10日ドリュー北壁の登攀に成功。更に8月18日加藤は大倉隊の船木匡とパーティーを組んでエギーユ・ド・ミディ南壁を登攀，佐々木，石川，稲垣は8月　日～　日チマグランデの北壁カンテの登攀に成功。しかしながら，アイガー北壁隊は8月13日取付いたが，雨のため下山。その後，渡部氏の遭難等のため中止。<br>**文献**：「山岳」61年183･187頁参照「挑戦者」(1965年12月・あかね書房刊)「山と渓谷」323号（1965年11月号）「岳人」219号（1966年4月号） |
| 36 | 1965. 6～7 | シャモニー針峰群での登攀 | **モダン・クライマーズ・クラブ隊**<br>**隊長**＝*松島利夫(25)　**隊員**＝†林与四郎(26)遠部勝行(23) †飯田博子(22)<br>**行動概要**：この隊もアイガー北壁を目ざして渡欧したが，まずトレーニングのためにシャモニー針峰群に向かい，エギーユ・ド・ミディ南壁，M針峰，プティ・シャルモからM針峰縦走，グレポン，バビヨン岩稜，グラン・カピュサンの登攀，エギーユ・ド・ミディからコル･デュ･ブラン縦走等を行なうも，6月30日林，飯田の両名はプラレ･デ･ゼギーユのBCより，ブレチェール峰を登頂，帰路3時頃，下降コースのナンティオン氷河を下降中セラック崩壊にあって遭難。翌日遺体となって発見された。<br>**文献**：「挑戦者」67～92頁，217～225頁（1965年12月・あかね書房刊)「岳人」219号（1966年4月号） |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 37 | 1965. 6～7 | ヴァツマン東壁登攀 | **高嶺山岳会隊**<br>**隊員**＝大谷計介(23) 橋本義男(24)<br>**行動概要**：4月19日日本発，5月初旬ボンベイに上陸後，国産車ブルーバードで中東の砂漠地帯を越え，ギリシャ，ユーゴを経て6月下旬ヨーロッパ入りし，ザルツブルグよりグロース・グロックナー山塊に入り，6月29日～7月1日ヴァツマン東壁を登攀。<br>**文献**：「挑戦者」93～105頁（1965年12月・あかね書房刊） |
| ※38 | 1965. 7～9 | マッターホルン北壁登攀 | **芳　野　隊**<br>**隊長**＝*芳野満彦(33)　**隊員**＝†渡部恒明(27)<br>**行動概要**：ドイツで越冬して待っていた渡部と合流した芳野は混雑しているアイガー北壁をさけて，まずマッターホルンの北壁を目指し，8月4日より2回のビバークの後，6日北壁を完登して頂上に立った。その後，グリンデルワルトに移動。渡部は高田光政とパーティーを組んでアイガー北壁を目ざし，8月12日登攀を開始，15日頂上直下300mの“頂上へぬける割目”を経てカミーンヘトラバース中，午後5時頃渡部は墜落。頂上を経てアルピグレンに達した高田の連絡により救助隊が出動したが，17日渡部の遺体は北壁の基部で発見された。<br>**文献**：「山岳」61年175頁参照，芳野満彦「われ北壁に成功せり」(1966年1月・実業の日本社) 高田光政「登頂あと 300」(1965年11月・二見書房刊)「山と渓谷」323号(1965年11月号) |
| 39 | 1965. 6～9 | ドリュー・ボナッティ稜登攀 | **大　倉　隊**<br>**隊長**＝*大倉大八(31)　**隊員**＝長久実(27) *船木享(32) *船木匡(29)*酒井忠夫(27)<br>**行動概要**：この隊も宿願のアイガー北壁を目指してスイスへやってきたが，悪天候のためアイガー北壁を断念。夏のシーズンも終わりに近い8月17日～20日大倉，長久の2名は3泊のビヴァークの後，ドリュ・ボナッティ稜の登攀に成功。<br>なお船木匡は8月18日全日本合同隊の加藤とパーティーを組んで8月18日エギーユ・ド・ミディ南壁の登攀にて成功。<br>**文献**：「挑戦者」177～193頁（1965年12月・あかね書房刊)「山と渓谷」323号（1965年11月号)「岳人」219号(1966年4月号) |
| ※40 | 1965. 6～8 | アイガー北壁登攀 | **高　田　隊**<br>**隊員**＝*高田光政（29)（単独）<br>**行動概要**：アイガー北壁を目ざし単身渡欧した本会東海支部会員の高田光政は，現地で芳野隊の渡部恒明とパーテ |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | ィーを組み，8月12日朝アルピグレン発，アイガー北壁にとりつき，12日は“ツバメの巣”にビバーク，14日は“死のビバーク”を経てランベカミン下でビバーク，14日“神々のトラバース”でビバーク，15日“白いクモ”“頂上へぬける割目”を経てカミーンへトラバース中，午後5時頃渡部は墜落。行動不能になったため，高田は単独にて6時出発，北東稜とミッテレギー山稜の分岐点を経て午後9時頂上に到達。直ちに西稜を下降し16日午前5時半，アルピグレンの日本隊ベースに救援を求めた。直ちに救援隊が出動したが，17日渡部の遺体は北壁の基部で発見された。<br>**文献**：「山岳」61年191頁参照，高田光政「登頂あと300」(1965年11月・二見書房刊) |
| 41 | 1965. 6～7 | 国際アルピニスト集会参加 | **日本山岳会東京支部隊**<br>**隊員**＝*†君島久登(30)*倉知敬(26)<br>**行動概要**：本会東京支部委員の両名は7月12日～31日まで，シャモニーで開催された国際アルピニスト集会に参加のため渡欧，7月14日モンブランのブレンヴァ稜を登攀，その後，悪天候のため3日間滞在の後，8月18日君島はフレート・デ・シャルモにて遭難し，翌19日遺体となって発見された。倉知は計画を打切り，7月26日遺骨と共に帰国。<br>**文献**：「JAC会報」243号（65年9月） |

## 台　　湾

| Nos | 活動期間 | 目　　的 | 記　　事 |
|---|---|---|---|
| 42 | 1964. 12～65. 1 | 玉山（3997 m）登頂中央山脈横断 | **Continuous Club 1965年台湾合宿**<br>**隊長**＝*遠藤登(34)　**副隊長**＝田山勝(29)　**隊員**＝松田経彦(28) 横井一郎(26) 古市彰吾(26) 鳥井英治(22) 高田勉(28) 粂野司(25) 岩堀晴雄(26)　**中国側隊員**＝陳建地(45)<br>**行動概要**：1月6日台北発，阿里山—東埔を経て1月9日玉山に登頂。その後，中央山脈の横断を行ない，15日タクロク村へ下山。(この横断は戦後3度目，日本隊としては最初とのこと)<br>**文献**：Continuous Club「台湾合宿報告」 |
| 43 | 1965. 1～2 | 南湖大山（3740 m），中央尖山（3703 m），玉山（3997 m）登頂 | **1965年山梨県山岳連盟訪華友好登山隊**<br>**団長**＝*百瀬舜太郎(53)　**隊長**＝*古屋学而(31)　**副隊長**＝*芦沢欣吾(30)　**隊員**＝*市川定六(30)*矢崎登(29)*菊島昭彦(29)*広瀬昭人(27)*鶴田博(25)<br>**行動概要**：【第1次登山】 古屋隊長以下7名と中国隊員2名により1月18日～26日の間，壁南よりビアナン社を経て南湖大山に登頂（1月20日）ののち，中央尖山渓より中 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | 央尖山に登頂（1月23日），ワヘル溪を花蓮港へ下山。<br>【第2次登山】 百瀬団長を迎えて2月9日～12日の間，玉山に向かい，2月11日玉山の集中登山を東山班，北山班，南山班の3班に分れて行ない，日華合同で一日の中に玉山の5峰に登頂。<br>**文献**：山梨県訪華友好登山委員会刊「台湾の山と人たち」（1965年4月） |
| 44 | 1965. 1～2 | 雪山（3931 m）登頂 | **専修大学中華民国台湾省雪山登山隊**<br>**隊長**＝*小味秀純（34） **隊員**＝渡辺宏（30）*勝山義一（28）*細井隆司（28） **中国側隊員**＝林文安（50）<br>**行動概要**：1月31日台北発，南山，環山を経て2月7日雪山荘跡にBCを作り，8日雪山登頂後，大安溪源頭より未踏の雪山西面に下り，次高溪と北山溪（仮称）の合流点より北山溪を遡行，次高北山の西面壁にて行き止り，次高北山とユンタカ山の間の稜線につき上げる支尾根（林専尾根と命名）より稜線に出て，次高北山，雪山を経て2月18日BCに帰着，19日次高山荘跡正面壁を下降。その後，環山を経て2月24日台北に帰る。<br>**文献**：専大山岳部部報「群峯」4号（未利） |
| 45 | 1965. 1～2 | 玉山（3997 m）秀姑巒山（3860 m）大水窟山（3724 m）登頂 | **大垣山岳協会 1965 年訪華親善玉山登山隊**<br>**隊長**＝*槌谷祐七（54） **副隊長**＝*山本照彦（31） **隊員**＝山岸照次（31）*早田道治（32）*日比晴美（30）*居林陽（28）佐久間修（28）*宇佐美常樹（27）高木尚武（24）佐部利茂（23）砂原滋（28） **中国側隊員**＝余初雄（39）<br>**行動概要**：1月27日台北発，阿里山を経て1月30日玉山の主山に登頂。更に南山，東山を往復後，北山の測候所に泊まる。その後2月1日，秀姑巒山，大水窟山と登頂し，観高を経て東埔へ下山，2月3日台中へ帰着。<br>**文献**：台湾玉山登山隊報告書「玉山への道」（1965年9月） |
| 46 | 1965. 2 | 雪山（3931 m）登頂 | **京都皆子山岳会訪華親善隊**<br>**隊長**＝栢森政雄 **隊員**＝6名<br>**行動概要**：2月8日台北発，環山を経て2月11日雪山登頂。2月12日～13日雪山北稜の東面壁をトレースし，16日下山。 |
| 47 | 1965. 3 | 関山（3677 m）小関山（3248 m）縦走 | **千葉大学薬学部あのはな山岳会台湾学術登山隊**<br>**隊長**＝西川文雄 **副隊長**＝加瀬泰明 **隊員**＝牛山富行，近藤清宏，江崎紀夫，林昌亮，鈴木栄子，野島紘<br>**行動概要**：3月5日台北発，六亀を経て荖濃溪に入り，11日関山に登頂，12日小関山まで縦走（これは戦後外国隊の初縦走）3月14日下山。<br>**文献**：「あのはな山岳会中華民国台湾省学術登山隊報告書」（1965年12月刊） |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 48 | 1965. 3 | 玉山（3997 m）登頂 | **亜細亜大学山岳部日華親善台湾遠征隊**<br>**隊長**＝渡辺広治(部長)　**登攀隊長**＝今井輝明　**隊員**＝大石橋金通，吉川俊明　**中国側隊員**＝林樹封<br>**行動概要**：3月10日台北発，12日阿里山よりタータカを経て未踏の楠梓仙溪に入る。途中滝にはばまれて難渋するも5日目の16日，楠梓仙溪の初遡行に成功し，雪の玉山の頂に立つ。3月17日八通関より東埔へ下山，18日台北へ帰着。<br>**文献**：「亜細亜大学山岳部部報」No. 4（1965年10月刊） |
| 49 | 1965. 3～4 | 台　湾　旅　行 | **徳島県城高校山岳部 OB 会**<br>**隊員**＝木内昭生以下7名<br>**行動概要**：3月28日～4月9日の13日間，台湾に滞在し，玉山を目指すも，4月1日付改正の入山管制法規のため登山できずに帰国。 |
| 50 | 1965. 4～5 | 台　湾　旅　行 | **三共製薬福岡支店山岳部**<br>**隊員**＝本多日出彦以下3名<br>**行動概要**：4月29日～5月9日の11日間，台湾に滞在し，玉山を目指すも，同上の理由により登山できずに帰国。 |

## ア　フ　リ　カ

| Nos | 活動期間 | 目　　的 | 記　　事 |
|---|---|---|---|
| 51 | 1965. 7～8 | キリマンジェロ（5895 m）ケニヤ（5199 m）登頂 | **長野県山岳連盟1965年アフリカ遠征隊**（Naganoken Mountaineering Union Africa Expedition 1965）<br>**隊長**＝堀内利美(30)　**副隊長**＝大畑昇(32)　**隊員**＝塚原広次(30) 小林保(29) 糸矢昭治(24)<br>**行動概要**：ナイロビを基点として，7月22日大畑，塚原，小林の3名キリマンジェロに登頂。その後，7月28日～8月7日，マウント・ケニア（5199 m）に向かい，まずネリオン峰の南東稜を試登。ついで東壁の登攀に移り，8月3日～4日東壁に向かったが，Mackinder's Gendarme にて吹雪のため引返す。その後8月5日全員にて Pt. Lenana に登頂。 |

## ボ　ル　ネ　オ

| Nos | 活動期間 | 目　　的 | 記　　事 |
|---|---|---|---|
| 52 | 1965. 7～8 | キナバル（4101 m）登頂 | **慶大ボルネオ文化調査団**<br>西岡秀雄団長に率いられた本隊は，7月23日ボルネオの最高峰キナバル峰 Mt. Kinabalu（4101 m）の登頂に成功。<br>**文献**：「読売新聞」1965年8月16日付 |

## 韓　　国

| Nos | 活動期間 | 目　　的 | 記　　事 |
|---|---|---|---|
| 53 | 1965. 4～5 | 雪岳山 Mt. Serak (1708 m) 登頂 | **福岡アルパインクラブ山荘会，日韓親善交歓登山隊** (Alpine Club Sansokai Korea Expedition 1965)<br>**隊長**＝美濃井芳夫(38)　**副隊長**＝内野幸男(45)　**隊員**＝戸川博(32) 田中博(30) 林道生(24)<br>**行動概要**：ソウルの東国大学山岳部のＯＢ，現役５名と合同登山の形式で，雪岳山に向かい，５月７日全員登頂に成功。(この隊は戦後韓国を訪れた初の登山隊) |
| 54 | 1965. 6 | 雪岳山 (1708 m) 登山ならびに韓国山岳会との交流 | **東京農業大学農友会山岳部韓国親善登山隊**<br>**隊長**＝山西康太(22)　**隊員**＝武藤保之 (21) 千葉常之 (19) 桜井仁(20)　**韓国側隊員**＝金起煥(28) 金鍾郁(20) 金徳星(25) 韓秀煥(24)<br>**行動概要**：韓国のハーケン・クラブと日韓合同登山隊を結成し，大白山脈中の雪岳山を登山するため，６月10日下関より釜山へ向け出帆，ソウルにて登山準備を３日間で行ない，６月15日洪川を経て入山，18日韓国本土の最高峰雪岳山 (1708 m) に全員で登頂。飛仙台へ下山し，ウルサナンロックに登攀し，東草に下山。その後，春川農科大学を訪問し，ソウルへ戻り，釜山より韓水丸にて６月24日帰国。<br>**文献**：「東京農業大学農友会山岳部年報 Vol. VI」(1966年９月刊) |

スポーツと共に60年

両面ヒッコリースキー(PAT.No.482499)

# ヒッコリースキー'67

高性能ぞろい

No.7339

ALTAIR アルテア ¥7,500

POLLUX ポラックス ¥8,500

SIRIUS シリュウス ¥10,000
(マックスグライドFLソール)



*完全なアフターサービス
〈ヒッコリースキー〉
無料修理または3割交換
〈その他のスキー〉無料交換

FOR SUCCESSFUL SAPPORO OLYMPICS 1972

新発売!

## 外国製に負けない 世界最高級スキー

# *BLUE IMPULSE®
ブルー インパルス

サッポロで勝つための
アルペン競技用 (マックスグライドFLソール) ¥38,000~¥48,000



世界制覇を目ざして、美津濃技術陣が完成した競技用スキーです。種々の大会で使用され、その優秀性は多くの選手に認められています。

一般スキー
〈中級者・上級者用〉

メタルヒッコリースキー……¥16,000・¥19,000
グラススキー……¥16,000~¥30,000
ユニグラススキー……¥13,000

VICTORY® 美津濃

大阪本店 淀屋橋 | 東京支店 神田小川町 | 養老工場 岐阜県 | 大阪工場 福島 | 四国工場 香川県

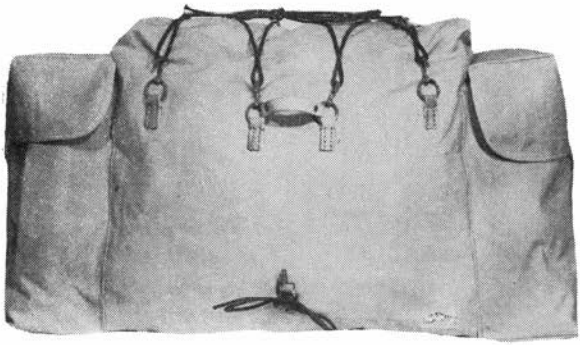
# ジョッキー

Jockey

## ＃95 ピークハンター

| | |
|---|---|
| ＃75 クライマーエリート | ¥8,000 |
| ＃90 ピークハンター | ¥9,000 |
| ＃95 ピークハンター | ¥9,500 |
| ＃35 ベルグシュタイガー | ¥3,500 |
| ハイキングスーパー | ¥6,000 |

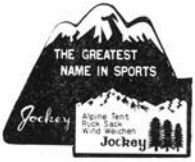




## キスリング型

| | |
|---|---|
| ＃224（72cm） | ¥3,800 |
| ＃222（66cm） | ¥3,500 |
| ＃220（60cm） | ¥3,200 |
| ＃65（65cm） | ¥2,600 |
| ＃60（60cm） | ¥2,400 |
| ＃55（55cm） | ¥2,200 |
| ＃50（50cm） | ¥2,000 |

（価格は予告なしに変更することがあります。）




東京／蔵前 ジョッキースポーツ株式会社

全国有名運動具店・百貨店にてお求め下さい。



優れた品質と技術を誇る

東京トップ印

登山用具

KK東京トップ

東京・大阪

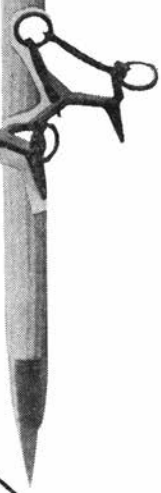
# エバニュー

## 山を愛する人のみが知る エバニューの 登攀用具 スキー用具



超ジュラルミンカラビナ
安全装置付　　¥ 700
ＪＩＳ75材使用
型鍛造完全熱処理
強度　　1,700 kg



8本爪氷壁用アイゼン
¥ 4,000



最高の締具！
ブラックスリー
（自動踏込式締具）
¥ 3,500

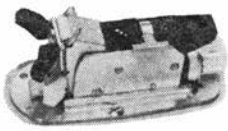




ゼッス
¥ 7,000

ニッケルクローム
モリブデンNo.5
鋼材使用・火造
特殊焼入、焼戻
し加工

・立ったまゝワンステップ
で着脱自在
・骨折捻挫を99%
防ぐ
・廻転がし易い



スキー、登山、ハイキング用品の綜合メーカー

EVERNEW

# おかげ様で50年…

**営業品目**

製造販売

| | |
|---|---|
| スポーツ用品 | キャンプテント，ビーチテント及各種テント，ビーチパラソル，布製プール，ポータブルベット，リックサック各種，体操マット，野球ベース，スキーケース及各種ケース類，スポーツ衣料各種 |
| 運輸用品 | 倉庫用テント，シート，布製コンテナー，自動車幌，折畳車庫，直取用テント，エアーテント |
| 防災救護用品 | 火災救命具，ライフジャケット，担架，防災手袋及防災具各種，送風管，防炎・防水シート |
| 雑貨 | 布製玩具，袋もの鞄類，機械カバー，機体カバー，ハッチカバー，水槽，活魚槽 |
| 軍装品 | アーミーテント，各種布製軍装品，ウォータータンク，ウォーターバック，落下傘 |
| 衣料 | 作業衣，看護衣，制服，レインコート，ジャンバー，アノラック，スキーズボン，ユニホーム，トレーニングパンツ及スポーツ衣料 |



取締役社長　馬場可一

Crown®

| | |
|---|---|
| 創業 | 大正3年2月14日 |
| 設立 | 昭和21年3月14日 |

## ㈱小川テント株式会社

| | | |
|---|---|---|
| 本社及工場 | 東京都江東区深川冬木町28番地 | 電話代表（641）7121～9番 |
| 広島営業所及工場 | 広島市出汐町647番地 | 電話（4）1368・8830番 |
| 名古屋工場 | 名古屋市港区大江町9番地 | 電話（82）4208番 |
| 銀座分室 | 東京都中央区銀座4丁目1番地 | （三和銀行銀座支店ビル5階）電話（561）0231・1820番 |
| 大阪事務所 | 大阪市北区老松町3の21 | 昭和ビル別館101号 電話（361）4906 |



# 南極で実証ずみ

ご存じでしょうか。日本南極観測隊の装備をお引き受けしたのは、わたしたちです。防寒服も、防寒靴も、わたしたちがデザインし、制作指導しました。テストにテストを重ね、厳密な低温試験をくりかえし、その努力がみのって、隊員の方々から折紙をつけていただきました。米、英、ベルギー、南ア、オーストラリアにも防寒装備を納入し、優秀な性能は世界的に認められています。冬の装備なら、ぜひ当研究所にお問い合せください。

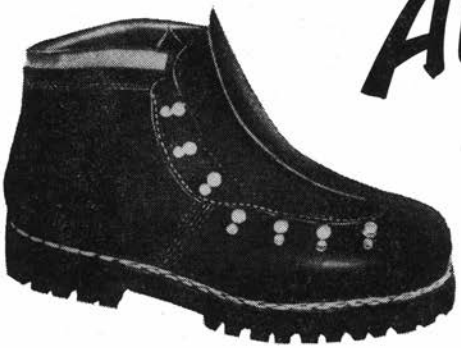
## 日本極地装備研究所

東京都千代田区三年町1番地(商工会館内)
TEL　東京 581－1078

ヒマラヤ・南極にも遠征した

ALPS BRAND

の山靴・スキー靴



松本市丸ノ内8番4号
TEL (2) 1 7 7 4
(3) 6 5 5 8

ケケウ
スポーツシューズ

〈無駄〉をシャット・アウトした!!

チロリアン印 シャモニー・シリーズ



チロリアン印

Tirolian General

シャモニー・シリーズ

株式会社 サクライ TEL (861) 2511 (代)
東京都台東区蔵前2～2～5号

シャモニーゲレンデスター ¥ 600
シャモニーサブ ¥1,600
シャモニースタンダード ¥1,600
シャモニーデラックス ¥2,200
シャモニーアルペン ¥2,600
シャモニーバック
ウイズバック ¥ 800

彼曰く 「やはり一流品を使うべきですよ。運動科学に基いたというだけあって、体力の消耗がグーンと減り、実に使用感が優れています。完全装備チロリアン印・シャモニー・シリーズをおすすめいたしたいですね…」

## “世界の屋根”を征服
## 真価を発揮するオニツカの登山靴

1957年のヒマラヤ遠征隊(日本山岳会)、パタゴニア探検隊（神戸大）……以来
数多くの遠征隊、探検隊にオニツカのヒマラヤン印登山靴が参加してきました。
世界の第一級アルピニストと共に“世界の屋根”の苛酷な大自然に挑戦、その底力を遺憾なく発揮してきたのです。



# ヒマラヤン-SP 登山靴

サイズ／22.5～27.0
カラー／紺　価格／￥2,400

オニツカの技術陣はこれらの貴重な体験を科学的に分析、技術化して次々と新しい機能の登山靴を生みだしているのです。

〈甲〉
★東レナイロン甲被
丈夫で美麗、防水性に優れ、手入れ簡単
★ベロサイド砂よけ
★丈夫で歩行中動く心配のない二重ハトメ
★吸湿性、通気性に富む爪先保護キルティング
★足の保持完全な、ベロ裏ウレタンフォームエアークッション加工
★足首からの砂防止完全、足首保護スポンジ
★型くずれ防止、下り坂、落石から足を保護する硬質板補強

〈底〉
★耐磨耗性に優れ、滑り止め完全な合成ゴム特殊彫刻底
★坂道の歩行をスムーズに、疲労を感じない爪先あげデザイン
★底面キレツ防止完全な本底前凹部の特殊アール
★沢歩き、下り坂の歩行を完全でスムーズにする特殊滑り止め金具

Onitsuka Tiger

オニツカ株式会社
本社・神戸市須磨区寺田町3丁目1－3



SAPPORO JAPAN HAGA SUKI GO

# ハガスキー
## F72シリーズ
## エポキシグラススキー




1 ポリウレタン塗装
2 F72強化プラスチック
3 FRPシート（グラス板）
4 補助板（イタヤ材）
5 空胴板
6 補助板（イタヤ材）
7 FRPシート（グラス板）
8 F72強化プラスチック
9 ポリソール

# 山友社 たかはし

## 登山・スキー靴

四谷本店
新宿区三栄町 3
TEL(351)1912,7432

八重洲口
中央区八重洲2の5
TEL(271)1560,8575

新宿ステーションビル4階
サービスショップ
TEL (352) 6564



登山とスキーの
日本最古の専門店

好日山荘

東京店
東京都中央区銀座西2の5
電話 (561) 3600・0966
振替東京113657

大阪店
大阪市北区老松町3の12
日新ビル1階
電話 (364) 0933－4
振替大阪68763

神戸店
本店 神戸市生田区北長狭通り3-8-19
電話 (39) 4126 (33) 9250
支店 神戸市生田区三宮町1－32－1
電話 (33) 5251

福岡店
福岡市須崎町1－4
電話 (28) 3440

# 山とスキーの専門店

キスリング
門田ピッケル
〃 アイゼン
夏冬用テント

# 片桐

東京都文京区湯島町3丁目38－9
片桐盛之助
電話 下谷 (831) {1794番 / 6880番

登山．スキー用品専門

MOUNT&SKI 白馬堂

（株）白馬堂

本　　店　大阪市北区梅田3番地（341）6645・0484
ニュー白馬堂　大阪梅田新阪急ビル地下1階（312）2384・4802
白馬山荘　姫路市元塩町42（24）0464

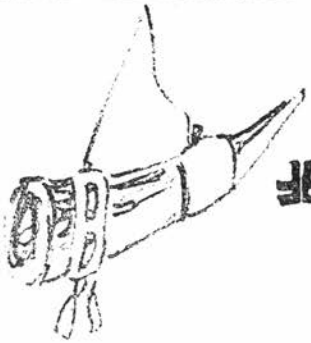
YOSHIDA TENT OGIKUBO TOKYO

39年の前進史

マナスル型高所用天幕考案

1952年日本山岳会マナスル偵察隊
全装備納入以来高所用天幕専門
製作　海外遠征隊には各方面より
御使用頂き御高評頂いて居ります

吉田テント　吉田喜義商店
東京都杉並区桃井一丁目三番三号
電話東京（399）2548　（398）8469（夜間）



北海道の山の店
秀岳荘
札幌市北13条西4丁目
TEL　（71）2346・8739



## 岩場のあるビル

渋谷の一角に、人工岩場を備えたビル“東京ロック”をつくったのが私共の会社——太陽工業です。太陽工業は登山用テントキャンプテントなど登山・レジャー用品から博展会用大テント、コンテナーにいたるまで、あらゆる帆布製品を生産し販売しています。

帆布製品のトップメーカー

**太陽工業株式会社**
**太陽テント株式会社**

東京都目黒区上目黒７—1001　ＴＥＬ（711)2111(代)
大阪市大正区泉尾竹之町1-36　ＴＥＬ（551)6161(代）
仙　台／埼　玉(東松山)／浜　松／名　古　屋／福　岡




山の専門店

CHA LET シャレー

大阪市北区葉村町103　TEL 313－4588

世界の登山家に愛用される

トビ印 登山靴



お近くの直売店でお求め下さい

トビ印スポーツ用品 ニュージャパンスキー 製造総発売元 **福井**

直売店

ロイヤルプロショップ福井　東京・新宿・小田急デパート西側1階　TEL (342) 2931～3

駅ビル店　東京・新宿ステーションビル4階　TEL (352) 6618

吉祥寺店　吉祥寺・名店会館2階　TEL (22) 9111

立川店　東京・立川中武デパート4階　TEL (2) 7111

■営業所・大阪・札幌　■工場・東京中野・長野県岡谷

"雨になっても大丈夫"

サンビ印 登山用雨衣

○ポンチョ

○ギャンバ・ズボン

○オーバートレンカー

布施市菱屋西２７　(有)三陽社

カタログ進呈

# 山の トランシーバ エニーの トランシーバ

**ANY**

3,000M以上の高岳で
御使用のトランシーバは
エニー山岳研究課
零下研究係へ
御相談下さい
FB-200D.

FB-600型



| | |
|---|---|
| FB—600A | 0.5w |
| FB—600K | 0.5w |
| FB—600 | 0.5w |
| FB—200 | 0.1w |
| FB—202 | 0.1w |

株式会社 エニー
東京都世田谷区烏山町1801 TEL東京（300）7311（代）

御通知頂ければカタログお送りいたします。



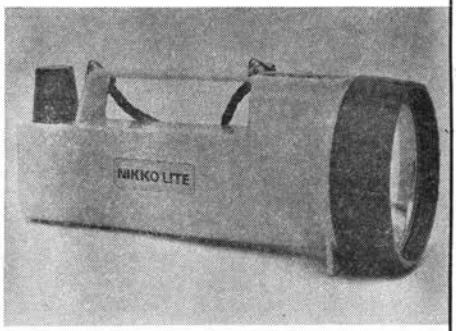
世界市場に躍進する!!
性能、機能に優れる

# ニッコーライト

**■国鉄・防衛庁規格認定品**

**300mさきで新聞が読めます。**重さもわずか960グラムと軽く、丈夫な特殊プラスチックのボディーに割れないアクリルガラスを使った“密閉設計”…水深5メートルの水圧に耐える完全防水です。**既に数多くの人命を救助しております。**単一型（1.5V）電池6コで光力は勿論世界最高……超軽量設計の集光サーチライトです。

★山の遭難・海難救助に
★ご家庭の災害対策として
★楽しいレジャーに（登山・キャンプ・夜釣etc）
★夜間パトロール・宿直用に
★通信・電力保線用に
★船舶・漁業・航空用に




JAE 製造元 日本航空電子工業株式会社

好評のブルーガイド、山のシリーズ

本多勝一著

# 山を考える



450円

「カナダエスキモー」などすぐれた観察で清新な紀行を発表した著者が、山に眼を向けて語った紀行と現代登山論。

■朝日新聞評‖小気味のいい文章で的確に述べられ、アイロニーに富んだ好エッセー。

■毎日新聞評‖登山は本来頭脳のスポーツだから「山を考える」というのはいい題だ。今日の混乱した山の世界に〝考える〟態度が示されただけで、本書の価値は十分である。

マッターホルンの栄光とアイガーの悲劇

## われ北壁に成功せり

服部満彦著

マッターホルンとアイガー、二つのドラマに立ちあった著者が自ら書きおろした真実の愛と死と苦闘の記録

380円

ブルーガイド⑯

## 山の博物誌

西丸震哉著

山の植物や動物をめぐって、豊かな知識と鋭い観察力で山を知る〝知るよろこび〟を示す好著

360円

東京銀座西1の3 実業之日本社 振替東京326




大ヒマラヤの名著・古典を網羅した岳人待望の決定版！

# ヒマラヤ名著全集

'67の新企画！

●全12巻 別巻2巻　編集委員＝深田久弥・諏訪多栄蔵・吉沢一郎

①ヒマラヤの謎の河 ペイリイ／諏訪多栄蔵・松月久左訳
②カンチェンジュンガ一周 フレッシュフィールド／望月達夫訳
③エヴェレストへの闘い ノートン／山崎安治訳
④ネパール・ヒマラヤ ティルマン／深田久弥訳
⑤無名峰の聳える国 テイッチー／福田宏年訳
⑥神々の御座 ハイム＝ガンサー／尾崎賢治訳
⑦ヒマラヤの五ヶ月 マム／丹部節雄訳
⑧ナンガ・パルバート登攀史 バウアー／横川文雄訳
⑨カラコルムの夜明け コンウェイ／吉沢一郎訳
⑩地図の空白部 シプトン／諏訪多栄蔵訳
⑪ティリチ・ミール登頂 ノルウェー隊／橋村一豊訳
⑫カラコルム登山史 ダイネッリ／日高信六郎訳
別巻①ヒマラヤ巨峰初登攀記 ファンティン編／訳者交渉中
別巻②ヒマラヤ事典

●第一回配本＝6月20日予定　以下毎月一冊刊行！
A5判箱入豪華装／口絵アート写真入＝各600～1000円

＝好評の刊行書＝

■世界山岳名著全集 全12巻 別巻1巻／各780円（67年5月完結）
■日本山岳名著全集 全12巻／各680円（全巻発売中）
■ケルン叢書 話題のベストセラー！
佐伯富男著 あるガイドの手記 ¥550.
松本龍雄著 初登攀行 ¥580.
安川茂雄著 写真＝白簇史朗 アフガニスタンの山旅 ¥850.

あかね書房／東京都千代田区西神田2の19／振替東京64150

## 丸善の山岳関係洋書ご案内

＊ **Berann, H. C.**– Die Alpen im Panorama. '66. 206 S. (V. Weidlich) ca ¥ 6,090

**Garobbio, A.**– Männer des 6 Grades: Alpinismus von heute: Eine grandiose, dramatische Geschichte des Alpinismus der letzten fünfzig Jahre. '66. 360 S. (A. Müller) ..... 4,170

＊ **Gillman, P. and D. Haston.**– Eiger Direct. '66. (Collins).....ca 2,160

**Graham, P.**– Mountain Guide: An autobiography. '65. xiv, 245 p. (G. Allen) ..... 2,520

**Hiebeler, T.**– Combats pour l'Eiger. '65. 302 p. (Arthaud) ..... 2,430

＊ **Pause, W.**– In Eis und Urgestein. '66. 211 S. (B. Landwirtschafts V.) ca 2,520

**Scarr, J.**– Four Miles High. '66. 188 p. (Gollancz) ..... 2,160

**Ullman, J. R.**– Americans on Everest: The official account of the ascent led by Norman G. Dyhrenfurth. '65. 429 p. (M. Joseph) .....3,000

＊ **Ward, M.** (ed.)– The Mountainer's Companion. '66. (Eyre & Spotiswoode) ca 2,520

＊ 印は近着または近刊予定書です。

東京・日本橋 Ⓜ 丸善 電話：272-7211 振替：東京5番

---




**世界の山々** 三田幸夫・近藤等共編 豪華山岳写真集 A変型判 各巻三五〇〇円

**アルプス 山と人と文学** 近藤等著 合判 三四頁 定価一〇〇〇円

**処女峰アンナプルナ** モーリス・エルゾーグ著 近藤等訳 最初の八〇〇〇米峰登頂 合判 二〇〇頁 定価五五〇〇円

**星と嵐** ―六つの北壁登行 ガストン・レビュファ著 近藤等訳 合判 二〇八頁 定価六五〇〇円

**モン・ブランからヒマラヤへ** ガストン・レビュファ著 近藤等訳 合判 一二八頁 定価六五〇〇円

**ザイルのトップ** フリゾン・ロッシュ作 近藤等訳 合判 二〇六頁 定価五五〇〇円

**シャモニの休日** 近藤等著 合判 二二〇頁 定価六五〇〇円

東京神田小川町 振替東京33228 白水社

# 忘れえぬ山　串田孫一編

●全3巻／各780円

愛する日本の山々を描いた岳人たちの名紀行

●第1巻＝一月の日高山脈・摩周湖・早池峰山から堺の明神へ　剣ケ倉沢から平ケ岳・氷雪の富士行他　●第2巻＝雪と森林・十勝岳紀行・谷川岳と穂高岳・笛吹川を溯る他　●第3巻＝知床日誌・大雪山紀行・南会津朝日ガ岳他　A5変型判上製函入

●現代世界ノンフィクション全集・第21巻〈山の記録〉　解説 深田久弥

**アイガー北壁の初登攀** ハラー
**エヴェレスト** ノイス
**ジャヌーへのたたかい** フランコ テレー

幾多の生命を奪いながら山は人を誘ってやまない。近代登山史に残る最も劇的な三つの場面を再現する。 480円

●NFライブラリー　シャルル・ゴス
**アルプスに逝ける人々**

近藤等訳　アルプスを愛する著者が、数多い遭難事件を描き、遭難の原因と経過、その心理状況をみごとに再現し解明する。　四六判・450円

東京神田小川町 **筑摩書房**



# 住　居　学

早稲田大学教授 吉阪隆正著

人間にとって「住居」とはどのような意味をもっているか、著者はその根源からその問に答え数々の提案をふくめている本書は親しみ深い好著として好評をえている。　A5判310頁　定価950円

— 吉阪隆正著 —

**原始境から文明境へ**

早大のマッキンレー遠征の記録に、アラスカ・カナダの紀行文に美しい写真を挿入した書
定価 480円

**ある住居**

住居について自分の夢を実現する過程を記録した本書は写真を挿入解説した書 定価300円

**ある学校**

海星学園、呉羽中学、南山小学校、台湾東海大学を写真図版によって解説した好著
定価 300円

東京都中央区入船町2丁目1番地
**相模書房**
電話　築地 551－0017番

## 茗溪堂 新刊

### 加藤泰安著「森林・草原・氷河」

A５判　本文448ページ　写真25ページ　内蒙古・カラコラム・ニューギニアの３色刷地図３枚　箱入上製本／**定価1500円**（別に3000円の背皮豪華限定版あり）

**《文は人なり》**私は風変りな人間が好きである。加藤泰安も、そのうちの一人だというと、いぶかる人があるかもしれない。

今はどうか、数年前までは、彼は中尾佐助とともに、海外遠征の回数最高で、8000メートル以上のヒマラヤン・ジャイアンツを一ばんたくさん見た日本人である。高峰や氷河はそこにあるけれども、近よってきてはくれない。こちらから計画して迫らねばならない。彼は息のながい勤勉家なのだ。しかも頑張ってますという印象をあたえない。自己宣伝は決してしないが、ケンソンという訳でもない。

学生時代に冬期白頭山を征服して以来、マナスル、チョゴリザ、サルトロ・カンリ、スカルノ峰〈西イリアン〉まで、そのかがやく業績を見ればどんな偉丈夫かと思うが、見ればひょろひょろ、都会ではしょっちゅう入院している。遠征を一つやるごとに職を変えるが、赤字会社の社長を引受けると、すぐ黒字にする。そして社長室で地図に赤線を入れている。さりげないだけに高級趣味人なのかもしれない。

明治維新がなければ、彼は伊予大洲の殿様で“おはなはん”など目通りもかなわなかったであろう。若いころはそういういい家柄を恥じて、彼は下品になろうと努力を試みた。今も時たま銀座のバーで酔ばらって、大正の流行歌と浪花節とを混合したようなものをがなって、女の子の嘲笑をかうのは、その名残りである。しかし彼の試みは究極において成功せず、彼の登山も酒も気品を失うことはなかった。その気品が彼のこの文集にどれだけ出ているか。

泰安では、行動が一ばん立派で、お話がついでよく、文章はまだ少し、といううわさがあったのは10年の昔である。以来、加速度的に文質が立派になった、といっては過褒になるだろうか。すなおな文章のなかに、この一世の山の名人の秘められたロマンチシズムを読みとってほしい。

（桑原武夫）

東京都千代田区神田駿河台２－１
電話東京 291—9442／振替東京24723

---

自然の神秘　「茶の間の科学」　好評４版

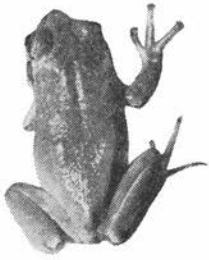
# カエル行状記

東邦大学教授　医学博士　戸木田菊次著

日本図書館協会選定図書

B６判 240頁

**定価 400円**



**週刊朝日評（５月18日号）**
**あるがままに観察して**

専門的なカエルの研究を中心に、努めて興味の角度を増幅した生物学的趣味の書である。

この本を読むと、学生でなくともあるいは学生でなくなってから久しい人ほど、あるがままの観察の面白さを教えられるかもしれない。そしてカエルに関する少年時代の思出が本書の解説とまざり合って、知識と情緒の微妙なカクテールを醸成してくれる。

また、口にたばこのヤニを入れ、ハラワタの洗たくをさせて面白がったことは、本書の六八ページ、七五ページなどが思いださしてくれた。

**毎日新聞評（５月12日）**
**徹底した平和主義**
**口から胃袋をだす芸達者**

心臓の薬「ジギタリス」研究のため、昭和六年以来、実験動物としてなじんできたカエルは十万匹にのぼるという著者が、多年にわたったカエルのウンチクをまとめた随筆集。

**技報堂**　東京都港区芝西久保桜川町７・振替口座　東京10　電　591—2277

# 登山・ハイキングシリーズ

時間 1:400

定評ある
コースタイム入精密地図と案内書

①奥武蔵・武甲山・三峰・坂倉登喜子
②奥多摩・大菩薩嶺・梶玲樹・他
③奥秩父・金峰～甲武信～雲取・乾徳・横山厚夫他
④陣馬高原・秋川渓谷・道志山塊・浜野条治他
⑤丹沢山塊・宮坂和秀
⑥富士と五湖・三ツ峠・富士急行
⑦箱根・湯河原・熱海・渡辺正臣
⑧奥日光・奥鬼怒・川崎隆章
⑨尾瀬と檜枝岐・会津駒・川崎隆章
⑩軽井沢・神津牧場・妙義・掛川昭一
⑪伊豆半島・大島・渡辺正臣
⑫三浦半島・江ノ島・鎌倉・本保竣
⑬美ヶ原・霧ヶ峰・高ボッチ・坂倉登喜子
⑭谷川岳と上越温泉郷・川崎隆章
⑮八ヶ岳・蓼科高原・山口耀久
⑯那須・塩原・鬼怒川・人見義男
⑰磐梯・吾妻・安達太良・深沢達治
⑱志賀高原・草津白根・下達也
⑲上高地・槍・乗鞍・川崎隆章
⑳黒部・白馬・立山・川崎隆章
㉑房総半島・本保竣
㉒浅間高原・鹿沢・菅平・掛川昭一
㉓蔵王連峰・松島・菅井熊蔵他
㉔八幡平・岩手山・秋田駒・村井正衛
㉕霧ヶ峰・白樺湖・蓼科・坂倉登喜子
㉖雲ノ平・黒部源流・槍穂高・伊藤正一
㉗妙高・戸隠・野尻湖・黒姫・グループ・ド・モレーヌ
㉘南アルプス・夜叉神峠・入笠山・白簱史朗
㉙中央アルプス～木曽駒・木曽御岳・塩沢一郎

㊶金剛・生駒・信貴・仲西政一郎
㊷六甲・摩耶・中村勲
㊸岩湧山・紀泉高原・友ヶ島・仲西政一郎
㊹京都北山・比良・角倉太郎
㊺吉野・高野・仲西政一郎
㊻大峰の山と渓谷・仲西政一郎
㊼大台ヶ原・大杉谷・高見山・仲西政一郎
㊽南紀・熊野・伊勢・志摩・仲西政一郎
㊾奥高野・龍神温泉・湯ノ峰温泉・仲西政一郎
㊿赤目・青山・室生付近・水町進他
(61)鈴鹿連峰・御在所・伊吹・熊沢友三郎他
(62)大山・蒜山・佐野勇一
(63)帝釈峡・三瓶山・備北山群・加藤武三
(64)秋吉台・三段峡・芸北山群・加藤武三
(65)九重・飯田・久住・万年山・加藤数功他
(66)英彦山登山と耶馬渓探勝・仰木政次郎
(67)阿蘇登山と周遊・熊本県岳連
(68)平尾台・福智山塊・月原俊二

定価 120円～150円

地図専門の ニッチ
**日地出版**

本社 東京都千代田区西神田1－2－15
振替 東京195917 TEL(261)5126～8
支店 大阪市南区安堂寺橋通3～60
振替 大阪 28570 TEL(251)0609



●新しい感覚がえらんだ

# ＊ザ/マウンテンズ

A5変型判・布装箱入・各巻580円

若きアルピニストの魂
アルプス三つの壁
白いクモ
山靴の音
死はともに登る
空の大地
無償の征服者
単独行／風雪のビバーク
氷河の救助隊
天国と地獄のあいだ
エベレストの日記
六級登山の男たち
マッターホルンの人々

●以下続刊多数

東京神田三崎町二ノ六
**二見書房**

# 山の名著選

（各A5判上製箱入）

ダウラギリ登頂
M・アイゼリン／横川文雄訳／一六〇〇円

未知の山へ
W・ノイス／野間寛二郎訳／九〇〇円

冬のアイガー北壁初登攀
T・ヒーベラー／横川文雄訳／八〇〇円

垂直のかなた
G・リヴァノス／安川茂雄訳／一四〇〇円

エヴェレストの魅惑
グヤン・シン／野間寛二郎訳／一四〇〇円

プモ・リ〈地上最美の山〉
G・レンザー／織方、橋本共訳／一六〇〇円

チャムラン
久木村久、安間荘、鈴木良博共著／一四〇〇円

雲の中の九ヶ月
E・ヒラリー／丹部節雄訳／一二〇〇円

アメリカ隊 エヴェレスト登頂記
J・アルマン／丹部節雄訳／三八〇〇円

東京・神田錦町三ノ三 ベースボール・マガジン社
振替 東京 四六六二〇

# バッジ

ペナント
ワッペン
旗
カップ
トロフィー

ネームプレート
キーホルダー
メダル
タイ止
七宝焼
金属看板

東京都千代田区飯田橋2丁目8－6
電話 (263)4741（ミナヨイ）・夜間 (261)4095

株式会社 アジア

# 《サンワ》で しっかり 貯めましょう

みなさまのお役に立つ

三和銀行

吾妻連峰の東麓 標高750メートルにある高湯温泉は福島盆地の広がりを前に硫黄の匂いがたゞよう高原のいで湯でございます。

## 猪谷スキー教室開設

猪谷秀雄先生を招き初心者からパラレルスキーまでの技術を懇切丁寧に指導しております。

**⊙開設期間**
12月～5月末日まで

**⊙お申込みは**
高湯温泉安達屋
TEL. 庭坂(024594)170～2
東京連絡所
TEL. (561)1245～6

収容人員　170名様　客室45室

| | | | |
|---|---|---|---|
| 宿泊料金 | 1200～3000円 | 朝　食 | 250～500円 |
| 半　泊 | 800～1200円 | 中　食 | 250～500円 |

## 吾妻スカイラインの入口

# 高湯温泉

# HOTEL ADACHIYA 安達屋

TEL庭坂(024594)170～2

スキー、ゴルフに信夫高湯温泉へ
吾妻スカイラインの表玄関
福島よりバス50分、ハイヤー25分

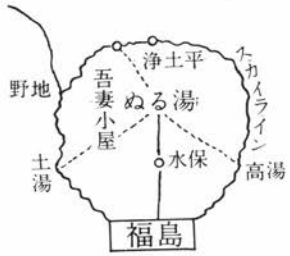
日観連
日本交通公社 協定

**吾妻高原ホテル**

TEL 庭坂 78

登山に、湯治に、保養に
吾妻連峰920mの高原

福島 ——バス— 水保 ——サービスカー— ぬる湯




福島県観光連盟・協定

**ぬる湯温泉**

TEL 佐倉63

表吾妻唯一の山小屋
電燈、風呂、寝具、完備

夏期スカイライン浄土平駅より7分
冬期ぬる湯♨より100分、信夫高湯♨より200分

**吾妻小屋**

問合わせ ぬる湯温泉

新野地温泉

あづま

# 相模屋旅館

スキーと登山の基地、岳人の宿

あだたら

福島市土湯温泉町野地1

相模八郎



記録破りの
ソフトウイスキー




さあ——
すいすい飲ろう!!

いちばんソフトな口あたり
ハイニッカ
500円
ニッカウヰスキー株式会社



オートメーションの
完全体制を推進する

横河の電気計測器と
本山のコントロールバルブの御用は

SUN

横河電機製作所
本山製作所（仙台）
代理店

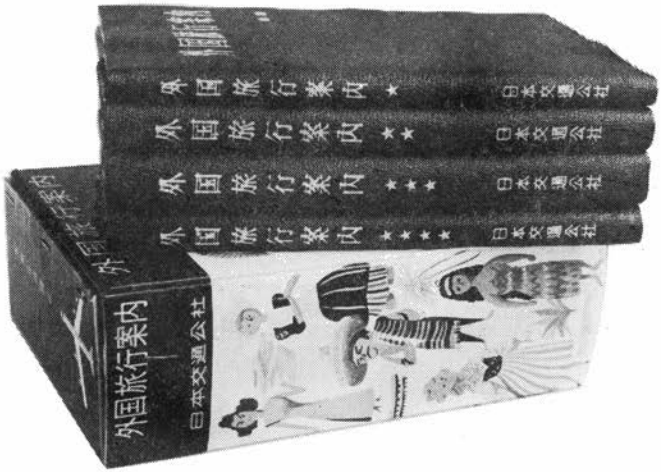
有信計器株式会社へ

取締役社長　神谷　恭（JAC－744）

横浜市花咲町4—117　中銀ビル　TEL（23）6551—3番

交通公社の旅行図書

## 海外旅行ガイドブックの決定版！




——渡航手続きから観光プランまで——

# 外国旅行案内

携帯に便利な４分冊式★１５００円 〒90

第１篇■ 総論及び渡航手続・留学案内
第２篇■ カナダ・アメリカ・中南米
第３篇■ ヨーロッパ・ソビエト
第４篇■ アフリカ・中近東・アジア・濠洲
ニュージーランド

## 東南アジア・韓国

韓国・台湾・香港・マカオ——など
買物案内から——夜の楽しみ方まで
ポケット版★４００円〒75

## アロハ　ハワイ

現地取材によるハワイひとり歩きの
たのしめるガイドブック決定版です
ポケット版★３５０円〒65

jtb
日本交通公社出版事業部
東京・千代田区神田錦治町３－３
電話(256)3481／振替・東京29403

# 家計の1カ月分を いつも普通預金にのこしましょう



## ムリなく1ヵ月分を ――――

安定した家計づくりには奥さまの心がけが大切。収入はひとまずそっくり協和の普通預金へ入金。通帳の収支欄を家計簿がわりになさりながら　支出を合理的にコントロールし　そしてその中から少しずつ無理なく残して家計の1ヵ月分がいつも協和の普通預金の通帳にのこっているようにしましょう。

家計の1ヵ月分をいつものこした協和の普通預金通帳
それはあなたの家計の安全弁。今年のゆとりある生活になるでしょう。

普通預金にはこんな使い分けが

- ●どこの支店でも出し入れできる便利なワイド・サービス
- ●電話料・ＮＨＫ受信料などは自動振替支払制度のご利用を
- ●積立預金への自動振替もできます

協和の普通預金

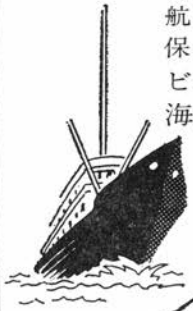
協和銀行



## 営業案内

通　　運(車扱混才)5トンコンテナー
自動車運送　　荷造包装
海　　運　　倉　　庫
観　　光　　引　　越
航　　空　　重量品作業
保　　険(運送保険・生命保険・火災保険)

ビル移転、転勤荷造輸送一切、及び
海外登山隊の御用命を御待ちします。






# 日本通運株式会社

隅田川支店　　支店長　信澤喜代司

| | | |
|---|---|---|
| 隅田川支店 | 荒川区南千住町4丁目1069番地 | 電話 (803)1111(大代) |
| 両国支店 | 墨田区横網町1丁目3番27号 | 電話 (622)2195～5 |
| 錦糸町支店 | 墨田区錦糸町1丁目4番地 | 電話 (622)1121(代) |
| 江東支店 | 江東区深川白河町4丁目1番地 | 電話 (641)8376(代) |
| 新小岩支店 | 葛飾区東小岩2丁目1番の4号 | 電話 (691)3196～7 |
| 小名木川支店 | 江東区北砂3丁目3番5号 | 電話 (644)2111(代) |
| 北千住支店 | 足立区千住旭町無番地 | 電話 (888)5231(代) |
| 亀有支店 | 葛飾区亀有町5丁目137番地 | 電話 (601)3171(代) |
| 業平橋支店 | 墨田区押上1丁目1番97号 | 電話 (622)1131(代) |
| 竹塚支店 | 足立区竹塚町1264番地 | 電話 (886)3797(代) |
| 松戸支店 | 千葉県松戸市松戸1202の1 | 電話 松戸(62)2141 |
| 田端支店 | 北区田端町1845の6 | 電話 (893)3741(代) |
| 王子支店 | 北区王子2丁目1番1号 | 電話 (911)3991(代) |
| 赤羽支店 | 北区赤羽町2丁目694番地 | 電話 (601)6131(代) |

営業品目
スロットル・レバー
クラッチ・レバー
リコイル・スターター
エヤークリーナー
その他

耕うん機、防除機、田植機、芝刈機
船外機、建設機械等に広く使用されております。

中小企業庁指定合理化モデル工場

CPK 中央プレス工業株式会社

代表取締役　原田幹市

本社，東京工場　東京都杉並区桃井4の4の4　(399)0141(代)
高崎工場　群馬県高崎市大八木777　(高崎2)0278(代)

◇理化学機器部
電気炉
自動機・制御機　各種
熱電対・白金抵抗管等　測温器材

◇工　芸　部
七宝焼用品　各種
電気炉・絵具・材料等

林電工株式会社

代表取締役　林　和夫

東京都千代田区神田神保町1の32
電　話　(294)　0062～4・5486



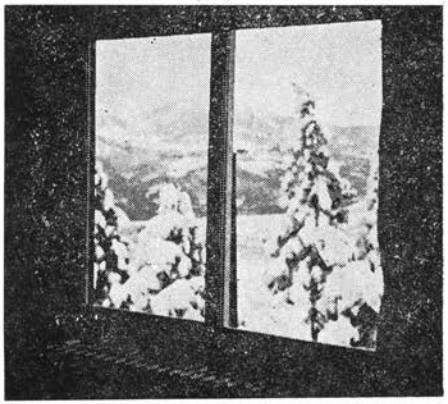

三井物産の

こけし印 缶詰ハム ソーセージ

# 電線・ケーブル・

## 播州電機株式会社

姫路・大阪・東京・名古屋・神戸・富山・札幌



山小屋の窓に

## ペヤグラスを

（断熱複層ガラス）

凍らない　くもらない　見晴らしがすばらしい

●お問合せはお気軽にどうぞ

板硝子工事　池田ガラス建材株式会社

代表取締役　池田光二（会員）

東京都練馬区氷川台4－35－9

電話（932）3201（代表）

# 頭痛・歯痛・生理痛

この強い鎮痛力は、新成分セコピラビタールによって発現。さらに活性ビタミン$B_1$（ジベンゾイルチアミン）を配合して、効果を助長強化しました




とくに痛みのはげしいときにおためしください

## ハイグレラン錠

製造 グレラン製薬　販売 武田薬品

武田販売

# スキッと光るフレッシュな歯磨!!

お口をスキッと　さわやかに　フレッシュ！

歯をスキッと白く輝やかすフレッシュ。

この２つの効果が同時にはたらくニューブレンド歯磨

発売元　シオノギ製薬　　製造元　サンスター歯磨

サン
フレッシュ
サンスター
シオノギ

100円・150円・200円



中外製薬

# 現代疲労に




●複雑な現代疲労の回復に独特の集中効果を発揮するのが新グロンサン錠の新しい配合です●疲れた神経の回復と●細胞に溜る疲労素や有害物質の解毒がこれです●白い錠剤・品質保証のCSKマーク入●中外会の薬店でお求め下さい

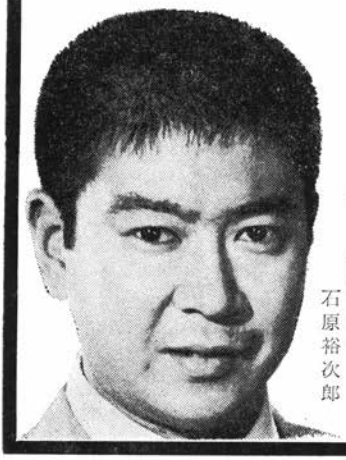
# 新グロンサン

Eisai エーザイ

## 冬山の必携品

## ビタミンEが効く

# ユベロン



へばった、疲れた、朝起きたとき体が重い、足や腰が痛む、目が疲れるシミが目立ち肌があれる…こんな方はビタミンEのユベロンを。

ユベロンは、血液の循環を活発にすると同時に、内分泌機能をバランスよく高めて、冷えを防ぎ、さらに酸素の利用度をたかめますから空気の薄い所でも体力を長もちさせ、無理なく体調を整え、スタミナを生み出します。

包装 三〇・六〇カプセル
内服液もあります

東京都文京区小石川四 エーザイ株式会社

ユベロンのんで快調！
石原裕次郎

# アルケン 56N
# アルケン 60N




アルケンとは、合成洗剤の主原料であるアルキルベンゼンの商品名です。
〈日石洗剤〉が、はじめて国産化したすぐれた製品です。
アルケン60Nは洗浄力がさらにすぐれた高分子量のものです。

**日本石油洗剤株式会社**

本　社　東京都港区西新橋1丁目3－12 日石本館 (502)1561
営業所　大阪市北区中之島2－22 新朝日ビル (231)0986



A－5

疲れる・肩がこる
足腰が痛む・目が疲れる
食欲がない・便秘がち
神経痛・糖尿病に

☆5ミリ錠・25ミリ錠・ほかに50ミリ錠があります
☆くわしくは医師や薬局・薬店でご相談下さい

# アリナミンA®

タケダ薬品




# S&B 奥様の腕が光ります！

**主原料にエスビーの純カレー**
あの有名な赤カン。
世界各地から集めた三十数種もの香辛料が、ぜいたくに使われています。
これをベースにしました。

**まろやかな味を加えるクロレラ入り**
健康の緑藻類・クロレラを入れました。カレーの辛味と酸味を整えて、だんぜんおいしくしました。

**油くささのない純良ラードを使用**
即席カレーに共通の、あの油くさいにおいがなくなりました。
高価な純良ラードを使ったので、溶けるのも早く理想的です。

**一流レストランとおなじ**
いままでドロッとしたカレーをお作りになっていた奥さまも、おためしください。ゴールデンカレーならではの味を、お楽しみいただけます。

**ジャガイモを入れないのがコツ**
香りを逃がさず、シャープな味を作るためです。すばらしい味と香りで、奥さまの腕が光ります。

# S&B GOLDEN ゴールデンカレー

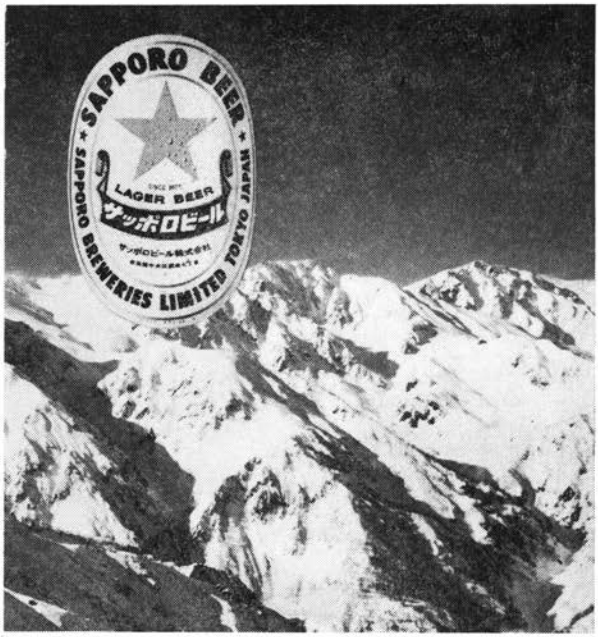
●クロレラ入り……7皿分 ¥100円

**エスビー食品株式会社**

最初のうまさが持続する…

# ★サッポロビール

●味は本場のミュンヘン・サッポロ・ミルウォーキー




アルミサッシ

スチールサッシ

カーテンウォール

# 日本建鉄

東京都千代田区大手町2－8(日本ビル)
TEL 270－6511(大代表)



# ＊茗渓堂の近刊予告

## 登頂ゴジュンバ・カン

―明大ヒマラヤ登山隊の記録―

高橋　進編

1965年4月23日　午後5時05分　第2キャンプのトランシーバーは久しい沈黙を破って呼び出した

「こちらアタック隊　こちらアタック隊！」
「こちら第2キャンプ　どうぞ」
「いま着きました　遅くなってすみませんでした　……頂上です　皆さん頂上です！」

夕やみ迫るゴジュンバの頂上から　植村の声は感激で震えていた　〝白き神々の座〟は　いま未踏の頂きを踏んまえた栄光を祝福するかのように夕映えに美しく色どられていった　それは　力の限りを尽くし　精根を使い果たした男たちにふさわしい　自然の美しい祝福であった

激動する氷河の雪崩に2人の負傷者を出し　一時は登山をあきらめようかとした隊長の苦悩はこの素朴な8人の男たちの友情によって乗切っていった　いまこの充実感は　若さと友情　チームワークの結束によって得られたものだ

1965年度を飾る　輝かしい未踏峰ゴジュンバ・カン7646メートルの登頂記。

カラー写真8ページ／黒白写真24ページ／地図2枚／本文約250ページ／**予価850円**＝6月下旬発売予定

## 山で唄う歌　Ⅰ集・Ⅱ集

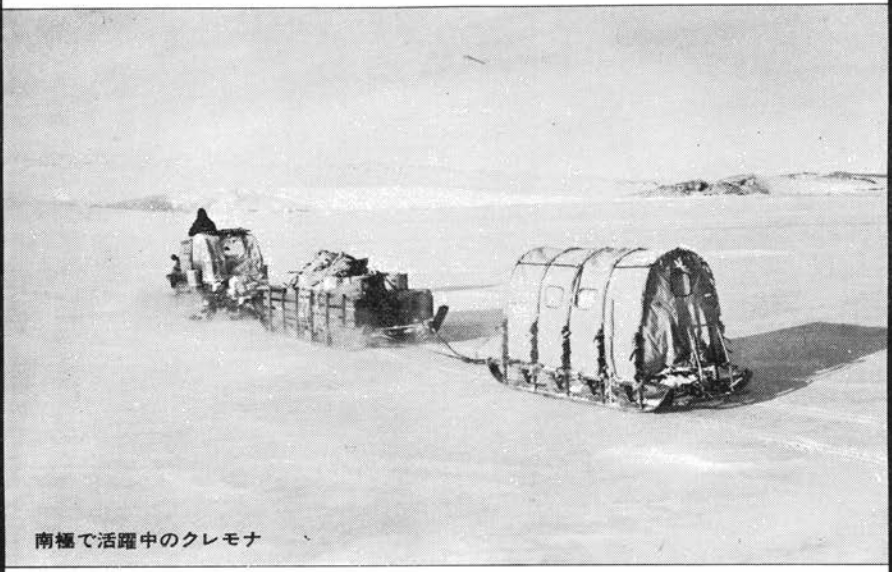
戸野　昭
朝倉　宏　編

山で歌を唄う人たちの気持にピッタリ合った歌集を　皆さんのご要望にこたえて再版いたしました　第1集は比較的ポピュラーなもの60曲を選曲してあります　カットのピッケルや山岳会のマークなども　また歌のページを楽しいものにしています　第2集は日本の歌を多く選び　むずかしい原語の曲には訳詩をつけ　合唱で唄えるようにして　68曲を選曲してあります　カットは串田孫一氏のもので　きっと皆さんのご満足をいただけることと思います。

〈**第Ⅰ集**〉126ページ／A6ポケット判／**定価240円**〈**第Ⅱ集**〉160ページ／A6ポケット判／**定価280円**＝ともに4月上旬発売予定

東京都千代田区神田駿河台2の1／電話・東京291局9442／振替・東京24723

# ヒマラヤから南極まで



南極で活躍中のクレモナ

ずばぬけた底力の持主クレモナは、各地でその真価を発揮しています。強い！扱いやすい！腐らない！雨・風・紫外線…どんな悪条件にもビクともしません。実績が築いたゆるがぬ信頼こそクレモナの生命です。

クラレビニロン

**クレモナ®**

**登山用具**

テント・シート・ルックザック・アノラックなど

倉敷レイヨン株式会社

## 「山岳」投稿規定

一、投稿は誰でも自由である。日本山岳会員である必要はない。
一、原稿の採否は山岳編集委員会で決定する。
一、原稿は返却しない。
一、研究並に紀行には、その概要を付けること。
一、紀行にはなるべく概念図を添付すること。
一、写真は光沢印画紙に焼付け必ず説明を付けること。
一、地名、人名、数字、外国語は特に明確に記し、特殊な地名、人名等には必ず振仮名を付けること。
一、編集者は原稿の一部を削除または訂正することがある。
一、校正は編集者に一任されたい。

送り先　東京都渋谷区神宮前三ノ三十一（外苑コーポ内）
日本山岳会「山岳」編集部

編集委員
望月達夫
木田潤
田島雄次
竹田寛
中島寛
一郎
次
寛

一九六七年三月二十日発行
山岳　六十一年　定価　一八〇〇円
（通巻一二〇号）

東京都渋谷市神宮前三丁目三十一番（外苑コーポ内）
発行所　社団法人　日本山岳会
電話東京四〇三局六五〇一（代表）
東京四〇四局七六五七（直通）
振替口座東京四八二九番

日本山岳会内
編集兼発行者　望月達夫
印刷　株式会社技報堂
写真版　光村原色版印刷所
製本　株式会社三水舎

東京都千代田区神田駿河台二ノ一
発売所　株式会社　茗渓堂
電話東京二九一局二八八一番
振替東京二四七二三番

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁ずる。

# アタック成功…ハイ・ドウゾ！




**感激の第一声から緊急連絡までボタン1つでOK！**

アタック・パーティとベースキャンプ間など、離れた所と無線で連絡できる便利さ！
安全な登山が、スピーディにできます。もちろん感度はグンと良好。軽く 使いやすさも満点です。

●同じ周波数のセットを3台以上併用すると、グループ間の相互連絡がさらにはかどります。

## サインコール

新しい登山用具

RJ−5 現金正価(1台) **8,800円**
(50mW) 月賦定価(6回) **9,200円**

現金正価 (2台1セット) **17,600円**
(防滴ケース・イヤホーン・電池つき)



姉妹品……
強力タイプ RJ−11(100mW)
現金正価 (1台) **14,000円**
月賦定価 (10回) **14,700円**
(防滴ケース・イヤホーン・電池つき)

ナショナル
松下電器

ナショナルトランシーバ




登頂に
観測に

このマークがお
伴いたしました

| | | | |
|---|---|---|---|
| I | 1936年 | 立教大学 | ナンダコート登山隊 |
| II | 1952年 | 日本山岳会 | マナスル踏査隊 |
| III | 1953年 | 〃 | 〃登山隊 |
| IV | 1954年 | 〃 | 第二次マナスル登山隊 |
| V | 1954年 | 京都大学 | アンナプルナ登山隊 |
| VI | 1955年 | 〃 | カラコルム学術調査隊 |
| VII | 1956年 | 日本山岳会 | 第三次マナスル登山隊 |
| VIII | 1957年 | 文部省学術会議 | 南極予備・本観測隊 |
| IX | 1958年 | 神戸大学 | パタゴニア登山隊 |
| X | 1958年 | 深田隊長 | ジュガールヒマール探査隊 |
| XI | 1959年 | 日本山岳会 日本教育テレビ | ヒマールチュリー登山隊 |
| XII | 1959年 | 毎日新聞 | 雪男学術探険隊 |
| XIII | 1960年 | 明治大学 | アラスカ学術調査隊 |
| XIV | 1960年 | 同志社大学 | アピ遠征隊 |
| XV | 1960年 | 早稲田大学 | アジア，ヨーロッパ大陸横断隊 |
| XVI | 1961年 | 大阪大学 | ピーク29遠征隊 |
| XVII | 1961年 | 全日本山岳連盟 | ピックホワイトピーク遠征隊 |
| XVIII | 1961年 | 早稲田大学 | エクアドル・アンデス遠征隊 |
| XIX | 1961年 | 上智大学 | 南米事情調査隊 |
| XX | 1962年 | 全日本山岳連盟 | ピックホワイトピーク第2次遠征隊 |
| XXI | 1962年 | 京都大学 | サルトロカンリ遠征隊 |
| XXII | 1962年 | ビルマ国山岳会 | シッキム・ヒマラヤ登山隊 |
| XXIII | 1963年 | 電電九州 | ヒムルン・ヒマール登山隊 |
| XXIV | 1963年 | 日本鱗翅学会 | ヒマラヤ蝶蛾調査隊 |
| XXV | 1963年 | 同志社大学 | サイパル遠征隊 |
| XXVI | 1963年 | 都立大学<br>大阪府立大学 | 合同東部ネパール学術調査隊 |
| XXVII | 1964年 | 北海道大学 | アンデス，アマゾン探検隊 |
| XXVIII | 1964年 | 北海道大学 | アラスカ学術探検隊 |
| XXIX | 1964年 | 早稲田大学 | エクアドル・アンデス遠征隊 |
| XXX | 1965年 | 早稲田大学 | ローツェ・シャール遠征隊 |
| XXXI | 1965年 | 明治大学 | ゴジュンバ・カン遠征隊 |
| XXXII | 1965年 | 防衛大学 | ローガン登山隊 |
| XXXIII | 1965年 | 富山泊山岳会 | 中部ネパール遠征隊 |
| XXXIV | 1965年 | 亜細亜大学 | ヨーロッパ走破隊 |
| XXXV | 1966年 | エーデルワイスクラブ | ペルー・アンデス遠征隊 |
| XXXVI | 1966年 | 日本グルジア友好登山協会 | カフカズ遠征隊 |
| XXXVII | 1966年 | RCCII | ヒンズー・クシュ登山隊 |

ビニロン・ナイロン・テント製造元

千代田区神田須田町2—23 株式会社 **細野テント** Tel.(253) 4426～7

The Journal of

The Japanese Alpine Club

# SANGAKU

Vol. LXI 1966